第九號

左
意
る
下
記
附
女子
とい
は、
現在
り、そ
うな現
神的の
ようと
的の考

PL 801 R5 1929 v.9
East Asiatic Studies

Arishima, Takeo
Arishima Takeo zenshū

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

有島武郎全集月報

第一號　昭和四年四月一日
新潮社出版

兄とティルディ

有島生馬

今度の外遊中、全集に全然藏められてない、兄の書簡數十通を得て歸つて來たことに就いては、既に諸新聞が報道を怠らなかつた。兄の書信は Tildi Heck といふ當時二十歲許りであつた一女性にあてられたもので、その女性に對する世間の好奇心が急に盛んになつた。そのため本稿の起草をも餘儀なくさせられたのである。

兄の日記「觀想錄」に初めて兄がティルディに邂逅した當時の事情が略記してある。卽ち千九百六年十一月十七日。

「朝トロワルドセンの岩刻の獅子を見、氷河園に至る……云々。

午後一時市(瑞西國ルツェルン)を辭して、二時二十三分チウリッヒ市に着す。ブッフマン先づ來り迎へ、次でガムペル及びシミド來會す。五人伴うて Kuenstlergut に向ふ。ホドラ、ベックリン、ケルラー、の作を集めたり。第二者の「老」最もよし。大學附屬圖書館に日本錦繪の蒐集を見、後ウリック二老婦人の家を訪ひて茶の御馳走になる。夜陰、此市(チウリッヒ)を辭し、シャフハウゼンのホテル・シワアネンに入る。靜寂古雅の市。此夜ガムペル我等のためセロを彈じ、ホテルの娘ティルディ瑞西の野歌を唄ふ。」

こゝに初めてティルディといふ名が彼の日記に表はれてゐる。Buchmann は畫家、Gamper は畫家詩人音樂家、Schmid も畫家、專門は裝飾畫、次で Emma, Lili, Tildi といふ三人の娘の名が出て來るが、是等の人々がこの落着いた古都の一隅で寄合ひ、一つの藝術的團結を作つてゐた。私は羅馬でその中の二三の人々と交際を結んでゐたので、兄を誘つてシャフハウゼンに到り、彼等に兄を紹介したのである。私の「ライン河に沿ひて」といふ短篇が「南歐の日」の中に藏めてあるが、之は彼等の日常の一部を描寫したものである。後にその團體は自ら Circo Fujiyama と命名した。「富士山倶樂部」の意味である。

「十一月十八日、曇、日曜日。

朝、晏起旅の勞れを慰す。午後ガムペル、ブッフマン、シミドと共にシンガポオルにて巨產を蓄へ得しステッツェネーゲル家を訪ふ。次男ハンス氏畫と樂とに長ず。その畫室にその作品を見る。巨大なる作多く亦特長あり、家を辭する時日やゝ仄く。ガムペル園中の草花を採りて我れに與ふ。

歸路畫家等が名づけて「富士山」と稱する山頂を平野の彼方に見る。

夜エムマ・ホルスターの饗應となる。ガムペルその兄とセロとピアノの合奏をな

し、エムマ亦獨唱す。」

こゝにあるエムマは今モッケット家に嫁して四人の母となり、アムステルダムに住んでゐる。

「十一月十九日、曇、月曜日。

朝、諸友同行、Minster の僧院とかの有名なる寺鐘とを見る。Vivos voco, Mortuos plago, Flugura frago. といへるシラーが「鐘の歌」の標題となせる銘刻まれたり。ゲーテ此處に遊び書してシラーに送れるもの、一四四八年の鑄造なりといふ。云々。

午後相伴ひてライン大瀑布に遊ぶ。左岸なる丘上ラウフェンの城あり云々」

「十一月二十日、曇、火曜日。

朝一行ティルディ、エムマ、リリイ等と共にシミドの家あるディスハウゼンに向ひて汽車に乘ず。一行の目的は其處より汽船にてシャフハウゼンに歸るにありしも風激しくして行を企つる事能はず云々

リリイ南國の花ミモサを(ディスハウゼンより)齎し歸りて我等に贈る。」

このリリイといふ花のやうであつた娘も今は老いて尙ほシャフハウゼンに女教員として働いてゐる。ティルディの最もよい友達である。

十一月二十一日は小學校を參觀し、リリイのお茶に招かれ、ステゥツェネーゲルの晩餐に行つてゐる。又二十二日は一同打揃つてバァゼル市へ見物旁舊友のツブレルといふ畫家を訪問してゐる「歸時、車中の快笑、歸宿せしは晩かりき」とある。勿論ティルディも一行中にあつて初めて彼等は親密なる會話を試みたのであつた。

「十一月二十三日、晴、金曜日。

朝ガムペルが齎したる作品を見る。馬車を馳りて、ライゼナウ其他の郊外に遊び、又アムスレル氏の畫室を訪ひ、ステゥツェネーゲル氏に暇乞ひし、リリイの家に暇乞ひし、又エムマの處にて晩くまで遊び戯むる。

午十二時十分、シャフハウゼンを辭して涕涙を垂る。

ガムペル、ブッフマン送行してチウリッヒに出で、(約四五十分)博物館を見、後山上より落日のチウリッヒ湖竝に冠雪のアルプ連山を望む。景情共に絶佳。林樾を經て市中に歸り、點燈時ウルリッヒ夫人の家を訪ふ。そこにシミッド、ティルディ來會。茶菓。夜に入りて散策し月明の湖畔を行く。月輪の傍に輝けるヴェヌウス、エルフの二星水中に歌謠して人を誘ひ幽界に陷らしむ云々。好めるは秋と春、春には常に期待あり、人を誘ひて何者かを求めしむれども、我嘗つてその何者なるかを知らずなど、ティルディ語る。

夜食後尙會話。ウルリッヒ家を辭して停車場に到る。十一時二十分ミュンヘンに向け發す可かりし汽車四十一分に發す。共に別れを惜む。

此夜武郎の頭亂るゝこと甚し。車中呻吟、殆ど一睡をなさず。まゐりたる氣味なり」。

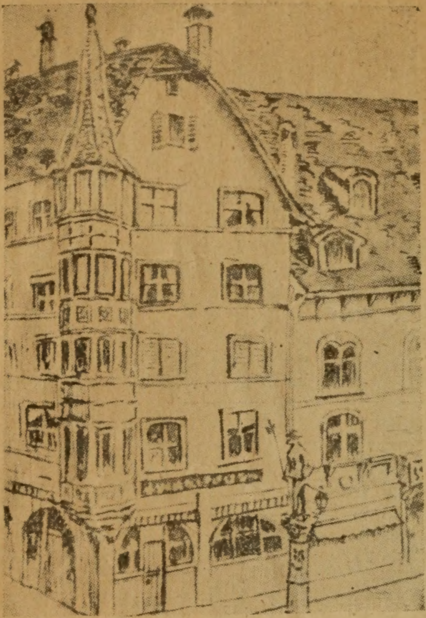
この十七日から二十三日まで僅か一週間の淡い交際によつて二人はその後十五ケ年間に亙る文通を續けたのである。

私はその後一九〇七年の夏及び昨年の秋シャフハウゼンを訪問した。さうして是等の人々と疎遠ながら交際を今日まで繼續して來てゐる。然し兄とティルディとの間がかく深い友情であり、殆どプラトニックな戀愛に似たものにまで進んでゐたことは氣付かなかつた。

兄の急激な死後、葬儀が濟んでから五日ほどしてティルディから一通の手紙が故人宛に着いた。それには日本へ出て來たいと云ふ彼女の希望が初めて明白に漏されてゐた。私がそれを受取つて見た時の心中の苦痛を未だに生々と思出される。

私はそれに明かな返事を出す勇氣がなかつた。それで去年二月日本を出帆して渡

歐した當時からティルディに會うて故人の話をするのは一つのプログラムであつた
九月四日巴里發、暁子等同伴佛瑞の國境を越え、チウリッヒ市を經由し、そこから一寸電話で着車時間を報じ、巴里發後九時間でシヤフハウゼンの町へ到着したティルディは黒い帽子に茶色のタイヨールの輕い上着をきて、プラットホームの薄明りの中にぼんやり立つて、吾々の着くのを二人の下男と共に待ち顔であつた。私は車窓から逸早く彼女を見付けたので聲をかけた。彼女は驚いて走り寄つて來て握手した。さうしてよくも二十年後に、自分の老いぼれた姿が群集の中で分つたと云つて喜んだ。然し彼女は年こそとつたがその表情は殆ど變つてゐなかつた。紅い頬、淡青い眼、白くなつたブロンドの髪、素朴で、快活な、さうして顔を赤め易い表情はまだ尙處女の面影を失つてゐなかつた。



シヤフハウゼン　ホテル・シユワン

ティルディの家では永い間ホテル・シワアネンの經營を他人に任せてあつたが、又この二三年以來、その親友マルゲリット・ディスレルといふ女を助手にして、ティルディ自らその經營に當つてゐた。その母親も半身不隨になつてゐたが私をよく覺えてゐてくれた。この十六七世紀頃の建物の外觀は少しも變つてゐなかつた。兄のスケッチにある通りのもの（最後の日記所載）であつた。唯陶器製の煖爐が廢物になつて、暖房設備（スティムファイヤー）になつてゐた。「これが武郎とお前の一緒に寢てゐた室だ。」といつて三階の一番廣い部屋をティルディは案内して見せた。黒い髮の毛が房房と前額にかゝつて、物靜かであつた、兄の若い當時の面影をそこに見るやうに感じられた。彼は低い折襟のカラーを好んでしてゐた。

電話で私達の到着を知つたガムペルとリリイとがやつて來た。握手だけでは物足りないやうにガムペルは堅く私を抱擁した。その時二人の心持には亡兄を憐むの情が不言不語の間に湧き上つてゐたのだ。もし私の眼が潤んでゐたとしたら、久濶の喜と同時に、そこにゐない兄が突然目前に表はれ出たやうに思はれたのだ。

私達は十日間といふもの彼等と一緒に二十年前と同じやうに樂しい時を送つたさうして日日嘗遊の記憶を新にした。ラインの河遊び、ラインの瀧、ムノオの城址、シラーの鐘、到る處でティルディは亡兄のことしか物語らなかつた。

ティルディの室には苟も兄の記念になるものはいかなる些かなものでも悉く大切に保存されてゐた。その寫眞、その手紙、そのスケッチ、その本、その贈物。小包郵便の包紙まで一つとして失はれてゐなか

い、直接には其處の小作人、間接には社會全體に最も有利なやうに、その土地の無私な作用法を解する人にその管理を任せるところにあるのだと思つた。さうして小作人に分與するにしても、その前に彼等がこれを自分の本當の幸福に役立つやうに使用することを敎へる方がいゝことだと思つた。この意見も兩者の知人の一人に話したが、それが通じたかどうかを私は知らない。兎に角武郎さんの決心がつかぬ前に私は外遊することになつたのだつた。

丁度明日出發しようといふ前日に思ひがけず武郎さんは私の宅を訪ねてくれた當時ジュネーヴにゐられた新渡戸先生と、スキスで一つの愉快な部落を作つてゐる藝術家の群れとに、態々紹介狀を書いて持つて來てくれたのである。私はこの思ひがけぬ親切に深く心を動かされた。ごた〳〵した間でゆつくり話をする餘裕がなかつたのは、今から考へれば益々殘念であるが私が武郎さんと一番親しい氣持で話したのはその時である。さうしてそれが又最後の會見ともなつてしまつた。

私は武郎さんの不慮の死を翌年の夏巴里で始めて知つた。私の頭にはあの最初に受けた武郎さんの溫かな寂しさの印象が蘇つて來た。さうして出發前に讀んだ階級藝術論（それは一面的であると當時も思つてゐた、今でもさう思ふ）などゝ思ひ合せて、武郎さんは死にたくなつてゐたのだらうと思つた。死にたくなつてゐるところに誘ひの水が押し寄せて來たのだらう、さうして武郎さんはそれを手強く拒むことが出來なかつたのだらうと思つた。私は當時暇々に讀んでゐたクライストの心中とくらべて色々のことを考へた。さうしてこれは色々の理窟をつけて非難したり辯護したりすべき問題ではない。たゞ武郎さんの善良な、身を以て人生の諸問題にぶつつかつて來た魂に、南無出離生死頓生菩提と回向するのが生殘つた者の道だと感じた。あの溫かな魂と、弱さを含む愛と、身を以て物を考へようとする眞摯とは、永く吾々の間に生きて行くに價ひする。



明治卅九年（一九〇六年）五月、ワシントン郊外チェヴィ・チェース(Chavy Chase)滯在中の撮影である。

創作「迷路」の讀者の爲めに、年譜の中から次の數章を拔萃しておく

△一九〇四年—ハァバァフォード・カレッヂ大學院を出で、直に狂癲病院に入つて看護婦となる。

△一九〇五年—夏はニュハンプシャー州の或る農家で働いた。一緒に働いてゐた日本人の戀愛事件に坐して急に同地を立退いた。

△一九〇六年—ある戀愛事件に坐し短銃を以て生命を脅かされた。極度の神經衰弱に陷つて農家に遁れた。

有島武郎氏を憶ふ

三宅やす子

有島さんの全集が、今度華々しく出ることはうれしいと思ひます。氏の作品はもとより、後になつて見出された日記、書簡悉くがおさめられるので、氏の面影をまのあたりに見る事が出來るのは實にいゝ。有島さんが今まで生きてゐらしたら、仕事もなさり易かつたらうと思ふけれど、僅か數年前でも、あの時分は、氏の環境と思想とでは、隨分苦しいことも多かつたでせう。それにも拘らず、有島武郎氏の姿は、今になつて鮮やかに人々に印象されるほど、氏は獨自の高いものを持つて居られました。氏の氣品のある藝術と、確固たる新らしい思想は、いつまでも讀者を襟を正して、しかもなつかしみ多く親しませる、氏獨特のものであります。書簡や日記を悉く公開されて、一貫した其人の生活思想にふれることが出來るといふのも、有島さんのよい意味での「德」の具つて居るわざです。激情をまとまりよく整理して、最後まで軌道を逸しなかつた熱の人、有島武郎氏を、此全集は充分に大衆に表示することゝ思ひます。

素の身上

ささき・ふさ

有島武郎氏の作品は私は殆んど讀んでゐない。第一「有島武郎氏」などと書くと、パパのパンとかベビとかで交際つてゐた方とはまるで別の、何か非常に嚴然とした遠い存在のやうな氣がする。私の知つてゐる武郎氏は、よく手紙を下さつた武郎氏だつた。否、全くのベビだつた私のたはことに、克明に答へを下すつた武郎氏だつた。それらの澤山の手紙、――半分位は繪入の手紙が、私の外遊中、地震後のどさくさまぎれに、預けてあつた兄と全集編纂者との間の何處かで失はれてしまつたことは、今になつてみると實に惜しい氣がする。手紙と共に私の日本にゐない間に此世から消えて行つてしまはれた武郎氏其人も――否、武郎氏其人こそ今となつてしみじみ惜しくてたまらない。

恐れ入つたのは、氏が數百の應募原稿の中の一篇が私の友人の書いたものであり、その一篇の中に引用されてある手紙が私のであることを直覺せられた時だつた。しみ〴〵と忘れられないのは、何かの機會に氏が、私の素の身上を生かせと諭されたことだつた。つまりお前の素にはよい所がある、それを育てて作品の上に出せと仰しやつたことだつた。私自身の問題は措く。が私にいはせれば武郎氏こそ何人よりも豐富に素の身上を惠まれた方だつた。私は亡き氏のその身上に接する爲、御生前には殆んど讀まなかつた氏の作品が、有島武郎集となつて世に出るのを、ひとへに待ちこがれてゐる。

▼出版部から

本全集は三月から刊行開始と云ふことに廣告しました。それは第一回配本を三月二十日前に公にする事が出來る豫定であつたからであります。然るに何分宣傳の忙はしい間に編輯校正に從事してゐた爲め思ふやうに渉どらず、十日前後も遲延しましたので、第一卷は四月一日の發行といふ事になりました。就ては「第二回配本」は五月一日、以下毎月一日の刊行と定めますから、左樣御承知を願ひます。尚ほ第一卷刊行遲延しましたことは幾重にもお詫びを申しあげます。

つた。

ティルディは兄の凡ての書信の友情の温さ、感情の豐富、洞察の周到、思想の高遠等を深く信じて疑はないやうに見えたさうしてその遺文をそのまゝ世に埋れさすのを惜んだ。然しそれを發表するに就いてはティルディ自身の立場から大分躊躇してゐた。私は兄の全集が既に大正十四年に完成し、そのうちには他の有ゆる書簡も採錄されてゐることを告げて、もし新に全集でも刊行される場合には改めてそれを編纂したいといふ希望を告げて別れた。私達はユングフラウに登山し、北伊太利に廻つて巴里へ歸つた。

十月央妻はサイベリア經由で巴里へ到着した。それを機會にティルディは妻に逢ふのを一つの目的として十二月六日、シヤフハウゼンから巴里へ兄の書簡全部を整理淨寫し終つて持參してくれた。書信は全部英語で書かれてゐるので、一先づ飜譯してから日本で發表することにしたいと思つてゐる。それによつて初めて兄とティルディとの友情關係が明白になるであらう。

ティルディは三人の遺兒のうちせめてその一人でも自分の手で教育したいといふ志望を私にまで切に申出てゐるが、まだその問題に就いては自分にも具體的な返事をするほどの考へを、確定するに至つてゐない。ティルディは、行光のためにサマリテンのマガサンへ行つて洋服一着を入念に選定してこれを置土産として、一週間巴里に滯在して歸郷しまつた。

私達は、年末に再びシャフハウゼンに行つて會ふ約束をして置いたが、ニースの方に用事が出來て、その約束を果さず、遂に、再會の機會を失つたまゝ、榛名丸に搭乘して歸國することになつてしまつた。

有島君を憶ふ

新渡戸稲造

僕は少からぬ若い友達を失つた。して彼等を思ふ事が甚だ切なるものがある。或は一人靜かに舊時を偲ぶ時或は忙しく仕事をしてゐる時或は物を思はずに歩む間圖らずも亡き友からの面影がありありと心に浮ぶ事がある。して其中に就ても有島君の如きは最も屢々僕の記憶に浮ぶ人である。時々僕は同君を思ひ出すまいと迄努める、歸朝して以來僕は同君の家族を訪ねる事をおそれてゐる。

同君は數年間僕の家に居つた。しかもそれは同君の精神的開發の最も大事な時であつたから屢々煩悶等に就て話をした事もある、故に同君は最後迄僕を記憶してくれる記念迄殘してゐて吳れた。今些細なる話しを述ぶる事を避けたいが同君の面影が尙僕の眼には明かに存在してゐる。故に僕は同君の最後の事は忘れて同君の若かりし札幌の時と其後米國に在學せる時と、歸朝後文筆に餘念なき時を思ひ出すのは友情を温め才人と交るの樂しみを覺ゆるが故に右に述べたる如く屢々同君の記憶を偲び又同君の墓に詣でる。同君の最後の決心は僕には理解は出來ぬが筆に殘した同君の心は誠に尊ぶべく愛すべきものである。僕は常に同君の思想の高潮に達した時代を顧みて知らずしらずに人情の温か味と深味(ふかみ)を知る。

×　×　×　×

武郎さんのこと

阿部次郎

武郎さんと私とは、思想上極めて接近したところがあると同時に、どうしても相容れぬところもあつた。どつちかと云へば、武郎さんの世間に騷がれた一面に、私と相容れぬ方面が著しく顯れてゐたと云つてもいゝかと思ふ。武郎さんの華かな情熱が、時として私には幼稚に見えた。武郎さんのプロレタリア藝術觀に私は賛成しなかつた。「惜みなく愛は奪ふ」といふやうな、眞理の半面を誇張した、ギラギラしたアフオリズムを私は危つかしく思つた。私のかういふ意見は、兩者の知人を通じて、恐らく武郎さんの耳にもはひつてゐたらうと思ふ。併し武郎さんはそれにも拘らず私に友情を持ち續けてくれた。交際の上で容易に油の乘つて來ない私を最後まで埒外にほおり出してしまはなかつた。私は武郎さんのこの寛容な情の篤さに感謝の情を持ち續けてゐる。今、平生の原則を破つて、武郎全集の見本に一言を寄せるのも、同君の生前全然何の報いるところもなかつた情誼の一端に報いたいからである。私が廣告見本にかういふものを書くのは、縮刷漱石全集と今度とで前後二度だけである。

私が武郎さんの著作を始めて讀んだのは、私の中學時代である。「リギングストーン」は大變面白かつた。あとで「白樺」時代になつて「或女のグリンプス」に興味を持つて毎號續けて讀んでゐる時分には、私は併し武郎さんが「リギングストーン」の著者であることを忘れてゐた。若しそれを忘れてゐなかつたら、この人は大變若返つたと思つたであらう。さうしてこの若返つた武郎さんに御目にかゝつたのは、多分目黒の精進料理でやつた、故水野仙子氏の追悼會が最初であつたと思ふ。柔かな、敏活に應對する話しぶりの中に、何處か弱い寂しい色合が漂つてゐるのに心をひかれた。歸りの山の手電車に一緒に乘つたとき、私は隣の人と盛んに話をしながら、弓(黒塗に暗赤の横線がついてゐたと思ふ)で作つたステイッキを無意識に掌で押し曲げ押し曲げしてゐた武郎さんの姿をはつきり眼の底に刻みつけた。今でも武郎さんの事を思ふとあの時の姿が浮んで來る。この人には頭の中に常に湧き出してゐる思想がある。この思想は對手がひき出せば物惜みせずに引出されるまゝにひき出されて行く。併し對手の心持に對する好意から、自分を加減して知らず識らず調子を合せて行くところから來る疲勞の影がないとは云はれない、武郎さんは恐らくは明確に拒むことの出來ぬ人、時々人間の交際に疲勞を感ずる人であらう――私は武郎さんと並んで腰をかけながら、口數少く會話に仲間入りしつゝ、こんなことを思つてゐた。さうして武郎さんの性格の善良な、温かな、弱さともいふべきものに愛を感じた。私は今でも、世間の喝采するところよりも、依然としてこの點に愛を感じてゐるのである。

武郎さんが北海道の農園の所有に苦痛を感じてその始末法に煩悶してゐられるときいたとき、私にも私の意見があつた。某君が財産を持つのがいやならどぶの中へ投げ込んでもいゝぢやないかと云つたといふ意見を傳へきいたとき、私はさうは思はなかつた。私は武郎さんの義務は所有權を拋棄するところにあるのではな

編輯に從事して

織田正信

新潮社は寛大な態度をもつて、私を十分に働かせてくれた。監修の有島・里見兩先生は、十全の注意を與へて下さつた。若し讀者が責むべき點を見出したならば、それは凡て私の責任である。私は讀者の前に、自分の淺學菲才を恥ぢ、地下の故武郎先生に御詫びをするのみである。

出來得る限りは年代順に依り、他面には種類別によつて編輯した。日記・書簡に於ては先づ舊全集所揭のものから精選すると同時に、新しい材料を取入れて、この點からも全集再刊の意義を十分に與へる事に努力した。校訂に際しても、何よりも讀みよく讀者の心に入りやすい事を常に心懸けて居られた先生の心をくんでルビ及び假名使ひに心を用ひたつもりである。讀者の親切なる御指導を切望する次第である。

○

月報も、單なる宣傳ビラ以上になしたい微意から各方面の人々に願つた、先生の全容を讀者に傳へんことを努めるつもりである。

○

生馬先生も歸朝された事ではあるし、第二回配本のものからは益々完成されて行くことではあらうと思ふが、讀者も亦十分にこの拙い編輯者を援助されん事を切望してやまない。

次回配本 或る女・旅する心

『或る女』は、著者の最大長篇であるばかりでなく、その持つてゐるすべてのものが、率直に全的に投げ出されてゐる點からいつて、まさに代表作として、第一位に推さるべきものである。發表當時全日本の女性の間に異常なセンセーションを捲き起したが、この中に取扱はれてゐる幾多の問題は、今もなほ新しい姿をとつて、われ〱の身邊に甦つてゐることを發見するであらう。『旅する心』は、著者が曾遊の天地を追想しつゝ書かれたもので、自然と人情を味ふ味覺の鋭さと觀察の獨自性とは、素人の域を脫し、而もくろうとの持たない妙味を見せたその挿繪と相俟つて、他に比類なき藝術的旅信を形づくつてゐる。

新潮文庫

一冊壹圓 紙裝約五百頁、送料拾錢

新しくして既に古典的權威ある明治大正文壇の傑作中の眞傑作

(1) 藤村傑作集（前編） 島崎藤村著
(2) 藤村傑作集（後編） 島崎藤村著
(3) 田園の憂鬱・都會の憂鬱 佐藤春夫著
(4) 破船（上下二巻合本） 久米正雄著
(5) 增補 學生時代 久米正雄著
(6) 吉田絃二郎傑作集 吉田絃二郎著
(7) 夜ひらく・夜とざす モーラン 堀口大學
(8) 近代情痴集 谷崎潤一郎著
(9) 戀愛合戰 宇野浩二著
(10) 增補 夜の光 志賀直哉著
(11) 藤村感想集 島崎藤村著
(12) 吉田絃二郎 詩・感想集 吉田絃二郎著

東京牛込 新潮社出版

有島武郎全集　第九卷

PL
801
R5
1929
v. 9

LIBRARY
MAY 24 1967
UNIVERSITY OF TORONTO



著者夫妻及び兩親
北海道札幌居宅に於て（明治四十三年八月）



第九巻目次

有島武郎全集 第九巻

観想錄（其一）

――日記――

第一巻

一八九七年（明治三十年）

所懐

人は皆心矯めぬぞよかりける柳は緑花は紅

これ我が前年の偶感にてあるなり。嗚呼流水落花早く既に幾星霜の昔とはなりぬ。當時眼中英雄なく聖人なく豪然として我亦獨立個々たる本領ありて存すと自任せし其折の口ずさみのいかに面白きよ。然りと雖も我此の歌を誦する毎に一種恥廉の感ありて、胸を打つを覺ゆるなり、嗚呼人誰か長所なからん。嗚呼人誰か短所なからん。其長所をして益々發達せしむるは宜し。其短所をも併せ標置してこれ我の特性となすに至つては愚も亦甚哉。しかも今日濟々たる靑衿の人此の心なきもの果して幾何ぞ。惡癖を矯めずして却つてこれを人にほこらんとす。一時の見を以てすれば矯々古人を凌ぎ、今人を下し、勢當る可らざるが如しと雖も、實力の在る所に至つては終に明日に聖賢に鑑み、昨日に英雄を思うて其跡を追ふの士に劣るあるを知らんや。我も彼の歌を詠ぜしの時は、實に卓然として自ら標置し唯我獨尊にてありしなり。由來悟入せざる唯我獨尊は頗る危し。終に其人をして慢せしむ。然りと雖も因循姑息只管古人の糟粕をのみなむるを事とする軟骨動物たれと云ふにあらず。確乎たる自信なくして濫りに人にのみ盲從する腔腸動物たれと云ふにはあらず。本領と弱點これを混同する事は三尺の小兒と雖も爲さゞる所なる可し。嗚呼前年我が詠ぜし歌今我をして詠ぜしめば、

ひが心ありなば正せ谷の戸に雛鶯の初音やはよき

四月二十七日。火。晴天。朝六時半起床、出校す。此日大島先生、Harthborn を送らんが爲め室蘭に行かれしを以て化學は休業なりき。又小寺先生の動物と英語と兩方共休みなりしかば、此三時間の中 Base ball をなせり。午後よりも亦 match あり。夕刻に至る。夕刻大島氏歸宅せらる。夜十一時半頃、北二條東一丁目の私立小學校に火事あり。夜十二時就寢。發便なし。買物なし。脇坂氏より受便す。

附（二十五日。朝より天氣よし。十時より新渡戸先生の Bible Class あり。午後より一寸廣井氏に至りて片岡のお婆さんに面會せんとせしも折惡く不在なりき。

二十六日。晴天。朝七時起床、出校す。別に記事なし。午後より入浴し又坂本氏を訪問して種々御話を承る。松平恒雄氏より雜誌及び書狀を得。又水野直氏よりも得。永井直厚氏よりも得たり。松平保男氏よりも得。）

四月二十八日。水。雨天。朝六時半起床、出校す。別に記事なし。午後より一寸散歩。夜十一時半就寢。發便受便なし。二十錢切手、九錢筆、十二錢卷紙狀袋。

四月二十九日。木。曇天。朝六時四十分起床、出校す。別に記事なし。入浴す。夜十二時就寢。五錢浴費。十二錢卷紙狀袋、二十錢切手、四十一錢ペン先、さるまた。菊地正雄氏より受便す。

四月三十日。金。晴天。朝七時起床、出校す。此日體格試驗ある可き筈なりしになくして學科あり。農學校は學習院と異り此の如き事に不規則なるは殘念なり。夕刻散歩す。原田氏の家を訪ふ。閑談少時辭し歸る。十一時就寢。買物なし。増田氏より受便す。『太陽』送り來る。水野直、恩地剛太郎氏へ發信す。

山門の額年ふりぬ春の雨

眠る猫のひたひに落ちぬ春の雨

何と云はん外山端山の初若葉（挿畫一葉略す。）

五月一日。土。晴天なりしも午後より風出づ。朝七時起床、出校す。此日は體格檢査ある可き日なれば學科は休業なりし。我が檢査の成績は次の如し。

身長五、二八。體重一二二、五斤　胸 常八二 充八六 空七八 ミリメートル　視力及び聽力完全、體格强健、齲齒九本、肺量三八〇〇。脊柱正。

午後より校庭に於て中學校とのベース・ボール・マッチあり、彼は打球に熟し體度亦輕妙、我は守備に長じ擧動粗暴にて故らに他人をもたふして成功せんとするの樣見えたれども、名にし負ふ選手同志の戰なれば、一上一下祕術を盡したりしが中學校の運や弱かりけん、終に三十一に對する十六の差を以て農學校は勝利を得たり。さはれこれに今一層の禮節を加ふるならば完全の域に達す可きに。夜十一時就寢。買物なし。讀書もなし。

五月二日。日。晴天。朝八時起床。朝の中は新渡戸先生のバイブル講義あり。午後は孝夫氏と共に博物館に遊ぶ。數名の頑童中の二三人又來り居れば雜鬧云はん方なし。歸來外出せず、夜十一時就寢。星野氏訪問し來る。買物なし、愛子に發信す。

五月三日。月。快晴、非常に暖氣なり、夜風出づ。朝六時半起床、出校す。今日より數學は Calculus を初めたり。講師の日子少なければとて其字の前に mechanical と云ふ字を加へしも面白かりき。夕刻に至り大島先生と共に中島に至り、植木屋五十嵐の家に至りて植木二三種を買ひて歸る（但し馬車を以て行く）。此日より中央寺に參禪す、講本は參同契なり。七時より初まりて八時に終る。夜十時半就寢。十六錢、講本代。十三錢、伊太利三傑傳。受便なし。發便なし。

五月四日。火。曇天。朝八時起床。今曉十二時を過ぎる少許警鐘夢を驚かすに遇ひ衾を蹴つて室外を窺へば焰々たる猛火は近く南方に燃ゆ。火事なりしなり。天飈怒號火炎四散其慘憺得て名狀す可らず。蓋し札都ありてより以來稀有に屬するの事。初め南四條東一丁目に火を失してより、火は風神の救によりて益〻狂暴を極め、初めに南方に延びて殆ど南四條東一丁目を燒き盡し、餘炎直に北向して勢破竹の如く見る〱二丁目と一丁目とに擴がりて三條を燒き二條を全燒せしめて二時半

頃漸く鎭火しぬ。此日學校は朝大島先生の時間ありしのみにて餘は休みとなりぬ。午後散歩がてら現場を見る。餘材猶火焔を發し所々發煙して轉た昨夜の暴威を思はしむ。木は枯れ藏は落ち瓦材雜然たる所、參々伍々地中をかきて糊口を爲すの資を得んとするの老婆あり、材片を集めて燒材に爲さんとするの少女あり。皆可憐の極、殊に一老婆の少女三人に伴はるゝが慣々として燒け跡を凝視したる眼邊に涙痕の滂沱たりしは、如何なる無情漢をして視せしむるも必ず面を覆うて又仰ぐ可らざらしむるものありき。夜、坂本國雄君を訪ふ。十時半就寢。二十錢、郵便切手。増田英一氏に發信す。新渡戸先生の依賴に依り家に『札幌沿革史』を送る。

五月五日。水。晴天。朝七時起床、出校す。此日如何なる故にや新渡戸先生の英語は休みなりき。午後より散歩す。別に記事なし。夜に至りて二度出火あり。此頃は付け火を爲すと云ふ噂もありて市中の人心は恟々たり。但し今日の火事は皆大事に至らずしてやみぬ。夜十一時就寢。十二錢八厘、小刀。家及び二條氏に發信す。

五月六日。木。晴天なりしも風あり。朝六時半起床、出校す。吉田講師の數學は休業。午後一寸散歩す。別に記事なし。夜十時四十分就寢。買物なし。受便發信なし。

五月七日。金。雨天、朝七時起床、出校す。別に記事なし。午後より家に籠り徒然のまにまに平田久が編纂せし『伊太利建國三傑』を讀む中、マヂニーの傳中彼が文學に志せりしも時勢は彼を許さず、彼亦よく時世を察して、毅然として自ら溷濁殆ど回す可らざる腐敗社會に竄入す。其日記中の一節を飜譯して曰く、

「國なく自由なくして、或は美術の說明者を出す事あらん。されど決して生きたる美術を出す事能はず。故に我輩の取る可き道は只一あるのみ。他なし『我輩は國を有す可きものなるか』との根本的大疑問を解かんが爲めに一生を抛ち直に政治上の問題に入るにあり。我輩若し効を奏せば、伊太利の美術は我が墳墓の上に咲き榮えん。」

讀んで此に至り我は思はず案を打つもの三。竊かに我が同志の士あるを喜びぬ。我も亦此心に於て釐毫の差なし。唯區々たる農業を事とせんとするは何ぞと問ふ人あらば、我は答へん「政治は維新に於て一頓進をなせり。商業は當に革新の時機

に際して歩武蒼々たり。工業の隆盛なる、僅々三十年左右にして此の如きに至るは蓋し多く比類を見ざる所、獨り農業に至りては古來一轍農夫舊によりて古套を墨守す。豈嘆ず可きの甚しきにあらずや。人は舊習を蟬脱する能はずして農業とし云へば卑賤、男子の爲すにあらざる可き業となす。それも可なり。しかも其云ふ所の人一日の vegetable に缺くるあらば其困難や如何に。我敢て大材を以て自ら任ぜずと雖も願くは以て農業革新の魁たらん。我先づ奮ふ、二十四郡豈一人の義士なからんや。明らさまに云へば我は農業を爲すに今一の目的あるなし。農業は神聖無垢他の事業の到底企て及ぶ可らざるものあればなり」。夜、中央寺に至りて參同契の講義を聞く。十一時就寢。買物なし。家に發信す。松平恒雄氏より寫眞送り來る。

五月八日。土。晴天風あり。朝六時半起床、出校す。此日新渡戸敎授の倫理講話は强ひて演題を求むれば『夢みよ』と云ふにあり。其概略に曰く、古來夢を以て總て漠然たるものに例へ「夢見て居る樣な人」、「夢の樣な事を云ふ」、皆これ罵詈の言として其迂濶蒙昧を笑ふの語なり。「聖人夢なし」これ其人を頌するの語と知る可し。夢なるものは古來人の稱する所とならざりし也。然りと雖も孔子自白せずや「我不見夢周公」と。これ果して何の謂ぞ、聖人夢なきに非ざるなり。夢みる所嶄然として人意の表にあり。人以て夢となさゞるなり。然らば夢は其見る所によりては敢て不可なるに止まらず、人生の行路に於て大補足、大補助なくんばあらず。當今の書生を見るに孜々勉强の者はこれ有り。刺々令色するものはこれあり。故に俗世の才に長け文筆の能に委しと雖も終に上長の器なきは何ぞや。當今の敎育界は腐敗の極に達し學生をして天才を伸ぶる能はざらしめて、些々たる月給僅々たる名聲に安んぜしむ。然り、當今の書生を此の如くなさしめたる諸制度は甚しと雖もしかも生徒にして一片稜々の氣魄あるもの何ぞ此の如き小動機に左右せられんや。然るに然らずして、却つて此小濁渦中の者たらんとするは抑も其人自身の小を示さずんばあらず。徒らに志想を現實の上にのみ馳せて、遠大の豫望なければなり。「夢の樣な人」、「夢の樣な事を云ふ人」と人は云はん。云ふに任せよ。そして汝の理想を汝の能ふ限りの最高なる邊へ置け。而して直而直往死して後止むの概あれ。汝が理想は必ずや咫尺の間にあらん。汝のこれに志したるの時は旣に理想成れるの秋なり。

午後一時、市に至りて買物をなし、夜八時半就寢。此日あたりより齒ぐき膨れ出して甚だ堪へ難し。八錢六厘、雜記帳。

五月九日。日。朝、七時半起床。朝、新渡戸先生の Bible Class あり。午後より病に臥せる原田氏を訪ふ。晝前小谷氏と共に關場病院に至る。齒は勿論ながら咽喉も宜しからずとて藥をくれたり。夕刻に至りては病勢つのりて痛苦堪へがたかりしも、小谷氏の親切なる誘引もだしがたく、且つ心の慰にもやならんとて博物館に遊ぶ。夜早寢す。松平恒雄氏に發便す。家及び恩地剛太郎氏より受便す。二十二錢、藥代。

五月十日。月。六時半起床、出校す。歸校後札幌病院に至りて診察を受く。齒ぐきを切開し呉れたり。ミス・リード及び新渡戸夫人は余の病狀を大に心配し給ひ種々の厚き手あてをなし呉れ給ひぬ。謝するに辭なし。夜九時半就寢。受發便なし。三十三錢、藥代。

五月十一日。火。晴天、朝六時半起床、出校す。別に記事なし。齒は益〻惡し。歸後散歩せず。新渡戸夫人及びミス・リードの懇情は相變らずなり。夜十時半就寢、買物なし。七圓、食料。受發便なし。

五月十二日。水。晴天朝六時半起床、出校す。別に記事なし。夜十時半就寢。買物なし。家及び增田氏より受信。增田氏へ發信。

五月十三日。木。晴天、夜に至つて曇る。朝六時半起床、出校す。二時間目より休業となりしかば、有志相計りて丸山に遊ぶ。櫻花のまさに咲くあればなり。櫻の在る所堂々たる札幌にして唯此一小仙圈あるのみ。至れば櫻株百內外。これを內地の名所に比すれば巨人に對し一侏儒のみ。しかも亦我が目を喜ばして餘りあり。此日師範學校附屬の生徒及び北海女學校の生徒來りて運動會を爲す。唱歌し、野球の技、蹴球の術、盛に戯るゝの樣、櫻花の爛漫とそれ何れぞ。余等思はず茫然として其景に魅せらるゝもの久しかりき。かくて Dutch share を以て櫻餅、大福餅を食ひ諸所を散歩し午後三時頃歸宅す。齒は膿甚だしく出でゝ大に痛みを減じたり。夜中央寺に至り、十一時半就寢。受發兩便なし。二十錢、切手。二十錢、本代。二十五錢、菓子。

五月十四日。金。晴天、朝六時半起床。此日小寺先生の時間一時間にて休業となれり。午後入浴す。夜十時半就寢。箕田より受信す、發信なし。十八錢八厘、足袋代。

五月十五日。土。曇天、風なし。朝七時起床、八時半頃出校す。此日は春季大運動會あるの日なれば到り見るに、装飾いかめしく晝後よりは來觀人堵の如くして誠に盛大なる光景なりき。我は五六度競技を試みたれども一度も取れず。然し大に愉快なりき。夜十時半就寢。二十一錢五厘、菓子代。五錢、蒟蒻版代。

五月十六日。日。晴天、風あり。九時半前頃起床、朝入浴す。午後より町に至り鈴木敬策、木村の諸氏を訪ひしも皆不在なりしかば、坂本氏に至りて種々の話をなし、夜十一時半就寢す。家より『太陽』送り來る。二十錢、鉛筆挾み。

五月十七日。月。晴天、風あり。朝七時起床、出校したれども學校は休業となれり。午前は家に在りき。午後に至りて一寸町に至り歸路坂本氏に遇ひ雜談夕刻に至りて辭し歸る。頃日民友社の『伊太利建國三傑』を讀む。その中マッチニーが幼時立志の時に於ける心志轉遷を寫す所全然我が志を得たり。思はず席を打つもの三度暫く其中を摘錄せんか。(以下前出略す)

嗚呼我が國今國に於てあり。しかも志想の點に於て奈何。悲しむ可し、志想は全く滅亡、寧ろ支離滅裂に歸せんとするなり。此大局難に立たんには先づ文學美術等を後にす可し。大理想なきの文學美術は萬千ありと雖も遂に施す可きなきなり。我若し「大理想は我輩の有す可きものなるか」なる問題に就て成功せば、我が墳墓の上眞誠なる國民の榮華は咲き榮えん。二十錢、鉛筆挾。増田氏に發信す。佐野氏より受便す。

五月十八日。火。晴天、少しく風あり。朝七時起床出校す。別に記事なし。午後散歩す。夜十一時就寢。買物なし。家及び佐野氏に發信す。受便なし。

五月十九日。水。晴天、午後より曇る。朝七時起床、出校す。別に記事なし。午後乘馬しに練兵場に至る。夜參禪す。午後十一時就寢。十四錢、齒磨シャボン。十二錢、卷紙狀裝。受便なし。二條氏へ發信す。

五月二十日。木。晴天。朝六時半起床、出校す。別に記事なし。午後一寸散歩す。明日より中央寺の講座は隔日の朝六時半より七時半に亙りてある可き筈なれば、其日は食パンを朝食することゝなしたり。一は養生の爲めにもならんと思へばなり。近頃は講義は小松師にあらずして、元曹洞宗の中學校の敎講なりしと云ふ某氏なれば説話敎法的にあらずして、學問的の嫌

あるも余等初學のものには寧ろ分り易き感あり。夜十時半就寢。別に記事なし。今日の visionary gleam に余は如何にしても未だ眞正に眞面目となりて前途の爲めに學問するの志なきことを益〻悟れるなり。これ實に我が大缺點なり。大に心してこれを正さゞる可らず。別に買物なし。松平保男氏より受信す。壬生馬に發信す。

五月二十一日。金。曇天、風烈し。朝六時十五分前起床。朝參禪す。出校す。別に記事なし。午後より增山氏來談せらる。散歩を怠れり。夜十一時半就寢。二十二錢ジャム（大島氏より十錢拜借せり、不日返濟す可し）、輔仁會及び永井直厚氏より受便す。松平保男氏に發信す。

五月二十二日。土。雨天。朝六時半起床、出校す。此日倫理は寒氣の爲めに休業となれり。午後より終日家にありき。夜十ら一時半就寢。此日松平恒雄氏より手紙を領す。其中に伊藤清三氏（當時本科一年）を紹介し來る。蓋し氏自ら之に交りたるにあらずして伊藤氏の知己吉田氏と云へる人同じく第一高等學校にありて松平氏と相親しきを以てなり。我れ農學校に入學してより伊藤氏に遇ふ每に何とはなき恭謙の貴容に打たれ、唯慕はしき心地して往來に相遇ふも同氏へのみは我も禮を爲しにき。後其闔級の首席に在りと云ふを聞き尊敬の念愈〻加はりぬ今此に此紹介を得て喜び極りなく今宵や訪はん明日は訪はましと思へる所に訪れ給ひしは同氏なりき。會〻大島氏は當直なりしを以て胸襟を披きて共に談ずるを得たり。勿論氏は學德共に我輩の上にある數等。寧ろ敎を受けん。遂に相頡頏する能はざるなり。同氏も少しく樂しき所あるか怡然として談殆んど十時に垂（なんな）んとするに及んで宿規の許さゞるを以て歸路を取られぬ。余は氏が余の爲めに此長時間を割きて余との雜談に費されしを深謝せずんばあらず。思ふに同氏は決して謀計百出能く人を致して人に致されざるの人にはあらず。駿才天を貫きて卓勵風發辯人を活殺するの概あらず。而もこれに接するに溫乎として冬日に對するが如く其云はるゝ處敢て奇とするに足らずと雖も、先づ行つて後に云ふもの卽ち「天使の如く云ひて惡魔の如く行ふ」輩の夢想だも及ばざるは亦多となすに足らずや。此言往々にして君子大人の風あり曰く、「我は既に斷乎として外面よりの困難には其困難如何に鋭きも甘んじてこれを受けて忍耐する覺悟を充分なしぬ。昨年の冬一生徒の爲めに頭を毆打せられたり。然れどもこれ唯尋常の事のみ、相鬪つて決して彼等如きに

負くるものにあらずと雖も我忍耐しぬ。そして全く事無きを得たり」と。何等穏當の語ぞ。我は彼の聖書に於ける「人汝の左の頬を打たば、汝其人に又右の頬を向けよ」と云へる語を想起せずんばあらず。君は又其原因として「我がかく外面の困難に堪ふる性を養ふを得しは穢らはしとて鹽花を振り掛けられたる事もありたる、再三の旅行に得る所多しと雖も又幼時より千辛萬苦の結果與りて大に力ありと信ずるなり」と。嗚呼善く己れを知れるの言ならずや。我之を聽く、君其弟の空しく郷里に耕耘に従事せるを慨し卽ちこれを呼び寄せ己れに送り來る學資二圓を以て自炊して二人苦學盡く嘗めざるなしと。宜なるかな。其言の惻々として人を動かすあるや。君又曰く「世困難に遇ふの人往々其精神畏縮し、人の缺點を見るの眼は梟の如くにして終に人の長所を容るゝの量なきに至るを極めて普通なりとなす。これ果して何に依りて然る。困難を noble に receive せざるによるのみ」と。殆んど千歳の金言に非ずや。此日恒雄氏の書丁寧懇切を極め、己れが思想の變遷を說き來りて我にも亦此事を勸めらる。我忽ち服す能はずと雖も、我は殊に君が此考をなしたるを多とし歡喜の餘、直に書を飛ばして我が所懐を述べたり。買物なし。松平恒雄、二條友英氏より受便す。松平氏に發信す。

五月二十三日。日。朝六時二十分起床。此日中央寺に參禪す可き日なりしを少しく寢過したり。卽ち直に赴かんとせしを、い、ひなさんの切に朝食してより行けと云はるゝに、老人の言に背くことの何となく心苦しく、快くこれを諾して食事し終れば、時は既に甚だ遲かりしかば、曉風に浴して郊外を散歩する殆ど一時間にして歸り來り皆には參禪せる樣に申し置きぬ。晝前は新渡戸先生の Bible Class あり。午後より小谷氏と共に師範學校の運動會を見る（尤も小谷氏は師範學校に寄らずして丸山に舊北明學校生徒の親睦會ありしに行きしなり）。無邪氣なる附屬小學校生徒諸氏の活潑なる運動など甚だ悅ぶに足るものなりき。四時頃歸宅す。夜、再び中央寺に至りて夜講を聞く。夜十一時就寢。受發便なし。買物なし。

五月二十四日。月。朝は曇りてありしが晝前より晴る。朝六時四十分起床、出校す。吉田講師休業、午後より乘馬す。夜十時半就寢。別に記事なし。買物なし。家及び增田氏より受信す。

五月二十五日。火。雨天。朝六時十五分起床、出校す。朝參禪す。別に記事なし。午後入浴す。夜十一時半就寢。受便發

便なし。買物なし。

五月二十六日。水。雨天。朝六時半起床、出校す。別に記事なし。午後より武林に至り寫眞す。歸途岩井に至り靴を買ふ。夜十一時半就寢す。二十五錢、寫眞代。七十二錢、寫眞代。四圓、靴代。

五月二十七日。木。雨天。朝六時二十分前起床、朝參禪す。此日より寶鏡三昧に轉る。出校す。漢文及び數學は休みにしてもらふことにしたり。化學は先生が獨逸と間違ひし爲めこれも休みとなり一日學科なかりき。夜十一時就寢。此日東部都督野津伯來札せらる。余等これを停車場に迎ふ。買物なし。松平恒雄及び二條氏へ學藝會雜誌を送る。二條氏より尙志會雜誌を送り來る。永井直厚氏に發信す。

五月二十八日。金。雨天。朝七時起床、出校す。此日二時間學科ありて餘は休業となれり。夜に至り坂本氏を訪問し冬衣服四襲を預けたり。夜十二時半就寢。買物なし。受便發信なし。

五月二十九日。土。晴天。朝六時起床、朝參禪す。此日の倫理は新渡戸敎授よりなされたり。先づ話題を野津大將との交談に起して曰く、昨夜宴筵に列して大將と面晤するを得たり。君の辯、澁牙毫も取る可きなしと雖も區々たる口辯以外一片磨し盡す可からざる赤誠の氣ありて充分に溢逬せるを見たり。而して當夜再三繰返されたる言語中、大將は日淸戰爭以外必ず一層大なる事件の爲めに人民が奔命に逐はるゝ事なきやと云ひ、老軀既に用ふる所なし、願くば後進の靑年諸子それこれを勉めよと言ふの意は、暗に充實せる如く覺えき。君や必ずや今後の靑年に矚目する所多々なる可し。故に余は今朝奔走して大將が當校に臨まれて一席の訓戒を試みられん事を希望せり。確答は未だこれ無しと雖も、多分は日本歷史上に不朽たる可き巨人に接するの榮は、豈吾人の喜ぶ所にあらずや。是れはさて措き余は大將の演說あるに先だちて一言請はずんばある可らざることあり。余今日私庭に草を蒭す。忽ち古歌一首を案出せり。曰く、「此秋は雨か嵐か知らねども今日のつとめの田の草を取る」と。單純なる志想俗卑なる用語しかも其中無限の敎訓を含みて吾人を敎ふる無からずや。思ふに余も亦後來の事件に就きては、聊か志を大將と同うせるもの、しかも余は決して主戰者にあらず。否な余は殆んど極端の非戰論者なり。しか

も各國其武を解かざるに我國のみ獨り劍を鎔して耜となし、弦を斷ちて弓を藏せよと云はざるなり。我は各國兵ある間は寧ろ强固なる兵力を養はん事を欲するものなり。然れども余は早晩戰が全滅して萬事仲裁を以て結局するに至るの時機あるを信ず。余は確信す。故に余は各國武を解かざる以上、國兵を益〻强固ならしむ可しと云へども、已れは又自己の覺悟なくんばあらず。余不肖終に事に堪へずと雖も請ふ戰爭の仲裁者として此世に立たん。諸子も亦各固く取る所あり。其時の來る時躊躇せざらん事を勉めよ。實際に當り毫も恐るゝ所なく平常秉る所の主義を決行して渝らざるの元氣を養へよ。これを爲すの法如何。唯それ「今日の勉めの田の草を取る」の片句中にあらずや。今日の事件に於てこれを等閑に過視するものは、終に幾百歳を經ると雖も爲す所あらざるなりといふにありき。

午後、校庭に於てベース・ボールをなす。大に愉快を感じたり。夜に至り、家より行郎の寫眞を送り來る。無邪氣なるに幼兒なるかな。我は切にこれを愛す。彼は確かにこれに於て我が師なり。机邊に立てゝこれを諦視。音容の浮動して我と相語らんと欲するが如し。十一時半就寢。買物なし。受便發信なし。

五月三十日。日。朝七時起床。此日天氣は風雨中々に烈しかりき。昨日新渡戶先生の云はれし野津大將の來校は事止みとなりぬ。遺憾なりと云ふ可し。此日は Bible Class もあらざりしかば半澤、鈴木眞吉、羽山、蠣崎、木村、增山の諸氏來らる。互に化學、英語等の質問をなし、十一時皆辭し歸らる。これより先き伊藤淸藏氏亦あり。談話に及んで歸舍せらる。午後よりは終日家にありて讀書をなせり。夜、中央寺に至りて夜講を聞く。今日より爲す所の夜講は靈魂說にして、小松師の演舌に係る。此後每日曜日に續けて爲さるゝ筈なり。十一時半就寢す。買物なし。家に發信す。南鄉氏より受便す。

五月三十一日。月。雨風甚し。朝六時十分前起床、參禪す。學校に於ては別に記す可きなし。吉田講師は休みなりき。此日野津大將九時何分の汽車を以て上川、宗谷の地方を巡視せらる。阪本氏も同行なりしと云ふ。これに就きて小樽より農學校に向け、競漕を小樽に於て大將一行に見せしむる爲め、人員を送れと云ひ越せし由にて井街氏大に奔走しつゝありき。然し此天氣にては覺束なからん。夜十一時半就寢。買物なし。恩地剛太郎氏より受便す。（插畫一葉略す。）

六月一日。火。雨天。朝六時半起床、出校す。化學は質問なりき。此頃 Sartor Resartus の講義益々佳境に入り、人をして聳耳張目思はず快を呼ばしむるもの多し。殊に其所論大に佛教(殊に禪學)に酷似せる所ありて、此人佛書を讀みしにあらざるかの感を抱かしむる事極めて多しとす。國の東西を問はず眞理は同一點に歸する所見る可く、又世の古今を問はず正當なる人心が同一方向に向つて走るを見ば、吾人は轉た各自佛と同じく Carlyle と同じく或る一大眞理を grasp する事を得るならんと考ふ。午後より明日行はる可き化學の試驗の復習をなす。夜十一時就寢。買物なし。日章會雜誌を送り來る。發便なし。

六月二日。水。天は晴れたれども風あり中々烈し。夜に至りて風雨となる。此日朝五時起床す。出校す。化學の試驗あり。其問題は次の如し。(問題略す。)

午後より中學校の運動會を見に行く。夜入浴す。十一時就寢。買物なし。受發便なし。

六月三日。木。晴天。朝五時五十分起床、參禪す。出校す。此日二時間目の休みには小學校の聯合運動を見る可く練兵場に至りぬ。運動既に酣なり。紅白の旗は天に飄り群童輕衣を裝うて轉々相樂む。其數幾百と云ふを知らず。game 二三を見終つて歸路に就く。然るに漢學の時間に及びても尚未だ歸らざるものあり、爲めに漢學は休業となれり。此日吉田講師休業なりしを以て新渡戶先生代りて Sartor Resartus を講ぜらる。午後再び新渡戶先生及び孝夫氏と共に馬車を驅りて運動會に至りこれを見る。夜十一時少し過ぎ就寢す。此夜雨降りぬ。買物なし。增田氏に發信す。

六月四日。金。晴天。朝六時半起床、出校す。別に記事なし。最初の二時間は博物場に至りて鳥の標本を見る。午後一寸散步す。夜十一時就寢。買物なし。家より受便す。松平恒雄氏に發信す。

六月五日。土。晴天。夜に至りて風出づ。朝六時十分前起床、參禪す。然るに今日は無かりければ中島遊園地の方を散步す。此日の倫理は我が新渡戶先生に演舌せられん事を乞ひしものにて、其題目は運動に就きてなりき。此事の委細は學藝會雜誌に投稿せんと欲すれば今更めて贅せず。午後散步す。夜十二時就寢す。買物なし。增田氏より受便す。新渡戶先生より七圓受取る。

六月六日。日。朝、七時起床。朝、新渡戸先生の Bible Class あり。此日晴天なりき。午後より小谷氏と共に諸所を散歩す。夜、中央寺に參禪す。夜十一時就寢。買物なし。『太陽』を送り來る。又輔仁會雜誌を送り來る。

六月七日。月。曇天。朝六時起床。參禪す。午後外出せず。夜十二時就寢。大島先生當直。四十二錢曾費及び雜誌代、十錢 German grammar.

六月八日。火。晴天。朝六時半起床、出校す。別に記事なし。午後より明日の獨逸語試驗の復習をなす。夜十二時就寢。四錢、郵便切手。滑田氏より受便す。

六月九日。水。晴天。朝五時半起床、出校す。獨逸語の試驗あり。午後終日讀書す。夜に至り原田氏、幹氏等と共に大黑座に佛教徒印度饑饉救濟幻燈會を見る。氣にくはぬ事甚だ多し。憐む可し佛教徒其手段に於て在昔の舊法を墨守す、必ずや耶教徒の蹂躙する所とならん。しかも其光明や何日の世にか炳然として宇内に發揮するの時ある可きなり。到底今日所謂碌々たる佛教徒が行へる方便は上策にあらず。恐らくは下策の甚しきものなり。特に僧侶の腐敗の如きは手近かに於て矯正せざる可からざる急務にてあるなり。又其教理を衆庶をして玩味せしむるが如き方便は、必ずや日蓮以外親鸞以外 Sabonarom, Luther にも卓越せる偉人を待たざる可からず。嗚呼此人何の時にか出でゝ彼の惡弊を洗滌し釋尊が本來の光明を充分に發揮して三界の情非情を濟度するを得ん。夜十一時就寢。買物なし。七圓食料。二條氏より受便す。

六月十日。木。朝七時起床、出校す。此日天氣甚だ晴朗なりき。中途の二時間は休業なりしを以て大に運動場に野球戲を戰はせたり。午後晝飯を喫し終りし時、伊藤清三氏散歩せずやとて余を誘引せらる。余直に快く之れを諾し、共に悠行して丸山に至り園池に至りて獨木舟に乘る。景物幽邃得て名狀す可からず。誠に人寰去つて遠きの地は此所なんめり。遊ぶこと少時舟を捨てゝ字十二間に出でんとし荊棘、茅茨腰に至るの間を簌々の音をなさしめて過ぐる事殆んど三四丁、辛うじて田畝の處に出づ。出づれば遙かなる北方一山倒盆の如きあり。孑然少なりと雖も以て遠近の景を矚觀するに足る可しとなす。卽ち相共に手を携へて登る。渰嶂汎鬱遠くは石狩の海岸藍の如きを望み、近くは札幌の市街箱庭の如きを見る。雲雀の囀遙かに

聞えて飛燕輕々我が眉を摩して飛ぶ。快誠に窮りなし。伊藤卽ち獨逸の詩を口吟む、Schiller 作る所の Hoffnung の詩なり。吟じ終りて我に其意を傳ふる甚だ切。嗚呼君一年級の學生として詩を暗記すること此の如きに至るは勉强の篤きによらずんば焉ぞ此に至らん。休憩少時、涼風陣々膚粟せんと欲す。卽ち辭して琴似を出で兵村を經て札幌に歸る、此遊快實に窮りなし、心合ひたる友と共に遊ぶより快なるはなかる可し。夜十一時就寢。買物なし。發信受信なし。

六月十一日。金。晴天。風强し。朝六時十五分前起床、參禪したりしに休みなりしかば木村氏を訪ひ、相共に胸襟を展きて語る。午後外出せず。夜十一時半就寢。買物なし。受發便なし。

六月十二日。土。曇天、風强し。朝七時起床、出校す。此日永田講師は休業なりき。新渡戶先生の倫理は此日を以て全く終りとなる事なれば先生も充分なる熱誠を以て演說せられたり。其大體に曰く、今日 Composition の練習の時に或る人が云ひし如く wonder といふ事に二種ありと云へるは、一個の理由あれども余が思ふ所にては未だ數多く區分するを得可し。然れども要するに wondar は wonder なり。世間往々驚く可からざるに驚くものあり。驚く可きに驚かざるものあり。何れにせよ wonder なる事は人間が進步をなす階級なりとは學者も云ふ所なれども wonder なき人は既に perfect なる人間の域に達したりとの說も眞なる可し。但し wonder なき人たるに二種あり。一は wonder するの力なき人、例へば野蠻人最も幼稚なる小兒等これなり。一は大なる眞理を grasp せるものにして如何なる人間的の大事に遇ふも平然として其本末を解するもの是なり。これ寧ろ異數と云はざる可からず。吾人は未だ到底此の如き地位にあるものにあらざればとて野蠻人幼兒の如き低度にあるものにあらず。所謂其中間の盛に wonder の爲めに左思右考するの時代なるは何人も肯んずる所なる可し。然れども濫りに wonder して笑を他人に遺す事なかれ。其最も見悄くして其人の價値の知らるゝものは、人の顏を wonder する事これなり。再言すれば少しく己れより高き位地等にある人を見れば盲從的に頓首再拜し、其人の前に於ては、手の置き所も知らぬ迄どぎまぎして、終に云はんと欲する事をも云はずして止む事これなり。實に見悄き極みと云ふ可し。勿論自分より位地高き人なれば、其人の位地に對して(人物の如何を問はず)相應の敬意を表さゞる可からずと雖も、しかも何の恐るゝ所あり

て逡巡言を爲す能はずして止まんや。これ後來社會に於て事を爲さんとする人の最も駐心す可き事にあらずや。而して此弊は何より起り來るか、一は己れの足らざる所あるを隱蔽せんとするの餘、かれを云はゞ人より見下げられん、これを申さば他人よりさげすまれんとこれのみを心配するを以て、遂に言語に滯りを生ずるなり。何ぞ光風霽月赤裸々の談話を試みざる。男子らしく云はんと欲する所は云へ、何ぞ敢て己れの缺點をしかく隱蔽するの要あらんや。呉々も人の顏に wonder すると云ふ事は、固く禁ぜざる可からず。我嘗て我が故郷に歸りし時、父老我に語りて曰く、君が尊大人は德なる人なりしよ、物に驚くと云ふ事のなかりければなりと。我これを聞きて頻に奇異の思ひをなす、其言の眞味あるが如きを覺えたりしが、他日叔父に見えし時、此談をなせしに、叔父曰く、洵に君が大人は常に物に驚かぬ精神を養はんとて河心に伏延せる松枝の上に眠りき。而して其一度權衡を失するや遽然水中に沒す。恐懼輾轉からく又陸上に昇り事を再びする前の如し。此の如き事甚だ久しかりき。思ふに大人必ずやこれに得る所多かりしならんと。我これを聞きて感に堪へざるものありき。我は諸君に此の如くせよと勸むるものに非ずと雖も、何れにせよ物に動ぜぬ心は充分に養はれたし。

これ先生が最後の講演にてあるなり。余年少父に侍して家にあるの時常に父を恐懼し、尊父をして此兒爲すなしと迄のたまはせたる事ありき。其後も常々これを矯めんとするの心ありしも遂によくなす能はず。今日再び此講演を聞きて又尊父の訓諭を承はるが如し。以後益これを旃れ勉めん。

午後豫科一同教授と共に撮影をなす。歸宇後散歩す。歸途坂本様を訪ふ。夜十二時就寢。十錢、郵便切手。家、増田氏に發信す。二條氏に寫眞を送る。

六月十三日。日。曇天、午後より雨降る。朝六時起床。朝參禪す。又新渡戸先生の所に於て Bible Class ありしが將に終らんとするに至り突然同窓倶樂部の方に當つて火を失し、爆聲甚だ盛なり。此に於て Class は休となり余等は大に消防に盡力せしが、幸にして二軒計り燒けて止みにき。危き事なりし。午後二時學校に集り昨日の寫眞はやりそこなひたれば、今日寫し直したり。それより夕方に至り乘馬す。夜十一時就寢。買物なし。受便發信なし。

六月十四日。月。雨天。朝五時半起床。此日新渡戶先生ハーツホーン夫人を迎へんが爲め小樽に出發せらる。又八時二十分の汽車にて大島氏は東京に出張せらる。これを停車場に送る。それより出校せしに此日一日は休業となれり。よりて佐藤政二郎及び瀧の二氏と半澤氏を訪ひ談書に及びて家に歸る。午後より一寸散步す。夜十時就寢。三十錢、本代。受信發便なし。

六月十五日。火。曇天。朝六時十五分前起床。參禪せしに休みなりき。此日は札幌神社大祭に付、農學校も休課となれり。午前には增山氏來訪し四方山の話をして歸る。午後余增山氏を訪ひ、暫く談話し、共に携へて半澤氏を訪ひしに不在なりしかば又共に中島遊園地に至り競馬を見る。それより坂本氏に至りて種々馳走に與り八時頃歸宅す。此日增山氏と種々の事を談ず。氏は中々 foundation 固きが如し。所論皆緊要に當る。氏は絕對なる基督信者なり。頃日漸く神を認むるを得たるの事實を說く、誠に赤心の迸れるを見る。而して頻りに余に勸むるに、此教を硏究せん事を以てす。余感謝に堪へずと雖も聊か思ふ所あるを以て然諾の語を爲す能はざりき。君や殆ど正當の士に近からん。しかも其行爲の未だ active に至らざるを憾とす。此日大祭の景況は中々の盛事にして市中軒頭に造花提灯を揭出し、扇影衣香項背相望み雜閙云ふ可らず。余增山氏と其塵埃の間に在りて共に眞理を語る赤心に快きものあり。龍雄の所謂、撲面紅塵豈譏余、人間到處有淸廬の句も思ひ出されぬ。身正道を踏めば友求めずして至る。余此頃甚だ此感あり。嚮きに伊藤氏と交るを得、今又增山氏の來るあり。余の行爲未だ正道に就きしや否やを知らずと雖も、余の心志正道を行はんとするに在りしに二氏等の認むる所となりしならんか、喜びに堪へず。余は益〻心志を勵まして溷濁なる社會の大渦流を溯る可きなり。しかも中途にして斃れなば止みなんのみ。十一時半就寢。買物なし。家より『太陽』送り來る。

六月十六日。水。晴天。朝六時半起床、出校す。朝の二時間は休業となりしを以て同級の人等と共に近邊を散步す。午後片岡氏を其寓に訪ふ。それより辭し歸りて、龍岡様を旭館に訪ひ夕刻歸宅して乘馬す。夜、寺師様より受便す。其書に今日午後六時より豐平館に於て會食したしとの事なりき。卽ち行けば龍岡様も既に在り。種々心得となる可き談話を傍聽しぬ。九時半歸宅す。十時半就寢。買物なし。受信發便なし。

六月十七日。木。晴天。午後より風出づ。朝六時起床、寺は休みならんと察して參禪せず出校す。別に記事なし。夜に至りて龍幽樣を旭館に訪ひつゝありしに坂本書記官、及び寺師氏も來られ種々話等ありき。余の土地の事に就きても有益なる教示を垂れ給へり。夜十時半就寢す。買物なし。家に發信す。

六月十八日。金。晴天。朝六時十五分前起床。此日寺師氏歸京の途に就かるゝを以て午前六時三十分發の小樽行きの汽車なりしかば、これを停車場に送る。それより出校す。動物は休業、其他別に記事なし。午後一寸の運動をもなさず。此頃少し胃の惡き故か、夜に至つては甚だ眠たし。十一時就寢す。買物なし。受便發信なし。

六月十九日。土。晴天、午後より曇る。朝六時起床、參禪す。朝食後增山氏を訪ひ漢文の研究をなす。午後も亦至る。又武林に至り時任、關山二氏の送別につきての寫眞を爲す。此日增山氏と種々の談話をなし、大に益したる所ありしが如かりき。夜十一時半就寢。買物なし。寫眞代 30。增田氏より受信す。

六月二十日。日。晴天、夜に至つて雨降る。朝六時十五分起床。Bible Class あり聽聞す。午後より市中を散步し又乘馬す。夜に至つて中央寺に至りしに此日住職は不在なりしかば蠣崎氏の所に至りて English の研究を爲す。夜十一時半就寢。二條氏、恩地氏より受信す。有島健助氏に發信す。二十三錢三厘、紙類。六錢五厘、國民の友。

六月二十一日。月。朝六時起床、雨天、此日朝より增山氏の所に至り渡邊氏と共に英語の復習を爲す。午後より佐藤氏も來りて共に爲す。別に記事なし。夜十一時半就寢。買物なし。受信なし、發便なし。

六月二十二日。火。曇天。朝五時四十分起床。此日出校し新渡戶教授に英語の質問をなす。午後伊藤淸三氏來る。尋で增山氏來りて散步せんと云はれしかば承諾して、伊藤氏と共に出立つ。伊藤氏は中途より農園に至るとて別れたり。それより創成川に添うて東皐園に至り牡丹を見る。紅白妍を競ひ媚を呈して今當に盛なり。地積甚だ廣く、雅客兩三、閑雅愛す可し。これより農園に至る。新緑萋々、牛馬其間に戲れ、牧草風に遇うて波の如き邊、學生、耒耜を取りて耕作に從ふを見る。其淸幽到底日本全國を擧ぐるも求む可らざるの好景色となす。此を辭して一寸鈴木貞吉氏を訪ひて家へ歸る。夕食後乘馬す。

夜十一時半就寢。買物なし。受發兩便なし。

六月二十三日。水。曇天。朝六時半起床。此日本院休業。朝の内は英語等の復習をなす。午後より一寸散歩し夜に至りて増山氏と鈴木眞吉氏の家に會し、漢文の preparation をなす。夜十一時五十分就寢。買物なし。受發兩便なし。

六月二十四日。木。曇天。朝七時少し前起床。此日より第三學期試驗は始るなり、此日は漢文なりき。此日余の留守中龍岡氏訪問せられし由なりしかば、夕刻其の宿舍を尋ねしに既に函館に立たれしとの事なりき。夜十一時十分過就寢す。買物なし。受便發信なし。

六月二十五日。金。曇天。朝六時十分前起床。此日朝六時三十分の汽車を以て Read 殿神戸の方へ遊行せらるゝに付き、停車場までこれを送る。此日の試驗は小寺先生の動物なりき。(試驗問題略す。)

學校より歸來して乘馬す。午後、明日の下稽古なる英語の復習をなす。十時半就寢。買物なし。松平恒雄氏より校友會雜誌を受け、上野西郎氏より受信す。

六月二十六日。土。曇天。朝六時半起床。此日の試驗は英語なりき(試驗問題略す)。

午後より片岡の御隱居を訪問し、それより坂本氏に至り夕刻家に歸り、夜新渡戸先生と談話をなし十二時就寢。八十九錢、寫眞代。十錢、郵便切手。松平恒雄氏及び大島先生より受信す。家及び恩地氏に發信す。

六月二十七日。晴天。朝は暇乞ひの爲めに、原田氏鈴木氏を訪ひ又伊藤氏を寄宿舍に尋ねしも居らざりしかば、佐藤校長を訪問し暫時談話の後湯地氏を訪ひしも不在なりしかば子息と談話し家に歸る。午後より出發の用意をなす。夜十一時就寢。六十九錢、脚絆。受便なし。

六月二十八日。此日より愈ゝ出立するなり。新渡戸先生始め皆々に暇乞ひして家を打立ち八時二十分の汽車に乘る。此行は余の外に星野勇三、早川万一、井街顯、瀧臣弼の四人も共なりき。同窓の諸子は態々停車場迄送り來らる。かくて車は停車場を後にして遂に室蘭に着く、時に夕陽既に沒せんとするの時にして宿所に着きしの時は既に點燈の時なりき。即ち夕食

をなし八時汽船に搭ず。十一時出發す。此夜船中悪暑堪へ難く心頭眠るに易からず(二十九日)殆ど一夜を不眠に明し、函館に着く。午前は仝旅舍に憩ひ、午後出でゝ公園に至り名物の櫻餅を食ひ、又赤井氏を訪ふ。同氏大に喜び余等を誘ひて、立待の崎に至る、これ函館市の南端にある處、山脚矗然として海中に突入し、突入する處、波濤澎湃として亂礁劍戟の如し。遙かに眦を南方に決すれば本島の諸山隱々として靑を凝らし綠を走らす。氣宇宏濶、巖頭に立ちて來去の波濤に胸襟を洗へば以て悉く俗塵を盡くすに足る。既にして此景を辭し、赤井氏と別れて龍岡區長を其家に訪ふ。氏余を其室に招き種々の談をなす。夕食の饗應に與り辭して船に乘る。此夜十二時出帆す。天空全く霽れて星斗砂よりも多く、船の去る處、暗潮の外北海の大陸大鯨の如く横はるを見る。

六月三十日。朝七時、靑森に着く。朝霧模糊として四邊一色なり。船を捨てゝ旅舍に入り、湯に浴して此處を發し汽車に乘る。千篇一律の景なるも內島の景亦甚だ喜ぶ可きものあり。車窓に倚りて行く〱夕に達す。十二時仙臺に着く。井街氏の家に至り一泊す。(寫生畫一葉略す。)

七月一日。雨天。朝、瀧氏と共に仙臺を見物す。晝後二條氏を訪ふ。二條氏は明日歸ると云はれたり。夜十一時就寢。二十錢、筆代。

七月二日。雨天。碌々として終日家にあり。五錢、散髪代。二十五錢、時計鎖。

七月三日。雨天。此日朝家にあり。午後より伊藤氏訪問せらる。共に家を出でゝ第二高等學校を見、雨に逢うて同氏の家にこれを避く。氏よく兄君に類す。質直勉耐の風見る可し。嗚呼二兄弟健羨す可きかな。夕刻寛氏を其家に訪ふ。談十時を過ごして同氏と共に家に歸り夜十二時の汽車に乘ず。共に行くもの二人。星野氏、瀧氏これなり。

七月四日。快晴、一時上野停車場に着く。増田、二條、北條、上野、箕田、恩地、有島健助、壬生、隆三、英夫等の人々皆迎ひに來らる。好意謝するに辭なし。家に歸れば父上母上を初め一家皆欣々として亦我を迎ふ。此夜諸友皆會す。談十時半に至り皆辭し去るに及んで寢に就く。買物なし。

七月五日。曇天。朝六時過ぎ起床、種々の人々來らる。此日一日種々の談話等をなす。夜十一時就寢。

七月六日。雨天。朝六時十分過ぎ起床。朝學習院に至りて舊同窓の人に遇ふ。それより河野氏に至りて義夫君等の話をなし晝食の馳走となりて白鳥先生を其邸に訪ひ、夕刻に及んで辭して大島氏を錦町三丁目の峽陽館に送る。

七月七日。曇天。朝六時半起床。朝より安藤氏及び佐藤氏を訪問す。そして佐藤樣に於て午食の馳走になれり。晝後家に歸りしも少しく心持惡かりしかば外出せずして休む。夕食後より增田氏を訪ひ談十時に至る。共に一年相含む所を語る。余君と交る未だ一歲左右なりと雖も既に互に相親まんとするの情や切なり。此日種々の忠告を得たり。而して余が home に對する觀念に於て始めて心配を感ぜしも、實に此時に在つて存するなり。そは弟壬生馬其外が學習院に入つてよりの擧動なり。余は歸京後學習院の學生を見るに、多くは優柔不斷にして輕薄極れるもの多く、或るものゝ如きは人をして嘔吐を催さしむる事あり。此間に處して我が行ふ所を謬らざるものは定見あるものと雖も難ずる所、況んや壬生馬の如く倨傲他人を無みするものに於てをや。つらつら彼の擧動を見るに浮々泛々人の甘言に乘りて、事物の分別を知らず。殆んど流行書生の風に倣ふに庶幾からんとす。而して隆三、英夫亦其惡風に染まんとするの狀あり。歎ず可きの至りにあらずや。我れこれを思はざるに非ざりしも、今夜增田兄の忠告を聞くに及んで益々感慨する處深し。此夏季休業の間に矯正する處なかる可からず。夜十一時就寢。買物なし。受便發便なし。

七月八日。雨天。朝七時起床。大學病院に至りて森廣氏に面晤し、お仲さんよりの土產物を渡し、それより第一高等學校に至り吉田氏に遇うて伊藤淸三君よりの依賴物を渡さんとせしも、折惡く其日は卒業證書授與式なりしかば面會する事を得ず、小使に託して神田に至り大島氏に面會せんとせしも、不在なりしかば荷物丈け其家に預け置きて家に歸れり。晝後より松平恒雄氏及び二條友英の兩氏來らる。久し振りの面會なれば何となくなつかしき心地せり。それより日章會の例會に出席し、夕刻より二條氏を訪ひたりしに恒雄氏も在宅なりしかば、此に會話は開かれて充分の快味を盡して家に歸れり。夜十二時半就寢。十五錢、會費。受信なし。小谷氏に發信す。

七月九日。曇天。朝七時起床。朝より增田氏來らる。此日は或る一部の人（恩地兄弟、箕田、內藤、北條、上野の諸子）の爲めに親睦會を開かるゝが故に十二社に至りしなり。新宿迄汽車にて行きそれより步行して十二社に至り二階に上りて待つ。午後に至りて諸子來る。酒肴直ちに出て献酬始る。旣にして亂舞始り、踏舞始り、快を盡す多かりしも、余は心に於て樂む所なかりき。夜九時過ぎ辭して停車場に至り、汽車に乘じて家に歸れり。夜十一時過就寢。買物なし。小谷氏より受使す。

七月十日。午前午後は曇天、晝頃は霽る。朝七時起床。朝食後增田氏と共に飯田町停車場に至り本鄉の元町迄同道して此處に別れ、余は高等學校に至りて松平恒雄氏を訪ふ。又吉田熊次氏に面會せり。旣にして晝食の御馳走になりて暫くせる中、鹽谷溫氏も歸來せられしかば、共に談話する事少刻、辭して家に歸る。夜恩地、增田、上野、內藤等の諸氏と大久保公の公園の方を散步す。夜恩地氏に至り、殿下の傅木村氏に面會す。十五錢、インキ鉛筆其他。井街氏に發使す。小谷氏より報知し越したる試驗成績次の如し。

第三學期成績

化學八〇、數學八六、英語八五、漢文九六、五、獨逸八三、動物九〇、Ave. 八六・五、席次八番

學年成績

化學七三・五、數學八八、英語七七・四、漢文九一、獨逸八〇・三、動物八六・七、Ave 八二・五、席次十四番

余は元より試驗勉强の不可を知る。又元より試驗點の賴む可らざるを知る。一層大にして云へば余は學術は唯單なる處世の一方便に過ぎざるを知る。しかも其點此の如く卑しきを見ては大に慨せざるを得ず。余が平生學問の硏究に於て足らざる處ありしを徵するに足れり。

七月十一日。晴天、非常に暑し。朝六時起床。七時頃より增田氏と共に內村鑑三氏を靑山の寓に訪ふ。先生快く余等を其室に招く。室は階上にあり、二房より成る。壁に一幅の額なく床に半點の飾なし。先づ君が平生を知るに足る。君此時横臥して書を讀みつゝありしと覺しく毛布と一册の洋書は座隅に狼藉し、机上には幾多の廢紙書册積んで山の如きを示す。余等先づ

丁寧に禮し終りて徐に話頭を開かんと欲す。余等元より君に問の期する所なきものゝ如し。故に談話路圓滑に行かずして往往默處を開くが如し。既にして君が得意の惡口的といふが如き口調は初りぬ。しかも一點の誠心人をして虹の如くにしたり。或は教育を罵る等甚だ快なりき。夜十二時就寢。

七月十二日。雨天。朝七時起床。晝、星野氏と共に芳賀氏を其寓に訪ふ。談笑少時芳賀氏と携へて出て途にて別れて家に歸る。此日二條、水野の兩氏來られて、此度親睦會を開かん事を云はる。余も大に之を賛し發起人となりて奔走せん事を約す。夜十一時半就寢。

七月十三日。雨天。朝七時起床。四谷より車に乘りて小崎氏を訪ひ、今日の來會を乞はんとせしに、同氏は不幸にして日光に遊べる折なりしかば、乍殘念猛彥氏と暫く談話の末、空しく歸途に就けり。夜に至りて赤城清風亭に參會す。會するもの十一人、松平兄弟、鷹谷、赤松、北村、二條、大津、小原、水野等なりき。久濶の情流露して杯盤の外に溢れ互に歡を盡くす充分にして十一時散會し歸家す。四十五錢車代、三十五錢會費。

七月十六日。曇天。此日凉し。朝六時起床。午前の中一寸增田氏を訪ふ（蓋し今日を以て君歸省の途に就くが故なり）。暫くにして辭し歸り、余も亦橫濱に行かんと欲せしかば荷物を調へて再び日吉館を訪ひ相携へて停車場に至り汽車に搭ず。余が歸京の日を、去る冬より待ち佗び長く北天を望みて余を待てりし君今や又已むなき歸省の運に接す。君と共に語りしの日心意怡然胸腹全く合す。然るに君將に西方三百里の地に去らんと欲す。豈涕泣の面を濕すなからんや。相互纒綿の情止み難き處あり。共に淚を揮うて別る。余は橫濱より下車して山の手に到りお仲さんよりの賴まれ事をなす。三時頃歸宅せしも別に愉快なる事もなければ京橋通りを散步す。夜十二時就寢。二圓母上より。四〇錢、汽車代。十四錢、車代。八錢、氷水代。

七月十七日。曇天。朝六時半起床。此日終日家にあり、夕刻より南鄕三郎氏を其家に訪ひしも不在なりしかば歸り來りしに夜に至りて同氏來らる。談九時を過して歸途に就かる。此日二人の談愉快なるもの多かりき。夜十時半就寢。二十三錢、外國語學雜誌。井街顯及び伊藤清藏氏より受信す。

七月十八日。曇天。過涼却つて寒を覺ゆ。朝六時半起床。午前は家にあり午後より父上、上野、岩永、隆三、英夫等の諸子と共に赤坂臺町に購求す可き屋敷地に至りて測量をなす。歸り來りて晝寢をなす。夜北村氏來る。談十時を過して歸らる。十一時半就寢。買物なし。受便發信なし。

七月十九日。曇天。朝七時起床、此日午前恩地氏來訪せらる。種々談話の末午後より上野に遊ぶを約し共に發す。先づ是眞翁追善の畫會を見る。君が生前の名幅堵の如くにして應接に暇あらず。畫皆一種の風骨ありて手腕甚だ枯れたりと雖も、惜む可し時に俗氣の厭ふ可きあるを。しかも君が明治の大家として横行濶歩するに於て毫も缺くる所あらざるなり。謝して此を出て旅順口のパノラマを見る。これ大阪の畫工某々二人が作る所にかゝると云ふ、拙劣殆んど見るに足らず。匆々にして去つて動物園に至りしに折悪しく休みなりしかば傍の茶店に入り氷塊を嚼めば涼風腋下に起る心地す。少憩の後油畫彫刻展覽會に入りて、之れを見る。先づ墨畫あり、精神をして爽ならしむ。次で水彩畫あり、渡邊文三郎氏の瀟洒、樋口艶之助氏が精緻感ず可しと雖も、我は好まず。寧ろ宗之助氏が豪放を多とせずんばあらず。油繪の部に入りて淺井忠氏の總房の風光あり。さすが老大家の筆路だけありて他の碌々子が錦繪的の拙作に比して頭角を顯せる事幾倍。彼等未だ企て及ばずと云ふ可し。次に審也氏の西行及び俊寛の二像よく筆路を老師の手腕に擬して人物の按排別に一機軸を出す。兩々相映發して場裡の偉觀なるも、余は寧ろ俊寛の瘠容を取らんかな。之れに次ぎて最も人目を牽きしものは、水交社出品の黄海々戰の油繪四面なり。これ其筆路に於て勝れるにあらず、唯其面の偉大なると、事征淸の擧に係るとに依るならんか。他に取る可きなし。此外別に云ふ可きものなし。參考品の部に至りては西德次郎氏が出品にかゝる露國南方の一港の風景畫あり。頗る美麗なる描き方、しかも風致を害せずして人をして快からしむるに足る。他は殆ど古畫及び古畫の摸寫なり。裸體畫多かりしも余等にはよく分らず。然し棚橋夫人が摸寫の手際には驚くの外なし。館を出てより飯田町迄歩し、此より汽車に搭じて家に歸る。此日下痢せり。蓋し醫師の劑を施せるに依る。夜十時就寢。

七月二十日。六時半起床。此日朝入浴す。父上一時四十分の汽車を以て京都に出發し給ふ。午後より余の體溫著しく昇騰

し三十九度に昇れり。依つて寢に就く。度々下痢す。これと共に痔を起し、一時は大に困難せり。一日床中に呻吟す。

七月二十一日。 此日朝より鎌倉に出發する事に定む。行李匇々三弟と書生奥園婢一人とを伴ひ、一時四十分の汽車を以て出で、鎌倉に着し、余も亦歩して家に着く。然るに其夜夜食を終へて再び床上に復らんとせしに忽ち精神混亂して又奈何ともは可らず。暫く仰臥したる儘昏する如くなりしが、漸くにして人事を省せり。其後何事もなかりしを婢等は大に心配して勝見氏を呼びにやると云ふ故、其意に任せしに、氏來りて診察し一時腦貧血を起したるものなりと云はれたり。

七月二十二日。 快晴。朝六時起床。此日一日は猶床中にあり。通事なし。碌々として爲すあるなし。唯此小桃源、見渡せば光明寺の諸山翠を凝らして海光に映發し、海光時に陣風に搖ぎて光、亂松を渡るとき靑松又徐々に琴瑟を鼓して靜籟颯々として檐端に落つ。胸襟自ら開け又華都の塵埃を止めず。心自ら澄みて讀書の念勃如たり。夕に及びて海邊を逍遙す。風光依然稻村ヶ崎、湯島の鼻白砂の環端を扼して波白き邊、夕陽半天を紅にして行雲奇體を極め、遊客兩三暮靄を喫して鱗介を漁る。欸乃の歌、靑嵐の聲、共にこれ避暑の好侶伴。夕刻一浴して淸風に對し書を閱する暫時にして寢に就く。夢結んで未だ覺めざるに曉光の戶隙を漏るゝに遇ふ。

七月二十三日。 朝六時起床。朝讀書しつゝありしに勝見氏見舞はる。早や別に憂ふ可きなしと云ひて歸らる。後暫くを經て杉出一貫氏來る。大に喜びこれを座に招じて以て久濶を語る。既にして突然星野、芳賀の二氏來る。卽ち此人等と共に夕刻海岸を散步し、長谷に出で、鎌倉權五郎の祉に詣でゝ歸る。夜高談數刻、遂に悠然として寢に就く。時に夜十時半。

七月二十四日。 快晴。朝六時半起床。朝食後朋友(昨夜より家に在る)三人と共に鎌倉見物をなす。先づ長谷寺に詣でゝ三丈三寸の觀音を見、大佛に至りて其胎內に入り庭園を散步して綠翠を喫し、悠々の樂をなして凉風に送られつゝ門外に出で龜谷の溫泉を經て、建長寺に至り少憩の後八幡に出で、靜が舞樂せし若宮に古を忍び、白旗の祉に賴朝の昔を懷ひ、去つて賴朝の墓薇靑苔葛に滴らんとする所、大頭公の墓頭に一個の飯團を供して中食を終へ、島津公大江公の墓を見終りて大塔宮に詣で感慨止まざるもの多時、去つて材木座に出でゝ家に歸る。此時殆んど一時。午後より淸風に臥して四人讀書に餘念なく夕

刻に及べり。夜に至りて杉田氏家に歸る。余と星野氏これを停車場に送る。夜十時半就寢。十錢、かつをの佃煮。十四錢、茶代。四錢、大佛の入費。十錢、大塔宮に於て。原金より四十錢引出す。

七月二十五日。快晴。朝六時起床。此日星野、芳賀の二氏、江の島見物に行きたれば、獨臥榻に倚りて蘇峰氏の『天然と人』、『文學斷片』、『唐詩選』等を亂讀す。蘇峰氏の文淸楚透徹、蓋し君の文は涼風の如し。寧ろ熱氣蒸々たる夏季に讀むに堪へたり。『唐詩選』に至りては一語一言皆金玉ならざるなく、之を地に抛てば鏘々の聲を爲さんと欲す。亦以て消涼の劑に充つ可し。幾度誦するも飽かざるは、洛陽城頭桃李花云々と云へる好詩篇なり。又李白の諸作の如きは復誦これを幾度するも終に興の索然たるを覺えず。又恩地氏より借り來る所の講話筆記を見る。こは同君嚴父君の講せし所、即ち臺灣戰爭の記事なり。事北白川宮殿下に渉る所壯絶快絕亦涕下らんとする事あり。夕刻に至りて星野、芳賀二氏歸來す。夜種々の談話をなし、十一時頃寢に就く。買物なし。增田氏、內藤氏に發信す。

七月二十六日。朝六時半起床。此日も實に稀有の快晴なりき。此日星野、芳賀氏歸京せらる。余これを停車場に送り、又恩地氏の來られしを迎ふ。晝前は共に相談り午後より光明寺に至りて base ball をなし、快なりき。夕食後恩地氏と共に海岸を散步す。此日空光雲影比類す可からず。渺茫たる海波紫靄を曳きて、遙かに大島の雲煙を吐呑せるを見る。稻瀨川畔、活潑なる幼兒四五野球を弄するを見る。野球の一弊は心なき可憐の童兒をも不測の怪窟に誘引すと雖も亦其活潑なる動作は余をして又十年前の惡戯兒たらしめんと欲す。夜九時半就寢。買物なし。家より受便す。

七月二十七日。朝六時半起床。快晴。八時半頃恩地氏と共に海岸に至りしに、昨日の人々又此處に會せり。即ち又 base ball をなす。それより其人々の持ち來りし boat に乘る。午後同氏と共に海岸を散步して大村氏の別莊のある所の下に至る。それより逗子一帶の眺望甚だ絕佳なり。翠巒漸く遠く唯一髮の靑螺波上に搖曳せるが如きを見るのみ。それより家に於て弓を射る。恩地氏の態度、森嚴善く法に稱ふ。飛矢必ず方あり、其造詣驚く可し。夕食後君歸京せらる。余これを停車場迄送る。夜九時半就寢。買物なし。內藤貞一氏より受便す。

七月二十八日。快晴。朝六時半起床、午前は外出せず。午後より海岸に至りて base ball をなす。それより稻瀨川の方迄散歩す、夜に至りて又海岸を散歩し、人の油繪を畫けるを見る。夜讀書す。十時就寢。此日雜録を造りて雜感を書す。夕刻箕田氏來る。金を貸せと云ひしかば三圓を貸す。買物なし。小谷氏に發信す。星野、芳賀、二條の諸氏より受便す。

七月二十九日。朝六時十分前起床。上野氏及び諸弟と共に大船に至り久邇宮殿下を奉送し、併せて恩地氏にも別離せんとせしに、時間を失して間に合はず。然るに後にこれを聞けば同殿下の御一行は御都合によりて、昨夜十時出發遊ばされしとの事なりき。新橋に着(但し余は上野氏等と別れて歸京の途に就けるなり)し、内藤貞一氏を訪ひしに氏折り好く在宅なりしかば、相談じて午後二時頃家に歸る。此日歸りし所以は乳母が余に會はんと云ひたればなり。歸宅匆々手紙を乳母に出す。夜九時半就寢す。三十二錢、汽車代。

七月三十日、朝六時半起床。此日朝乳母來る。彼の女の心事如何なりけん。流涕の双眸に交はるを見たり。余も亦殆ど泣かんとす。嗚呼余彼女と別るゝ既に十六年其間恍として夢の如し。彼女は此間無窮の落魄に遇ひ働きなき夫と共に三子を養うて今日に至りしなり。其心事如何なりけん。頃日の如きは夫笹子峠の隧道の工夫として彼處に在り。而して負傷す。彼女痛愛直に馳せてこれに赴くに金なし。纔かに彼處に至れば、夫の病纔かに癒えて己れ又病魔の犯す所となる。不幸の不幸、嗚呼又悲しからずや。而して去日心裡滿腔我に遇はんとするの情緒を齎らして京に歸る。我を見て愴然涙下るもの豈謝す可きにあらずや。余は此半日を彼女の手裡に置きぬ。彼女は我子よりも親しく余の飯を盛り余の爲めに垢を去りぬ。かくて晝食を喫して後余は農學校出身者在學者の懇親會に列せざるを得ざるを以て、乳母に久しき告別をなして市ヶ谷八幡内の鳳鳴館に至る。會するもの既に三十人左右、始め菅氏立ちて開會の主意と學生の心事とを滔々として先輩諸氏に告げ、農學校をして未來の北海大學たらしめんと極論し、拍手の内に席に歸る。これより先輩伊藤一隆氏、農學校創立當時の談話を試み人をして或は抱腹し、或は昂眉せしむ。吾人を益する事甚だ多し。これに尋いで先輩早川氏あり。巨大の體軀を以て屹立し(氏は農商務及び外務省の祕書官たり)、俗吏となるの資格を演ぜらる。要は學者とならざらんと欲する以上は學問にのみこれ依らず

して、釋然として別に立つ所なかる可からずと云ふにありき。終りてトマト出で茶菓出で酒肴出ですし出で、各々喜びを盡して歸途に就く。夜十時就寢。懇親會々費三十錢。恩地氏より受便す。

七月三十一日。朝六時十分前起床。昨日星野勇三氏と共に大隈大臣を訪問するを約せしかば、市ヶ谷の停車場より汽車に乘じて牛込に至り、以て星野氏の飯田町より來るに會し、共に早稻田に至りて面會を求めしに大臣少しく要用あるの故を以て謝されたり。依つて已むを得ず歸途に就きしに茲に犬養毅氏の家ありしかば、これに至りて面會を求めしに君未た寢たるの故を以て斷られたり。用事ありて斷らるゝはこれ已むを得ざる事故なれども寢たるを以て斷らるゝは、少しく不滿ならざる能はず。それより古本屋を漁りて、『紀行文集』を得たり。牛込に於て星野氏に別れ家に歸りしは九時半頃なりき。晝食を喫してより三時二十分の汽車に搭じて鎌倉に歸る。此夕鷹谷温及び二條友英の二氏來られ共に大磯に行かんと云はれたれ共、余は明日を約して斷れり。夜床中にありて西郎氏と胸襟を展きて相語る。汽車代、三十二錢。紀行文集、十三錢。汽車賃、往復二錢。（挿畫一葉略す。）

八月二日。朝七時起床。十一時十五分の汽車を以て弟壬生馬及び柳谷午郎氏と共に大津に向ふ。此處には松平恒雄氏及び二條友英氏あり。三時頃漸く着く。二條氏獨りあり、暫くして鷹谷温氏遊びに來り（一高の水泳部に在り）、恒雄氏も亦歸る。夕刻練兵場に至りて ball をなす。夜、恒雄氏の朋友澤山來り酒を飲みて遊ぶ。十八錢、汽車代。三十錢、人力車代。

八月三日。朝六時半起床。自習の後水泳場に至りて水泳を見る。それより二條氏と共に本部に至りてサバを買ひ來り、二人にてこれを料理せり。余自炊をなせし事はこれを始めとす。又魚を作りし事もこれを始めとす。快甚し。午後より一高生徒の西瓜奪（すゐくわとり）を見る。それより海岸の風景を寫眞し夕食後練兵場に至りて base ball をなす。買物なし。井術氏より受便す。

先日増田氏より送られたる新島先生の日記中の拔萃の語を左に掲ぐ。（英文略す。）

八月四日。快晴。朝六時半起床、直に海岸に至りて入浴す、忽ちにして氣宇壯快を覺ゆ。午前の間、恒雄氏と共に ball を爲す。午後寫生畫を彩色す。夕食後散歩す。此日炎熱燒くが如く殆んど座に堪へず、輾轉（てんてん）夜に至るも依然風死して海光動かず。

しかも片月嶺松を照す。淡く夕陽西郊に沒して半天の紅を擅まにす。風なしと雖も何ぞ關せん。一同九人悠々然として月下を歩む。藻煙地を罩めて茅屋遙かなるは朧ろに、近くは蚊遣火の赤きが見ゆ。宛然たる畫にして畫も亦及ばざらんとするものあり。適心無限、大津館を過ぎて村端の一氷店に入る。人既に充てり、皆蓋し余等と感を同うするもの。杯を傾くる三、終日の窄胸悉く開けまた暑熱の何ものたるを知らず。月に歩みて歸路に就き放吟高歌、本部に至りて加留多遊びをなし、連戰連敗墨顏に遍からんとして家に歸る。古伽藍寂として竹葉戰き、亂蛙嘈々として螢火遠近に飛ぶ。夜十時半就寢。井街氏より受便す。十錢、卷紙狀袋。

八月五日。晴天なりしも折々出づる雲は轉た遊子の心を痛ましめぬ。午前は悠々として家に在り。早朝及び晩夕入潮す。夜に至り高等學校本部に至る。此日本部の主人鯖魚の漁盛なるを以て、主人大に喜び酒を置きて宴を爲す。本部の委員を始め、諸生徒皆醉うて高談放歌喜び盡きざるもの丶如し。余は其無邪氣を喜ぶ。其自治の念を誤解して漁夫と共に樂むが如き愚をなすを悲まずんばあらざるなり。殊に夜深きに一群の生徒泥醉放歌して本部に來りしを本部の人亦之れを助けて囂々として夜中他人の宿舍等に亂入せしものあるなど、我は殆んど其愚を云ふに忍びざるなり。夜十一時就寢。四錢、甘酒。增田、家に發便す。家及び恩地、森本氏より受便。

八月六日。曇天。愈々明朝出發と定まり此送別會を開かんとの議起り鹽谷、長尾、沼田の三氏浦賀に至りて鷄と菜とを買ひ來り、余等家に在りてこれを料理す。夕刻に及びて準備全く整ふ。客來る。曰く長尾、沼田、飯尾、其外二三名、又余の弟壬生馬は其朋友三人を引きて來り、健啖强食、飯と爼と全く相盡きて後止む。其夜松平恒雄及び二條と共に自炊中の決算をなし、十二時半頃就寢す。

八月七日。曇天。朝六時半起床す。各結裝して歸りの用意をなし鹽谷良君と大分氏は滯在するに決す。昨夜晩く鈴木信太郎氏來大す、卽ち朝氏を其家に訪ふ。互に久濶を述ぶ。君依然たる態度を以て質朴人に交はり、例の如く快心せしむ。しかも余君と長談互に意を昴ぐるに暇なく、遂に辭して恒雄、英夫、二條の三氏と共に海岸を經て横須賀に出で、晝食をなして後

汽車に乘じて鎌倉に着き、此に英夫氏と別れて恒雄氏は腰越に向ひ、二條氏は別莊に歸り、余も亦莊に至る。至れば祖母君、行郎及び千村氏の隱居來りて在り。大に喜びて余を迎へ給ふ。西郎氏亦在り。此に home 的の快を得る半日。夜七時某分の汽車を以て辭して歸京の途に就く。二條氏同道、新橋に着すれば、雨沛然として至り、雷亦加はる。一圓十五錢五厘、自炊代、三十九錢、汽車代。二十錢、うなぎめし代。二十五錢、人力車代。

八月八日。晝前は晴、午後より曇り時々晴る。終日家に在り。午後より金次氏來訪。歸京してより初めての面會なれば互に相解けて談話す。夕食後松平恒雄氏を訪ふ。保男君も出で來り怡然として相樂む。旣にして水野、二條の諸氏來り明日より行かんとする木曾の道程を議す。余は初めよりこれを斷り、水野君は事情のために行く能はざるに至る。夜十時頃迄談話して家に歸る。

八月十一日。此日より齒の療治の爲め齒醫者に通ふ。此頃より暑氣大分烈し。

八月三十日。此日朝母上、壬生馬、隆三、英夫と共に東京を辭して黑田原に遊ぶ。此度は今日を在京の名殘と思へば、何となく殘り惜しき心地するも濫りなる心の習しなる可きや。しと／＼と降り出でし空に四谷より汽車に乘る。恩地剛、及び木村とて久邇宮殿下の傅なる人送り來らる。殊に恩地氏は久喜まで送らる。芳志謝するに辭なし。久喜にて恩地氏に別れてよりは心頓に淋しく感ぜられて、都の友も今にて目のあたり見るは終りなりなど思ふ。軈て着きぬ。先づ若松屋と云ふに至りて、別莊に移らんとす。然るに莊は未だ成らずと云ふ。日は暮れぬ。如何にせんとて人々思ひ迷ふ。漸く他人の別莊を借りて暫し此に居る事と定む。其夜雨蕭々として四邊寂寞、唯吟蟲の唧々として秋を報じ顏なるぞ一入の哀れなりき。

× × × × ×

かくて我は黑田原に親愛なる兩親（但し父上は愛子と共に後れて來られぬ）弟妹と幾日の喜ばしき日を送りぬ。或る時は我唯一人單鞋孤笻飄然として鹽原の嶮を探りし事ありき。又皆と近傍の梨果園に至りて梨果を味ひ、又十丁計りなる所の川原に遊びし事もありき。愛子が將に辷らんとせしも此時なりき。我等が汽車の後に來るに氣付かず線路を步し、父上愛子等をして

寒心せしめしも此時なりき。此の如き間には時に清澄なる温泉に浴して五體舒ぶる心地し、優々たる日は終に五日となりぬ。

九月五日。風は迷朦として檜滴時に聞え、遠樹濃霧の間にありて景物轉た慘憺。此日余は父上と共に愈々北海に向ふ事となりぬ。愛子及び弟は我等を停車場迄送りぬ。汽笛一聲我等が在りし荘の前を過ぐるとき旗を振つて我等を送れる諸弟を覽ぬ。かくて忽ちに見えずなりぬ。これ親愛に別れたる最後なり。しかも尙父上の在すあり。去年の北向に比して誠に心喜ぶ可きなり。しかも悲み終に止まざるは何ぞ。嗚呼我れ終に志屈したるか、何ぞ初めに勇にして後弱なるの此の如きや。丈夫不灑離別涙、我豈無用に泣かんや。天外萬里人途絶えたる絶域仍且つ志を抱いて此に在るものあらずや。唯北海のみ。地荒れ人稀れなりと雖もしかも皇土の內、此間に離合して婦女の涙をなさば何ぞ以て他日の困難に資せん。奮發せずんばある可からざるなり。かくて此夜仙臺に一泊しぬ。

別れ來し身はかつ〳〵に遠けれど何とて迫る心なるらん

など思ひ續けて寢ぬ。此夜夢に英夫大病となりて起居自由ならざるのみならず、既に藥石效なからんとするに、父死母死纔かに祖母と余のみ貧窮の間に彼を專心看護するの狀を見、看護しながら泣きし涙は尙枕邊に滂沱たるも、夢は遠く去つて余は父上の傍に孤燈と相對して早明け初むる曙鐘を聞きぬ。

九月六日。晴。此日松島を見んと父上の宣ふに早朝より裝束して旗亭を出で、汽車に乘じて鹽釜に出で少憩の後船を傭ひ、行厨を命じ準備全きに及んで卽ち發す。曲浦波靜かにして漁歌遠近に聞え、顧れば鹽釜一帶の山、靑を凝らし翠を滴らし半腹鹽釜神社を望む所亦佳景となすに足る。既にして一島を得、これ辨天島なり。これを松島八百八島の第一島となす。舟行進むに從つて、岬屈し峽出で、島顯れ舟隱れ、指呼に暇あらず。櫓聲轆く馬放島に達す。往昔、鹽釜神社の神馬を此に養ふ所なりと云ふ。眺望甚だ佳、遠嶼近島皆掌上に朝す。歩みて下る。稻田豆畑數頃あり。これ飼人の住とせし所なりと云ふ。嗚呼此に住むの人何年の齡を保たんとするか。山靑く水白きあたり風瑟々として仙境の聲あり。山上より下瞰する所一大池あり。列島これが堤となり、其缺環は卽ち石を積んでこれに充つ。これまた既往鯛を飼ひし所なりと云ふ。

世を捨てん心は更にあらねども住まくほしき島の影かな

更に舟を艤して又發し行々材木島の横材に似たる、汐手汐島の以て清流に嗽ぐ可きが如き、兎島の兎の如き、其外太鼓、ツヾミ、鍋、涅槃等の諸島皆名に適ひたるものを見盡して、都島、十二妃島の都めきたるを過ぐ。

波風も立たであらまし都島國のしづめの名とし思へば

かくて又鎧島、鞍掛島、兜島、鐙島等の嚴めしきを過ぎて扇谷に着く。海水深く曲入して兩山立つが如く、山の相遇ふ所、達摩堂あり。父上と共に登る。道甚だ夷ならず。父上屢〻なやみ給ひしが如し。かくて漸く嶺に近づけば老緇衣一人あり、陋庵に坐して客に接し具さに其由來を語る。此堂前年落雷の爲めに全く燒失し今は即ち其物悉く靡靡す。憐むに堪へたり。立つて望めば空水相呑み、天涯の那邊なるを知る可からず。其間幾百の群島錯る處、碁布點々として翠を鏡上に盛るが如し。其宏壯の景洵に言語に絕す。聞說く此處舊伊達氏の遊亭ありしと、當時の豪遊想見す可きなり。遊莊の跡一老松あり、松下の眺望最も佳。云ふこれ扇面の要なりと。左右の胥螺、海を扇形に限り、海上の群島其畫たり。偉なるかな此扇、以て三伏の隆暑を千萬里の外に退く可き哉。

譬へ出でん言葉もあらじはるゞゝと見る目あやなる千松島山

暫く清風に對して山を下り又舟に搭じて扇谷を出づ。出づれば萬景又忽に眼前に顯れ、奇形百出快を呼ぶ三たび、即ち行厨を披きて相屬す。酒に麥酒あり肴に鮮鱗あり、加ふるに此景の佳と父子の睦とを以てす。何者の行樂かこれに如かん。舟は寸時も進行を止めず、萬景を其兩舷に萃めつゝ遂に一道の清風を載せて松島ホテル前の濱に着きぬ。左に雄島を見、右に五大堂を望む、前面は即ち觀瀾亭、對月樓巍然として聳ゆ。即ち對月樓に登り少憩の後瑞巖寺に賽す。門傍老女の立てるもの錢を乞うて案內す。寺內閑靜蒼古の色到る處に見る可し。森々たるる老杉峨々たる山洞皆蘚痕の草よりも靑きを見る。又古碑の見るべきもの甚だ多し。一々誦讀するに暇あらず。庫裏に至りて堂內の參觀を請ふ。稚僧余等を引きて先づ本堂に至り有名なる政宗の像を觀せしむ。燭火に照して忽ち偉丈夫の革榻に坐せるを見る。片眼にして重瞳、鼻大にして口一を劃するが

如く方顏黃頰、半月の甲を被り黑裝の鎧を纏ひ采配を右手にして儼然犯す可からず。異彩陸離眞に其人に接するが如し。嗚呼此好丈夫、北方の邊陬に謫居せしめられ、しかも猶意氣昂々遙かに西の方歐洲を睥睨す。智家康に及ばず、膽秀吉に敵せず、圓滑前田に及ばずと雖も亦偉となすに足れりとせずや。其像に接して無限の感慨休む能はず、其他寶物數品を見て寺を辭し、車を僦つて松島驛に出で、汽車に乘じて夜盛岡に着き一泊す。

九月七日、此日朝曇れり。父上と共に人力車に乘じて名所舊跡等を廻る、皆記すに足るものなし。其廟所に詣で其荒廢を見、山河の依然たるを望んで轉た榮枯の急激なるを思はずんばあらず。巖手山、名取川、あはれ幾百年の間十七萬石の領下に數へられけん。去つて市中を廻るに榮ゆるものは質屋と染物屋のみ。他は商況寥々見る可きものなし。嗚呼之れ祖母君母君の第二の故郷とも稱す可き所。何處の邊ぞ、君等が居を構へし所は。此夜書を奉るに當り母上の許へ歌一首を呈せり。曰く

其かみに君が日毎に遊びてし河邊やいづこ野もせやいづこ
高く聳ゆる巖手山、遠く流るゝ名取川、昔のまゝの山ながら今もかはらぬ川ながら、うつろひ行きし人の世は、何とてかくは頼みなき。古廟の跡に秋たけて、民の煙の最細し。御城のほとり蟲鳴きて、堀はかわきてむぐらしぬ。世はなどてかく頼みなき。

此日十二時某分を以て汽車に乘ず。車中湯地定彥、早川萬一、瀧臣弼の三氏に會ひ奇遇を喜び、其夜靑森に着す。風雨烈し、直に乘船せんとせしも終に乘る能はず。已むを得ず旅館鹽屋に一泊せり。先に盛岡より佐山氏に來る由發電し置きたれば、同氏來りて停車場に待ち居られたり。卽ち大に喜び、其夜は相別れて寢ねぬ。

九月八日。曇天。佐山氏と共に弘前に至らんとす。朝の汽車に乘じ弘前に着き、其家に至る。嚴大人慈母子共に余を迎ふる甚だ懇切、旣にして阿姉至り歡を盡して四年の今昔を語る。これより直に市中を巡視し共に寫眞す。弘前は盛岡に比し却つてやゝ人氣よしと雖も、尙衰運を免れず。近日師團を置かるゝとの事なれば、幾分か挽回す可し。三時別れを佐山氏の家に告げて靑森に歸り、夜、汽船高砂丸に搭ず。一夢漸く破るゝ頃、旣に函館の灣頭にあり。

九月九日。曇天、風雨あり。父上と共に龍岡氏を訪問す。暫時談話の後、又乘船す。船發せしも途中餘り風雨烈しき爲め、再び函館に歸り、此夜二時出帆す。

九月十日。此日十時某分室蘭に着す。十二時某分の汽車に乘り夕刻二ヶ月相失ひし札幌の山河に歸りぬ。快なる哉。（この次頁より寫生畫八葉あり。）

九月二十二日。半晴。出校す。測量は岡崎講師出張中に就き休業。此日午後五時より同窓會俱樂部に於て第一年級の歡迎會あり。是れより先き一の風說校内に起る、曰く三年級の士袖を連ねて會に出席せずと。其何の原因たるやを知らずと雖も、思ふに池、野呂の二氏が博奕を爲したりとの嫌疑を以て拘引せられたるに、感情を害せるが如し。これ亦已むを得ざる事我の深く悲む所なりき。至つて見れば三年級の士五六あり。即ち纔かに胸を安んず。然れ共所謂文に傾きたるの士は、皆會せざりき。會したる者は磊落なる人々か亂暴を以て勇氣と誤認したる人々のみ。しかも會は非常なる快を極め、各々絶叫高呼して歡を盡して歸れり。

九月二十三日。曇天。此日朝增山氏來り共に散歩せんと云ふ。恰もよし大島氏亦農園に至らんとするを以て共に行く。農園に至る頃雨霏々として下る。行きて牧場に至り犢と戲る暫時、甚だ愛す可し。雨の急なるに及び去つて牧馬舍に入る。例の巨馬首を延べて余等を迎ふ。即ち牧草一把を食ますれども、快嚙瞬時にして盡く。他の馬亦骨格甚だよし。一々檢視して積堆せる牧草上に横る。談四に移る時、增山氏端然として語り出でゝ曰く、我今君に襟を正うして乞はんと欲するものあり。余曰く、何ぞや。君悄然として曰く、我常に宇宙の神を得んとするの念切にして瞬時も惰らず、しかも嘗てこれに近づく能はず。怏々として不快禁ずる能はざるも我に同情を表するの朋なし、我や朋友の選擇に於て、誤り誤られたるもの甚だ多し、今にして思ふ、苟も會心の友と稱するものは、カーライルの所謂危急に袖を列ねて眞理に獻身せるものならざる可らず。我君に於て望む所多し。今や、我れ心身日に衰微して心甚だ安んぜざるなり。君若し一片の微衷あらば、我と萬障を排し眞理に向つて歩むと云ふの交語を爲せ。我の意や以て知る可きなりと。我又元より眞理を踏まんと希ふもの、即ち直に然諾せり。

男子一旦然諾す、必ずや其言に反かざるの名を爲さゞる可らず。此日午後より、岡田花園に於て西鄕南洲の祭典あり。肅々の間に嚴格なる儀式行はれ、次で當時漫遊中にて此會にも出席されし重野安繹翁、座を進んで南洲の往事を懇話せらる。翁七十二歲の老年にして髮鬚皆黑く、童顏白齒、强壯少壯者を凌がんと欲す。南洲が、武を行はんが爲めには文を知らざれば大なる武（寧ろ事業）を爲す能はずとの觀念より、文にも志せし節々を談らる。皆これ實歷の談、轉々と當時の事を追懷せられぬ。五時頃歸家す。

九月二十五日。土。晴天。朝、出校す。午後より在宅してありしも痔の痛み起り夜に至つては益々甚し。夜、西田氏を訪ひて、證明書及び委任狀を渡さんとせしに、そは却つて余が持ち居る方よからんとて、余持ち歸りぬ。歸途、高島嘉右衞門氏を、旭館に訪ひしも、氏に來客三四ありとの事なれば、其儘歸りぬ。明日、半澤、木村、增山の三氏と、眞駒内に遊ばん事を約す。

九月二十六日。日。快晴。朝八時二十分前頃半澤氏を訪ひしに、貧民學校にありとの事にて、彼處に至れば三氏既にありたり。仍て共に發す。此日、天氣春の如く、風日和煦として身に適し、眞に散歩の好時節なりき。遂に眞駒内に達し、事務所に乞うて、參觀の許を受けて巡視す。牛肥え、馬胖え、其長髦を振ひて金風に嘶くもの、其の亘角を掲げて草間に眠るもの、犢あり、仔馬あり。羊豚皆備る。場内充分に整頓せるが如し。唯、事務員に就きて其委曲を問ふ能はざりしを憾とす。徘徊厭くの時を知らず。既にして、月寒に兵營を見んの議起り、或るものは其道の失し易きをあやぶみ、或者は、斷じて行くべしとなし、議論區々、容易に決す可らず。先づ樹蔭に坐して中厨を喫す。味太牢よりも美なり。此に於て英氣又發し、足塵を拂うて再び立ち、再三道を誤るに屈せずして終に月寒に至り、來路を顧考すれば、決して嶮と稱す可らず。此に於て、踏まずして濫りに逡巡するの甚だ不利なるを悟り、兵營に入り、半澤氏知人あるを以て、門番に紹介を賴みしに、同氏今外出せりとの事にて遂に營內に入るを得ず。已むを得ずして去る。去年の秋、校友一同此に遊びしの時は、兵舍未だ成らず、民家又甚だ寥々たるものなりしが、今日は既に、高樓巍然として國鎭となり、民家櫛比遂に一村を爲す。久しからずして札幌との間、家を以て相連絡するに至らん。土地の盛衰誠に偶然なりと謂つ可し。歸途豐平を過ぐる頃、伊藤肇君の墓に詣づ。

余、君と知なし。知なきにあらざるも相熟せず。元より其交りに於て疎し、疎しと雖も豈此人の死を悲しまざらんや。秋風颯々墓邊の樹葉聲を爲して落つ。人生才を齎らして冥界の人となる、悲慘の極と謂つ可し。尋で此を謝して林檎園に至りて林檎を食する事各五六個、終に家に歸る。誠に愉快なる散歩なりき。買物なし、受便、發便なし。

九月二十七日。月。快晴。出校す。大脇教授の農業通論休み。放課後、森本氏と市中を散策し共に勸工場の Tower に登れり。外に記事なし。十五錢、ミニヲグラフの割あて金。九錢、厚紙其他。十錢、齒磨。

九月二十八日。火。晴天。出校す。夜、高島嘉右衞門氏を訪ひしに不在なりしかば、其子息に面會す。別に記事なし。父上樣御安着との御手紙來る。五圓食料、五圓授業料、六十二錢六厘、定木、卷紙、封紙、其他、十錢切手、四錢手帳。（父上樣より頂戴せる三十圓中より支出）。

九月二十九日。水。曇天。出校す。大脇教授缺席に就き休業。此日、午後よりある可き測量を失念して出席せざりき。向後愼まざる可からず。西須賀雄氏計らず來訪す。余君と親しく語りしもの今日を以て始めとなす、圭角稜々其甚だ自重を標置する處、未だ以て到れりと云ふ可からざるなり。君は思ふに時任靜一氏を學んで學び誤りしものならん。葡萄酒一本を送らる。此日、母上より手紙來り、其中祖母樣のも存在せり。讀過して、慚汗の額に交はるを覺えざるなり。嗚呼、「一心」と稱する精神のなきは、これ余の最惡なる缺點なり。子を見る事親に如かず。我今にして其言の果して虛ならざるを知れり。夜十時二十分就寢。買物なし。恩地及び母上より受便。吉田熊次、家及び增田君に發信す。

九月三十日。木。大雨。天少しく晴るゝかと思へば驟雨盆を傾くるが如く、近來稀なる天候なりき。出校す。大島教授の獨逸語休業。又、同教授の化學も休みなりしかば、實際の學科は一時間に過ぎざりき。外出せず。夜九時に垂んとする時忽ち火事、北四條東二丁目に起る。直に走せてこれに赴き、心あてに新渡戸常文氏の家を尋ねたるも得ず。火焰猛勢にして、一時は甚だ恐る可く見えしが、人遂に火に勝ち、十時に至りて漸く鎭火せり。夜十時半就寢。買物なし。受便發便なし。

雁は來ぬ我は歸北の途に就かん。（茲に紅葉の圖あり略す。）

十月一日。金。晴天。朝六時起床、出校す。午後の實科は休みなりしかば、農園内を散歩す。遠山近郊、見渡せば共に是れ一幅の好圖畫。此偉山水必ずや人を養ふに於て大功あらん。吾人が終世の大方針を定む可き基礎を立てん場合は、實に吾人靑年の境遇にありとす。此境遇にありて、切磋琢磨以て道を誤らざるを致さゞる可からず。思はずんばある可からざるなり。此山や、此郊や、此水や、皆我が鞭撻者にして、又保護者なり。愛すべきかな、畏るべきかな。夜、木村氏大島先生に面會せんと來る。時に先生なし。即ち二人相語る。快談殆んど二時餘。近來甚稀なる事にして、大に得たる所あるが如き感あり。夜十一時半就寢。買物なし。松平恒雄氏に發便す。

十月二日。土。晴天。朝六時半起床出校す。別に記事なし。午後より演武場に於て學藝會大會あり。此日は蒲生仙、井上角五郎の二氏來りて演說を試みる筈なれば來者多く殊に校外の人も少からず見えしが如し。先づ報告あり。次で宮菊太郎氏登壇して、校風振起論に就きて演述す。主旨とする所は、農學校は敢て農學校に止まる可からず、啻に北海道的人物に止まる可からず、日本的人物を以ても甘んず可からず。進んで世界的の人物たる可し。吾人が先輩を見ずや。内村鑑三、志賀重昻、宮部金吾、新渡戸稻造の諸氏將又現今亞米利加に在る廣瀨氏の如き、或者は日本的人物として、或者は世界的人物として皆頭角を顯せるに非ずや。其後を襲ふの吾人、宜しく自重自任以て事に當らざる可からず。而して日本學術の養成所、否人物の養成所たる札幌の人士たるに負かざるの名を爲さゞる可からずと云ふにあり。君が始終此說を持して以て勇往するは多とす可しと雖も、君の着眼點は屢ゝ我を以て傾考せしめずんばあらず。次に西垣氏立ちて「釋元恭」に就きて演說す。波瀾なき一律の口調を以て、當今書生の will の力に乏しきを論破し來る。時々、微笑を漏し來る所、毫も吾人に大なる印迹を殘さずと雖も、時に詼謔の語を交へ、人をして破顔せしむる如きは君が長所なる可しと雖も、此演說には甚しき劣點なりき。此の如き演題は決して談笑の間に行はる可き事にあらざればなり。此演說中、蟹甲將軍井上氏は矮軀を動かして入場し來る。容貌甚だ昻らず痘點細眼一も取る可き處なし。西垣氏降壇するに及び、卽ち徐々として壇上に登り、破顔しつゝ說き來り說き去り滔々として數千言恰も春水の氷上を走るが如し。しかも頓挫なく、抑揚なく、平板人をして厭かしむと雖も、長

時間に渉る干乾無味なる說話の間に時々人をして哄笑せしめしは亦彼が技倆として稱するに足れり。要は、農學校の學生は未だ北海道に於て決して良好なる成績を擧げ得たりと云ふ可からず。諸々の點より觀察するも、農學校及び農學者の義務が全うせられたりとは云ふ可からず。元より、農業以外には多少人物として見る可きものありと雖も、余は寧ろ後來の學生諸君は外交上、經濟上、政治上の要所とも稱す可き北海道にありて其業を大成せんとせられんを望むと云ふにあり。同氏降壇せしも未だ蒲生氏來らず。卽ち校長立つて一場の演說をなす。「釧路に至る道中の雜感」と云ふ題なり。北海道の交通機關の不完全極る事を痛論し、財力の分配が餘りに石狩一國に偏せる事を云ひ、又學術も此に翕集して毫も分配せられず。回顧すれば、明治十年より陸續として輩出したる農學校出身者中、北海道の內地不毛に入りて大に爲すの人なきを嘆じ、余が到る處一人の吾黨の士なしと痛感慨嘆せられたり。而して最後に云へらく、今の書生業を卒ふれば卽ち月給の多寡を考へて東移西轉浮萍の飄々乎として風に從ひ流れに就くが如し。何ぞ決然志を決して獻身的の事業に向つて勇進せざると云ふにあり。頗る我意を得たり。我不肖と雖も謹でこれに就き、以て聊か隗を以て任ぜん哉。旣にして蒲生氏來らる。粗裝亂髮短身にして狀貌精悍なり。拮掘なる語調を以て、余等靑年と朋友の交を結ばん事を乞ひ、一旦相許したる以上は鋭意以て農業なる戰場に出づる諸子の兵站部たらんと云ふにあり。語質直にして轉々其風采を慕はしむ。余は寧ろ井上氏の才幹よりも蒲生氏の質實を取らん哉。右終つて散會す。夜、增田氏の書信を領す。記事甚だ懇切、讀過して涙の双頰に交るを覺えざるなり。夜十一時半就寢。買物なし。十錢、會費。增田、上野二氏より受便す。『太陽』送り來る。

十月三日。日。半晴。朝七時起床。朝の中一寸坂本氏を訪問す。それより師範學校の官舍に增田氏を訪ひしも不在。晝食の爲めに歸宅す。午後は一寸寫眞屋に至りて寫眞を取り來る。增田氏乘馬を以て來り訪ひ、其馬を貸さんと云ふ。余大に喜び暫時乘りしも、少しく手に過ぎたる逸物なりき。夕刻に及び先生を寢室に訪ふ。先生余を引きて懇切に諭して曰く、本科に入りてよりは益々 mechanical の方にのみ偏して底止する所なからんとす、宜しく禪宗なり、何なり深く修身する所なかる可らずと。而して種々の言、誠に赤心を人の腹中に推す。語次唯何となく涙の下るを覺えず。先生も亦非凡の人なるかな。

夕食後少しく學科を復習し十時就寢。

十五錢、切手端書。松平恒雄氏より受便。家、大關、寛の三氏に寫眞を送り、家、大關、有島健助、菊地正雄、杉田一貫の諸氏に發便す。

十月五日。火。晴天。此日朝八時二十分の汽車を以て新渡戸先生令閨、Miss Harthorne. 信子君、孝雄君皆鎌倉の方に轉地せらる。大島先生は既に昨夜去つて室蘭にあり。小谷氏 Miss Read 等亦之に從ふ。別るゝ人送る人、停車場裡の氣何となく凌殺たるを覺えぬ。我何の緣ぞ、先生に從つて學に就く事此に一年、其間修身に英語に先生に得る所甚だ多し。我東京にあり し間に碌々として日を消し未だ嘗て修身の事に及ばず、及ばざるにあらずと雖も期する所甚だ低く、以て施す可きなし。札幌に來りてより朋友に鑑みて大に得る所ありしと雖も、又先生每土曜日の講演大功を爲さずんばあらず。嗚呼我先生に負ふ所多し。「人は益を得たる或る他の人の不在を miss するものなり」とは先生が嘗て我に敎ふる所なりき。我先生を送りて家に歸來し、獨り淋寥たる空室に默座して實に先生を miss する心に堪へず。且つや、後より回想すれば先生の此行や或は數年の告別にあらざるかを思ひて愈〻追慕の至りに堪へざるなり。

此日物理を休業して荷物の手傳等をなす。午後より原田氏の招きにより星野純、鈴木眞吉、井街顯、鈴木敬策の諸氏と共に農園の一農夫の家に遊び、きびを食ふ事馬の如し。放言壯語、快を恚して歸來す。五錢林檎代、二錢五厘草鞋代。

十月六日。水。此日簾前の方に遠足ある筈なれば朝六時十分前起床し、結束家を出でしに既に七時に垂んとす。卽ち直に發向す。眞駒内に至る頃、他學生陸續として至る。此日一天全く晴れて、輕寒身に適ひ、甚だ散策に可なり。途にして、石橋氏に遇ひ共に急行して、第四農園に至る。滿林の紅葉半ばは紅を潮し、綠樹其間に點綴し頗る偉觀なり。衆皆至るに及んで先づ唐黍出で、豚汁出で林檎出で快啖健食慊を盡して少憩す。座中議忽ち起る。曰く、これより定山溪の秋を探り一夜を月影紅葉の間に過す亦快ならずやと。一呼して和するもの我が級の士にして十有三人、卽ち倉皇林檎若干個を懷中に收めて發す。遠山漸く近く、僻水亦從つて邇く、山高く水低く急潭瀨をなし瀨又洞然として淵をなし、嶮峽縱橫其間に凸凹し紅葉

血よりも紅きもの所在に映發す。今年の冬我孤影此山中に遊ぶ。積雪滿山淋寥膚に透る、行吟僅かに獨行の悶を消して辛く溪下に着せり。今は即ち然らず。我が黨の士十餘人高談放歌して進むもの寧ろ快とす可きなり。中田、石澤善く歩み、鈴木善く罵り、我善く歌ふ。其他默するもの不平するもの千狀萬差なり。しかも秋楓一樹丹色日に映じて深山の裝をなすものに會ふ毎に、未だ嘗て一同歩を停めて讃稱せずんばあらず。一の澤、二の澤、三の澤皆絶景比す可きなし。既にして溪聲漸く遠ざかり身の轉た高きにあるを覺えて、行く事半里ならずして、對岸旗亭の楓林中に參差せるを見る。衆讙呼、走つてこれに赴く。增山と余と二人後れたり。溪に着せるの比、既に二三子の裸して川上の温泉に浴せるを見る。温泉は岩を切つてこれに充つ。熱湯一方より來りて一方河水の中に向つて去る。而して兩岸の靑嵐共に手上に掬す可きなり。增山と余、宿に入らずして直に泉に沒す。温暖身に適ひ、一浴又疲勞の何者たるを忘る。これより又騷動盛に起りて寢に就く。此夜月東山に出で、澄徹氷の如く四面の佳景皆生きて月と相戲るゝものゝ如し、流水の桂影を摧きて金漣銀沫を弄ぶもの、楓林の紅葉を落して桂陰に色赤きもの、水聲嵐籟共に月と懽するものにあらずや。即ち四五人相携へて橋上に至る。滿目唯秋氣の肅殺たるを覺えて、金風徐ろに萬里を渡る時、身は唯浮雲に駕して遠く月宮に行くの思ひあり。吟者あり、詩を誦す。句々沈痛聽くもの徐々に涕下る。夜二更なるに及んで即ち寢に就く。樹籟水聲、依然枕邊に聞えて、我の靜眠を護するものゝ如し。

十月七日。木。早起一浴して旭日の登るを拜す。八時に垂んとするに及んで、中田、石澤、東海林、鈴木及び余、景を後にして發足す。行々中の湯を遠望し、宮部、松村、大脇等諸教授の先發せしものを及過して、急行石山に至り、茶菓を以て中食に代へ三時少し前札幌に着し、水平の林檎園に入りて林檎を味ひ、終に割愛して家に歸る。歸れば即ち大島氏等今迄新渡戸教授の居られし所に引越すとて混雜中なりしかば、直に赴きてこれが助力をなす。四十錢、旅籠料。五錢、菓子代。林檎代。

十月八日。金。風あり時に雨降る。朝六時半起床、出校す、原教授は慈君死去せられし由にて缺席せられしかば休業。此夜木村氏當家に移轉し來る。余は向後暫時なりとも氏と起居を同うせるもの、此時思ふ所なからざる可からず。愛子より受便す。五錢、會費。

十月九日。土。曇天。出校す。別に記事なし。晝後より我々も愈々新渡戸先生の居られし所に移轉する事となり、騷動す。かくて夕刻漸く移轉し終る。夜九時半就寢。此日西須賀雄氏に約束の林檎を送る。

十月十日。日。朝六時半起床。午前は讀書して家に在り。風荒れ雨時に至る。午後より星野純逸、星野勇三、早川萬一の諸氏が校費或は特待生となりしに付き其祝宴を開く。菓子、豚飯、林檎は其好下物、各快を盡して相別る。

十月十一日。月。朝六時起床、出校す。晴天。此日電報來りて、新渡戸先生函館に向はれたりと報じ來る。別に記事なし。十一錢、茶話會々費。

十月十三日。水。曇天。朝六時十分起床。此日より再び禪學の講筵を聞きに行く。用書は寶鏡三昧なり。此夜中央寺に於て、長野玄透師轉地せらるゝにより、關係ありし人等集りて茶話會を催す。相集りて語るもの數人、各歡を盡せり。五錢、茶話會々費。杉田一貫氏より受便す。二條氏よりも。

十月十五日。金。朝參禪す。別に記事なし。頃日星野純逸君肺結核に罹り家に歸れりとの事を聞く。君は吾級の首席にある の人にして、其學識亦恐くは闔級の首にあらん。否これを全校に徵して敢て下る所あらざるなり。惜哉、此に殆んど不治の難症に罹る。實に君の爲めにこれを悲まずんばあらず。又聞く、君二三日を經て一度札幌に歸り、遠からずして鎌倉地方に病を養ふと聞く。最も喜ぶ可きなり。しかも君が親友等は、君が養病費の不足を危むが如し。嗚呼、余等の如き學資を受くる厚く用途足らざるなきものにして蠢々人後に在る事、實に殘念の至りに堪ふ可からざるなり。然れども諄々惰らずして勉む可きを勉めて以て進まば豈遂に事の成らざるなからんや。發奮す可きなり。五十八錢、寫眞複寫代。

十月十六日。土。曇天。出校す。別に記事なし。午後より少しく陽明學等を見、唯殆んど半日を空費せり。向後他に定むる所なかる可からず。

十月十七日。日。半晴。朝參禪せしに既に終れるの後なりき。それより、木村氏が佛敎少年會に於て演說をなすを聞き共に家に歸る。午後よりも唯何となく日を消せり。三時頃より木村、孝太の二君と共に增山氏を誘うて圓山に遊ぶ。秋景無双

落葉金風に舞ひ、冷流影澄める邊、轉た適情の掬す可きもの萬々、これ今日の最大快事なりき。十錢、郵便切手。

十月十九日。火。晴天。此日座禪を惰れり。朝木村氏と共に散歩す。放課後より木村、孝太の二人と共に、中島遊園地より豐平河畔を散歩す。大に心機の轉回を得たり。此夜、吉田熊次氏より受便す。甚だ感衝せり。買物なし。

十月二十日。水。晴天。朝出校前木村氏と共に散歩す。「天才の敢て羨む可らざる事」、「己れの正義なりと認めたる主義を履行せしめん爲めには、權謀を用ふるも妨げざる事」、「才子は固く信ずべき主義を有する能はざる事」等に就きて行談をなせり。別に記事なし。夜十時半就寢。買物なし。受便發便なし。

十月二十二日。金。晴天。朝出校す。記事なし。明日石狩に遊ばんとの議整ふ。

十月二十三日。土。晴天。朝參禪す。午後より孝太君と共に停車場に至る。半澤洵、鈴木眞勇、中田重男、佐藤政二郎、蠣崎知二郎、增山厚吉の七氏相前後して來り、十二時四十分の汽車に乘じて輕川停車場に至り直に道を東方にとりて進む。行前田農場支場を過り少しく聞く所あり。曰く、坪數百十三萬坪、小作人四十戸、小作人には何等の保護も與へざれども、最初開墾料を與ふ。荒地は先づ器械を以て荒起しをなして小作人に貸與す。小作人は越中の人多し。二作以後より一反三十錢づゝを徵發す。現今の相場に於て樹林地は十八錢、原野は十二錢位なり。排水多き方にて其大さは

なり。夕刻石狩に着く。戸數四百戸內外、石狩川を左にし、大海を右にす、眞に勝景の所となす。惜むらくは海淺くして彎曲少なく遂に一大良港を爲す能はざるを。キ旅店に入る。甚だ厚遇せらる。夜に至りて鮭を鍋上に燒きてこれを喰ふ。美味例ふ可きなし。食終りてより衆相携へて散歩を試む。巷路を離れて海濱に出づれば、一帶の夜色茫として涯なく、天際の漁火一點又二點、仰望すれば陰雲層々時に星を吞み星を吐き、魔の如く鬼の如く飄々乎として暗黑の間を徂徠す。神澄氣收まり愴然として涙下らんとするものあり。卽ち相共に高吟すれば戞として遠近其韾を傳ふるあるのみ。滿身の露氣拂ふに懶く、金風襟を吹きて秋冷双の如きを覺ゆるに至りて又携へて宿に歸る。旣にして四散せる友相次で至り此に一大論戰は開かれぬ。蠣崎の快辯、增山の謬論、佐藤の冷笑、鈴木の寡言、半澤、中田の沈默、眞に一場の好劇、甲論じ乙駁し、時に怒氣天を突かんとし、時に哄笑

地を覆さんとす。其論ずる所のものは人物評より宗教上の事に移れり。増山は嶋崎に言を苟もせざるを諫むれば、嶋崎は大にこれに反對し滔々として盡くる所を知らず。遂に談十二時半に至る。即ち一同寢に就く。

十月二十四日。日。五時前後相次で起床す。窓外雨滴の點々たるを聞く。悲哉これ雨なり。一同の失望思ふ可きなり。然れども坐して止む可きにあらず、朝食後直ちに川邊に出で鮭漁を見る。漫々たる石狩の流平靜鋪けるが如く、對岸一帶の風光例ふ可きなし。白屋五六紅葉の間に點綴し連丘蜒々として去る所遠く迷朦たる秋雨の間に入る。縷々たる炊煙昇るに勢なく、白く地に引きて楓林の間を低徊す。對岸遠き所異樣の呼聲かすかに耳をかすめて去るを聞く。これ漁夫等が網を引けるの聲なり。益々進んで河口に近づけば渺茫たる大海を目前に見る。砂洲の突出せるものゝ上燈臺あり。景物自ら奇なり。漁夫の網を引くを見る。服裝、擧動、皆內地のものと選を異にす。軈て燈臺を一覽し海濱を迂廻して宿に歸り、結裝して發し雨を衝きて五時半歸宅す。夜に至り直に坐禪の筵に中央寺に列す。初めて眞正なる坐禪を試みたれば身心塵事に遠ざかるが如き感をなせり。九錢、汽車代。七十三錢、宿泊料。二錢、草鞋。（玆に寫生畫一葉あり略す。）

十月二十五日。月。晴天。朝參禪す。此日湯地氏より來れとの事なりしかば、參堂せしに、地面ありしとの事にて直に願書の手續に及ばれたる由申されたり。仍て其旨直に父上樣まで御報申し上ぐ。其他別に記事なし。夕刻より非常なる暴風雨。

十月二十六日。火。曇天。出校す。別に記事なし。午後より片岡氏に參りて之を見舞ふ。入浴す。別に記事なし。六十七錢五厘、ナイフ、シャボン、西洋帳。十一錢、日本帳。

十月二十七日。水。半晴。朝參禪す。別に記事なし。Surveying は休業。夜に至りて坂本氏を訪ふ。元氣にて既に上京の途に就かれしの後なりき。夜十一時就寢。

十月二十八日。木。半晴。半雨。出校す。別に記事なし。夜に至りて増山氏來り、相共に談話する事數刻、氏辭し歸る。仍て就寢。買物なし。受便發便なし。

十月三十日。土。朝出校す。此日第一時間目の獨逸の學科の時、雪片時に降り來る。嗚呼これ札幌の初雪なり。夜に至り

て益〻烈しく夜半漸く止む。午後讀書す。夜に至りて伊藤清藏氏來遊す。談種々の事に轉り九時歸宅せらる。二十二錢 note book 及び stamp。

十月三十一日。日。朝參禪す。午後增山氏來訪、種々話をなす。夜又中央寺に至りて坐禪す。二十三錢、寫眞代。九錢、半紙。七十五錢、碧巖代。六錢、楊子。

十一月一日。月烏。兎匆々既に十一月を迎ふるに至りぬ。去月先づ少しく意に充つるが如き行爲をなしぬ。益〻勉むる所なかる可からず。朝出校す、別に記事なし。家に發信す。一圓七錢六厘、牛乳代。

十一月二日。火。晴天。此日は一日溫暖なりき。夕刻の如きは寒暖計四十八度。出校す。別に記事なし、夕刻入浴す。二條氏より尙志會雜誌を惠與せらる。買物なし。

十一月三日。水。朝參禪す。それより大島先生思誠堂の同人擧つて藻巖登を爲さんとす。九時半出家、途に宮部敎授、原敎授其他學生二三子に遇ふ。卽ち相共に其登口に至る。宮部敎授に隨從せる學生諸子は既に植物の採集を初め右囘左支遲々として步蝸牛の如し。仍て謝して先づ發す。四人元より健脚を誇る。黃葛赤蘿、千年の大樹を擁し、飛禽叫々時に肅殺たる秋山の寂寞を破る。加ふるに天候澄晴萬空一碧たる處其片影を樹枝密網の如き間より見、壯快云ふ可からず。卽ち步を早うして魚貫して登る。既にして足漸く仰ぎ、道從つて躋く奇景亦所在に出沒す。其尤も喜ぶべきものは、茫漠たる平野を貫きて遙かに石狩の大海を望みたる時、山背平かにして生樹疎なる處、目前西方の連山逶迤高下して秋嵐の影深きを見たりし時、頂巓に登り眼の四方に放ち前に石狩の平野を望み、後に連山波の如きを見、更に遙かに模糊たる大瀛と渺乎たる石狩川を望みたる時にてありき。休憩する事少時、各思ふ所に依る。或は草を敷きて仰臥宵天に對するもの、或は林に逍遙して高く歌ふもの、或は樹根に默坐して心を四方に放つもの、しかも其浩然の氣を養ひ得て幾分の益を得たるに至りては四人相同じきなり。朽木の上登臨の標として新聞紙の旗を挿み、愛を山に割き疾馳して下る。纔に半時にして山麓に達す。二時頃歸來喫食の味終に忘る可らざるなり。夕刻に及んで坂本氏を訪ひ夕食の馳走となる。夜遠友小學校に幻燈を見る。孝太氏同道此に至る每に精神

一新せらるゝを覺ゆ。此に我が前途に來れる一事起れり。これ膽振國マツカリベツに借地出來たる事なり。地積九十六萬餘坪殆んど百萬に垂んとす。嗚呼これ父上が余の爲めに購ひし所のものにてあるなり。嗚呼生れて未だ痛苦を感ぜず、平々として成長し既に丁年に達す、是れ洵に父母の恩なり。而して報恩の事に至りて未だ嘗て毫毛の末だになし。誠に謝するに辭なきなり。庶幾くは孜ゝ勉むる所を務め、以て大に報ずる所なかる可からず。而してマツカリベツ原野は余が立ちて以て基礎を定む可き所、我が技倆は正に初めて此上に見られんとするなり。謹んで事に從はずんばある可らざるなり。四錢、切手。十錢、湯劵代。十錢、林檎代。十九錢、散髮代。

十一月十日。水。朝六時十分起床、出校す。此日植物の平常試驗あり(問題略す)。夕刻、高岡參事官を其邸に訪ひしも氏在らず。夜入浴す。

十一月十一日。木。朝六時十五分起床、出校す。別に記事なし。放課後、農業實習に至る。夜、星野勇三氏來遊、其去るに臨み相携へて月下に散歩す。時正に十七夜、滿天霽れ盡して星屑金砂よりも多く月華一輪乾坤の夜を照す。四望の秋景殆んど其佳を名狀す可らず、心澄み氣昂り相共に思ふ所を語る。星野氏は我級の長材、其體格に於て、其識見に於て、其學才に於て蓋し我が級鏘々の一人なり。我級學者とし尊敬す可きもの少なからず。しかも一たび事に當つて良く今日の急務に應ずるの如き人に至りては實に寥々たるを感ぜずんばあらず。此間に於て星野氏の如きは以て多少の望を囑するに足る。月漸く天に冲せんとするに及んで、即ち携へて歸來す。八錢五厘、卷紙。

十一月十二日。金。半晴。出校す。別に記事なし。此日植物の小試驗に付き大に警戒を與へられたり。余の如きは此度は確かに其一人なりき。これを聞きて云ふべからざる不愉快を感じぬ。我が weakness は此にありと自らはげませしも其効なし。嗚呼此小膽これを如何せん。別に記事なし。新渡戸先生及び赤松氏に發信す。十錢、切手。五錢五厘、洋紙代。

十一月十三日。土。晴天。近來稀なるものなりき。然れども午後より風起る。朝六時十五分起床、出校す。別に記事なし。午後より校庭に於て農學校と中學校の base ball match あり、吾が校大勝利。入浴す。四十錢、新聞紙代。

十一月十四日。日。晴天。朝、高岡氏を訪問せしに不在。無據坂本氏を訪ひ、晝頃迄遊びて家に歸る。午後より孝太氏と共に丸山に射的に至る。これ憲兵大尉大隈氏が大に奔走して體育會の名の下に設けたるものなり。大隈氏の熱心亦勞とするに足然れ共此日は中學校生徒のみ射的を許したる事なれば余は先刻より共にありし森本氏と共に歸途に就く。途に園内を散歩す。例の如く風景の佳云ふ可らず。人をして敬虔の心を發せしむ。門前に森本氏と相分れ山崎氏を訪ふ。ふき君近日を以て東京に向はるゝが故なり。懇談暫時家に歸る。夜、森本氏來遊。各衣を脱して腕角力、坐角力、指角力、其他有らゆる力爭をなし歡を極むる九時に及んで氏歸り去る。此日の日曜は少しく得たる所ありしが如し。買物なし。父上より受使。

十一月十五日。月。昨夜より非常なる暴風雨にてすさまじき有樣なりしが晝頃止む。夜の間に雪など降りしが如し。佐藤校長は出京中故農業經濟は休み。別に記事なし。箕田、水野の二氏より受使。父上に發使。

十一月十六日。火。朝半晴。夕刻より暴風雨となり翌朝は手稲の諸山白皚々たり。出校す。此日化學 blowpipe analysis の平常試驗あり。夜痔疾を起し甚だ惱む。十二時に至りて初めて就寢するを得たり。別に記事なし。買物なし。受使發使なし。

十一月十七日。水。朝曇天、夜に至り雨降る。甚だ寒し。出校す。別に記事なし。買物なし。受使發使なし。

十一月十八日。木。曇天。如例出校す。痔疾益〻甚し。午後散歩す。別に記事なし。四錢五厘、齒磨粉。埒田氏に發信す。

十一月十九日。金。曇天。朝六時十五分起床。別に記事なし。菊池氏より寫眞送り來る。

十一月二十日。土。曇天。朝六時十分起床。午後埒山氏來る。夜家の人丈けにて櫻痴居士作『あはれ浮世』の輪讀を爲す。夜に及んで寢に就かんとするとき二人相親しく語る。其中に於て我は益〻木村氏が心志の culture に於て確然たる立脚地あるを見る。君や學術に於ける腦髓決して善良なりと云ふ可らず、其行爲決して敏捷なりと云ふ可らずと雖も、正義に安立して一歩も假さゞるの氣概に至りては誠に師表となすに足る。君や誠に道に庶幾きの人と云ふ可きなり。

十一月二十一日。日。曇、雪定りなし。朝七時起床、十時半頃に至り思誠堂の同人三人市中を散歩す。寒風凛烈既に冬の全く至れるを知る。勸工場に至りて木村君の「かゝる美麗粗雜相混じたる勸工場中人間に necessary なるもの幾何かある」との

奇警なる議論を味ひつゝ、先日燒けんとせし振進堂を見舞ひ歸宅す。午後伊藤淸三氏來る。又蠣崎氏來る。相共に歡談、時の移るを覺えず。夜に至り入浴して就寢す。七錢、筆代。受便發便なし。

十一月二十三日。火。晴天、夜に至りて少しく雪降る。此日は新嘗祭なるを以て、朝湯地氏を訪問せしに恰も好し海江田氏亦家に在り、眞狩別の狀況委細に聞くを得たり。同所の地味地勢は其附近に於て最も好良との世評あり。然れども交通の便甚だ不完全にして思ふに兩三年間は甚だ不便を感ずるならんと雖も鐵道設置せらるゝ時は必ず大に用ふ可きの地なりと。既にして同所を辭し西田氏を訪問せしも不在なりき。歸路原田氏に面會す。仍て相携へて其家に至り談少時にして歸家す。午後より在宅。夜坂本氏を訪問す。別に記事なし。十錢、郵便切手。壬生馬より受便。壬生馬及び箕田氏に發信。

十一月二十四日。水。朝より雪降り出し終日降り續けて夜に至れり。此具合にては夜中降り續くなる可し。此雪を以て本年積れりと稱するに足る、第一番目の雪となす。出校、大脇敎授の學科休業。買物なし。受便發便なし。

十一月二十五日。木。早起、戸を排すれば風死して天猶暗く一道の寒氣人を襲ふ所皚々たる白雪條頭花を綴り、地上絹を展べて恍として昨日と同所なるやを疑はしむ。積む事殆ど六寸、少時にして橇を引き來る馬の頸にある鈴の音は響き初めぬ。北海道の冬景此に於てか全し。出校す。別に記事なし。午後一寸町に出づ。夜入浴す。自習中睡魔頻りに襲ひ來り座に堪へず、點頭百番十時に至りて就寢す。此日の自習は殆ど得る所なかりき。三十錢、寫眞代。三十八錢五厘、インキ及びペン。

十一月二十六日。金。曇天。出校す。別に記事なし。午後より體育會に至りて狹尺射擊をなす。買物なし。中川君より日章會雜誌及び手紙送り來る。

十一月二十七日。土。曇天。出校。大脇敎授休み。午後讀書をなす。此日增山君より唱歌を作る事を依賴せられ、十一時半頃まで熱心に製作してしかも終に成らず。

十一月二十八日。日。晴。六時起床。朝少時讀書してありしに森本君來訪せらる。同君寫眞機携へ來り余等を撮影す。午後よりも亦かくの如き事に費す。此日增田君より受便す。其文痛切讀み來りて君が余を信ずるの篤きを謝するに辭なく、黯然

として感慨の涕に咽ばしむ。此文に於ては君宗教上の不審を余に質されしなり。言々緊要に當りて殆ど間然す可きなしと雖も余は猶服する能はず、卽又思ふ所を書して返信せり。嗚呼我實に益友を得たりと云ふ可し。夜十一時半就寢。十錢、風呂代。

十一月二十九日。月。朝六時起床、出校す。大脇教授休業。別に記事なし。夜十一時就寢。二十錢、學藝會々費。

十一月三十日。火。午後暴風雪となる。出校す。別に記事なし。午後より孝太君と共に散步す。雪紛々として帽、服皆白し。夜十時就寢。四錢五厘、糸針。九十六錢五厘、牛乳代。(寫生畫一葉略す。)

十二月四日。土。此日第一學期試驗の時間割出づ。十四錢五厘、卷紙狀袋。十錢、切手。

十二月五日。日。朝、木村氏と共に農書を見る。晝より增山氏と共に農園に出でゝ寫眞す。それより一寸坂本氏を訪問す。

十二月六日。月。晴天。朝出校す。別に記事なし。思へば今日は愛子が東京に於て山本氏に嫁ぐの日なり。愛子の一生は旣に定まる可き時となりしなり。余等の喜び何にか加へん。余は謹で愛子が益〻其特性なる恩愛に富めるの心を發揮し、長く貴女たるの資格を保たん事を希望して止まず。愛子は實に余が最も話相手たりしものなり。そは他の弟は余と年齡に於て大に劣る所ありしを以てなり。今彼他に嫁ぐ、何となく一片離別の情なくんばあらず。願くば益〻健在なれ。

十二月七日。火。半曇天、出校す。別に記事なし。午後より市中を散步す。試驗は旣に近づけり。樂みの前に苦みあり。試驗と休暇はよく其間の消息を漏せるかな。父上及び押小路氏より受使す。一圓五十三錢、ズボン直し代及び下ばき代。

十二月八日。水。半晴。出校す。別に記事なし。此日滿月、行雲收り盡さずと雖も媚姿時に漏れて下界の雪銀の如きものを照す。實に一奇觀。卽ち九時頃より北海女學校の裏なる池に至り skating をなす。半澤氏亦會す。而して他に一人の影なし快又快殆んど歸るを忘れて十一時に達す。卽ち相別れて月を踏んで歸り、家に入りて憩ふ少時、忽ち外面大聲に呼ぶものあり。曰く、盜あり君の家を窺ふと。余驚き直にこれを大島氏に告ぐ。木村氏又起き、家の內外を求めしも更に得る所なし。仍つて寢。明日見る所によれば雪上に人の逃れたる足跡あるを發見せり。買物なし。

× × × × ×

駒隙匆々第二學期試驗は去る二十一日を以て結了せるものとせよ。其成績は決して善良なる方にあらざりしも、亦決して惡結果には非ざりき。卽ち十四番より十一番に登りしなり。其點數に至りては悉く記憶せず。唯、地質に於て五十八點なる落第點を取りし事、しかも落第點を取りしもの丶內に於て余が其魁たりし事は特筆大書してこれを永く記憶に止めざる可からず。試驗に就きてはこれを記して止まんのみ。

行李匆々歸省の時より得たりし我が痔疾は、爾後日を追うて時に甚だ苦痛を感ずる事あり。爲めに家にありては椅子に接する能はず、其甚だしきに至りては書も殆んど讀むに懶く、早寢せし事幾度と云ふを知らず。爲めに學問の妨害となる甚しかりしは余の常に遺憾とする處なりき。頃日醫師關場氏の診斷を乞ひ、終に來月二日を以て入院する事に決せり。余は又歲末に臨みて森本兄に滿腔の謝意を表するに吝ならざるものなり。兄の、余を誘導せんとする熱心は實に甚しきものあるなり。先日余、兄を其家に訪ひ、Carlyle の Sarter Resartus に就き質疑をなす。兄よく其疑を正し Everlasting No 及び Everlasting Yea を讀了するを得たり。殊にこれを終へて後相共に談宗敎の事に入る。兄余に說くに頻りに基敎者たらん事を以てす。余元より基敎の決して信ずるに足らざる敎なりと信ぜず。正々堂々實に世界大宗敎の一なるを確信せりと雖も、未だ佛敎を捨て丶彼に就くの非なるを知る。男子一度苟も信ずる所に許す。而して未だ其信ずる所の善惡を知らざるに、直に又他に信ずる所を造りて恬然として顧る處なくんば人これを何とか云はん。人や必ず、有島に信なしと云はんのみ。我元より愚なりと雖も焉ぞ此不道を秉らんや。余今、佛敎中確かに大眞理ありと信じ、これを見んとして切磋す。而して未だ確乎として佛敎の價値をも認め得ざるに先ち、直に心を基敎に曲げば天我を何とか云はん。浮々泛々これ小人の爲のみ。聊か余の恥づる所なり。是を以て、余遽かに兄の意に服する能はず。故に余兄に此事を辭せり。尋で談又未來に於ける人間の死活に移る。余曰く、如何なる罪人と雖も未來永劫の後必ず救はるの時機ある可しと。兄は曰く、不然、自ら喜んで罪を犯せるものは終に地獄の苦を脫する能はずと。談論數刻、余や固より己れの說を信ぜり。相頡頏せるの末余は終に飲泣止むる能はざるに至れり。眞に此時の如く余の心の專一となりし事は生來稀なる事にてありしなり。嗚呼、兄に非ずして誰と共にか亦此の如き事を論ぜ

ん。余は勿論兄と行徑を異にす。しかも到る處に到らんと欲するの志や一なり。余は北海の地又此一畏友を得たるを喜はずんばあらざるなり。午後相共に圓山公園を散歩す。滿月積雪皚々として人影四方になく、寒鳥枯林に啼き聲淅瀝として天地の寂寞を破る。高丘に登りて遠く札幌の市街を眺望すれば、恰もこれ一個活人の横臥せるが如く、其一瓦片釘皆生を得て動けるが如し。煙突は所々に突出して煙を吐き、汽笛一聲鐵車は愁喜兩野を併せ載せて馳せ去る所果して那邊ぞ。豐平の水は滾々流れて晝夜を捨てず、朔風一陣來つて樹林を襲へば飛雪紛々として花を散らすよりも美なり。犬聲、鷄語、鐘響、笛音相錯綜してかすかに耳邊に集る。余嘗て Goldsmith の荒村を誦し、彼が村落を離れたる小丘を徐攀し、微々嫋々として起り來る村落の murmur を聞きて寂然として此天地の大觀に打たれたる時の狀況を想起せずんばあらず。低徊多時、愛を割きて歸る。此夜獨り今日の行程を觀じ、轉〻一種の感慨禁ずる能はざるを覺えき。

これに次ぎ余をして最も快感あらしめしものは氷辷戲なりき。余此戲をなす既に昨年に始まれりと雖も、未だ練習數回ならずして春暖融雪の候に遇ひて事止みにき。此冬季休暇に際してや毎日辷具を携へて氷池に至りてこれを試む。七轉八倒滿身流汗淋漓として嚴冬を知らず、其快實に名狀す可からず、爾後日を重ぬる數日終に滑辷自在なるに至りて興味益〻津々、これ到底東京人士の解する能はざる快味なる可し。これに亞ぎて記憶す可きは、農學校の改革策なり。元來農學校は、其卒業生に農學士を與ふるは從來の規定なり。然るに、新規則に依れば、中學校卒業生をして直に本科一年に編入するの有樣となれるなり。卽ち中學卒業生が四年の後に至れば直に農學士たるを得るものとす。世間豈此理のあるあらんや。これ農黌の將來に關し大に寒心す可きもの、學生の中大に奔走してこれが豫防に勉めたり。余は本年の終りに臨んで一片歲暮の感を記し以て長へに明治三十年と相別れんと欲す。嗚呼此年や實に余に與ふるに多くの機會と多くの善因とを以てせり。しかも余の不肖なる、其半だも recieve する能はず慚汗の至り、徂年願くは許せ。

歲暮の感

九街鷄唱瑞氣新、靜笏朝正簇紫宸。

一八九七年

今朝見れば山もかすみて久方の天の原より春は來にけり

彩鞠紙鳶相經緯する處紳賤上下袖を連ねて往來し、和氣靄々たる新正を迎ふるに先ち、吾人は感慨多端なる啃憺夜の如き歲暮に遇ふの止むを得ざるあり。（下略）

一八九八年（明治三十一年）

一月一日。 晴天。早起紙を展べて試毫をなす。惡筆舊に依りて依然、それより木村、河野氏等と氷辷戲をなす。閑々たる三十一年生涯の濫觴はこれなり。快遊晝に至りて家に歸る。午後少し過ぐる頃より坂本氏に至り歌留多などなし夜歸る。

一月二日。 此夜農學校教員諸先生、四年と一年の者共を同窓倶樂部に招きて御馳走せらる。蓋し每年の例なり。今年は餘り人數の多き爲め二日の間になす事となりし由、明日は二年と三年なり。歌留多、トランプ其他、各快を盡し、蕎麥出で、すし出づるに及び、一際の氣焰益々上り、仲田君は蕎麥五杯すし一杯、蠣崎君はすし五杯、此日の功一級なり。四年はだめ〳〵。

一月三日。 此日愈々關場病院に入院す、正月匆々よりこれも風流也。我が入りしものは下等の第一號、患者十人にして滿室なり。これを數へ立つれば、北側の東隅には自ら北門新報に居ると稱するアンコ一人我と同病なり。これに次ぎて余、これに次ぎて、臺灣の戰役に從ひて藥劑官たりし靑森の人あり。多少文を解し最も談ずるに足る。これに亞ぐものはリョウマチスを患へる一小兒にして顏色蒼然、神經殊に過敏となり理窟ぽく貽看護婦の姨はれ者なり。生國の阿波なるも幾分は他人に好まれざる原因ならん。最西隅にあるものは巡査をなせし人にて、亦我と同病、正月一日に入院せりと云ふに至りては亦甚し。我等の苦情を云ふ可きに非ず。向側には炭鑛の人の汽車に於て負傷せしもの多し。彼の汽車の連結甚だ危險なるが如し。炭鑛たるもの大に鑑みずんばある可からざるなり。此夜より牛乳を呑み、下劑を服す。明日の手術に便ならんが爲めなり。

一月四日。晴天。此日午後より手術あり。森本、木村の二氏立合はる。痲藥を服せしめらるゝ時四十許り數へし由、治療中には大聲に軍歌樣のもの謠ひし由覺醒して後二人語れり。失態失態。此日一日身動き出來ず。二度吐く。夜深くして人靜まりたる後階上廊下寂として聲なく、時に小兒の悲鳴聞ゆるなどそぞろに心を牽きて、一種鬼氣人を襲ふを覺ゆ。此日より以後森本、木村、伊藤清三の諸氏殆んど每日の如く見舞ひくれ、親友のありがたさ此時に思はれて、諸氏の歸後涕出でし事あり。

一月五日。此日餘程恢復し來りて、あまり苦痛も感ぜざる樣になれり。此後三四日靜臥せしめらる。

× × × × ×

此後經過漸次よく、追々同室の人とも談話出來る樣になり、各種の階級の人々の話最も興ある事に聞けり。臺灣話、警察話、鐵道談、各得意の所、皆外科施術を被るものなるを以て氣色左程鬱々たらずして快談四方に湧く事あり。坂本氏よりも度度の見舞あり。其中に立てる樣になり、歩ける樣になる。鬱勃せる病院を出でゝ大道を歩みたきの念、天氣の好き日などは盛に起る。色々なる事など考へて、時々書き集めたるものを日章會雜誌に投書せり。如是我觀今一つ出したり。朋友諸子及び家よりは度々の書信あり、實にありがたき芳志手紙の來る事、實に樂みなり。

驚くべきは增田が斷然商業學校を辭して京都同志社に轉ぜし事なり。余はこれには驚かざるを得ず。其善不善は暫く措き、氏が此決斷は凡々の輩の及ぶ所にあらず。然し余は充分氏に問ふ所ありたり。未だ委しき返答を得ず遺憾々々。これから東京に歸りても最大の快樂を一つ失ひたり。何やら非常に淋しくて困りたり。是れ所謂新渡戸先生の miss と云はれしものならん。此の如き切なる思ひは朋友の上には初めてなり。

十五日の夕、星野勇三氏來りて突然星野純逸死せりと云ふ。余は信ずる能はざる計り驚きたり。嗚呼、君果して客死せるか、君が體色の甚だ疲勞せるはこれを見、これを聞きて幾分か懸念する所なきに非ざりしも、かくばかり早かりしとは思ひ掛けざりし。云ふまでもなき事ながら、君は實に一世の俊才なりき。余未だ深く知らずと雖も、事に勤勉にして稜々一片の奇骨磨し來りて滅す可からざる者を見たるは、余が短日月の間に於ても屢々する所なりき。嗚呼君志を抱き中道にして倒る、

誰か愴然として其死を痛まざるものぞ。誠に其家族の諸子唯君を以て獨りたよりとなし居りしに、一朝にしてこれを失ひたるの悲嘆果していかゞなりけん。思ひ遣るだに涙下るなり。其後朋友諸子來る毎に談此に至らざるなく、皆悉く失神せるものゝ如し。君も亦かく多く君を記憶せんとする人を有するを以て見れば幾分か憾を減す可きか。家元甚だ富まざる由、有志早速集金してこれを家族に送りし由なり。余は多く云はじ。唯永く此好男兒の英風を記憶して研礪となす可きなり。忘るゝな。夭死せる英雄を記憶するは、唯吾人五六輩の大責任なり。

一月二十三日。此日漸く退院を許されて家に歸る、しかも毎日病院に通はざる可からざるなり。

一月二十六日。故星野の追悼會を中央寺に催す。寒星光を雪上に落して北海の天地黒幕に蔽はるゝ所、君が生前の肖像に對して赤心の壯士何人膝を擁し涙を垂れて君が前行と各自の感慨を吐露しぬ。滿座寂然、唯朔風の雪を捲きて戸牖を打つあるのみ。十時半散會し、各雪を踏んで家に歸る。皚々たる一白の乾坤人をして悚然色を正さしむ。歸途、感慨無限。

二月一日。火曜。朝來風烈し。登校す。別に記事なし。午後病院に至る。萬朝報、内村氏の文「天才と品性」と云へるものを掲ぐ。天才の天與にして凡て自ら造り出したるものにあらず、恰も眷族の世襲財產の如くなれば、これありとて決して誇るに足らず。然るに品性に至りては、自ら修養して始めて得可きものなり。今日、日本に必要なるは決して天才にあらずして品性なる事を極論せり。又支那に於て、獨逸の番兵殺されたりとの電報ありし由なり。極東の多事思ふに益々繁ならんか。家及び二條氏に發便す。二十五錢、藥代。二十二錢、切手代。

二月二日。水曜。早朝より雪霏々たり。出校す。別に記事なし。此日星野君の遺品なる "History of Rome" 及び "English Literature" (Underwood) を讓り受く。庶幾くは君が形見となさんが爲めなり。七時より十二時迄を夜學校に於て謠はす可き唱歌を造る爲め消費し終れり。僅々たる小文字、而も責任を以て書かんとする時は苦痛甚だし。素養のなきも亦一原因のみ。一圓二十錢、兩册の代價。

二月三日。木曜。一天晴朗。日南天に沖するに當りてや和煦として一帶の風物陽春の如く、藻巖山腹の晴霞遠く白羅を引

き山容朦然として靑鬢の如し。樹々相烟り檐端點々として軒滴の聲を聞く。木村氏と相望んで故山の風物を思ふ。

氷柱解けて故鄕の梅の思はるる

病院に到る。未だ何日を期して全治するや計られずと醫師は云ふ。

春立たんとす癒えぬ病を何とせん

夜 Dodey 夫人の許に至りて Swinton の History の講義を聞く。天長へに晴れて月魂天地の廣を照し、雪と星と相映發莊嚴美妙殆んど極まる。獨り煢然孤影と共に詩を高吟して歸る。水野君より受使す。七錢、洗滌代。

二月四日。金曜。快晴。出校す。此夜故星野の遺書 Underwood の English Literature を讀む。其中君が愛讀する所の “We are Seven” あり再讀三讀感慨實に多端。又增田氏より受使す。我の忠告に對しての答書なり。其辭慷慨激越我をして淚を以てせずんば見る可らざらしむ。即日返信す。八錢、雜記帳。十三錢、卷紙、筆。七錢、洗滌代。

二月五日。土曜。晴天。出校す。別に記事なし。夜坂本氏を訪ふ。坂本氏の談話中唯をかしと思ひし一節を記載すれば、「信州松本に一士ありけり。何事のありしにかふと其友といさかひして腹立てるまぎれに腹かき切りて咽をも刺しぬ。人々驚き慌て直に池田謙齋氏を招き、あふれ出でぬる腸を收めてそを縫ひしにやがて癒えぬ。稀有なる人かな。危き命拾ひ得たるよと人々云ひあへりぬ。程經て松本の藩にて高田を攻むる事ありけり。例の士又打立ちけるが、戰の際となるに唯打戰いて人の後へにのみ隱れ、はかばかしうは口も得云はですくみぬ。人々の心なの人や捨てぬべき命助りぬるさへあるにそを惜むいはれやあると、あざけるさへ知らぬげにてかちどきして歸るに、留りぬる人々出迎へてこれをねぎらふ。酒の筵開けぬるきはにも例の士のみあらざりけり。いかにしけんといぶかる中に、或人我先の程より度々厨に入るに、入る每に人ありげなるは最と心得ぬとて至り見るに實に彼の士又もや此處にて腹切りてぞありける。腸の拔け出でゝ三尺ばかりも打垂れたるを、先の事など思ひ出でゝ人々そをたぐり收めて縫ひたるに、暫くして又事なう癒えにけり。其人五十四ばかりにやいさゝか氣狂ひたるふしこそありけれ。人なみなる齡保ちて身まかりぬ。機を見ぬ死樣のみしたるものかな。唯天命の全かりしの

みぞ取所なるべけれ。」

三日發行の萬朝報に内村氏の『人物を造れ』と云ふ論文あり。軍艦を造り、政綱を造るを止めて人物を造れよ。政綱整然として倒れしの國あり（Rome の如き）。軍備完全にて衰へたる國あり（例へば十七世紀の西班牙の如きもの）。未だ大人物のある所にして滅亡に至りしを聞かざるなりと。

二月六日。日曜。雪天。朝入浴して病院に至る。午後、偕行社の催しにかゝる遊戲會ありしを以て出席參觀せしに、不平の事ありとかにて農學校生は一同退場しぬ。故に半澤氏に至り、森本、木村氏と雜談夕刻に至りて家に歸る。要するに今日の日曜日は快多きものにあらざりき。七錢、洗濯代。

二月七日。月曜。雪天。出校す。夜、中央寺に參禪せしに休學。我級に一の確乎たる meeting を起して全校團結の魁をなす可きの時は益〻逼れるが如し。八錢、金ツバ。

二月八日。火曜。晴天。出校す。午後病院に至る。其外別に記事なし。今日星野等と相談し愈々 meeting の實行に着手せり。七錢、洗濯代。二條氏より受便。家及び水野氏に發信す。

二月九日。水曜。晴天。出校す。此月非常に頭腦の錯亂を來し、例の如く眼は瞶乎として字々辨ず可からず。昨夜疼痛を感じて度々目醒めしも一の原因なりしなるべけれど、近來運動の全く絶えたるは之が主因なるべし。故に市中を散歩して散髮せしに大に輕快を覺えたり。外國語の力の不足なるは實に殘念、人の二倍の勞力と時間とを費やして漸く意を解するを得、少時不勉强の結果悲しむ可し。しかも向後益〻之れに勵まん。九錢、散髮代。

二月十一日。禁酒倶樂部に通俗講演會あり。中、尋常中學校長矢島錦造氏、演說中、禮の缺く可らざるを論ぜし一例として一の比喩話をなせり。某禪師の雜錄中にもあるものなりとぞ。

「或る家に富も位も年も同じ程なるが二人住みけり。初めは二人最心あひたれば諍ひもなくて過ぎしが、一日其中の一人思へる樣、彼も五寸頭を下げ我も之と同じくば心なき業なるべしとて、是よりは四寸下げたり。他の一人又思へらく、

をこがましき事をなす者かなとて之よりは三寸下げけり、かくて過ぎ行く程に、二人相見ても禮はなさん様なくなりぬ。これにもあかでや、一人首を後様に一寸打ちそらして、我こそは顔に振舞ひければ、又の人まくべしやはとて二寸反しぬ。一人又案じ出でゝ、よし〳〵爲さん様こそあれとて行き遇へば直に上様に打ち倒れ、更に題のある所の疊を打ちのけて板床に頭を垂れて鼻うごめかす。一人くやしき餘りに様々と思ひ惑ひぬる末、打伏して顔をひたと疊に付け、かくばかり人をあなどりたる仕方は又とあるまじと氣色伺ふに、一方の人いたく打驚きて己れもはたとかしこまりつゝ、許し給へ今まで君をあなどり申せし事の最愚かなりしよ、かくばかり厚く禮せられては面を向けん様もなしとて、ひた恥ぢに恥ぢ入る様の不思議なるに、ふと己れの爲せる様を見るに實に實にこれぞ禮の最厚き物なりける。此人も最恥ぢて交らひ昔にも勝りしとぞ。」

二月二十五日。 嗚呼余は血氣勃々として希望堵の如く、己れを信ずる最も厚き青年壯者が劈頭第一に厭避する宗教の必要を益々信じぬ。余は青年なり、壯者なり。血氣勃々たる可きものなり、希望堵の如かる可きものなり。己れを信ずる最も厚かる可きものなり、而して自ら喜んで指を宗教の問題に染め、所謂血氣を抑制せんとし、所謂希望を放抛せんとし求めて己れの至つて無力なるを確信せんとす。嗚呼、寧ろ人は余を指して何とか云はん。

　しかも余は世上に一の動かす可からざる定理を發見せり。彼の射る者を見ずや。初め師に就きて僅かに其法を修得するや滿を放つ毎に多く正鵠を誤らず。人以て異となし、己れも亦自ら射技の意外に容易なりしを訝る。しかも積日幾日持弓番矢の體略備り、的に對して姿勢嚴然たるに至れば、其矢甚だ流れ正鵠を得るもの殆んどなく、功を積むに從つて益々中らず、終に射を放抛せんとするに至る。しかも忍んで事に從ひ工夫百番、十日にして一法を得、百日にして一技を案じ、心の應ずる所手足皆動くに至るや弓と矢と既に一致し、弓矢と人と既に一致し、人と的と既に一致し、凡そ得て以て射とす可きもの咸渾然同化して乗つて法ならざるはなく、射て中らざるはなきに至る。是れ人の知る所百藝千術此轍を踏まざるものはこれ非ざるなり。其射者に於て初めに中りしものと終りに中りしものと其間の差果して幾何とするぞ。Wordsworth 歌つて云はずや。

Another race hath been, & other palms are won.

吾人は實に other palms を務めざる可からざるなり。

思ふに靑年壯者の血氣なるもの果して眞の血氣か、希望堵の如きもの果して眞の希望か。彼等は己れを信ずる厚からざれは事を爲す能はずと云ふ。果して然るか、嗚呼果して然るか。眞の血氣は腕を扼するにあらざるなり。眼を瞋らすにあらざるなり。天下を無視するにあらざるなり。火の如き熱涙を無辜の人に濺ぐもの、事甚だ小なりと雖も、しかも腕を扼するに勝れり。眼を瞋らすに勝れり。天下を無視するに勝れり。眞の希望は王侯將相を望むにあらず、愛人を戀ふるにあらざるなり。名聲を竹帛に垂るにあらざるなり。願くば一小善事をも求めてこれを爲さん。これ王侯將相を望むに勝り、愛人を戀ふるに勝り、名聲を竹帛に垂るに勝る根本的なる大希望にあらずや。己れを信ずるも亦爾かなり。己れの大のみを信ずるが果して眞に己れを信ずる所以か。否々己れの無限小なるを信じてこそ初めて己れの無限大なるを知る事を得べし。之等の事は靑年壯者の最も口にするを屑しとせざる所、しかも今にして深く思はずんば必ずや後年大累をなさん。初學の射者が的中は永續せざるなり。焉ぞ此心膽を抉してこれを天地に曝し以て他の報酬を求めざる。嗚呼眞理願くば來りて我が心を照せ。

三月五日。土曜。此日午後農學敎室に於て學藝會例會を開く。先輩山下敬太郎氏縷々として經歷談を說く。頗る聞く可きものあり其概略を記せん。

「余や舊又諸君等と同じく當校に笈を移し此堂の如きは同窓と首を鳩め敎訓を受けし所豈長く忘るゝを得んや。余願くば暫く諸君の淸聽を煩し聊か我が經歷を述べんと欲す、一點老婆心あるに外ならざるなり。余當校の業を了へて東京に出で未だ手を社會に染めず。時に濱尾氏(舊の文部大臣)余に勸むるに高知中學校の敎師たらんを以てす。月俸四十圓なりと。余は當時尙磊々たる窮措大僅かに煎餅五錢を以て八珍の美味となせしもの、月俸四十圓と聞きて心豈動かざらんや。以爲らく敎員輩は元より我が望む所にあらずと」(日記以下落丁)

三月八日。此日は余にとりて實に記憶す可き日なり。

此日農場に於て增山余に散歩せん事を云ふ。余大に喜んで之れを諾し、即ち初宵氏を其家に訪ひ、共に携へて雪中に散策す。時に增山決然たる色を爲して余に謂つて曰く、余は君に向つて一大祕密を明かさんとす。願くば聞け、余常に天神の存在を確信し、其定むる所の規矩に從はんと欲し精神を傾倒するも、未だ嘗て多くの進歩を見ず、神の前には實に無極の大罪人なり。余の性固陋自ら顧みて實に此悲みに堪へず、日々夜々煩苦心勞するも遂に神の音容に接する能はず、時に殆んど銃を取つて自ら殺さんかと思ふの時あり。今に迨んで唯一策あるのみ、決然農學校を隱退して若干の宗教書を携へてこれを專攻し、神の音容に接するをこれ求めん。而して求め得可くんば即ちよし。若し求む可からずば唯一死あるのみ、君以て如何となすと。余默聽久しうして殆ど驚愕に堪へず且つや氏が余を信任するの厚き、嘗て漏らさゞるの祕事を余唯一人に知らしむるの知遇に感じ、實に情の窮まる所を知らず。而も人の前後の左右を託せられ、輕々にしてこれを決する如きは余の敢て取らざる所、殊に余は氏を許してかく爲さしむる上は己れ亦一片の覺悟なかる可からざればなり。宜しく愼重事にこれ從はざる可からず。嗚呼、余や不敏にして深く自ら決する事能はず、些事に躊躇して大事を度外視し、本末を顚倒す。自らこれを悟る事あるも矯正する事能はず。何等の弱志ぞや。嗚呼何等の薄行ぞや。氏に對して愧づる所なきか、しかも余は氏に於て、十の七八なる眞面目を見るは易々たる事なれども什中の什これ眞面目なりと云ふに至りては少しく疑なき能はず。Carlyle及びルーテル傳を讀みて感ぜし氏の思想は一時熱血の迸發する事あるも少時にして鎭靜に赴くものには非ざるなきかこれ余が邪推のみ。しかも若し氏にして十の一又は半たりとも此心ありとせば、退學の事は實に實に危險なり。宜しく止めさる可からず。要は余が死を決して氏の說に賛成するにあるか、一は志も固うし其說に反對するにあり。宜しく熟考す可し。

一は即ち余が初めて世事の蹉跌に會せんとするなり。これ元より小事なりと雖も、余に取りては初めての經驗なりとす。即ち眞狩別の開墾地は、或は中止の場合に至るやも計られざればなり。余は幼時より幸福なる家庭の下に長し嘗て悲酸の事に會はず。唯祖母、及び叔父君の簀を易へ給ひし時の淚痕あるのみ。坦々たる大道を橫行濶歩して、世路此の如しとなせしに過ぎず。余の如く單調にして平滑なる生活をなせしものは蓋し其類多からざる可し。而して今此事に會す。固よりこれ瑣

毎の茶飯事なりと雖も豈又濫りに輕々に附し去る可きものならんや。宜しく周到の觀察をなす可きなり。余や未だ天上よりの試みに於て甚だ多くを受けず。しかも早晩必ず續々として來る可し。孟子の所謂、天余に大任を下さんとせば其試みや必ず大ならん、余は忍んで其脚下に抵抗せざる可らず。殊に余は、近來益々余の體格の決して宜しからず、體形全體の structure に於て餘年久しからずと信ず。唯壽命長く保つを得ばこれ天幸のみ。此間父母を初め祖母君等の病氣する毎の心配に至りては常に感佩流涕する所なり。嗚呼此鴻恩を負ふるの余、假令天才に於ては甚だ薄受に屬すと雖も豈奮發せずして可ならんや。

山は自ら高く、水は自ら長し。蟲鳴て快々たるも叢の故にあらず。雲飛んで漠々たるも固より月に關せず。鳥禽は空天に翔れ共高慢の意に非ず。魚鱗は水中に泳げども謙遜の心に非ず。唯其本位に住して個々獨立獨存なり。これを一佛成道すれば、草木國土悉く皆成佛すと云ふ。

三月十三日。與増山厚吉書

我が畏敬し景慕する森本兄足下

余は宛として今猶記憶せり。去歳九月二十三日兄と手を携へて四望淸楚なる農園に遊び、一牧舎の中兄と膝を交へて赤心を吐露せし事を。當時余謬つて君が眷顧を蒙る。深く自ら量るに、余や性狂愚蒙昧到底兄等の匹にあらざりしも、余は兄に親炙するを得るの喜びに堪へず己れの下劣なるが如きは思ふに暇あらずしてこれを然諾せり。爾後、余一日も兄が親切を忘る能はず、必ず報ずる所なかる可らずと心に矢へりき。然れども駑駘はこれを鞭撻幾回するも遂に昂々の驥に及ぶ可くもあらず。唯々心を勞して其尾に附するをこれ勉めたるも、杳として相失せんとす。しかも兄尙余の狂愚蒙昧を捨てず、致ふるに道を以てするのみならず、謀るに兄が嘗て漏さゞる一生の大事を以てす。嗚呼これ何等優渥の眷顧ぞ。余は實に謝辭なきに苦むなり。しかも余は、公々然兄に誓ふを得るの一語あり。曰く、男子意氣に感ず、死を以て報いんのみ。

余は恐らくは兄の諸詢に答ふるの資格なきものなる可し。而も余は固く信ず。痴愚者の言と雖も熟考精慮の餘に出でたるものあらば、其の中必ず取る可きものあらんと。今若し余の言にして兄が一顧に値するものあらば則ちこれのみ。

畏兄足下、兄は暫く余をして兄を白眼視するものたらしめよ。兄に疑惑を有せるものたらしめよ。兄を壓制せんとするものたらしめよ。換言すれば、余をして、兄の敵が兄を罵詈するの言を爲さしめよ。然らば余は兄に一言をも加ふる能はざればなり。

余は嘗て、兄が諄々乎として余に敎へたる宗敎觀を忘るゝ能はず。當時、兄が余に云ひし所のものは何なりしか。曰く、「余は死を以てするも尙足らざる可き心靈の苦痛長く余が心膽の上に刻まれき。君は、余が形容枯槁して脚疾未だ去らずと云へるを聞きたらん。これ余が衆人に對する權言のみ。余は此時に當りて正に心靈の苦痛にありしを知らずや。而して余は今君に、斷言し得て憚らざる喜悅あるを喜べ。曰く、余は神を知りし事なり。余は默禱する時神の淸音に接するを得るなり。余は獨想する時、神の淸容を髣髴するを得るなり。嗚呼、此快味は長く亡びず。余は寧ろ君がこれを取らざるを怪む。」と、音吐炳として余が耳にあり。兄亦必ずや此語を記憶せん。而して爾後僅かに半歲に滿たず。計らざりき、兄が再び垂死の苦痛を受くるに至らんとは。兄は云ふ、「余頃日深夜蓐に伏して眠る事能はず。想深く余が罪責に至れば滿身唯慚愧轉輾反側、時に銃を取つて自ら殺さんとす。」と、嗚呼兄果して然るか。然らば、余は兄の輕忽事に處せんとするを悲まずばあらざるなり。余は固より信仰が幾度かの苦痛を經て始めて堂に登るを知る。又苦痛は絶對的のものにあらず、相對的にして、今日最大の苦痛なりと思惟せし所のものも、明日の苦痛前者に倍蓰するやも未だ豫め計る可からざるを知る。兄が其始め神を知りて、これに則るを得たりと確信せしものは、今日の苦痛ある一階段に過ぎざりしは、兄亦深く自ら反知する所なる可し。而して其苦痛たる、死を以て爭ふも尙足らざる可き苦痛たりき。記憶せよ、當時の苦痛は此の如く爾く激甚なりしなり。しかも心機一轉すれば、昨日の苦痛の跡は夢の如くに去り、至大の音容、瞭として咫尺の間にあり。記憶せよ、當時の愉快は此の如く爾く健全なりしなり。嗚呼當時の事、苦痛は則ち死の苦痛よりも激甚に、愉悅は則ち浮世を蟬脫するよりも健全なるものとすれば、人生の苦痛人生の愉悅これに過ぐるもの何處にかある。余は兄がかくまで激甚なる苦痛の基礎の上に建設したる信仰が、一朝俄然再び不測の苦痛海中に沈淪し終らんとは（假令信仰も苦痛も階段的にして時に變化を來すものなりとは

云へ）思ひ設くる能はざる所なりき。是れに由つて之れを觀るに、現今兄が苦痛を甞めつゝあるもの眞の苦痛なりとせば、前歲の苦痛は云ふに足らざるものゝみ。しかも兄は「死を以て爭ふも猶ほ足らざりし」と云ふ。以て兄を輕忽、事を處するものなりと言ふ能はざるか。若し前歲の苦痛が直の苦痛なりとせば現今の兄が苦痛はこれに過ぐる甚しきものならざる可からず。果して此の如しとせば、死影は殆んど兄を被蔽せるなり。焉ぞ事を人に議するが如きの暇あらんや。しかも兄は悠々としてこれを余に謀り、其答を待ちて事を決せんとす。恰も、既に薄氷を踏みつゝ人に向つて薄氷を踏むの安否を問ふが如し。以て兄を輕忽、事を處するものなりと言ふ能はざるか。兄以て奈何となす。

且つや猶云ふ可きものあり。前歲に於ては兄の信仰は實に驚く可きものありき。何事も安心立命、余兄に接する每に洵に健羨の至りに堪へず。これを兄に訴ふれば兄は則ち余に教へて曰く、「君が求道の猛志未だ甚だ足らず、徒らに事理に吃々とし、言は即ち求道を喋々とすれども心魂は飛越して他事を迂曲す。眞面目なれ。誠實なれ。要は心膽を抉拉してこれを神前に潔うするあるのみ」と。これ實に信仰の蘊奥に達せるものゝ言、古聖出づると雖も焉ぞ此上に加へんや。余謹聽、思はず兄が雄大なるに摶たれて背自ら汗するものそれ幾度とするぞ。一日兄と大脇教授を其家に訪ふ。途次、余兄に祝するに、第一試考の優等なりしを以てせりき。時に兄莞爾として曰く、「余が畢生の苦痛既に去つて、今は則ち懽然たる事、神の愉悅あるのみ。之れを以て試考に臨む。余僭越なりと雖も窃かに儕輩に後れざるを期せり。而して遂に牛耳を乘るに至らずして終りしものは畢竟失策のみ」と。之れを以て見るも、兄が確乎たる信仰を得たりと自ら許せしは蜚を刺すが如きのみ。しかも半歲ならずして、かく確乎たりし信仰は自ら殺さんとするが如き信仰と化せり。兄は何を以て此推移の不可思議なる己を說明せんとするか。嗚呼前歲の信仰は抑も兄が僞信を謬り信じたるによるか。何ぞそれ輕忽、事を處するの甚しきや。

兄は輕忽なりき。前歲に於て甚だ輕忽に事を處するものたりき。嗚呼、信仰の事、實に畢生の最大事なり。主義茲に行はれ、行爲茲に行はれ、行程茲に行はれ、心魂茲に改まるは實に信仰を得たるの時にあり。肉骨は母體より生れ、心靈は信仰に生る。兄は謬つて天父より受けたる身體髮膚を損はんとせり。不孝の罪これより大なるはなきなり。嗚呼、兄にして前歲

に等しき心を持して今日の大事を決せんと欲せば、正に死天屍地何を以てか再び天父に見ゆるを得んや。兄は恐らくは云はん。「余が現在の境遇は、確實に正路を濶歩するものなり。必ず岐路に迷走する事無けん。」余は兄が前年の輕忽を思うて深く兄が此言を信ずる能はざるなり。

且つ夫れ偉人の跡、文豪の書、人を吸引するに於て測る可らざるの勢力あり。殊に多血熱性の青年にして、多血なる偉人の跡、熱性なる文豪の書に接するに於てをや。偉人に接し、文豪に交はり、其感化同化を受く。道に則るの徑路はこれより近きもの蓋し罕ならん。兄の、余に現今の苦痛を語るや頻りに讀書よりの感化にあらざるを辯護して曰く、「余がルーター傳を誦讀せしによりて斷然農黌を去らんとするの希望を生じたりと云ふ勿れ。余は甚だこれを厭ふが故に、誦讀の後既に二旬を經るに垂んとす。しかも初志遂に枉ぐ可らず」と。何が故に兄は爾く讀書の感化なきを庇言せんとするか。余は却つて兄がこれあるを喜ぶものなり。唯惜む、兄の受けたる感化は善惡共に嚥下し終りたるの感化なりしを。嗚呼、兄はカーライルの缺點を知るか。彼は熱性の文豪なり。議論正大なり、しかも新渡戸教授の吾人の前にサーター・レサータスを講ぜられんとするや、夫人甚だ其危險なるを苦慮せし所以のものは何ぞや。轗軻不平なる彼は、己れを律する事非常に嚴なりしと共に、人の非を攻むるに毫も寛恕の餘裕なく、未だ右を取らざるに忽ち左、嘗て後なりしもの直ちに前、殆んど不平轗軻の間に忙死せんとし、全力を己れの行程に濺ぎて靜かに天命の下るを待つが如き大度なし。嗚呼余は、中庸を誤り解して優柔不斷爲すなきものに比すれば、固より斐然たる彼の激俠の士を取らん。しかもこれ激俠の士を優柔不斷なる凡俗者流に比較せし上の事なり。苟も天下の士を以て居らんもの、焉ぞ此激俠を以て自ら任ず可けんや、必ずや他に大本領あらん。余は滙潴の腐敗せんとするものよりも、急湍の目を眩するものを取らん。急湍の目を眩するものよりも、茫然たる暗潮激渦を其中に含みながら洞然として眠れるが如き、彼の無邊なる大洋を取らずんばあらざるなり。

「無智余の如きもの農黌の業を修得するも資本なく、位置なく、遂に社會に獻する所微々にして休まん。寧ろルーターの蹤に從ひ、決然として『野に呼ぶ人』たらん。」とは亦兄が余に敎ふる所、余は兄に問ふ可きものあり。兄若し、自ら凌然たる

經營の才、處世の智あらば、資本なく位置なきも必ずや社會に獻する所を爲し、一方に『野に呼ぶの人』たらんとすらん。これ余が嘗て君に聞く所なり。然らば、兄が社會に獻ずる所少なからんと自覺せしものは、自ら無智なりとせしに依るや明かなり。資本位置の如きは僅々たる贅足のみ。依つて思ふに、兄は自ら無智、社會にあるも獻する所少しとなし寧ろ神を傳ふるの人たらんとするなり。果して然らば世豈此の如きの沒理あらんや。兄は傳教者が天父より特別の力を得、且つ最も多く世を益するを得ると爲すか。處世者が天父に得る所少くして世を益する能はずとなすか。古來最も靑年志士の熱血を勵まし、これをして其向ふ所を知らしめしものは傳教者よりも、傳教者の心を持して處世に成功したる人たるを知らずや。

嗚呼余は涙を以て、兄を白眼視するものたりき。兄を疑惑するものたりき。兄を壓制せんとするものたりき。余は既に長く兄の敵として兄を罵詈する事能はざるなり。嗟余が大罪は終に免れず。しかも兄庶幾くば余が忡々の微衷を察せよ。兄に非ずして誰か余が此大罪を寬恕せんや、噫。

畏兄足下、兄が企圖せし如き大問題は、實に兄自身其判決者たらざる可からざるなり。余が前途せし所のものは、薄氷を踏むの安否を余に問へる兄に、余は兄の薄氷を踏むの危險を知らしめんとしたるに止まるのみ。若し兄にして虛心冷頭、決して薄氷の上に立てるに非ざるを自覺せば、敢然として兄は向はんと欲する所に進め。若し兄が不幸にして薄氷を踏みつゝあるを自覺せば、願くは一秒も早く自ら救へ。嗚呼、余が前述せし所の如きは唯孑々たる議論のみ。余は繰り返して兄に請はんとす。兄必ず他界の障礙に屈する事勿れ。他界の容喙に抑へらるゝ事勿れ。最も公平なる精神を鼓して神の門を叩け、然らば敎へられん。余は繰り返して兄と約せんとするものあり。兄若し決然傳敎に從はんと欲し、修養をなして終に神を得ざれば誓つて自ら殺せ。中道志を變じて初志を枉ぐるが如くんば、兄が生死は必ず余が掌中にあらん。是れ余が兄に報ゆるの最も大なるものなりと信ず。

余は初め兄に面晤して思ふ所を陳ぜんとせり。然れども余の性小情に激し易く、兄の前に禮を失せん事を恐れ强ひて禿筆を呵して委曲を盡さんとす、然も筆路意の趣く所に從はずして、云はんと欲する所の十分が一に及ばず、兄幸に推讀せよ。頓首。

四月十五日。春色駘蕩たる此候に乘じ、都門に於ては華奢なる民衆が費用多き奠都の大祭を施行しぬ。唯北海 地、頃日屋滴聲を收めて、殘雪僅かに消えんとす。柳絮暢び櫻花咲くの時には、尙幾旬を餘せり。北海の孤客南方を望んで、思ふ事なきにしもあらず。今や同窓の友皆其目途の緒に就き、各奮勵志す所を勉む、思ふに、必ずや騏驎の天空を馳するが如きあらん。余駑駘と雖も焉ぞこれに後れて可ならんや。唯勉めて後れざるをこれ期するのみ。しかも期する所あり以て我れ往く可きなり。今日學藝會の文藝部委員を命ぜらる これ余の實に迷惑に感ずる所なり。此の如きは實に余の欲する所にあらず。學生の身として、未だ志想も堅固ならざるに、平然として文を責任ありげに他人者に示して毫も恥ぢざるが如きは、余の駑駘の性を以てしても仍且つ恥とする所なり。然れどもこれ到底辭す可き事にあらず。然らば、余は何れの方面によりて此任に從はんか、是れ實に深く熟考を要す可きの事たり。抑も人が一事を負擔する時、其事の大小たるを論ぜず、必ずや十二分に其責を盡すの覺悟あらざる可からず。若しこれなくして、濫りに其局に當らば、啻に失敗に終るのみならす、往々他人を害するの悲運に陷るなきを保せず。況んや文筆に託して其志想を吐露せんとするが如きは、難事中の最難事に屬す。深く愼まずんばあらざるなり。

四月二十四日。日曜。此日大島先生等と相語る。大島先生曰く、苟も困難に遇はざるものは、他人に寄するの sympathy 決して大なるを得ずと。後これを森本、木村の諸氏に語るに其說大島先生に同じ。然り、元より一二の例外はこれあらん。しかも世の滔々たるもの多く此事あらんなり。嗚呼、余は今迄困難と云ふ困難は殆んど爲したる事なし。しかも余は幾分か、幸運のものが sympathy を人に表し難きを知りしが故に、勉めて人の困難辛苦の跡に耳を傾け、夜學校等にも屢至りて、已れ丈けにては十分の sympathy を表し得たりと爲せり。しかも之れを困難せる人の sympathy に比較すれば、或は足らざる所あらん。これ吾人が最も熟考を要する所なり。人間にして眞の sympathy なきものは殆んど人間にあらず。sympathy なき人間が不德をなすなり。不倫を敢てするなり。縱令不德不倫の行爲なしとするも、苟も sympathy なき人は到底共に事を語るに足らざるなり。而して生はこれを缺けるなり、豈不幸ならずや。然れども佛尊は、九重雲深きの邊にありて、仍且老病死

に滿腔の symathy ありき。余にして正當に困難なる人の境遇を懷ふ時、困難なる境遇は經ざるも豈滿腔の sympathy を表はし得ざるの理あらんや。然れども困難に遇はざる人の注意して culture す可き性情の一は、不幸者に注ぐ可き一掬の熱涙ならざる可きや。

四月二十七日。夜月明にして空霽る。即ち森本君と相携へて宗教談を爲さんとす。君余に問ふに、心靈の修養進歩せしや否やを以てす。余は確然として進歩せりと答ふる能はざりき。然れども、漸次進歩しつゝあるは事實なることを自白する事は得るなり。又君問うて曰く、基督教と吾が信ずる所と衝突せる事なきや。余一事を以て君に問へり。

……But he that shall blaspheme against the Holy Ghost hath never forgiveness, but is in danger of eternal damnation ……

とは如何。然れども、今にして思ふに、余の君に問ひしものは誤れりき。余はかく思ひしなり。「苟も一旦 Holy Ghost を blaspheme せるものは其罪永遠に許されざるものなり。」歸來、其章を熟讀するに「一旦」なる語意其中にあらざるが如し。嗚呼これ實に余の粗忽なりき。

其他君は余に有益なる多くの忠告を賜へり。即ち余が餘りに遲鈍なる事（こは余には實に的中の忠告なり。さりながら余は此事に付きては天性の致す所なり、充分これを矯るには盡力す可きも、恐くは効なからん）、一は余が餘りに世間人間を重く見過ぐるの癖ある事にて、君は之に附け加へて曰く、恐るゝなかれ、反對す可きものあらば大小に係らず敵を作れ。誰にも愛せらるゝ間は決して心の struggle を得る事能はず。心の struggle なくんば、君の如き肉體的に於て何不自由なき人には、sympathy の眞實の心を起す事難しと。これ實に余に向つては鞭撻なるなり。余は往々にして人と事を構ふるの益なきを觀じ、時には他人が己の領分內に入り來るも尙恕して關せざる事あり。これ、一方より云へば或は決して惡德にあらざる可きも、一方より云へば餘りに事なきを希ふの甚しきものなりしならん。大に矯正する所なかる可からず。

嗚呼、余程意志の薄弱なるものはなからん。回顧すれば、余が十四五歲の頃少しは級中に頭角を顯し居りしを以て、何のかんのとおだてられしより、乃公の念勃々として起り、高慢自ら許して、漫りに他人を蔑視せるより、遂に高慢は卑屈とな

り、卑屈は無頼となりて、悪少年に拉せられて其伍に入り、冗費を用ひて衣服をかざり、煙草を喫し得々として力足らざるものを壓制して得たりとなせし時を回想すれば實に慚汗〻至りに堪へざるなり。これより余は小才子の傾向を來して、所謂才子の仲間入りをなし名譽の奴となりて未來の空想のみに耽りたりしも、中道幸にして益友の救ふ所となりて僅かに今日あるを致せるなり。人は余を見て實に其豹變の甚しきを笑ふ可し。嗚呼余は豹變者の最も甚しきものなりき。向後も此の如くんば到底社會に立ちて事をなす能はず。深く鑑みざる可からざるなり。

四月二十八日。體格檢査あり、其成績は、

年　二十年二ヶ月。身長（160糎5）五尺二寸九分。體重（56.300瓦）十四貫九百七十五匁。

胸幅（常時 82糎5 充時 86糎5 空時 80糎5）——二尺七寸二分

五月十六日。月。此日學校は休暇なりしかば、森本君と中島公園の方より圓山神社の方に散歩す。例の如く種々なる談話出でし中に森本は、鈴木眞吉が余を批評する言を聞けりとて之れを余に傳へて曰く、「有島は熱心に於て大に缺けたる所あり。又眞面目ならざるが如し。」と森本これに附け加へて曰く、「眞面目ならずと云ふものは余斷じて信ぜず。然れとも熱心を缺くと云へるは適言ならんと思ふ。願はくば大に思へ」と。余慚汗掌にあふれて實に辱に堪へず。嗚呼これ實に適評なり。余は鈴木を、我級中必ず爲すあるの士と信ぜり。故に其言胸に針さゝるが如し。先きには祖母上の「一心」と云へる事を懇と說諭し給ひしさへあるに、其後と雖も蠢々として一日を偸安せしは實に愚と云はんか、痴と云はんか、慚愧に堪へず。願くば大悲佛我の請願を聞き屆け給ひて、熱心となる可き志想を鼓吹し給へ。嗚呼、此冷淡の性質を奈何せん。

五月二十七日。金。滔々たる世は溷濁に溷濁を重ね汚穢は汚穢に赴き殆ど底止する所を知らず。浮世の事は皆 humour なり。一として謹愼の眼を以て見るに足る可きものなし。此の如きオチヤラマカシの世の中亦何の暇ありてか眞面目たらんとは一般人間の等しく稱道する所。余と雖も今迄　、世上が轉倒と諸譃とによりて充滿せるは信ぜざるを得ざる所なりき。見よ、彼の大政治家を以て自任する者、即ち日本臣民の代表者たる可きものにして、其素行に至りては田野の匹夫にだも劣り、

素封家を以て世に目せらるゝもの、黃白を集むるのみを知りて之を散ずるの道を知らず、金の爲めに生きて金の爲めに死す。所謂叢穴の處士、諤々の論、端然として名利の念一切眼中になきが如きも、一朝權門の招くに遇へば匆卒拜趨唯後れざらん事を之れ恐る。忠愛を喃々して虛名を博せんとするものあれば、これを攻擊する事によりて人の側目を牽かんとするものあり。靑年は老人の如く、老人は小兒の如く、女子は男子振りて、男子は女子の體をなす。自負の念は富士山より高くして、しかも强きに遇へば之を恐るゝ事獅虎の如し。惡行俗人をして嘔吐せしむる墮落僧あり、僞善識者をして唾せしむる腐敗牧師あり。甲なる可きものは乙にして、乙なる可きものは甲。世上滔々何ぞ轉倒の事堵の如くして其爲すの寧ろ滑稽に近きや。思ひ此に至る時誰か憤慨の怒氣を發するに及ばず、呆然として世態のあまりに烈しき行違ひに失笑せざるものあらんや。遮莫進一步して一層の高處に登り社會を達觀し來る時、我は伊藤一隆氏が嘗て「世間は豫想外に眞面目なり」と論破せし事の味極めて深きを覺えずんばあらざるなり。鬱蒼たる大樹が毛の如き小根を要する如く、巍然たる高樓のあるあれは、其下必ずや晝猶暗き土窟ある如く、大なるものあれば小なるものあり。高く淸き者あれは低く暗きものあること、之を社會の狀態とせば humour ある時豈 sober なからんや。若し humour にして現世的に世上に跋扈するの時あらば、sober は暗潮の如く社會の一方に反流せん。吾人が眼を或方面に傾くる時、着々此事あるを自覺せずんば非ざるなり。此の如き時吾人は果して二者の何れをか取る可き。此に於て吾人は一も二もなく眞面目なるものを選ばん。又選ばざる可からず。世上の外見は滑稽なり。近づく可からず。暗潮は眞面目なり。滿腔の熱心を以て從事す可きなり。

七月十五日。『東京獨立雜誌』なるものは一ケ月前內村鑑三氏主筆として生れ出でぬ。楚々たる小册子のみ。しかも全文を通讀し來る時、一道の奇氣卒然として人を襲ひ、卷を閉ぢて猶餘音の何れにか響くを覺ゆ。余は敢て該雜誌の文章巧妙なりとは思はず。該雜誌の記事、他人の道破せざりし驚天動地の事なりとも思はず。唯平靜の筆を馳せて、吾人が耳目にせる處を書し、句節の間毫も拍手快哉を呼ぶが如き事なきも、讀了して一種の influence を感ぜざる能はざるものは、唯それ內村氏が滿腔の熱心と至大なる同情とに因するかな。

余は決して內村氏を perfect なる人とは思ふ能はず。今や內村氏を欣羨する人靑年の間に起りて漸く多きを加へんとす。余は內村氏にして早晚社會より此の如き報酬を受くるの當然なるを思ひたりき。內村氏の燃ゆるが如き情火は、如何に靑年の油多き心靈に火を點ずる事の速かにして嚴しかりしよ。少しく彼を味ふの靑年は、百川の大海に朝するが如く彼の下に集注せんとす。今や世間滔々婬靡を事とし漁色を榮とし、名に迷ひ酒に醉ひ、弊は益々烈しくして滔々靑年の間に蔓延し、女義太夫は到る處に勢力を逞うし、酒を假りたるの空元氣は到る處に拳骨の雨となり、我が勝利の疑ふ可からざるを期して後「假令身は如何成るも」など稱へて敎師排斥の運動試みられ、「君は水流にくめ我は薪を拾ばん」と歌ひながら眞正の友誼は地を拂はんとす。此の如き時に當り、內村氏の言論に耳を傾け若しくは心を傾くるものあるは實に我國の慶事と云はざる可からず。內村氏に聞く彼等は決して無頼の靑年に非ざるなり。必ずや多少の定見あらん。而して內村氏の言論が是等靑年の頭腦に侵入し深く印象を加ふるに足るは其文を讀む者の直に首肯する所なり。こは實に慶事なり。されど余は決して內村氏を perfect なる人と思ふ能はざるが如く、內村氏にのみ依りて思想を造らんとする靑年が perfect なる域に達する能はざるなきやを思ふ時、少しく不安の思ひなくんば非ざるなり。

疑ひもなく內村氏は實行の人なり。彼は敎會の信ずる可からざるを知るや、直ちに籍を脫して毫も憾むの色なかりき。彼は　の拜するに足らざるを知るや、幾多鬼の如き硬靑年の前に恬然として其所信を枉げざりき。彼が米國に留學せる間の事業は、實に感ず可く嘆ず可き事のみ多かりき。其痴兒院に入りて、掃洒の事より日々の起臥に至る迄痴兒を助けて卽ち抛られ、時に唾せられてしかも悔いざりしもの、思想の高遠なるに非ざるよりは焉ぞよく此に至らん。彼は之れと共に苦痛に對する經驗の多くを嘗め盡しぬ。彼は敎會を脫して敎會の惡魔と呼ばれ、　に缺禮して不忠不義の賣國奴と罵られ、最愛を失ひて人生の無常に觸接し、國外に漂泊して幾度か外夷の侮を受け、痴兒院にありては奴婢だも爲さゞるの卑業に從ひ、人と語る每に殆んど會心の思ひを得る能はざりき。故に彼は、屢々職業を求めて屢々退きぬ。此の如き困難は少くとも彼が從前經驗し來りし所なり。彼の言論が常に一種の確信に滿ち、滔々として俗潮を顧みず、一種の authority が句節の間に隱見

するを見るもの、豈偶然なりとせんや。彼は此の如く實行の人にして經驗の人なり。故に、其言論は無責任の空論にあらざるが故に貴し。しかもそが悉く眞理なりやは別問題なり。余が内村氏に學ばんとする所は實に其心志にありて、其思想（少くとも言論に顯はれたる部分）に至りては、余は悅服する能はざる不幸を有するものなり。

Carlyle は彼が私淑する所なりとは定論なり。然らば Carlyle とは如何なる人か。余は無論彼が世界大偉人の一人たるを否定する事能はず、然れども世界の大偉人と雖も決して perfect なるものには非ざるなり。余は Carlyle に於て殊に其長所なる部分の非常に發達せしと共に、短所なる部分も亦少なからず發達せしを認めずんばあらず。然り perfect man と great man は常に一致するものにあらず。余は、great man なる Carlyle が perfect man として、未だ百步の遠きにあるを認む（但し余は Perfect man は一般の意味に於て必ずしも great man なりとは云はず）。故に、彼を學ばんとするものは、其長短共に極めて感染し易きが故に（如何となれば彼は大なる長所と大なる短所とを有したれば）、往々にして思想上の不具たる事なきを保する事能はず。これ Carlyle を學ばんと欲するものゝ深く留心せざる可からざる所ならん。Carlyle を學ぶの利害既に此の如し。内村氏は果して如何に Carlyle を學びたるぞ。これ吾人が内村氏に聞かんとするに先ちて、研究せざる可からざる問題ならずや。果然彼は Carlyle より其長所を多分に學び得たり。彼が獨立不羈の雄志、篤信の厚想、品行の端正、利欲に對する Transcendentarism 等咸な是れなり。しかも之れと共に、Carlyle の缺點も併せ學びしの痕跡あらざりしか。Carlyle の矯激なる其書 Sartor Resartus の如きは、英に於て出版するものなく、僅かに亞米利加に於て Emerson の同情によりて發行せられしが如き、畢生眞知己を得ずして逝きしが如きは、元より彼が思想の高遠、幽邃なりしに因す可しと雖も、又其性の偏狹[illegible]なりしも之れに與らずとせんや。Carlyle は死後に至りて漸く其眞價を認められんとし、内村氏は世に擯斥せられしより十年に滿たずして人は前言を口に絕たんとす。此因を探りて三者を得たり。一に曰く、日本國民の健忘性なるに因るか、二に曰く、Carlyle の品性内村氏より高くして長く俗人の容るゝ處となる能はざるによるか。三に曰く、内村氏が Carlyle より長所を學びて缺點を學ばざりしか、少くとも缺點を學ぶ事少なかりしに因るか。吾人は切に其第三者ならん事を希望すと雖

も、或は此希望が或る點まで失望に終るなきやを遲疑するものなり。今の内村氏に學ばんとするもの豈心せずして可ならんや。余は普通の論者なりせば、内村氏の有せる位の缺點は毫も留心するに足らざるものと思ふ。唯内村氏は火の如き人にして、物に接するや焔々たる情火を以て金鐵併せ熔するの概あるに依りて、此語なき能はざるものなり。

憐れなりし事共――**七月二十三日。**我事ありて森氏がり訪れての歸るさなりけり。五月雨るゝ空の最と濕やかなる中をそゞろ行くに、とある家より琴の音聞えぬ。はと胸とゞろかるゝ計りの心地して見やれば、竹籬に其主は知るべうもあらず、絲の如き雨唯蕭々として行人の袖に落つ。琴彈く人の心はた如何ならん。此雨の日頃を唯寂しとてか、はた面白しとてや、偕ては悲しく思ひくんずる方もやあるらん。聞く我さへ唯何ともなう優しく哀れにて、果ては我にもあらず打ち止まりて、言ひ知らぬ思ひに天人の樂さへかくやなどとぞ思ひ浮べられつるよ。かくて夢心地して過ぎがてに又稍ゝ歩む折しも、黒き足などあらはにしてわざと下駄はき、鬚むくつけき男の人力車引きて來るに遇ひてよく見れば、車の上に埋まるばかり少さき女の童一人打乖りたり。頭はかむろとやらん、黒く房々しきをそろへて肩のあたりに打切り、形いやしからぬ被布ゆたかに着なしたるに、圓顏の頰の肉赤う肥えてゑくぼの露したゝらん計りなるに、眼は形よう開きて美しき夢見たらん樣なるさへあるに、口のあいぐるしき世の常ならず、何事にか最まじめにて男に語りつゞくるを、鬼の如き男は滿面に笑み傾けて我が步くも忘れん計りに聞きほれつゝぞ行きたる。

定山溪遊記――**七月二十五日。**鷄鳴第一聲夙起して曉露を踏んで寄宿舍に至る。舍内寂然、唯當直室の燈火夢の如く淡きを見るのみ。時に鐘樓を見れば、恰も五時半なり。瀧等未だ目醒めず、漸くにして七時出發す。此時既に夏日赫々として昇り、今日の辛酸を豫占せしむ。同行者四人、曰く荒尾、曰く鈴木、曰く蠣崎、曰く瀧是れなり。豐平橋を渡り右して間道を乘りて眞牧内種畜場に至る。流汗淋漓、荒尾前日まで病床にあり、此に於て疲れ頓に至り休む事殆んど時餘、又發して石山に至るの時は既に十一時に近かりしを以て中食す。蠣崎、瀧と共に石山を題として卽吟す。

石山や（以下なし）　木馬

鶯の何悲しむか夏も鳴く　　瀧

石山を石積む馬の喘ぎ哉　　隼

荒尾益〻疲勞し歩々蹣跚として甚だ危し。籐前に至るに及び驛馬を傭はんと欲すれども無し。已むを得ず、蠣崎と共に間行し來らしめ余等三人急歩して先づ定山溪石川亭に着す。時に暮色既に四方より至り、夕嵐欄頭に落ちて谿聲湧くが如く、四巒蒼然として獨り泉烟の頹日に迷ふを見る。景の幽邃例によりて超絶す。三人等しく疲を忘れて快哉を呼ぶもの三、即ち河上の温泉に浴す。心身二つながら爽然、既にして荒尾、蠣崎の來るに會し、燈下笑談して晩餐に就きぬ。

七月二十六日。天候依然よし。余獨り夙起し温泉に浴して自炊の準備をなし又讀書す。神心澄徹、書に對しても毫も亂れず。唯話者の多きが爲めに思ふが如くこれに耽る能はざりしを憾みとす。午後橋口農場の一小作家に就きて野菜を買はんとす。遙かに一小屋を見る時、小犬の强吼して余等を迎ふるに遇ふ。平然として進んで門戶に逼り、內を窺へば姉妹二人あり、傍に一嬰子を看護しつゝ相嬉戲す。余就て其母の所在を問へば長女嬌羞を發し眼を垂れて僅かに答ふ。齡十一二、無邪甚だ可憐なり、母なる人、畑中にありて耕種に從事す。之れを呼び乞ふに野菜を以てし僅かに體菜と少許の豆を得たり。夜飯の美味は之れのみ。此家の主人は傳習科の卒業生なり、嘗て師範學校を卒業せしものなりと云ふ。性勤勉にして忠實、傳習科生徒の模範なりと云ふ。唯其人に接せざりしを憾みとするのみ。

七月二十七日。陰晴定まらず、一日を無爲にして終れり。

七月二十八日。此日鈴木敬策歸り、荒尾病宜しからず。

七月二十九日。朝來雨濛々たり。今日は井街、鈴木の來る可き日なり。然れども雨此の如し、恐らくは來らざらんと思ふ。然るに午後二時、二氏卒然として傘衣露を滴らして來る。無聊の同人懽喜して之を迎へ、これより室內又更に喧なり。ウヰリヤム・ペンの傳を讀む。ペンや名族の家に生る。其父海軍に職を奉じて功名の念日夜を捨てず、其兒の眞面目にして寡默の人とならんとするを見て靑雲の志にあらずとなし、方を講じて勉めて華捷ならしめんとす。ペン幾度か其毒界に投ぜられ、

心志幾度か素行を捨てんとしてしかも嘗て晦まされず、毅然として其向ふ所に進み、父をして一度は怒りて放逐し、終に其志の奪ふ可からざるを知つて其欲する所に從はしむるに至りぬ。爾來幾度か心身の强敵に遇ひてこれと健闘し、從容屈せず、多々益ゝ辯ずるの概あるを見る。しかも其間其家庭に送る所の手書の如きは、温然春風の百花を吹くが如く、人をして思はず英雄の胸中閑日月あるを嗟嘆せしむ。ペンや其名廣く聞こえずと雖も、しかも深し。靑年血氣　徒ナポレオンを聞きビスマルクを聞けば慷慨激越、鋏を彈し唾壺を破り、昂然として四海の志を發す可しと雖も、しかも深く其志意の仍りて起る所を探れば、漠然として雲をつかむが如く、之れを久しうして夢に似たる感なくんばあらず。然るに、グラッドストンに聞きバーンに聞くもの初めや慊焉として未だ我が師表となすに足らざるやの感あり。唯衷情其人の堂奥を極めんとするの傾向は益ゝ深きを見る。かくの如くして次第に其人と爲りを知るに及びてや、畏然として其前に容を正して、其諤々たる言を聞かん事を欲せずんばあらざるなり。ペンの性行の如き、實に此の如きものあり。行爲の單純なる、强ち意識の單純なるを表はさゞるなり。意識許多の struggle を經て初めて行動矗として一絲亂れざるを得可し。其雲となり雨となり龍攘虎嘯の行動あるもの、未だ以て其意志の確乎拔く可からざるに至らざるを現すものに非ずや、非耶。

七月三十日。晴雨不定。初めて御所芋の新しきを得、食に及ばずして食し、膳に向へば菜なくして腹は卽ち滿ちたり。終に食せずして止む。夜、旗亭の主婦及び阿嬢來り雙六をなす。數々の失敗に滿面の墨痕夜を徹して落ちず。此夜晴明一點の雲なし。谿河水倍して聲更に淙々、浴止んで山頂十三夜の月出づるを見る。淸新幽逸情を牽く事誠に多し。卽ち谿橋を渡りて前山を步す。泉氣高く早く山腹に搖曳して白霧の如く、月下の草木陰黒うして其間に隱約し、恰も生を得て隱れ且つ現はるものゝ如し。筧水の急雨の如く奔下するを掬ひて之れを吞む事三口、滿身嚼如たるに至りて更に長古を歌ひ悠然亭に歸り、二更寢に就く。時に雲出でゝ嫦娥屢ゝ蝕まれ、終に暗黒裏に沒入して獨り谿聲の滔々たるを聞く。

七月三十一日。荒尾の病益ゝ惡く飮食共に吐く。自ら意を決して終に歸らんと云ふに及び、驛に命じて馬車を僦ひ、驟雨一過の後御者の晴天を斷ずるを聞きて卽ち發す。時に二時。去るに臨み多少の感あり。嶋崎獨り殘る。橋を渡りて山棧を步する

に、對岸に在りて遠く望み大聲して告別す。聲次第に遠く、谿聲亦細く、水失し、橋失し、蠣崎失し、旗亭失するに及びて茫然として徐洒空しきの感に堪へず。既にして雨又降り、蕭然車を擁して歩むの樣恰も敗卒の負傷の將に侍して窃かに走るが如し。余と鈴木車を挺して先づ進み、急歩して石山に達す。時に五時、卽ち粗菓を買うて空腹を癒し、夜に入るを恐れ後者の來るを待たずして先づ發し、冬蘋葉に雨を凌ぎて豐平川を徒涉し、藪逕を拾うて漸く水門に達し點燈の頃家に歸る。人無し卽ち飯せずして寢ぬ。翌、晏起して夜來奇夢の頗る多かりしを覺ゆ。

九月三日。此夜、西本願寺別院に島地默雷師を訪ふ。我は、若し師が淸閑あらば少しく佛教に就て聞く所あらんと樂みつゝ行きぬ。程なく案内せられぬ。師は例の如く小軀莞笑を以て迎へられぬ。座邊には唐紙に師が書かれたる書の幾枚も散亂せるを見ぬ。外に役僧二人師に侍しに雜用を辨ぜり。我は師に問ふ折もがなと思ひつゝ在りし間に、老いたる一人は來りぬ。何か人の前をも憚らず雜談を始め、役僧亦これに和して我を省みざるが爲めに、我は終に師と談ずるの機會を得ず、空しく跪坐して、是等の談話を傍聽するのみ。既にして我僅かに釋迦の傳に何者あるかを聞きて『御世の光』と云へる書あるを師より教へられしに、先きの老人又口を出して『大聖釋迦』ありなど云ひて又話を他にそらさんとす。我又、釋迦の說教せるものゝ中、我々が最も何を讀むべきかを聞きて、維摩と今一つを得たるもよく聞かざる中に彼の老人又談を他に轉じ終りぬ。腹の立つ事甚しけれども、師も亦平然としてこれと對談し我には至極冷淡なれば聞かん術もなし。卽ち匆々辭じ歸り、所謂佛教信者なるものが彼の老人の如く、所謂大僧侶なるものが雨田師の如き所爲を爲すかを思へば、我は佛教の僧俗には賴るまじとは覺悟しながら、佛教の惡しき爲め此の如き信者を生ずるには非ずやとの疑問に閉さされんとして痛く今迄の忍耐を失望せんとするなり。嗚呼、佛教は果して信ずるに足らざるの教なる可きか。嘆ぜざるを得んや、嘆ぜざるを得んや、嗚呼、今日の師が談話の中には、日蓮宗の僧侶が躁ぎ立ちし時、危しと人の戒むるものありしかば夜などは說教に出でざりきと言ひ給ひき。勿論無益の徒に貴重なる命を與ふる馬鹿は非ざる可し。さればとて源空法師配流せらるゝ五年にして死せし時、「此禍に逢はずんば爭でか專修の道を海內に廣むるを得ん」と言はれしと聞く。源空は配流せし人があながちえらき人とも思はざ

りしならんに、是等にさへ飽くまでも道を説さて終に流刑の憂き目を見し事の愚かさよ。雨田師は賢者なるかな。

十一月十二日。 此夜豐平館の上に宮川經輝の演説を聞けり。氏は現今の所謂元勳なる人、例へば山縣、樺山が至誠と云ふ點に於て大に得る所ありしを云ひ、下りて三十、四十歲位の人に至りては此點に於て大に缺くるあるを云ひ、術に長けたるの人は多くしてしかも中心至明なるものは寥々たり。しかも先人が爲し來れる素養の幾分は此人等にも遺傳せるが如きも、再び下りて二十、三十前後の人に至りては修養と稱す可きものゝ如きは全く缺如し、紛々たる輕薄殆んど云ふに忍びざらんとすと痛論し來り、精神界の最大危機は此時なりと斷案し吾人は宜しく畏敬の念を養成せざる可からずと結論せり。余は師の人物の如何を知らず、又其演説の深淺を考ふるに由なしと雖も、余は今日の靑年が愈々輕薄の域に陷らんとするを見て、自ら省みて寒心せずんばあらざるなり。余は常に思ふ、今日の元勳者の行爲と手腕が如何に鈍なるかを知らずと雖も、彼等は少くとも一度は死地に臨めるの士なり、或は孔道、或は佛道に參せるの人なり。當今の學生の如く死者を見し事なきもの多き類にあらず、又宗教を裝飾の如く見做して孔子も佛も基督も一通りは研究しながら深く何れにか依りて自ら立脚地を確定せざるの類とは選を異にせり。彼は確かに狹し。彼等は又野蠻的なり。しかも一片耿々の心は猶彼等の中に見る可きものあり。彼等は少くとも一方に眞面目なり。而して今の所謂靑年に至りては、或はカントを說き、或は孔子を罵り、或は佛教を論じ、或は基督教を輕重し、其橫に極むる所は頗る廣きに亙れりと雖も、深さに於ては秋毫も見る可きものなく、古聖百日の教示唯飯前の哲學談として雲烟視せられんとす。所謂靑年なるものは堂々として宗教を論ずるの傍に、利と名と金とに齷齪しつつあるなり。彼等は眞理の貴重す可きを云ふ。しかも利と名と金との前には塵埃に等し。此の如くして世流に出づ。社會の濁流、豈これを拉し去りて不測の深淵に投了するなからんや。日本の前途は漠々たり。急湍直下なる語は以て社會が下層に沈淪するを形容す可し。今にして國家志士を要せずとせば何れの時か志士の要あらんや。しかも志士として熱血を揮ふ可き靑年者は徒らに宗教を玩弄視して、眞面目と云ふ事は體軀の何處にも認むる能はずなりぬ。嗚呼靑年此五尺の小軀を惜んで世に碌々たる可きの時なるか。大覺悟は吾人の大急務なり。嗚呼、大急務なり。

第二卷

一八九八年（明治三十一年）〔承前〕

十二月二十七日。今年の春期休業は森本君と共に輕川に遊びぬ。四五日の滯在なりしとは云へ余は仍りて少からざる利益を得て歸れり。今や歲月流徂冬期休業は到りぬ。卽ち又定山溪に年を送るに決し、此日を以て君と共に發す。晴天の續きたる事とて道は至つてよかりしも、米を初め食物類の荷物多かりしがため橇を傭ふの止むを得ざるに至り、之れに乘りて石山に到る。幸ひにして又橇の定山溪に行くものあり、仍りて之れに荷物のみを積載し、步して三時半頃佐藤に着す。溪流一帶の風光譬ふ可きものなし。永山、中島等も後より來れり。此夜又君と談宗敎の事に及び、及ぶ每に余の腑甲斐なきを歎ぜずんばあらず。君は sinful に就て深く極め、最も之れを知る事を得るに反し、余は sin の多きを知りながら之れを眞に深く心に占めて恐惺措く能はざるが如きに至る事能はず。殘念至極なり。嗚呼泣きし後にこそ眞の笑は來れ。余は泣かずして笑はんと欲す。焉ぞ眞の笑を得る事を得んや。而かも余之れを勉むる能はず。嗚呼此弱志を如何せん。

十二月二十八日。曇天。時々雪降る。起床の時默思せり。之れ余には珍らしき事にてあるなり。餘りに自然が麗はしかりければなり。耳底に徹するの谿聲は恰も急雨の如く、其音の響く所は萬物皆淨めらるゝが如き心地するなり。朝ゴッチエル傳を二人して會讀し、午後は共に散步す。溫湯の湧く所にて鷄卵などを煮て食す。學校の事などは百里外に逸して今は心の那邊にもあらず。又松村介石の「立志之礎」なる書を會讀す。夜互に前途の志望に就て語り、轉た感慨の窮る所を知らず。余や不肖の身を以て僅かの筆力にたよりつゝ文學に志し、庶幾くは、人心の幾分に資するところあらんと希ふ。しかも智志共に遲鈍にして到底此大事に當るに足らざるが如く感ずれども、苟も人として世に出づる以上は、唯日々の食に齷齪として

死に果てんは、余愚なりと雖も、亦願ふところにあらず。唯、出精勉強爲さんとするところに勇進して止むの外なからん。此勇進の大決心を爲すは、實に今日の最大急務なり。余は此事を知りつゝも、時にこれを果す能はず、時に無益なる時間を浪費して悔いざること多し。古人に對し、又兄に對し實に恥づる所なり。願くは、向後此の如きの失策あるなかれ。切望に堪へざるなり。

十二月二十九日。三十一年も早二日を殘すのみとなりぬ。我の一歳を重ねんとする時は既に來れり。朝來滿天霏々として雪降る。朝二人にて「立志之礎」を讀み、午後より散歩し、入浴して夕刻より「求安錄」を讀む。夜に至りて興益ゝ多く、而かも心を刺戟せらるゝ事實一にして足らず。戰々として身の震ふを覺えず。嗚呼余何に足らざる所ありて、かくは眞理を求むる事渴するが如き事能はざるか。何を苦しんでか、獨り岐路に迷ふの愚をなすか。實に自ら解するに苦しむなり。然れども、余や幸にして、世の人の如く、輕燥に一身の大方針を定めて、恬然として關せざるが如き事なきを多とするのみ。しかも何時迄も決せざるは、これ又余に足らざるところあればなり。悲しいかな。此の夜默想の時、初めて森本君の前に(否、人の前に)余が祈禱を發聲したり。余は求安錄に非常なる感動を受けたればなり。願くは、此感動にして永く余が心中を支配せよ。

十二月三十日。晴天。昨夜は余と森本君とに取りて實に非常なる時なりき。余は其時の出來事を日記に載するも厭ふなり。嗚呼若し余にして平生毅然たる丈夫の心あらしめば森本君をしてかゝる擧動に出でしむる事は夢之れなかりしなり。畢竟余が鍛錬の至らざる罪遂に累を森本君にまで及ぼさしめぬ。余は秀麗、貪夫も其心を正しくすべき此定山溪の山水に對して此事ありしを痛く恥づるものなり。余は再び山水を觀望するの勇氣なきに至りぬ。涙は余が此日終日の伴侶なりき。悲しきものは惡に誘はれ易き人の心なるかな。

夕刻に至りて河野、三吉其他四人の中學生札幌より來る。其時母上、乳母、海江田氏より受使す。母上の狀末に一首の歌あり、

夢に過ぎ夢に迎へて一年の暮るゝは早きものにぞありける

と、嗚呼眞に此の如し。

十二月三十一日。雪天。朝中學の人等の室に至りて加留多取りをなし、初めて世俗の歳暮の感あり。午後五時一同歸札す。夜、歳暮の感を草す。曰く、

過去も此の如くにして去り、現在も此の如くにして去り、未來も此の如くにして去りて人は老ゆ。嗚呼余も此の如くにして去りて逝かんとするか。唯如何にして此の如くせん、余は過去に鑑みて慄然たらずんばあらず。未來は茫たり。而かも希望は余を助導す。余は過去に失ひしの多きに顧みて未來に得るの多きを講ぜざる可らず。悲む可きは時にして喜ぶ可きは時なるかな。

今夜短檠の下余は森本兄と共に定山溪の逆旅にあり。溪聲は近く耳に交りて澄心の介となり山色は清く眼を過りて默考の伴となる。野人閑坐して年の逝くを知らず。徂年は匆々として明治三十二年を迎ふるに殆んど十時を剩さざるなり。願くは余をして爐邊に坐して暫く想を過去に溯らしめよ。

病弱にして顏色蒼白意志極めて弱かりし余が幼時、感情激甚にして人を無にし客氣極めて高かりし余が少時は、實に失敗と慚悔の連鎖なりき。余は過去を顧みて毫も凡常に異る所なき行爲のみなるを知る。余は過去に於て千人中の千人なりき。只十餘年に亙る余の行程の間、常に余の心底に徂徠せしものは稼穡の生活と文學者の生涯なりき。余が不安なる心志は屢ゝ外物の刺戟によりて渦心を逃れし木片の如く漂々として所在に浮ぶ事なきにはあらざりしも再び渦中のものとなりて一所に廻旋し了るを常としき。されど余が當時の思想は極めて不純極めて曖昧なるものにして唯々夢中の夢に過ぎざりしなり。

余はかゝる模稜なる思想――され共其思想は久しく續きし所の――を抱懷して遠く札幌に遊びぬ。余は札幌に於て豫望せざりし幾多の利益を得たり。余は秀麗なる自然に接し、卓識なる先輩に接し、誠實なる良兄弟に接して余の彈力に乏しき心志は少しく見聞に對して反撥するに至りぬ。若し余の生涯が層々たる段階によりて連結せらるゝものなりとせば、此事あり

しは確かに余の一段階なりき。余は初めて人なる不可思議物を解釋す可く始めしなり。余は自己の解釋に滿足する能はず。儒教に滿足する能はずして佛教に行きぬ。彼は余に說くに高遠なる說理を以てせり。余は眞理の確かに存在するを感じて、之れに向つて進みぬ。余は之が堂奥に登らんとして精進するもの殆んど一年半に及びたり。然れども彼は余に光明を示すが如く示さゞるが如く、來るが如く來らざるが如く、幾度か余を滿足せしめんとして幾度か失望せしめぬ。先輩は余に向うて或は無益の勤勞にあらざるかを疑ひ、兄弟は余に其達す可からざるを說く。而して余が佛教の研究中徐々として余が胸臆の一方より侵入し來れる基督教の敎理は、余をして暗中更らに暗を加へぬ。摸索百番して尙光明を仰ぐ能はざるに至らしめたり。

され共余は之より一轉歩したる境遇に於て明治三十一年を送らんとするなり。余は余が兄弟の非常なる熱誠と忠切なる勸言によりて僅かに一點の光輝を仰ぎ得たり。而して時よ、汝は匆々として余を殘ゝ去らんとす。汝は余が身邊を離れんとするに際し、余が頑迷進み難き心志の遲鈍を呵々として大笑するなる可し。嗚呼然り、余は實に爾かなり。去れど汝時よ、汝は余が遲鈍を記憶すると共に余が衷心の眞面目なりしをも幸に忘るゝ事なくして去れ。余は再び汝に會せざる可し。嗚呼時よ、汝は幾度かの機會を與へ――余の不肖はこれを獲得する事能はずして汝の志に負ふ所多かりしも――平等の寵光を分ちたるを謝す。嗚呼時よ、過去の時よ、余は汝に對し轉た多年の知己に訣るゝの感に堪へず。憶ふに汝は杳として遠く去り、眞理の宮殿に復歸せんとはすらん。而して余は舊に依りて濁界に輾轉せざる可からず。時よ、過去の時よ、さらば健全なれや。

余に來りし過去の時は此の如くなりき。而して世界に來りし過去の時は如何なりしとするぞ。十九世紀の代表者とも稱す可き虞、此の二翁は共に今年を以て逝けり。其他三十一年は幾多の麒麟兒を生じたる可しと雖も、又幾多の老偉人を葬りたり。而して來る可き時は余等を彼等の後襲として待たんとす。去りし時は余に敎訓を與へ、來る可き時は余に舞臺を與ふ。嗚呼余は此臺上に長袖を振うて何をか舞はんとするぞ。

謙遜なる希望あらしめよ。卑屈なる希望あらしむる勿れ。余は來る時を待つに此語を以てせん。人は己れの精神技倆を充

分に鍊磨するの繁雜を厭ひ、自ら殼中に蟄居して管見を之れ事とし日々に營々として眼を天外に放たざるが故に具地自ら狹搾して世俗に媚び、高貴に諂ひ、唯以て浮世一睡の榮に醉はんと欲す。之れ豈卑屈なる希望にあらずや。嗚呼眞に人生を解釋する能はずして醉生夢死し、己れの頭髮の一條だに如何なるものたるやを知るに及ばずして、恬然意に介せざるもの悲む可からずや。人はかく言はるゝ時憤然として爾は卑屈なるものにあらずと辯抗す。而かも世上滔々何ぞ此の如き輩の多々なるや。嗚呼遲鈍なる余も實に衆と共に永く此境に沈湎せしものなりき。されど余は今幸にして此境遇より警醒せられたり。余の本來は斷じて今の如く精神なきものにはあらざるなり。技倆なきものにはあらざるなり。唯姑息因循の陋習は余をして此の如くならしめしのみ。余は奮起して之れを囘復以て余が本領のある所を示さざる可からず。遮莫、余は余の本領を發揮して何に致さんとするか。余は此に至りて再び迷宮に沒入せるなり。余は余の本領の向ふ可き方向を知らざりし。余をして換言せしめよ。之れ余が眞に人生の目的を解釋する事能はざりしに坐するものなり。

余は幼時よりの希望に從うて本領を發揮せんには文學によらんものと決心せり。されど余は余の發揮したる精神と技倆を功名の爲めに用ふ可きか、富貴の爲めに用ふ可きか、社會の爲めに用ふ可きか、將た人類の爲めに用ふ可きかを知らず。あらず余は之れが最後の目的たる可からざるを知り、更らに高貴なる一物を獲得せざる可からざるを知るものなれども、未だ之れを獲得するに至らざるを如何せん。余は僅に岐路を離れ、光明に向つて進まんとしつゝあるものなり、余にして之れが解釋を全うする能はずんば、余が本領は何するものぞ。余自身は何するものぞ。余は此に生きながら葬られざらんのみ。余は深く決心する所なかる可からざるなり。

「貧乏人、無智の人、罪人、嗚呼窮せざれば基督の酒宴に侍するものなきが如し」とは實に眞理なり。余の家は幸か不幸か不足なきまでに富めり。余は自力の屁理窟を製造し得る程の知識を有す。余は余の歷史に於て悲劇に接せし事殆んど皆無なりき――恐らくは屢ゝ來りしならん。され共余の罪深き不注意は之れを放任したりき。――嗟、余は實に基督の酒宴に侍り難きものなり。さはれ神は全く余の行路を杜絕し給はじ。余を窄き門に導き給はんが爲めには余に sinful なる事を覺悟す可

き一事を殘されたり。余の行路には陷穽と障礙多し。然かも余は行く可し、行かざる可からず。社會は今や全く惰眠に入れり。必要は彼等に覺醒を呼べども一人も頭をもたぐるものだになし。而してかゝる不幸なる社會の現象は內村氏の所謂聯帶責任の理として覺醒せるものゝ雙肩にはあらざるか。社會が腐敗する事益ゝ多からんか、覺醒せるものゝ責任は最も重し、余や決して其人にあらずと雖も、然かも僅かに覺醒の緒に就かんとするもの、自ら責任の重大なるを思うて悚然として畏れずんばあらざるなり。さはれ余は行かざる可からず。嗚呼余に大膽と勇氣と小心とを與へよとは余が過去に念じたる所にして、又未來に念ぜざる可からざる所なり。

余が年末に於ける觀想は恥しくも——余は記して此に來りて泣けり——此の如きものゝみ。さはれ庶幾くは之れをして眞面目ならしめよ。余をして死天屍地に陷らしむる勿れ。余の滿悅は如何計りぞや。

來る可き三十二年は余に如何なる機會を齎す可きやを知らず。將た如何なる思想を齎す可きやを知らず。唯余をして再び三十一年に對してなせるが如き告別の辭なからしめよ。余をして全く卑屈なる希望を離れて、謙遜なる希望を固守せしめよ。筆を擱く時正に九時、嗚呼新年は三時の後を期して來らんとするなり。

一八九九年（明治三十二年）

一月一日。歲華杳として三十二年は來りぬ。嗚呼日月踰越して人を待たず。昨夜一夜は二人床中にありて終に寢ねず徹夜をなしたり。其結果にや今日は實に心地啻ならざりき。

朝、永山將軍を其室に訪ひ其經歷談其他其雜說等を聞く。永山將軍は溫厚の老好人なり。彼は老人として交るによし。彼に官職を被らしむれば彼には半文の價値なきなり。故に彼が官職より全く離れたる今に於ては、彼の小兒の如き單純なる思

得し所少なからざらしめたり。西鄕の常に人を敎うるに用ひし套語は、

想は春の如き心中より湧出して轉た其怡然たるの風に薫ぜしむ。其老西鄕を說き、北海道の前途を說く邊の如きは余をして

人は倒るゝも其精神は決して共に倒れず、必ずや世に殘りて偉大の事業を奏効せずんば止まず。

と云ひしと云ふが如きは將軍にあらずんば聞く能はざる所なり。

午後將軍は又余等を其樓上に招き中食を供され、種々話ありしも昨夜を徹せし二人の心頭は眠氣に堪へず、失敬とは知りながら熱心に傾聽する能はずして辭し來る。夜諸方に賀狀を出す。其他記事なし。

一月二日。朝天近頃珍らしく暖かなりき。昨夜は一昨夜の疲勞によりてよく寢ねたり。朝は讀書に費す。午後は會話に讀書に時を費し、又夜は四方山の話をなす。本年なす可き讀書の問題など出でたり。而して其中 Calryle が或る青年の爲めになせる讀書の注意あり。故に之れを左に揭ぐ。（英文略す）

一月三日。晴天。朝八時起床。午前は殆んど談話に終ゆ。余は森本兄に "Hero-Worship" に就て不審なる所を質したり。午後より入浴し川邊を散步す。温泉の氣温かなる所にありては、雪全く解けて草の油々として萠出でたる所あり。北海の地にして嚴冬一日此奇觀に接す、眞に天來の妙景たるの感なくんばあらず。此日は天氣は割合に和煦たりき。

夜默想をなすに當り思想紛亂して毫も統一せず。之れ蓋し余が默想をなす時に當りての陋習にして心を一にして此に赴かしむる事能はず、爲めに長時間の祈禱も何の効もなくして終る事あり。之れ實に余が眞理を慕ふの念弱きに坐するものなる可し。若し眞理を慕ふ事渴くが如くあらば、此の如き不始末は決して起り來る可きにあらず。平常の學科にても之れを一時間なすさへ僅かの進步よりなし能はざるに、況んや人生の大問題を解釋せんがために半時間默想する事が出來ずば到底一大事の解決を得んとするは難事なる可し。大に決する所なかる可からず。今夜は又伊藤肇君及び星野純逸君等の話出で二人共感慨に沈み果てぬ。嗚呼余の如き不能者は充分の奮發をなさゞれば到底君等の足跡をも踏む事能はざる可し。

一月四日。朝七時起床、午前は家に在りて談話をなす。又十時より永山將軍を其家に訪ふ。氏余等を引きて懇々として談

ぜらる。其精神上の談に及ぶや熱心面に顯れ聞くものをして思はず襟を正さしめたり。氏は國家なる土臺の上に其所信を有し忠孝を以て道を行ふの規矩となせり。而して此事に就ての所信は實に堅固立派なるものにして常凡の企て及ぶ能はざる所なるを知りぬ。彼は確かに國家的觀念よりの悟道者なり。『眞面目に國家なる事に就て觀念せざれば到底確乎たる安定の地に達する能はず』、『人には胸中に良心あり。之れが示導を受けて事を行はゞ何事か不正なるものあらん。我若し不義をなさば良心は必ずや我を責む』、『勇氣を生ぜんと欲せば古人の行跡に接して其迹に鑑むるにあり。勇進の氣自ら生ぜん』等は氏が談話の連鎖中に於ける輝點なりき。余は之等の金言を一層增大して、之れを求道の上に應用す可き價値ありと信ず。氏は實に國家的觀念の悟得者なりと雖も、國家的觀念は彼に多くをなす能はず。彼は道義の何者たるを知りながら其悖道を制裁す可き力弱く脆くも妾などを蓄ふるの不體裁をなせり。之れ餘人が又永山氏に學べるの所たり。吾人は最高の理想を執らざる可からず。人は以て徒らに痴夢に耽けるものとなさばなせ。

一月五日。雪天。朝十一時迄で寢ねたり。余は昨夜又大なる過失に陷りぬ。余の兄弟が每夜の如く或る好ましからざる情にからるゝを見て、余は屢ゝ之れに忠告して大に制限する所ありたり。而して余は斷じて此情の中に引込まれざる事を期したりしに、昨夜に於て余の薄志弱行は遂に兄の情に打勝つ事能はざるのみならず、兄をして益ゝ深く此情を挑發せしむるを致せり。余は未だ神を知らずと云ふの故を以て、若しくは信者にあらずと云ふの故を以て罪を兄に歸するに忍びず。余は既に信者にあらざるも、かくばかりの事に對しては毅然たる所なからざる可からざるに、其罪に陷りしは長恨とする所なり。唯此失敗に鑑みて益ゝ向後を戒めんのみ。

十一時に起床したる事なれば朝食と晝食とは衝突したり。午後は永山氏より借り來れる靖獻遺言を讀む。文天祥、孔明、顏眞卿等の忠魂義膽讀む者をして眉昂り眼怒り思はず唾壺を擊破して三嘆四嗟せしむ。英雄の魂は誠に不死なりと云ふ可し。後世の余の如き遲鈍者をすらも尙且憤然として奮起せしむ。

夜永山氏を訪ひ暇乞をなす。氏の妾其室に出入す。汚穢見るに堪へず。

愈〻明日は歸札する事となれり。今之れを書する時室外嘈々として谿流の淸韻を聽く。而して明夜は思ふに之れに代るに人寰雜閙の聲を以てするならん。厭ふ可し、厭ふ可し。され共吾人は決して仙人たる事能はず。浮世に出でんがために此に靜養したるなり。我は自ら超然として已れを淨ふするのみにて止る可からず。吾人の社會に對する責任は重且大なり。責任の大なるは吾人に又大なる快樂を供す。吾人は暫く山水の靈を辭して人寰に下り行かざる可からず。人寰豈苦痛の魔界とのみ云はんや。

一月九日。

"Entering on Life" by Dr. Geike.

Augustine calls youth flos aetatis, the flower of our days; Cicero calls it bona aetas, the blessed time; and Seneca, aetas optima, the best of life. The Elizabethan writers often speak of "the primrose of our youth."

"Youth is a breeze,' mid blossoms straying; where Hope clings feeding, like a bee."

—— Coleridge.

二月三日。不幸なるは余なり。余は筆を持つだに懶き心地す。余程世に眞面目ならざるものある可きか。余は幾度か誓ひて幾度か之れを犯し、而かも之れを悔いて懺悔の涙を流す能はずして却て之れを冥々の中に葬り去らんとす。而して皇天の知るを知らざるなり。嗚呼この鈍き事鉛の如き心志、之れを以てして人を救はんと稱す。大膽も寧ろ此に到れば滑稽なり。畢竟余は勇氣の足らざるが故なり。嗚呼愚鈍者愚鈍者世の孑々たるものは知らずして孑々たり。余の孑々たるは知りて孑々たるなり。此薄志弱行を奈何せん。余は到底人として世に立つ能はざる可きものか。然らば死するの勝れるに如かざるなり。眞に死するの勝れるに如かざるなり。今年も既に除く可らざる大痕を年の上に印しぬ、本年の余は又潔白なる余にあらざるなり。嗚呼此苦心泣かざらんと欲するも得んや。

二月十日。 此夜森本君を其家に訪ふ。是れより先き君は原氏の小兒の死去せしより突然胸中に非常なる苦痛を生じ來り涕涙常に眼中にありて毫も樂まず。自ら云ふ、余は罪人なり、而して無爲者なり、世に生きて何の施す所かあらん、果して生くるの必要あるものかと。余之れに忠告するに、君が言の君が前言に反する所あるを以てすれば、君は又潸然として昔日の事皆非なり、余は今にして眞に余の爲す無く旣に神より無能者と認められたるを知ると云ふ、其語悲壯、余遂に君を慰むる能はず、空しく歸路に就き、其後此事心に關して終夜眠りをなさゞる事も屢〻なりしが、何となく君を訪ふの心進まずして今日まで過ぎて初めて君に會ひしなり。君は愁然として曰く、昨夜君と爭論して相距るゝの夢を見たりと、而して之れに次ぐに涕を以てし余　君の病中嘗て見舞ひだに來らざりしを責めて灑涙共に下る。余之れを聞きて實に云ふ所を知らず。一言の君に對す可き辭なし。君が一種幻影に襲はれ不眠の病を釀すに至りしは、實に世の賴む可からざるを悲むと共に君が刎頸と賴みし余さへも一回の訪問をもなさゞりしが爲め深く悲哀に沈みしに依るなり。然らば余は實に君が病をして甚だ重からしめたる惡魔なり。余は實に君に對して無情なりき。余は君には眞の友情を竭す可く誓ひ居たり。而して從來及ばずと雖も之れを爲せりと信ぜしなり。而して今此愚をなす。余の心は實に馬鹿の極なり。余此時眞に只一死以て君に謝するの外なしと思ひたるなり。然れ共君の病も甚しき所に余が死せば或は却て君をして益〻病を重からしむるやも知れずと思ひかへし、余は泣いて君が居を辭し直に丸山に至りて神社の堂下に跪坐して一夜を此に明しぬ。余は幸にして眞に罪を悔ゆる事或は出來はせずやと思ひたればなり。され共そは無益なりき。余が遲鈍極まる胸中には無限の懺悔のみならず此無人の山中の寂寞さへも感ずる事能はざりしなり。余の心は夢を逐ふ痴者の如く背然として遂に得る所なく唯死す事も出來ず、生きて他に君に盡すの道を講ぜざる可からざるを思ひ、己は品性實に下等にして君を充分に慰むるの信仰もなきを眞に悲しみつゝ空しく歸家しぬ。汝無能者よ、汝は一人の友さへ慰め兼る痴人とは思はざりき。汝は何が故に早く眞に神の御手を受くるを得て、之れを森本君に語りて君をして迷ひ入りたる迷宮より救ひ出さざるぞ。嗚呼され共汝には未だ聖靈下らざるなり。汝が聖靈を得ざるの外は何者も森本君を救ひ出すものなきを知る。而して尙之れを得る能はずとは何等の不幸ぞや、何等の痴愚ぞや。

二月十五日。此夜又森本君を訪へり。君例によりて樂まず。此頃は Faust を讀み居れり。而して Byron よりも遙かに上手なりと云ひ居れり。而して余には甚だ親切に Byron の "Manfred" を讀み聞かせ吳れたり。余は君と十時少し過ぐる頃まで相語りぬ。君の心は益〻暗面に向ひつゝ來れり。今夜の君の云ふ所は實にあさましき許りの事なり。君は人が悉皆痴愚取るに足らざるを云ひ、而して已れも又甚だ墮落せりと云ひつゝ、俗人原を撲滅せずんば已まずと云ふ。君の此頃の觀念は「神の現在を否定せず、され共承認もせず、余の心は地獄に行く可く墮落せり。余は飽くまで俗人と居る事能はず、余は如何になるとも俗人を頭より撲滅したし」と。而して君は堅く此心を取つて動かざるなり。嗚呼人よ、之れを諫めて復舊せんには如何なる手段のありとするぞ。唯眞に神を知るを得て神より出づる愛を君に分ちなば、或は君を慰む可きなり。此他の方法は決して決して君を滿足せしむるに足らざるなり。君が餓ゆる如く云ふ言葉は「我に道理を示せ、余が持する所が果して不可なりと云ふ道理を示せ。余が過去の日記は誠に美しき限りを書きあり。されども今はかくの如く昔の事は夢よりも賴み難し。古來文豪と云へる人々の殘せる名言も終に余が過去の日記の如きものにはあらざるか。否此の如きものなりと余が曰ひたる時何者か然らずと云ひ得るぞ。神を知りたりと云ふ人の心が迷信なるか、余が云ふ所が事實なるかを分つ可き道理ありや。余は神を得んがために勉めたり勉めたり。而して此の如き境遇に沈湎せざる可からずとせば、神を得ると云ふは此の如きを云ふかの疑念も起り來るにあらずや。」嗚呼悲しき言葉よ。余は其言葉の必ずや非なるを思ふ。され共神の宿らざる余が體は如何にして君に神の道が眞に萬劫に存在し得可きものなる事を云ふを得るや。

つら〳〵思ふに余は果して世に存在す可き價値あるものなるか。余は善の善、惡の惡なる事を知りつゝ之れを判然と區別して一を嘉し一を惡む事能はざるなり。神は必ずや慈愛の御手を垂れ給ふと、余をさしまねきつゝあり給はん。され共余の盲目なる手と跛頓せる足とは之れを見出す可くもあらざるなり。嗚呼余は實に時に神が果して余に天職を賜へるやを疑ふ。此薄志弱行に加ふるに止み難き煩念は簇々として日夜間斷なく余が心を襲ふなり。余は世人の馬鹿の大馬鹿なるを知る。彼等を見ずや。神を知ると稱するものが孑々として人後に瞠若し、道を行ふと稱するものが蠢々として禽獸の行をなし、事を前

後して輕重を知らず。肉體の病を治するにはあらゆる法を用ひて神心の將さに死せんとするを忘る。愚の愚、痴の痴、神ありまさば何と見給ふらん。され共顧みて已れを見るに、嗚呼是れ等の凡俗輩と相異れる所若干ぞ。人類の價値が果して此の如きに終るものなりとせば、余は悲しまじ、又怒らじ。されどもクリストも佛も人を見給ふ事かくばかり哀れなるものにあらず。余が行かざる可らざる點は、明照々として彼處にあり。され共余が行ふ可き道は何れに在りや。余はもだゆる心を持して凡俗輩と終身相伍せざる可からざるか。否彼等を一步だに高尙となす事能はずして止む可きか。余深く過去を思ひ、又未來を想ふ時、余は實に失望せざるを得ざるなり。嗚呼絕望せざるを得ざるなり。

奸矣、此の如き身は如何になるとも余の關知する處にあらず。未來に地獄ありや、余は知らず。現世に苦痛ありや、余は知らず。嗚呼何事をも知るに由なし。此神をも得ざる余の小なる心が宇宙に俯仰して井蛙の見を逞ふするとも將た何の得る處ぞ。余は唯心の中の心に眞理が永久に存するを忘るゝ能はず。而して森本君が此眞理の軌道を換へたるを忘るゝ能はず。余は死を前に置きて考へん。人の死ぬ時其辭や宜しと云へり。こも亦果して信ずるに足るや否やを知らずと雖も、兎に角余は兄に死別をなすを此際の最も得策なる事と考ふ。而して死に臨んで考へて果して神の存在を心の中に知る事を得ば之れを以て君に遺品となさん。若し神の存在を否定せば、嗚呼此世は暗黑なり。生き永らへて將た何事をかなす可き。未來の有無は我知らずと雖も死して現世の不快に面せざらんのみ。若し余が一死にして果して森本兄の心を飜す事を得ば余の本懷將た何にか若かん。

され共只此に余が死を猶豫す可きは兄が自ら「余は每年此頃に至れば、かゝる迷惑をなすが故に或は氣候のためなるやも知らず」と云ひたる如く、若し果して氣候等が原因となりて兄に此の如くせしめしものならば、氣候が過ぐると共に兄の迷惑も亡びるが故に余は濫りに犬死して却つて兄を悲しましむるが如き事をなすまじ。余はかくばかりふつゝかなれども、森本兄は眞に余を愛し吳れ、余を無二のものとなし吳るればなり。

二月十六日。嗚呼慕しかりし死よ。汝は終に我有となりぬ。我が生血にあらずんば森本兄は復活する能はず。觀來れば世

上の人唯碌々として秋蒐の米を食ひ、醉生夢死して以て得たりとなす。嗚呼世上若し死を看破するの機能人になかりせば人は至つて無能なる哉。我は死を決してより一滴の涙も我が眼より出でず。唯血は我が體内を激しく巡る。我今は腦に於て熱せず。されども心の熱を知る人あるか。我に父母あり。我に弟妹あり。思ふに日夜閭に倚りて我が歸來を待たん。され共大義には親をも滅せざる可からず。我は不幸にして愚鈍の愚鈍として生れたり。神を知らんとして神を知る能はず、人を知らんとして人を知る能はず、眞理に從はんとして眞理に從ふ能はず。然し唯大義の必ず踏む可きものなる事を敎へられたる我は既に業に他の缺點を補うて餘りあり。我は滿腔の赤心を以て此事ありしを感謝す。豈他に多きを望まんや。

クリストの愛は世界萬劫の民を救ふに足る、而して我はクリストに比して大海の泡沫、泰山の土塊なり。而して有爲多望なる可き森本君一人を救ひ得たりとせば、我は現世界に於て大に爲すありし所のものなり。

され共我は切に望む、森本君が我の死を聞きて心を取亂すが如き事なく、靜かに余がかくなりし所以を考へて余の望む所に副ひ給はん事を。若し然らずして君が余の心をも量らず、空しく余の望む所にたがふが如き事あらば、余は哀れなる大罪人なり。

* * * *

未だ暇ある如く思ひ居たりし死は早目前に逼りぬ。死よ、我が汝の足下にひれふすは何の故なりと思ふぞ。我は唯に汝によりて神を得んと願ふが爲めのみ。神を得て之れを我が兄に授けんとするが爲めのみ。

我は男子なり、丈夫なり。焉ぞ今女々しくも死に向うて逡巡せんや。我心既に決す。皓々として霽月の如し。眞面目なる處は何處にある。我が毅然たる觀察の下には世上到る處に眞面目を認むる事能はず。眞面目とは神を凝視して他を顧みざるものなり。神に從ふの外に釐毫も邪心なきものなり。嗚呼、世上眞面目を見得る處は何處ぞ。我は失望せざる可らざるか。只死あり。哀れなる人よ。邪推に滿つる人よ。小心なる人よ。無謀なる人よ。蠢々たる人よ。孑々たる人よ。來りて死に面せよ。此に眞面目あり。噫我豈望を世に失せんや。

思ひめぐらす度毎に果敢なきは我が天性なり。生れ得て平和なる家庭に温くはぐくまれ、貴族的倨傲なる起居に慣れて我心は幼く養はれ、姑息に生ひ立ち極めて克己の力なかりき。惰性の力は恐しきものよ。我が天來の特質は今に至るまで此怪雲の下に封ぜられて美しき陽光は何處の晴間よりも窺ひ難し。我は親愛極りなき父に正直を受け、敬慕止むなき母に快活を受け、而して世に珍らしき我が祖母は我に「一心」と云へる思想を注入し賜ひぬ。我が極めて悲しむ可き弱志の時、勃然として勢力に滿つる時は常に此三者の感化が我が心の何れにか潜みつゝあるを見たりしなり。

我は又多くの益友と少なからぬ損友とに遇ひぬ。我が半生の浮沈は實に友の誘惑によりて上下したるものなりき。愛す可き友よ、惡くむ可き友——若し友と云ひ得ば——よ、君等が我に賜ひし幾多の勸誘も誘惑も實に今は水泡の如くになり了りぬ。我は十二時間を出でずして君等兩者の意に背く一個の魂となる可ければなり。嗚呼益友なかりせば如何にして汝は此境遇に至るを得べかりしとて我をなじり賜ふな。損友なかりせば我は今よりも果敢なき平和を望む愚人にてある可かりしなり。神の御手に暗く見ゆる惠なるものありや。さらばそは我に對する惡友の感化なり。而して我を此惡友の恐る可き手裏より救ひ出し給ひしものありしは我の今日あるに至りし所以なり。

平和なる我が生涯單調なる我が消息は一の語る可きものも殘さず。只我が死を決せし二三日の瞬間は我が二十年よりも遙かに複雜なるものなりしなり。

我は初めより森本兄に死を許せり。我の心は女の如く弱り、兎の如く後れ勝ちなれ共別に又本然陽剛の氣なからずやは。我が兄 交りてより兄と共に道に殉ぜんとするの心は一日も止まざりき。され共我が不敏なる弱志は、知りつゝも一日の偸安を之れ事として恬然たりしもの幾度なりしとするぞ。而して此度毎に兄の心臟は日頃にも增してきびしく強く打ち高まりしなり。嗚呼かゝる事は多く云はじ。兄は終に失望の淵に沈みぬ。兄は悲しくも數多なる重荷を負ひたれば底知れぬ深潭は呑み込むが如く見る見る兄を奪ひ去らんとす。而して見よ、兄が負ひぬる重荷の中我の爲す無きを深く悲しみたる荷は最も重く見ゆるにあらずや。かくても我——我は之れを上より眺めつゝ人なき野邊に空しく聲を高めて助けをのみ求めて止まる可

きか。嗚呼然らず、斷じて然らず。我は心を決して陷るものを殺さゞれば止むまじき此深淵に躍り入り兄より重荷をはづさざる可らず。我が心は弱し、されども我が血は之れを爲さんが爲めに火の如く熱しつゝあるにあらずや。

我は死を決してより我の好侶伴なりし豐平河畔の「自然」に別るゝ可く出で行きぬ。皚々たる白雪、潺々たる清流昔のまゝなれ共、汝は毫も我に同情を表せざるものゝ如し。仰げども俯せども冷然として知らざるが如きものは何故ぞや。嗚呼汝も世人と同じく不幸なるものには浮薄なるか。「自然」も亦喜びあるものにのみの侶伴なるか。嘗て見たる靜默沈毅大人の端坐せるが如かりし偉景は何處に去りたるぞ。急がしげに流るゝ河水は漣の波を幾重にも疊みて死に直面して戰々たる我が胸中をあざ笑ふが如し。泛々たる浮雲は千變萬化して我が覺悟の少情にひかされて定まり難きをさげすむが如し。嗚呼不幸なるものゝ前には汝も亦敵とならんとするか。天地は皆敵なり。輕馬輕裝の士女は塵芥よりも輕くつたなきものなり。學識深遠なと云はるゝ博士碩學も唯一塊の土泥に過ぎず。天地は貴人にへつらふ惡魔にして唯我と兄とのみ此世に立つ。愚なりし、愚なりし。何とて人を頼みあるものとなしけん。何とて「天然」に我が慰安を求めけん。我が心悲しみ且つ痛む。泣かじとせしが我が涙は兩頰を傳うて底しらぬ歎息のみぞ我には伴ふ。

道行く人の顏を見ずや。唯幻心もなく眼を張りてあはれ何をかせんとはすらん。遇ふ人も遇ふ人もかくばかり心なきものとは思ひ設けざりき。唯道ばたに佇みて菰の下より萬物を白眼する物乞ひの徒よ。汝の眼が我が心を射りたる時我は曷ぞ汝に同情の念を傾けしぞ。其女兒に美しき衣を着せて樂しげに眺めつゝ行く人、流眄春の如くにして行人の足を留むる美人、半死の老翁、快活なる頑兒、野父の顏を弄して衆目を引きつゝ藥を賣らんとする庸醫、金囊を懷にして之れを命とする商賈、嗚呼觀じ來れば是れ果して何者ぞ。僞行、僞行、世は自然と人爲とを論ぜず僞行なり。僞善なり。汝塵を取りて之れを地上に立たしめよ、彼は人の如く笑うて且つ泣かん。

此夜我は寄宿舍を訪うて伊藤君に蔭ながら別れを告げぬ。人の愚かさよ、彼は余の行く可き道を露も知らぬなり。かくて文學を許し經濟を論じ我を樂しまさんとす。我は文學と經濟に何のかゝはりあらんや。（以下一頁落丁）

されども汝等の至つて愚鈍なる事、至つて可憐なる事は、昭々として手に取るが如く見らるゝなり。汝には死に面するを得る丈けの能力與へられたり。死を透して神を見よ。神を見るの逕路を以て基督教なりと云ふ勿れ。是れ等は唯汝に死を透して神を見る事を敎へたるのみ。聖語佛經百萬臺を誦したりとて何かあらん。意を決して死に面せよ、死を透して神を求めよ、然らば然らば、汝は心を充さる可きなり。

我が幼時は驚く可くも判然として歸り來りぬ。玉の如き我が妹と手を携へて花園に逍遙し、我は天と地とに育せられて如何に樂しかりしよ。父の前、母の膝、我が泣きつ我が笑ひつしたりしも昔なり。我は父母とあらゆる弟妹と共に樂園の如く美はしき處に來り居るなり。我が弟は、横濱の我が庭に流れつゝありしが如き小川に笹舟を浮べて拍手しつゝ雀躍しつゝ其の流るゝに従うて走りつゝあり。我が妹は木蔭に憩ひて編物をなしつゝ唱歌す。嗚呼樂しき此の樣。我は何とてかゝる愉怡を得るに至りけん。父の慈貌、母の温顔、殊には祖母が樂しげに見そなはす御前に我は何事をかなしつゝありしなり。忽ちにして我が朋友は何處よりともなく此場に來り我が前を過ぎ行きつゝ一人として我に何事かを云はざるものなし。安かれ、苦しめ、愚者よ、正直者よ、偉人よ、匹夫よ、此外樣々なる聲は次第々々に高まり來り我が前を過ぎる友は愈ゝ早くなり行きて、我は其聲と形とに眼を眩ぜられ、遣る方なき苦煩に堪へかねて絶息しぬ。父と母等外弟妹の悲しみは我が到底此に語る能はざる處。我に死にたる身ながらも胸は掻きむしらるゝ如き心地してハタと跳ね起れば、孤燈風寒き下我が祖母は我が父と母とに先き立たれ給ひて世にも果敢なき茅屋に我が一人の弟の病を護り給ふ。我が弟は既に死せんとす。祖母と我とは聲を限りに打叫びたれども早生く可くも見えず。祖母が「燈火を見よ、我が孫、氣を確かにして燈火をな見はづしそ」との給ふ聲の骨に沁むが如く覺えて思はず目覺むれば、嗚呼之れ一場の痴夢、身は之れ半夜呻吟しつゝストーブの前に跪坐して錯亂せる腦の疲れに眠るとも知らず打眠りてありしなり。而して我は明日を期して神を知るべき身なり。嗚呼、自殺すべき身なり。

かくて夜は明けぬ。我は滿腔の勇氣を鼓して出校したりしも三時間目頃より心臓部に疼痛を感じ、殊に頭痛岑々たりしが

故に最後の時間は休業して家に歸りたり。此時瀧より鐵砲を受取る。午後より再び豊平川に散歩して此に初めて天然の愛すべく親むべきを見たれども、玆には書き述ぶる能はず。かくて入浴して體を淨め萬事爲し果てたれば、之れより森本君を訪ひて余の衷心を打ち明けたり。之れ迄の心痛苦心は譬へるに物なかりしが、君に面してより心は最も平かになりて我が心は眞に決せり。されども森本君の答は案外なりき。寧ろ君には當然なりき。曰く「君獨りを犧牲となして余豈獨り生き殘る事を得んや。願はくば我先づ死せん君殘りて我が分をも爲せ」と。されども余は到底犧牲の人なり、犧牲さるゝ人にあらず。故に斷乎として之れを辭したるに、議は遂に相共に死なん、卽ち世に立つも到底所志を確實に實行する事能はざるが故に、死して世に殘らじと共に決心しぬ。此の決心は決して正當なる思考より出でたるものに非ず。忍耐力なき卑屈の考なりとは知りながら事の玆に到れる復如何ともす可からず。依りて明日より愈ゝ定山溪に到りて浮世を脫せんと決したり。

此夜我は又無限の感慨なき能はざりき。此邊の日記は二月二十二日の午後に記する所なるが故に、又全く其の當時と境遇を別にするが故に、到底其時の感情を精細に吐露する事能はざれども、實に悲痛の念に暮れたるなり。我が志す所は終に實行せられず却て思はざる森本君をして死なしむるに至らんとは。

愈ゝ二月十九日は來りぬ。我は君と朝より出發すべく約せしも森本君は原氏の諭す處より札幌病院にて診察を受けたるが故に、遲刻し午後より出發する事となれり。十時頃伊藤淸藏氏來り、我に諄々として其の生涯の事を說く。我之れを聞きて其の苦學に感ぜり。我も亦君に余が此に到りし略歷を語れり。伊藤氏は辭し去れり。余は再び君に遇はざるべし。

午後森本氏と家を出づ。回顧して三年棲息の家を見たる時余は實に遉に泣きぬ。豊平館より遙かに農學校を顧み、終に橇に乘じて札都を辭しぬ。此間幾多の感慨は二人の胸を貫く如く犯し來りしも今改めて之れを云はじ。

夜、初更定山溪に着す。我が墳墓の地は此かと思へば死刑の罪人が斷頭臺に導かるゝ時の如く覺えて思はず慄然として身を震はしぬ。明日こそ死せんと思ひ定めたれども、銃が一個なる上に森本兄は死するの前斯くなりし事情を書き認めて願くは後世に殘さんと云ひしかば、余も之れに贊成して之れを書かんとし、仍りて一先づ死期を定めざる事に決して寢に就きぬ。

二月二十日。ともなれり。我等が心の中にありし良心は漸次頭を擡げ來り、我等が死するは果して神を畏れたるの所業なるか、正當なる事なるかの疑問は一時に我等の胸中に湧出し來りて、我等は再び計らざる迷宮に陥りつゝ心は彼にかゝり是れにつながりて恰も水藻の如く定まる事なく遂に無爲にして此日を終へ寢に就きしが、此時は二人とも再び覺悟をし直し斷然身を神に捧げて今一度浮世の荒波を凌ぐ可く略ゝ決したり。

二月二十一日。此朝森本君の心は又一の暗雲の爲めに封されつゝ君は又死の採る可きを思うて生の潔からざるを悲しむに至りぬ。余亦固より同じ心なり、一度死せんと心を決して札幌を辭したるものが人は知らずとて何として才メ／＼と再び歸札せらるべきぞ、嗚呼此考は或は理不盡なるべし、然かも之れ亦男子の意氣なり、苟も一度かく決す、何の面目ありてか又生きんや。余は直に之れを可とし愈ゝ死すべく決定しぬ。

去れども、嗚呼、されども運命は我等を捨てざるか。我等の思考は亦變ぜり、我等は男子の意氣なりとて空しく犬死すべきか。我等は大責任ををぞくも免れながら之れ我が意氣なりとして男子と稱するを得るか。我等は本末を辨へざるものには非ざるか。かく正當なる推理より我等が心を解剖し來る時は我等の心は寧ろきたなきものなりし。我が身を殺して森本君の爲めにせんと云ひし時は余の心は決してきたなきものには非らざりし。森本君が同じ事を云ひ出でし時も君の心は決してきたなきものには非らざりし。されども二人相死せんと決せし時はこよなく邈りたるきたなき心なりしなり。今は唯何をか云はん。我等は死すべからず。意を決して生きざる可からず。我等は決して死を恐れてかくなりしには非ず。皇天自ら眼あり願はくは我が眷々の衷心を照覽せよ。茲に我等は初めて心を決しぬ。さらば我等は此後何事を爲すべきか。之れを叙するに先ち少しく我をして森本君に同意を得たる我が人生觀を吐露せしめよ。

我が人生觀は我が死を決してより一大變化を受けたり。我は神と人と惡魔との區別と權能を稍ゝ判知せるが如き心地するなり。

神は萬物に life を與ふるものなり。

一 八 九 九 年

人は其 life を受けて之を廣むる可き天職あるものなり。人は至って無能なり――僞善さへなす能はざる程――されども彼には一の大なる力の與へらるゝあり。何ぞや。死に面するを得る事之れなり。

惡魔は我が知る所にあらず。されども彼は確かに death を世に來たさんが爲めには善をも惡をも共になすものなり。否善と見ゆるものを爲して人を death に導かんとはするものなり。

さらば人とは如何なるものぞ。人は死に面せざる迄は全く惡魔の支配を被り居るものなり。彼等がある僞行をなし善行と見ゆるものをなすは彼がなすに非ずして惡魔がなさしむるなり。只彼が死に面して神を來むる時初めて神に接するを得て惡魔のものならざる他の力を其心に感ずるに到るなり。死に面して神を求めし事なき人は假令神を信ぜりと稱するも之れ惡魔が彼を great death に到らしめんとして little life を與へたるのみ。

かく觀じ來る時我等が爲す可き事業は眼前に明白々たるべし。我等は確かに死に面して神を求めたり、神は未だ眞に我に來らずとするも少くとも旣に惡魔を退けつゝあるものなり。我等は此大難關を通過せんがためには、一度惡魔に充ち滿ちたる世界と斷たざる可からず。之れ或は情に於て爲す可からざるが如きも大事の前の小事なり。我等は先づ世と相去り專心神を求め又我が良心を赤裸々となすに必要なる知識を得るに努め、後初めて世と相接して何處までも世と相鬪はざる可からず。否惡魔と鬪はざる可からず。death と相鬪はざる可からず

然らば我等が今爲すべき事は世と絕つにあり。我は先づ決心を示すがために我が家に斷然基督教信者となるの許しを乞ひ、又二三の友人、そは我が有益を受けたる之等の友人に心を決して絕交の書を送りぬ。嗚呼、今は心安し。我が胸は何となく晴れたるが如く覺えたり。今我が事ふるものは神、交はるものは森本君、敬するものは父母弟妹、滅す可きものは惡魔なり。我は今日の此心を何處までも失はざるを心掛けざる可からず。神よ、我は今全く我が身も心も君に委せ奉りぬ。願はくば此微衷を汲み給ひ我に男らしき勇氣と忍耐とを與へ給へ。そは我が志を潔ふす可く又我が敵と終世相鬪ふべく。

二月二十三日。近頃珍らしき快晴なり。此日は愈ゝ山を出でて人寰に下らんとす。我は何とは知らず札幌に歸る事の深く

厭はれて、彼の此に來れる日の事を思ひ巡らせば再び歸らじと心に決せるものが、又も恙なく嘗て永別をなせる山河に對する事の甚だ本意なく覺えたりしなり。されども之れ我が少情の致す處、又感情の致す處なれば我は何ともあれ歸らざる可からざるなり。之れにてこそ死なめと先日迄心に思ひなせし銃は今將た小禽をあさる玩具となりぬ。森本君は大に疲勞せるが如く道に度々行き惱みし樣を見られて氣の毒の至りに堪へず。されども嚢中は最も寒くなりて橇を傭ふ可き事も心に任せず、唯心にもなき事を云ひもて、君を勵ましつゝ雪蹈みしめて、歸鳥夕を告ぐる頃石山に到る。かくて又打立ちて林樾の間を行くに空は藍を湛へて限りなく晴れたり。雪は滿地に布きて到る處に白し。右の方蓊鬱たる樹間には十三夜の月淋しき許り靜かに差上りたり。遙かに耳を傾くれば谿底には水聲潺湲として不斷の天樂を弄びつゝ、罪なく見ゆる小禽の歌に和す。眺めやれば木材を積みたる馬橇は遠く去りて凛々たる馬鈴の音のみ幽かに殘る。森本君と我と唯二人醉へるが如くなりて歩々次第に緩く右顧左眄之を無限の情に堪へず。

“O Nature!— or what is Nature? Ha! Why do I not name thee God? Art not thou the ‘Living Garment of God?’”

と云へる句など思ひ出されて折節は佇みて此大觀に向うて言なきもの幾度もありき。自然を味ひ能はざる人は不幸なる哉。我今に到る迄自然を愛せざるにはあらざりし、否極めて之れを愛したりき。されども今日の如く自然より慰安を受けたる事はあらず。世を退けたるものには自然は唯一の侶伴なり。自然は我を呪はず、我を怒らず。自然は極めて公平なり、不和なり、彼の月、此の枯木、湛然として知らざる如きも而かも其中より一種の浩氣逆りつゝあるを見ずや。永久に流るゝ小川の水に燦然たる月光の溶けて摧くる時兩者は何をか囁やきつゝあるやらん。嗚呼、我に seer の眼なきを悲しむなり。

眞駒内の牧場を夕陽藻岩山頭に舂く頃に打眺めつゝ蕭條たる孤邨の炊煙を後にして豐平川の假橋を渡る。粗造なる架橋の上、橋守の釣具を收め去りしより人影全く絶て聳立つるものは、我等が大なる苦難と歡喜とを得たる定山溪下を流れ下れる豐平川の漣波のみ。桂影楚々として河水に醮せられ、金蛇白馬共に流れて四郊の模糊たるに相映發し冬日の寂寞此所に極りぬ。二人橋上に佇立し手を拱して逝水を打ちまもりつゝ感慨の湧き去る所を知らず。嗚呼、此身不肖と雖も功名の人に非ず、

又射利の客にあらず、向上の壯圖を抱きて力の足らざるを悲しむ。俗潮の頽波(たいは)滔々として、我に之れを未到に防ぐの手腕なし。されども我が微軀は神の有なり、豈唯碌々として自ら棄てんや。彼の月を見よ、彼の水を見よ、嗚呼我に何をか敎へんとはするぞ。彼等の中には力あり、確かに之れあり。我が眼月を見るの限り我が手水に觸るゝの限り我は斷じて世俗と相混ぜじ、月に力あり、水に力あり、而して月と水とは我が畢世の侶伴なればなり。定山溪に我がなしたる決心は、此に再び確かめられたるが如き感なくんば非ず。嗚呼、神は仁惠なるかな。不肖我の如きに施すに又此の自然の絕美を見得るの眼を以てす、爾り見得るの心を以てする事や。

札都に入る時正に八時。蕎麥屋に入りて蕎麥四杯を傾け歸來唯何となく心樂し。我は其日の責任を其日に爲し終るべし。之れ我が心を樂しましむる最大の方法なり。

三月一日。今朝見れば我が枕の上にも涕の跡はあり。あはれ昨日までは人の上とのみ思ひしものを。（以下三頁落丁）

苦しさに夢はハタと覺めぬ。

折しも曉の四時の鐘校樓の上より聞えて苦しき胸の動きは猶烈しく打ちつゝあり。

嗚呼、何たる惡夢ぞ。我が父上も母君も最も安らかに今日の日を樂しみ給ふて睦ましくあり給ふに何とてかゝる夢に遇ひけん。我が心狂ひしか。抑も我の父母を慕ふの心足らぬか。枕頭を探れば涕痕寒く衾を重ねて淚更に潸然たりき。

同級者輩がストーブの周圍に喧噪するも、早我に樂しからず。我は獨り窓に倚りて思はず演武樓上を眺めたりしに其の樓の屋上に五六の群鴉あり、共に樓の尖端を爭ひ一羽其の上に留まれば他者之れを追ひ喧々噪々たる事恰もストーブの周圍の如し。將た浮世俗輩が虛名暴富を慕うて喧々噪々せるが如し。而かも一層鑑むべき現象あり。一鴉若し尖端を得て傲然たるも他鴉既に轉じ去りて何れにか行けば已れも永くは肩骨を聳かすの勞に堪へざるにや悄然として又何れにか飛び去りぬ。

三月三日。功名富貴畢竟我には浮雲の如し。我はかくの如き覺悟をなすに甚だ難からざるを思ふ。天地の悠遠なるを見、時限の無際なるを觀じて人間を顧れば其の微小は如何ぞや。而して人其の間に馳驅奔走して名と利とを之れ求む。擧世之れ

求む。擧世之れを榮とし、之れを利とするも其區域幾千ぞ。史乘之れを後代に照すと稱するも其時限幾十ぞ。嗚呼、功名富貴畢竟我に於て浮雲の如し、何爲ぞ彼に戀々として我が行程の障となさんや。

獨り情に至りては然らず。功名富貴は我之れを人に認められん事を勉む。單獨にして功名を得るも富貴を得るも將た何するものぞ。獨り情に至りては然らず。我に我が情の濃淡の褒貶する人なきも我が情は依然として熱す。我が情翕然として熱し來る時此情を抑ゆるものは誰ぞ。功名富貴の念起らば人寰の頼むまじきを觀ずれば足れり。唯情の濫發するや抑ゆるにものなく、滅するに力なし。空しく反煩楚々として此胸の殆んど裂けんとするを覺ゆるは何ぞや。

我一度死せり、浮世又何の我を煩はす處ぞ。光風霽月瀟洒磊々たる可きなり。而して今日祖母及び父母の贈書を領し之れを披見するに及んで無限の苦痛我が胸中に横行しぬ。父上は我が基督教に入るの擧を一時に激せられたる妄動となし、母上は我が良心を失ひ不忠不孝の罪を犯して邪教に入りたるものとなし、祖母は何とも消息なく唯安否を問はれたる紙裏に一片の紙幣を惠與せられぬ。而して我が涕は最も祖母の紙上に注ぎぬ。嗚呼、祖母今や年七十、餘命幾干もなし。而して我の呈する所の書を見賜ふや失望悲痛極まる所を知らず、食を廢し室に籠り潸然として何が故に世に在るやを歎ぜらると云ふ、而してかゝる悲痛の中猶我に慈憐を傾け滿腔の惡みと哀れみとを以て我に此の賜を賜ふ。嗚呼、我れ又何をか云はん。垂髫より養育の恩は寧ろ祖母にあり、其多年の恩義を思ひ此賜書に對すれば我心將に破れんとす。我は今我が情の弱きを叱して無情となり得るか。

基督は汝若し我が道を行はんとせば父母兄弟とも敵とならざる可からざるを覺悟せよと宣ひぬ。我元より之れを聞きて知れり、又此く覺悟せざるには非ざりき。而して父母に於ては我敢て情を枉げて眞理の爲に相爭はんとす。唯祖母が瀕死にて我を悲しむを聞きては我が心遂に惑はずんば非ざるなり。

翌日森本君と相談の上余は半日を費して再び我が縷々の意中を陛下に獻じて疑を解くべくなしぬ。願くはこの書の陛下に到る時嚴慈の御心をして平ならしめよ。さらば我事行はれんなり。

嗚呼情、嗚呼少情、嗚呼婦女子の情、我之れを抱懷して何處に行かんとはするぞ。古人に對して恥づるなきか。我が心身は凡て神の有なり。我堅く之れを心に誓ふ。而して尙情を恣にして悔いざるものは何ぞや。されども神よ、願くば我が弱志を憐み給へ、此の脆き心を救ひ給へ。思ふに向後情によりて苦む事必ずや多からん。少情は惡魔の鋭利なる武器なり。神よ、我をして眞に何者をも獻げしめよ、而して代り賜ふに降魔劍を以てせよ。即ち大なる情を以てせよ。擧世の人を我が父母弟妹の如く敬愛し而かも涙を呑みて之れを鞭撻す可き大情を與へよ。我れ敢て大悟を衒はじ。我實に惑ふ。我れ惑ふ。只神の慈手の我が身に下らんを伏待す。戒めよ、少情の奴となり果つる事を。

三月十一日。 泣かんも辛し笑はんも憂し。我が身の甲斐なき弱志を何とか云はなん。今夜增田より手書を得ぬ。其の處々に、

弟や當らずと雖も平生私かに志を以て合ひ氣を以て投ずるの知己を以て兄に交り、骨肉以上に至情を以て兄に對したりき。勿論我等の情交は文通以外にあり、形式上の交際以上にあり、遠く離散して音信相通ぜざるも親愛の情苟くも缺けずんば又何ぞ憂へむ、唯夫れ兄の不肖を見る即ち常稱の友を以てして潛心世と絕たんがために亦不肖とも絕たんと云はゞ弟亦已まんのみ。

と。其の志悲しみて然かも傷まず、尙我を追うて此の如きの哀辭をなす。我亦之れを惡魔の聲とし眼を瞑し耳を聾にして之れと絕たざる可らざるか。嗚呼、寧ろ此の如きの悲慘あらんや。既往を顧るに余や實に彼と好かりき。而して我が氣の相投ぜる實に彼の云ふ所の如し。我れ竊に期して百歲の知己となしぬ。而して余北海道に來りて一度森本兄と遇ふ、未だ以て全く君と志相投ずる事能はず。余を以て兄を見るに、偏癖なる直徑なる一驕兒となすの外なく、余が物に疎放にして出入人の意に任せたる心には痛くも相會はざりしなり。唯兄が當時の苦痛は深く余が同情を引き起さしめ又共に眞理に向うて進むと云ふ點に於て毫も異見なかりしがために君に許すに朋友の交りを以てしぬ。爾後兄に接する每に益〻其情性の相反するを見て而かも余の兄を畏敬するの念は愈〻加はらざる能はざりき。唯所謂らく天の余を兄に配する所以のものは兄の長を以て余の短を補ひ余の長を以て兄の短を補ふにあり。然らば即ち余の取るべきものは兄をして偏癖ならざらしめ又直行徑往ならざ

らしむるにありと。爾來余此意を體して兄と相交はりしも一も兄を益するなく却て兄をして益々無明の境遇に投入せしめんとす。嗚呼、余の志痛まざらんや。余は當時尙增田氏に許すに知己を以てし又松平恒雄氏に此の如くしき。而して兄を見れば君は少年の時、多年の知己を全く擲ちて之れと音信を絶し、今や卽ち殆んど文を交ふるの人なし。常に余に語りて曰く「余や死生を致して君に許す、嗚呼又何の他に求むる處ぞ。余は他との交通の或は君との交情に於て愛を致すの念を低めん事を恐る。故に此に到る」と。余之れを聞く每に、常に感激して兄の高節を謝せざる能はざりき。而して余獨り此事をなす能はず、窃に以て恨となせりき。然れども思ふ余の境遇を。嗚呼知己は互に胸臆を相談じ、而して後に生ずるものに非ざるなり。只相視て意志相通ず。一見にして百年の知己の如くと云ふもの、實に之れなり。胸臆を披瀝して往來を語るが如きは卽ち其の後の事のみ。余の增田氏に於けるや、實に此の如しなりき。而して森本氏に於けるも亦此の如くなりしなり。嗚呼、我が情の我を信ぜるものに感激して、之れに知己を以て許せしものは果して非なりしか。余が少情は實に友を撰ぶの明かなりしものなるか。彼を思ひ之れを想ひ、余が心殆んど迷ふ。嗚呼之れ亦神の所謂暗く見ゆる惠なるものなるか。余は余が弱志の餘りにも强力なるに殆んど摧かれんとするを悲むなり。

三月十六日。此夜約翰傳の第九章を讀む。讀み去りて無限の感慨なき能はず。若し章句を刻みし人が達識の人ならざりせば、此章は僥倖にも甚だ適當に刻まれたるものなり。要するに此章通篇の大主意とする處は、赤兒の如き信仰を說けるにあり。我之れを讀みて、深く過去の非を悔いざる能はず。

擧世を達觀するに及ばず。汝の近隣を尋ね來れよ。何れの戶前にか悲哀の氣なからざらんや。人生悲慘多し。嗚呼、之れ誰の罪ぞ。顏回何の不善をなしてか夭折せし。盜跖何の不惡をなしてか壽福なる。正潔の家中、屢々饑渴の聲を聞き、阿世の門前、往々苞苴の山に賑ふ。此の如きは猶可なり。一度眼を轉じて彼の一方の意味に於ける精神的不具なるものを見よ。彼等生れ得て婬逸怠惰なる家庭に人と爲り、耳目の觸るゝ處皆嘔吐を催すの中に成長す。而かも若し不幸にして彼等の頭腦健全ならざれば、彼等は必ずや時に瞬間の Vision に打たるゝ事ありとも、周圍の毒氣は忽ちに之れを障閉し、遂には彼等

をして全く彈力性なき不用の人物とならしむるが如きは決して紙の上にあらず、實に往々にして見る處なり。此の如き人は果して之れを何とか云はん。朝に道を聞かば夕に死するも可なり。顏囘既に道を得たり、豈夕に死するを悲しまんや。千歲の汚名は、以て盜跖の長壽を充分に消盡するを得べし、唯彼等が如きは何を以てか解釋せんとする。天道是か非かの疑念は、油然として胸中に漲充するを免る能はざるべし。此に於てか佛者の三世因果說は出で來るなり。基督の弟子亦此の疑念に煩悶する久し。此れ一瞽者を得て疑念は疑問となりて基督の前に投ぜられぬ。曰く、

And his desciples asked him, saying, Master, who did sin, this man, or his parents, that he was born blind?

之れ寧ろ當然の理のみ。而して基督の答は實に簡單なるものなりき、而かも心膽に刻入したるの語なりき。

Jesus answered, Neither hath this man sinned, nor his parents; but that the works of God should be made manifest in him.

彼の如き疑問を持したる弟子は此の答辯に對して、豈滿足する事を得んや。彼等が其證を求めんとするの前、聰明なる基督は既に之れが證を與ふべく盲者を癒しぬ。之れに次ぎて起る一條は、即ち驚愕して信ずる事能はざる無氣力者と、罪の己れに來らん事を恐れたる父母と、己れの權勢の爲めには眞理をも犧牲として憚らざるパリサイ人と、一徹の所信巖石の如き盲者が、相錯綜して弟子等に驚く可き教訓を與へつゝあるを見ずや。

吾人は天地の到る處に大なる驚愕に接する事を得べし。驚愕は實に信仰の基礎なり。吾人が驚愕せる時、之れを溯りて其奧殿に達せよ。神の在さゞる事あるか。而して彼の無氣力者は、之れに溯る事をなさずして、之れをパリサイ人に渡しぬ。嗚呼、大なる機會は此の哀れなる無氣力者の掌中には長く留まるべくもあらざりしなり。パリサイ人は初めより疑惑の念もて之れを受けぬ。彼等は皆一廉の學者なり。彼等は其學問を以て、彼等の有となせるものなり。彼等は未だ神に之れを捧ぐるの謙遜を有せざりしなり。此に於て懷疑は蜂巢を衝けるが如く、四充して彼を襲ひぬ。彼等は此事を信ずるべく餘りに高慢なりき。即ち兩親を招きて、之れに問うて初めて彼が性來の盲なるを知れり。然かも彼の兩親は、其子の成育して己れを安樂に養はん事を祈りて、しかも其子の萬事に責を負ふ能はざるものなりき。兩親はその甚だ我に危險なるを見るや、言を構

へて其癒者を知らずと云ひぬ。而して疑問は再び盲者の上に向けられたり。此時の盲者の答解は、基督の弟子、パリサイ人、及び余等の懷疑論者を愧死せしむるに足るものなりき。

He answered and said, Whether he be a sinner or no, I know not; one thing I know, that, whereas I was blind, now I see.

嗚呼之れ何等簡潔の語にして、然かも深邃の意を有するぞ。彼は多く餘を云はざりき。パリサイ人が彼を賺して基督のなせし所を聞き正さんとするに對し、彼は敢然として、

He answered them, I have told you already, and ye did not hear: wherefore would ye hear it again? will you also be his desciples?

と撤弄一番しぬ。而してパリサイ人は此警語に、胸を剔られたる不快の餘りに、所謂本末主義、愛國主義の盾に隱れて彼を追放せり。

而して基督は再び彼と共にあるなり。而して弟子亦彼に從ひたらん。基督と彼との問答を見ずや、

He said unto him, Dost thou believe on the Son of God? He answered and said, Who is he, Lord, that I might believe on him? And Jesus said unto him, Thou hast both seen him, and it is he that talketh with thee. And he said, Lord, I believe. And he worshipped him.

此に於て基督は此に鐵の如き斷案を與へて曰く、

And Jesus said, For Judgement I am come into this world, that they which see not might see; and that they which see might be made blind.

傍に隔き居たるパリサイ人は、眼を撫して其盲せざるかを疑ひつゝ、恐る恐る基督に反問せり。

......and said unto him, Are we blind also?

基督が最後に發したる一言は、實にパリサイ人を驚倒せしめて永遠に吾人を驚醒するものなり。曰く、

Jesus said unto them, If ye were blind, ye should have no sin: but now ye say, We see; therefore your sin remaineth.

と。嗚呼なまじひ眼あるものは不幸なるかな。彼等の眼は世の不潔と、假相を見る事を得べし。然かも是れ道を進むに當りて何の用ふる處ぞ。ミルトンは盲目なりき。されども彼は萬人に超えて、俗世の波潮を透視せるに非ずや。肉體の眼に此の如し、所謂心眼と稱するもの、換言すれば才智と稱するものに、如何に人を迷はす事の多きよ。眼を開かれたる盲者は、肉眼と心眼と共に盲なりき。肉眼は兩親の顏を拜せんがために、而して心眼は天神の尊殿に接せんが爲めに、嬰兒が乳を探る如く專心しぬ。而して彼の願は二つながら叶へられたり。Byron 歌はずや、

But grief should be the instructor of the wise
Sorrow is knowledge, they who know the most
Must mourn the deepest o'er the fatal truth,
The Tree of knowledge is not that of Life.

嬰兒の如き信仰我に來れ。我は神の前に何事をか論ずるを得んや。我が肉眼は盲するも可なり。願くは心眼をして一道の光明に浴せしめよ。我は此章に前後照應ある整然たる大教訓の示されたるに驚服するの外なきものなり。

四月四日。『エホバの手短くして救ひ得ざるにあらず。其耳は鈍くして聞こえざるにあらず。唯汝等・邪曲なる業、汝と神との間を隔てたり。又汝等の罪、その面を被ひて聞えざらしめたり。そは汝等の手は血にて汚れ、汝等の指はよこしまにて汚れ、汝等の唇は虛僞を語り、汝等の舌は惡を囁き、その一人だに正義をもて訴へ、眞實をもて論らふものなし』……以賽亞書 59. 1―4.

自ら顧て我が眼を撫し、口を撫し、手を見、胸を抑へて如何と見る時、我は實に悔恨の涙に咽ぶ。我が手は誠に血にて汚れたり。我は嘗て此の手を以て諸種の不善を行へり。我が指はよこしまにて汚れたり。嗚呼然り、我は長き間一時の勃情を

制する能はずして、痴夢を腦裏に畫きつゝ邪淫を行ひぬ。我の唇はそも幾何の虚僞を云ひ、我が舌はそも幾何の惡を囁きけん。加之我が口は煙草と毒酒と過食と道ならぬ口吻とによりて、いたく汚れぬ。而して我が眼は、嗚呼此の我が鈍き眼は、悲しくも汚濁を見るに鋭く、諸の不善を見る毎に、我が薄志をして之れに傾けしめぬ。我は我が眼によりて少しの知識と亘多なる惡性とを得ぬ。我が眼は假曆の金銀を見て姑息なる心を起しぬ。惡鬼の如き權勢を見て懸戀の心を起しぬ。美女を見て不道の心を起しぬ 不用の書を見て怠慢の心を起しぬ。我が身として顧る所汚れに染みたる處あらざるはなし。此の不潔汚濁の泥身を抱懷して我甚しく患ふ。我が堅くなりたる手は再び赤兒の如き淨きものたる事能はず、我が眼は盲者の眼にだに如かず。我が口と舌は鳥だにも劣れり。嗚呼、此の一度色に染みたる絲を再び舊の純白なる色に返し得るか。揚氏の涙、今は我が上なり。常に身を離れざる眼を擧げて、常に身を離れざる手を見る時、我が心誠に哀れに悲しむ。我は今我が肉體も心も共に神に捧げぬ。神は果して我がかく汚れたる心身を受け給ふ可きや。我が卑志を以て之れを計るに甚だ難し。されども我は唯神が悩めるものを救ひ給ふと云ふ本願に縋りて、心身を捧げまつる。神よ、願くは我が懸々の微志を憐み給ひ、願くは我に君の卑僕たるを許させ給へ。我君に心身を捧ぐと誓うてより以來、玆に一ヶ月の餘り經たり。我の神に盡す處或は足らざりしやを知らずと雖も、我は我が出來得る限りを盡したるを信ず。而して未だ我と神との間に隔りあり。我の面は被はれて仰えざるは、嗚呼之れ何か故ぞ。我尚未だ邪惡なる業あるか、罪あるか。神、願くは此の小なる人を哀れみ給へ。自ら邪曲ならんと云ひ、罪を爲さずと誓うて、而かも之れを犯す。されども神願くは我が微志を哀れみ給ひて隔てをなからしめよ。我は世俗の障碍に遇ふ事なしに、直ちに神の面前に伏拜して眞に我が舊惡を謝し、新たなる淸き信仰を得せしめ給へ。我は之れなくば何事も此世に爲す事を得じ。自ら顧みて長く眞に神に接するを得ざる事を思ふ毎に、或は我の救はれざるものにあらざるかを思ひ、淋しき感に堪へざるなり。

噫、されども我は徒らに老人の如く過去を顧望せじ。我は過去を斷じて再びせざるべし。願くは日々に新ならん。されども之れ我が力の及ぶ處にあらず、唯神の惠に縋らんのみ。

忠愛なる森本君は我を抱いて、我が身既に潔まれりと云ひ吳れぬ。我は之れを力に進み行かん。嗚呼、野も來れ、山も來れ、我は惡魔と戰うて、戰ひ休める時は森本兄の懷に入りて、共に神の膝下に息はんのみ。

此夜雨降る。寂寞の氣四方に罩りて、蕭々たる雨聲耳に冷かなり。獨り思誠堂の階上に坐して、舊約聖書を手にし、默々として讀過すれば膽落ち氣くじけて、身はいとたよりなきものゝ如く覺えて淚滂沱たり、即ち書す。

四月六日。昨夜光風館に風雨の一夜を經て、今朝は既に錢函の海濱にあり。夜來の風勢未だ全く熄まず、餘怒の頹濤層々相重りて白雪を吐き、雲影急に走り、其景偉大高潔、久しく山間に屏息して瑣事に汲々たりし身には、其愉快譬ふるに物なし。即ち二人（我は森本兄に伴へり）砂濱に横はり、此の天地の sublime に接して、無限の感慨あり。神が吾人小弱の徒を慰めんために、將た勵まさんがために、將た奮はしめんがために賜へる此天地の大景は、太古以來變ずる事なし。其の wild なる、naked なる、great なる、grandeur なる波濤の景は實に吾人に多くの教戒を供しつゝあるなり。兄と共に此の景が、吾人の胸裏に何を教へつゝあるかを考へて、下の如きを得たり。我が見る景色は、我に宏大無邊なる氣宇を與ふ、層々卷き來る彼の白波は之れ天地の indignation なり。而して彼方の沖邊にありて、一望蒼碧眠れるが如きものは其胸中の如何に泰然として calm なるかを示すものに非ずや。吾人は又此大景の中に、神の Kraft の現存するを認め得べし。思ひ去り思ひ來れば、地上に藏せらるゝ神の謎語は比々として我が心頭に輻輳し來るを覺ゆ。其の鏜々たる波聲は、實に我が心臟に沁み入りて、其血をして一種高遠なる理想に熱せしむ。浮世俗塵既に我が胸中にあらず、吾は唯兄と共に神の膝下にあり。我は天地に對する時、我が受くべき苦痛の爾く心を痛ましむべきものに非ざるを思ふ。嗚呼天地は神より遣されたる、惱める人の慰手なり。我が心の痛める時、我は天地に接して癒さるゝを得べし。我奮勵して其理想の尙行はれ難き時、來りて自然に接せばや、自然は必ずや我に種々なる慰藉を與へくるゝ事なるべし。願はくは我をして全く自然と同化せしめよ。自然の寬大なるが如く、自然の畏懼すべきが如く、自然の愛親すべきが如く、自然の公平無私なるが如く我に來れ。我の怒る時、願はくは自然の如き怒あれ。我の喜ぶ時、願はくは自然の如き喜あれ。自然は神の被服なりと云はん。我深く自然に學ばずや。我の汚き、

低き、卑しき心は自然によりて著しく潔められ、高められ、而して高尚となさしめらるゝなり。世に若し自然の美なるものが皆無なりとせば、嗚呼人の生涯は如何に苦痛なりけん。人に自然に接するの詩眼なかりせば、如何に不幸なるらん。我は此大なる恩惠を感ずる事能はず、神を無にする人あるを悲むなり。

四月九日。

They sail unto him, Grant unto us that we may sit, one on thy right hand, and the other on thy left hand, in thy glory…………Mark. chap. X. 37.

之れ *Zebedee* の息なる James と John が、基督に乞ひたる言なりとす。之れによりて考ふるに此二人の弟子は、基督が必ずや遂にユダヤの王位に登りて、羅馬の羈絆より逃るゝの機あるべしと信ぜるが如し。又基督が此の如くならば、已れ又其の顯要の地位を占めて、窃かに浮世の光榮をも望める念あるが如し。そは他の弟子が、此會話の始末を聞きて相怒りたるにても知る事を得可し。兎に角そは今余に多くを要せざるなり。余は此章を見て、今人の宗教に身を投ずる又、這般の觀念より來れるものなきやを思はざる能はず。甚だしきものに至りては、信者たるによりて、世上の信用と體面とを得んとするものあるべし。聖職にありとの故を以て、自ら高くせんとするものあるべし。或は國家の爲めに、此宗教を採らざる可からずと云ふものあるべし。若しくは已れの欲望を滿足せしめんがために、宗教の假面を被るものあるべし。卽ち換言すれば、宗教を主とせずして之れを客とするものあるべし。今の滔々たる宗教家中、一點此念なきもの、果して何人かある。嗚呼之れ遂に James 及び John の一層汚惡なるものゝみ。宗教は信ぜざる可からざるが故に信ずるなり。吾人が正義によりて立たんとする時、自然的に absolute なる必要を感ぜしむるものは宗教なり。吾人此の如きの宗教を秉りて初めて眞の信仰を得べし。彼の爲すあらんがために宗教の蔭に隱るゝ徒輩の如きは、實にこれ宗教の賊なり。獅子身中の蟲とは、實に彼等を稱すべきなり。凡そ世に厭ふべきもの、僞善宗教家に若くはなからん。彼等は善裝して內醜なるものなり。外醜なるものは吾人之れに接近せずして、豫め其殘害を防ぐ事を得べし。只僞善者に至りては然らず。天使の如く言ひて、惡魔の如く行ふ。哀れなる人の子は、

往々その惡舌に罹りて斃る。惡む可く、厭ふ可く、而して何處迄も放逐追迫して壓滅せざる可らざるものは、實に宗教を客とするものなり。宗教を知らざるものは憐む可し。我共に進まん。知つて之れを行はざるものは、實に大惡人なり。彼等に一の假借す可き餘裕なし。基督は云へり、

"And whosoever of you will be the chiefest, shall be servant of all."

嗚呼眞に然るべし、眞に神を知るものは人の上に立つものにあらず。虞翁の生涯は人の上に立てるが如かりき。而かも彼の全生涯は、實に人なるもの〻改進の爲めに費されたりと稱して不可なかるべし。此の如きを眞の宗教家とは云ふなり。多く己れを捧げたるものは、多く確乎たる信仰を取り得べし。全く己れを捧げて、玆に人の信仰初めて全きのみ。神よ、願くは我をして我が有なる凡てを捧げしめ給へ。而して我に許すに神の卑しき一僕たらしめ、力に應じて神の御業を人に示す事を得せしめ給へ。我が惡魔なる慢心、我を退き去れ。神よ、我が弱き心を導きて、此慢心を退かしめよ。

四月十五日。快晴。此夜 Daughday 夫人の家に於て English class ありし後、森本兄と共に博物館場内を逍遙せり。此夜は風全く落ちて、一天悉く霽れ、新月と星宿とは高く蒼穹に懸り、萬象皆暗夜の中に沒せられて黑色の一塊と化せり。余は近頃眞面目に自然に接せる事極めて稀なりしに加へて、今の風色は頗る平常と異なるものあるが爲めに、我がきたなき汚れに滿ちたる心も實に洗はれたるが如き心地をなしぬ。我は我が眼に觸る〻處のもの、塵埃の微と雖も、神の御手によらざれば造られざるを深く感じて、實に異樣の感に打たれ、人間の甚だ小なるを思ふと共に宇宙の如何に大なるかを考へて懼然たらざる能はざりき。嗚呼、神は我等の眼の觸る〻處に其微妙なる業を示し給ふにも拘らず、余は永く之れを見て信ずる能はざりき。余は自ら何が故に、斯くばかり平易なる理を解し得ざりしかを今日は怪しむなり。兄は喟然として、此大觀の中に、神の love と solemnity とが殘りなく顯はれたるを云ひて嘆息せり。嗚呼眞に爾かなり。

かくて我等は河邊に下り、玆に暫く二人とも言ふ可からざる嚴肅の思に沈みて、少時默想に時を費せり。而して兄は祈れり。余も亦心より祈れり。我は實に心身を神に捧げしものなり。而して尚且つ余が神を見んとする時心中に被膜一つあるが

如き心地したり。之れ尚余に impure なる elements ある事を證するものあるを思ふ毎に、未だ慨歎禁ぜずんばあらず。而して今夜は肉眼を以て神の如き景色を見ながら、心の眼の中に、若し眞に神を認むる事を得ずと云はゞ、之れ實に悲しき限りに非ずや。神よ願くは我が此の絶景を眼前に見る如く、御國を心中に來らせ給へ。我が心は只之れのみ。唯我が心中既に涙あらば、嗚呼又何をか憂へん。人は涙を厭ふ。されども我には如何に貴きものなるぞ。我に衷心より出づるの涙と笑とあれ。

歸途に就きて家近くありし兄は、家に歸る事のつらければ、今少し散歩するとて余に別れたり。彼の眼には涙を湛へたり。余の心は痛くも熱情ならざるを悲しむ。兄は確かに grasp せる事の強き人なり。

四月十七日。今朝は實にきたなき夢を見たると共に、余は漏精してありぬ。而して體稍ゝ疲れたるに加へて、午後より家の畝を耕しゝが今夜は例にも増して眠たく、German を復習し終りし後は、きたなくも殆ど半眠の間に過して、聖書も實におつとめの爲めに通讀せるに過ぎず。而して余の心は、夫れにても別に悲しき事もなく、床に就かんとて一寸外に出でしに、怪雲の間に隠れる月さやかにして、余の鈍き事鉛の如くなる心も之れに動き、直ちに裏の牧草畑に到りて靜かに已れを省みし時、悔恨の涙は初めて我に來りぬ。幾度云ふも詮なき事ながら、余の心は實に impure にして鈍く、かく靜かに考ふる時は、果して神に救はる可き資格ありやと思うて、寂しき限りの心地するなり。一日一日を姑息に過して、目前大事の來らざるに甘心して酔生夢死せんとする余の心は何事ぞや。噫、體の惰弱なるは、之れを鞭ちて匡す可し。獨り我が心の鈍れるは何を以て之れを矯す可きぞ。余は確に神を知るものならざる可からざるに、今に到りて尚此醜に安ずるとは何たる意氣地なき事ぞ。月を見、星を見、草を見、木を見るに、各其分を盡し、其分に安じて心泰然たるが如し。而して余獨り齷齪として其分を盡す能はず。故に本分に安ずる能はず。心は常に何となく急がはしくして、而かも一事のなすある事なし。こんな事では眞に駄目なり。

余は神に祈れる時、涙を余が眼に見る事を得しをこよなき樂とす。今宵も幸にして、御惠によりて多く涙を流す事を得て、心は少しく安くなれり。余は家に歸りて再び聖書を讀み、山上の垂訓の處を讀み、義者の上げらるゝを見て何とも云へぬ心

地となれり。

Behold, the righteous shall be recompenced in the earth; much more the wicked and the sinner.

四月二十三日。此日午後、森本兄と相携へて豐平河畔に遊ぶ。昨日の大風漸く收りて、而かも天依然として霽れず。北風時に來りて遊子の袖を吹く。堤畔一帶の景、林樾未だ新綠を出さずして暮秋の夕の如く、風悲み雨咽び心慘然として暗し。嗚呼、天の異景を下して吾人に教ふる何ぞ一に此に到れるや。人は春色に狩られ、氣蕩然として身に沿はず徒らに外觀の春光に夢死せんとする時、天は雨と風とを下して、春光の樂むべきは心に春光を得たるものにして始めて能ふ可きを示す。余の衷心尙風雨あり。焉ぞ慘然として痛まざらんや。昨夜初更、家に歸らんとし、路に瀏喨たる音樂の聲を聞く。之れ我が校の運動會に興を助けん爲めに、中學の生徒をして練習せしむるものなり。我が心悚然として涙なき能はず。嗚呼、神より來れる無邪氣淸淨なる嬰子を育するものも人にして、毀つものも人なり。嬰子は肉體に育せられて精神に毀たる。妙齡の少年をして墮落の第一步を蹈ましむるものは亦心なき靑年なり。否輕薄なる世間なり。頃者學生の腐敗を云ふの聲諸方に起るの間に、無邪氣の少年を拉して此の如きの事に從はしむ。何等の無分別ぞ。何等の罪責ぞ。嗚呼世は此の如きのみ。今更に何をか驚かんや。滔々として皆此の如し。汝の涙は到る處に灑ぐ事を得べし。我は亦今朝一老婆の荷を負へるものが、菓子屋の店頭に立ちて物欲しげに之れを眺むるを見たり。嗚呼、哀れなるものよ。老婆の顏を見ずや。汝の皺は、無窮なる世の辛酸より少きものにはあらざるか。汝の黑き皮膚、破れたる衣、之れ何を示すぞ。汝は何者の女にして、何者の母ぞ、かくの如く零丁して、獨り市上に徘徊する。今夜汝の眠る處は何處ぞ。汝に汝の愛する愛孫の汝を慰むるあるか、將た汝の子は汝に孝なるか。春とは云へども風寒し。汝今夜場末の廢屋に蹲りて、雨溜と北風とに訪はれ、泣きて短夜の尙明け難きを喞つものにあらざるなきか。嗚呼、而して見よ、汝の眼を擧ぐる處、不義の財によりて富めるもの丶邸宅は、恰も山の如く巍然たるにあらずや。されども老婆よ、我が祖母よ、徒らに浮世の汝に辛きを思うて汝の業を休む事勿れ。汝は此世に苦しむものなれども、亦神の子なり。いそしめよ、怯むな。汝の生命と光とは其處にあらん。我を見よ、我も亦心に於て汝よりも貧しきも

のなり。我が眼を擧げて、心富めるものが思ふ儘に其道を進み、その位を得るを見て心悲まざらんや。されども我も汝と共にいそしむべし、惰らざるべし。我が道を泣きつゝ、されども笑ひつゝ進まん。我は只神が心貧しきものを哀れみ給ふを知れば、否信ずれば、之れを生命ぞとよく頼むのみなり。我の汝に捧げし同情は、汝が唯老いたるが爲にあらず。又緣親なきがためにあらず。汝と我と境遇の全く相同じければなり。憐れなる老婆よ、哀れなる我よ。

たゞ頼むたもとな朽ちそ春雨のいとゞ我が身に降りまさる夜は

之れ我が母上の前に詠みて捧げたる歌なり。母上には再び我と文通せじと云ひ越されたればなり。我はこの事を多く書く勇氣なし、唯神の攝理をのみ之れ祈るなり。

己れながら我ばかり言ひ甲斐なきものあるべきか。森本兄は、我が兄を慰め能はざるを責めで、早く兄は安心して懽喜に滿つる如くせよと云はる。眞に胸裂くるなり。兄は一度悲みに陷る時は、亦救ふ可からざるに至る。我よく之れを知れり。嗚呼、若し我にして今少し faculty ある人間なりしならば！　淺ましき、貧しき我が心は、終に兄を慰むるに由なくして終る可きか。我元より我が心に深き悲みあり。唯我にして深く悲まるゝ兄を如何と思ひて、強ひて笑を裝ふ事の如何につらきぞ。つらきはよし。我は兄に何物をも捧げたる身の、心臟の破るゝ迄、つらくとも何か厭ふ可き。唯何時の時か兄をして懽喜に滿たしむるを得べきぞ。

今日二人にてさすらひし天然は、今我が机上に現れて我をして無限の感慨を引かしむ。秋の如く蕭殺たりし景は、我が心の中を此上なくも云ひ顯はしたるものなる哉。人は春に醉うて快げなるに、何とて我のみかくは悲しきぞ。而かも此の悲みは何處にも漏すに由なし。神よ、願くは我の貧しき心を慰め。

四月三十日。思ふに、東都の花既に散りたらん。春陽四月も今日を以て終らんとす。而して北海の風景今や漸く春に入り、塘草野花、轉た春神の沂きにあるを示す。而して今日は何たる好天氣ぞ、本年に入りてより實に稀なる處とす。即ち森本兄と錢函に遊ぶ。朝十時、家を發し原氏の愛犬「二郎」を携へて鐵道に沿うて郊外に出づれば、稚草雛の如く靑く通り、樹は

漸く嫩芽を催さんとす。風日和煦、平常教場に不平を忍びて鬱々たりし胸臆、忽ち開くるを覺えたり。農家は將に多忙ならんとする時なり。些々たる茅屋の下、父あり犂を乘りて耕せば、兒女二人亦その業を助け、幼童一人軒下に佇みて行人を見送るなど、宛然たる一幅春耕の活畫にして、我等は彼等の勞苦と淸貧と廉潔とに少なからぬ同情を表したり。輕川の附近にて握飯を太牢の美味の如く味ひ、又堤下の土筆を摘みて子女の態にならひ、遂に錢函に到れば、前來の荒れたる景色とは打て變りて、平波鋪くが如く、款乃の聲海上に聞こえて鰊の好漁なりしを告ぐ。此に小林氏及び原氏の家族に遇ふ。我等は又北して一埠頭の端に到り、春潮足下を洗ふ處に跪坐して、渺茫たる烟波と蒼穹とに對する事多時、氣暢び心張り無限の快感は我が心に浮べり。されども我にして眞に悟行の後に、此景に接する事を得ば、如何に愉快ならん。我が心中には尙種々pains相錯綜せり。我が眞心は容易に直接に天然と接する事能はず。天然は pains の層を通過して我が心中に入り來る時は、我が心中一の痛みを感ず。嗚呼、此の海の如く際涯なく、寛大なる、威嚴ある、敬虔なる心情は何處より得來るべきぞ。內村氏は、心安慰を得て初めて櫻花を見て樂む可しと云へりき。嗚呼、我れ安慰を得、天然に對して無限の愛情と同情とを投ずるの日は何時なるぞ。否之れ或は我が今もなす事を得る處なるべし。唯何の時か眞に天然と同化する事を得ん。思ふに我が自ら負ふ所は我が faculty に對して過ぎたり。之れを思ふ時、我が聊かの進步は我に何の喜悅も與へざるなり。勿論余は今決して退化しつゝあるにあらず。確かに進步の部類に屬せるなり。併し此の如き進步にして、何の時か天地の心を以て心とする事を得べきぞ。嗚呼、世は警醒せざる可からず。兄弟は救はざる可からず。而して我之れを知りて之れを爲す能はずして止むとせば、我心痛まざらんや。又顧みて我が心の鵠の如く柔和なるを思ふ時、果してよく情の戰に勝ち得べきかを考へて、轉た慘然たらざる能はざるなり。

　嗚呼、無益無益、余は再び此の如き繰り言を云はじ。筆を走らするの間に、何時しか上の如き事が書き連ねらるゝなり。されども一方より觀れば、余は此上なく幸福なるものにあらずや。世間我に同情を寄せて、一滴の紅涙を灑ぎ吳るゝもの全くなし。而して唯一人を有せり。世も墮落せり。余も墮落したりき。周邊を顧みて自己を思ふ時、唯一の失望あるのみ、絕

望あるのみ。而して唯一人の希望を余に投ぐるものあり。我は其一人の紅涙を、世間萬人の慟哭よりも遙かに尊きものとして、之れを受くる事を得。余は又死にまでも余を誘はんとしたる失望の中に、暗雲より時に光を放つ明星の如く、余をして之れを望ましむる毎に、慚悔と喜悦と敬拜と希望とを與ふる一人を神として禮拜するの特別なる權利を有す。森本兄と神とあり。余又他に何の要する處ぞ。余は是れに對し、凡ての不平と絶望とを擲ちて神に向うて九拜多謝せざる可からず。而して時に尙且つ愚言を繰り返さんとす。愚も亦甚しき哉。然り、余は至愚なり。至愚なるが故に此弊に陷るのみ。人よ、神よ、願くは余の弱く堅からざる心を許せ。されども余は誓ふ、必ず人なるもの丶定義を余の行爲の上に見るに到らん事を。

千思萬考、元より盡くる處に非ず。無心の海鷗波と相戲る丶を見て俗世の渡航を思ひ、袂を別ちて此景に離れ、暉川まで汽車に乘じ、後歩して家に歸る。夜凡そ七時。

五月十三日。 青森を發したる汽車は余を乘せつ丶、夕陽傾きかゝる六時頃、上野停車場に着しぬ。余は祖母の病危篤なりとの電報に接し、取るものも取り敢へず、日夜兼行して此には到りしなり。嗚呼、山河三百五十里、三日間の短旅行も如何に我が心には長く感ぜしよ。停車場に着すれば、增田、恩地、壬生の三人は迎へに來り居れり。余は此に祖母の病の、思ひしよりも尙篤きに驚き、直ちに腕車に乘じて家路に急がせぬ。此の間余の胸中は今や斷頭臺に導かれんとする罪人の如く、種々なる混象と妄想によりて攪拌せられ、忡々たる心腹臆に磅りて轉た破る丶が如きを覺えぬ。余は祖母の死に於て此の如き悲痛をなさゞる可し。そは人命の時に遇へり。人力の回し難きを知ればなり。余は去る三月に於て、斷然意を基督教に投ずるに決して、書を家に呈するや、祖母の悲嘆は尋常にあらず。其室に入りて食を廢せらる丶事二日に及び、何が故に我はかく生きて世に悲しむべき苦境に接せざる可からざるぞと云ふに到れりと聞きぬ。余は其後此事の胸中に蟠りて一日も安んずる事能はず。時に思ふ所を陳ぜしと雖も、心中の十が一をも吐露する能はざるが故に、却て膝下に誤解を致すに到り、眷々の情遂に聞かれざるを思ひて、唯獨り北方に啼きて祈りたりしのみ。而して今にして祖母の生前に接見する事能はずとせば、逝者の潰憾殘者の殘恨將た幾千なりとするぞ。而して余此の眷々の心を懷きて、幸にして生前祖母の枕邊に侍するを得るとす

るも、何をか言ひ何をか訴ふ可き。思へば余未だ眞に神の溫き懷に抱かれず。己れを全く神の犧牲とする事能はず。自力の間に彷徨して、時に俗世の前に屈せんとす。嗚呼、此の如きは余の極めて卑しむ所、此の如き事を顧る每に余の心は失望より絕望に到らんとす。而も余假令墮落して惡魔となるとも、斷じて神の現存を否定し得べきにあらず。此の如き混亂せる心を以て所思を述べんとす。余豈忡々兢々の念に堪へんや。余の札幌を辭せんとする時、之れを森本兄に謀る。兄亦默然として語る所なし。然れども兄は余を激勵して曰く、卿の信仰に固着せよ、而して唯聖靈の指導に任せよ、我亦博物場裡の樹下に、君の爲めに祈らんと。余は此の如き問題に對して共に謀るべきものは唯一人の兄を有するのみ――否、兄を有するの大幸なるあり、世人は多く一人をも有せざるなり――之れ余にとりては實に萬軍の援なり。此夜、夜暗くして星稀なりき。二人、場裡の樹下に、離別と願望との祈禱を捧げぬ。余は萬感の胸に橫生するありて殆ど祈るに淚あるのみ。神よ、神は如何にしてかゝる不幸の中にも、余を絕望せしめざる如く大援を下し賜ふの大惠あるぞ。余は世に淺ましき罪人なり。而してかゝる大惠に遇ふ每に唯淚あるのみ。余は玆に堅き決心を得たりし筈なりしも、東都に入りて家近くなりては、決心もゆるまざるを得ず。心に之れを叱しつゝ漸く家に入れば、母君及び愛妹愛弟は潮の如く玄關に出迎へられぬ。余は簡單なる應接の語を殘し、走つて祖母の病床に到れば、天に謝す、余が祖母は猶生きつゝありしなり。

祖母は余が到着に對して非常なる影響を受けぬ。家人は多く、余の枕邊に到る時は祖母の瞑する時なるを疑ふものなかりき。而して祖母は幸にして病狀に多く變動を見ず、昏然として熟睡に入られたり。余は萬事の甚だ好適したるに喜悅の情に堪へず。而かも枕頭に祖母の瘦せ衰へたる病顏を視ては、當年余が幼少にして祖母の愛慈の蜜の如かりし時、年少祖母が時に儼然として余に一心の德を述べ給ひしの時等を思ひ起して無限の感慨なき能はず。此夜枕邊に侍する事二時に及び就寢す。而かも眠容易に成らず、枕を抱きて輾轉黎明に及びぬ。

余は肉身の煩忙と、心靈の錯雜とに筆取る事の甚だ慵くして、日記に向ふ事を怠りたれば、玆に其日其日の行爲と感慨とを記さんことを難んず。されども要するに、余は同一事を繰り返したるに過ぎざりき。余は早朝を以て甲東碑邊に散歩を試

む。東京も黎明は靜寂なり、淨潔なり。塵埃に模糊たりし往還も朝來の少時は、深山にも籠るべき靄霧の罩むる處となり、曉風冷かに衣袂を吹きて、余殆んど囂々たる雜鬧場裡にあるを忘れんとす。かくて碑邊の丘上に登り獨り木椅に坐して默想に耽る時、余は初めて規律ある精神と淸爽なる體軀とあるを覺ゆ。余は此に――若し他に散策の客なき時は――祈禱を捧げ、聖書を讀み、北方の天を思ひ、祖母の病を思ひ、余が身の不純を思うて、悲喜交々到るを常とす。かくて稚松の間を過ぎ、櫻枝の晩花に驚きて市街に出れば、朝來の靜寂將た何れの處ぞ。余はやゝ整頓せる心身の再び攪拌せられて家に着くの時は、復先時の不平と孤獨の憂思あるのみ。かくて祖母の枕邊に其病を訪ひ殆んど終日此れを出でざるなり。母君は屢ゝ余が運動の不足を憂ひ給ふ。然れども余にとりては、市丘に出でて無用の不平を買ひ來らんよりは、此に靜坐して祖母の瘦腕を撫するの遙かに勝れるあるなり。

余は常に心中に蟠れる事、即ち父母の膝下に宗教に就て聽く所あらんとするの念は一刻も廢せず。之れあるがために種々の孤情に苦めらるゝが故に、早く之れを聽するの機會あれと祈りたりしが、そは遂に十八日に來りぬ。余は父母の膝下に出でたり。父君は容を正して「汝の屢ゝ送りし手書、之れを讀みて汝の衷心を察せざるにあらず。而かも汝の筆裡時に迷信に走れるなきやと思はるゝが如き語氣あり。我れ嘗て基督教に聞き、儒教に聞き、今は即ち佛教に聞けるもの、之れを互に比較し來り、此老軀に達して初めて三者の言、符を合するが如きを覺ゆ。故に我は汝が基督教に入れるに於て聊かも尤めず。良心の赴く處父子と雖も亦如何ともなすべきなり。只此に云ふべきものあり。抑も各國固有の風俗習慣あるものあり。是れ實に習ひ性となるもの、之れを壞つ或は以て角を矯めて牛を殺すの悔なきを得んや。汝尙此の習慣に忍ぶを得るや。我が家先祀あり、帝室高祖あり。臣子たるもの之れを敬尊せざる可からず。汝之れを敢てするを得るや」と。余答へて曰く「不肖唯一の神を知るのみ。他を知らず。故に高祖、祖先に於て之れを神として拜せよと云ふ、之れ父命と雖も忍ぶ能はざる處。而かも高祖の偉功、祖先の遺德を尊敬するに於て何の躊躇をかなさん。不肖は此事を爲すを得るを誇りとせずにはあらず。顧れば幼年より以來、不肖愚直にして未だ甚だ多く人を欺かずと雖も、而かも自ら欺きて怪事を怪事とせずして止みし事、實に幾何な

るを知らず。茲に膝下の前に、泣謝に堪へざる所のものは之れなり。而して今幸にして基督教に接する事を得、略ゝ人道の何者たるを窺うて身の愈ゝ縮竦に堪へざるを覺ゆ。不肖情智共に下劣、決して富名を當世に得る事難しと雖も、庶幾くば人とならん事を必ず期せん。幸に大心を安ぜよ。然れども人たらんとするの道も甚だ難し。此濁世に於てかく志さば世の迫害を受く可きは火を看るよりも明かなるのみ。願くは幸に復此事を記せよ」と。父君乾笑して曰く、「汝の云ふ所何ぞ爾く頑なる。聖人は物に凝滯せず。宜しく心を曠くして、小事に齷齪せず志す所に徐々として進むべきなり。我が壯時亦極めて物に凝滯し易く、一事を志せば專念之れに向ひ、他人の言を容るゝに暇なかりき。今に到りて甚だ之れを悔ゆ。我の汝に云ふ所のものは、汝をして又此悔なからしめんと思へばなり」と。而して母君は時に語を挾み給ひたるも多く言はれず、全く言を父君に任せ給ひしが如し。終りに臨み、余が胸中を離れざりし森本君の事に就き辯護を試みんとしたるに、父君は直ちに之れを遮りて、「汝若し歸りて同氏を訪はん時、一面の識なくして他人の兒をその父に彼是忠告するが如きは差出がましき事なりと傳言せよ」と言ひて座を立たれぬ。嗚呼、之れ余が最終までの成功なりしか。森本君が最も余の歸京に望みし所のものは、必ずや余が兄の寃を雪ぎて來らん事なりけん。而かも余碌々として遂に此望を遂げずして止む。悲哉。兄に謝するに何の辭を以てせんや。

一山來り、一山去る。嗚呼、山谷共に棘門に赴き盡すの日は果して何時ぞ。心靈の不足不滿は之れ人生の自然なりと云ふか。何ぞ人生の悲歎多き。余は切に無邪潔白なりし紅顔の當年を思はずんばあらざるなり。

余は機を得て祖母に告ぐる所ありて、その心を安ぜしめざる可からず。されども機會は多く逸して心に含みながら終に之れを漏すに由なかりし事三日に及びぬ。余は一夕看護婦其他を病床より退かしめ、母と共に告ぐる所あらんとせり。然れども祖母の病每夕宜しからざるが故に、余は之れを翌朝にせん事を乞へりしに、祖母も快く之れを承ぜられぬ。翌朝に至りぬ。余は祖母に聞かせんとするの事甚だ多し。されども今此に多くを言ひて、視聽を聳動せん事を恐れ、基督教の本旨は決して佛教と逆行するものに非ずして、或點までは全然並行するものなる事を云ひ、余が之れによりて初めて人道の果して如何な

るものなるかを眞正に解する事を得たるかを云ひ、猶祖母が教へ給ひし「一心」の德其他の訓言の今に至りて甚だ味深きを懇謝して、竊に窺へば、祖母は甚だ安ぜられしもの﹅如く、「汝の言によりて安ぜり。初め我の汝の手書を得るや、一時の悲情禁ずる能はざりしも因縁の熟する所人力の如何ともすべからざるを觀じ、餘憤猶止まざる汝の父母に諭すに此理を以てして、爾來決して心を痛めしの事なし。然れども我が心は、汝の改宗に安ずる能はず。我は佛の大慈悲を信じ、之れ宗教の尤なるものとなすが故に、汝をして其大悲の掌中に入らしめんとするの念勃々たり。然れども我は現世に於て到底汝を濟度する能はざるを知るが故に、就眠の後必ず汝を改宗せしめん事を誓ふ」と。云ふところ平かにして而かも其所信の動かす可らざる事九鼎の如し。余は兄の神に對する所信を除きては、未だかくの如き確信を見ず。余又祖母が時々苦痛の襲ふ所となりし時に漏せしの言を聞く。曰く、「苦甚し。嗚呼、我の世にある偶然にあらず、佛尊若し我に猶生きて衆生を濟度せよと命じ給はば、我は如何なる苦痛の間にも懽然として生くるに躊躇せざるべし。されども唯若し能ふ可くんば、願くば此苦痛と不平とを去りて平安なる極樂に天惠を樂みたく思ふ」と。此の如き切語、余 Bible の外に未だ嘗て聞きたる事あらず。噫、人生の祕義實に此の如きのみ。浮世は畢竟吾人が神に達する道程の一試練場のみ。人は多く眞に之れを了する能はず。此試練場の試練場に固着し、權を追ひ、金を愛し、悪魔に組し、善に遠ざかり、僞行し、僞言し、死の如何なるかを忘れて、只專ら之を恐れ、猶此腐敗し、混亂し、雜鬧せる浮世に固着せんとす。嗚呼、何等の愚ぞ。汝は好んで益々墮落し益々腐敗し、混亂を重ね、雜鬧を增さんとするものにあらずや。汝請ふ、斷然浮世の俗樂を擲つて神の命ずる正道を步め。少くとも之れを求めよ。此の如くして汝の生涯を s'raightly に golden gate に向つて進ましめよ。然らば死は汝に何者たるぞ。死なる謎語は汝の前に氷解せん。嗚呼、死畢竟愛すべし。死後の光榮は我が受く可き權利なるを思ふ時、死に對して平然たるよりも寧ろ喜快なからざらんや。神の道を俗世の間に於て步まんとする事は、人類にとりては困難なる事なり。吾人は思ふに、死の寧ろ近からん事を切望するの時あるべし。されども吾人は神の命ずる如くせざる可らず。神若し吾人に千年を病竈の中に生きて、汝の道を步めと言ひ給はゞ、我れ爾かせざらんや。嗚呼、ヨブの忍耐の潔きかな。彼は必ずや死を生より如何に美はしきも

のと見たりけん。されども神の命を、己れの苦痛よりも甚だ貴きものとなしたるなり。我嘗て以爲らく、余若し不治の疾を病む事あらば、劍を秉つて自ら亡す可し。焉ぞ貴重の糧を食ひ、他人の幇助に預り、爲す事なくして碌々と生きんやと。嗚呼淺薄なる覺悟よ。余今日にして初めて余の甚だ輕卒なるを知りぬ。人の品隲すべきはその行爲にあらず、其精神なり。史家の責甚だ輕からざる所以此にあり。余若し行爲に於て何事をも爲す能はずんば、其精神に於て萬事を爲すべきなり。悶き信仰は、行爲に於てなす事能はざるに至るも決して失望せざるなり。ヨブが財散じ、家毀し、奴僕去り、家族死し、萬境不幸の間にありては身は人の厭ふ所の天刑病に罹り、灰を被り砂に伏して、行爲に於て何の爲す所なかりしも、而かも一點の確信は絕望の間に希望を抱懷せしめ、無爲の如く生きて而かも驚く可き有爲の事をなしぬ。噫、此の如きは確信ある人にして初めて得べし。余は以前の余が淺薄極まる信仰に築きたるの故を深く愧ぢずんばあらざるなり。涙に滿つる人の笑に神の最も喜び給ふ所にして、神によりてのみ得らるべきなり。

余は祖母を安ぜんとして、却て祖母によりて安ぜしめられぬ。余は幼より祖母の言動に啓發せらるゝ所少なからざりしを信ず。而かも此夜の如く强く高き inspiration を受けたる事はあらざるなり。余之れを祖母が余に殘されたる最貴の記念として永く肝膽に銘せんとす。

余は此の如くにして祖母の枕邊に侍しぬ。余は情に動かされ易く種々なる事によりて屢ゝ女の如く泣きたり。看護婦の履歷の如きは之れなり、彼女は姓を杉井と云ひ、名をくりと云ふ。生れ得て富家の愛孃たり。然かも其父一旦投機に失敗してより家產俄かに傾き又如何ともす可からず。父は憂煩の餘り遂に狂せり。彼女に老母と小弟あり。彼女は母の悲慮又遂に病を釀さん事を恐れ自ら狂癲病院に入りて看護の事に從事したるも、遂に其効なく昨年五月十八日を以て遂に父は狂死せり。遺族の哀悼度を超え其母の如きは又狂せんとせりと云ふ。此の如くして彼女は今は嘗て家に傭ひたる忠僕の家に寄寓して看護婦を業とし、小弟を商賈の徒弟となせるなり。彼女の芳紀二十。而かも多病多涙、祖母の病革るや看護の事を忘れて泣き、爲めに頭を病み歯を痛ましむ。而かも女子の淺薄なる情は遂に蔽ふ能はず。彼女は五月十八日卽ち其父の一周忌を我家に過

しぬ。余彼女の爲めに甚だ此事あるを悲みたるも、彼女は却て多くを知らざるが如く、談笑平日の如くなりき。彼女の克己にして此の如からしめたれども、そは克己にあらずして淺薄なる少情を愛するものなるを如何せん。余は彼女の履歴よりも、多病多涙なるよりも、此淺薄なる少情を悲しむ。余實に亦此の如き事あればなり。少情の涙は斷じて流す可からず。是れ余を害ふのみならず、必ずや人を損せずんば止まず。情は美し。されども甚だ危し。人を不測の迷宮に陷らしむるものは實に之れなり。豈戒めずして可ならんや。

余は又余が絕交せる舊友增田の、殆んど日に夜に來りて祖母を看護するに會ひぬ。彼面至て平和なるものゝ如きも、心中甚だ多恨の性に屬す。余に遇ひしの時、先づ出でしものは言語よりも彼の涙なりき。余は最も此の如き事に出遇ふを忌む。如何となれば余の良心は最も多く此の如き事によりて正當の判斷を失へばなり。祖母は云ひぬ「汝增田氏に書を致して絕交せりと傳ふ。その何の故なるやを知らずと雖も、我は增田氏の汝の如く我に親切なるを信ず。彼は我の愛友なり。汝は汝の欲する如くせよ。我は我が欲する所に從つて、永く氏の看護を受けんとす」と。余之れを聞き直ちに席を退きて泣きぬ。神よ、余の少情を憐み給へ。余が出發せんとせる時は、增田が最も泣けるの時にして、余が最も快活に祖母に別れを告げんとする時、彼は殆んど堪へ得ぬ計りに屢ゝ涙を拭ひぬ。余は只汽車の中に泣く可き材料の益ゝ增殖するを甚だ苦しむ。余は在京の間、四面誤解の中に增田と語る時のみ少しく慰むる事を得たり。余は之れを彼に謝せざる可からず。

五月二十九日。遂に家を辭す。仙臺に着せし時、他客既に去りて余獨り車中に殘りぬ。寒氣膚に逼りて眠り難く、客愁四集涙襟に滿ちぬ。

五月三十一日。無恙(つゝがなく)札幌に着す。其夕直ちに兄を原氏邸に訪ふ。兄は非常なる喜欣(よろこび)を以て余を迎へ、共に階上に積日の話柄滾々(こんこん)として盡きず。余は此に初めて余が心中の安慰者を得て、心に少なからぬ勇氣を得ぬ。札幌の天然亦青春の氣に滿ちたり。勃々たる生氣新力、噫今亦之れに倣(なら)はん哉。

六月十二日。

こくわの花に與ふ

かよわき幹の末細く　うなだるゝ葉の色淺き
身はつる草のあはれにも　黒木の枝をたよりにて
日の目も見えぬ葉の影に　御空に殘る朝星の
淡き光を宿しつゝ　暮遠白き夕霧の
凝りにし露を伴にして　人もましらも道知らぬ
深山に生ふるこくわ木の　春の心やくみぬらん
ひそかに咲ける花見れば　淸き色あり香あり

權貴は權をもてあそび　僞善は善にほこる時
義人の辭のかれはてゝ　詩人の筆のやかる時
世は犬に似て我が前の　肉に正邪を知らぬ時
乳を求むるみなしごに　人をにらまふかたゐ等に
我が爲す道は知りながら　悲しい哉や我が神の
います王座の程遠し　いで土くれの此むくろ
打ちくづしなば我が靈の　御空に飛ばん由やある
人知れず泣く宵々の　堪へん方なき涙には
嗚呼血潮あり命あり

床しき汝(なれ)が枝かげの　花には血あり涙あり
悲しき我が涙には　見るべき汝が色香なし
嗚呼さりながら汝も亦　世にめでられぬ花ならば
いざわが胸に抱かれて　よし天來の朝露に
浴(ゆあ)み慣れたる身なりとも　きたなきながら便りなき
我の涙を花びらに　そゝぐを暫し許さずや
流水落花あぢきなき　浮世を汝の離る時
殘る色香をそでにして　嗚呼いつまでも忘れじな
僞善の岡に攀ぢ出でゝ　我れ盗泉に呑むべしや
涙の谷をさまよひて　道とめあへず斃るとも
汝の姿を身にしめて　せめては汝と眠らばや

六月十四日。我が敬愛する祖母は、去る十二日午後九時四十分を以て永く逝きぬ。余は其夜女々しき情の襲ふ所となり前後なく無益の涙を流したれば、日記に此事を記せん勇氣もなかりき。然れども余は余の涙の甚だ無益なるものゝみならず、却て禮を靈に失するを思ふて斷じて泣かざらんと決しぬ。此夜殆ど二時に至るまで寢ぬる能はずして感慨多端、過去の事現在の事、將た未來の觀念に至るまで雜然として心頭を襲ひ來り、余は迷宮の間に彷徨(はうくわう)せしの思ありき。而かも其中に得たる一語の覺悟は向後斷じて祖母の敎へ給ひし所に則らんとするの事なりき。

Nature は最も良き吾人の師友なり。Byron の、我れ人を愛するの少きにあらず nature を愛するの多きなりと云へるもの、實に萬世の至言にあらずや。余は人に於て一端の模範を捉へ得べし。されども nature は萬端の模範を供するものにあらずや。噫、余常に此 nature に親炙(しんしや)するの權を有し、之れより凡てを開くの能を有して、而かも一老者の死に斯の如く筆を費す

とせば矛盾にあらざらんや。「死者をして死者を葬らしめよ」、余亦よく之れを知れり。されども死兒は猶好きもの多し。吾人は天を望む時群星より眼を退けて、嘆嗟を以て忽如として消え行く流星に心を注ぐなきか。噫、余の筆を此に費す所以なり。

超えて十三日、余は森本兄の所にて脆くも再び泣かせられたる後、家に歸りて机邊に齋戒沐浴の心を致して一書を膝下に奉りぬ。

「昨夜萬感閙集獨り机上に對するに堪へず博物場内の靜謐なる林中に入り下弦の月に向うて默想して家に歸り日記の中に今日の所懐を記しつゝありし十二時半頃祖母様逝去の飛報に接し兼て期したる事ながら胸逼りて思はず不覺の涙に咽び申候。思ふに御永眠の其時は小子が博物場内に彷徨し涙を以て祈禱しつゝありし時に當り居り候ひし。此時此變事あらんとは夢にも知らず今更に殘惜しき限りに御座候。

御両親様始め皆々様の御悲嘆察し奉候。さり乍ら思ふに堅き信仰の上に安んじ給ふ祖母様には嘸かし安泰なる立派なる御往生に有之候ひし事と遙察、逝く者も止まる者も涙に代へん慰めは是れにありと存申候。顧れば小子生れ得てより祖母様の一方ならぬ御懇遇に預り永時養育の御恩顧に忘れ難く多病にして屢〻祖母様の苦心の種を增し帶も解き給はぬ御看護に預かりし事幾度なるを知らず。殊に精神上の事に關しては性來愚鈍の質として祖母様千言中の一言をも實行する事能はず。然るに之れにも倦み給はず永年懇々として御教示下され候金言は唯々泣拜して感謝するの外無之處に御座候。嗚呼、今より以後如斯懇切なる心身の保護を失ひ候小子の不幸落膽乍憚御推察奉願上候。過去の行爲を思へば慚愧と涙のみに有之候。今は唯將來に向ひ殘し給ひし御教示に從ひ庶幾くは身を誤らざらん事を勉め可申候。縣樹の悲嘆はさる事ながら今に迨んで婦女子の悲態をなすまじくと決心仕候。

親しく御瞑目の時に遇はず又御靈柩に侍する能はず遺憾誠に此事に有之候。山河三百里を隔てゝ不祭の喪に服す。心甚だ滿たずと雖も而かも在天靈あり必ずや玆に小子が心中の奠を饗け給ふ事を信じ申候。

紙に對して湧思萬端有之候得共筆遂に意の如くならず願くは靈前に小子の微志を白し給はん事を」。

案頭に倚りて微雨蕭々たる窓邊に過去二十年を懷ふ。誠に茫として夢の如し。勇往突進止む所を知らざるべき青年の回顧は甚だ老者の行爲に似たるを知らずと雖も我は今此に回顧せざるを得ざるなり。

我は小石川區の某所に生れ、築地に移り、後又神田裏神保町に轉ぜり。我は小石川の當時、築地の當時を知らず。神田以後の記憶は尙我が頭腦を離れざるなり。我が始めて記憶を得し時は、實に我が亡き祖母の記憶を得しの時なりき。當時余には唯一人の妹ありしのみ。祖母は道路を隔てゝ我家の前に寓し給ひぬ。余は殆ど毎日祖母の家にありてのみ遊び暮すを常としたりき、當時余の母方の曾祖母及び叔父猶在りて、余は彼等の愛友なりき。曾祖母は實に余が遊び友達にして、彼女の前に謎を呈して屢々彼女を苦しめ、炬燵の前に備へある氷砂糖を罰金として徵集したるは今も忘れぬ事ぞかし。叔父は最も多く余に敎へたる人にして、余は思ふに當時確かに人生學問の初步を授りしなり。祖母の愛は余等に最も厚かりき。彼女は巧緻なる手を有せしが故に、屢々余に烏帽子陣羽織を造り與れぬ。余は之れを以て朋友と共に、庭園の池を繞りて戰に擬したるを、今も眼に見る如く記憶す。祖母は又後年、余に供せしが如く其當時より折に觸れて亘多の敎訓を供しぬ。されども余は其一だに今記憶せざるを甚だ恥とす。余は又其當時非常なる發熱をなせる時――生命も危かりし時――祖母が一方ならぬ介抱を賜ひし事を、當時にありてすら忝く思ひたりし事をも、明かに記憶せり。而して此の如き事は實に祖母が余に對する常務の如くなりしは後年に至りて知らるゝなり。

余はかくて橫濱に移れり。祖母は東京に在りて、時々余が家を見舞はれぬ。當時余が祖母を愛慕せし事は、人の笑ふ程にてありき。余は當時既に一人の弟を加へつゝありしなり。余幼時は非常に弱羸にして到底生長し得可くも見えざりし程なりき。之れと共に心志も極めて薄弱にして常に飮泣を事とせしが、意地と云ふもの不思議に强く喧嘩の如きは好んでなしたりき。余が額を傷けられて父母に非常なる心痛を致さしめしは此頃にてありしなり。かくて屢々余が家を訪れたりし祖母は、遂に大阪に去るの止むなきに至れり。玆に對面の機は全く絕えぬ。されども彼女の愛心は絕えず余等兄弟に種々なる玩具を送られしなり。余は試驗に休暇に祖母より褒美として來るものあるを無上の樂みとなしぬ。余は此間に於て十一歲の時、笈を負

ひて東京に出でゝ學習院に入れり。かゝる中に曾祖母先づ先んぜられ、次で叉叔父の死に遇ひぬ。此時に於ける祖母の悲嘆は實に譬ふべきなかりき。祖母は實に叔父の跡を追はんとせられたり。此時彼女は初めて眞宗に接せしなり。之れより先彼女は水天宮を信じ、金比羅を信じ、願をなさんがために鹽斷ちをなし、茶斷ちをなし、その熱心なるや幼少なる余をして窃かに奇異の念を懷かしめし程なりき。而かも此の如き自力の信仰は悲嘆の極に接したる時破壞せざる能はざりき。祖母は茲に全く衷心の安慰を失ひ全く失望の淵に沈み給ひしなり。此時如何にしてか眞宗の教義に接する事を得て、心整然として悟る所あり、身を以て斷然之れに歸依すると共に、全く自力を捨て叉叔父を思ふの念は全く前者と異りて、今は彼を惜むも徒らに涙に訴ふるが如き淺薄なるものにあらずなりぬ。これ實に祖母にとりては大なる生涯の囘轉期なりしなり。かくて祖母は叔父を失ひて、大阪より横濱に來られ余が家に同居する事となれり。

余が家に於ける宗教の使徒は實に祖母なりき。余が家は此時に至るまで嘗て宗教を知らざりしなり。否、信ずるものにあらざりしなり。余が家庭は全く現世的極れるものなりしなり。而して徨々として休む事なき祖母が熱心は、己れ獨り此安心に滿足する事能はず、横より縱より其教理を傳道せん事に勉め給ひぬ。初めに服せるは余が母上なり。次で服せられしは余が父方の祖母なり。祖母は熱心にも自ら時々說教し、先づ家内の風波を全く絕たんとせられぬ。當時父上は尙氣銳にして、動もすれば激怒家に震ひ、父方の祖母は老い給ひて時々愚痴出で、母上は叔父を忘るゝ能はずして淚痕眼に交り、家庭は寧ろ蕭殺たるものありしなり。祖母此間に介して、右に左に精神的の調和を得せしめんとせられたる苦心は、余は今に於て初めて之を想像する事を得。結果は以外なりき。家庭の蕭殺は漸次減少し和氣は家内に多きを占むるに至りぬ。されども眞正の信仰は唯祖母にのみありしのみ。

余は既に長じて只祖母の慈眼のみを受く可き齡にあらず、余は時に祖母の嚴肅なる眦に遇ひて、室の一隅に屛息せし事あり。愛より出づる怒りは最も畏し。余は最も祖母を愛したれども最も祖母を恐れたりしなり。

かくて余が一家が鎌倉に幽棲せる時、祖母は東京に在りて余と愛子とを預り、余は寄宿舍にありしも每日曜日を以て祖母

の家に歸るを常としき。祖母は此時に於て父母をも兼ねざる可からず。余は此時に於て祖母の育兒の技倆拔群なるを見たり。彼女が屢ゝ余を警めたる語は「一心」と「克己」なりき。而して嗚呼之れ余が畢世の指南車にあらずや。當時余は實に一個の怠惰書生にして、遊戲と小說とに耽りし時なれば、祖母の嚴肅なる教訓は時に余をして歸宅を厭はしめし計りなりし。されども余は切に祖母を愛せざる能はざりき。

之れより以後は余の健康は甚だしく損じ來り、心臟病、脚氣、チフス、肺炎、其他種々の病は屢ゝ余を襲ひて、余をして屢ゝ死に瀕せしめぬ。而して此介抱は實に多くを祖母の手に煩はせしなり。當時祖母が看護の法を見るに其熱心親切實に驚くに堪へたるものあり。余は今にしてこれを思ふ毎に、眞に感涙に咽ぶを禁ずる能はざるなり。かくの如き間にも祖母は彼女の傳道の精神を、毫も撓む事なく遂に父上をして佛教に聞かしむるに至りぬ。母上は、父上が佛教に歸依し給ひてより實に溫厚の人となり給ひしを深く喜ばれし言を、余は屢ゝ耳にしたり。愛子は又熱心なる信仰あるものとなりぬ。余が札幌に來りて以來、禪を學ばんとせしものは實に祖母の感化にして、余は祖母によりて初めて宗教に指を染めたるものなりしなり。

祖母が病むに及びて、余が祖母より受けたる感化は實に非常にして余は却て生涯これを忘るゝ能はざるべし。噫、回顧すれば年長きが如くして時甚だ短く、二十年一夢の間に過ぎぬ。遂に祖母と幽明を異にす。過去の愛顧と教訓とを思ひ來る時、余は轉た湧感の赴く所を知らざらんとす。彼女は多くの文字なかりき。されども「白骨文」は彼女が愛讀して措かざる所なりき。香烟縷々として登り、梵鈴は涼々として鳴る處、佛前に孤坐して朗々として「白骨文」の朝に紅顏ありて夕に白骨となるの身なりと、誦し給へる祖母の淸瘦の容、嗚呼、歷々として見るが如きかな。クリスト言ひ給へり。

I say unto you, That many shall come from the east and west, and shall sit down with Abra'am and Isaac, and Jacob, in the kingdom of heaven. But the children of the kingdom shall be cast out into outer darkness: there shall be weeping and gnashing of tedth.

余をして神の言を信ぜしめよ、然らば彼女は必ずや今や天父の傍にありて Abraham 等と席を同じうしつゝあるなり。而し

て見よ、哀れなる Kingdom の子は outer darkness に放置せられて、神を求めつゝ泣けり。噫。

七月七日。汝は人に對して傲慢ならずとて、自ら慢り得るか。神に對する無上の傲慢を如何にせんとする。嗚呼、眼を擧げて天地の至大を見、日月の燦然として懸り雲虹の蕩然として逝くを望む。人類の爲せし事業、爲し得る事業は果して何ぞ。汝は何の故を以て自ら獨立するを得るか。其知識を以てか。憐む可し、汝の知識は遂に三次の質問を明瞭に答ふる能はざるなり。曰く、社會は何より成れるか。曰く、人より。曰く、人は何より成れるか。曰く、心志と肉體より。曰く、心志と肉體は何處より來れるか。曰く、……。嗚呼、愚者よ、汝の知識は無限なる獨立心を買ふに足らざるものなり。然らば其情を以てか。然り、汝の情は時に甚だ美なり。汝が衷心の琴線時に天籟の淸風に鳴る時、美妙なる melody は汝より開く事を得べし。されども汝は此情の天に到り得ると共に、黄泉に到り易きを思はざる可からず。汝の生涯は劣情と力鬪しつゝあらざるなきか。我自ら顧みて一日の行爲を思ふ毎に、實に未だ嘗て此嘆なくんばあらざるなり。誘惑の惡魔は、多くは情中に潛んで來る。一時に熱し一時に冷え、忽ち天上の人となり忽ち地下の鬼となる。汝かくの如き情を抱懷して、無限の獨立心を買ひ得べきにあらず。然らば意志を以てか。然り、古來意志を以て獨立を買はんとせしの人は甚だ多かりき。人の隷屬となるを安ぜざりし人は意志の人なりき。故に彼等は意志を激勵して天にも人にも獨立せんとせり。馬をインダス河畔に立てて、己れの服壓すべき國土なきを嘆ぜし人は實に之れならずや。嗚呼然り、彼等は地球上に於て征服の人なりき。而かも彼等が發せし嘆聲は、服壓すべき土地なきを歎ぜしの聲にあらずして、服壓すべき區域の餘りに廣きを歎ぜしの語にはあらざりしか。見よ、バイロンが我が家なりと謳ひし海洋は猶渺茫として彼と何の關りもなきなり。森林山河は依然として彼より獨立せり。況んや天上の文に至りては、彼の指頭も觸るゝ事能はざるにあらずや。彼は僅かに惡魔よりも弱き人類の一時代を服壓して以て得たりとなしたりき。彼は到底その意志を永くまで延ばし得たりと稱す可からず。意志は遂に無限の獨立心を買ふに足らざるなり。

然らば我は何を以て無限の獨立を買はんとするぞ。情を滅して禪僧を學ばんか。智を捨てゝ耕漁に就かんか。抑も意志を

擲て驥尾に附するを事とせんか。天稟の情を放擲して枯木寒巖たるには、我の到底爲し得ざる所。僅かた得たる何の役にも立たざる智慧は、我をして秬榴に安ぜしめず。無限に達し得べき人間として、いかでか人の驥尾にのみ附して晏然たるを得べき。此に於てか登つて絕對の獨立を得る能はず下りて絕對の服隸をなす能はず。我は我が位置の模糊定め難きに殆ど煩絕せんとするなり。

嗚呼高慢なり汝の心！　汝は人なるを忘れしか。汝は自ら顧みて、世上遂に miracle を除き能はざるを感ずる時、焉ぞ此の miracle を生じたる絕對無限の Being の前に全然的の服從を致さゞる。汝の目前にある如何なる微妙なるものにも、汚穢なるものにも、汝が千萬年を費すも決して解し得ざる可き大祕密の潛めるにあらずや。而して汝の心は、日常の物たりと云ふに慣れて、遂に全く之れを忘却了せんとす。汝はかくの如くして、汝の絕對より離るゝが故に、玆に空虛ある心を生ぜざらんと欲するも得べからず。汝、神に於て全くの服從をなさば、汝は其他に於て毫も服從の要を見ず。而かも汝は人の前に、いみじき謙遜の容をなすを。我は嘗て人の前に傲慢ならずと云ふ。而して神に對する汝の傲慢を如何せんとするぞ。傲慢とは神に對して逆ふを云ふにあらずして、これに服從する事能はざるを云ふなり。汝は果して全然の服從をなせしか。何ぞ時に自ら己れの位置を危む事の甚だしき。汝全然の服從をなして、己れの位置を危むの必要なし。汝は單に汝の very best をなせば足れり。嗚呼、信弱きものよ。汝が、汝の弱き肉と心とを城壁となせるの間に、汝に永遠の平安來るべきの理なし。神よ、願くば此弱く而かも高慢なるものゝ心を憐れみ給ふて、願くは、全然の服從を捧ぐるを許し給へ。

汝は、汝の智少く、情弱く、意志鈍きを泣く勿れ。これを神に全く捧ぐる能はざるを泣け。汝は絕對の獨立をなす能はざるを泣く勿れ。全然の服從をなす能はざるを泣け。ポーロは心身共に一度死せりと自ら稱して、其力は實に天まで接しぬ。一度心身を擲たざるものにして眞正の獨立と力とを得べきにあらず。

八月十七日。（日曜日）。雨烈しかりし後に、空霽れて滿に近き嫦娥は、洗ひたるが如き天の一方に掛れり。余は豐平河畔に神の默示を得べく家を出でぬ。

道に貧民窟なる豐平に出で夜學校に來りし時、優美なる唱歌の聲聞えぬ。余は思はず月隈なき軒下に佇みて雙耳は全く唱歌に奪ひ去られ、之れを聞くこと稍〻久くして去り、二三間を歩み出でたる時、左側の茅屋より夜學校にて歌へる「夕空晴れ……」を微吟せるものあり。女の聲なり。秋の夜頃を縷さすに忙はしきものから聞き覺えたる唱歌を心遣りとはせるか。さりとて聞ける余にはこれ一種の悲歌なりき。

秋風一陣月愈〻冴えて、河聲の淙々たるも蟲語の喞々たるも早耳朶を打つ事頻りなり。橋畔に出づれば一帶の清流銀を布き、藻岩山は黑衣魔の如く横はりて、碧落その上に懸り、夜雲時に絮の如く神の踵より飛來し來る。進む事少許にして、堤下に黑影二つあり。之れ男女の密會せるものなるべし。余の心頓に興醒めて直ちに此を過ぎて、遠く距りたる堤上に默坐して、獨り月と水とに對しぬ。

水は滾々として晝夜を捨てず。月は依稀として萬古に懸る。蟲聲の微も草露の小も水と共に無限の祕義あり。これ余が見、高臺の貴人が見、茅屋の貧民が見、嚮の如く不潔なる男女によりても見らる。而して此風物は吾人に何の爲めに設けられたるものぞ。人は多くこれを等閑に附す。然れどもこれは至重の難問なり。これを解き得たるものは神を知り得べし。余は今日にして初めてウォルヅウォルスの爲人を偉とせずんばあらず。カーライルが神の外衣と喝破したる其卓眼を高しとせずんばあらず。嗚呼余の地に附ける卑心は自然の眞意義を解するに苦む。余は多時默坐して、釋然として得る所なかりしを悲しむ。されども神よ、君は余の如く卑く陋しく、而して最も小なる罪人にも示すに、此大景を以てせらるゝを多謝す。多謝す。眞に多謝す。願くば余をして此大なる慰籍に滿足して、俗樂は全然放擲する事を得しめ給へ。幾度か悔いて、幾度か犯し、幾度か犯して幾度か悔ゆ。此の如くして余は何の時に神の子と稱せらるゝを得べきか。思へば天にも屬する能はず、地にも下る能はず。苦しきは我が生なり。

されども余に自然が與へらるゝ以上は、余はこれを見て必ず神を知り得べきなり。余は失望せじ。此の壯美なる自然に接するに於て猶余の心を清潔となさざる可からず。汚き心鏡にいかでか此清潔の大自然が映ずべきぞ。然り、先づ改良すべき

は自己なり。自己を改良して自然に接し、自然を透して神を知る事を得ば余が能事は終れり。之れを終へて人類のために、身心を捧ぐる事を得たる時の如何に快絶なる可きぞ。

神の前に出づる毎に悔恨は我が心中を横領す。弱き土塊人形よ、汝又一種の製糞機として終るものか。或は爾らん。然れども神は此世界に無益なるものを一も造り給はずとせば、余にも必ず用ゐんとして與ふ所ある可し。神よ、願くば余をして敬虔に之れを探尋する事を得せしめ給へ。嗚呼、罪人の罪人唯基督の血によりて生き得べし。余は唯祈る。

人跡全く絶えたる余の四周は全く人寰の聲なし。聰明なる耳には明かに神の言葉聞ゆべし。唯悲しむ可き鈍耳を如何せん。嗚呼未し、未し。余は尚百層の奮勵を要す。

十月一日。（日曜日）。寂しき秋色は愈ゝ加はりぬ。雨は白く風黒く、落葉黄となりて暮色朱よりも赤し。悲しき秋の聲は益ゝ滋くなりぬ。蟋蟀の破壁に喞てる、機杼の寒窓に鳴る、流水の涓澴たる、頽嵐の淅瀝たる共に之れなり。俯仰すれば孤影天地の間に彷ひて、空しく歳月の箭の如きに伴ひ、蒼茫として早く老い去らんとす。嗚呼萬象の狀何ぞ慘なる。鳥高く翔らず、葉簇徒らに搖落し、蜂蝶翼衰へて、吟蟲聲細く、山頭野邊皆死色を呈して乾坤の色痛む。嗚呼、我が心亦傷まざらんや。死滅の時、衰寂の時、搖落の時、枯槁の時、而して多恨又更に恨を副ふるの時なり。

然れども死滅の間に活因あり。枯槁の中に豐熟の果あり。萬象が改易するの端は此時にして、舊謝し新代るの準備は亦秋に於てなさる。神は決して絕對なる悲傷を人類に送り給はず。淫雨の間に日光を仰ぐは樂しからずや。憤泣せる義士の微笑を見るは樂しからずや。蕭殺たる秋色の間に無限の生命を探るは極めて樂しからずや。樂しき春には秋の悲みあり。悲しき秋には、爾り、春の樂幻の如く潜めり。

此日空定めなかりしかども、酣なる秋の色と聲とを探らんとて兄と共に眞駒内に遊ぶ（原教授と同伴せり）。豐平橋畔に老女が賣れる林檎二斤を購ふ。傍を過ぎて之を見たる頑兒は、余を嘲弄して彼等は落林檎を買へりと云へり。落林檎なりとも可なり。余等は渴を醫して老女は錢を得ん。

例の小流を挾みたる一直線の街道を進み、右折少時にして種畜場の柵内に入りぬ。右方に聳ゆる藻岩山は、既に七分の秋色を占めて山容更に幽に、牧場一帶の軟草は既に老いて殘花僅かに殘り、美しき胡蝶の二羽三羽、遺香を趁うて叢邊に蹁躚するあり。あはれ花落ち盡さば何處に宿るべき汝が姿ぞ。蕭條たる野塘に、汝と相應はしき美はしきものは再びあらじ。彼處には乳牛の群れて草を食めるあり。余等の過るを見て、其首を徐々に廻らしつゝ、溫和なる眼に長く目送して、其中の三四頭は長閑に嘶きぬ。其聲數層の黃林を分け入りて、夢の如く消え去りたる後は、風樹の聲姿々たる外に淋閑として一音の耳を遮り來るものなし。かくて事務員に案内せられて、種馬を見るに秋闌けて痛く肥えぬ。紫眼鐵蹄一度放たば九皐の雲や蹈破し去るべき。聳然耳を聳てゝ足掻きする樣は、事なくして勇士髀肉の嘆に堪へざるものゝ如し。barn の中には乾草山の如く積みて芳香鼻に甘く、階上の望樓に登れば四方の秋光悉く眸前に啓けて神工の錦繡を晒す。何等の大觀！

余等は思はず秋色に魅せられて豐平河畔の勝景を探りてこれを徒渉するに決し、行くこと數十町にして暫く杞柳の間を過りたる後、石礫磊々たる水邊に出でぬ。水は藍の如く靑く深くして滾々として流れ、柳葉隨て散り、疎條影甚だ淡し。嗚呼、秋神の造り給へる秋の光よ、色よ、將た聲よ、何ぞ淸く深く高き事此の如きや。熟視すれば萬象皆泣けるが如き間、和煦として得知らぬ微笑の影あり。神は此の知き崇高なる地球を造りて、これを惡魔の領となし給ひしか。然らず、必ずや然らず。人の世の今こそ悪魔毒鬼の棲窟とも見ゆれ、何時かは全く人類なるものゝ所有に歸せざる事やある。手袋の如き半島に、グリースの文華開け、長靴の如き半島にローマの開進成りしとせば此くばかり美しき地球の面に、惡魔の永く跋扈する事の想像され能ふや。嗚呼我空しく嗟嘆せじ。失望せじ。我等に正義あり。我等に勝算あり。我の身は粉虀せらるゝとも我の道は失せず。我は永遠に生く事を得べし。我は無朽にある事を得べし。唯汝惡魔に全然的の宣戰を布告せよ、之れをなす事なくして平安を得んとするは抑も難し。卑劣なる地上に於ける欲情の爭闘に於ても、由來左支右吾の徒は敵、味方の敵なり。

余等は此に樂しき贅食をなし、落林檎に燃ゆるが如き渴を醫して、その決して卑む可からざるを知り、遂に河を涉るの準備をなし、余と兄とは原氏の犬を抱て水中に入る。冷冽膚を劈かんとす。千辛萬苦の後漸く彼岸に達せんとせる時、犬は忽

ち掌中より逸して水中に陷落し、彼は憐れにも全身雨に遇ひたるが如くなりぬ。而して余等の衣服も水を被る事夥しく、岸に上りてより此滑稽劇を回想して三人呵々として笑ふ事久しかりき。

余等の秋に對する好意はかくても尚熄む可くもあらず。卽ち藻岩山に登るに決し、草を分ち岩を蹈んで頂上に到れば、渺茫たる石狩平野は板の如く平にして遠く百里の外に連り、大瀛左方に開けて迢杳露領の沿岸に通ぜるあり。其間日本の最長流と稱せらるゝ石狩川は恰も根針の屈曲せるが如く綠野を縫うて流る。人間を以て大知識の動物となし、Science は萬事を解釋して殘す處なしと自任せる原教授も「かうやつて見ると人間も小さいものですね」と歎息しぬ。爾り、小なる人間の憐むべき小なる心は、徒らに窮屈なる規矩の間に搾入せられて、透徹の眼は益ゝ鈍くなりぬ。絶大なる道程、絹偉なる神意、我の知らんには餘りに大に過ぎたり。我徒らに天地の前に復何をか喋々せんや。神よ、願くは卑僕に賜ふに、敬虔の情と、篤信の心と、義敢の志とを以てせよ。要するに益ゝ神を見る事明かにならしめよ。imagination の翼に乘じて天外の聖境に遊ぶ詩人の快意健羨に堪へたる哉。

山を出づれば到る處の農家秋穰の厚きに擊壤して、每戶笑語の漏れざるものなく、生籬の外無邪可憐なる少女の秋草の數數集めつゝあるあれば、林野の彼方には活潑快爽の小兒網を畝邊に張りて擒鳥に忙はし。國家の元氣は此の如き處に養成せらる。高潔の心情　此の如き所に潛みつゝあり。尊むべき黎顏、重んず可き蓬髮、彼等に遇うて學才に傲るの至愚なるを悔いずんばあらず。

札幌に着せんとせし頃は暮色蒼然として至りぬ。顧みて藻岩の山頂を望めば、半面夕陽の色に彩られ半面微茫たる淡靄の罩むる所となり、山麓には農戶の炊煙靜かに沈みて、梵鐘數杵暮れ行く今日の名殘を惜めり。

十一月三日。此秋は余には殊に寂しき秋なりき。年を經る每に、余は搖落の時の、眞に深透なる悲哀を表するを味ふ事深し。されども秋が有する天職は、只悲哀のみにあらざる事も追々に知られぬ。夜靜寂なる度每、余の心の秋氣に合投する度每、余は秋を歎はんとして夜の中更を過ぐる事屢ゝなりき。されども余の遲鈍なる心は、遂に秋の天職を歎ひ盡さゞるに、

秋は既に去りて嚴冬の氣は沁々として逼り來りぬ。止みなん。余は此歌を完成する能はざりき。然かもこれを記する所以は、來秋を期して續稿ゞさんとするが故なり。

秋嵐の歌

嗚呼革命の時來ても　姑息の夢にうまゐして
猶醒めあへぬ人心　醒ませ萬里の秋の風』。

猶醒めあへぬ人心　醒さんとてか大神の
神祕の扉開く時　躍りて出でし革命の
健兒の姿見ずや人』。
肉逞ましく骨太く　足は退立(そきた)つ土を踏み
頂壁立つ天にあり　靉(たなび)き渡る靑雲の
冠に虹の色そひて　向伏す限り白雲の
衣をかざる月のあや』。
アポロに似たるかほばせに　悲哀の相を集めては
涙薄暮の雨となり　憤怒の色を放ちては
八重立つ雲を劈ざきて　狂ふ稻妻物すごく』。
神より受けし撲滅の　劍を右手にかざしつゝ
一度なぎし太刀風に　嗚呼天の爲す革命の

秋の嵐は今立ちぬ。
萬里をかける天雲の
二度落ちて野は朱く
零露に蟲の音細し
サタンを逐ひし其かみの
見ずや毘嵐の息吹く時
一度落ちて山は黄に
蜂蝶の羽朽ち折れて
彼のミカエルが天上に
かんあらびにも似たる哉』。

二度なぎし太刀風に
はやち木枯吹き落ちて
風も移らふ夕雲の
天の帷幄閉ぢぬらし
嗚呼すさまじき秋の色
北斗の外もなべて唯
霧間をかけり雲を分け
鳴るや雷降るや雨
やれ間を縫ふや稻妻に
天上暗く地は死して
浦輪も野邊も限りなく
風のみ渡る景色かな』。

秋寒げなる夕まぐれ
實にや見果てぬ夢よりも
昨日にかはる今日の樣
むぐらの眞野の末遠み
木は死し草は枯れはてぬ
御空の星を仰ぎても
露分衣來て見れば
はかなきものか現世の
人跡たえて荒れはてし
沙蘆の騷ぐ浦かけて
よしとこしへにかゝるてふ
天の河波白くして

一八九九年

流るゝ星の數しげく　地の搖落にさそはれて
しをれ行くらし空の襟　嗚呼我は將何かせん
死影に滿てる古塚の　地球の胸に身を寄せて
春を返せとをめきつゝ　をめきつゝ世を哭かんかな。

十二月十七日（Sunday）。一時に激し一時に冷ゆる我が小心は、我をして志を立てゝより一年ならざるに、既に自ら道を失せしめんとす。之れを思うて實に慚悔の念に堪へず。近來に於て我が日記に書すべき事の少きは、一は自習の多忙によりしと雖も、全く我が所懷の乾枯せるに由らずんばあらず。

思ひ起せば我も幾干の變化に遇へり。己れを遇するの法を知る能はず。心を安じて道に就くの度を養ふ能はず。煩悶の極、死を決して神を求めたるも今年なりき。我の心緒弛廢せんとする時は、深く此事に思ひ到らざる可からず。而して我は其當時にありて、全然服從を神に捧げんとしつゝ、一年に垂んとする今日にありて尙斷然としてこれを爲す能はず。俗念刻々に來りて良心を蔽はんとす。何が故に我心はかくまで惡魔網中のものとなり了りしぞ。思へば我が懷き來りし大望も、唯空中に畫きし樓閣に異らざらんとするか。

我が胸中に燃ゆる文學者たるの志望も、今は決して許す可からざるを覺ゆ。文學者は帝王たらざれば乞丐たるに過ぎずとは眞に然り。而して我は實に唯一個の乞丐に過ぎざるなり。我の嗜好を傾く可き職業は一もなし。日々の學課に於て、我は之れに酬ゆるに一の欠伸あるのみ。人の misery を救ふと自稱する經濟學も、我に於ては唯に一個の乾燥なる理窟に過ぎず。我は唯會心の文學に眼を曝す時のみ、殆ど寢食を忘れんとす。我はこれあるが故に、己れの天職又これにありとなしぬ。而かもこれ我にとりては甚だしき誤謬なりしが如し。誤謬にはあらざりしならん。我は本末を知らざるものなりしなり。

我は天職を撰ぶ前に我の人格を擇ばざる可からず。而して、我は今日に至るまで克く之れを撰ぶに堪へたりしや。悲しむべし、我は堪へざりしなり。我が採り來れる方向は、或は他人に於ては成功として認めらるべし。而して我が Stoic 派的な

る自克の修養も、心奥には一の安慰も齎さゞるなり。我が心は依然として何物をか握らんとして、暗中に苦悶する狂者の如し。心を下して自ら思ふ時、眞に此の如く感ずるなり。嗚呼我は眞に神の懷にあるものにあらざるなり。此の我儘至極なる少情を如何せん。

我は向後千尋の海底に等しき平安を心中に感ずるにあらざれば、決して天職に就くが如き事なかるべし。我の行步は遲々として殆ど取るに足らざれども、犯して悔い、悔いて又犯す行步の間に、心を空しくして神に求めなば、焉ぞ平安に達するの道なからざらんや。日月の蒼穹を運行するが如く、千載變る事なき信仰の軌道は、何處に潜めるぞ。我は眼既に神を見て、少情によりてこれに走り赴く事能はざるものなり。これに加ふるの大罪あらんや。罪の重荷は、我の心眞虛なる時千斤ゝ重量を以て來り我を攻む。

昨日今日、夜毎に天晴れて玉兎玉よりも淸く、眼を擧げて星と月とを見れば、眞に天國の遠からざるを覺ゆ。我が心が惡魔に壓下せられて正に摧かれんとする時、常に力を添へて我を奮起せしむるものは、實に此自然なり。我は蟲よりも弱く力なきものなれども、自然は常に我に送るに無限の力と希望とを以てす。我は弱しと雖も、自然に接し得る限り決して失望せじ。聖書は實に我が鞭撻にして、自然は實に我が慰藉なり。我は只鞭撻の愈々嚴に、慰藉の益々多からん事を鶴首して止まず。神は確かに在(いま)せり。我よく之れを知れり。而して自ら之れに近づく能はずとせば、嗚呼これ地獄に陷るに充分なる馬鹿者なり。

嗚呼、此心身を犧牲となす可き覺悟を、何故に放擲せんとするぞ。勉めよ。勉めよ。

十二月二十六日。半晴。兄と共に幌別(ほろべつ)か登別の溫泉場に靜寂なる越年をなさんとし、八時の汽車にて札幌を發す。早川亦室蘭に到らんとして同乘す。大雪なる爲め汽車遲るゝ事殆ど一時間にして幌別に着す。直ちにカルルス溫泉に到らんとするに、玆も大雪の爲めに道の通ず可きなしと云ふに落膽し、旅店鈴木に投宿す。直ちに海岸に到りて鴨を狩らんとす。

日は春(うらゝ)かんとして未だ全く春かず。寒風天の一方に凝る處、一帶の砂濱半ば白雪に被はれ半ば波濤に被はれ、浩々たる外洋より來る波濤は、雪山の頽落するが如く岸頭を打ちて壯快窮りなく、長く海岸の偉大なる景に接せざりし余は、之れに對

して云ふ可からざる感覺を得ぬ。鴨は終に獲る事能はず。夜に至り寒衾を擁して荒村の曉鴨を聞く。

十二月二十七日。 カルルス温泉は積雪の爲めに、遂に行く可からざるを知り、登別温泉に到るの止むを得ざるに至り、八時十五分の汽車にて發す。登別停車場より温泉まで殆ど二里。二人銃を肩にして鳥を狩りつゝ行く。道は夷路より丘陵に至り、丘陵より嶂嶽に至り、次第に險を增し來る。而して溪流は常に道に沿うて流れ或は其色を百尺の下に見る事あり、或は其聲を咫尺の中に聞く事あり。迂回曲折して登る。山は定山溪よりも嶮に、流は定山溪よりも小なり。而して流は白濁の色を呈し、水底の石は皆赤褐色なり。蓋し源泉は卽ち温泉の湧出する所なればなり。一時頃温泉宿丸一石田方に着す。浴客甚だ多からずして一先づ安心す。聞きし割合に靜寂なり。此日半晴。

十二月二十八日。 雪。九時頃結裝して、山を出づる一里計りの所なる石山に到り、山鳥を狩らんとす。一羽だに得ず。小鳥三四羽を獲て歸る。午後温泉の源を見る。瀧本なる旅館の裏を行く數町にして硫黃精製場あり。これを出づれば卽ち山俄然として裂け、山谷呀然として口を開く所に白氣濛々として昇るを見る。眞に偉觀なり。猶委細は他日精觀の時に讓る。夜 Carlyle の "Voltaire" 傳を讀み又 Faust 中の Designation を獨逸語にて讀む。

十二月二十九日。 晴天。朝は家にありて讀書す。余は例の Voltaire 傳を讀む。半解に過ぎずと雖も、Carlyle が其主義に反對する人物を評論して、其主義の發揚を期せんとするの跡は略〻窺ひ知る可し。其眞理を愛するも、逆境に立てる眞理を愛せず、神に依るを知るも、己れに依る事これに過ぎ、表面に靜容を裝ひて、而かも裏面に渾沌の地獄の如きあり、power あれども beneficent authority なく、人を懼れしむれども尊敬せしむるに足らず。唯强きのみにして高からざる彼の性質を痛擊する所、眞に吾人の針砭たらずんばあらず。

午後兄と共に散歩し、未踏の徑路を拾ひ、山中を上下して行く事十數町、卽ち白氣の起るを見て湯沼に來れるを思ひつゝ進みしに、果して眼下に沸々として蒸氣を出せる一沼あるを見たり。卽ち山を下りて沼邊に到るに黑色の熱湯、瓦斯と共に湧き、或は石隙より硫氣を吹けるものあり。一目悽慘として殆ど地獄に到るの思あり。卽ち沼端を巡りて對岸に兀立する山

に到り、一二人の足跡ある急坂を辛うじて上り山巓に到りて見れば、湯沼は眼下に鏡の如く見えて一面に蒸氣沸騰する樣、Byron にでも見せしめば必ずや地獄を畫き盡す可しと思ひたり。而かも山の靜寂なる事萬古の如く、二人の外人の手を下したるものは雪上の足跡と、山下の廢屋あるのみ。身は益〻人より遠く、天に近き山巓に立ちて、死せるが如き地球の bosom に燃ゆる熱火の餘威を此に見る。幾度か下劣にならんとする弱志も、森然として一種の神氣に襲はれたるを覺え、此に二人して爲したる祈禱は永く余の記憶に止まるべきものなるを覺えぬ。自然のなす教訓は如何に偉大なるよ。

夜湯場にて計らずも若林に遇ひ、永田氏の墮落談を聞き、人情の知る可らざると東洋的道德の益〻制裁力乏しきを感じぬ。

十二月三十日。晴天。朝 Carlyle を讀む、又若林遊びに來る。笑談の間に晝となりぬ。午後三人にて湯元に至り最大噴泉口の土涯に到りて之れを窺く。黑色の熱湯、鼎中のものゝ如く沸く樣、眞に愉快なり。夜は農業に就て時を費す。

十二月三十一日。(Sunday)。快晴。此日朝五時半起床し、後の山に兎狩をなせしが一も得る能はず。直ちに石山に到り啄木鳥十數羽を得て歸り、晝食に大に馳走せらる。午後、鑛山監督署長西山と云ふ人を訪ふ。夜、同氏及び若林來る。談餘りに長きため三十二年の最終日を默想に過す事能はざりき。今此に最後の日記を記するに當り、少しく過去を顧みなんか。

卅二年は實に余にとりて記憶すべき年なり。余は此年に於て、心中に無限の苦痛を感じ、其督の僕たらん事を期しぬ。家より幾多の譏罵を得ぬ。敬愛したりし外祖母は永く逝かれぬ。

本年に於て、神は余に種々なる機會と試練とを給ひぬ。余の愚眼は、思ふに之れを捕捉する事甚だ少なかりしならん。而かも余は、全能なる神のなし能はざる所なき偉力によりて、其卑僕たらん事を謝するに至りぬ。而して余は時に、心中に伏在せる靈氣の激す所となり幾度か發奮せしを得しものは實に世上の賜なりと感ず。

嗚呼而かも余は本年に於て、全然の服從を神の前になす事能はず。全然の宣戰を惡魔になすを得ずして止みぬ。自ら顧みて、實に唯慚愧の至りに堪へず。余の行爲には尙僞善の事多く、不誠實なる事多く、懶怠なる事多し。而して之れ唯絕對なる信仰なきより來る。余はよく之れを知れり。而かも之れを行ふ能はざるは何ぞや。愚の極と云はざるを得んや。

而して眼を世上に轉ずれば、俗世は愈〻俗化して眼に映ずる所一として正義の衰頽を意味せざるものなし。英米の自由國にして、南阿兩州に對する狂暴あり。之れを小にしては日本の同胞、有望なる同學生に至るまで唯小刀細工を事として、遠大なる希望を以て遠大の事業に進まんとするものゝ如きは絶えて見る可らざるに至りぬ。此の如きの世は神が最も人類に待つ所あり給ふ時にあらずや。嗚呼、余此腐敗を知り頽廢を知りて猶且つこれを矯正する事能はず。悲む可し。余は眞に我が身を犧牲となすの勇氣なきか。名聲を重ずるの心あるか。余が將來に於て最も力を用ゐて反省せざる可からざる所は此にあり。本年に於ける余の目途は、謙遜なる希望あらしめよ、卑屈なる希望あらしむ勿れと云ふにありき。來年に於て、余は眞に此の如き希望を抱懷するに足るべき人格なるかを檢せざる可らず。

年は逝きぬ。馬齡は加はらんとす。嗚呼無能なる卑僕が神に對する叫聲は唯無言にあり。余は神の攝理の大なるを信じ、庶幾くは新たなる勇氣と赤心を以て、來年に向て再び濶歩の地を造るべし。

一九〇〇年（明治三十三年）

一月一日。 晴、强風。年々の運行は日月を載せざれども、人には何となく思ひ改まらるに三十三年の正月は來りぬ。余は此世に生を稟けたる限り、爲すべき事は寧ろ叢々にして多からんとす。而して靑年なる再び歸らざる時期は愈〻縮まらんとするなり。

此日入浴に來れる鑛山監督署長西山氏を訪ふ。同氏は謠曲に達す。即ち若林と三人にてこれを習ふ。三井寺の月の段を習得して意氣揚々たり。

此夜、明朝歸札の支度をなし十二時に至る。余等は再び札幌の俗界に歸らんとす。登別の山中、溫泉の沸々として湧く所

に學び得たる超然の教訓は永く體して忘る可からざるなり。

一月二十四日。西方に面する書窓に對して、夕陽の沈むを眺むる時、水の如き空に點じたる銀珠の如く輝く一の恒星あり。其純潔なる、清新なる光輝ある光は常に余の心の奥深く沈みて、云ふ可からざる一種の感慨と化し去るなり。余は夕食前、書を見る可らざる暮色に接する毎に、此星に對して種々なる教訓を探りたりき。

余は十一時にして日常の勉學を終り、夫れより日記をつけ聖書を讀み、心よりの祈禱を神に捧ぐれば十二時に至るを常とす。此十一時より十二時に至るの間、又余の書窓よりは、他星に勝りて光輝ある一恒星を認め得るなり。余は地球の上に見る可からざる其光を貪り仰がんがために常にランプを消し默して彼の星に對す。天地は死せるが如く靜かにして我が同室者は既に寢に就けり。余は此に一日の中に讀みたる書物の中より、感觸を與へられたる部分を再び腦中に喚起し來りて、獨り心にうなづくなり。余は實に汚れたるものなり。然れども此時、唯此時のみは、余に詩人の心あるを自覺す。彼の靑く輝き、鋭く射す光は、吾人の殆んど想像す可からざる遠距離より來りて、地球の上に殆んど數ふるに足らざる小地積の上に立てる我の心を射る。余は胸中の全く洗滌せられて心堂までも大潮の深底の如く沈みて澄むが如きを覺ゆ。此 calm なる光、永遠より永遠に照りて人の心を支配す。嗚呼此の光！ 嘗て幾人の人に如何なる慰藉を送りたりけん。正義の爲めに牢獄に投ぜられし幾多の志士が、鍵孔の如き小さき窓より仰ぎ見て無限の奬勵と慰藉とを得しは彼の光にはあらざりしか。ユダヤの豫言者等が俗世の腐敗を憤り天國の近づかん事を祈り、獨り廣漠たる砂原に俯伏して同情を求めたりしは彼の星光にはあらざりしか。抑も鷲峯の頂、印度に於ける偉大なる改革者の頓悟を嘉するが如く、賀するが如く、靜かに西天に眠り行きし星光はこれにはあらざりしか。若しくはナザレの僻村、東方遠來の旅客を導きて世界開闢以來最も榮光ある奇跡を暗示せるものは、此星にあらざりしか。嗚呼星よ。余は汝に於て友人の涕と笑とを讀み得るなり。汝の光は其の涙によりて淸き潤ひを持ち、其笑によりて美しき瞬きを持てり。古人を慰藉せし汝に接して、余は實に古人に接するの思あり。余も亦汝によりて慰藉を得べし。余に浮世の俗名を庶ふ念なき時、惡富を求むるの心なき時、世上一として信頼す可きものを見出さゞる時、我が至

つて無力なるを感ずる時、余は汝より幾何の慰藉を得たりしぞ。俗世に於ける余の所有の零なる時、汝より來る慰藉は無限なり。星よ、余をして愈ゝ汝を愛するの程を增して身邊にある總てを忘れしめよ。天國の光榮を漏す蒼穹の孔隙は汝ならずや。余の住すべき國は決して失せず。縱令世界を擧げて我に反抗し來るも、而して余は到る處に跼蹐して片言も隻足も投ずるの餘地なきに至るとも、嗚呼、余にして道を步まば余の國は無窮大なり。汝の光の失せざる限り余の心中には良心の燃ゆるなり。余が胸中の靈燈に點火するものは汝の光なり。嗚呼、余斷じて落魄せじ。俗に從はじ。

此夜、天雪を飛ばして、雪は天の帷幄を遮り終りぬ。星に對して思を遣らん由もなし。而かも瞑想し來れば汝の光は余が胸中に深く刻まれて、暗澹たる空の中にも美妙の光を發するを見るなり。

四月二十一日。春は北海の邊土にも來れり。連日風の激しきあるも、氣は自ら和暢にして樹芽破れんとするなり。之れ人の稱して希望の時と云ふもの、我亦笑つて此春風に對せんか。而かも我が心には常に暗雲の慘憺たるあり。机邊に孤坐する時淚は下り、野外を逍遙する時淚下り、人の益ゝ春に向ふに反して、我が心は愈ゝ寂寞を感ず。思へば我が死を決して札幌の風光に訣れ、定山溪に死味を嘗めんとしたるも一年の昔となりぬ。我が斷じて志を決し基督の卑僕たらんと決心せしも一年の昔となりぬ。而して我が心中には今日も尙莫大なる空虛あるを感ずるなり。これに滿すべきの糧は未だなし。心の貧しき我よ。苦しき經驗はこれなるかな。外に襤褸一枚を纏ふも、心富みて晏然たる人の如何に幸なるよ。貧しき我が心は終日終夜滿すべき糧なくして思茲に至る每に云ふ可からざる苦痛を感ずるなり。我は智能なく、勇氣なく、活潑の氣なく、而も嗚呼、燃ゆるが如き信仰なし。

四月二十九日。人世浮沈多しと云ひながら、眼前に不幸逆境此の如き人を見るは、余が年少の經驗には實に最初なり。不幸なる人とは弱年の一女子なり。彼女は名を季子と云ふ。余は最初原氏の邸に彼女を見たり。これ同氏の一家が皆病に罹れる時、其の看護のために來れるものなり。兄は余に語るに彼女の磊落豁達なるを以てし、尙語り次いで曰く、彼女には home condition に非常に憐むべき事あり、而かも彼女の快濶を裝ふ、寧ろ偉ならずやと。此時余多く動かざりき。

後、原氏夫人の札幌病院に入院するに及び、余 亦兄を助けんが爲めにこれに到りて一泊せし事ありき。此間彼女は屢々來訪せり。余は彼女が喋々喃々として饒舌を逞ふし常に笑聲を絶たざるを見て、不幸轗軻の人とは信ずる能はざりき。而かもその擧動の中には、眞に人の憂を憂とし身を致して親切を盡すの狀見られ、弱年に似合はず感心なる人かなと心少しく動きぬ。

尋で彼女の事に關し、兄より聞ける所極めて多かりき。彼女は原氏の看護の爲めには晝夜衣を解かず、或は食を廢し而かも連日些かの慢心もなく、これに從事するを耳にし又眼にしぬ。彼女が去年十二月の下旬よりこれと同一の境遇にありて、或は根岸(彼女が札幌に於ける唯一の親戚)或は小林氏の病者を看護して今日に至れるを聞き心甚だ動かざる能はざりき。

此間に於て兄と彼女とは甚だ親炙し、これによりて彼女の境遇は全く兄に打明かされぬ。悲む可きは彼女が不遇の生涯なり。彼女は福島に於ける富豪の長女として生れたるなり。(彼女の父はこれより前或女と通じて彼女の兄に當るべき二男子を生めりと)彼女は又多くの弟妹を有し、溫かなる家庭に風波少く暮しぬ。彼女は着物より重きものを知らず。幼少より豁達の氣象は氣儘なる御轉婆となり、毎日公園に到りて赤兒の如き無意味なる而かも可憐なる兒戲をなして日の沒するを忘れたりしなり。然かも一朝にして悲哀は此一家の間に起り、父が嘗て狎れたる賤妓は終に其家に入りて正妻たるに至り、敬虔なる彼女の母は、憐むべし、家を追はれて其附近の一弊屋を給せられたるのみ。而して彼女は年長なるの故を以て父の家に留まらざる可からざりき。賤妓は其本性を顯はし、毎夕食事の時父の酒に醉うて本性を失ふに及び、彼の賤妓は浸潤の譖を逞ふして益々彼女を苦むるに意を致せり。彼女亦敢て此女に下らず。食事の如きは斷然座を別にし、或時の如きは一日の食を廢し購求したる僅少の菓子に空腹を癒しても尚且つ此惡女と膝を交へざらんとせり。此に於て風波は益々風波を産み、彼女は遂に家に在る能はず。東京遊學を名として麻布英和學校に入學せしめられぬ。尋で彼女は又横濱の女學校に移されしが天性の豪邁は意に滿たざる教員の下に壓伏せられ居るに堪へず、屢々これと衝突したる結果遂に退學して、再び故郷涙多き處に歸るに至りぬ。嗚呼嘗て深窓に人となりし彼女、忽ちにして一旦俗世の風波に遇ふや、急轉直下人生最慘の境遇に立つ。思

ふに其間彼女が人知れず流したる涙は如何に多く如何に熱かりけん。而かも之れ未だ彼女が不幸なる運命の全豹にあらず。彼女は遂に北海道の遠きに逐はれぬ。

小樽に一戸の親戚あり、割烹を業とす。女主は即ち彼女の親戚にして男主は全くの他人なり。彼女の此家に入るや、云ふ可からざる不幸は彼女の上に落ち來りぬ。余は實に今此に書するだに堪へざらんとす。彼女は自ら「妾は悲痛の爲めに絕食せる事幾度と云ふを知らず。而して憤怒の爲めに死せんとせし事幾度と云ふを知らず」と云ふにて知るべし。彼女は遂に此に居るに堪へずして、去年の十一月札幌に根岸なる親戚を訪うて、これに寄食しつゝありしに、十二月に至りて同家の兒病むに及び、日夜を通じてこれが看病に從ひ、次で小林氏、次で又原氏に及び其後半日の寧時なかりしなり。彼女我に語つて曰く、「妾は去年の今頃までは實に世を知らざる一痴女に過ぎざりき、而かも今に至りて大に世事に委しくなれるを覺ゆ」と。これを聞くもの誰か心甚だ動かざらんや。

而かも不幸は未だ彼女より離れ去らざるなり。彼女は可憐にも兄を愛慕しぬ。彼女は愼み深かるべき女の身なるにも拘らず情に餘りて一夜之れを兄に語り出でぬ。切なる彼女の語は思ふに切るが如く兄の胸中に入りしならん。兄は而かも斷然これを謝絕せり。兄は其理由を余に語りて曰く「彼女の天性の爛漫たると、其親切の深厚なるとは實に可憐の至極なれども、其性 shallow にして而かも品性決して高しと云ふ可からず。余が將來の行步には共に行くに堪へざるなり」と。憐れむ可き彼女は何處の人よりも失望寧ろ絕望の影を投げられ、其一夜を飲泣したりけん。翌朝余の原氏を訪ひし時、其眼の棗（なつめ）の如く赤く膨れたるを見て唯事ならずと思ひぬ。

而かも彼女は須臾にして元の快濶に復れり。余は兄と語る每に彼女の話頭に登らざる事なかりき。二人の同情は實にその上に集まりしなり。兄は彼女が學問に志し度きも其實母より學資を仰ぐ事困難なれば、と云ふを聞き且つ兄が前夜彼女に約するに必ず彼女に利益ある事を以てす可しと云ひたるを以て、其の學資の幾分を供す可きを云ひ出でぬ。余は直ちに之れを承諾せり。兄は余を驗せんがためなりとて、彼女を余の家に來らしめぬ。余は之れに語るに訥辯（とつべん）なる語を以て、二人にて學

資を給す可きを以てしぬ。彼女の眼には涙ありき。彼女は余等に勝れて資産ある家の愛孃なり、而して余等の如きものより學資を仰がざる可からざるに至る。余は彼女の歸後寢に就て殆ど一夜を眠る能はざりき。

而かも彼女の不幸は之れに止まらず。彼女が唯一の親戚にして、萬事を打明くるに足れりとなせし根岸なる人と不和とならざるを得ざるに至れり。其の前夜彼女の又余を訪ひし時兄又來りて侃々として彼女を戒めたり。彼女は殆ど泣憤したりき。而かも之れ實に余等が無理なりしなり。彼女は兄に到り、泣いて札都を去らん事を告げ、其事情を語りぬ。今は萬事不可なり、願くは六月頃迄札幌にあらしめ、二人及ばずながら其短處を矯めんとせし事も空となりぬ。彼女は遂に昨朝を以て此地を去りぬ。其前夜兄と余と一封の別辭を書して彼女に致せり。

嗚呼、噫、可憐なる女よ。不幸なる女よ、君の人を懷しむ愛心、人の患に赴く己れの如き、何ぞ其心情の麗且つ美なるや。不幸なる境遇に在りし彼女の事とて、其性質中には所謂婦德に悖れるもの尠しとはなさず。而かも云ふ可からざる天眞の氣は人の心を魅せんとするなり。而して兄は最も彼女に近づきしもの、而して彼女の最も愛戀せしもの、その一旦去るに及びて兄の心中には癒す可からざる寂寞は來りぬ。昨夜は兄が忍びに忍びし心緒遂に亂れて余の室に泣きぬ。余は實に同情の念を以て兄の思を許らざる能はず。而かも此は情のみを以て制せらるべき時にあらざるを以て、兄が果して大業に志さんものならば、即ち民衆の喜憂を一身に負うて立たんとするならば、如何に可愛くとも一時の情に激せられて生涯の失敗をなす無からん事を戒めたる胸の苦しかりし事よ。

我が室に河野氏が飼へるカナリヤあり。籠の中に閉ぢ籠められながら美色を發するを聞きて、彼女に思ひ到り、

よしや世は汝につらくともつらき世を歌ひ清めよその細き音に

と云ひて之れに送りぬ。思ふに彼女は兄より受けたる癒す可からざる重傷を益〻深めざらんがために、速かに南方に向ひしならん。而かも夜暗く燈幽かなる所、思ひ出の夢辛らからざる可きか。兄は泣きつゝ彼女と同棲するの念を斷ちたりと云ひ「世に盡さんが爲めには彼女を犧牲にせざる可からず。願くは余の爲めに犧牲となり吳れよ」と云ひて又泣きぬ。嗚呼我

が心動かざるを得んや。

神よ、願くは彼女の上に祝福あらせ給へ。余の心中に若し彼女に對し朋友の交情以外の感情あらば、願くは君の強き杖もて我より引き裂き給へ。余も決して木にあらず石にあらず、彼女の境遇に我は泣き、彼女の美性に我は醉ふ。而かも我斷じて、然り斷じて亂暴なる感情を起すべきにあらず。唯神のみが我が心を知り給ふ。願くは此苦痛を此胸より裂き取り給へ。

五月十七日。

Longing（戀慕）―重譯―

寒雲重くかゝりたる　暗くも凄き虚空をば
過ごし行かんしをり得ば　祝福せんに我が旅路
四季變轉を知らずげに　春とこしへの彼の美土は
見ずや高きにありながら　花咲き匂ふ其の岡に
行かん翼を我知らず　嗚呼我知らずこめん力も

天平安の音信を　漏すか遠き樂の聲
花滿山の清き香を　誘ふか輕き天つ風
緑かげ濃き樹の間をば　黃ばみてみのる山のさち
冬の嵐も秋風も　すさばぬ岡に咲く花の色

光はとはに夕なき　旭に野邊の花さかえ
風おだやかに吹く所　其處に癒の力あり

さりながら見よ我が前に　横たふ河はさかまきて
嵐木枯吹き落つる　汀に獨り我れ立てば
波ものすごく寄せかへり　言ひ甲斐なくも心おくるる

たゞよふ船はありながら　水先を示す水手もなし
嗚呼よし今はためらはじ　生命を眞帆にはらませて
纜解かん船出せん　堅く信ぜよ敢てせよ
唯ためらはぬ確信の　蔭こそ安き住家なれ
光榮あまねき奇跡の地　奇跡に據らぬ人に見られじ。

五月二十五日。我に今最も要するものは、基督の愛を眞に解せん事なり。之れを解せん事は我にとりて重大なる事業なり。我に宇宙を席捲するの大智術なく、山を抜き海を蓋ふの大雄圖なく、叱風咤雷の大雄辯なく、韓柳歐蘇の大筆才なくとも可なり。唯我が心奥に清き熱き涙を以て、基督が我等の如き殆ど云ふに足らざる靑蟲の如きものにさへ、その尊き血と肉とを與へ給ひしを感謝し得たらんには、我は凡ての物に勝りて之れを喜とせん。嗚呼、我が心は滿されず。靑年の娛樂とせらるべきもの我 Schiller と共に之れを Requiter に捧げたるを期しぬ。而して之れに代りて我が心を滿すべき或物は未だ到らず。幾度か失望せんとしては幾度か自ら勵まし、唯進まんのみと心に決して突進する間にも再び立ち止まりて惆悵する事實に屢次。我が弱き信仰！

肉に強くして靈に弱く、財に裕かにして心貧しき我、加ふるに生來の鈍根を以てして、屢〻神の眼を避けんと欲す。我が基督に到らんは駱駝が針眼を通過するよりも難し。眞に難し。さりながら不可能の事にあらず。神は能はざる所なし。我之れを信じ唯忍を待たん。信仰によりて生き、信仰によりて死するの聖生涯我に臨む時は果して何時なる可き。嗚呼、憐れむ

べきものよ。一人の友をさへ滿足せしめ能はざる憐れむ可きものよ、汝が

「キリストの愛より我儕(われら)を絕せんものは誰ぞや。患難なるか。或は困苦か。迫害か。飢餓か。課程か。危險なるか。是れ我等終日汝の爲めに死に附され、屠られんとする羊の如くせらるゝなり、と錄されたるが如し。然れども我儕を愛する者に賴む凡ては此等の事に勝りて餘りあり。そは或は死、或は生、或は天使、或は熱心、或は有能、或は今あるもの。或は後あらんもの、或は高き、或は深き、又他の受造者は我等を我が主イエスキリストに賴れる神の愛より絕する事能はざるものなるを我は信ぜり」

と、歡喜を以て云ひ得るは果して何の時ぞ。我に最も要せらるゝは基督の愛を眞に解せん事なり。爾り、我の微弱なるを益〻思はん事なり。

六月五日。夜。（余市に於て）春夜の海を見んとて獨り街衢を離れ、波止場の突端に來り坐しぬ。

空は朧に霞めり。半鉤の月高く懸りて光淡く、靑く輝く星光亦甚だかすかなり。海はいたく凪ぎて波の去來するものなく、暗く澄める水底には月と星との影ほのかに宿れり。四圍は全く人籟を絕ちて、自然は今や眠りに入らんとす。唯永久に亙りて休まず動くものは　徐々たる星宿の運行と春潮の來往あるのみ。

余は此の如き偉景に接して、身の置き處なきまで汚れたるを覺ゆ。座邊の景物一として天來の本體を流露して神の面影を宿さゞるなきに拘らず、余唯一人外面に神の威容を存して心惡魔の如し。人間の間にありて自ら許せし身も、かゝる偉景に接して殆ど寸美なきを覺ゆ。淚暗然として下り、衷心には云ふ可からざる苦痛を感ず。嗚呼未だし、未だし。余が不適の德性、世人に對して已れの品性を自負するが如き間に、汝の品性の高まるべき筈なし。先づ世人より眼を退けて神に對せよ。神と汝との間に祕密なる交通なき以上に於て汝は永遠の凡人なり。

自然は余を爾く鞭撻すると共に、又余を慰藉する事甚だ多し。自然は小兒に對する嚴父の如し。小兒は其父を畏るゝも、而かも之れに依らざれば一日も生活する事能はざるなり。余より自然の教訓と慰藉とを除き去れよ。余は嚴父を失ひたる小

兒の如きならんのみ。

余が生の須臾なるを思ふ時、海底に潜める玉の如き石礫の數を數へて海の齡を知るは樂しからずや。

余の希望衷(うち)に冷えんとする時、肅々として高く來り彼の石を被ひ此岩を隱し、蕩然として岸を低くする來潮を見て心勇まざらんや。余の孤獨を感ずる時、來波往波を送迎し、此一沫の波が嘗て孔子を出したる支那の沿岸を洗ひ、マホメットを出したるペルシヤの沿岸を洗ひ、佛子を出したる印度を洗ひ、ソクラテス、プラトー、ダンテ シェクスピーヤ、クロンウェル、其他彬々(ひんぴん)濟々たる偉人の搖籃たりし全歐の沿岸を洗ひ、更に自由の鄕土としてワシントン、リンカーンを出したる米國の沿岸を洗ひたるを思ふ時、知己を千歲に起すの感なくんばあらず。

余の心汚れんとする時、澄徹氷の如き海底にきらめきて映ずる星光の純潔なる光を眺めて又雜念の心殿を犯し來るなし。

余の心怯懦とならんとする時、地球全面積の三分の二を有する大水が蕩然として地表を蔽ひ、天空と共に偉大を表現するを見て、小事に齷齪するの愚を覺(さと)るべし。

靜寂なる時海に超えたる靜寂なく、憤怒せる時海に超えたる憤怒なし。男子此の如き意氣なかる可からず。百川萬河の水を吸ひ盡して嘗て溢れたるの跡なく、悠々として萬古に其深藍の色を改めず。男子正に此の如き胸懷なかる可からず。

嗚呼美なる海よ、偉なる海よ、汝人間の憐むべき境遇を憐め。彼等は日夜に瑣々たる末事に拘泥し、左支右吾絶えず何事をかなして遂に何事をもなさず、孜々として何者をか摸索して何者をも獲得せず、徒勞と失望とに疲勞せる其心身は、無底の暗黑に葬り去らるゝなり。完全なるが如くして至つて不完全なるものは人間なり。人間はメフィストフェレスが云ふ如く、完全なる地球上に於ける唯一の不完全なるが如し。嗚呼美なる海よ、偉なる海よ、汝人間の憐む可き境遇を憐め。

嗚呼美なる海よ、偉なる海よ、汝人間の幸福なる境遇を讃美せよ、余に一片の良心ありて海を美と呼び偉と呼び得るは、之れ余に美と偉との要素の缺如せざるを示せるものなり。余は現今の人世を觀じて、失望を以て安ずべきにあらず。余の心に燃ゆる向上の念は、余に進めと私語しつゝあり。嗚呼余行く可し。余行く可し。余の力は弱く余の心は屈せり。遮莫(さもあらばあれ)

確乎たる信仰は余の得て望み得べきものなり。つぶやくまじ。つぶやくまじ。Child of Freedom の如く邁往の氣を以て天を突く可きなり。

夜はいたく更けぬ。余は潮風に冷えたる石上に跪き、帽を脫して靜かに祈禱を捧げぬ。苦痛を宿せる涙は懽喜と共に眼より出で去りて、胸中には一團の活望湧きぬ。神の聖愛は讃む可き哉。俯して海を見、仰いで空を望み、一望渺茫たる水天の大觀を凝視する事暫時にして余は宿に歸りぬ。

夜の思に堪へかねて　さまよひ出でし我れ獨り
巖に立ちて眺むれば　霞む波路の末遠み
滿ち來る春の潮の音に　之れ永遠の響あり
虛空を罩むる夜の色　綾なき海の水底を
星の光の照す時　それ永劫の希望あり
廣きは海の心にて　深きは海の情かな
嗚呼人の子よ醒めいでゝ　目のうつばりを拂ひ去り
海の祕密に遊べかし。

六月十二日。去年の今日は我が敬愛する祖母の永眠せる日なり。余の心は朝來一種の感慨に滿ちて暮に及べり。此夕空晴れ渡りて恰も滿月なりしかば、余の悲觀を天然によりて慰む可く、又自然より默示を受くる可く家を出でぬ。かくて我は永く遇はざりし豐平河畔に來り、新綠鬱蒼流水滔々として活氣に滿ち〳〵たる此大景に對して思はず嘆嗟の聲を發したりき。

かくて余は堤上を登る事少時、杞柳影繁き間を經て美麗なる細砂より成れる汀に出で、草を敷きて水邊に坐せし時、夕陽は將に山端に舂きて日は東天の微雲を破りつゝ現はれぬ。

余は靜坐して內村氏の「基督信者の慰め」中なる「愛するものゝ失せし時」なる一章を涙と共に默讀し、余が彼女と死別

せし以來の行爲を思ひ、多少の歡喜は夥多の悲歎の爲めに打ち消されぬ。如何なれば余の眼は、失敗と過失との跡のみを見るに鋭なるぞ。否々余は未だ失敗と過失の跡を正直に見ること能はざるものなり。嗚呼憐むべき人の子より失敗と過失とを除去して將た何物を殘すぞ。余は未だ確乎たる信仰の上に正立する事能はず。確乎たる信仰より出でざる行爲にして余を眞に喜悅せしむるに足るものならば、そは眞に一個の奇蹟なり。余が靜坐默思する際、常に感ずる一種の寂寞は眞正なる信仰余に來らざるの證なり。

憶ひ起せば余が基督教に入りてより以來祖母の死に會せし時、兄の訓戒を得し時、自然の默示來りし時、讀書の感化來りし時、若しくは我家庭と世間とを思ふ時、常に余の胸中に湧き來る思念は、自今以後必ず萬事を拋ちて父なる神に從はん、基督の十字架を負はんてふ事なりき。之れ屢〻想起して決心せんには餘りに簡單なる事なり。而して之れを實行せんは、實に難事の中の最難事にてあるなり。嗚呼余は自白す、幾度か余は此決心して遂に之れを遂行せし事なきなり。

余の汚濁の骨がらみとなれる心身は、一方に神に從ふと決心しつゝ、一方に於ては自己に依らんとせり。名譽の心、功名の心、情慾の心、高慢の心、怠惰の心、此等は日夜を捨てずして續々來りて余の神殿を攻め、時には之れを奪掠する事あるなり。かくして余は其の痛に堪へず、神を畏れて其顏より逃れんとし、若しくは何故に神が余にかくまで制裁力なき心靈を賜ひしかを恨まんとす。神よ、願くは此卑屈と高慢とを許し給へ。余は全く俗慾も去らずして、神に愛せられんとしつゝありしなり。余の心中には天國と地獄とを調和せしめんとしたりしなり。僞善者よ。愚者よ。嗚呼、愚者よ。僞善者よ。

今、月は益〻其光輝を放ちて、下界は暗黑に包まれぬ。涓潑たる流水の上に金屑輕く碎け散りて眼を眩し、一雙の千鳥啼きて其上を翔り去りぬ。月、此月、余は忽如として胸中にゲッセマネの光景を思ひ浮べぬ。二千年に近きその昔、荒寥たる園圃の中に血の涙を流し、血の汗を振うて祈りし人の仰ぎ見たるは此月なりしか。彼が人と稱する罪惡の奴隷をも捨つる事なく、立ちてより斃るゝ迄唯々我等の道を開かんがために血の涙と血の汗とを瀉ぎぬ。嗚呼尊きその愛、高きその義、我の見るべきは唯之れなり。我は偉大なる識見を要せず、高尙なる學理を要せず。「若し我等彼の死の狀に等しからば亦彼の復活

にも等しかるべし。」我は先づ眞に死せざる可からず。而して血の涙と血の汗とを流さざる可からず。汝の胸若し汗するに足らざれば汝の腦に汗せしめよ。汝の腦若し汗するに足らざれば、汝の腕に汗せしめよ。神は汝の持たざるものを望み給はず。汝若し農夫に適するものあらば農夫となれ。唯何處に行くも、汗を垂れて勤勞するを忘る可からず。人は茫然として遂に神の顧み給ふ所となる能はず。

宜し。余はつぶやかじ。働かざる可からず。all heart を以て働かざる可からず。而して此勞作が神の前に祈禱となる時、余が特別に神になす祈禱は直ちに聞かれ得べきなり。

祖母の一周年に會し、余の心中に起れるの感は此くの如かりき。今夜深き impression を得たるを感ず。余は感謝して勇みて家に歸れり。暫くにして九時四十分は來りぬ。昨年祖母の逝きたるは此時にてありしなり。

「汝神の豐厚なる仁慈と、寬容なると、恒忍したまふとて藐視する乎。其仁慈は爾を悔改に導くなるを知らず。剛愎にして悔なき心に循ひ己の爲めに神の怒を積みて、其義鞫の顯はれん震怒の日に及ぶなり。」羅、II、4―5。

六月十六日。 夙朝五時半に起床しぬ。日は麗かに登り、天は全く晴れて此日の祝福せられたるものなるを示す。余は徐行して庭園を巡り、こくわの花の今盛りなるを見たり。嗚呼之れ去年余が懷疑と悲嘆とに沈みつゝありし時、無限の同情を以ての如く余を慰め呉れしその花にてあるなり。

綠鮮かに影濃き葉影に點々として春曉の星の如く白く輝く花の中には、純潔と謙遜と優美との著しくも讀まれ得るなり。其香氣の幽かにして然かも品高き、其花の下垂して而かも面はゆげなる、汝は去年にも勝りて余に向上の心を起さしむ。一輪の小花に此の如き敎訓を附與し給ひし造化の巧みの寧ろ驚かるゝかな。花よ、余は未だ全く滿身の笑を以て汝に對する能はざるを悲しむ。花よ、恥しながら余は未だ涙の人たるを免がるゝ能はざるなり。去年汝と別れてより茲に一年、余は勉めたり――寧ろあせりたり――進みたり――寧ろ急ぎたり――遮莫余の貧しき心は余の進みたる道と行步の完全ならざるによりて未だ滿されざるなり。憐れなる人の子の愚かにも時には俗欒と俗事のために一時の悲情を忘るゝ事あれども、眞正な

る「我」に歸り來る每に苦しき悔恨の淚は余の雙眸に逼り來るよ。嗚呼世に小なるもの、世に罪深きもの、花よ、汝は人のかくまでに下劣なるを笑はんとはせざるや。余若し汝ならば必ずや爾かせんなり。されども汝は余の如く汚れたるものに非ず。汝はかくの如く下劣なる人の子余の如きにすら云ふ可からざる慰めの笑を傾く。嗚呼何等の好情ぞ。「汝の上に祝福あれ」とは余が衷心より汝に捧ぐる讃辭なり。

余が汝の慰藉に浴してより、汝に對する事茲に二度なり。余は永く、然り生涯汝の純潔なる深厚なる慰藉を忘れざる可し。余の人と和する能はざる時、惡と奮鬪すべき時、余の箙にかざして誇らん花は汝を以てすべし。人は多く汝を知らず、汝亦人に知られんとしてその瓣を紅にし其香を高くせず、却て靜かに來りて孤獨余の如きものに慰めとなる。高き心よ。淸き情よ。余は如何にしてそを忘るべきぞ。余は眞に感謝す。嗚呼余は汝に感謝するを得て余の全く凡俗にあらざるを覺ゆ。失望せじ、嗚呼失望せじ。汝は旬日を出でずして汝の天職を盡して淸く散るなるべし。余も孜々として汝を心に留めつゝ進まん。而して來年再び汝と相遇はん時、願くは余淸まり高くなりて溫き接吻を汝となすを得ん事を。

南阿の國に題す

眞白く淸き蜘蛛の絲　外見によらぬ慾の陷穽
もろくもかゝりし蠅見れば　うるさかりける日頃をも
忘れし人は助くるを。
意氣ある男子誰かはた　火よりも熱き同情を
南阿の義士にそゝがざる　瘴氛深き河の畔
獅子晝吼ゆる山の峽　幾星霜の辛酸に
からく建て得し自由の土　一度ならず二度までも
人の皮着る英吉利の　ために逐はれて心には

一九〇〇年

無限の悲痛を裹みつゝ
涙を呑みし君が忍
世界を擧げて知らずとも
慰め君よ神ぞ知る。
廣袤約そ三十萬
人衆八十六萬餘
產業よしや擧らずも
民に苛税の負擔なく
國勢よしや振はずも
鍬とる腕に自由あり
額に流す玉の汗
隣と交す一微笑
醜き浮世に隔りて
美しかりし桃源を
又かきまはす惡魔の手
今は是れ迄いざや友
立てや眞理を楯にして
自由の犧牲とならばやと
擧國の健兒劍により
世界を敵となせし時
龍車に向ふ蟷螂と
冷罵氷より冷かに
世はその暴を笑ひしが
嗚呼東洋の東端に
名もなき我が致したる
胸より出でし一滴の
涙を何と君は見し。
嗚呼行け君よ勇ましく
眞理のために死せよかし
自由此世に亡びなば
自由と共に我黨は
豆より小さき此星を
去つて宇宙に歸るべし
東より出で西に入り
我も見君も望むなる
日と月星のある限り
我君に遇ふ心地せん

君亦我に教へよや。

十月廿六日。年々歳々秋に對して余が悲痛を增したるは事實なり。去年の如きは余獨り步する時必ず沈思と涙ありき。余は稻の實りて黃となれるを見ざるにあらず、林檎の熟して紅となれるを見ざるにあらず、而かも落葉の簌々たる聲と商聲の淅瀝たる音とは甚だ强く余の心を刺戟したりしなり。余は自ら此の如くして年々愁を增さば終に愁に堪へざるの時來らん事を恐れたる時さへありき。而かも神は讃むべきかな。本年の余は去年の如く悲しまざるなり。余には秋の景に接して尙希望の心中に起るものあり。余は落葉の簌々たる聲、商聲の淅瀝たる音を聞きて悲哀の念を起さゞるにあらず、小蟲の生命漸く衰へ野花の夕に枯れんとするを見て憐憫の情を起さざるにあらず。而かも余は之れが天然自然の法則にして萬物が腐敗し去る事なしに、新進の生氣を得る能はざるを知り得て、往者を悲しむの心は來者を迎ふるの情によりて打ち消さるゝなり。先づ萬物に破壞來りて後建設は起らん。枯れて地に落ち、地に落ちて萎みつゝある桐一葉は實は萎むにあらずして、新たに生氣の原因をなしつゝあるものなり。

嗚呼人も亦此の如し。余の腐敗し來れる生命は先づ破壞せられざる可からず。全然破壞せられざる可からず。然らざれば永遠なる生命は我に來らざるなり。我は去年も一昨年も秋に對し、我が心志も亦かく破壞せらるゝを思うて無限の感慨なき能はざりき。而かも余は神の偉大なる恩惠により希望を有するを得せしめられて、悲哀は胸より離れんとしつゝあり。我は涙の人より實行の人とならざる可からず。消極の點より積極の點に進まざる可からず。かくて秋は我に最も樂しき收穫の時なり。

我天地の革命を見て豈心に潔しとせざらんや。

我神に依りて人の子が行く可き方向を忘れ、或は自暴自棄に陥り、或は落膽悲哀に傾き、益々人生の行路に遠ざからんとするを見る每に、無限の同情と憐憫の情を喚起するなり。嗚呼神よ、彼等を許し給へ。彼等は行く可き行路を知らざるものなり。我は、彼等の嘗て我が經たる徑路をたどり出づるを見て、いかにもして彼等を助けざる可からずとの責任を感ずる事

益々大なり。我は神の前に殆ど無に近き小なるものなり。されども我等さへ、神の道を宣ぶるに當り必要なるものなる事を心の中に感ずる毎に、我の心は感謝と涙に破れんとするなり。我の上に臨み給ふ神、願くば益々此の弱き者の上に奬勵と慰藉を給ひ我が高き道を傳ふるに於てより適當のものとなる如くなさしめ給はん事を。

十一月二日。夙朝目覺めて例の如く裏庭に出で顔を洗はんとして立つて回顧し、我は云ふ可からざる一種爽淸の氣に打たれぬ。

昨夜寒風と白雪とを齎したる怪雲は、遠く北方に退き去りて、地平線近き一體の空に色幕を張れるが如くなり、蒼穹は白雪のために拂拭せられ澄みて水の滴るが如く、朝暉漸く登りて半天の淡紅彩るに似たり。而して西方に連坐せる藻岩、手稻の諸山は、山頂忽ち白變して一層の威容を加へ來りぬ。而して沁々として身に逼るの氣は冷爽肉を透して骨に徹せんとす。あゝ壯快なる偉景。我は此の如き偉景に接し得て殆ど恩惠ある天父に謝する所を知らざるなり。

今朝我の家にあるや、内田氏の令孃十四歳なるあり。床上に起き直りて頭を夜着に埋めつゝ祈禱をなせるを見て余は何とも云へぬ可憐の念に打たれ、その純潔なる胸より出づる祈禱が縱令如何なる事にせよ、神は必ず微笑を以て受け入れ給ふべしと思ひ、眞に赤兒の如くなりて道を受くるにあらざれば天國を見る事を得じと云はれし主の大訓の今更に思ひ出でられて、余は彼女によりて痛く潔められたるを覺えぬ。嗚呼世に人間にして淸きものありとせば偉人にあらず、淸僧にあらず、隱者にあらず、正道に固執せる義人の熱涙と可憐無邪氣なる少女の微笑なるかな。余は前者に於て人間の最も淸きを見、後者に於て天人の面影に接するの思ひあり。鳩の如く優しき心、花の如く麗はしき情、嗚呼美しき哉。社會の腐敗を思ひ、余の心情の下劣なるを思ひ、世の中の暗黒に見ゆる時、我は情慾より超越せる飾りなき小兒に接して、强き新しき生命を與へられたる如く感ぜずんばあらず。

我は先づ少女によりて慰められ、天然によりて警められ、光榮多き此日を心より祝し勇ましき心を以て業に就きたり。

十一月三日。

海（石狩に遊びて）

暗黒（やみ）をば破り夜をば拂ひて　光を齎す濱の白波
東明（しのゝめ）遠き渾沌の世を　覺めよと呼ぶ浪の聲々
秋たけなはに枯草離々たる　砂に坐りて我眺むれば
明暗黒白今か爭ふ。

胸のしがらみ遂に超え來て　眼にあふれし義士の涙の
それにも似かよふ秋の高潮　見る見る岸をば浸し狹ばめて
恐し富士をも水底にせん　勢天使も當り難きや
動と不動の鋭き戰。

嗚呼明暗と動と不動と　凡てを造りし「彼」の御前に
我の爲し得る唯一事は　萬を捧げて腕と腦とに
「彼」の名により如何なる時も　聖き汗をば搾（しぼ）るにありな
我友海よ我を勵ませ。

十一月八日。

菊

疑惑の谷間の暗さに迷ひ　悲哀の嵐に袖をぬらして
ひたすら糧（かて）をば戀ひし時にも　疲れてなえたる我の心の

深き底ひに光潛みき。

木枯吹きて世は枯れがれの　　秋の荒野のいたくも荒れし
おどろの下に咲きぬる野菊　　不滅の光榮を來ん春にまで
傳へん光のあはれゆかしや。

十一月十二日。此日我級栗山に修學旅行をなしぬ。歸る頃朝來の霏雪益ゝ加はり降り趨日亦慘憺として西に傾きぬ。汽車の發して行くや、擧級の學生大聲疾呼して唱歌し高吟し、喧囂耳を聾せんとす。而して我獨り胸中何者かの蟠れるを覺えて、之れに和する能はず、靜かに客車の一隅に退き窓に面して暮れ行く天地の色に恍惚たりき。深山無人の境森閑として鳥語の外微音の耳に來るなき處、沈々として下り行く落日に見る寂寞の色も亦甚だ淋しきものなるべしと雖も、孤村磯戸蒼然として暮色に裹まるゝの光景と何れぞ。我は多く徑庭あるを見ざらんとするなり。

車窓より見れば一望の森林又平蕪、空しく白雪の蔽被する所となり其處彼處には點々として巣の如き茅屋の立てるを見る。あはれ彼處の中にも良心を有せる萬物の靈長と稱せらるゝ人類は住めるか。

暮色は次第に逼り來り、怪雲に現はれたる紫紅の色退き去りて今は黑魔の陸梁するものゝ如くなりぬ。而して樹木は黑く雪は淡藍の色をなし炊煙一縷又三縷萬象は今全く……（以下六頁落丁）

第三巻

一九〇〇年（明治三十三年）〔承前〕

How soon hath Time, the subtle thief of youth.
Stolen on his wing my three and twentieth year!
My hasting days fly on with full career,
But my late spring no bud or blossom shew'th.
Perhaps my semblance might deceive the truth,
That I to manhood am arrived so near,
And inward ripeness doth much less appear,
That some more timely-happy spirits indu'th,
Yet be it less or more, or soon or slow,
It shall be still in strictest measure even
To that same lot, however mean or high,
Toward which Time leads me, and the will of Heaven.
All is, if I have grace to use it so,
As ever in my great Task-master's eye.

(Milton's poem, on his being arrived to the age of twenty-three.)

神のもとめたまふ祭物はくだけたる靈魂なり

神よなんぢは碎けたる悔いし心を藐めたまふまじ。

十二月九日。（教會を出れば十八夜の月當に昇りぬ）

雪積む　街は　既に更けぬ
北斗の　光　寒くさえて
地は今眠りに　入らんとするを
守るか遠き　森をこえて
靜かに出でし　月の影

嗚呼月影　舊き友よ
汝が淸き色　澄める光の
くちづけする　地球の上
滿つる汚れに　面をむけずや、泣かざるや。

嗚呼月影　舊き友よ
あかつきがたに　地をば離れ
再び天に　歸らんとき
我に代り　神の御前に、告げて云へ

「地には今　　　嗚呼地には今
偽善滿てり
不義滿てり
かなしきは　　我が心なり
罪多き　　我人の子
信弱くして　　偽善と不義に
戰ひ勝つべき　由を知らず
君を仰ぐ時　　恥かしさ滿ち
首垂れ　　涙ながる
唯頼む　天の父の　限りなき助け
萬軍の主ヱホバよ
我の此弱き心をくだき
此弱き心をくだきて
これにより　かたくなゝる地に
永しへの　光を　たまへ
願くは　命を　たまへ」と
地は今眠りに　入らんとするを

一九〇〇年

守るか遠き　森を越えて
　静かに　出でし
　　月の影
かんばせ　尊しや
したはしの　面はや
あはれ　汝れ　宵毎に
　來り　照せ
地の汚れ　我は語らん
夜をこめて　高き光に
汝は教へよ　天に存す
　かしこし　父の御詔を。

十二月三十日。此日定山溪に遊ぶ。朝三時半河內、河野の二氏と共に朔風と飛雪とを冒して發足し、十一時定山溪に着す。風光例によりて崇高、余が精神上に於ける種々の經驗は此に養はれし事多きが故に此地に來り見て、實に一種の感慨を牽かざる能はざるなり。午後三時森本、木村、石澤、及び瀧、橇を以て來り會す。

十二月三十一日。十九世紀最後の日は拭ふが如き晴空に昇り、山色水聲共に一段の風意を副へぬ。神は罪惡多かりし十九世紀をも其去るに臨みては之れを寬恕し、永遠に之れを拉し去るものゝ如し。余は余が生れて成育したる十九世紀に別るゝに遇うて、余を愛育したる乳母に別るゝの感に堪へざるなり。早朝入浴して身體を溫め、直ちに河邊に下り河心に突出して勢躍獅の如き巖頭に跪坐して、滔々として流れ去る流水を望んで默考する事半頃に及びぬ。

偉大なるは天地なり。上は參宿の運行、北斗の連鎖より下は地上の草木山川に至るまで、大は蕩然として涯なき天帷の碧宵

より小は滴水に微動する細菌の類に至るまで、偉大なる神の手を示さゞるものは何れにあるぞ。余は宇宙に俯仰して唯驚嘆と畏懼との外に何者もあるなきなり。

「もろ〳〵の天は神の榮光を表はし、蒼穹は其手の業を示す。此　ことばをかの日に傳へ、此夜知識をかの夜に洩る。語らず言はず、其聲聞えざるに其響は全地にあまねく、其ことばは地のはてにまで及ぶ。」

「わが靈魂よ、エホバをほめまつれ。わが神エホバよ、爾は至大にして尊貴と稜威とを衣たまへり。爾光を衣の如くにまとひ、天を幕の如くにはり、水の中に己れの殿の棟梁をおき、雲を己れの車となし、風の翼にのりあるき、風を使者となし、焔のいづる火を僕となしたまふ。衣にておほふ如く大水にて地をおほひ給へり。水たゝへて山の上をこゆ。爾叱咤すれば水退き、爾いかづちの聲を放てば水忽ち去りぬ。或は山に登り、或は谷に下りて爾の定め給へる處にゆけり。爾界を立てゝ之れを越えしめず、再び地をおほふことなからしむ。エホバは泉を谷に湧き出し給ふ。その流れは山の間に走る。かくて野の諸の獸に呑ましむ。…………

爾手を開き給へば彼等嘉物にあきたりぬ。爾面をおほひ給へば彼等はあわてふためく。爾彼等の氣息をとりたまへば彼等は死にて塵にかへる。爾靈を出し給へば百物皆造らる。爾地の面を新たにし給ふ。」

紀元前に在りて牧羊詩人は既に余の思ひ及ばざる自然の高崇と偉大とを歌ひぬ。余復何を以てか加ふべき。惡魔 Mephistopheles さへも

Von Sonn' und Welten weisz ich nichts zu sagen,

と云ひぬ。然り如何なる惡魔も、天地の偉大にして完全なるには驚嘆すべし。宇宙は實に完全の表現なり。然り神の「生」ある外衣なり。神は自然によりて其 perfectness を示しつゝあるものゝ如し。

此完全なる世界に於て唯一の不完全なるものあり。人類なり。天地に一言を插(さしはさ)む能はざりし Mephistopheles は人類に對して無數の弱處と缺點を發見して曰く、

Ich sehe nur, wie sich die Menschen plagen,
Der kleine Gott der Welt bleibt stets von gleichem Schlag,
Und ist so wunderlich als wie am ersten Tag.
Ein wenig besser würd' er leben,
Hätt'st du ihm nicht den Schein des Himmelslichts gegeben;
Er nennt's Vernunft und braucht's allein,
Nur thierischer als jedes Thier zu sein.
Er scheint mir, mit Verlaub von Euer Gnaden,
Wie eine der langbeinigen Zikaden,
Die immer fliegt und fliegend springt
Und gleich im Gras ihr altes Liedchen singt;
Und läg' er nur noch immer in dem Grase!
In jedem Quark begräbt er seine Nase.

然り人類の始祖アダム、エバの生れしより此に幾十萬年、人類は Der kleine Gott der Welt として神と等しき身體を禀け特殊なる靈魂を受けながら、始祖の墮落と共に此貴重なる天賜を濫用し、惡用し、人は自己の欲する所に從ひて方向なき進路を取りたるが故に、偶偉大の事業、正義なる善事の如きも畢竟するに管上の煙草の如く、多少の白煙と多少の火光の外には殘す所僅かに一抹の死灰あるのみ。歴史ありて以來人類がなしたる勞作と勤勉とは著しき進歩をなすべくして、然かも十九世紀末葉の今日、人類は其表面に於て華麗なる建築と、美妙なる外衣と、滋養ある濃味とを得たる外宇宙の理想とする所を探るに於て依然たる太古の賤民なり。世紀の去り世紀の來る毎に、純白雪の如き其表に汚點黑斑を殘すものは實に人類にあ

らずや。嗚呼義人なし。一人もある事なし。誰か人類の深遠なる墮落の爲めに胸を打つて哀哭の涙を垂れざるものぞ。人類は此地球を最も多く惡魔の毒手の下に致したりと云はるゝとも吾人は實に之れを辯解する語なきなり。悲慘の極なる現象は人類の歷史なり。其各頁には血と涙と、暴戾と驕慢と、妄動と固陋と其他あらゆる惡德は點々として見出さるゝなり。罪惡の何者たるを知らず、日常の必要に應じて食を漁り寢を取る野獸山禽、春來れば芽を催し秋去れば葉を落し四節によりて其容を改めつゝ、怡然として老い行く草木蘚苔、動かざる山、流るゝ河、何ぞ其愉々然たる。余は是等の現象を見、人類が其靈妙なる soul の用を全ふするに堪へずして墮落に墮落を重ぬるを觀ては、實にルーソーと共に自然に歸れと叫ばんとするなり。バンヤンは嘗て罪惡を知らざる家畜の境遇を羨みしと云へり。余亦此歎なくんばあらず。

然かも神は讃むべきかな。希望は尙此中に見出さるゝなり。神より享樂したる人類の特殊なる靈魂は、到底進步なき太古の野蠻に安んずる能はざるなり。人類は到底自覺なしに惡罪を犯す事能はざるなり。此に於て余は消極的方針を取るの全く無益なるを知る。情を滅却したる禪宗僧侶は此世に於ける無用の長物なり。知識なきもの亦多く貢獻する能はず。意志なきもの亦用をなす少し、人類は其有する特質を何處かに發揮せんとして未だ其宜しき所を知らず、濫りに之れを其慾情に從つて使用するが故に、罪惡は罪惡を生むに至れるものなり。

然らば人が人類の爲めに盡すべき偉大なる而して正當なる天職は果して何なるぞ。唯人類に其向ふべき方向を示すにあり。人類が受造者にして Creator ならざるを自覺せしむるにあり。歷史をして區々の步調を取らしめず齊一なる進步の下に人類の天職を果さしむるにあり。神なしに人類の歷史は全然無意味なり。人類が眞理なる一點に向うて其精力を盡瘁すとせば地球の進化は如何に偉大なるべきぞ。米國に於て三四年間全く飲酒を廢さば以て其道路を大理石にて鋪くことを得べしと云ふにあらずや。嗚呼余は明かに余の進むべき道の眞理なるを知る。余は如何なる障碍に遇ふも二十世紀を迎へんとして想起したる此觀想を飜さゞるべし。神よ、願くは此卑僕の爲めに一顧を與へ給へ。此弱き心と身とを通じて此統一なき地球の上に順序と平和とを齎す事を得せしめ給へ。

一九〇〇年

かくて人類が其罪悪に浸潤しつゝありし Soul を神によりて救出されて、完全なる天地に於ける完全なる一部分となる事を得、聲を放ちてダビテと共に、

「願くはヱホバの榮光とこしへにあらん事を、ヱホバそのみわざを喜び給はん事を。ヱホバ地を見給へば地震ひ、山に觸れ給へば山煙を出す。生るかぎりはヱホバに向ひてうたひ我ながらふるほどはわが神をほめうたはん。ヱホバを思ふわが思念は樂しみ深からん。我ヱホバによりて喜ぶべし。罪人は地より絶滅され、惡しき者は復あらざるべし。わが靈魂よ、ヱホバを讃めまつれ、ヱホバを讃め稱へよ。」

と歌ふを得るの時に至りて余は初めて安んぜざるべからず。其時に至るまでわが靈魂よ、眠る事勿れ、衰ふる事勿れ。常に梁木を振ひ除きて神を見守れ。嗚呼余のものにして余のものならざる汝靈魂よ、覺めよ、起てよ、而して人類進步の爲めに苦闘せよ。

余が河邊に得たる思想は實に此の如かりき。永遠より永遠に流れて休む事なき豐平河源の湍流の、奔湍となりて白沫を飛ばす壯觀に恍惚たる事久しくして、殆ど寒威を忘れて家に歸れば、友は相集りて正に朝餉の用意に忙はしかりき。

一九〇一年（明治三十四年）

三月三日。 朝來天全く晴れ赳日輝々として地を射る。雪は碎銀を鋪きたる如くなれども春意何處かに動きて心地よき事云はん方なかりし。此夜教會に到りて田島氏の說教を聽きて歸る。時既に八時を過ぎたりしなるべし。蒼空は依然として纎雲を絕ち月一輪耿として中天に懸り、天地肅然として眠に入れるが如き間、風全く死に盡して我が靴の雪に入るの聲を聞くのみ。雪積みて風死せる時靜寂なり。風死して日暮れたる時殊に靜寂なり。日暮れて一痕の月地を照す時は、靜寂更らに極ま

つて千尋の海底にあるの想あるなり。

月無くして星砂の如き夜、獨り地を伏視して暗中に逍遙し瞬く如き幽かなる星光を胸に導き入れて、之れに聞くに天外の様と時の無限とを以てす。我洵に忘るゝ能はざるの快なきにあらず。

遮莫(さもあらばあれ)月明三千里、積雪と光相映發して白々と相打ち潔々と相觸れ俯仰共に淸淨崇高なる景物の中に在りて、獨り自ら心魂を抉出(えぐりいだ)し、之れを天華交り飛ぶとも見ゆる泌々たる夜氣に洗ひ去る時の快に至りては、嗚呼、我之れを忘るゝ能はず。忘るゝ能はず。靈魂の不滅なるが如く我の記憶亦永遠なるべし。

嗚呼月よ月よ、何等深長不測の意義を汝は有するぞ。地心の熱滅却し今は唯冷々たる土塊よりなれる汝が、我が眞面目なる衷心より熱き熱き涙を喚起するは何故ぞや。衞星の一として地球を周回しつゝ太陽系の極めて些少なる空間を充せる汝が、我には此地球――我を生み我を育てやがては我を葬らんとする――に勝りて慕はしきは何の故ぞや。汝は古來よりの雄辯家に勝り、文章家に勝り、偉人に勝り、美人に勝りて我に不爛(ふらん)の長舌を振ひ、我に屠龍の筆路を擅にし、偉を現はし、美を示すは何故ぞや。太陽の草木を育し、禽獸を蕃し、熱を供し、光を致すに反し、汝殆どなす事なくして却て我をして眷々の情を汝に捧げしむるは何故ぞや。嗚呼我知らず、汝亦知らず、唯神のみ知り給ふ。

西行は花の下にて我死なんと云ひにき。月よ、實に慕はしき月よ、如何なる場にか、何時の時にか死神我が胸を封じ我が眼を閉ぢしむる事あるべし。此時我れ病床を南面せる窓下に移し、滿身汝の淡く淸き光に浴し、汝を我が胸に抱き、眼に刻み、吻に接して永く逝かん事を希ふ。陋屋に居ると、知人なきと我に於て何かあらん。月よ、汝は必ずや我が此衷情を知らん。

The stars are forth, the moon above the tops
Of the snow-shining in mountains.—Beautiful!
I linger yet with Nature, for the night

Hath been to me a more familiar face
Than that of man; and in her starry shade
Of dim and solitary loveliness.
I learned the language of another world.

三月六日。此夜増田より手紙を領す。彼は余の需に應じ、長く彼の胸中を支配しつゝありし其失戀の狀を語れるなり。而して余は、彼の滿腔愛慕せし其人が愛子なりしを知り得て、殆ど絶倒せん計りの驚愕に打たれぬ。嗚呼此如き事ありしか。余は盲なりき、盲の極にてありき。

彼が東京を辭し、余にさへ一言の之れに及ぶなくして京都に行きたるも之れが爲めなりし。尋て彼が東京に來りてより號泣悲痛の書を寄せしも之れが爲めなりし。前夏余の歸南するや彼は初めて失戀の人なるを語れり。而かも其誰を戀うて戀に破れしかを知らざりき。而して今其人を知りぬ。

愛子の彼處に嫁してより一時悲觀の極に達し痛く父母を配慮せしめしを知り、余は彼女に問ふに其何の故なるを以てせしに「餘りに人の情の厚きに過ぎて」とのみ答へ越しぬ、其時余は其眞意を察する能はざりしも、此時恰も彼女が彼の胸中を知りしの時にてありけるなり。而して余遂に之れに思ひ及ばざりき。嗚呼薄命の彼と彼女二人は、余が不注意の爲めの故に生涯醫す可からざるの悲痛を負ひて此世を送らんとするなり。二人の心情を思ひ來りて余は實に云ふ能はざるの心地するなり。余は彼の友にあらずして彼の惡魔となりぬ。彼女の兄にあらずして彼女の敵となりぬ余がかばかり傾倒せる彼を傷け、かばかり愛親したる彼女を毀ちたる余の罪は何の償ひによりて滿足せらるべきぞ。

遮莫余も彼等に對して多少の恨なきに非ず。彼等は何故に余に其衷情を語り呉れざりしぞ。友として妹として我に其心中を語るに於て何の憚る所ぞ。余は遂に彼等の希望を滿足するに足らざるものとなされしか。余は不似なりと雖も、若し之れを前知したらんには、必ずや彼等の希望を滿足するに於て成功せずんば止まざりしものを。さりながら之れも今更繰言なり。

免まれ余は現在に於て大罪を犯せしものなり。青春多望なる少年二人の胸を氷らしめぬ。恐懼すべき余の過失は遂に拂拭し去る事能はざるなり。

此夜余は苦痛の餘、寒風を犯して豐平河畔に到り雪上に跪きて神の許容を乞ふべく祈禱しぬ。されど余が心は全く封せられ一の光明をも望む能はず、胸間痛く窄めらるゝの心地して戰慄身の措く所なきを覺えぬ。余の亂れ果てたる心は未だ神の御心のある處を發見する能はず、遣方なく辛き胸を抱きて歸り來り、再び玆に机上に在れども心は混亂を極めつゝあり。神よ願くは此助けなき心、孤獨なる心、恐懼せる心の上に一片の光明を與へ給へ。

三月十八日。嵐吹き落ちて戸障子皆鳴る。恐ろしき天地の激怒なり。此夕我獨り机上に默坐して端なくも惡神の虜となりぬ。祈り、思ひ、聖書を讀み、風に耳を傾け、又祈り思へば潸然として涙下り止まざるなり。

一言にして云へば我は未だ全く神に我の持てる總てを捧ぐる能はざるなり。而して人は我を一個の基督信者となし、一個の善人なりとす。是れ我が憂ひなり、悲しみなり。

嗚呼我は我が憂を神に委ねて天意に任ずる事能はざるなり。彼と、彼女との悲歎すべき事件を知りしより我が胸は思ひ之れに到りて片時も安き事能はざるなり。而して我は眞正なる同情を彼等に致す能はず、少情の涙に咽び然かも神の前に我が胸中の煩悶を陳して、其無限なる慰藉と助力とを得る能はざるなり。

神は此如く不謙遜なるものゝ祈に耳を傾け給ふまじ。加之我は總ての點に於て我が有する僅少の財に據りて神より獨立せんとしつゝあり。我は神の前にありながら眞に無上の愛慕と謙遜を以て其前にある能はざるなり。我が經來りたる過去は小河と小陵のみ。前途に山あり海あり、我の躋り難く渡り難き所にあらざるやを思うては、我唯佇立顧望して失望の聲を發せんとするなり。嗚呼基督の跡に從はん事の如何に難い哉。我には勇氣なし、敬虔の情なし、從順の念なし。眞に然かなり。されども其眞に然かなるを如何すべき。

一事の善なるものなくして日々を消し百事の不善をなして夜々を送る。災なる哉我が魂や。

嵐は尙益々暴んとしつゝあり。朔風怒號して雪屋牕に逼る。天は我の爲に怒るには非ざるか。眞に恐懼に堪へざるなり。

神は我の爲めに此大暴風を下して我の不從順を責め給ふならば、果して左ならば、その餘りに厚き眷顧の爲めに身の措く處なき迄に恐ろしきなり。神よ願くは少しく爾の要求を緩め給へ。永く罪の撻の下に弱り果てたる痛める我が靈魂は、爾の强き生命と光明とに浴するに堪へざるなり。嗚呼罪人たる我、罪惡を感じて悉く改め得ざる我の心苦しさよ。

三月二十三日。下文は我東京に在りし一月十五日頃の夜、枕に通ひ來りし夢の物語なり。破り捨てんも餘りに口惜ければ。

何處なりとも知らず何と云ふ名なるかそれも知らず、山と海との精粹を萃め盡したらんとまで驚かるゝ海濱の一高樓に我は入りぬ。濱邊には拳大の白礫銀を布きたる如く列りて其果て遠く晴霞の中に入り、藍の如き海光横さまに動き來り波となりて汀際に碎くれば、礫の白水を染むるか波の力石を飛ばすか、銀馬の如きもの、白蛇の如きもの、皓玉素珠交り躍り淙々の音と共に復收り盡す美しさに飛沫とは名づけ難き計りなり。眼を遠く海と空との間に馳すれば、渾然一碧殆ど其涯を知る可からず。嗚呼水天髣髴たる彼處こそ地上の萬物を永遠に繫ぐ第一門に非ざるを知らんや。後顧せよ、山あり巍然として立ち驀直海に逼りて麓なきが如く、松や竹や、エルムや、樫や、桂や、楠や、白き花咲く梢、赤き花、鱗れなる枝相錯綜して一山の丹青正さに天工の畫筆を振ひ虛空に向つて力を極めて抹し去れる跡の如し。我の嘗て蹈破せる山と海とに就て肯たるものを索むるに首蝦夷の最嶮漣文華の景物稍ゝ當れりと雖も更に遠く及ばず。樓の後は斯の如き山、樓の前は斯の如き海、我建築の美を傾け盡したる高樓の欄に倚り此天地の大文章に接し恍惚として我を忘れ、物を忘れ、忘るゝを忘れたりし耳朶に霹然たる嬌音媚語の迸り來れるを聽きぬ。聳然我に歸りて、聲の來る所を見れば、美姬數人盛裝して一人の嬰兒を擁せるなり。

花を以て美女を譬へんは古し。されども地上の萬象の中、花と美女とのみが相應はしきものにあらずや。薔薇の如きあり、梅の如きあり、牡丹の如きあり、百合の花の如きあり、ラファエルが其精細の筆の匂ひ優しく天授の妙想を逞うして畫きなしたる天使の國あらばや我は唯そを指して此如きもの稍ゝ近しと云はなん。彼女等の白く形よくなよやかなる腕より腕に移され揶揄せらるゝ儘に莞爾として微笑む雪白の衣着たる嬰兒は、實に玉の中の玉美の中の美、例へば赤き珊瑚の枝さし交した

る上に金剛石一個燦然として光を放てるが如しや、否寧ろ美にして淸し。春の夕暮、長閑に靜かなる時、棚引く紫雲紅霞の中に靄然として坐せる月神とも云ふべくや。實にや湖畔詩人の絶調我を欺かず、嬰兒の兩輪に光あり命あり。天國にあるべしと思ひ慕はるゝ凡ての光榮と希望とは其鈴の如き眼に、其蕾の如き口に、其雪の如き頰に書かれたり。美姬等は思ひ入りたる接吻に嬰兒より天國の甘味を吸ひ取らんとやすらん。嗚呼美と麗と淸と淨と凡ては宿りて風物と高樓と美姬とにあり。而して風物と高樓と美姬とにある美と麗と淸と淨とは畵龍の睛の如く小なる嬰兒の全身に充ち溢るゝ。

嬌音媚笑は尙小雨の如くさゝやかにやがて又潮の如くどよめき渡る。俄然として大變は起りぬ。美姬等の前に醜汚と苦痛絶えじと見ゆる乞食一人顯はれぬ。我は山海美姬嬰兒の美を忘れ得べし。されど此乞食の醜を如何にして忘らるべきぞ。頭髮疎らに生え鬚髯擅に伸び、一眼盲して一眼赤き事杏の如く、鼻斜めに折れ、口は爛れて黃ばみたる齒三四本殘れるが殊に物凄く、顏は靑く紫に膨れ上りて所々より血膿さへ流れ出で、眉間には深き皺疊まれて人を呪はんずる額がまち恐ろしく、布とは見えぬまでに汚れて破れたる短褐の蔭よりは癩疾に侵し盡されたる腕や膝やの肉、榴柘の如く皮を破れり。彼は鈍りたる聲して何事をか云ひぬ。されど聞き分け難し。嗚呼之れ何等の痛ましき contrast ぞ。生命の中に點ぜられたる死影、光明の間を封ぜんとする暗黑!

彼は強ひて聲を高め「其嬰兒我にも抱かせ給へ」と云ひつゝ眉を動かしぬ。彼は美姬等に好意を表せんとして笑ひたるなり。嗚呼惡魔の世界ならでかゝる汚惡なる笑あるか。ヨブが麻布を纏ひ灰を被りて路頭に坐せし其儘を樂園の中に導きたりとせば、若しくは又投寡の机下に犬と共に落ち散る食物を拾ひ食ひしラザロの天國に擧げられたる其瞬間を思ひ見なば、此一場の光景稍ゝ髣髴せらるべき。我は竦然として背の戰ふを覺えざりき。況んや美姬等をや。半月の眉雲に包まれ星の如き眼風に瞬き、互に目配しつゝ彼より退き距りつ。其面には一種輕侮の色動きぬ。一人は腹立たしげに乞食に向ひ「御身はかかる所に來るべき身にあらず、疾く去ね」と云ひぬ。一人は、猶莞爾として何事の起りしかも知らである嬰兒を抱き乞食を指し「あれは人にあらず乞食と云ふものぞ。見向かんも汚れ、顧みそ」と私語きぬ。乞食は手を額にして又もや眉を動かし

つ「聞き給へ、我には人の面責に恐ろし。親し易しと思うて近づく人も、近づきては其面に顰蹙の色あり。我の僅かに笑顏を忘れぬは唯々無心なる嬰兒のあればなり。あはれ君達笑顏をば快しとは見給はずや、さらば我にも願くは其嬰兒の笑顏一目見せ給へ。數多の人より笑顏を受け得るは君達なれども、嬰兒の笑顏より他は望む能はざる我なれば」と云ふ度に黄ばみたる物凄き齒現はれて濁みたる聲は破鈴の振れども音せぬ恨みや。

我は尙默して此一場の光景を瞻めつゝありき。何の思も胸には浮ぶ暇なくて、美姬等の耳には乞食の衷情は入らざりしか。其口々に漏るゝ語は「汚らはし、眼の障りなり」「醜さの我にやは移らぬ」「疾く去ねな、さらずば我等去ぬべし」などなりき。彼女等は遂に嬰兒を相擁して此處を去らんとしぬ。暗黑なる死影は魔氣の如く動き移りて彼女等を躡ひ其一人の裳を引きぬ。引かれたるものは戰慄しつゝ聲を擧げて飛び退きぬ。乞食の手には香床しく焚き籠められたる輕羅のみ打ち殘れるなり。されど乞食は猶其面を怒に代へざりき。彼は失望を打ち消さんと勉むるものゝ如く、强ひて手を擧げ眼を動かして彼女等に切願しぬ。哀請しぬ。嗚呼美姬の耳は聾したるか、眼は盲したるか。彼女等の無限の嘲笑を其眉間に湛へつゝ其嬰兒を他室に伴ひ行かんとするなり。

光明は暗黑となりき。

暗黑の中には唯ならぬ光明の窺ひ知らるゝなり。生命は死影となりき。

死影の中には優しくも生命の色漏るゝなり。

此光景を默過すべく我は餘りに情强し。余は彼女等に近づきて其手より嬰兒を我が肩に移しつ、乞食の前に步み寄りぬ。

光明を裹める暗黑、暗黑を包める光明、光明を裹める光明、之れ乞食と美姬と嬰兒となりき。

光明を裹める暗黑は光明を裹める光明を見ぬ。而して嬰兒の面には直ちに天國より齎されたる美はしき美はしき微笑ありき。乞食の眉は動き動き、幾度も動きぬ。乞食は我に向ひて再三其頭を垂れつ。云ひ盡す能はざる感謝の意は一滴淸純なる淚となりて其眼に宿りぬ。汚き其腐軀の中に此淸きものあるなり。

「御身は思ふに耶蘇(基督敎徒と云ふ意)なるべし。今の世の中に耶蘇ならで此親切はあらざるなり。」

嗚呼之れ何等の崇高なる謝辭ぞ。余は滿足せり、滿足せり。我は此時眞に基督の卑僕たるを感じ得て情殆ど迫りぬ。嬰兒を堅く我が胸に抱きつ。感激の涙は遂に溢れて潸然として下りぬ。

俄然として我が夢覺めたりき。嗚呼之れ夢なりしか。我は暗中に枕を探りて幾點の涙痕あるを知りたりき。

痴人か。痴人か。あはれ我は痴人なるか。遮莫賢者となりて夢なからんよりは、我は痴人となりて夢を語るの快きを思はずんばあらざるなり。

四月十三日。此朝痛く晴れて和煦たる春氣天と地とに遍ねく博物場の後庭に到り、樹下萠草の離々たるものに坐して景物に對するに、凡ての物私語せざるはなし。春は實に私語の時なり。

鳥あり其蝶の如き翅を動かし、飛び來りて樹梢に留り喈々として嫩芽と私語きつゝあり。早く芽を開き葉を出し、其生々たる綠蔭を夏の來らざる前に造りて、我等の幼雛をして裕かに生育し、無窮なる神の恩惠を讃美せしめよと云ひつゝあるにあらざるか。

風あり少女の氣息の如く輕く暖き氣を送りて春草に私語きつゝあり。早く天鵞絨の如き葉と星の如き花とを開き、香はしき香を起し、味よき果を結び、永く冬の嚴しさに蟄居しつゝありし無數の蟲類にソロモンの榮華の極だに及ばざる宮殿を供して、彼等をして神の無限なる光榮を歌はしめよと云ひつゝあるにあらざるか。

水あり潺湲として玉を振ふが如き優しき聲を以て汀を洗ひ去りつゝ私語けり。早く汝の草を伸さしめ、可憐なる影を我に下して、氷の中に閉ぢられて好餌を得る能はざりし魚類を其下に憩はしめ、全能の神は地の上と共に水の中にも其天國の消息を置き給ふ事を明かにせしめよと云ひつゝあるにあらざるや。

我が見渡す限りの地は、今其白雪の衣を脱し去り蒼々たる天被に對して無限の私語を捧げつゝあり。汝の春光をより多く地上に下し、地上に在りて冬の間雪や嵐や霜の爲めに永く蟄伏し忍耐を以て今日迄其生を保ち來りし總ての上に、光明と希

望の甘露を雨降らして彼等をして其眼を更らに高く天上に向くるを得せしめよと云ひつゝあるにあらざるか。

嗚呼我も私語かなん。我が胸の中に幽かなれども云ふ可からざる淸き高き光明と生命とあり。神よ、遂には此天と地とに永久の春を齎らし給ふべき神よ、願くは此卑僕の心の中に、爾の炎を下し、我が心と身と全く之れに燒き盡され、我之に死して再び爾によりて生れ爾の御心に叶ひたる器となり、爾此卑僕によりて迷へる羊、失はれたる錢を其御手の中に收め給はん事を。

四月二十一日。(日曜日)。快晴。(少し風ありたれども夕刻より全く霽れ弦月弧の如く天の一角に輝きたり)。

朝教會に出席し日曜學校を敎ふ。實に可憐の極なる無垢なる少女等、若し此世の中より小兒を取り去りたりとせば吾人は必ずや數段卑しき理想と不良なる品性とを有する動物なりしなるべし。

午後より兄、井街、末光、工藤、宮部謙、良チヤン、(姓を知らず)と共に圓山に遊ぶ。久し振りなりき。四圍の山々の木には嫩芽將さに破れんとし、勃々たる生氣は全山を裹んで高く冲天を衝かんず勢あり。去年なりせば之れを見て我が心に寂寥の念と、我が眼に失望の涙ありけんものを。神はされど今年に於て我に厚く眷顧し給へり。我此景に接して希望を彼等と共に分ち喜ぶ事を得るなり。

池に近く來れる時、沈鬱に沈める足助君に遇ひぬ。神よ、願くは彼の上に其無限の恩惠を垂れ給ひ、彼の苦しめる心が光明に向ふ事を得せしめ給へ。されど之れ御心の儘なり。彼若し苦しみて益あらば彼に一層の苦楚を授け給へ。願くは我をして一層の同情を彼に捧ぐる事を得せしめ給へ。

池邊に坐して犬と戯れ又讃美歌を歌ふ。我が此頃特愛のものは第百六十番。第二百七番。第百七十二番等なり。

我は此半日の散策に於て多大の愉快を感ぜり、小兒が母の乳房によりて眠るが如き。

五時頃家に歸る。とく疲勞せり。夕食後再び教會に行く。風死して星斗闌干、寧ろ秋暮の如し。

教會に到りて不圖岡山孤兒院の報告を見る、中に各地の小學校男女生徒が其可憐なる手紙に副へて五錢十錢を義捐せるも

のあり。涙逼りて卒讀に堪へず。此如きを見て神を信ぜざるものは愚の極なるものなり。
此夜出島氏の祈禱には力ありき。彼は此朝人の餘りに不潔なるに感激せし所ありしが故ならんか。
此夜は二十五年記念祭の歌を作らざる可からざるが故に我は恐くは又余宵を徹せざる可からざらん。
されど何とも知れず心『用無余集』に向ひて、彼の生き殘れる「半身」が書きたる傳を讀む。涙落ちて休む能はず、思はず聲を飲んで泣かんとせり。嗚呼偉大なる聖徒永く逝きぬ。我の持操彼に及ばざるを泣き、我の苦心彼に似たる所あるに泣き、我は讀みては祈り祈りては又讀みぬ。彼が壁に掲げたる

主耶蘇こゝにいまし
すべての事をきゝ
すべての行を見
すべてのおもひを
わきまへたまふ。

"Here is the patience and faith of the Saints." なる motto は亦我が胸に刻むべき motto とせん。
嗚呼逝きにし聖徒よ、寵まれたる君の靈魂は今や遠く天父の御前にあるべしと雖も、君の同情に富める眼は必ずや今も地上に於て肉と奮鬪しつゝある「碎けたる靈魂」の上に注ぎつゝあらん。逝きにし君の爲めに心よりの涙を垂るゝものゝ上に注ぎつゝあらん。見らるゝ如く我には君の如き堅信もなく、勇氣もなく、忍耐もなく、愛の心もなし。されど神は埃塵の如き我にさへ神を求めんとするの something を授け給ひぬ。基督の生涯に則らん事は我等の處世の第一要事にして、基督の生涯に則り得て甚だ近かりしは君の生涯なりき。我如何にして追慕の念なくして止まるべきぞ。
我も幸にして涙の中にも實行の生涯を送り、其實行の motive を堅く神に置かんとするの決心をなし得るに至り、朝夜の

祈禱に他者の上を祈り得るに至れり。我必ず君の跡を追はん。逝きにし聖徒よ、君の心は如何に多くを地上になさんとしたりしぞ。我固より君に比すべきにあらずと雖も、必ずや君をして微笑を頰邊に浮かしむるを勉めん。

神よ「なんぢの杖なんぢの笞我をなぐさむ」我をして涙の甘さを味はしめよ。我涙なき祈禱をなして遂に心中に平安を感ぜざるなり。

此夜貧民窟の事慇〻胸に浮び來りて殆ど決心せんとせるも今少し神に聞くべし。我は彼處に幾分の働きをなして或は彼等に平安を與へ得べからざるべきも、我は己れの心に必ずや多大の收穫を收め得べしと信ずるなり。

十一時半なり、筆を擱かん。神の今日我を惠み給ひて我が心高くなりしは、唯々感泣の外なし。我は此心を保つ事に勉めざる可からず。

四月二十二日。

米は南京おかずはあらめ何で絲目が出るものか。

製絲工女も人間でござる責めりや泣きます病みや寢ます。

無理を云はしやる工女だとても親も身うちも家もある。

私が子をもちや工女にや出さぬ工女さすよりや水仕がましよ。

今日も罰金昨日も科料私が未熟か帳場が無理か。

板になりたや帳場の板に成りて手紙の中見たや。

親が病氣ぢや御旦那樣よどうぞ外出ゆるして欲しや。

願上げます見番樣よどうぞ一夜の御なさけを。

今年やうれしや見番樣の御目にとまりて優等工女。

此血に滿ち涙に滿てる數番の俗謠は、信州諏訪に於ける製絲工女が口吟さむ所なりとぞ。詩人は汝の口を閉ぢよ、汝の筆

を折れよ。かくて此大詩才の悲歌に聞けよ。

五月七日。春の風痛く吹きて櫻花繽紛として散る。我が机上に在るの花は唯一枚の障子の爲めに散るべきが散らであり。されども机の一震一動の爲めに、其花瓣は折を得たるが如く書册の上に落ち來るなり。余は得堪へずなりて障子を開きて思ふ儘に風を通はしめたり。而して今は我が机上の花も、枝上のものと同じく狼藉として半ば散じ盡しぬ。嗚呼花よ、余の無情を許せ。一日も早く人の世を去りて土に歸り、天の降す玉の如き涙に朽ちて永遠に覺めざる眠に入らんとして翹望したる汝を一刻も長く机上に止めんとせしは我が誤りなりき。散れ散れ花よ、汝の友は枝上にありて思ふ儘に散りつゝあり。汝も亦思ふ儘に散れ。汝の譬ふ可からざる淸く潔き姿は地上に永く留まらんには餘りに尊し。世の人は汝を正しく解せんには俗に過ぎたり。汝の下にありて酒に飲まれ、暴語し、姦淫し、虚言しつゝあり。神が風を送り給うて汝を地上より取り去り賜ふぞ誠に宜なり。嗚呼、散れ散れ花よ。我が机上に在る汝も亦余の心の汚きに面を背けんとするよ。之れ宜なり。余汝を恨まじ。余は唯灰を被り砂を嘗めて、汝の永遠の友たるに相應はしからざる罪に泣かん。嗚呼散れ散れ、机上の花よ、されども汝は不運なるものなり。汝は天の下す春雨てふ限りなく美しき涙によりて朽つる代りに、余の眼に溢れ出づる譬へ難く汚れたる涙によりて朽ちざる可からず。嗚呼花も亦遇と不遇とあるか。

　されども花よ、汝は世の人が我の涙を卑むる如く爾は卑まざるべし。汝は余の涙の何處より出づるかを知らん。余が涙を以て祈り、涙を以てなさんとせし事も世の人は輕侮を以て迎へんとする時に、汝は余の涙の天の涙の如く淸からざる故を以て余を責めじ。花よ、余は確かに汝の一片の同情の聲を聞き得るなり。嗚呼嗚呼、汝の上に裕かなる永遠の祝福あれ。余の机上は今白點々たり。瓶上には花數少なくなりぬ。少時にして余は再び汝と相見る能はざるに至るべし。余の涙は流れ止まず。嗚呼何とて余はかくまでに女々しきぞ、自ら判別に苦しむは我が心なるかな。

五月十日。

ソロモンが　立てし　シオンの宮居の地も
此地の聖きに　若くべしや。
十戒をば　モーゼが受けし　シナイの山も
此地の聖きに　若くべしや。
來らんものは　履を脫げよ
此地聖ければなり。
去らんものは　面を伏せよ
此地聖ければなり。
日此上を回らん時　暫したゆたひ
月傾かんとして　尙此地を去りがてなる。
聖地　聖地　聖地とは何處ぞ
心の眼なき者は見得じ。
思ひのかたくなゝるものは侮らん
されども我に　聖き地とは
淸き小川のほとりにて
御神が守りて　咲かしめ給ふ
壺菫咲く五歩の草原。

五月十一日。"Eden and Gethsemane," Endeavors after the Christian life, by James Martineau) 畧す。

五月十二日。晴天なりしも風强かりき。

朝六時に起きて伊藤君と語り、談宗教の事に及びたり。余の眞の interest を以て語り得る會話は、宗教と文學なり。是れ余にとりては餘り好き徵候にあらず。余に一層堅實の精神生ぜば、宗教と文學とを語らざるに至るべし。社會的の種々なる現象に一層の注意を拂ふに至るべし。要するに余は未だ夢想の境遇を離れざるに似たり。時に頭熱し心熱すれば行衞もなき夢想の迷宮に彷ひ入るなり。

旣にして忽ち訪ひ來れる人あり。工藤君なり。君は昨日藻巖登山の時、採り來れりと云ふ白と紫の美しき花を、余に與へんが爲めに來れるなり。余は思はず絕叫して其花を受けたり。余は生來此如く美しき思想の發現を見る事多からざるなり。工藤君は一の木强漢なり。彼は、花によりて余に同情の賜とすると云ふが如きは思ひ及ばざりき。然かも總ての人の心の奧には云ふ可からざる美しき心の潛めるなり。嗚呼美しき人の心よ、余は屢〻人の心の表皮を見て幾度か憤慨と失望の淚を垂れたりき。然かもそは、眞正に云ふならば、余の心の未だ全く淸からざるを證するものなり。余の心中にも潛みてあるべき美しき心が全く發露する時あらば、余は又他人の心中にも此美しき心あるを認識し得べかりしものを。人は金錢を以て、絹綾を以て、諛言を以て、乾笑を以て他者の滿足を買はんとする時、一片の野花を摘み來りて余の孤情を慰めんとする人あるを思ひて、實に實に余の杯は感謝に溢るゝなり。嗚呼我が兄弟、飾りなく僞りなく、眞理の前に柔順にして人の前に無遠慮なる兄弟の上に祝福あれ。

日曜學校には鷲見孃又缺席したり。父君の云ふ所によれば、多少は宜しき方の由。彼女の心願くは平安に復せ。

朝の說敎はローランド氏せられたり。彼は此日悔改の基督敎の第一義なるを說かれたり。彼の說敎は常に普通の宣敎師と選を異にせるに、今日は特に然かなりき。中々立派なる說敎、今も我が心中に一種沈思の氣を齎し來る。

午後恩地君と共に、中島遊園地に雇人奬勵會を見る。擊劒、競走をなし居たり。雇人等は必ず少なからぬ滿足を感ぜしなるべし。雇人に盆會と大晦日の外自由を許さゞるが如き本邦商家の風習は、永く陋守すべきものにあらず、適當なる休安の時を與へ、彼等の心をして地上より天上に向はしむるは、利益問題のみより考ふるも大なる得なるべし。常に同一地を流れ

居る水は遂に腐敗せずんば止まず。

此夜は圓山の奧に祈禱會を催せり。兄を訪ひ共に携へて靑年寄宿舍に到り、井街、逢阪、末光、工藤と共に圓山に到る。途上落日を見る。藻巖山僅かに霞み、手稻山深く霞み、日は沈々として紫靄の間に沈む有樣其莊嚴悲壯譬へ言ふ可からず。

圓山の奧に到り枯草を集めて火を焚く。余は先より心と心に相結びたる六人が、兄弟だも知らざる愛情を以て共に働くを見て、胸逼りて堪へざりき。遂に火の周圍に坐せる時、余は、神が云はせ給ふ如く覺えて、友情の如何に尊むべきものなるかを云ひ、此數人の交誼が永く地上に天上に結ばれん事を乞ひたり、次に逢阪君は沈默の必要を說き、兄は神に依れる人は人の前に不平喧囂する事なく、悲しむべき事怒るべき事は神の前に憚らず告ぐべしと云ひ、後皆跪き祈りぬ。地籟全く死して唯六人の心よりの祈禱の聲のみ聞かれたり。聖き祈禱會とは此如きものなるべし。此處に九時迄相語り歸途に就く。嗚呼朋友、朋友の交はりは、實に地上に咲ける愛の花の中の最も美しきものなり。

五月二十六日。（日曜日）。

五月二十三日、余は自ら神の御前にあり、基督我が凡てを辨へ給ふ事を忘れ、己れを欺きて姦淫の罪を犯せり（世の人の云ふ姦淫の罪にあらず）。余は此時より神の前に祈禱を捧ぐる事を得ずなりて、心の中には癒す可からざる空虛を感じたり。神の余に與へ給ふ最も懼しき譴責は、余が祈禱し得ざるに至る事なり。余は人の如く起き、人の如く働き、人の如く憩ひたるも余に祈禱なくして余の凡ては無なりき。故に全く日記を廢せり。

今日は安息日なりき。朝聖書を讀み、教會に出席せり。而して小兒と共に日曜學校を終へ、一生懸命になりてローランド氏の「生を完ふせんとするものは之れを失ひ、生を失ふものは之れを完ふす」との說教を聞きて感慨を惹きたれども、余の心は猶鈍にて何の用にも堪ゆ可からざりき。

午後は恩地君と共に、兄を訪ひ半日を寫眞の爲めに費せり。

夜再び教會に出席して、兄の說教を聞けり。此時余司會をなし祈れる時、神の指輕く我が胸に點じたるを覺えて、余は垂

死の病者が僅かに良薬を服し得たるが如き感をなせり。

兄の說敎は熱誠にして力ありき。彼は十字架の意義を解釋し、全然的に十字架を負うて基督の跡に從はざれば、眞正の基督敎信者と稱す可からざるを云ひ、僞善のみが此世界に於て永遠に救はれざるものなる事を說けり。余の心は痛く打たれたり。敎會を出でゝ直ちに豐平河畔に到れり。月は既に昇りて中天に在り。此世界は既に夜の安息に入り、暗く汚れ惱み痛める我が心と、光美しく淸く安らかに笑めるが如き月の影のみ生きて殘れるかと思はれたり。

例の場所に到り、草の上に坐して默想に入りたり。余は又一昨夜の如く祈禱し得ずして、失望を以て家に歸らざる可からざるかを思ひて痛く懼（おそれ）を懷きつゝ跪きたり。然るに主は、此汚れに充ち滿てる此罪人の長をも尙捨て給はず、余の心中には火の投ぜられたるを覺え、忽ちに胸中亂れて眼よりは淚潸然として下り止まず。遂に默するに堪へずして余は余の罪を忘れて祈禱を捧げぬ。主は讃むべきかな、余に如何に祈るべきかを敎へ給へり。余は神の前に跪きて云ふ可からざる苦痛を感ぜしと共に無限の懽喜に滿ち、祈禱を廢する事と淚を拭ふ事の惜しく覺えて永く其儘に飮泣せり。余は今日、數日祈らざりし肉の肉、骨の骨なる兄弟姉妹の心惱めるものゝ爲めに、足らざる乍ら一片の祈禱を捧げ得て、余の懽喜は眞に譬ふ可からざりき。愚なるものよ。汝は此懽喜を捨てゝ何處に汝の笑顏を拾はんとするか。基督を知れるもの此の如き心なくしては僞善者なり。

余は今夜神によりて懺悔をなし得たれば、嚴かなる懽喜胸に充ちて家に歸りぬ。余は何の幸か生命を得たり。再び忘する事をすまじ。

五月二十九日。

忘れな草（机上にかをれり）

いかなれば　汝は生ひたる
忘れなと　名に負ひて

此思ひ　　など忘れんや
　忘れぬぞ　恨みなる
忘れ草　　榮えしげれな
　忘れぬを　忘るべく
されど我れ　せつなき思ひ
　忘れんは　あぢきなし
忘れ草　　忘れな草と
　しぼめいざ　とこしへに。

六月四日。

　祈禱

地は安息（やすみ）に入りて　乾きたる葉末に
白露ぞかゞやく　夕づゝのまたゝき
數漸く增して　日は凱歌と共に
一日のはせ場を　勇みはせ終りぬ
鳥もはやねぐらに　やすらひ果てぬるを

猶鍬の手やめぬ　農夫畑に立てり
靜けき天地(あめつち)に　冴えたる聲をあげ
謠ふを聞けな　塵にうめきて
汗の尊さ　知らぬ子よ
面を伏せて　地に跪け
祈を知らぬ　世の末よ
耳傾けね　神の御前に
義しき祈り　今きこゆ
「おらが村には　金もちやないが
金を掘り出す　鍬がある」
「空にや星樣　畑にや露よ
己(おら)が額にや　玉の汗」

六月六日。(Martineau's "Silence and Meditation".) 略す。

偶感

御空にはまどかにすまん月影を浮世の波のくだきはてぬる

六月九日。

戀の牲

狂ひあるゝ　心の駒　暫しひかへて　我が越し方
かへりみれば　うつゝなや　風を追ひては　空をつかみ

虹をよぢては　雲になきぬ
思へば　甘かりし　夢の跡よ　我十一の　いとけなくて
山を友とし　野と交はり　自由の子　自然のまなご
きづななく　遊びし日や　我が眼には　男少女の
けぢめなく
　男をば　心雄々しき　友と睦び
　少女をば　情やさしき　友と慕ひ
　戰はんと　我等が取りし劍に　ねたみの思なく
　束ねんと　我等がつみし花に　よこしまの心なかりき
そが中にも　―　殊に睦びし　一人の友あり
我よりも　年二つ　姉なりき
思ひ出づるも　心ゆく限りなりや　其頃よ
我れ　彼女と　相抱くも
人　そしらず
世は　せめず
春の日を　花狩りに　遊び暮せし　歸るさ
疲れと　草柔き　堤の上に　彼女の憩ふを
其膝に　すがりつゝ　溫く　白き手を
かたく握り　振り抑げば　つみし花を　我が額にかざし

伏目に見て　笑みし笑顔よ
あるは　學びの窓より　歸り來る　彼女をさゝへて
通さじとする　わらべと　戰ひ　額にきずを
負ひし時　彼女日毎に　夜毎に　我を訪ひて
いたでを　洗ひ　且つつゝみしさへ　うれしきに
朝な朝な　我が爲めに　後の山の　祠に
祈りしと　聞きては　幼き眼にも　涙あふれ
彼女の前には　命をもと　思ひなりし　其頃よ
忘れがたな　忘れがたなや
來れ天使　來りて見よ
雲遠き　天津國の　交らひも
其かみの　我等が睦びに　及ぶまじ
幼兒の　世にある限りは　樂園に入るべき鍵
猶　我等が掌より　奪はれざるなり
噫　さはれ　人の運命(さため)は　野薔薇の　如きかな
「時」のあやなしに
香しく　美しき　罪を知らざる花　散りつきて
苦く　硬き　恐怖(おそれ)の果(み)こそ　結ばるれ
嗚呼　ねたましかる　「時」よ

一九〇一年

いかなれば　汝は
東明の　まぶたを　開き
夕ばえの　またゝきを　閉ぢ
星くづを　西に　誘ひて
日を　東に　臨ましめ
　苦き杯を　我に　與へしや
それ　智慧の實を　味はゝざりし
アダム、イブの　樂しき時
水泡の如く　亡び
夢の　如く　消え果てゝは
涙に滿てる　我れの　眼に
めぐりてやまぬ　恐しの　焰の劍のみ
あり〳〵と　見られて
譬へがたなき　エデンの　景色は
八重だつ　雲と　霧と　靄との　奥に
嗚呼　見えず　見えわかず　なりにしかな
罪の毒矢　我が心の　たゞ中を　射ぬきて
堪へがたな　此痛み
誰か　醫す

晝には　死ぬるが如く
夜には　えも寐ずもだえて
救けを呼ばんに
答ふるは　己が聲のみ　涙のみ
かくて　悲しみの睫の中に　死の影を宿し
苦しみの唇の上に　咀の焔をもやして
經たりける　いくその時の
あぢきなく　果敢なく
かくてあらば　我が枝悉く　綠ならじを
されどされど
限りなき　譽れ榮え　至高所（いとたかきところ）にあれ
空をつかみ　雲になきて
冬野の如く　あれたる　我が心にさへ
さそりまむしの　毒をも　いやすべき
甘き泉を　置き給ひぬ
暗き嵐の　ひまとめて
稲妻の如く　見ゆるは　何
星のまなざし　蕾の口
嗚呼笑顔　淸き涙

一九〇一年

牝鹿の如き　其はぢらひ
白鳩に似たる　其けだかさ　戀しの情
身に沁むやさしの　慕はしの
あはれ彼女も　運命の　手にひかれて
何人の妻とやなりし
いかなる子の母とやなりし
あらず　あらず
あまりに　淸く　美しければ
塵の世には　ふさはしからじ
我が　心の眼には　あり〱と
雲の如く　白きを　ころもし
染めでたき　百合花を　冠して
神の御側に　めされたるが　見らるゝ
戀とは云ひ得ぬ　幼き折の　友の睦びすら
かくあるものを　いざさらば

六月十八日。（火曜日）。昨日は朝より雨頻りに降り來りて、頭冷かに胸燃ゆる日なりき。朝は所用ありて森君を訪ひ、學校に足助君に遇ひ、夫れより家に歸りて論文を少し書きぬ。午後山崎も永野も共に家中祭禮を見んがために外出して、我獨り殘りぬ。甚だ靜かなりき。耳を欹つれば輕き雨滴の檐端に落つる聲を聞くのみ。我の思ひは攪拌せられたるが如く亂れ起ちて收めんとすれども能はず。如何なる手あればかくは我が心の振り動かるゝにか。

星野氏の死に接し、祖母の三周年に會し、伊藤肇氏の記念すべき其日も遠からざるを思ひ、壬生馬の手紙により彼の健康も宜からず、母上も一時は西遊しつゝありし壬生馬を電報にて呼び返さん程危篤なりしを思ひ、余の心はハタと死なる問題に逢着しぬ。死とは神を知れる人に取りては左程大なる問題にあらざるも、亦決して小なる問題にあらず。地にある人は「有限」に束縛せらるれども、地を出でたる人は「無限」に立たざる可からず。嗚呼之れ如何に嚴肅なる、絶大なる意義を以て我が心に逼り來るぞ。我が心よ、罪多く、弱く、躓き易き汝は、よく平然として無限に入るの關門を通過し得るや。汝其處に至りて躊躇顧望するが如き事はなきか。彼人も眠に就きぬ。此人も休みに入りぬ。我は屢〻人の棺側に侍して葬に會する時、最早再び決して此世に於て其人の面を見る可からざるを思ひて、淋しく悲しき一種の思ひに打たるゝを禁ずる能はず、此世に於て再び其人の面を見る能はず、其聲を聞く能はずとは之れ如何なる事ぞ。洵に之れ我が力を盡し思ひを極めて神に依りすがるべきの時なり。我何の幸か――嗚呼然り眞に何の幸か――神によりて心奥に奪ふ可からざる光明を感ず。我は數年以來何の確たる證あるにあらねど、我は三十――四十の間に於て我が生を召さるべきを思ふ事あり。是れ唯一片の情懷に過ぎず、されどもこは余にとりて最も恩惠ある針砭なり。我是れを思ふ毎に、迷ひ果てたる心は再び確かに神の御膝に歸ればなり。神よ、總ての塵より生命を造り輕き粘土より人類を創り給ひし御手よ、願くは我が弱き心を強くし、砕けたる魂を集め給へ。是れ我が爲めに願ふにあらず、我によりて神の榮顯はれん事を望めばなり。神よ、シオンの宮をも刻下に壞し、人を鹽の柱となし、ソドム、ゴモラを灰の下に埋め給ひし御手よ。願くは吹き廻さるゝ木の葉の如き我をも摧き給へ。而して我が血と肉とによりて此世に枯れ果てんとする憐れむべき草と木とを培ひ給へ。さらば我神の御子に近づき得ん。而して溷濁なる世と最後の訣別をなす事を得ん。此世は冷笑を以て再び我が面を見、我が聲を聞かざるを喜ぶ間に、我は無限に入りて彼等の爲めに肉體を離れたる淸き祈禱を捧げ得べし。之れ我に如何なる宜き事ぞ。遮莫總ては大能の御手に委ねざる可からず。神は我に勝りて我が行くべき最も善き道を明かに知り給へばなり。

九月十六日。（十五日尾久渡に遊びて）

彼岸花

秋の雲　　蒼穹（おほぞら）を渡り
渡ると見る間に跡なきが如く
人の子　　時限を歩み
歩むと見る間に遂にあらず
雲の意　　土塊（つちくれ）の心
嗚呼　　悟り難きかな
省れば　　我
人の子の　　稟（う）くべき生命（いのち）
生を稟（う）くるに近くして
玆に天地（あめつち）の齡を數へんとするに
智慧の果（み）を味ひ知らで
あたゝかき胸に
乳房求めし頃
せちにめでゝ
もてあそびなれし
彼岸花の　　とはに紅くして
今も若くして
堤の秋にぞ美しう咲ける

蹈みにじりて
冷かに　　　　　　　　笑ひなんか
かき抱きて　　　　　　熱き涙に
むせび泣かんか

九月二十日。一昨日より讀み初めたる『山陽と其時代』なる民友社出版の書を、今日を以て讀了す。玆に少しく讀後の所感を記し見んか。

該書は決して完備せる一卷にあらずして、寧ろ小論文集の觀あり。故に此書の中に現はれたる賴山陽は、衣冠儼然たる賴山陽にあらずして自ら緩衣晏坐せる賴山陽なり。是れ寧ろ期せずして人物の傳記に一生面を開き得しもの、之れを以て民友社同人が勞を多とせざる可からず。

書中の論者は思軒之れが北斗となり、蘇峰、知泉之れが遊星となり、而して愛山之れが彗星たり。思軒の妥當なる觀察と周到なる研究は實に文壇の珍となすに足り、愛山の奇拔なる着眼と執拗なる自信とは、其人を紙上に剏出して睹るが如し。知泉の文は此著に於て寧ろ附景氣たるが故に、之れを論ぜず。若し夫れ蘇峰の文に至りては、落々たる候文の中によく其言はんとする處を言ひ盡して、隻語往々にして頗る肯綮に中れるものあり。才人の文たるに恥ぢずと云ふべし。彗星たるが故に、强ちに眼眩ずるに足らず、遊星と雖も天王、海王の如き偉大なる星宿あるを思ふの感は、觀者の自ら喚起する所ならんと信ず。

思軒と愛山との對峙に至りては直ちに管茶山に對する山陽の對峙を想起せざる能はず。唯山陽は愛山よりも大いに大、思軒は茶山よりも少しく小なるものあるが如きのみ。

三氏が筆を禿して論ぜる山陽は如何なる人ぞ。三氏の說の相合一せる點より山陽を觀ずれば、彼は多涙或は詩人の天性あらんとして然かも常識に富める散文家なり。彼の心中には、赤誠の一念あるが故に、實寫の範圍を超越する事能はず。而し

て事物人物の眞底に達せざれば止まざるが故に、彼の描ける事件と人物とは自ら生氣の横溢せるものあり。彼は時勢の產にして然かも時勢を造れり。彼の家庭は、眞意義に於て至つて平和にして、其妻は至つて良妻なりき。彼は其不攝生によりて、不幸、比較的に短命なりき。彼の大傑作『日本外史』は、彼が尊王の士心を攪動せんが爲めに作れるにはあらざる事等なるべし。眞に然りと云ふべし。而して思軒、愛山兩氏の議の合はざる所は、山陽の勢力生前に於て死後の如く著しからざりしと云ふと、然らざりしと云ふと之れ其一なり。山陽は海外の事に留意するの少なかりしと云ふと、然らざりしと云ふと之れ其二なり。尙餘論の相抵觸せしものなきにあらざりしも、そは敢て多くを問ふを要せざる小問題なり。而して上揭の二問題も亦山陽の人格を高下するに於て、甚だ多く輕重するあるを見ざるなり。

然らば卽ち三氏合同して略山陽の人格學識を品隲し了れるに庶幾しと云ふべきか。然かも或は未しきものあらずや。人は山陽を以て漢學者と云ふ。漢學者と云はざれば歷史家と云ふ。然かも一人のよく叙事詩人と云はざるは何ぞや。彼を以て漢學者なりとして見るが故に、人は多く彼の漢文を貶して古人遺胎の方則に合せずと云ふなり。彼を以て歷史家なりとして見るが故に、人は多く其叙事の續々として誤謬に滿てるを罵らんとするなり。焉んぞ知らん、敵は近く本能寺にあり。彼を叙事詩人として批評せよ、日本に產れたるスコットとして觀察せよ、則ち吾人の齷齪として批難攻擊せるもの刃を迎へずして釋然たるものあらんとするにあらずや。

試みに『日本外史』を熟讀せるものゝ座邊に到りて問へ、君の此書より得んとする所果して何ぞと。彼必ずや答へて云はん、正確なる事實を得んとするが爲めにあらず、繁雜なる故實を知らんとするが爲めにあらず、高尙なる攝理を看取せんとするが爲めにあらず、嚴正なる文法を學ばんとするが爲めにあらず、別に得る處を期せずして讀むの已むを得ざるに至るなりと。之れ確かに余が一私言のみにあらじ。知るべし山陽の文は、散文にして卽ち詩、詩にして卽ち叙事詩なる事を。

余之れを童蒙の時に聞く。馬琴幼にして志を立て敢て大儒先生たらんと欲す。既にして山陽の高名諸方に騷ぐに至り、志を飜して筆を稗史に染めたりと。固より無稽の茶談に過ぎざるべし。されど事實は山陽をして、馬琴の演じたる所を演ぜし

めたり。愛山も云へる如く「當時各種の思想は泰平の搖籃中に育てられたり。久しく禪僧によりて持たれたる釋氏虛無の道は、藤原惺窩、林羅山の唱道せる宋儒理氣の學に因りて壓倒せられ、王陽明の唯心論は近江聖人中江藤樹に因りて唱へられ、古文辭派と稱する功利主義は荻生徂徠に因りて唱へられ、古學と稱する生理學は伊藤仁齋によりて唱へられ、儒教と神道とを混じたる一種の哲學は山崎闇齋に因りて唱へられ、各種各色の議論は恰も鼎の沸くが如く沸けり。元祿より享保に至るまで人各ゝ自己獨創の見識を立てん事を競へり。斯の如くして人心中に伏藏する思想の礦脈は悉く穿ち出されたり。支那二十二朝を通じて顯はれたる各種の思想は、徳川氏の上半期に於て悉く日本に再現せり。創始の時代は既に過ぐ、今は選擇の時代なり」き。之れ獨り春水に然りしのみならず山陽にも然りしなり。かくて山陽は是れ等紛々たる諸學說諸系統の中より已れの立脚地を固むべきあるものを探し出さんとせり。而して彼は失望せざるを得ざりしなり。垂髫の頃漢籍の素讀を廢し、義經辨慶等の草艸紙に眼を曝したる彼が三つ兒の魂は遂に百に至るまで變ずる事なし、盛名一世に高かりし柴野栗山が彼に嘗て讀むべく勸告したる綱目を讀みしや否やを以てせしに、彼は平然として大體に通ぜるの旨を以て答へぬ。彼は到底字を探り句を列し、人名と所名と名代とを併せ記して餘す事なきが如き無意義の知識に渇する能はざりしなり。而して彼は遂に學者として、新井白石だに敢てせざりし一路を開拓し、嶄然として群小に卓越するの立脚地を作りぬ。

人は多く、『日本外史』が白石の『讀史餘論』より來れるを難ず。されど白石は儼然たる一個の歷史家ならずや、而して山陽は堂々たる一個の敍事詩人にあらざるや。此事何の不可か之れあらんや。シーザーを著はしたるシェクスピーヤは其材料をプルタークの傳より得しが故に不德なるか。シェクスピーヤはプルタークの傳が最もよくシーザー、カシヤス、ブルータス、アントニーの人物を描き盡して適切なりと斷じたるが故に之れを自家藥籠中のものとなせるのみ、山陽は白石の『讀史餘論』が古來日本の歷史家が敢てせざりし銳利の眼光を以て深く時勢の底潮を徹視し抉羅餘す所なきを見、採つて以て自家藥籠中のものとなせるのみ。何の病か之れあらんや。白石は事實の眞相を直寫し、權力推稱の變遷を示して、時に佞し人に佞し、歷史其物に佞せんとする徒輩に頂門の一針を加へしなり。而して山陽に至りては、全然其徑行を異にせり。彼は的確なる歷

史的事實を白石の所論に採り、己れは別に其基礎の上に歴史的人物と時勢との最も趣味深き關係を描寫したるなり。白石は究め、說き、論じ、而して叱したるなり。山陽は述べ、語り、話し、而して泣きたるなり。

以上は思軒氏と蘇峰氏と愛山氏の、或は思ひ及ばざる所にあらざりしか。叙事詩人としての山陽の技倆の點は、又他日を俟て記する事あらんなり。

尙玆に言ひ添ふべきは、山陽の『日本外史』が偶然にして維新革命の經典となりし事なり。換言すれば山陽の此著は一層謙遜なる一層範圍狹き一層眞面目なる彼の思想によりて大成せられしなり。偉大なる人物は自らその偉大なるを知らず。偉大なる著述は業々しき目的を有せずして最も平凡なる理由の下に完成せらるゝ事多し。我之れによりて殊に『日本外史』を偉となし山陽の人格を高しとせずんばあらざるなり。山陽の此眞率誠實の氣に比し來れば藤田東湖の如き寧ろ團子坂の菊人形のみ。

書して玆に至り筆を收めんとする時、遠雷の如き聲あり。既にして秋雨蕭然、何とは知らず我暗如として涙を飮みぬ。

(Sir John Lubbock's "The Hope of Progress".) 略す。

十一月二十日。

馬可傳十三章。

此章聖書研究者の最も困難を感ずる處なり。從來の聖書註釋者にして、此章に完全なる義解を與へたるものなし。試みに通讀すべし。いかに其記事錯綜せるよ。主はエルサレムの滅亡を語りユダヤ人を戒めらるゝかと思へば忽ちにして世の滅亡を語り人類を戒めらるゝものゝ如し。其何節迄がエルサレムの滅亡にして、何節迄が世の滅亡なるか、如何に明晰なる頭腦を有する人と雖も直ちに此文章を讀みたるのみにては到底區別し能はざるべしと信ずるなり。四福音書同一の記事は馬太傳と路加傳とにあり。馬太傳最も委しくして秩序稍〻整ひ、馬可傳之れに次ぎ路加傳最も簡なり。其最も委曲を盡せるものも、其最も梗概を拔けるものも、要するに基督所言の一部分だに過ぎず。唯此繁簡異なれる記事あるが爲めに、基督の言が三福音書の寫し得ざる猶多くを語られしを知るべきのみ。

此章を解するの困難は、洵に此如きものあり、然かも少しく基督の如何なる人なりしかを窮むれば、此記事は案外に解し易きものとなり來るべきなり。世に偉人と云はるゝ人は如何なる人なるか。偉人とは高く廣く深く見得る人なり。物に就て最も多くの意義を發見し得る人なり。新聞の三面記事に殺人の件あるを讀み、讀みて而して一笑に付するものは卽ち凡人なり。俗人なり。讀みて而して是れによりて日本の社會の腐敗を看取し、延ては人類の罪惡の依つて來る所を思ひ、一人の殺人者の記事によりて過去に於ける人類の爭鬪、國家の戰亂、謀反、反間、詐謀、慘酷の歷史を見るが如く念頭に浮べ來り、尙未來に於ける人類の傾向をすら遠く深く豫想するは、唯偉人のみが能くする所なり。英雄の朝の夢を語る詩人に此特性を有するもの多し。彼等は歷史を燒き去らるゝとも、自然を透して人類の過去と現在と未來とを歌ひ得るなり。彼等は無邪氣なる小兒に、英雄だも有せざる偉性を發見するなり。彼等は、一片の草花が宇宙に依りて養はるゝを見、是れによりて人生の歸趨を說破し得るなり。彼等の一枝の花に一葉の葉に萬斛の涙を流し得るなり、人は是れを見て誇大と云ひ、强飾と云ひ、無意義と云ひ、無用の事と云ふ。世をして罵らしめよ、吠えしめよ。世に少數なる偉人が罵られ吠えらるゝは、固より當然の事にあらずや。祝すべきかな罵らるゝ人。憐れむべきかな吠ゆる世。

而して基督は如何なる人なりしぞや。彼は偉人中の偉人なり。人類中の神なり。總ての人類が百尺の彼方を見得る時、彼の眼は無限の彼方に達せり。百合の花に、芥子種に、空の鳥に、無限の意義を寓せし彼が、如何にしてエルサレムの恐るべき墮落に世界の滅盡を確想せずして止むべきぞ。十間四方に餘れる自然石を以て積み上げたる巍々たる聖殿の中に聖式を司りつゝある僧侶が、惡魔の奴隷なるを見たる時、人民を治むべき有司が我利を最後の目的とする醜奴なるを見たる時、基督の眼中には倏忽として一の石も石の上に圯されずしては遺らざる聖城の滅落の現じ來りしと共に、人類其者の最後の審判は歷々として現じ來れるなり。玆に於て彼は毫も躊躇する事なく盛大繁榮を極めたるエルサレムの城を指し最も汚瀆と見ゆる大膽なる豫言をなし給ひぬ。紀元後七十年テイワス、エルサレムを圍みて重圍永く解けず、城中の人は續々死亡し、死屍臭を發して放置す可からず。城外なる敵中に毎日投ずる所實に六萬人「弟は兄を、兄は弟を死に付し、父は子を、亦子はその

父母に逆ひて之れを死せしめ」たる歴史は、最も慘憺たる筆に彩られて八月十日エルサレム遂に亡ぶと大書せられぬ。主磔死せられ給ひてより僅かに四十年なり。

嗚呼豫言の的中は餘りに正確なりき。人類の滅亡、最後の審鞫に就きて尙且つ疑ふものあらば、彼は眼を抉りて之れを東門に懸け置けよ。

此章の意義が、一見錯綜して秩序を失へる如き所以は、此に到りて明瞭に氷解せらるべし。

十一月二十四日。

馬可傳（十四章）三節。

「ある婦」――ベタニヤのマリヤなり。

「蠟石の盒に價高きナルドの香膏」

ナルドの香膏は一種の植物の根より製するものにしてヒマラヤ山の高峰にあらざれば產せず。非常に高價のものにして、三百有奇（あまり）のデナリと稱するものは殆ど我が百圓に當れり。王者の卽位式等に最も多く使用せられたるものにして、普通の平民が之れを塗るが如き事は全くなし。多くは華麗なる貴石製の小罎に盛りて印度より輸入し來るなり。

「其盒を破りて……」前にも云へる如く該香膏は貴石製の罎に入るが故に、普通の習慣によれば注意して其罎の蓋を開き香膏を使用し終らば其罎を保存し置きたるものなるべし。然かるにマリヤは之れを破りて惜愛する所なかりしとなり。

四節以下。基督の死近づきぬ。慧眼なる基督は既に悉く之れを知り給へり。彼の心中には今更の如く云ふ可からざる一種の悲憂を感ぜしならん。如何となれば、彼は「世に在りし己れの民を既に愛し、終りに至るまで之を愛し給ひ」たればなり。今は永へに牧者と離れんとする憐れむべき微弱なる羊は、嘗て此事あるを思ひ及ばざりき。唯獨り基督が痛く愛し給ひし一個の處女あり。彼女はエルサレムに近きベタニヤに住み、よくエルサレムに起る事情を詳知するを得たりき。而して彼女は poetic woman なりしが故に、彼女の鋭敏なる感情と基督を敬慕する affection とは、よく基督が自ら知り給ひし

如く基督の死を豫察せしにあらざるか。彼女の優しく、強く、鋭く、深き感情は利鏃の如く其心を刺しぬ。嗚呼主基督、是れ實に彼女の熱愛せし兄弟ラザロを死より甦らせ給ひし人なり。マルタに諭して、如何にマリヤが己れを愛するかを知らしめ給ひし人なり。彼女は實に云ひ能はざる煩慮にもだえぬ。我々が救主に何を爲すべきか。是れ彼女が最も苦心せし所なり。マリヤは固より基督の教ゆる處に從ひて信仰と實行の生涯をなすは、基督の最も喜び給ふ所なるを知りて、之れを爲したりき。然かも彼女は尙何をか爲さんとするの熱情を禁ずる能はざりき。かくて彼女は千思萬考の末、女らしき結論に至りぬ。恐らくは多く富めるものならざりしならん。彼女は彼女の有する凡てを賣りぬ。而して彼女は之れを以てナルドの香膏を買へり。別離に臨み、其人に塗るに香膏を以てす。嗚呼、何等の優しき美しき行爲なるぞ。是れ直ちに一個の詩にあらずや。

シモンの家に饗食正さに酣なりき。近き將來に受くべき基督の苦痛を悟らざる弟子等は、共に相懽語しつゝありき。主も亦其容貌には微笑を浮かべ賜ひしならんも、心中には「群の綿羊散らん」と錄されたる事を想起して、無限の感慨に滿ち給ひしならん。此時一少女あり、靜かに主の傍に來りぬ。其面には感激の紅ありしならん。其眼には謝恩の涙ありしならん。彼女基督に近づける時香膏の盒を破りぬ。芳香忽ち室に滿ちて百花一時に薫ずるが如くなりき。彼女はそを――王者の用ふべき香膏を――主の頭には瀉がずして其足に瀉ぎぬ。而して其美しく艶かなる頭髮を以て押拭ひつゝ、潸然として泣きぬ。主は之れを退けんとはし給はで靜かに俯目に彼女が爲す所を見守り給へり。弟子等は半ば身を起して此一場の珍事に呆然たるのみ。嗚呼、何等悲痛なる、高尙なる、嚴肅なる活畫なりしぞ。

忽ちにして弟子の一人は不平を漏らせり「此膏を鬻すは何故ぞや。之れを鬻がば三百有奇のデナリを得て貧者に施す事を得ん」と。列座の弟子は其有理の言に動かされて亦其聲に和しぬ。嗚呼是れ今日の社會學者なるものが現に稱呼しつゝある聲にあらずや。

人の心中に鑿入して其意の眞を計り得ざる人は災なるかな。

基督は靜かに弟子等を顧み給ひぬ、而して其慈愛に滿ちたる手は、恐らくは涙にくれて跪きつゝありしマリヤの肩のほとりにありしならん。かくて穩かに、されど嚴かに宣ひぬ。「彼に係はる勿れ。何ぞ此婦を擾すや。我に善事を行へる也。貧者は常に爾曹と偕に在れば、爾曹意に任せて彼等を濟ることを得べし。我は常に爾曹と偕に在らず。此婦は力を盡して爲せり。蓋しあらかじめ我を葬る爲め、わが身に膏を沃ぎしなり。我まことに爾曹に告げん、天の下いづくにても此福音の宣べ傳へらるゝ處には、此婦の爲せし事も亦其記念の爲めに言ひ傳へらるべし」と。

基督敎の同情と愛心と推恕とを知らんと欲せば須く此優渥なる辭を再三熟誦せよ。

『轍鮒錄』のはしがき。（明治三十四年十二月二十六日より衞戍病院内の徒然を遣るべく編みし雜錄）

靈か、肉か、我知らず。鮒轍の下にありて水に離れつゝ喘ぐは憐れむべきにあらずや。見よ、其鮨と其尾に生命を籠めたる力宿れり。或者今鮒の如く轍の下にあり。靈か、肉か、我洵に知らず。

涙なくて何に平和の笑まひぞや神鞭たびね此弱き子に

十二月二十八日。

寄　病

（一）

相見ざりしよ　　茲に三年
肉きずつくる　　汝の咎に
嗚呼我が靈の　　盃あまき

（二）

深かる惠しや　　全能の御業
かたくなの世に　　無窮をさとす

裳のすそ黒き　墓しらす神

（三）

墓しらす神の　汝は妹
愚かや人の子　「病」と呼びて
なつかしき手を　ふるひおそるゝ

（四）

絶持て久しき　汝が胸によりて
熟睡(うまい)の空　打ち仰げば
旨(むね)深きかな　星のささやき

（五）

汝が杯に　酔ひ泣くあした
此胸そゞろ　焔満ちて
口つけせまほし　迷持つ子

（六）

相見ざりしよ　此に三年
肉きずつくる　汝のしもとに
嗚呼我が靈の　さかづきあまき

十二月二十六日夕。　今日我が壬生馬來り、今宵月圓かなるべしと云ひて歸りぬ。病客の身なり。許せよ、天上の友、遂に汝をさへおろそかにせんとはしぬるよ。

昨夜の風雨は今に忘れ難し。宵の間より多時雨蕭々として、病室の中殊に靜かなりしが夢に入りて程經たりとも覺えざるに婆娑たる枕頭の怪しき音に聳然として眼覺むれば、朔風に和し悽然として頭邊を掠め去るに遇ひぬ。既にして怒號再び起りつ。屋北なる白樫の枝と條と、宛ら魔女の亂髮の如くもつれ靡きて、吹きちぎられたる枯葉雨と共に白壁を敲き、地に伏せる搖落の名殘悉く活きて風と競ひつゝ空を打ち天地黃泉の暗に歸りしと思へば、虛空の一角より燐光蛇の如く橫ざまに馳せて、怪凄限りなき夜嵐の彿を照す。忽ちにして訇然たる雷鳴、颯然たる風音、淅瀝たる天の泣鳴、洪荒たる地の笑渦き來り亂れ去り、乾坤唯無象の大聲に籠る事暫く、叫び昂まり怒り競ひ、憤極まりて稍ゝ平靜に復すれば、疎雨點滴の聲のみあやなき闇の單調を破る。かくて狂ひ、かくて默だし夢破れ夢に破られ、天と我とけぢめ知らぬまで怪しき心胸に滿ちて、病友の呻吟時に痛ましきを聞きつゝ、日頃朝づゝの影漸く淡かるべき頃に至りつ。唯一つなる電燈、今日も亦百合の花の凋むが如く、幽かに幽かになり行きてふッと消ゆれば、世は尙冥闇の深き淵に漂ひつゝあり。呪はれたる日や。今日の晝短かゝるべし。見めぐらせば室の窓の彼處此處、頹嵐の襲に堪へかねてや打ち開かれたる所多く、雨痕鮮かに壁に夜來の姿を描けりき。

かくて怪しき風の競ひ雲のたゞずまひ、去りがてに我が世に殘りて夕暮に及びつ。病友皆床中に潛みて天地の憤怒に聲を飮みしも憐れなりしが夕暮我戀しさに堪へで廊端に立ち出でたるに、雲將に治まらんとして夕暉の射る矢に追はれ僅に東天に屯し、一面紫に暗みたるが半面斜めに爛銅の彩に燃えて、魔軍、ミカエルの劍に頹れ立ちながら尙矛を返し眦を決したるにも似たりき。恐るべき自然の腕や、幾千の化相を人の世の石ぶみに刻みて、塵の子には復見られざるべく永遠の彼方に去りぬ。

病み疲れたる身、されど心は爾かあらせじ。我强て夜の寒さを犯して又廊端に佇みつ。月は今圓滿無礙の相を現じて片葉だに留めざる無花果の梢頭に懸れり、院庭影黑みて地影既に絕えたれば、月と我と靜かに見交はして、我が胸に月の影、月の面に我が心魅れる樣、死ならば永滅の死、生ならば無限の生、月と世と我とを包みて身はただならぬ寒光の輕羅(うすもの)に被はれ

たる思ひ坐（すゞ）ろなりき。今日は聖誕日なり。心なき獵夫の鏃に胸深く貫かれたる白鳩の如くエリザベスの許に流浪（さすら）ひ行ける時よ。青春の溫く淸く將た若き血潮只ならぬ迷に燃えて、世を擧りて實に心なの笑ひの中に衷心寸々に引裂かれぬべき思ひなりけんを。災の世や、旨を知りて喜び躍りしは人の心持つには尙淸かりし胎兒ヨハネのみなりき。さはれ主の御手は讃むべきかな。夜嵐退き去りて出でたる月影、世に譬へんものなき如く夜の深きに、カルデアの牧人羊のにこ毛打撫でつゝ假睡より驚き起きて天軍の讃歌に踵を廻らして村に入り、東方の博士はるばると異象のまぼろしに導かれ駱駝の背に夜毎の光を打仰ぎつゝうまぶねの下に跪きてより、聖母にして聖處女の例へがたなき尊相、塵に汚れぬはなき此世に現じて眞美の理想あから樣に我等が眼をよぎりぬ。よべの嵐今宵の夕影、似たりな春秋此に二千の昔の人の心。何とはなくて胸に燃ゆる焰なかなかに溫められて涙さへ消し難かりしかな。其夜の祈。

Mother of God on high!
We kneel at thy feet, dear
Maid and Mother
Who hast borne us God for
Our brother.
Mother and Maid! We lie
Here at thy feet, who cry
To thee, love thee,
Praising none but the Lord
Above thee.
Mother of God's own Child!

一九〇一年

We, who are called by His Name,
  Belong to thee.
We, thy children, chanting
  Our song to thee.
How many we pass alive
Through the desert worlds,
  But with thee, the Rose of it?
By thy fragrance stayed,
  Till the dim, parched close of it.

一九〇二年（明治三十五年）

一月七日。

森本兄の手簡を得、返事に籠めて送れる詩

夕暮病の　窓によりて
紫にさゆる　空のあなた
氷りてながれぬ　ちぎれ雲の
冷かなる色　眼には見れど

あやしや睫に　湧く涙の
何に燃ゆらんか　あつくあつき

百餘里の北に　ひざまづきて
靑春のいたみ　胸を射るに
雄々しき口にも　なげき持つ子
星のさゝやきに　耳かたぶけ
ひるまをゑまひに　つゝむ涙
堪へでや今宵も　そゝぐらんよ

さはいへ更け行く　空の冬を
いたましきまでに　光さむき
我にセルビムの　翼あれな
上億千里　馳せのぼりて
星をば涙に　あたゝめんを
我も人の子や　君あはれめ
あつかる涙は　とはにあれど

妹に菫を送るとて

空には星　地には菫

一九〇二年

人には君　君の優しきかほばせは
明星のかゞやき　君のかたき操は
壺菫のにほひ　我君を忍ぶ毎に
空のあけぼのを仰ぎ　堤の春に俯す
嗚呼朝の空　春の堤
嗚呼朝の空　春の堤
いかなれば涙を誘ふ　春逝かば
菫しぼみ　此世亡くせば
星も散りなん　さはれ我が愛づる者よ
はかなみますな　泣きますな
悲しきは人の命　尊きは命の人

（寫生畫二葉略す。）

ルーシー、グレー　（Wordsworth）

グレーの歌ふを聞けるしば〱
荒野の曉を過(よぎ)りては
其姿をさへかいま見し、
親しき友もなくて其少女(をとめ)
目ぢ遠き野末に住みぬ

人の子の軒には稀れや
美はしき面は心

今も尙みどりの上
戯るゝ子鹿兎はあれど
グレーの笑顔は
見えずなりぬ

「今宵を嵐騒がんに
我が兒よ市に出でゝ
母上が歸るさの道
とぼし火に照せ」

「かしこみぬ父上
御寺の鐘の音二つなれば
尙夕には程遠きを
まして晝月の影かしこ」

かくて父は鎌とりあげ

一九〇二年

薪の束の緒を切り
いとなみに就き
グレーは燈の器もたげつ

牝鹿も若くまじな
享樂の足どり
蹴立つる粉雪は
煙の如

時遲し暴風は來ぬ
野越え岡越えさまよへど
哀れ市への道は絕えて

憐れむべし父と母と
一夜を遠く呼び求むるに
たよるべき聲も
影もあらず

東明近き岡の上

二人佇みて見渡す野路
彼等が伏屋に程近き
板の小橋のみ黒く小さく

少女(をとめ)の小さき足跡
雪にしるきを母見出でつ
「逢瀬御空」と二人泣きて
家路に向ふ姿伏目

岡の蛭危きを降り
二人足跡の行衞を追へば
破れし木槿の籬越えて
石の垣根の長きに沿ひ

やがては廣野を遠く過り
消えもせず失せもやらで
果ては小橋の橋袂

雪白き堤を二人

一九〇二年

一つ〳〵に跡とめ來て
橋のなかばとなれるに
甲斐なしや跡は絕えぬ

さはれ今猶里人は云ふ
「美はしき彼の子は生けり
寂寞たる野の上
其姿見るを得べし

野を越えて山を越えて只獨り
かへりみもせず少女は行く
吹き起る風のまに〳〵
歌聲のうらさびつゝ」と。

在營回想錄

十一月十三日。 去年十二月一日兵營に入りて殺生の器を取りてより玆に一年を經、我は再び机に對つて書に親しむ阿蒙となりぬ。

一年の經驗容易に他者の爲す能はざる所、直接間接に得たる所如何に多かりしぞやとは、我が友等の等しく我を迎ふるの辭なり。嗚呼汝信仰と知識との乳兒よ、汝は赤面の外にこれに答ふべき何物をか持つ。

されど全能の手は、我の恐れて拒むにも拘らず、我に强ひて我を泣かしめ給ひし事ありき。我に强ひて我を笑はしめ給ひし事ありき。我自ら我が生の餘りに平凡なるを厭ひて、日記に筆秉る事を廢せんとしたるにも拘らず、今年の日記には尙數頁の墨痕あり。我にとりてはこれ奇蹟なり。いでや一年の過去を囘顧して我が神に悲しき懺悔を捧ぐ。罪を責め得給ふは獨り神のみ。罪を許し得給ふも獨り神のみ。嗚呼我何處に行かんや。世の寶我が傷口を埋むるに足らず。世の智慧我が疼痛を忘れしめず。世の名我が苦悶を醫すに足らず。神に行かで嗚呼我何處に行かんや。

十一月十五日。今も忘るゝ能はず十一月三十日の夜。余は『聖書之研究』に投書すべき『札幌獨立教會』の草稿を訂正し、これを淨寫せんが爲めに翌朝三時を過ぐる頃に至りて寢に就き、僅かに眠りて眼覺むれば階下の厨には灯を點して朝食の用意に忙はし。既にして二三送別の人來り、余はこれ等の人と弟等に伴はれて家を出でぬ。

　泣かじ笑まじ石とならずば一歲の呪を何に堪へんや我が身

此日天氣晴朗曉寒骨肉に通りて引き緊めらるゝが如き心地寧ろ潔かりき。我は今日より凡ての自由より斷たれたる××に入り、腕と足とに不生産的の汗を滴らせざる可からず。我が同窓等が將又世界に於ける我等の同輩が其全力を盡して已れの向ふ所に馳する時、我は××にありて我が腦を縛せられ我が心をからめられざる可からず。これ國家に對する義務なりとや。國家とは何ぞや。國家に對する義務とは何ぞや。

國家と云ふもの程意義の邈漠たるものはあらじ。虛榮心と利己心とに滿ちたる太古以來の習慣によりて成立せる所謂國家なるものは、今も尙恐怖すべき權威の笞を握れるなり。彼一度其手を擧ぐれば、親を有し、子を有し、友を有し、而して神を有する人類は幾十人幾千人、恰も刈られたる稻の如くに斃るゝなり。而して國家はこれによりて其生存なるものを保持し、其國家の人民と稱せらるゝものは、已が同胞の×××れて倒れ居るを見つゝ已れの生存の安全を得たるに狂喜して、國家

保護の優渥なるを謳歌するなり。かくの如くして此小なる地球の表面に、兄と弟とは嘗て其の爭を解かず。神の前に親しき幼兒たるべき人類は、悲しくも劍を乘り銃を杖づき遇へば相殺し離るれば相罵り、寸時も其唇より呪の聲を絶たざるなり。餓ゑたる鷹も凍えたる雀を見ればこれを殺さずして却て温むるなり。飢ゑたる獅子にも弱き者を憫むの情はあるなり。然るに如何なれば人よ、汝は汝の隣人の血に渇するぞ。汝は何者の呪を受けて汝自身の血に飽かんとするぞ。汝は何故に汝の弟を殺せるや。汝は何故に汝の妹を刺せるや。汝は何故に此殘虐をなして覺る事なく、相笑ひ相慶し、汝の同胞の死骨に三度笞を加へて而して相笑ひ相慶するや。汝が其兄弟を殺し、其傷口より流れ出づる血を啜りつゝ其持てる劍の鋭さを感謝するの祈禱は、見よ天に迄揚げられたり。

汝此如くして猶恐れざるは何ぞや。國家あればなり。無政府主義の人は云ふ、政府を廢せば平安地に來らんと。社會主義の人は云ふ、富を平均すれば平安地に來らんと。共和主義の人は云ふ、共和政を布かば平安地に來らんと。專制主義の人は云ふ、專制を布かば平安地に來らんと。總て非なり。これを以て平安の天に成るが如く地にも就らしむる事能はず。蚊帳の中に蟄居して天下蚊の跡を絶てりと云ふものは汝等なり。

全能の主よ、爾は我獨りを創り給はず。我をして愛せしむべく我が隣人を賜へり。而して我は恩怨兩つ乍らなき彼に對し矛を取りて彼と相敵視せざる可からず。握手に代ふるの罵詈、接吻に代ふるの爭鬪、何等の矛盾何等の不慈何等の罪惡ぞ。人と人と相爭ふ、世はこれを責む。會社と會社と相爭ふ、世はこれを責む。國家と國家と相爭ふ、世は謹しんで沈默を守る。何の權威國家にあればよく斯の如くなるを得るや。退き去れ惡魔！　人の子を無みするもの！

而して國家に對する義務とは、此國家が命ずる所のものを爲すを云ふ。換言すれば「無」の命ずる所のものを爲すを云ふなり。我は「無」によりて命ぜられたる大日本帝國の名譽ある二等卒となりぬ。

聖なる哉。「無」の我に與へし所のもの。我は既に肩を垂れて市を往くの愚をなすを用ひず。我は特別に聖別せられたる國民の一階級なり。我の爲す不道德は隨分甚だしき程度まで問はれざるなり。我に要する唯一の能事は、蠅を殺すよりも容易

に我が兄弟の××××事なり。我は神の面を畏るゝの要なし。上官の命に唯々たれば足れり。嗚呼我は屑を嚙まざる能はざるなり。

十二月二十九日。主よ、放蕩なる汝の第二子は再び汝より離れ去りぬ。彼は何處にさまよひしか。彼自らこれを知らず。されど彼は美食して心餓ゑ、暖衣して靈寒く、善住して魂戰くを覺えぬ。彼は語るべく多くの口と鋭き舌とを與へられたれども、彼の聲悉く血と涙なかりき。彼の立てりし所は苦咲き滿ちたる曠野なりしかど、其處に芬香なく、軟風なく、胡蝶なく、小さき蟲と獸となく、空に濕ひ、地に暖か味なかりき。彼は美しと思ひぬ。されど內なる人痛く憂へて寂寞と悲痛とを告ぐ。彼の擡げたる灯屢々搖がんとす。憐れむべき彼は再び主の御前に歸り來り小さき其頭を俯せぬ。七度を七十倍せるまで罪の子の罪を許し給へ。主よ、願くは彼の悲しむべき放蕩を許し給へ、而して彼の口を一となし、彼の背に笞を加へ給へ。彼再び聲を擧げて彼の懺悔を續くるに至らん。

今正に十二時二十分前なり。寒威坐ろに膝を襲うて、心戰く。我が弟既に眠り、灯のみ滋々として夜と相囁けり。我が時至りぬ、主よ、我が筆を動かし給へ。嗚呼我は屑を嚙まざる能はざるなり。形ありて心なきものあり。人これを何と云ふや。人にありては卽ち痴、物にありては卽ち虛、世に用なきものゝ最極ならずや。嘗て人國家を有しき。嘗て世界の小部分自ら世界をなし、各世界他と交通する事容易ならざる時にありて無名の國家は成立せり。而して此國家遂に名を生じ、權威を生じ、××を生じて今日に至りぬ。されど主よ、顧み給へ。名と權威と××とを孕みたる母は既に死して名のみ殘れるなり。而して人は粗忽にも未だ嘗て其死に思ひ至らざるなり。かくて曰く、

國家は嚴乎として存せり。人の子は其前に塵たるべし。と。

人の子は「無」の前に塵たるべしとや。主よ、願くは虛に步むものを覺して彼等の足地を踏ましめ給へ。彼等をして國家の今に×××を悟らしめ給へ。

我かく叫べる時、主の聲高きより聞えぬ。聞け汝に深傷の如き罪殘れり。國家は汝の疵の上に生じたる假皮なり。汝の傷

癒されん時汝の假皮亦自ら落ちん。默して再び汝の內なる罪を見よ。と。嗚呼國家ありて相戰ひ相爭ふ何の故ぞ。「爾曹の中の戰鬪と競爭は何處より來りしや。爾曹の百體の中に戰ふ所の慾より來りしにあらずや。爾曹貪れども得ず。殺す事をし嫉むことをすれども得る事能はず。爾曹競爭と戰鬪せり。」

十二月三十一日。 明治三十五年遂に逝くに二時間を餘さず。顧みて過去の一年を思ふ。爲せし所何事ぞや。泣くべき時に笑ひ、笑ふべき時に泣き、寸時を侮り費して永遠の面に摩する可からざる缺陷を造り、自ら感情を欺きて屢々不退の路を誤りぬ。今も尙我れは己れの力によりて事を爲し、己れの構成したる思想の上に我が立脚の地を作らんとす。かくて汝の爲せし所は悉く水泡のみ。虛僞の上に立てるもの、一指をだに地上に印する能はじ。

されど此年は我に忘る可からざる年なり。嘗て札幌に在りて心の衷に落されたる芥子種は、我の懼れてこれを拒みしにも拘らず芽を吹き葉を生じて今は其處に紫美はしき影を生じて空の鳥の巢ふべくなりぬ。今我が心に熱して滅せず、我が沈思默考する時矢の如く來りて胸を貫くものは、我が此世に於て取るべき天によりて與へられたる業なり。我常に己れの足らざるを悲しみ、神の御前に面を蔽はんとする時にも、我が衷心には此事往來して全く止むの時なかりき。我は此一年これが爲めに苦しみ、泣き且つ祈りぬ。我の願ふ所は、國民に眞正の趣味を解せしむるにあり。國民が天と地との意を知り、天と地とを主宰し給ふ神を知り、我等が父の前に願を垂れて我等と子孫の未來の爲めに正義の汎き事水の地を蔽ふが如からん事を祈るにあり。哲學の深奧も、美術の極致も、文章の大觀も、事業の成就も一片の堅固なる信仰の前に何者ぞや。我若し信仰に進むを得ずんば洵に我が衷の人醫す可からざる痛みを覺えん。

昨日我が愛するもの來りぬ。我は彼と神田を逍遙しつゝ半日の淸談に耽りぬ。彼は我と共に敎育の事に從事せずやと云ふ。我が心は我が口より前によしと云ひぬ。洵に彼も我も全能の前に無よりも小なり。然かも顧みて我等が過去に導かれし生涯を見れば、洵に攝理の御手明瞭に我等が肩にありしを覺ゆ。人は常に我等二人を呼びて偏屈となし、高蹈となし、無情となし、僞善となすに至りぬ。我等焉ぞ敢て他の罵詈の中にありて晏如たるを喜ばんや。然かも一片主の御手を身に沁みて覺ゆ

る時、我等は凡てを犧牲となし得て餘りあるなり。主は我等に此勇氣を與へ最もよき道を歩ましめ給ひぬ。我等を顧はざるに起し給へる主の聖旨を思ふ時、主は必ず我等に他人の企て及ばざる所のものを爲すべく命じつゝあり給ふを感ずるを禁ずる能はず。我等若し立たざれば主の前に罪人の首なり。

加之我等少しく周圍を顧みるに、洵に我等の道を歩まんとするものなし。我等に百倍千倍せる知識を有するものあり。然かも彼等は彼等の功名に忙はし。我等に百倍千倍せる富を有するものあり。然かも彼等は彼等の貯蓄に忙はし　嗚呼何者か其凡ての假面を脱し迷へる羊を導く牧者の僕たらんものぞ。我等の劣才實に其選にあらず。顧みて其人を求むれども得ず。人の立たざる時我等若し立たざれば主の前に罪人の首なり。主よ、我等をして眞に內部の深奥よりの聲に聞き、我等が此世に盡すべき職務を發見せしめ給へ。實に野は色づけり、我等召されて刈手たるべき自覺何者も奪ふ可からざるを得せしめ給へ。懼るべき運命の汀に立ちて我が小さき靈戰きに堪へず。主よ、力を與へ給へ。

主によりてのみ我等が語りし事業は遂げらるべし。其他何者もこれを成就し得ず。そは力の源は唯主によりてのみ護らるればなり。

昨日の午後神田の市街に、市人は歳暮の多忙に足を空にして東奔西走せる時、緯車經馬梭の機上を走るが如き時、粗衣白面の二書生が相語り相思ひしは決して無益の事にあらず。世に何者もこれを知らず、唯神と我等のみこれを知る。願くは聖鞭我等を追ひて我等に眞の道を歩ましめ給へ。

嗚呼思へば一年の憂思多端なりしよ。家安君死しぬ。增田君病みぬ。兄は遠く仙臺にあり、我は兵營の內に起居す。我時に夜立出でゝ怪魔の如き大建築を見、腸を絞るの涙潸然として云ふ可からざる寂寥悲愁の念に打たれし事あり。我が憐れむべき妹、我が悲しむべき足助、痛むべき孤女、歎ずべき病婦、嗚呼而して我が鈍り腐りたる心！　我幾度か、然り幾度か主の前に血涙を流して我の病みて復び起たざらん事を祈りたりしぞ。

されど主は尙我を世にあらしめ給ふ。我若し立たざれば主の前に罪人の首なり。

聞說ジャンダークの起ちて佛蘭西の億兆を救はんとせし時、彼女は彼女の涙涸れんと見るまで泣きぬと。嗚呼我彼女の涙を知る。主また我を顧はざるに起して此悲しき涙に咽ばせんとし給ふか。

嘲笑と罵詈と迫害と而して恐るべき失敗!!　夜の帳我が睫を壓する如く是等のもの我が內なる人を壓す。

嗚呼されど我これを縷々として何せんや。凡ては聖旨の中にあり。我に他人の滅ぼす可からざる懽喜あり。主こを祝福し給ふべし。

年よ去れ、年よ來れ、我等の前途には月と日とあらじ。

凡てを主に任せん。願くは來る年も亦小兒の祈を爲さしめ給へ。アーメン。

主よ、再び我をして一年の回想と懺悔とに筆を取らしめ給へ。我此聲を聞ける時自ら衷に思ひ巡らしぬ。實に然かなりき。人類に罪惡あらん限り國家の存在は已むを得ざる事に屬す。實に然かなりき。これ凡ての結論にあらずや。然り飲酒博奕姦婬に親しまんとするものは、他者に勝りて重き荷を擔はざる可からず。蟻を砂中に陷れて餌となさんとするアリヂゴクは自ら暗澹たる砂中に蟄居せざる可からず。これ悲慘の極なり。これ姑息の極なり。

我國家を何に譬へんや。××の蓋の如し。人は凡ての惡慾罪惡を此に集め此に其惡性を擅にすれども、其臭を漏らす事遠からざらしめんが爲め卽ち國家を蓋となしてこれを蓋ふなり。又國家を何に喩へんや。白く塗りたる墓の如し。汝等其外を見て莊嚴と威嚴とに打たれ、これを發きて唯白骨と死灰と不淨とを見る。古より國家の眞理を追ひて納れざりし事幾度ぞや。

されど全能の手は、我等の測り知る能はざる攝理を彼等の上に置き給ひぬ。

今上野の鐘鳴れり。正に十二點。神祕なる時限は音もなく裳を移して明治三十五年永遠に我等の知る可からざる彼方の過去に去りぬ。三十五年今逝て我等は彼と我等との距離幾干なるかを知る能はず。畏懼に餘る永劫の海よ、音なく光なく、際涯を知らず深度を知らず。其處に生なく、其處に死なく、忽ち時限と方處とを混溶し去りて寂寞暗澹として我等が脚下に澄めり。

彼等は自ら設けたる穽に入れり。彼等は最も强烈に其罪惡を擅にせんとして國家を造り而して國家茲に相對峙して却て互

に相撃肘するなり。

然かもこれによりて思想の自由は束縛せられ、行爲の自由は束縛せられ、衆議(俗議)の前には凡てのもの犠牲とせらる。我斯の如き所に居るに堪へず。これ豈人生の定住ならんや。

罪惡に住まんとするものをして斯の如き所に居らしめよ。主よ、我等豈斯の如き所にあるべけんや。惡魔彼處に笏を取れり。我の居るを冀ふは天使の讃歌高く淸き所。

我かく叫びて默せる時、聖き者の聲復高きより聞えぬ。聞け汝傲れるもの、行きて神の羔羊を見よと。

嗚呼神の羔羊、彼の靴の緒をヨハネだに解き且つ結ぶ事を得ずと云ひぬ。而して彼は何事ぞや、人類の凡ての罪惡を其身に負ひ給ひ、凡ての罪惡を彼に歸せし人類全般を惡まざるのみか牝鷄の其雛を翼の下に集むる如くし給ひし事幾度なるかを知らず。而して彼等尙悟らずして彼を十字架に擧ぐるや、彼は彼等の爲めに天父の宥恕を祈り給ひき。

かくて彼は、人類の罪惡は人類全體の連帶責任なるを明かにし給ひぬ。

萬軍の主ヱホバ、小さき者遂に御旨を了しぬ。恨悔の涙今更にせきあへざるなり。嗚呼我小なる事に迷へり。

基督の十字架而して我が一年に足らざる軍隊生活、我は比較して此二者を列ぶるの恥かしさに堪へず。

感謝して我が一年を我と我が兄弟との罪惡の爲めに捧ぐ。

空纎翳だに殘さず晴れて霧靄輕く地を白めぬ。幾百千の靈魂が畏る畏る眠りて審判を待てる靑山墓地には、紅白黃綠の送旗翩々として飜り、送らるゝものは勇ましげなる中に無言の寂寞を包み、送るものは名殘惜しげなる下に一種の輕侮を以て來る。赤き兵營、白き墓碑意味深き contrast をなして、其間に黃ばみたる草生の低地連なれり。新兵係りの兵士と士官とは其間を縫うて周旋せり。

遂に步哨立てる赤き門に入り、我は兵營裡の人となりぬ。門を入る時顧望すれば、西方遙か白顏雪衣朝暉に微紅を湛へて東海の女神富士立てり。

一九〇二年

一九〇三年（明治三十六年）

爾曹は互に人の榮を受けて神より出づる榮を受けざる者なるに爭でよく信ずる事を得んや。

——John. V. 44 —

正月元旦。余は先づ聖書を開きて開き得たる所を讀みぬ。而して其讀める所には上記の句に深く引かれたる藍色のunderlineありき。余は一種の鬼氣に襲はれぬ。主は誠によきものを我に與へ給へり。我の自ら信仰と稱して誇る所のものも主の前には人の榮を受けんとするものゝみ。嗚呼罪の骨がらみよ、罪我を虐めり。天の奇蹟に依るにあらずして、我爭で救の道に入る事を得ん。嗚呼我が主よ、我が凡てよ、願くは此強き言葉を鞭として我が骨の骨を笞ち給へ。全能の手のみ我を地獄の汚穢より救ひ出し給ふ。我が血の如き罪を洗ひ清め給へ。

一月二日。日輪轉じて一回又一回、遂に二日は來りぬ。我は此日單身家を出て孤想を懷いて大森より舟に乘じて羽田に赴けり。波平にして鏡の如く、我が紛亂せる心も稍ゝ靜寂に歸して懽意自ら動き、舟床に仰臥して笑み顏に浮びぬ。舟人素朴無心にして帆を操る。嗚呼太古遂に遠き過去にあらず。

羽田に上りて忽ち俗界の雜鬧に入り、余の心は寒く閉されぬ。多摩川の下流六鄕の水海に交はる所、深山の靑葉を洗ひし泉の水濁りて魚遊ぶ海に入る。自然の驚くに堪へたる奇蹟も我には何の思出をも牽かざりき。

泉館と云ふに中食して匆々京に入る。憂愁徒に胸を閉す、何故ぞや。

我の爲す所を顧みれば、影を拾ひて城を積むが如し。虛に築くものは必ず何の日か自ら悲しき報酬を自覺せざる可からず。嗚呼我救はれん爲めに何を爲すべきや。

姑息を夢むるものよ　眞に歸れよ。

我今日兵營の囘想を錄さんとせり。されども我が衷心他の悲しみあり。壬生に送るべき詩を爲さん。

一月三日。 朝兄來り散策を試むべく誘ひぬ。壬生と共に四谷見附の傍なる肉屋に到り中食をなし、四谷停車場より汽車に乘じて大崎に到り歩みて妙華園に向ふ。我等が心は友情に温められて云ふ可からざる聖快に滿されぬ。妙華園に入れば溫室に花咲けり。春先づ此處に訪れしよ。壬生は再三彼の氣暢びたるを告げぬ。余は痛く滿足せり。實に彼は早くも重傷に惱む子なり。余は屢々彼の痛ましき面を見る。白面にして淸く瘦せたる彼の顏は、時に其衷の悲愁を包むに堪へざるが如き事あり。余の情亦衷に痛まざらんや。余は彼に於て實に天才の面影を見る。余は猶彼の生を此世に要す。主よ願くは余等の友情を永く地上に續くる事を許し給へ。彼が美はしと歎美せし greenhouse は下圖の如し。（玆に花園の畫あり）白く塗られたるペンキのガラス壁より、室に育てられて靑き若き草々の輕く透きて見えたる、左なる溜潴に遊べる鵝の色の眞白き、共に新派の色彩あり。

我等菫の數鉢を購ひぬ。高く潔き香人を襲ひて例へなく心を熱せしむ。實に花は我等の交はる自然の中我等が戀人なり。嗚呼世に此如き快樂あるか。心に於て一なる友二人と菫幾鉢と共に、冬より覺めんとする田園の氣に浴す。余は其處よりの歸路、人間若し許されて此如き生活を送り得て死する事を得ば卽ち人生の祕義悉く發き得られたりと思ひぬ。感謝す、主よ淚は常に我等の伴侶ならず。黃地は常に我等の住家ならず。我等は笑みに到り得るなり。我は天國に到り得るなり。

品川より馬車鐵道によりて新橋に到り、京橋に於て相別れ、壬生と共に高木氏を訪ひしもあらず。直ちに歸路に就けり。余は紫の菫の二鉢、彼は白きを二鉢持ちぬ。芳香屢々人を驚かす。我等はこれを愛子に贈らんとして轉た美しき情に滿さる。彼は余に歌を副へよと云ひぬ。余諾しぬ。家に歸れる時夜稍ゝ晩かりき。

一月四日。朝内村氏より借り來れる "Life of St. Francis of Assisi" by Paul Sabatier を讀みぬ。彼は十三世紀の始めにありし人にして、Dante が文藝復興期に於て伊太利思の想即ち歐洲の思想を代表せしが如く St. Francis も亦十三世紀なる時代の代表者なり。彼の宗教を取らんとしてよりこれに服するに至りし迄の經歴は實に弱きもの余の如きを鞭つ事多し。此書の中忘る可からざる美しき尊き思想を下に掲ぐ。（拔萃原文略す。）

午後三時頃より山本に新年會ありて招かれ行き、乾笑百番夜の時永へに逝きぬ。壬生は今朝誰にも告げずして賢しくも湘南の濱にさすらひぬ。

一月九日。朝、兄來り共に櫻井女學校に鷲見孃を訪ふ。彼女の母上病に罹りて身自由ならずと云ひて其眼に悲しき涙見えぬ。嗚呼天地の遺兒、汝の假に母と名附くるものも亦世にあらざらんとするか。汝の前に此世如何に冷かなるぞ、如何に重きぞ。花の如く脆からん汝の心これに依りて破るゝ事なきか。彼女の上に雄々しく美しき若き夫あれ。堅き愛のみ彼女を再び此世に活さん。

去つて内村氏を其家に訪ふ。氏余等を引きて平民主義を說く事極めて勉め、又盛に洋行反對論を主張せらる。余は常に彼の前にありて口を噤むの外を知らず。彼の意志は彼の誤れる思想をも眞理ならしむ。然かも彼が喟然として「我今心に大問題を持てり、此溷濁の世の中にあり蠢々として砂上に築かれたる城郭の修繕に急ぐが神の御旨なるか、寧ろ當世に超然として深想の一端を高きより授くるは神の御旨ならざるか、是れなり」と云ひ「嗚呼されど前者に依りて立つは依然として神の御旨にはあらざるなきか」と余等を凝視せられし時、彼の面上には實に深刻なる苦痛の限なく描かれぬ。嗚呼、神に依るものの苦心余等洵に同情に堪へず。氏よ安ぜよ。余洵に世に價なきものと雖も、神に召されて罪に死せし僕たり。余若し茲を退かば日余を侮り月余を罵れ。神は余を捨て給はず。彼は余に凡てに勝りて強き力を與へ給へり。我既に水に流るゝ砂にあらず。風に追はるゝ塵にあらず。余神と共にありて余は凡てに勝りて愛し得べし。願くは主、余の爲めに愛によりて此靈と肉とを捧げしめ給へ。彼處を辭してより共に海老名彈正氏を訪ひしかども遂に彼に面する事を得ざりき。此に愛するものと別

れ余は松平保男君を訪ひて暫く相語り、而して太田氏に到り新渡戸先生の明日午前十時京に入らるべきを知りぬ。此夜余は愚かなるもの丶如くなりき（井上良三氏來れる夜）。

一月六日。此日より余は書架より Faust を取り來りぬ。暇ある每に繙かん爲めなり。朝十時二十分前新橋停車場に到る。太田氏既にあり。汽車は十時四十五分停車場に入れり。先生は非常に肥滿して列車を出で來れり。兄は彼を評して「髮黑き外國人」なりと云ひぬ。實に此如きものありき。彼は直ちに後藤長官を訪ふべく別れぬ。かくして兄と共に丸善に到りて書籍を見る。Mazzini's Essay あり、垂涎三尺なりしかど嚢中一文もなし。遂に斷念して此處を出で、神田に內藤三郎氏を訪ふ。彼既に移轉して在らず。其儘家に歸る。

午後家にありて "Life of St. Francis" の "Struggle and Triumph" を讀む。肉躍り骨動く。我も Francis と共に emotion によりて震へぬ。彼が赤裸々となりて其衣と其金とを法官に提出し、

"Listen, all of you, and understand it well; until this time I have called Pietro Bernardone my father, but now I desire to serve God. This is why I return to him this money, for which he has given himself so much trouble, as well as my clothing, and all that I have had from him, for from henceforth I desire to say nothing else than 'Our Father, who art in heaven'."

と云ひしの意氣に讀み至りては感激の淚思はず胸に逼る。O noble soul, Thou art forever the shield of degenerating souls. 男らしき人なりしかな。

夕食後山本を訪ふ。始め愛のみなりしかば、彼女に彼の人の筆に成れる手紙を渡し、悲しくも樂しき話頭二三五の屏に上りし頃、直良氏歸り來りぬ。二人にて宗教談に入り、彼は Son of God を否定す。余これを肯定して十一時半に至る。愚かなるかな余。傳道は智慧と論議の上にあらず、唯信仰のみよくこれに堪ふ。汝の云ふ所今夜納れられざりしは、汝の信仰の果敢なき迄に不足なるに依れり。汝の信仰に培へよ。

一月八日。 一月七日の夕、兄余を訪ひ、共に新渡戸先生を訪ひたり。先生は疲勞と風邪とによりて床上にあり。例によりて快活に余等を引見せられたり。一別以來の甘話と苦話とは共に双方の脣に上りぬ。今日はこれ余にとりて實に將來の行動を決すべき日なり。余は兄と相語り相一致したる責務を果すべく外遊するの得策なるを思ひ、これを謀りしに幸にして先生の贊成を得たり。而して先生は余に Philadelphia より汽車にて一時間程なる地にある Haverford College に入學すべきを以てし、而してこれに對する種々の注意を與へ給ひぬ。(兄は Cornell University の方宜しからんと云はれたり) 余の將來の行步は略決定せり。快これより大なるはなし。夕食の馳走となり猶笑談數時にして歸宅せり。

今日朝電話あり。相談すべき事あり來れとなり。余は朝十時先生を訪ひぬ。裳華房主人ありて暫く相語り、其歸るに及びて先生余を近づけて曰く「後藤長官常に皇太子に良輔なきを憂ひ、普通學科の知識を有して然かも純良の人を進めんと欲するの念熱し。適當の人を認むる每に余に謀る。余これ等を拒否し仄かに告ぐるに君を以てせり。今や殿下の四圍俗學者と佞人とにて滿つ。性質の圓滿にして然かも確信あるもの、其內部の行爲を支配し得るものを要するの切なるは等しく認むる所なるべし。我が國の風俗未だ上の下を化するもの多し。幸にして上改まらば下の德に赴く事甚だ易きものあらん。君これに膺るの意なきや」と。

是れ何ぞ優渥なる推薦ぞ。是れ大事業なり。大識見と大確信とあるものにあらざれば遂によく爲すなし。王者の師となりて王者を動かさん迄は、余は其周圍の塵埃と戰はざる可からず。而して之れに打勝ち得ずんば余の事業は一抹の水泡の如し。而して何よりも苦しきは余が地球に於ける我が同志等と離隔せざる可からざる事なり。余は余が酷愛する平民諸君と相絕たざる可からず。余は華奢なる貴族的生活の內にありて、常に不快の胸を撫でざる可からず。然かも我の力若し成功を收め得べくんば、主の力些かなりとも九重の中に震ふを得ば、然り余は感謝して余の胸中の苦痛の多くを甘受すべし。余は滿身の誤解に遇ふも尙滿足の感謝を捧げん。主よ、力なき僕御前に伏して如何にすべきやを懇ふ。何者か微笑みて僕に之れを爲せと命ずるもの丶如し。之れ惡魔の聲なるか又は主の御聲なるか。嗚呼主よ惡魔は屢々いみじくも主の聲を擬するなり。虛榮

心我が耳に囁くにあらざるか。野心我が心を動かすにあらざるか。僕實に惑ふ。願くは直き道、窄き道を歩ましめ給へ。若し御心ならば僕實に主の御前に僕の凡ての平安と名譽とを捧げまつらん。

此日と昨日との中先生の語れる談話の數片を下に記さん。

余問ふ「人間に自由の意志は附與せられたるものか」

答「然り。されども之れ quality の問題にあらずして quantity の問題なり。故に無しと云ふ事を得べし、然して有りと云ふ事を得べし」

余問ふ「人の罪惡を犯すと云ふ、是れ實に難解の問題なり。余は世に稱せらるゝ所の罪人も最後の審判の日には必ず悉く救はるべきものなるを信じて疑ふ能はず。人無智なるが故に所謂罪惡を犯すのみ。如何」

答「然り社會の稱する罪惡と神の罪惡とは全く異るものゝ如し。余は思ふ、神の前に罪惡とせらるべきもの一つあり。即ち人を hate する事是れなり」

先生曰く「余は基督教の特性が self-denial なるを知る。而かも個人として之れを思ふ、self-denial は到底 all round の人を造る能はず。基督教主義の人物の如何に稜角に富みて不具的なるよ。此に至りて余は希臘思潮の偉大を思はざる能はず　余は arts and letter を思度の中に入るゝの極めて不要なることを近來殊に深く感ぜり。余は此點に於て Cromwell よりも Caesar を大とせずんばあらず。然かも顧みて思ふ、希臘思潮は實に偉大及び難き幾多の個人を生めり。然かもその小地積を僅かに守る事三百年泯然として國亡びし跡を思うて、余は個人の團體即ち國家に想及せざる能はず。希臘思潮は個人を作れるも然かも克く國家を造りしかに至りては實に疑問なり。此に於て一個の個人を造らんよりも一個の國家を安全となす self-denial の要あるを觀なんとするなり」

余思ふ此說餘りに客觀的なり。批評的なり。眞に個人を救ひ得るもの豈國家を救ひ得ざらんや。先づ自己の心中に經驗して自己の救はれたるを自覺せば、其思想こそ之れを國家に與へて國家を救ふべきものにあらずや。凡ては末事なり。先づ我

が衷の人をして眞に滿足の聲を擧げしめよ、國家は堅く其上に立つ事を得ん。

先生曰く「余の名若し二十年の後に傳はるを得ば余が望み眞に足れり。明治史を繰返して百年に記憶せらるべき人を思ふ、伊藤、福澤、西鄕の諸子のみか」

午後松平恒雄氏來る。彼は偉大さを有せり。余は彼を以て華族社會の一部の改革をなし得べしと信ず。

憐れむべし、しま子は病めり（五日より）。熱高くして腸チブスに變症するの憂あるに依り、我等が在りし學室に移轉し來れり。病は人を美しからしむ。楓樹の霜に遇ひて紅を呈するが如し。願くは此恩寵によりて、彼女の心中に高きより芥子種の下されん事を。

壬生歸り來りぬ。

一月九日。 朝兄來り共に新渡戸先生を訪ふ。先生正に他出せんとする時にして、今夜五時來れとの事にて相別れぬ。余は兄と遊就館を見、大橋圖書館に到り二三の書を亂見して家に歸りぬ。

午後兄一寸他出し、暫くして歸り來る。壬生と三人にて溶くるが如き懇話をなす。午後五時先生を訪うて共に富士見軒に到り夜食す。

先生の談片。

森本問ふ「余等が一生を通じて爲すべき最大の事業は Gospel of Christ の宣傳にあり。之れ否むべからざる確信なり。然かも其目的を達すべき手段の何なるかに至りては迷多し」

先生答ふ「All roads lead to Rome. は眞理なり。而して君は But, which is the shortest? と云はんとするならん」

森本曰く「然り」

答「然かなり。是れ實に大問題なり。然かも猶問試みざる可からざる大問題あり、曰く Is shortest road the best? 是れなり。吾人は shortest road よりも best road を選擇すべきにあらずや。而して best road は人と所と時とによりて異る。故に余は曰はんとす There is no best road for all, but every one has best road to reach Rome. 故に職業の神聖を確認せよ。教會の中に於てよりも女郎屋の中に天國への近道ある事あり（藝者の實例二件ありし）」

餘談若干ありて辭し歸りぬ。嗚呼余等二人は又別れざる可からざる時に遇へり。余は彼と共に水道橋迄到りて遂に相別れぬ。獨り寂しく堀沿ひの道を歩みて心誠に暗きものあり。如何なれば彼と余との脊々の情此如くなる。實に Emerson は余を僞らざりき。「戀愛には不純平凡の所あり、友誼に至りては崇高の極」と。余に友情の甘さありて凡ての物我か前に何物ぞや。

河野氏の畫室に來れる時、其中灯點ぜられ其妹君なるべし麗はしき聲して vocal culture をなせるを聞きぬ。低徊去る能はず。暫く佇みて何とは知らぬ涙をさへ零しぬ。

足助君に書を致せり。哀れむべし、彼の答に惱む心、余も亦實に彼の如き時ありしか。否々今も尚彼の如し。余が罪其根深くして拔き難く醜き土塊僅かに其亂れを被ふ。余彼を愛せざらんと欲するも得んや。

St. Francis の傳を讀む。所感の句。（拔萃原文略す。）

一月十日。天時に曇りて冬時雨はら〳〵と降り、時に晴れて寒風窻を襲ひぬ。而かも夜に入りては、萬雲悉く地平の彼方に退き、風死し星輝きて天地永久に靜か、月も亦天上高く澄みぬ。

朝 "Life of St. Francis" を讀む。彼の宗教的運動の端緒に入れり。感慨を胸に沁ませ能ふ程多くを讀まざりき。余より或物を奪はれたるを思ふを禁ずる能はず。"Blessed be the tie that binds" を誦し又 "Thousand and one Gems" を高誦して氣稍〻をさまる。後 Swinton の "Outlines of the Word's History" の中 Greece の部を讀む 午後も亦二時間程讀み、三時過に至り日章會の新年會に列すべく赤城の淸風亭に到る。余幼時の友と相別れて信を通ぜざる事數年、孤獨の生活をなすの間にも時々余の心を動かすは彼等の消息なり。人の情此に至りて誠に欺く可からず。彼等と會して如何に甘き酒に醉ひ得んやを

思ふ事なきにあらず。今日余の其席に列せしも、或は期待する所の或者を得んかと思へばなり。然かも凡ては空なりき。其處に無邪氣なく、熱涙なく、誠實なく、淸潔なく、外見と冷笑と輕佻と猥雜とは共にあり。余の心は勢冷く閉ざされざるを得ず。最も早く辭して獨り暗路を首を垂れて家に歸りぬ。悲しむべきかな人の子の運命。徒らに悶えずんば徒らに笑ひ、空しく悲しまずんば空しく笑ひ、己れの如何なる道を歩めるかを知らず。如何なる道を歩むべきかを知らず。朝は夕に勉めん事を思ひ、夕は朝に勵まん事を思ひ、以て遂に地球の表面より永遠に消え終らんとするか。

少しく風邪の氣味にて頭痛を感ずる事甚し。今日は主の許を乞ひて早寢せん。

一月十一日。 昨夜直良氏より電話あり、今日惟一館に黒岩涙香氏の「靈魂不滅論」あるべきに就き、行き聽かずやとなり。余は直良氏の爲めに之れを諾し、九時壬生と共に山本を訪ひて歩して彼所に到る。樓上樓下聽衆充滿して室に入る可からず。而して門前には續々として尙聽衆の來るあり。余等は遂に聽く事を得ずして空しく歸途に就きぬ。靈魂の行衞を訪ぬる　は此如く多し。而して一人の之れに滿足を與ふるものなし。實に野は色づけり、而して刈手は何れにありや。

歸途芝教會の說教を聞く。其處に僞善の祈禱あり、虛僞の讃美歌あり。自ら聖別せられたるを以て誇となし、不信者を禽獸視する教徒。會堂の建築と聽衆の多からん事に注意して、靈魂の建築と信仰の上に多きを置かざる教師。此如き處より世に何のよきもの出でんや。異教徒の中には彼等に幾倍する聖徒あり。世に最も心底より湧きし同情の缺乏せる所は教會なるべし。愛を學ばんと欲せば饑ゑたる虎尙よくすべし。然かも彼等は我等に愛の如何なるものなるかを知らしむる能はず。

近來いやが上に心に沁むるは、赤兒の如き信仰なり。理論なく說明なく「我信ずるが故に信ず」と云へる信仰願くは我に來れ。其時なり、我の神の聖靈に滿されて初めて力ある傳道の鞭を握り得るは。

午後中村主一來り、行郎などゝ共にトランプなどして遊ぶ。其中杉田貫一氏來る。殆ど七八年相會せざる我が竹馬の友!彼は今神戶にあり布引炭酸水の製出に從事せり。彼は既によき一人の商賣人となれり。

夜七時より島津家に於て重埜安繹氏の島繹氏史談あり。父上壬生と共に聞きに行く。得る所は割合に多からず。家に歸り

て後炬燵の中に我等二人父上母上と共に、我が家庭に出入せる人物の評に及ぶ。回顧の情油然として止まず。

我今日遂に書に親しまざりき。時限は瞬時も躊躇せず。我は凡ての時間を賢く利用せざる可からず。我等主の用たらん爲め器を美しく高くせざる可からず。

主よ、願くは赤兒の如き信仰を與へさせ給へ。御前にありて我が靈痛む。

一月二十五日。神我等によき安息日を賜ひぬ。雲日を被はず風塵を飛ばさざりき。

我は獨り本鄕の或る會堂に到りて宮崎湖處子の說教を聞きぬ。聽衆僅かに十三四名、オルガンなくして讃美歌の聲擧り、牧者の祈亦甚だ短かゝりき。されど一種嚴肅敬虔の氣は我其中に拾ひ得たるを信ず。祝福すべきかな、人に美觀と誇張とを供せずして卒直と敬虔とを供し得る人。余は記念の爲め彼の說教の全部を揭げんとす。題は同情なりき。

「同情なる語は、始め我が邦になかりき。若しありとすれば『思遣り』の語稍〻近かるべし。卑俗なれども『貰ひ泣』は最も同情の義に近し 『同情とは英語の sympathy を譯せしものにして sym は同じと云ふ義、pathos は情の義なり。尊き哉同情の語 之れを聞きて我等の胸奥云ひ知られざる美はしき絃の振ひ動くを禁ずる能はじ。同情のみが社會に調和を與ふるなり。空の鳥も地の獸も共に社會に似たるものを持てり。されども其處に調和なく諧節なし。同情空しきが故なり。唯人間の社會に於て微弱ながら靈妙なる調和の一端を認め得るものは、豈此同情のあるが故にあらずや。悲しむものと共に同じき淚を流し、喜ぶものと共に同じき笑みを傾く。人間の性情の微も此に至りて極れりと云ふべし。

論者あり退けて云ふ、是れ自ら裝ふものゝ語のみ。極めて愛他的に見ゆる同情も之れを詮ずれば利己の結果に外ならざるのみ。試みに此に一人の喜ぶものありとせよ。汝は彼と共に笑まずしては汝の心に苦痛を感ずるなり。又此に一人の哀れむものありとせよ。汝は彼と共に泣かざれば一種の苦痛を感ずるなり。故に汝は笑ひ且つ泣くのみ。汝の泣と笑とは其實人のそれと相關る所なきなりと。

是れ冷かなる道理なり、我等は斯の如く說かるゝ時、理論を以て之れを說破し得べき術を知らず。されど我が骨の骨、心

の心は斯の如きを以て滿足するか、人は遂に木と石たる能はざるなり。

翻つて思へ人に辛酸を知らざるものはあらじ。彼等は其肉體に、其靈魂に醫し難き傷を有するなり。而して彼等は此事あるによりて多く他人の辛酸に遇へるを喜び、喜悦に遇へるを妬むの傾きはなきか。人に不幸ある時、其隣人は皆其不幸を悲しむに語をなすなり。然かも彼等の心の心は、己れの境遇と同じきもの一人を加へ得たるを喜ぶが如き事なきか。人の利己心は此如く同情を轉倒するなり。人の利己心は電氣の作用に反せり、即ち自然力に反せり。

されども是れ人の心の凡てなるか。否我等は此外に尊きものを有す、即ち眞の同情心なり。是れ天につけるものにして、人のもてるもの丶中最も美しきものなり。

我等をして選ばしめよ、前のものを取らんか後のものに從はんか。我等は許されて此に自由を握れり。同情同情、嗚呼、我等人是れを捨て、是れを顧みずして何處に適歸すべきぞ。獸に同情あらしめよ、彼は人なり。人に同情なからしめよ、彼は鳥なり。更に一歩を進めて同情の種類に及ばん。之れを分ちて三となすべし。

(1)肉體に對する同情。

是れ衣食住の不足より來る苦痛、老、病等に對する同情なり。我等飽食暖衣せる時、首を垂れて思へ。見よ、都の片端には醜き小屋の月下に黑ずみて、中に獸の如く人の臥せるあり。其處に食なく其處に衣なし。彼等は明日何を着何を食はんかを思ひ煩ひつゝ、曉の白むを待つが如く待たざるが如くに眠るなり。孤兒あらん。寡婦あらん。彼等の苦慮は彼等を老はしめて、見よ、其額には悲痛の皺あり。我も此經驗を持てり。嘗て我が妻病み我が兒病み凡ては我が前に涙の種なりし時我が收入は殆ど杜絶して策を施すべきなき夜、我は神の前に首を垂れて祈らんとして心より思ひぬ、『嗚呼人の子が試みらるゝ時は到りぬ。我等は此一瞬にして餘りに容易に罪人となり得るなり』と。是れ豈最も同情の要せらるゝ時にあらずや。而して我が同情の心の容易く動かさるゝ時にあらずや。肉體より來りし苦痛は、其區域廣汎にして適切なり。肉體の苦痛にある人を見て我等の涙は流れざるを得ず。

(2)半肉半靈に對する同情。

是れ我等が愛するものゝ死の如きを意味するなり。我が意中の人の、我が掌より奪はるゝ我が愛妻の死、我が親の死、我が子の死、我が友の死、我が心は眞に彼等と共に其棺に入りて土の下に行かんとするなり。我が血は彼等の如く冷え、我が靈は彼等の如くうなだるゝなり。其痛切なる徃々人をして死の寧ろ安きを思はしむ。此に至りて人誰か同情の巨腕を拒み得べき。

(3)靈に對する同情。

人の心情高くして深きに至らば、心の衷堪ふ可からざる痛みを覺ゆ。靈の痛み是れなり。罪の自覺是れなり。之れを感ずるの人は少し。之れに同情するの人は更に少し。是れ多く眞面目なる人の逢着する苦痛なり。人一度之れに犯されて復我を慰むるものなし。何處に隱れ場ありや。彼の中に罪あるにあらず、彼は罪の海に沈みて多くの罪を飮めるなり。彼のもがきて捕へしものは罪の潮なり。彼のもだえて握りしものは罪の泡なり。彼上に昇れば其處に罪の水あり。彼下に降れば其處に罪の水あり。眼罪の水を觀るより先きに、罪の水は眼に入るなり。耳罪の聲を聞くより先きに罪の聲耳に入るなり。哲學も我に何ぞ。美想も我に何ぞ。勞働も我に何ぞ。安息も我に何ぞ。世の凡てのもの我に何ぞ。悲しくも彼は渾沌の中にありて獨り罪と相對するなり。人は凡てのものに打勝ち得て餘りあり。只獨り之れを滅亡の國に導くもの罪あるのみ。

此時、此時我に唯一の同情者一人あり。彼はナザレの工匠の子にして十字架につけられたる神の子基督なり。

人は屢々佛敎と基督敎とを以て世界の二大宗敎と云ふ。釋尊と基督とは等しく語らる。されども眞の同情を求むる人は、遂に釋尊に至らずして基督に至るなり。故如何にぞや。釋尊の猶太子にして王宮にある時、一日東門に出づ。老者あり、髮を披り腰をかゞめ悄然として行くに遇ふ。無常の迅速を感じて其日宮中に歸りき。次に再び西門より出づ。病者あり、鬚髮共に長じ形容憔悴して骨に湢るものあり。無常迅速を感じて、其日宮中に歸りき。次に三度南門より出づ。人三五人涙を垂れ棺を擁して行くを見る。これ死者を葬るなり。無常迅速を感じて其日宮中に歸りき。次に四度北門より出づ。釋尊の心は

鸞の無常の觀念に閉されて、快々として樂しむ能はざりき。人間のよく安心立命し得る所は果して何處ぞやと。而して北門の人等亦惶々として堵に安ずるものなき時一人あり、遠離穢土寂滅爲樂を口にして愉然たるを見、遂に志を決して宮中に歸り妻子珍寶を捨てゝ山に入れりと云ふ。こは何を意味するぞ。釋尊は實に同情厚き人なりき、彼は人の病むを見て己れの病めるが如く感じ、人の老ゆるを見て己れの老ゆるが如く感じ、人の死せるを見て己れの死せるが如く感じぬ。彼は之れ等を見てすら、其苦痛殆ど胸を抉るを覺ゆるに、自ら其境遇にある人の苦痛を推察しては、彼は全く晏坐して他を忘るゝに堪へざりしなり。尊きかな彼の深き同情や。唯惜むべし、彼は遂に同情の奥殿に達する能はざりき。彼は同情の第一及び第二の場合に至れり。されど彼は遂に第三の閾門を排する能はざりしなり。

我等をして基督に歸らしめよ　彼は四十日間荒野の試練に遇へり。而して彼を試練すべく惡魔の提供せしものは、肉によりて人の苦痛を醫すの術なりき。曰く、石をパンとなせよ。曰く、萬國に君臨して汝の善政を布けよ。曰く、汝の神性を利用して汝の民を外部より救へよと。されど基督は一もこれに從ひ給はざりしのみならず、凡て之れを惡魔の語として退け給ひぬ。嗚呼これ果して何に依るぞ。彼は人の子の最も要するものを知り給へり。衷なる人の悶えもがきて求むるものは、肉の人の察する如きものにあらず。そはパンにあらず、善政にあらず、奇蹟にあらず、親にあらず、子にあらず、哲學にあらず、道德にあらず、日と月とにあらず、而して宇宙にもあらざるなり。唯我の眞に要するは、我の涙を拭ひ得るものこれのみ。authority を以て我が耳に『汝の罪許されたり』と囁く一連の聲是れのみ。人の子も亦惱めるものなる哉。

而して我は此聲を何處に聞き得たりしや。人ありてより以來聖賢と稱せられしもの世に尠からざりき。彼等は如何にして人類を救はんかを思ひ廻らしぬ。而して其結論とする所は『汝の罪を自覺せよ』『汝の罪を忘れよ』『汝の罪に苦しめよ』『汝の罪を罪ならずとせよ』『汝の罪に悶え死せよ』と云ふに過ぎざるなり。人救はれん爲めに此の如く爲すべきか。我が衷の人は斷じて滿足の聲を擧げざるなり。此時我等の傷を癒すものは基督の同情あるのみ。彼の人類に對する深甚の同情は、遂に人心最奥の要求の微けき聲を聞き取り給ひぬ　而して彼がこれが爲めに搾り給ひし血と、流し給ひし涙と而して捧げ給ひし

祈！　世に何者か彼の如く勇ましく罪悪に戰ひ勝ちしものありや。世に何者か彼の如く優しく人類に同情し給ひしものありや。見よ、其右の足は悪魔を蹈み左の手を以て我等を招き給ふ。基督は今も我等が眼に新たならずや。

世に人間最奥の苦杯を嘗めざるものは、孔子と釋迦と而して他の哲學とに行け。我等若し基督を失はゞ凡てのもの我等に空なり。罪人の首は基督に行かざる可からず。垂死の病者は良醫を要す。祝さるべきかな、我等の病重きが故に我等は始めて良醫の面を仰ぎ、其慈愛の顔ばせと絶倫の技倆とを身に沁みて知るを得たりき。深き苦悶のみが深き同情を味ふなり。深き同情を受くるは人間至大の幸福にして、深き同情を分ち得るは人間最大の事業なり。

人間の求め得る同情の粋を何處に見出さんとするや。

『人の中より選ばるゝ諸の祭司の長は人の爲めに神に屬く事を任ぜられて、罪の供物と犧牲を獻ぐる事をなすものなり。己れ自ら荏弱に周るれば亦愚昧なる迷へるものを憐れむ事を得るなり。之れに因つて民の爲めになす如く己れが爲めにも罪の供物を獻げざるを得ず。此尊貴は、アロンの如く神の召を受けたるものにあらざれば自らこれを取るものなし。此如く基督も自ら尊びて祭司の長とはならざりき。爾は我が子也。我今日爾を生めりと言ひしもの彼を尊びてしかなせり。又別の篇に爾は窮りなくメルキセデクの班の如き祭司たりと云ひ給へるが如し。彼肉體にありし時、哀哭び涕を流して死より己れを救ひ得るものに祈り、又懇求をなし其敬畏によりて聴かるゝ事を得たり。彼子たれども受くるところの苦難によりて順ふ事を效ひ、既に完全ければ凡て彼に從ふものゝ永救の原となれり。彼はメルキセデクの班の如き祭司の長なりと神に稱へられき。』（希、五章一――一〇節）

我はこれを以て諸君に告げんと欲す。」

（書き行く中に、其文中我が自身の思想の方寧ろ多くなれるを覺ゆ。されど大體に於ては多く氏の云ふ所に違はざりしを信ず。）

余は此處を辭してより、巣鴨家庭學校に井上良三氏を訪ひしが、在らざりしかば暫く留岡氏と談りし後去つて野に出でぬ。

愛すべき趙日我が心身を溫め、我は赤兒の如く自然の懷に倚りて無心に乳房を探りつゝ飲めり。嬉しとも悲しとも恨めしとも懷かしとも辨へ得ざる思、涙誘ふまでに胸に逼る。我は永遠の彼方に生れし子、假に地球の胸に枕すれば其思遂に解き難し。是れ此世に於ける思にあらず。嗚呼慕しかる無窮の彼方！　我再び彼の門を通らん時此苦しき謎は笑まひと共に解けん。實に我が有てる我が心に、我の悶えても知る能はざるものありて潛めり。此者我をして思ひ痛ましむ。

小手毬に紅絲くけてたもと伏せてやは手に抱きて少女子笑みぬ
少女子のひいな二つを緣に捨てゝ冬の日寒う何地去にけむ
神斷ちし紅の小絲に君よ笑めな泣かんにそれもたびあへぬ我（弟に）
いはけなき弟なきし其夕我も悲しき罪悔い泣きぬ
とき紅にひとみそらするねぢけ心僞善を懲す鞭我を追へ
さは云へど色は野花に讓りてん萩よ來ん秋淋しう咲くな
戀を呪ふ目しひに君よ涙說くな說くな目しひに戀呪ふ我に

二月五日。僕はこれから、日記は僕の身に大事件が起つた時のみつける事にしようと思つたが、矢張りそれは駄目な樣である。日記をつけ慣れた身には、日記を一日怠る事は一日を全生涯から控除した樣な氣がする。それ故これから再び毎日の日記を始め樣と思ふ。今日は其手始である。

今日は空が美しく晴れた。終日軒を圍つて點滴の音が聞えた。一昨日積つた雪が融け去るのである。朝聖書を讀んだ。羅馬書である。難解の文は實に此書である。疑問と思はるゝ個處が尠くない。僕が疑へる所は彼の書に於ては直覺的にポーロの結論のみが示してあつて、其所以が說いてないと思ふ樣な所がある。又基督の基督教にあらずしてポーロの基督教と推せらるゝ所も尠くない。僕はどうしてもポーロよりはヨハネに行き度くなる。僕はヨハネの愛の普遍的なるに感ぜざるを得ない。元來を云ふと普遍的でないものは愛ではないのである。勿論普遍的と云うたとて、僕は愛の正面のみが働くものと露も

思はぬ。其裏面なる義なるものが、働く場合も多いのである。然かも今日に處して、僕は悲しくも、愛を裏面より用ふる場合の方が寧ろ多いのを歎ぜずには居られぬ。我が胸にかき抱くべきもの、接吻の交換を爲すべきものを捕へて、之れを面責し叱咤するのは世の何者よりも苦しい事と思はれる。此に至つて僕はヤコブ書の價値の容易ならざるを認めざるを得ない。人々は何故ヤコブ書を重んぜぬのであらう。

それから例の Myers の Ancient History を繙いた。これは Greco-Persian War であつて、眞に愉快を以て讀んだ。希臘史を讀むとどうも人間の偉大を感ずる。これは事實だ。然しこれと共に如何に偉大なる人格も、――彼の時代の偉大なる人格は 全世界史中人格發展の最極に達したと見てもよからうが――其行爲の動機を窺ふ時には、殆ど一種の失望を感ぜざるを得ない。其處には野心があり、利慾があり、功名心があり、妬嫉心があり、地につけるもの計りだ。人格の大を思ふと同時に、人類の小を思ふが切である。此に至つて吾人は、Humanity と共に Divinity を要する、少くとも僕の行く道は、絶對的服從の道でなくつてはならぬ。僕は甘んじて、Divinity をして全 Humanity を支配せしめよう。十時頃吉川銀之丞氏が來られた。色々農場の話などして中食を共にした。午後一時半頃歸つた。土地の主なる事件は

(1) 小作料を低減する事

(2) 防風林の貸付を乞ふ事

(3) 市街の住地撰定の事

(4) 全地積の二割を殘すを得る開墾法は採用すべきや否や

等なりき。彼と共に四谷見附まで到りて彼と別れ、それから榊病院に河野夫人を訪ふ。信子君もあり。後愛子氏も來た。暫く話をして居る中、何處かの妻君が見舞に來て、面白をかしく其夫なる人の惡口と、自分の手柄話をした。隨分思ひ切つた人種もあつたものである。辭して家に歸り、暫く Mazzini の Essays を讀んで字が見えぬ程暗くなつたから止めた。

中食後喜寛氏が來り、健助氏が來りて話をして居る中、晩く父上も歸られて思はず長居した。哀れなのはお千代さんであ

る。病氣の悪い爲めに全く氣を滅入らして、今日は母上の處で大層泣かれたさうである。彼女は基督信者であるが、彼女の凡ての境遇は彼女を斯くなしたもの丶如く見える。然し僕は切に彼女の上に宗教的意識の一層强からん事を望む。僕は彼女の爲めに少しく勤めよう。彼女も健助氏も共に可哀相である。

今十一時二十分過である。これから少しく讀書し、感謝して今夜の安息を受けよう。

思ひ出す毎に苦しき事が二つある。増田、森本の兩兄に手紙を書かぬ事である。然し近日中に必ず二者を果すであらう。

僕の筆は必ずしも僕の思ふ時に動きはしない。

二月六日。（金曜日）。今日も祝福されたる日と云はねばならぬ。實に好い天氣であつた。今日から、僕と英夫と行郎との三人が約束して、床は自分にて片付ける事に取り極めた。家風なる使役的の制度は決して永續せしむべきものではない。同じく基督の下にある僕婢にして、互に相使役する理由がない。僕はもつと他人の職務に尊敬を拂はう。他人の職務を尊敬する事は、自分の勞働を尊敬する事である。

朝歷史を讀む事を忘れ、世界お伽譚の中『鷄の法王』と云へる一話を英譯した。新渡戸夫人に訂正を乞はん爲めである。午後もそれに費した。尤も午前の中十時十五分迄は、僕は新刊の『明星』を通讀した。彼女は再び其聲價を引下げた樣だ。忠實なる記事は多く見又は聞く事が出來なかつた。

午後行郎と共に齒醫者に罹り、永き間待たざる可からず。後其處に在る間 Cuore を讀んだ。其中直良氏が來たから、これに行郎を託して新渡戸氏に到つた。時間が來たからである。

六時頃彼の家を辭して本郷の中央會堂に社會主義演説會を聞きに行つた。斯波、堺枯川、幸德秋水、木下尙江、片山潜、安部磯雄氏等が出演した。かの大なる chapel が殆ど充ち滿ちたのは驚くべき盛會と云はねばならぬ。パンの要求が如何に多きかゞ分る。人は實に弱點に滿ちた動物だ。彼等は、肉眼が外に開かれてある爲めに、彼の體軀と其周圍とを見る事は至つて慧敏であるが、遂に內なる人を見る事をしない。彼等は、己れの傷を癒す前に先づ人の傷を癒さうとして居る。元來宗

教問題——と云つては少しく範圍が狹からうが、僕は神と人との關係、靈と肉との關係を意味するつもりである——に深い强い立脚地がなくしては、社會問題の如きは攻究すべき暇がないと思はるゝに拘らず、事實は反對で、社會問題には耳を傾け眼を聳てながら、一層中心的の問題には些少の注意をも拂はぬ人が實に多いと思ふ。是れ實に日本の學者間、又實業家間に於ける信念の薄弱實行の缺乏をなす所以ではあるまいか。人の頭の蠅を追ふ事は割合に易々たる事である。然し易々たる事が、常に善なる事ではない。

木下氏の演説は實に傾聽すべきものであつた。僕はそゞろに彼の人格の美しさをも感ぜざるを得なかつた。教育勅語を論ぜんとした時、演説中止の命令が降つた。由來勅語は、（以下五行略す）。神は我等に substance を與へ給うた。然しながらppearance は地獄に就くべきものだ。僕等が何處まで踏みつぶさねばならぬものだ。

歸途に就いたのは大分晚かつた。一天霽れ盡して星斗闌干。莊嚴は一種の悲哀を誘ふ。寢に就いたのは一時半。何事を考へ何事をなしたかは僕自身すら知らない。「一定の動作を實現した人もあらう」などゝ、殆ど分らぬ事を書き付けて床に入つたのであつた。餘程馬鹿だ。

二月七日。（土曜日）。今日も好い天氣であつた。朝 Myer の Ancient History を繙きテルモピレー及びサラミスの戰爭を讀んで胸を轟かして居つた時、吉川銀之丞氏がやつて來て、これと話をした爲めに興が破られた。土地の件に關し、少しく相談して、氏は歸つたから再び晝まで讀んだ。又高杉榮二郎、永野武一郎の兩氏に Letter-writer を送る爲めに手紙を書いた。

午後はしま子を訪ひ、彼女の爲めに "Christmas Carol" の飜譯を讀んでやり、暫く語つた。彼女は段々恢復に向つて來たので實に喜ばしい。自分の室に歸つた後『文界の大魔王バイロン』を讀んだ。其人生觀が如何にも痛快だ。勿論病的だが、的確な眞理がいくらも拾はれる。僕は此書に就ては、去年の日記の中に誌して置いたから多く云ふまいが、基督教に對する彼の批評の如きは殊に面白い。僕の基督教に對する疑問は略玆にも疑はれてゐるが、然し悲しい事には、彼は余に其適當なる答を與へ得なかつた。彼は到底破壞者に終るべきものであつた。然かも彼の痛罵を得て、余の信仰はより神に近づく。

父様、此卑しき僕には、此宇宙に對し少なからざる多くの疑問を有しますが、唯あなたの御存在と、基督が我等全人類の爲めに——義人の爲めに而して惡人の爲めに——涙を流し給ひ、十字架にまで懸けられ給ひし其事實は否む事が出來ません。どうか僕の弱く消え易き信仰を勵まして下さい。隣人を自分の樣に愛する事が出來る樣にさして下さい。此小兒の如き心を、本當に尊敬が出來る樣にして下さい。

夕食後父上と共に、島津邸に、重野氏の講話を聞いた。考證先生が枯骨の如き考證を羅列する無趣味とは此事を云ふのであらう。夜の九時二十分頃家に歸つた。歸途見上ぐれば空の高さ潔さ、星の爲す無限の說敎のヒシ〳〵と胸に沁みる。

家に歸つて後、兄に手紙を書いた。我が一方の苦痛は是れで癒されたのである。兄に手紙を書く每に、僕が日々雜然と感じつゝある思想が、稍〻纒まつて顯はれる。僕の衷の人の經歷は、僕の日記よりも寧ろ兄への手紙の方が盡してゐるかも知れない。

二月八日。（日曜日）。約翰傳八章一の一一。今日 Expositor Bible を讀みて、今迄の節が事實にあらずして後人の插入せるものなるを知り、余は云ふ可からざる失望を感じぬ。事實が全く虛無に歸するとは、世の何物よりも痛ましき事なり。殊に余は、此節を新約聖書中深く愛讀しぬ。余は之れを讀む每に云ふ可からざる美感胸に逼りて、余の如きすら淸き高き涙に誘はれざるを得ざるなり。此節の聖書より取り去らるゝは、余に取りて戀人の我が胸より取り去らるゝよりもつらし。余は、此節を架空の說話として葬り去るに當り、余が受けたる感化の一端を玆に記さんとす。

我我が心の奧遠く行きぬ。見よ、其處に大なる國ありて、父と子と兄と妹と、凡ての有司と學者と富めるものと、奴隷と無智と貧しきものと、凡そ我が肉の眼に見得る、凡てのものは其處にありき。我は其處に一人の若き婦を見出しぬ。名を、Ego と云ふ。彼女實に見るに麗はしかりき。其血には若き情躍り、其眼は愛の輝きにうるみぬ。而して見よ、我は實に彼女其者なりしなり。

實に我は見るに麗はし。我が眼は愛の瞳を求め、我が耳は愛の囁きを求め、我が口は愛の唇を求めぬ。我は美しきものを

抱かんと悶えぬ。我が悶えは實に大なりし。我が心の優しさは我を水となし、我が思の高さは我を火となしぬ。
我遂に一人の夫を持ちき。されども我が愛は成就せられず、我が心は痛ましく悲しき大なる空虚を得ぬ。空虚夜となく晝となく我に告げて云ふ、汝我を滿せ。然らざれば汝は悶死せん。汝の心を滿し得ざるものは、汝の夫にして汝の夫にあらず。汝の愛は空しく朽つるに堪へず。汝何ぞ愛を輕んずるやと。
嗚呼、我が愛の凡てを捧げ得る祭壇は何れにありや。我を抱きて、我に滿足の接吻を與へ得るものは何れにありや。我が血のゆらぎは我を狂はしめぬ。
嗚呼神よ、實にそは罪なりき。我はよくそを知りしかども、人の子は是れに逆ひ立つべき力を知らざりし。我は遂に姦淫を敢てしぬ。かくて我が少女より有したりし唯一の美しきもの、純潔は泥に塗れる。
姦淫の一夜は蜜の如き甘き夢なりき。されどそは忽ち醒めて、悲しいかな、我が心には空虚復廣まりぬ。何とはなき痛み、針の如く我が心を刺すなり。空虚は猶我にそを滿たせと囁くなり。我此時深く惑ひぬ。我が夫ならぬ人も我が全き愛に酬ゆる能はず、我が此熱き胸を冷すに足らず。我が全愛の酬はれざるは、是れ人間一般の運命にあらざるなきやと。かくて我我が前にあり〳〵と死神の恐ろしき腕を認めぬ。我が心は思はず戰けり。
此時空虚は又我に囁きぬ「愚かなるものよ。他の少女を見よ。彼女等は凡て其全愛を酬はれたり。汝の空虚を滿たさん迄、汝の道を曲ぐる勿れ」と。此譬によりて、我が心は猛然として決し、かくて我は全く罪の淵に沈み終りぬ。
嗚呼かくて我はそも幾度道ならぬ夢に我が愛を求めけん。されども我が渴は猶休まざるなり。我が夢は益々汚れて、我が心の痛みは益々深まりぬ。然かも此遣瀨なき痛みを暫しなりとも忘れんには、我が汚き夢を益々汚からしめん外に一の道だに殘されざりしなり。
我時に胸を抱きて、人の子は如何なれば、かゝる恐るべき狹き道を歩まざる可からざるかと悶え泣きたる事ありき。されど空虚は我に語りて云ふ「事既に遂げられぬ。悔悟は汝に痛き苦しさを齎すのみ。汝の道を尚遠く續けよ、其終極に樂土あ

らん」と。此時なしたりし我がほゝゑみを、若し他の人ありて窺ひ見なば、彼は全世界に醜惡悲慘を集めたる相を讀み得しならん。

かくて我一日又姦淫を犯せり。學者とパリサイの人是れを見て、直ちに我が腕を捕へぬ。「來たれ、モーゼの律法を忘れたりしや。汝は石にて打たる可きものなり」と。我はあなやと驚きて、彼等より逃れんとしたれども今は詮なし。我は恥辱の捕虜となりて、席庭の人數多（あまた）ある所に牽き行かれたり。老いたるも幼きも我を打まもりて、彼處に姦淫を爲したる獸ありと云ふ。

嗚呼、我が心の奧なる國にも、學者とパリサイの人とありき。我は學者とパリサイの人の、痛く我等の間に尊ばるゝを知れり。彼等は、我等の知識と我等の正義とを代表せる嚴かなる人々なりき。我は彼等を以て人を裁き得るものなりと思へり。我は彼等の前に怖ぢ恐れぬ。されども我が云ふ可からざる恥辱の裏面には、正直に云へば、一の驕慢ありき。我が罪惡の觀念は、其中心に尙或る辯護の聲を包みき。我は竊に思へり、彼等は如何に審判人なりとも德望家なりと雖も、我に死を與ふるの權利なし。我が犯せる罪は總て我を苦しむる彼等の上に積まれんとは、我が内心の我に囁く強き聲なりき。我は隱す可からざる怨恨の眦を擧げて彼等を仰ぎ見ぬ。彼等の顏の上には、我が罪を憐れむの色なし。我が罪に對する義憤の影だになし。其面は冷然として氷に刻まれたる像の如し。かくて彼等は、師と呼べる一人の若人に近づき集まりぬ。かくて語れる聲はかくなりき。「師よ、此婦は姦淫を爲し居る時その儘捕へられしものなり。此如きものは石にて擊ち殺すべしと、モーゼ律法の中に命じたり。汝は如何に云ふや。」

かく云へる時彼の若人は、身を屈め指にて地に書きつゝありき。我は一目にて其基督なるを知りぬ。何故なりしぞや。深き罪惡に沈淪せるものは最もよく他人の犯せる罪惡の程度を察し得るなり。而して見よ、かの若人の面には罪惡の塵影だになし。若人は徐ろに首を擡げて、我が顏をぢつと視つめぬ。其眼の底には潤みありき、其唇には慄ひありき。其眉根には無限の恥色ありき。其頰には云ふ可からざる同情ありき。我は此時始めて、我が罪惡を眞底より悔いぬ。畏るべし、我が罪惡を眞底より知りて之れを裁き得るもの玆に獨りあり、我如何に悶ゆるとも彼の前より免がるゝ能はず。嗚呼、我が道遂に途絶えぬ。

我は面を伏せて再び擡ぐる能はざりき。此恥かしさ、此恥かしさ。此罪、此罪。我は死を欲す。されど死も亦我が罪惡を葬り終るに足らざる時、我ははた何處によりて此恥辱の網目より逃るべきや。我は遂に逃るべき所なし。遂に堪へずなりて、自ら面を被ひて痛く哭きぬ。若人は其時忽ち起ち上りて「汝等のうち罪なき者先づ彼を石にて撃つべし」。

我が耳には、是れ實に百萬の聲援なりし。否々、是れ我が罪惡の的確なる判決狀なりし。されど我が聖く尊きものとなせし學者もパリサイの人も此若人の一言には抗し能はざりし。彼等は意氣地なくも、長者より幼者に至るまで逃れ去りて、廣き石疊の中央に、今は泣きくづをれたる我と、神の如く立てる基督のみ殘りき。「婦よ、爾を訴へたる者は何處へ行きしや。爾の罪を定むるものなきか。」確乎として近づく可からざる聲は我が耳近く聞えぬ。我が心は痛くそを恐れて然かも怪しくも引き寄せられぬ。「主よ、誰もなし」とは我が感激と懺悔とに滿ちて纔かに放ち得たる最後の一言なりき。我は之れを以て正しく基督によりて罪を定めらるゝものと覺悟しぬ。地獄に燃ゆると聞く光なき焰は、今我が眼の前に明らさまなり。

嗚呼、されど若人の語は實に意外なりき。彼は靜かに我が肩を撫でつゝ、己が愛子に囁く如く宣ひぬ「我も亦爾の罪を定めず、往て再び罪を犯す事勿れ」。

我 Ego は此時云ふ可からざる懺悔と、懽喜と自責と感謝との涙に震ひ戰きぬ。

午後よりは山本に到り、雜談と雜書とに親しみ、夕食の馳走になりて家に歸りぬ、此夜は農場の收支計算をなす。

二月九日。（月曜日）。朝、家にありて少しく myers を讀み、又英作文を作りて晝に至りぬ。午後 Cuore 及び英語の話書を讀み、午後四時より新渡戸夫人の處に到りて英語の練習をなす。夕食後松平恒雄君來り、九時過まで相語りき。談は宗敎の事に及びぬ。我は眞面目に我が過去の苦き經歷を語りき。一時半就寢。空美しく晴れぬ。しま子の病狀又變じ熱度高し。

二月十日。（火曜日）。晴天。午前は myers の History を讀みぬ。Athens の全盛時代なり。希臘文明の華の時なり。彼は廣く讀みて、百花咲き滿てる花園に入りしが如き觀あり。之れに對すれば、Rome 最盛の時は綠樹天を蔽ふ盛夏の景か。

希臘文明には、我存外多くの defects ありて潜めりと思ふ。古典復活の餘、此文明の盛觀に迷眩して其短處を忘るゝあらば、そは個人の上に將た社會の上に一種の混亂を宣言するものと云はざる可からず。Aristides の如きは此國民中特色の人格か。Themstocles, Pericles の如きは此國民の權化か。

午後英文法書を讀みつゝありしに、吉川氏來りしかば之れに會ふ。三時より行郎と共に醫師藤島氏に到る。『小天地』の新年のものを讀む。我邦の思想界にも、放逸なる厭世觀と悲觀的自我主義との唱道さるゝは事實なり。誰か起ちて此渾沌の中に信仰の活火を投じ得るものぞ。信仰ある處に人生あり。信仰なき所に人生なし。然り、其處には死滅の宮殿あり。

しま子の病尙熱降らずと。

二月十一日。（水曜日）。朝、餘り空よく晴れたれば、午後より霞める如く曇りぬ。甚だ暖かなりき。朝より何處かに外出散歩を試みんと思ひ立ちたれども、午後より新渡戸氏に到るの約ありしかば出でずして、家にありて河野氏夫人の爲めに、宮崎湖處子の演說の大體を筆記し、朝より晝に及べり。其間に信磨氏來られぬ。彼は全く under level に陷りぬ。彼の運命は定りぬ。余は彼を見る每に、浮世急潮の如何に速かなるかを思ひ、社會の人を左右するの如何に殘酷なるかを思ひ、茲に一種人世一面の悲劇を讀むの感に堪へずして、我が胸痛みを覺ゆるなり。

午後より彼の草稿を携へて、河野氏夫人を訪ひぬ。居る事一時半にして新渡戸氏に到る。夫人は朝より客に接し居りたりし故、十分の教授をなす能はずと云はる。四時頃別れ、我は義雄さんと共に家に歸りて、無邪氣なる話をなす。彼は非常に我が家を喜べるものゝ如し。十時過ぎまで預りたる後、誘うて其家に送り遣りぬ。

夜は Mazzini の Essays を讀みぬ。微弱ならざれども敢て其目的をも說明し難し。

『一葉全集』歸り來りぬ。我は彼女の天才を愛す。我は彼女の深源なる同情に服す。彼を讀む時、我が心は一種の inspiration を受けざる事なし。早寢。

水仙に與ふ

汝の姿のけだかさは
　都の塵を蒙らず
　市のどよみを打ちしづめ
御空に匂ふ新星の
　淸く若き趣もて
　我の心を堅く抱く
汝の香のやさしさは
　きずなく凝りし水晶の
　山姫の息氣に溶けて流れて
　甲斐が根深くしたゝる如く
　寒くけだかき姿切に
　　我の情を深く包む

二月十二日。（木曜日）。朝の空は晴れたれども、夕暮暗む頃より細雨降り出で、今は嘈々の靜夜の寂寞に伴うて來る。我が心は深く沈み、何とはなき痛み胸を刺す。我はかゝる時に我が衷なる人の汚穢を思ふ。而して我が同胞の汚穢を思ふ。我が心は同情に動かざる能はず。肉と心とに堪ふ可からざる笞を受くる幾多の友よ。願くは我をして汝の爲めに、心身を抛たしめよ。我は今正に君等の爲めに捧ぐべき或る者を造りつゝあり。嗚呼我に若し君に對する同情の念なくば我が此苦慮多き生活は將た何の要ぞ。神若し人類の爲めに我を造り給はざりせば、我は既に已に、此悲痛多き人生の旅客にはあらざりしならん。嗚呼然り、時には眞に生命の値を疑ふなり。されども我に血と涙とを分つべき同胞あるを思ふ時我が心は感激に震ふなり。主よ、汚れたる儘に我を受け入れ給へ。我は自ら汚穢を淨むべき方法をだに知らず。されど君は我を導きてシロアム

の池に到らしめ眼明かになるを得て、我が同胞の墓はしき面を熟視する事を得んなり。主よ、我を保ち給へ。我は屢々其御手より逃れんとすればなり。

朝 myer の Ancient History を讀む。ペロポニーサス戰爭より Athens の衰亡に至り、又アレキサンダア大王の死に迄至りぬ。さしも榮えし我が世界の桃源は遂に一抔の土と化しぬ。自由の榮えし處、藝術の振ひし處、知識の萃りし處、英雄の生れし處は、人心の腐敗と共に頽然として破滅の末に走りぬ。希臘の末路は、希臘が生じたる幾多の英雄の悲しむべき末路に似たり。Themistocles を評せる言の如く、彼女は實に "greater in genius than in character" なりき。genius は彼女を世界の師表たらしめぬ。而して悲しい哉、character は屢々彼女をして彼女自らに反かしめぬ。詩人ゲーテの生涯に見て我は希臘の興亡を思ふ。我は Athens の衰亡を讀み至りし時、思はず數行の涙を垂るゝを禁ずる能はざりき。偉大なるもの滅びぬ。我は今日愛するものゝ我より奪はれたるを感ず。我は寂寞たる一種の悲哀の念に堪へず。

午後 Mazzini's Essays を讀む。Carlyle に對する評論を讀み終れり。余は此評論を讀みて、著しく Carlyle の長所と短所とを味ひ知りぬ。之れ等は凡て余が念頭にありしものなりしかども、Mazzini によりて宛ら余が心を暴露せられたるが如く論ぜられぬ。然かも評者が Carlyle に對する厚き同情に對しては、余は云ふ可からざる愉快を感ぜり。現時評壇の如く、聊かなる意見の衝突の爲めに、互に嫉妬の念に驅られて罵詈の交換を事とし、激しく戰ふ(寧ろ野蠻的に摑み合ふ)を以て一種の名譽なるかの如く思惟せる時、余は此論文を讀みて眞に敬慕の情に堪へざりき。

夜は卷頭なる Mazzini 傳を讀みぬ。

"If there is a man, universally respected in Europe, and who, during forty years of activity, unequally devoted to the service of a great cause, hes really merited this respect, it is Mazzini. He is incontestably one of the noblest and purest individualities of our age."

彼の論敵なりし Bakounine はかく評しき。

嗚呼我は如何なれば、我が周圍に悲しき友を多く有するぞ。是れ眞に感謝すべき事なり。されど我は屢ゝ顧みて其重さに堪へざらんとするなり。主よ、我が祈足らず我が同情足らずんば、願くは主のそれを與へ給へ。我が愛する弟壬生馬も亦悲しき失戀の重圍に入りぬ。余は日夜彼の堪ゆ可からざる悲愁を包む面を見る毎に、世の事の如何に矛盾に滿てるぞと思はぬ事なし。今夜雨なり。四籟淋しき音冴ゆる時、階上に獨り机に對する彼の苦想悶思、思ひ遣るだに我が胸は針に刺されたる心地に悶ゆるなり。我は何を以て彼を慰め得べき。顧みれば我にも悲しき涙は潛めり。主よ、僕は爾の幼兒が多く此悲痛の爲めに悶ゆるを見たる時、我が胸の血を搾る思して爾に僕の凡てを捧げき。されど主よ、僕の執拗を憐れみ給へ。僕の不順を憐れみ給へ。寂寞の念卒然として僕の心を襲ふ時、僕の眼は熱き懷舊の涙に濕ふなり。主によりて癒されたりと思へる僕の傷は、玆に新らしき血を吐きて其痛み堪へ難し。嗚呼我が主、此不順なる僕が凡てを捧ぐと稱して尙捧げでありし僕の涙を、願くは奪ひ給はざれ。僕の心を和ぐるものは此涙のみ。彼女の面輪も霧の如く消えて、戀愛の血も氷の如く凍えて、僕には其　見の何物も遺されざる時、我が涙の、嗚呼我が熱き涙の如何に慕しきぞ。涙よ、願くは永久に我が友たれ。

我は此涙を以て我が壬生馬の苦痛を知り得ざらんや。然り、我は彼の苦痛の爲めに我が凡てを捨てぬ。我は彼の傷を殘りなく癒して、汝の傷癒されたりと呼ばんとする愚者にはあらず。我が力の及ばざる處は、主必ず成し遂げ給はん。我は彼の涙をも負はん。然り、悲哀の福音は我が望む所。我に悲しみを與へよ。我に涙を與へよ。かくて我が同胞の哀傷をなだめよ。我玆に立てり、主よ、僕を用ひ給へ。

主の祝福の中にあるもの、萬人の涙を負うて然かも微笑み得ざらんや。然り我は我が戀を高き爾の聖壇に捧ぐ。我は復己れの戀を有せず。我が同胞の悲しき失戀の涙をして我が眼より流れしめよ。我は我が在さざる所なき我が主によりて之れに堪へん。嗚呼我には復戀なし。然かも感謝か祝福か哀傷か未練か、腸を搾りて胸を衝く熱き涙はあり。主よ、小さき人の子に祈を敎へ給へ。今夜兄の手紙を得たり。弱くなれる我が感情は懷かしさの餘り彼の手紙を我が胸に抱かしめぬ。嗚呼、祝福されたる友達、愛兄の上に最も高きものゝ御手永久にあれ。

一九〇三年

第四巻

一九〇三年（明治三十六年）（承前）

二月十三日。（金曜日）。昨夜雨であつたのが何時の間にか降り代って今朝は雪となつて居つた。朝になつてから少し降つたのみで細かな雨に變じた。後、日が照り出したから其儘融けて仕舞つた。

朝、例の如く歴史を讀まうとして其仕度をした處が、急に畫を描きたくなつたので凡てを放棄して畫帖に向つた。非常な熱心を以つて"Oh God! let me sacrifice all to thee"と"Devoted Life"を成功した。昨日から僕の心の中に殊に深く釀された思想は渾然として筆の先から流れ出たので、僕は晝頃までは全く夢中で描いた。出來上つて見れば、實に無益に時間を費したと思ふが、然し此畫の中には確かに僕の血と涙とが含まつて居るのである。觀想錄にも書き表はす事の出來ぬ思想が顯はれて居ると思ふ。

午後からは"Cuore"を精讀した。四時からは例の如く新渡戸氏に到りて英語の勉强をした。夫人の語られたBramabaiの話は中々愉快であつた。彼女は印度の第一階級に屬するものなるが、其父母が非常な學者であつて、十分の教育を受け（勿論印度の）二十二三にして英國に到り、今は widow-girls の教育に熱中して居るさうだが其品性の高い事は實に驚くべきもので、夫人が今迄見た婦人の中到底忘れる事の出來ないものだと云うて居つた。

夕食後父上の處で壬生馬と共に色々雜談をした。父上の談片二三を拾うて見よう。

棟撓凶（成功と云ふ雜誌に支那建築が倒れ懸つてゐるポンチ畫を見られて）と云ふ語が易にあるが、中々面白い語だ。一體易と云ふものは面白いものだ。太極を陰陽に分ち、陰陽を五行に分ち、五行より萬物生ずと云ふ風に、我が常に主張する

ピラミッド的に出來上つてゐる最も鞏固な平易な眞理の上に建つてゐるのであるから中々よくあたる。考へ方が凡て演繹的だ。此點が東洋的思索と西洋的思索との異る點らしい。東洋のは凡てが演繹的だ。西洋のは凡てが歸納的だ。

悄々往來朋隨其思と云ふ語がある。是れは前から疑問として居たが此頃漸く分つたやうだ。一體悄々として往來すれば朋が我に集つて來る筈がないが、玆に朋と云ふのは朋友の事ぢやない、類と云ふ位の義で卽ち悄々として心中に憂慮を往來せしむれば他の憂慮亦從つて來ると云ふの意だ。此語は萬事に應用が出來る。

易などゝ云へば、一言に人は馬鹿にするがそんなものではない。若し愚にもつかぬものとすれば、苟も孔子と呼ばれる位の賢人が之れを學んだ筈がない。今の人間の弊害は、歸納的論法で理解の出來ぬ事は凡て虛妄として仕舞ふ事だ。若しエヂソンがX光線を發明した時、他人に向つて僕は衣服を着た儘の人の懷中せる金袋中にある金高を知る事が出來ると云うたなら、それを聞かされた人は忽ちに人を馬鹿にするにも程があると云ふであらう。しかも其實驗が眼の前で實行されては、そりや當り前さとから云ふのである。同じ樣に人に向つて地獄と云ふものは存在して居ると云へば、其人は馬鹿を云へと云ふだらうが、さて地獄へ連れて行かれて照魔鏡に向つた時には、前と同じ口調でそりや當り前さと云ふに違ひない。自分の知れる範圍のみが眞理で他は皆虛妄取るに足らずとなす連中程腹が見透されて氣の毒なものはない。易を罵る人達も其仲間だ。

佛敎には人を導くに二の方法があるらしい。一は自分を何處までも小さくする方で、人間は比較的（佛に對して）罪深いものであるとし、人は其儘の境遇で安心すべしと說くのが、親鸞などのやつたやり口。一は自分を何處までも大きくして孟子の云つた「我舜の言を言ひ、舜の行を行ひ、舜の食を食はゞ卽ち舜のみ」と云つた樣に、人間は卽ち佛、佛は卽ち草木等のやうに絕對的の自我的見地に立つたのである。總ての思想に同情を有して寬容ならんが爲めには學問が必要になる。所が其學問を一通りなりとも消化するは容易な事ではない。多分昔の聖賢と云ふやうな人の頭は、書を讀む時理解すると云ふより早く判斷が出來たのであらう。加藤弘之などゝ云ふ人は學問があるから持てゝ居るので、考察の頭は無いと云つてもいゝ樣だ。中江兆民は又自分の理解範圍の外は虛無だとした點に於て陋だと云はねばならぬ。

家に歸りてより Mazzini's Essays を讀む。今日は "On the Minor Works of Dante" なり。初めの方に會心の句誠に多し。(拔萃文略す。)

二月十四日。(土曜日)。朝、例によりて聖書を讀む。此頃は羅馬書を讀み居れり。第九章の始めの句を誦する毎に云ふ可からざる感激の情を齎すなり。同胞に同情する事斯の如くして初めて眞の基督教徒たる事を得べし。主よ、僕には眞に此如き同情なし。我が同胞の善事に對し又惡事に對して此同情ある事能はざるなり。御前にありて我が靈誠に是れを恥づ。願くは今の所謂主の御名を濫りに呼ぶもの、跡に倣はず己れを善人となして、他を以て凡て救はれざるものとなす事なく、我地獄に陷るとも彼等を救ふの祈禱を捧ぐる事を得せしめ給へ。主の聖旨我に臨む時、僕は基督教徒の生涯は唯是れのみと感ぜざる事なし。人情を重んじ人の荏弱に十分の同情を有し、此心を以て撫で且つ鞭うつ事を敎へ給へ。僕は今の基督教の說く所に滿足する事能はざるなり。彼等は自ら義として主の敎へ給ふ所を無にせり。願くは僕をして此道を歩ましめ給はざれ。願くは僕に隱れたる道を歩ましめ給へ。主の設け給ふ道のみ我等が歩むべき所なり。

Myer を讀む。今日は Alexander 歿後王國分裂の歷史を終り希臘の文明史に入れり。建築と彫刻と繪畫の部を終り、興味滃勃快に乘じて四十頁を讀む。世界最大の藝術の生れし地の如何に今に香ばしきよ。若し他日歐洲に遊び有名なる博物館に將た其土地に於て、古天才國の遺業に接する事を得ば、如何に饒多の興趣を收め得べきよ。我は單に此理由のみを以てしても尙歐洲に遊ぶの念內に燃ゆ。

午後『一葉全集』の「たけくらべ」を讀む。人生の機微に觸れ熱き血に感じたる思ひして、胸琴美しう鳴り出でし事そも幾度！　實に女史は偉大なりしかな。彼女は殆ど近松の壘に逼らんとするものあり。若し彼女に年を假すあらば、彼女は確かに明治文壇を裝ふべき詩星なり。又久し振りにて『興國史談』を讀む。此著者の諸書には勿論多數の興味深きものあれども、此書の如きも亦價値高きものなるか。觀察の奇警にして一定の所信より出づる所眞に我が國罕に見る所なり。

午後五時頃より神田に到り靑年會館に於ける大日本文學會演說會あり。勿論腹こなしの爲めに行きしなれども餘りの不眞

面目に驚くの外なし。九時半頃家に歸る。

今日壬生馬は川上の Othero を見に行きたりとて歸り來る。實につまらなかりし由なり。要するにその失敗の原因は役者が十分に作中の人物に同情を有せざるに起因せるが如し。歸後聖書の研究を讀む。尙他日精讀するの期あるべし。

二月十五日。（日曜日）。我等が在天の父なる主は、今日も亦麗はしい日を與へ給うた。何となき芳香さへ催す樣に覺えて早春の景色誠に麗かであつた。朝聖書を讀み、『興國史談』を讀み、それから海老名氏の說教を聞きに出掛けた。途中で久し振りに北村耕造氏に遇うた。今日の演題は「聖哲オリゲナスを思ふ」と云ふのであつた。近來なされたる氏の說教としては實に智慧と力と信念とに滿ちたものであつて、僕は尠なからぬ恩惠を受けた事を感謝せねばならぬ。僕は玆に備忘の爲めにオリゲナスの爲人（ひとゝなり）を記して置かう。（オリゲナス傳略す。）

午後聖書の研究を讀み永島與八氏の獄中の經驗などを見た。今更に深く感ずるは獻身的信仰の生涯である。僕は神の御惠みによりて此生涯に這入る事が出來たならば、此世に於ける活動の目的は達せられると思ふのである。

「汝等人の榮を求めて神の榮を求めざるものなるにいかでよく神を信ずる事を得んや」の句が胸に沁み入る。

三時頃から河野氏を訪うた。僕は彼女の眞に悲しむ可き同情に餘りある境遇を聞いて思はず共に泣いた。彼女が其子女の教育に關し母たるの嚴肅なる責任を感じ、其遂げられ難いのを嘆ずる聲は眞に人の腸を抉るのである。嗚呼尊い哉親の子を思ふ情！　僕は或る物の堅く心を縛る樣に覺えて區別し難い感慨に沈んだ。此時、正に此時孝太郎氏と義雄さんと三人の姉妹とが這入つて來て、實に一方ならぬ敗亡をやつた。孝太氏は昨日出京したのである。永く居たゝまらなくなつて早々辭して家に歸つた。嗚呼悲しむ可きは人の子の運命である。僕は自分が其境遇にあるやうに思うて家に歸つてからも幾度か涙を流した。どうか父樣、あなたの全能の御手が悲しむべき一人の姉妹の上にありまして、彼女と其愛子が再び美しき團欒に入るやうに導かせ給はん事を切に切に祈り上げます。

此夜は一種寂寥の念に驅られて友の溫き胸が慕はしくて堪らなくなつた。僕が此世に持つて居る溫きものとては、時々僕

を困らせる涙と友の胸とのみだ。僕は夕食後直ちに兄、足助、木村、隆三に書を書いた。

嗚呼獻身的の生涯如何に若い血を痛めしめるよ。然し是れが僕の行くべき道であると云ふ事を思ふ時に、僕は神樣の前に甘んじて點頭いて其道を步む至上者の導きが此小さき盲目をしてよき道を步ましめ給ふ事を堅く信ずる。

二月十六日。(月曜日)。今日は曇りで稍ゝ寒かつた。朝聖書を讀んで「爾惡に勝たるゝ事勿れ。善を以て惡に勝つべし」の語を得た。人生が若し勇ましき戰鬪とするならば、此語は實に我等の旗に書くべき好適の句である。字を讀むは易い。手を動かすは難い。然しながら手を動かすのは最後の仕事でなくてはならぬ。哲學が人生の終極ではない。人生の終極は歷史である。Carlyle の言つた樣に "The end of man is an action, and not a thought" だ。

Myer's History を取り出して Greece の tragedy を讀んで居つた所が九時頃中田が來訪した。それから雜談が始まつて彼は午後三時に漸く歸つた。僕は失望せざるを得ない。僕は大切なる一日を失つた。尊き一日は irrecoverably に地を去つた。再びそれは僕の許に戾つて來ないのである。深くこれを思ふと解す可からざる一種の畏懼が卒然として胸を寒からしめる。

それから Cuore を讀みかけてゐると今度は松平恒雄氏が來た。今日新渡戶氏に行く日だから斷つて共に家を出で途中で別れて新渡戶氏に到つた。太田氏が來訪して居られて一寸しかやらなかつた。夫人に木村の洋行の件を話した處が、非常に其冒險を危ぶまれて下等の航行は是非思ひ止る樣との事であつた。

家に歸つて夕食の時壬生馬を見ると又彼の瞼は涙に濕つた跡があつた。僕はたまらなくなつて食事も進まなかつた。青春の少人の胸を抉る痛みの中、壬生馬の受けたるものは確かに其極である。僕は彼が可哀相で同情に堪へぬ。然し全智の主は徒らに人を苦しめ給はぬ事を信ずる。僕は壬生馬が此荊によりて煉はれて眞に神の心を悟るものとなり、神の力に依りて此世に堅く立つ所の巖とならん事を祈らざるを得ない。主は凡てをよきに導き給ふであらう。

夕食後內村氏の『興國史談』を熟讀した。此前に讀みたる時に比すれば此方に多少の基礎があるから所謂玩味する事が出來て非常に面白い。追々歷史的知識の根源を形造る事が出來て、一身の中に兎に角人類原始よりの經歷を藏め得るの階段を

造り得たるは何よりも感謝に堪へぬ所である。

森々として寒威膚に逼る時僕は犬の遠吠を手近かに聞いた。今迄こんな感覺を起した事はなかつたが、今夜は胸の逼るを禁じ得なんだ。其腸を搾り肝を盡して出す様な哀切なる叫聲には唯渾沌たる苦痛と悲哀と煩悶との姿を見るのである。彼は言葉を用ひたいのであらうが、其口は唯叫ぶ外には知らぬ程幼稚なのだ。晝間に勇ましくも耳を振つて怪しき影を叱咤した其聲は、今悲しくも長く鋭く細つて彼は何物かを何かに訴へんとする樣だ。而して彼は何物の何物であるかを自らさへ知らない。何が彼の哀れむべき訴へに耳を傾けるのであらうか。夜は更けて人は大方眠つた、彼の哀聲は絶望の手より免れんともがくが如く二度三度空を渡つて空に消えて了つた。而して彼はつぶやく如く細き聲を微かに立てた後は終にかの哀切なる聲をさへ聞かなんだ。彼は眠つたのであらう。嗚呼云ふ可からざる一種嚴肅なる思念は針の如く胸を突くではないか。僕は神の座に召されて遙かの下界に起る全人類の全く意味をなさぬ苦しげなる叫喚を聞くが如く感じた。

二月十七日。(火曜日)。晴。「爾等互に愛を負ふの外凡ての事を人に負ふ事勿れ」(羅. XIII. 8) 是れ實に人間處世の眞訣だと思ふ。僕は實に今日好い言葉を拾ひ得た。

誰にも妨げらるゝ事なく專念に Myer を讀む事が出來て遂に希臘史を終つた。實に愉快であつて希臘の哲學史文學史などに至つては幾度か滴涕し幾度か噴飯した。僕は希臘語が學びたくてたまらなくなつた。最も驚くべき事實は(當然の事かは知らぬが)哲學思想が人民の道念と伴つて行く事である。希臘に生命があり希望があつた時には、其哲學も誠に高崇なものであつたが、一旦失墜の幾歩をか蹈み出すと哲學も亦空論的となつて、例へば sc ptist の如きが生じて來る。これを見ると哲學の如き純客觀の位置から研鑽すべきものでも澎湃たる時代の精神には到底抵抗することが出來ないかに思はれる。これを小さくして考へて見れば面白い。哲學なるものは、これを組成した哲學者なるものゝ人格に關係することが多いのだ。これには勿論除外例があるだらうが、併し上の結論を眞とすれば此立論も亦眞でなければならぬ。ソクラテスやプラトーンやエスキラスに見て殊に其感が深いのである。人格の影響する範圍は眞に何處までだか分らぬ位ではないか。

希臘の歷史を繙いて思ふのは、人類の最盛時代は果して後來に來るべきものであるか或はさうでなくて既に過去に屬するものでないか、も少し範圍を狹くして云はうならば、人類の創意時代（僕の造語だ、即ち人類が總ての活動の本源を据ゑた時代と云ふ積り）は未來に來るものであらうか、過去に屬するものではなからうかと云ふ事である。凡そバビロン、アッシリヤの滅亡時代から基督教の羅馬征服時代に至る間が、眞に人類の創意時代であつて、今の所謂文明と云ふものはバビロニヤが古代文明の保存者で改良者であつた如く創意時代の文明を僅かに保存し改良して滿足してゐるのではないかと云ふ樣な悲觀的態度も取りたくなるのである。兎に角希臘史は興味深かつた。

午後『幽國史談』を讀んだ。後山本に愛子を訪うた。女の中最も尊く淸きものは彼女である。本當に水晶の樣な所がある。僕は彼女と語る時、他の塵に着けるものを忘れて高い喜びと淸い悲しみとに入る事が出來る。二人の涙源に話題が及んだ時は、眞に一種の強い運命の手を感ぜずには居られない。彼女は彼が病にありはせぬかと頻りに心配してゐる。僕は堪らない。

僕は眞に神を思ふ。神の聖なる審判を思ふ。これなしには半時も生きて居られぬ。これを疑ふ事はどうしても出來ない。淸怨願くは高き所に解けよ。

原先生夫人札幌に歸られるとの報に接し、上野停車場に行つた。病身でありいたづらであつた一藏さんが肥えて大きくなりし事よ。夜は Anticipation の moral の所を讀んだ後いぎたなくも早寢した。

二月十八日。（水曜日）。空は定めなく晴れ又曇りぬ。夜に入りては星斗闌干。今日より羅馬史に入る。今朝は多く得る所がなかつた。午後高山氏の『近世美學』を讀み希臘哲學に回顧して更に得る所なかりき。それより Cuore を讀みつゝありしに直良氏來訪との事ありしかば新渡戸氏の方を斷りてこれに到る。

夜孝太君に面會せんが爲め四谷に河野氏を訪ひぬ。君あらずして信子氏及び其妹のみありき。八時半頃迄相語りつゝ待ちたれども彼は遂に歸り來らず。仍て已むを得ずして辭し歸る。夜山路氏の『獨立評論』を讀む。「ニイチエの思想」などは甚だ有益なりき。かくて平凡なる一齣の幕は閉ざされぬ。明日はよき戰に從ふ可きなり。

二月十九日。（木曜日）。今日は我が大失敗の日なりき。悪魔は遂に我に打ち勝ちぬ。嗚呼神に從へりと自ら誇稱するものの何の醜態ぞ。汝神の前に泣きて罪を悔いよ。

今朝少しく歴史を讀みつゝありしに、山本より電話かゝり來り今日皆にて大森の方に行かんと云ひ來れり。此に於て僕の最も厭ふ可き癖は起りて、既に斯の如き事の決定せられし後は書物に親しみ易らずなりて、山本より再び言ひ來る可き時間を待つ間遂に歴史を放擲して『近松傑作集』など繙きゐたり。而して何時迄も何時迄も彼處よりは何事も云ひ來らずして、遂に今日の行は思止まれりと云ふそれなりき。余は午前の時間を殆ど無益に費せり。午後しま子の處に到りつゝありし時愛子訪ね來りぬ。故に余は彼女と語るべく本家に歸りしに、仙齢なる畫家來り居りてゆつくり話す事も出來ず、其中河野孝太氏來りしかば我が室に歸りぬ。しま子の病は大に恢復に向ひ熱は全く平常に歸れり。

先づ何よりも嬉しかりしは孝太君より聞ける札幌の事情なり。舊土曜會諸子の消息ほゝゑむ可きもの、泣く可きもの、一時に腦裡に集りて我を刺戟す。何ぞ札幌の天地の attractive なるや。彼の地は實に我が爲めに聖別の地、祝福の地なり。彼の地の上に天佑裕かなれ。

唯一つ我が今日の事業は孝太君に一片の忠告をなせる事なり。余は彼の慈母の境遇に思ひ到る毎に、彼に向つて苦言を呈せずには居られざるなり。余は思ふ所をどし／＼と云ひぬ。余は神に感謝せざる可からず。余をして他人に對しこれ丈けの直言をなし得せしめ給ひしを感謝せざる可からず。我總ての點に於て幼兒の師たるにも足らざるなり。然かも神は我に住み給ふ事によりて、我をしてかく懼るゝ所なく直言するを得せしめ給ひぬ。主よ、願くは小事を小とせずして尊敬する事を得せしめ給へ。

孝太氏は夕飯後歸り去りぬ。夜直良氏來り table-tennis 等をなし又少しく壬生と共に宗教社會の事に就て語る。我信仰と實行の足らざるを恥づ。我はこれより或る物を何か領得して後寢に就くべし。今十一時十五分前なり。

一昨日菊五郎死せり。小松宮殿下も亦。兄と木村君より手紙あり。兄に小恙ありしとぞ。願くは全快一日も速かなれ。嗚

呼東方の淚源は今如何に。彼病まざるか。彼病まざるか。我惱めるものなる哉。

二月二十日。（金曜日）。晴天。朝、家にありて內村鑑三氏の『興國史談』中「興國と亡國」と云へる邊を譯し、これを新渡戶氏夫人に致して訂正を乞ふ。午後より兄の依賴により、歷史敎科書を尋ぬる爲め諸方に電話にて問ひ合せ、又は松平恒雄氏等を訪問し、市に到りて英學新報を買ひ來りて讀む。新渡戶氏の「櫻」と題する小品文あり。筆意共に超俗。又久し振りにて「札幌獨立敎會」を讀む。讀みて我は殊更に彼處なる大なる首石を想起せざる能はず。彼の敎會は眞に一個の天職を負へり。日本の全基督敎徒が雲烟過眼視する間に、彼女は其生を保ち、後年一旦日本の基督敎會が斷然獨立の熱望に動かさるゝ時、彼處は其運動の中心たらん。主よ、願くは彼女の上に祝福永久にあり給へ。

夕方より河野氏を訪ひ暫く快談し（今日は快談せり）て家に歸る。夜恒雄氏を訪ひしが他出して在らず、即ち其同居人なる一人の法學士と相語る。彼は大藏省に在るもの、其方の事に就き種々なる面白き經驗を聞けり。後問題は精神上の事に移りしが、要するに余は彼が今日日本人の宗敎に對する觀念の感染しつゝあるを見る。即ち方便として宗敎を用ひんとするなり。

夜 Tennyson の “Lady of Shalott” を讀む。余は此頃如何にせしか詩に對して觀想を牽く事甚だ稀となりぬ。之れ恥づべき事なり。我が精神が散文的となりし事なり。我は常に彈力ある强く打つ所の精神を有せざる可からず。詩を失へるものは國を失へるなり。

二月二十一日。（土曜日）。實に麗はしき晴天なりき。和煦たる春日の氣悠々として人を吹く。朝 Swinton の “World History” の中羅馬滅亡後より “Charles the Great” の覇圖の崩壞に至るまでを讀みぬ。所謂 Dark age なるもの、現今の歐洲諸强國が其立國の基礎を定めたる緊要なる時代なり。Swinton は曰く、人は此時代を指して dark age と云ふと雖も實は fermenting age なりと。これ余が得たる最もよき敎訓なりき。午後『興國史談』のフイニシヤを讀み、それより山崎氏に送るべく書物を買ひに麴町通に到り、山本に立寄りて “Classical Picture Gallery” (1899) を借り、歸宅の後これを展覽す。見るに從つて

文藝復興期時代の作物に崇高なる思想と親切なる用意と深遠なる美意識とを認め得るなり。第十七世紀の末葉に至りて畫風頓に失墜せるが如し。輕薄の氣漸く畫面を蔽ふ。Florentine school の精確もさる事ながら Roman school の爛絢も亦捨て難し。Bolognese school の Guido Reni (1575—1642) が成せる Beatrice の若姿。見れば見る程悲しくも清く高き顏ばせ。天國に詩聖を誘ひ入れし其眼よ。人生の至美至清何物かこれに過ぎん。

夕方より直良氏來る。夕食の時壬生馬余の爲めに建築の事書ける麗はしき本を借り來る。多謝なり。此夕白蓮社に番町會あり。父上講演せらるゝに就き行きて聞く。大要左の如し。

「雪降る寒き日、西より一太郎なる小兒傘をかざして東に來り、東より乙太郎なる小兒傘をかざして西に來りはたと衝突して互に持てるものを打ち壞しぬ。一太郎罵つて曰く『汝土塊に等しき者よ』と。乙太郎これを聞きて詰つて曰く『何が故に土塊と云ふや。土塊は土塊なり。我は人間なり』と相爭つて下らず。茲に仲太郎來り、二人を率ゐて白蓮社の緣に伴ひ來り、更めて此に論議をなさしむ。

一太郎曰く、

『汝乙太郎聞け。汝は霞と水と雪と霜と雨と霰と雲と蒸氣とを各異れるものとなすものとなり。然かも知らずやこれ凡て同根のみ。少しく眼を大にして宇宙を觀ぜよ。星宿斗辰砂よりも繁く方處を絶して際涯を知らざるなり。此境にありて汝の地球を見よ。汝と土塊と何の差ぞや。瞬轉の命滅すれば卽ち一片の土塊のみ。然かも汝尙汝を土塊と云ひしを遺憾とするか』

乙太郎曰く、

『愚者。そは汝が空想の結果のみ。汝の眼を刮いて汝の四邊を見よ。汝の存在を疑はゞ止まん。然かも汝の存在を認めば汝の見る所のものは決して一にはあらざるべし。汝と我とは同一なるか。然らば汝と我と相爭ふは何ぞや。汝は汝なり我は我なり。汝も存在し我も存在し而して凡てのもの悉く其處を得たり。柳は綠、花は紅。汝の我を罵るは無禮なり。我は決して土塊にあらず』

仲太郎これを聞きて手を打つて曰く、

『是れなるかな、空と悟るも不可、差別と觀ずるも不可、空と差別と相調和して人生初めて意義あるのみ。』」

貞水と云ふ講談師の話ありき。人を笑はしめ泣かしむる事、實に驚くべき才能を有す。彼等は誠に平民の教育家なり。

夕方恩地鐵三氏來り、基督教の教によりて父母より甚だしき迫害を受け途方に暮れて我を訪へりと語りぬ。余は痛く彼の境遇に同情の念なき能はず。これ余が一度辛くも經驗せし處なればなり。余は彼が祈により柔和なる心によりてよく事を處理せん事を勸めて相別れぬ。余も彼の爲めに涙を以て祈らん。聖旨必ず我等をよきに導き給はん。

山崎老母に手紙を出す。此頃思ふ所多し。涙屢々睫に逼る。

二月二十二日。（日曜日）。久しく水に接せなんだ故、水に遊びたいと思ふ事が頻りであつたが、今日は天晴れて雲更になければ此麗はしき安息日を、欺かざる自然に行きて偉大なる說教を聞かんものと、我が壬生馬、英夫、行郞と共に家を出たのは朝の八時頃。柳橋の船宿に行つて古びたるボートを借り四人打乘りて隅田川に出た。東京に住める憐れさは水を樂しまんが爲めに此溷濁の流に依らなければならぬのである。

艇庫の邊で學習院や高等學校や其他諸校のボートに遇ひ稍〻溯りて右岸の風を避けて、日の暖かなる所に艇を繫いで悠々と趙日の愛すべきを樂しみ、再び出發して上流に溯り、水神の渡舟場に若き男女の畫工が畫板に對せるを見などして、更に溯り綾瀨の水隈に入りて中食をしたゝめた。玆は田園の趣味最も豐か、春に遇ひし塘上の草は既に淺綠を呈して、摘草をなしつゝある少女の幾團も見かける。麗春の氣が徐々に人を吹いて心まで溶ける樣である。僕は今迄春が嫌ひで、春が來ると何だか自分一人が取り殘された樣な心地になつて寧ろ苦しい悲痛に陷るを常とする。今年も亦どうもその樣だが、今日のみは例外であつた、心の中から愉快で幾度か快哉を叫んだ。常に春に對して微笑し得る人は幸福である。其人は實に大なる事をなし得る人だ。神樣が下し給ひし笑の時を、獨り苦い顏する僕の愚も亦甚しいではないか。

玆で稍〻暫く夢の間に逍ふ樣であつた後艇首を廻らして夕方柳橋の船宿に着いた。雲空を籠めて雨さへ催しさうになつた。

非常に疲勞して家に着いたのは早黄昏時。

恩地の鐵三君が其親友池尾と云ふ人と共に來た。彼の件に關して彼は遂に再び姑息策を採つたさうである。仕方がない。再びより大なる破綻を以て今の偸安は報いられるであらう。僕は祈の熱心が足らなかつた事を悔いる。僕は彼を祈によりて助ける事が出來なんだ事を悲しむ。

夜大澤君が來た。暫く文學音樂等の談をなしたる後彼は歸つた。それから僕は、Denkmäler der Kunst" (von Prof. Dr. W. Lübke und Prof. Dr. C. Lützow 1884) を見た。古代からの建築、彫刻、繪畫を集めたるもの其蒐集の方法は敢て組織的と云ふではないが、多くの材料を網羅した點に於て確かに有數のもので、僕は猶多少の研究をなして各時代に於ける特徴を見たいと思つてゐる。

二月二十三日。（月曜日）。昨夜から今朝にかけて頭中に一つの詰責の聲を聞く。僕の生活が、甚だ非基督教的だと云ふ事である。何と云つて特別に指示すべきものはないが、一體に loose になつた事だ。こんなことで何の役に立つか。僕から宗教を差引くならば僕は零で、生を有せないものとなるのである。一時に死滅を感ぜざるが故に、靈の糧を廢せんとするのは愚の極である。汝は同情が足りない。汝は同情を實にする處の實行が足りない。汝は常に神の御前にあるとの信仰が足りない。汝は尙自分の力に依らうとしてゐる。神樣の御名を忘れ易い。汝よく記憶せよ、假令千萬人が汝の反對の側に立つて汝の神を否認するとも、汝はこれに神を敎ゆるの同情と信仰と實行とを有せざる可からざるを。嗚呼精進の氣に乏しき己れを顧みる時、僕は眞に彼の祈を繰返さゞるを得ない。さうだ、死も病も貧も苦も若し之れが僕に神より離る可からざる信仰と、己れの如く人を愛し得る同情とを齎らすならば僕は甘じてそれ等の僕とならう。父樣、どうか此愚かなる迷羊をよきに導き下さい。どうかあなたに依りまして此血と肉と而して涙とを我が同胞の爲めに獻げる事が出來る樣にして下さい。あなたが僕を思はざるに起し給ひし思識す可からざる奇蹟を信じまして此事を切に願ひます。

朝『畫聖ラファエル』を讀んだ。文藝復興期の狀態の大體と、驚くべき畫聖の大なる偉跡とに接する事が出來て中々愉快

であつた。幸に Classical Gallery があつたから殊に面白く通讀した。世界で一番偉い人は包容的の人だ（ラファエル、シェクスピーヤ、ゲーテ、ダンテ、アリストートルの如き）。其次ぎに偉いのは特質的の人だ（カーライル、ミケランジェロ、バイロン、ナポレオン等の如き）。其次に偉いのは多角的の人だ（フランクリン、マッチニー、ラボックの如き）。而して平凡取るべきなきものは實に被包容的の人である。人類全體の苦痛と懽喜とに耳を傾けて、之れに向つて深い同情を捧げ得る人は實に羨ましい限りである。高山氏の『近世美學』の中カントの美學に對する意見を讀んだ。即ち氏の認識説が氏の美學をも支配してゐると云ふそれである。氏は實に近世獨逸哲學の客觀的思想を主觀的思想に轉折せしめた最初の人であつて、而して其主觀に於て他の學者と異る要點は他の主觀論者が多く唯心的となるに反して、氏は主觀の對象たる事物の實在を確認し、而して主觀は先天的の通性に支配せらるゝから、例へば美の意識にして萬人同一なる事が出來ると説いてゐるのである。Hume の懷疑的論斷即ち事物の眞相は思惟する個人の立脚地によりて異るものであつて、事物其物は全く定性のものでないとしたのとは大分違ふ所があるのである。

午後から『興國史談』の中フィニシヤの後半とユダヤの全體とを讀み終つた。ユダヤの部分に於ける文章の如きは實に一個の好詩篇である。氏が熱烈の思想と想像とは燃え上つて strong impression を與へる。涙を要求する樣な所さへある。其間疲れる時は『藤村詩集』を讀んだ。彼は實に一個の詩人たるに愧ぢぬ。一種淸婉の想が何となき沈思を齎すのである。ハイネを優しくし Wordsworth を狹くしたとも云ふべきであらうか。

夜 "Anticipation" の 'Lecomotion of Coming Century' を讀み終つた。夕方から新渡戸夫人を訪うた。どうも英語會話の力の缺乏には嘆息に堪へない。實に恥づべき事である。

此頃頻りに札幌獨立教會の事が想起される。自分の造つた其歷史を繰返して涙を垂れて祈る事が度々である。彼女の健全ならん事は實に我が衷心の願である。故鄕を持たぬ僕は實に彼處が故鄕の氣がする。僕は彼處の子等の一人として其名簿の中に姓名を記さるゝ事を以て云ふ可からざる感謝を感ずる。彼處は僕に恥づべき所ではない。然り福音は僕が決して恥づる所

でない。唯僕が畏れるのは僕が福音に恥とせらるゝ事である。

二月二十四日。火曜日。 麗はしい天氣であつた。朝は Swinton の World History の中 Crusade を讀んだ。暗黒時代に於ける最大の事件を何かと云ふならば、法王權の擴張と十字軍と封建制度と、從つて生じた騎士氣質とのそれであらう。法王權擴張は基督敎の傳播（勿論表面的なりしと雖も又迷信的なりしと雖も兎に角基督敎なるものを一般の人民に知らしめたるものなり）十字軍は宗敎的效果よりも寧ろ知識の渴望、封建制度は國民の統一、騎士的氣質は歐洲道德の基本を與へたりと稱して可なるべきか。此時代が dark ages と云はんよりは fermenting age と云ふの適當なるはこれが故なり。攝理の御手は眞に我等が思度す可からざる邊を走る。我等が眼には失望の時と見えしものもこれを過去となして見る時は、儼然として進步の階段を用意しつゝありしものなるを知る。天文學を敬虔の思もて極むる人に宗教家ならざる人はなしと云へり。歷史を通讀して mighty will の存在に思ひ到らざるものは愚者なるかな。我をして敬虔に歷史の跡に大能の御手を探らしめよ。

午後 Tennyson's Poetical Works の中 "Saint Agnes Eve." "Begger Maid", "To—with the following poem" 等を讀む。彼の小品は餘り無味淡泊に過ぎずやと思はるゝ所あり、又瞑想に走り過ぎずやと思はるゝ所あれども、其詩の中に常に新たなる呼吸ありて平凡にして單調なれども枝には若葉、路には若草の生々したる田舍道を辿る心地するなり。

それより我は山崎氏に贈るべきもの（母上はフランネルを送り給ひぬ我は彼女と永野及杉野の小兒に御伽譚數册を送りぬ）を持ちて河野氏を訪ふ。不在。卽ち病院に來れば孝太君とお信さんとありき。少時相語りて家に歸る。夜は近松傑作集中『萬年草』、『長町女腹切』、『淀鯉出世瀧德』、『重井筒』、『戀八卦柱曆』等を讀んだ。我は今日始めて近松の卓越なる技倆を認めぬ。『萬年草』、『戀八卦』など何等の妙想ぞや。何等詩美にあふれたる光彩ぞや。人情と義理と俗慾との纒綿は是れ實に德川十五代間を通ぜる大事實なり、近松は此眞諦を捕へて巧みに擒縱の妙を極めぬ。宛ら當時の風俗に接觸するが如く感ずると共に、人類の全時代を通じて滅す可からざる暗潮に指をひたしたる想に堪へざらしむるものは、彼の詩人的同情の深遠なるに依ると云はざる可からず。彼は殆ど客觀詩人たるの機能を全うせるに庶幾き(ちか)ものか。如何なる人物の上にも彼には平等

の同情あり、而して讀者を拉して亦此境に遊ばしむ。

二月二十五日。水曜日。快晴。朝家に在りて少しく Swinton's History を讀みたれども今日は如何にせしにや多分昨夜遲くまで寢に就かざりしによるか、頭腦甚明瞭ならざりしかば、大橋圖書館に到りて雜誌を見る。『太陽』のラファエル前派の解說のみ稍〻注意を引きたり。

我は此朝聖書を繙きて哥林多前書九章を讀み、二十四節以下に到り、云ふ可からざる不快の念に打たれて思はず鉛筆もて其文を塗抹しぬ。我の傲慢かくなさしめしか、ポーロの傲慢かくなさしめしか我知らず。されどもポーロを神の如く敬ふものは基督を人の如くするものなり。ポーロが眞に基督を了解せりや否やは少しく疑ふ可き處あり。我は彼の言行の上に屢〻ソーロたりしポーロの俤(おもかげ)を見るなり。基督の弟子と云はんよりはガマリエルの弟子と云はんの寧ろ適當なる所あるを見るなり。我は彼の獻身的、殉教的なる偉大なる人格を尊敬して止まず。我若し言行ポーロの如くなるを得ば我は神の前に滿腔の感謝を捧げん。されども若し我にして彼の神學に服從せよと命ぜらるれば我は災(わざはひ)なるかな。我は此點に於てはポーロを離れてヨハネに到らん。ヨハネ、ヨハネ、汝の想の何ぞ高くして淸き。汝の宗教は感激の宗教なり。然り良心的の感激、我は思ふ、宗教の强固にして偉大にして崇美にして深邃なる基礎は是れなりと。我は全く感激によりて基督と神とに到りぬ。而して此外には何者もなし。「夫れ我儕が聞き又眼に見、懇切に觀、我が手捫りし所のもの卽ち元初より在りし生命の道を爾等に傳ふ」、此の感激なり。此の懇切の語なり。我はこれを聞きてヨハネに到らざるを得ず。ポーロの前に我は小なる弟子の如し。されどもヨハネの前に我は親しき友の如し。而して基督の前にも我は親しき友の如かりき。何れか最も基督に近き人なるべき。

午後は我が短文(未だ題目を附せず)の淨寫をなし、四時頃より新渡戶氏に到りて英語を習ふ。それより義雄氏を誘ひて、共に家に歸り、暫く遊びて彼を送りて其家に到りしに、正に皆々平河町の緣日を見に行く故來らずやとの事にて同道せり。新渡戶氏の家族一同及び津田氏の塾生一同なり。非常なる混雜名狀す可からず。閑人のみ多き世の中なるかな。家に歸りし

は九時半。日記をつけて非常に疲勞したれば十一時頃寢に就く。

二月二十六日。木曜日。空曇り又風さへ催されたり。此日は小松宮の御葬儀ある日にて我は新渡戸夫人と共に到るべき約束したれども夫人より病氣の故によりて斷り來りたれば家にありて讀書をなす。今朝も Swinton の萬國史を讀みき。Dark Age に於て知識の全く廢頽せしは、名書は皆純粹の Latin にて書かれ居るに拘らず Teuton の歐洲に入り來りてより其採用せる Latin 語は漸次退化して broken となり、書語と通用語との別を生じ、從つて Latin は dead language となりしに因る是れ一なり。一は書籍製造の術の不完全なりし事にして、非常に巨額の費を要したりしかば知識の普及は全人民に及ばざりき。加之當時の僧侶等は紙を購ふの高價なるが爲めに、既に書かれたる名著の文字を洗ひ消してこれに書くを習慣となしたりしかば（此事を palimpsests〔twice written〕と云ひしとぞ）、幾多の名著泯然として亡びたるもの多かりきと云へり。此間に在りて僅かに知識の寶庫を維持し來れるものは monarchism にして Swinton は

"If it be asked how it happened that a few sparks of ancient learning survived throughout this long winter, we can ascribe their preservation only to Christianity. The church was the bridge across the chaos, and linked the two periods of ancient and modern civilization."

と云へり。monarchism は啻に知識の維持者なりしのみならず風教、農業、救貧の事をなしたるが如し。是れ五世紀より十一世紀に於ける Dark Ages proper とも稱すべき時代の特徴なりとす。而して降つて十一世紀より十五世紀に至る寧ろ The Age of Revival と稱す可き時代にありて、最も特徴となすべきは市府の建設と商業の勃興なり。市府は常に文明の中心卒先者なり。市府の興りしは文明の興りしなり。商業の勃興は世界交通の端を開き總ての利益と知識とは互に相交換せられぬ。又此時代の特徴は university の建設と共に起りし煩瑣哲學なりき。又 Arabian の歐洲に於ける科學的知識に貢獻せし事なりき。又 national literature の始まりし事なりき。かくて Pericles 時代以後未だ嘗てあらざりし文藝復興の大觀はなりぬ。

午後より小品の浄寫をなす。夕食前壬生馬、我に富永君に貸しありし用無遺稿を齎しぬ。我が胸は躍れり。我は直ちに開き

讀みぬ。渇せるものゝ水に就くが如し。嗚呼、用無氏の思想何ぞ我に似たるの甚しき。彼は殆ど我が心を言ふものゝ如し。詩人の普き同情此に到りて尊きかな。良き朋を得ぬ。復淋しき事あらじ。

　此日足助君の書を得たり。懐かしきは彼が手紙なり。彼の苦痛は依然たり。しかも彼は徐々として光明に近づきつゝあり。感謝すべきかな神。かの尊き靈魂の救はれん事は我が衷情の祈なり。彼が近頃愛讀の詩なりとて送れるは、

"Droop not, though shame, sin and anguish are round thee;
Bravery fling off the cold chain that hath bound thee!
Look to yon pure heaven smiling beyond thee;
Rest not content in thy darkness,—a clod!
Work for some good, be it ever so slowly;
Cherish some flower, be it ever so lowly:
Labour! —all labour is noble and holy:
Let thy great deeds be thy prayer to thy God."
(from F. S. Osgood's "Labour")

夢見るものゝ知り能はざる好詩句なりと云ふべし。

　夜 "History of Civilization" を少しく讀みて十二時就寢。

　東方の涙源に思ひ到りては常に胸逼る。彼病めるにはあらざるか。何ぞ汝は彼に書を致さざる。汝は常に常に彼を思ひながらしかも嘗て書を致さざるなり。愚の極なるものは汝なるかな。嗚呼神、願くば彼に平安を賜へ。我の骨を削り給ふとも願くば彼に病あらしめ給はざれ。

　二月二十七日。金曜日。半晴半曇。昨日から聖書はヨハネの書を精讀し初めた。僕は充分にヨハネに學ばうと思ふ。朝はGuizot's "History of Civilization" の中 "Various Attempts to form the several Social Elements into one Society" を讀みぬ。

今日得たる知識の梗概を記し見んか。

歐洲に於ける古代人民の狀態は互に相乖離し、相反撥し、社會は全く離隔孤獨の狀態にありて之を換言すれば、彼等の間に國民一國家の存在を認むる能はざりき。而して羅馬の衰亡に續きて社會の反目を除きてこれを合一せんとする企圖は起りぬ。即ち當年の社會的分子は二元となるの場合に到れり。一は政府なり、一は人民なり。即ち治者と被治者なり。是れ實に第十二世紀より第十六世紀に亙りて起りし現象なりとす。而して此企圖たるや敢て文明的の觀念より出でしにあらずして寧ろ一個の野心より出でしものなる事は歎息すべき事なり。此企圖を大別して二種となす事を得可し。

(1) Attempt of theocratic organization.

(2) Attempt at republican organization.

(中略) 此の如き凡てに失敗せる結果は political organization を造るに他の方法によらんとし、互にその根柢には憎惡の念あるにも拘らず、之を打して一丸となし、社會の各分子を統一して此に一の state を創らんとしぬ。即ち feudal nobility, the free cities, the clergy, the monarchs を合一せんとするにあり。焉んぞ其成立を期待す可けんや。凡ての基調は全く破れ歐洲が第五世紀以來暗々裡に盡力せし所のものは效を奏するものなくして止めり。

"To speak truly, they may all be summed up in one : society was not yet sufficiently advanced to adapt itself to unity."

十一時頃飯田氏奈良より上京したりと尋ね來りしかば中食などして共に相語りぬ。彼は一個爲すあるの性格を有するにも拘らず碌々として屬官に滿足せざる可からず。時に漏す彼の感慨は頗る我をして彼の志を悲ましむ。彼を用ふる好適の地はなかるべきか。彼は二時頃辭し去れり。我はそれよりしま子を訪ひぬ。彼女の病は益々快方に向へり。山本に於て直光インフルエンザに罹り四十度に近き熱を生じたるに加へて房子も亦風邪の氣味ありと。愛子の繁忙思ひやらる。されども病は天惠なり。病は人をして高からしめ深からしむ。我は山本の家風を厭ふ。其祖父母は未だ一回だに直光の病狀を見舞はざるなりとぞ。

此日新渡戸夫人より斷り來りたれば彼處には到らずして Swinton's Grammor の中 Verb の所を讀む。よくも忘れ居りしもの哉、此 Grammar には聊かなる字に迄も一面の假名を附せり。我が中學時代に於て墮落の最高點に達せし時のよき記念なり。

夜は Anticipation の中 "The Probable Diffusion of Great City" を讀む。奇警なる觀察少なからず。town は市場の成長せしものにして、市場はその近傍農家より往復一日行程の距離にあり、人足のみを以て運搬せし時は 5—8 miles、馬背馬車を用ふるに及びて 8—15 miles に至りしは、英國の地方を巡覽してよく見得る處なり。而して加之港河の沿岸に town 生じ、其の交通距離は大分遠くなれり。然るに鐵道の出來るに及び交通距離遂に伸張するが故に、town は漸く相距りて其大さを增し非常に大なる市街（此時に至れば市街と云はずして他の名を附するに至らん）を爲すに至るべし。而して其市街の大さは、市民が sleeping house より business house（假にこれを市の中央にあるものとして）に到るに要する時間によりて規定し得べし。從來の統計によれば大抵往復二時間を要すべき廣さなりとす。是れによりて之れを見れば若し汽車の發達益々盛大とならば London, Berlin, St. Petersburg の如きは人口 20 millions に達すべく米國の New York, Philadelphia, Chicago の如きは 40 millions に達すべしと豫想せり。

後 Tennyson の "The Vision of Sin" を見る。半分より讀破せざれば此には觀想を記さじ。

愉快なるは戰爭なり。人は如何なる方向にか突出せずしては止む能はず。我は書に向つて書に向ふの倦み來る時、我が書に向へるは、我が切愛する兄弟姉妹の爲めなる事を思ふ時、我の熱心と勇氣とは更に新となるなり。基督の脚下に至れるものに自らの所有となすべきものは一もなし。我は只同胞の爲めに生きん。而して唯基督の爲めに死なん。主よ、力を與へ給へ、感謝せしめ給へ。而して祈らしめ給へ。主よ、願くば此の汚れに滿ちたる僕を用ゐ給へ。彼行く可き道を知らず。されど主はそを知り給ふ。

今日鶯を聞きぬ。「用無」今日も我れに大なる力なりき。

二月二十八日。土曜日。「主は我儕の爲めに命を捨て給へり。是れに由つて愛と云ふ事を知りたり。我儕亦兄弟の爲めに生

を捐つ可し」（約第一書 30 6）曇りたりとにはあらざれども美しうは晴れざりき。夜は稍ゝ雨さへ下りぬ。朝 Guizot の History of Civilizat on の中 "Centralization of Nations and Governments" と "The Reformation" の半分とを讀む。非常の勢を以て讀めり。劍もて國を征服するの勢を以て。

"Centralization of Nations and Governments" の梗概（大略）は今我が講義第十六世紀に入り玆に初めて近世史の門戸に達せり。我は前章に於て人民に general interests と general idea なき事は theocracy, aristocracy, democracy, monarchy 等の主義によりて社會の合同を企圖せる事の失敗に陷れるを說きて、是れ第十四世紀末の狀態なりと云へり。されども第十四世紀は此事實を自覺せるにあらずして唯混亂の中に此世紀を終りしがしかも歐洲は本能によりての如く自然に centralization の傾向に從ひ來れり。第十五世紀の特質は實に此傾向の涵養なりしと稱すれば足れり。實に歷史は常に二個の偉大なる力によりて支配せらる（原文拔萃略す）。

我々は今此に centralization を語るに當り、facts を分ちて述べんと欲す。

Political facts に關しては（歐洲列强國が其基礎を固め國體を造り議會を創め實際に於ける治者被治者の確然と規定せられしを事實によりて簡單に說きたる後）、列國多く王國と變じ free city の如きは伊太利に於てすら事實上消失して、歐洲に在りて古來の自由なるものは殆ど全く蹂躙せられしの觀ありしは痛む可しとするもしかも是れ已むを得ざる事にして、security と progress は社會存在の第一義なるが故に、此義を成功したるもの卽ち當時にありては王國權を握りしは、寧ろ當然なりと云はざる可からず。

各政府間に親密なる關係を生じ、平戰兩時に合盟の手段によりて合縱の事をなしたるは、實に其源を第十五世紀に發せり。これは近世歐洲に於ける權力平均なる事實の濫觴をなせしものなり。

又一の事實は當時上の如く國際的交渉の頻繁となるに從つて一種其任に當るものを生じ、所謂國民なるものは其家政の事に忙しくしてこれに干與するの暇なく、其任は全く王家の掌中に入り、國民は愈ゝ外交的知識に遠ざかりて、一旦國際間に

事を生ずるも其眞相を觀破して事局の布置をなす事能はず、手を拱してこれを王に委ぬるの外を知らざりき。これ第十六世紀に於て歐洲史は殆ど外交なるものを以て塡めらるゝに至りし所以なり。

要之、當時政治上に現れし現象は The same tendency of centralization to unity, to the formation and preponderance of general int rests and public powers なりき。

Moral facts に關しては再び church に還らざる可からず。如何となれば第十五世紀は、常に church を考察に加ふる事によりてのみ、當時の powerful influence を知る事を得ればなり。勿論當時の church は church として重きをなせるにあらずして、從來知識及び道德が church より分離せんとするの苦心はありしも、church 常に之れを壓服して離るゝ事を得ざらしめしが、此世紀に入りては church 自身の內に於て此分離を見なんとするに至れるなり。既にして church 自身內の分離充分效を奏せざるに至りてや、sovereigns によりてなさんとせり。しかも其成功の度は clergy によりて成されしものよりも尙尠なかりき。此に於ては popular religious reformation は Bohemia より起り來れり（原文略す）。而して John Huss の此 reformation は、其徒黨火刑に處せられし事によりて、一先づ壓服せられぬ。しかも、

"The spirit of reformation still existed, it waited but for an opportunity again to break out, and this was found at the beginning of 16th century."

church 問題は獨り此世紀を動かしたる唯一の moral question にはあらざりき。第十四世紀に於て Greek と Roman は復古し來り、Dante, Petrarch, Boccacio 等出でゝ大に其思想を祖述し、忽ちにして播布し始めぬ。

此の如き現象の最中に一四五三年 Turks Constantinople を陷れ、東羅馬帝國亡び希臘の捕虜は伊太利に移されて、古希臘の知識は滃勃として靴形半島に起りぬ。時恰も church は political power に於てゞはなかりしも、wealth と luxury に於て最盛の時に當りしかば "The church gave herself up to all the pleasures of an indolent, elegant, licentious civilization." これを Louis XIV 時代の佛國に比較して甚だ相似たる對照を得可し。

第十五世紀は又單に此等の現象のみに止まらず、physical activity が人民の間に澎勃として起り來りぬ。Spain の亞弗利加探険、Vasco de Gama の亞弗利加を一周して印度に到れる、Columbus の亞米利加發見、歐洲商業の著しき發達、火藥の戰爭の方法を變じたる、oil painting の發明によりて名畫の作出せられたる、銅板の彫刻、紙の製造、而して 1436—1453 に於て印刷術の發見は殆んど測知す可からざる大結果を世界の表面に與へぬ。

第十五世紀は實に「偉大なるもの」の搖籃なりき。歐洲文明の胚子なりき。彼女が胎內には the might of revolution of 16th century が形をなしつゝ橫はりてありき（The Reformation は未だ讀み終らざれば此に記せず）。

それより『用無全集』を讀む。「亂曲」、「絶望憤」は誠に天來の聲、讀めば讀む程意味濃くして我が心の奧底に烈しく絃の震ふを覺ゆるなり。午後しま子を訪ひ、後山本に到る。愛子は一見して其瘦せたるを見得べし。彼女に引かれて病室に入りぬ。直光は乳母の膝に抱かれ、四十度近き熱の爲めに眼を開く事すら叶はずして悲しき聲に泣き叫ぶなり。泣き叫ぶ每に若き母の眉には言ひ知らぬ憂はしき色讀まるゝなり。我れは心より思ひぬ。人父となる可からず。又母となる可からず。此悲痛に居らんよりは寧ろ死するの勝れるに若かずと。しかも彼女が其愛兒に對する一擧一動何等の情、何等の愛、何等の聖。母の美しさは處女の美しさの比にあらず。我は彼と及び彼の兄の一日も早く快癒せん事を祈る。「病は天惠なり。病は人をして高からしめ、深からしむ」と我數日前の日記に記しぬ。しかも是れ我が彼等を見舞はざりし前の暴言のみ。人の痛みは徐徐にして癒さる可く痛きに過ぎたり。嗚呼、我如何にして民の傷を醫すべきや。唯祈りのみ、主よ、よきに導かせ給へ。

歸り來りてより Tennyson の "The Vision of Sin" を讀み終る。遂に了解する事能はず。我が讀書力足らざるか。詩想缺けたるか。悲しきは此事なり。

夜、島津家に行きて重埜氏の講義を聞く。朱子學も陽明學も薩摩より起りし如く（卽ち始めて支那より傳へられし如く）說けり。果して然るか。兎に角薩摩は古來日本に於ける新文明吸收の卒先者なりしは明かなり。これ確かに彼女が維新革命の先導者たる事を得し素因を作りしものとす。而して今は卽ち時代精神の駙馬となり、舊思想を代表して僅かに過往の威權を

繋がんとす。陋なる哉。

歸後 Anticipation の "Probable Diffusion of Great City" の續きを讀む。其中殊に注意を引きたる思想は、向後發達し行く可き cities は果して遠心力によりて支配せらる可きか、求心力によりて支配せらる可きか、是れなり。遠心力の素をなすべき factors は "passion of nature" なり。"cham of cultivation" なり。"craving for a little private imperium such as a housé or cottage" なり。"separate, sacred, and distinctive household なり。"healthfulness of the country for young children" なり。此の如きものは多く人性の自然に出で、諸種の發明發見等あるともよく抑壓すべからざるものなり。又求心力の素をなすものは "convenience of shopping" なり。"desirability of access to good schools and to doctors" なり。"love of crowd" なり。而して其第三者の如きは或は望み得可からずとするも、第一第二の如きは或事情の下に suburb にありても決して出來難き事にあらざるが故に後來生ず可き "urban region" (著者は此語を以て向後發達すべき都市に apply せり) は centrifugal force によりて支配せらる可しと云ふ夫れなりき。

Tennyson を讀む。"Edward Gray," "Saint Agnes Eve," "The Lord of Burleigh," "Locksley Hall" 等なり。"Locksley Hall" は最大の感興を引けり。"Saint Agnes Eve" の純潔は我の心を雪の如からしむ。しかも我は未だ Tennyson には適せぬ樣なり。矢張り Byron, Shelley, Schiller 等が impressible なり。

床に就きたる時急に孤獨の感鋭く我が心中に起り、身は獨り爲すなきの暗黒に投げられて、人に與ふる事も受くる事もなす能はず。唯石や塵の如く善と惡と共になす事なくして死に到らんかを思ひて、胸は宛ら引き裂かるゝ樣になりぬ。我が日頃なしつゝある日毎の精勵は、果して我が隣人に何事をか爲し得るか、砂上に築く城にてはあらざるかなど、頻りに思ひ浮べられて暗き影をあり〳〵と眼に見し果は、總てを神の御手に任せんと決心しぬ。心稍ゝ安んずると共に眠我れを誘ひて其餘を知らず。

×　×　×　×　×　×

いのり（三月一日安息日）

はてしなき、うなばらを、
まんまんとして、潮わく、あさなぎ、
こぎいでし、いりえも、ゆめとなり、
すみわたる、あをみなそこに、
うみのさちの、かぎりと、むつびて、
うまし、しこし、よし、あし、わするゝ、
ひるとよる、よしや、つきずあるとも、
われひとりにして、はらからと、ともならずば、
とくいま、このふね、やぶらせたまへ。

あれはてし、あれはてし、
むなしきところ、よるのとばり、おちて、
よみよりこそ、いぶけ、こゑなきかぜ、
ゆきなやむ、くしたびゞとの、
うゑにたふれ、かわきに、まろびて、
おとろへはて、しにはて、ゆくも、
たゞひとり、のこれるを、いだきつ、
ひとの子の、うなじ、むねのちに、ぬくめえば、

一九〇三年

かんしやぞ、わがかみ、こゝのいのち。

三月一日。日曜日。曇天。夕方より細雨となる。夜に至りては點滴の音唯靜か。今日は我れ自ら自らを養はんと心を定めぬ。朝昨日の日記を認めて稍ゝ九時近くに至りつ。それより Dod's "Gospel of St. John" の中 "Sight given to the blind" を讀む。余は失望したり。余は多く得る所なかりき。Expositor Bible の中、此書の如きは最も重きをおかるゝものなるに、余のこれに失望せるは余の道を求むるの精足らざるか。余は斷じて然らずと思ふなり。余は直ちに去りて Bible に到りぬ。始めに約翰書を熟讀し後馬太傳の山上の垂訓を讀みぬ。思へば余は永き間四福音書に指を染めざりき。今日之を讀むに至りて、余は痛く余の愚を悟りぬ。弟子豈其師の上に出でんや。人豈神の右に立ち得んや。余は約翰より基督に來りて、狹き道より廣き廣き花野に出でたるが如く感じぬ。余は非常に敬肅の念を以て Bentitude を讀みたりき。高潔比なき聖訓は余が心を痛ましむ。是れ世の多くの人には救濟にして余には苦痛なり。世の人皆安んじて救はれたりとなすに、余は如何なれば何時までも神の愛憐の御手より遠ざからんとはするぞ。されども Bentitude の如きを讀む時に其高崇は果して何の世に達せらる可きやを思へば、余の心には汚穢滿ち不義滿ちて唯々恨悔退縮の悲みあるのみ。神の前に潔きものなし。潔きものある事なし。余救はれんがために何を爲すべきや、一つだにになすべきものなし。若し一つありとせば、余が此汚穢に充ち滿ちたる心と肉とを其儘に主の御手に任せ奉らんのみ。主は爲し得給はざる事なし。或は余の汚穢をもヒソプもて潔め、迷へる羊の跡追ひてそを故の群に收む可く余を遣はし給ふ事もあらんと思へばなり。世の人のほゝゑみ羨ましきかな。余何の時か再び歎きの鄕より還りて笑の囿に入り得べき。唯「終りまで忍ぶものは幸なり」余をして願くば此忍耐あらしめ給へ。嗚呼余惱めるものなるかな。

歌一つ。是れ余が僞らざる心の姿なり。午後より河野夫人を病院に訪ひぬ。樂しき物語に遂には互に涙をさへ誘ひつ。彼女の戰鬪いかに勇ましき。主に依るもの此の如かる可し。說教も說話も彼女の强き行には及ばず。それより市に出でゝ『聖書之研究』及び蘆花子の『黑潮』を買ひて歸る。

家に着きてより『聖書之研究』を讀みて夕刻に到る。彼が堅信と憚らざる自信、尊き哉。余は此雜誌を讀む毎に、此誌の中に彼が苦心の如何ばかり多きかを思ひて同情の涙ぁらざる事なし。彼は「神聖なる午後七時」を記憶せよと書しぬ。彼は彼の同人と約束して此時を以て相祈る事を誓へるなり。余は彼より受くる所誠に多々。而して嘗て何のこれに謝すべきものある事なし。余も彼の志に倣ひ、午後七時を以て小さき祈禱を捧げて、神彼に祝福を垂れ給はん事を祈らん。是れ余が彼になし得る唯一の謝辭のみ。

夜食後母上等と共に壬生『聖潮』を讀む。余も亦與る。此夜幾度か涙を以て『一葉全集』を讀みたる外多くなす所なし。何故か疲勞して就寢す。兄より手紙を得ぬ。彼の病癒えたりとぞ。感謝すべきかな。

三月二日。 月曜日。朝は曇つたけれども晝頃から晴れて、美しい春景色となつた。今朝庭で鶯の鳴く聲を聞いた。人の世の中には未だ此樣な美しい聲が殘されて居る。希望の色と聲とは實に毎日の野山に充ち滿ちて居る。僕は此點に於て決して失望すべきでない。朝 Guizot の History of Civilization の中、Reformation を讀み終つた。例によつて梗概を次に。

講者は今長く忍耐の中にありし聽者諸君を拉して general interest と order と social union の時代に達したが、此時代となると出來事が互に著しく錯綜して居て相影響し合つて居るから、これを諸君の前に明晰に講示する事は甚だ困難の業であるが、然し講者はそれを試みねばならぬ義務の上に立つて居る。

先づ Reformation の時代とは第十六世紀の初代(1520)から第十七世紀の中葉(1648)までを指す。即ち Wittenburg に於て Luther が教書を焼き捨てた時から Westphalia に於て條約が成り立つた迄の間である。而して兎も角も此 Reformation が此世に齎した第一の結果とは何かと云へば、歐洲の天地に Catholic 及び Protestant と云ふ 2 classes of state が出來上つて互に烈しい戰鬪を續けたそれであつた。此 Reformation が出來上つた時の政治上の有樣はどうであつたかと云へば、"It was in the midst of the great struggle between Francis and Charles V."(以下略す)と云ふ有樣であつた。

他の方面の有樣を云へば church は殆ど其の political power を失ひ Jesuits 起り、哲學界には Facon と Descartes 出で、

歐洲の殖民組織は其間に於て基礎を置かれたと云ふ狀態で、人類の活力は凡ての方面に著しく發揮されたが、其中で最大最偉なりしものは實に此の Reformation であつた(此次に著者は學者の研究態度を實に立派に書いてあるが此には載せぬ)。

偖て學者等は此運動を批評して色々に云ふが、此中でも文明の潮流の流れ行く間に起つた偶然の出來事に過ぎぬと云ふ人もあり、王侯等の野心から起つたと云ふ人もあり、又同情者の言は唯寺院の腐敗を痛嘆する志士の義憤が此結果あらしめたのであるとも云ふ。然し講者に云はせるならば斯うだ。

It was a vast effort made by the human mind to achieve its freedom;（以下略す）

今當時の人心の傾向と spiritual power の狀態とを察して見るに、第一人心の傾向から云ふならば、寺院の勢力の漸次衰亡して來て古學の復活が段々盛んになるに從つて、人心の活力と云ふものが漸く盛となり、寺院內にすら種々の school が出來、又哲學者文學者等が自由の思索を始めると云ふ風であつたが、偖 spiritual power の方は全然沈滯澁滯に陷つて物の用には立たなんだが、併しその外形は偉大で崇嚴で愚民を迷はすには充分の勢力を示して居たのである。此二個の反對した對照的の事實が實に Reformation を惹き起した眞因の最大なるものである。第十六世紀の此騷ぎと云ふものは reforming character よりも essentially に revolutionary であつた。

若し此の Reformation なるものが人心の全然的自由を贏ち得なんだとすれば、それは確かに自由のえらい增加をなさしめたものである。これがも一つ最大の結果であるのだ。Reform を入れた國と入れぬ國々とが如何なる狀態を其後に呈したかを見るならば、それは實に明白に判る話である。大抵の Reformation などと云ふものは、宣言と實行とは到底同等に伴はないのが常であるが、此の Reformation は實行の方が寧ろ擧つた位なのは不思議な現象と云はねばならぬ。

今度は Reformation の敵は此事件を何と批評するかと云ふに、

1st. the multiplicity of sects

2nd. tyrany and persecution の二つだ。これに對する Protestant の答解はどうも腰が弱い。實際の事を云はうなら此攻擊は

多少の理由がある事で、

"It thus fell into a double error. On the one side it did not know or respect all the rights of human thought; at the very moment that it was demanding these rights for itself, it was violating them towards others. On the other side, it was unable to estimate the rights of authority in matters of reason."

これが實に Reformation の最大缺點であつた。

終りに一言するが Reformation の結果は實によく近世の歐洲に見出された所の現象とよく似た事だ(比較は書によるべし)

壬生馬早く學校より歸り來り、共に郊外に行つて見ずやと誘つた。僕は既に昨日非常に郊外に出ん事を望んだのであつたが曇天のために控へたのであつたから賛成して出掛ける事とした。四谷から汽車で澁谷で下車し農科大學の方に向つて行つた。世は春だが何となく例の淋しさが心を襲ふ。汽車の中でも頻りに此念が胸に浮んで思はずも沈默して考へ込む樣になる。然し澁谷に降りてからは流石に快活にあらずしては居られなんだ。世は皆囁きの中にあつて凡てが神の御手を讃美する樣である。後で判つたが何とか云ふ華族の松濤園と云ふ茶畑に知らずに這入り込んで、壬生馬は三角椅子を据ゑ麗はしう靑んだ麥畑と團々として麗はしい茶畑と向うに煙る樣な森とに對して畫筆を運び初めた。僕は後の草原に坐して彼の後姿を sketch した。何處かで雲雀の鳴く聲がする。直ぐに思ひ出すのは Shelley である。Shelley を思ひ出せば聯想せずに居られないのは札幌の牧場である。草の上に仰臥して幾度何とも云へぬ聖想に滿されて "Ode to the Skylark" を讀んだ事! 久し振りで田園の空氣を吸うて心迄生き返る樣な氣がしてボンヤリとなる位であつた。僕は二時半まで玆に居てから壬生馬に別れて又澁谷から汽車に乘つて家に歸つた。而して直ちに新渡戸夫人を訪うて英語をやつて貰つた。夕食後は『黒潮』を皆にて讀んだ。それから自分の室で村田氏の『ルーテル傳』を讀んで History of Civilization で得た知識を補つた。

今日から毎朝舊約聖書を讀む事にした。愛子は遂に臥床するに到つた相だ。彼女は名譽の傷を負うた。如何なる時にも尊きは獻身である。強く云ふならば人の爲し得るもの丶中獻身より尊いものはない。そして獻身のみが尊いものである。僕の

生涯が獻身の連鎖であらん事は僕の唯一の願且つ祈である。しかも一として實行は擧らないのである。主は僕を何と見そなはすであらう。益なき身は眞にひき臼にて粉とされる方がましであるよ。

三月三日。火曜日。晴天なりき。今日も亦鶯の來り鳴くを聞く。朝一時河野氏を訪ひしに孝太君は今夕出發すとの事なりき。彼と別れ歸る、家に歸りてヨブ記及び約翰傳を讀み始む。約翰傳の第一章を衷心より理解し得るものは幸なるかな。余は實に此境遇に達せん事を希ふ。余は既に幾度か此章を讀みぬ。而してそが何を意味するかをも略知る事を得たり。しかも之を一讀して心中の震ひ動くが如き事は嘗てなし。これ眞に余が宗教的經驗の淺き結果なり。恥づべきかな。

午前は History of Civilization の中 "English Revolution" を讀む。例に依りて。

余は前回の講義に於て、第十六世紀歐洲の舞臺には二個の重要なる事實顯はれしを云へり。即ち一は思考の自由にして一は政治的社會の集權なり。而して二者共に效を奏し、一は Protestant を産み、一は absolute monarchy を産みぬ。されども此二個の事實は全く相反馳せるものにして、當時尙其併行を見たりと雖も、早晚何れかゞ破壞せずんば止まざらんとするものなりき。而して其第一の衝動は、即ち英國に於て起れるなり。唯玆に一の疑問とすべきは、如何にして英國は其卒先者なりしかにあり。

其第一の原因は Tudor 家の下に absolute power が systematic となれる事なり。其第二の原因は religious revolution が歐洲大陸の如く完全に行はれし事なり。

これ等の關係によりて Reformation は歐洲に於てよりも實際的の形體を具して再現せしなり。即ち政治的革命として顯はれしなり。當時、政治的方面に於ては、第十六世紀を承けて feudal nobility の頽廢と共に其所有地は多數に分割せられ、隨つて富は一般に配分せられて industrious classes の中に非常なる富力の增進をなしぬ。これその政治的改革の斷行せられし原因の一なり。又 Elizabeth の時代には文學上哲學上に多士濟々の時にして宗教的思索も亦大に其範圍を廣めんとするの傾向を生ぜしなるべく、又此時代には Puritan 勃興して單純狹隘の思想に立てり。此時代は又歐洲大陸に於ても Protestant の

影響を受けて大に自由政治の思想を出せし時なりし。

されどもこれ等總ての原因も次で來るべき變遷をなさしめんが爲めに如何に用ふべきかは、餘り複雜なりし歐洲のよく知る所にあらざりし。而してこれを成立せしむるに足るべき frame work を有したりしは獨り英國あるのみ。英國の政界には第十六世紀に於て既に free institution ありしを見るなり。（中略）

此時代に於て英國は二個の國民的缺乏を感ぜり。一は a want of religious liberty and of a continuation of the reformation already begin にして、二は a want of political liberty, which seemed arrested by the absolute monarchy now establishing its power. なり。

此に parties は revolution の間常に互に相連關して距る事なし。而して宗教上の改革なるものは當時にありては means にして end にてはなかりし。要之 we must come to the conclusion that the English revolution was essentially political,…… (pg. 275) 然らば如何なる parties が此の revolution に多くの作用をなせしやと云ふに、第一に來るものは Pure monarchy party にして其主張する所は、帝王權の神聖を認め單に若干の法令のみに從ふの義務あるものとなし、宗教に於ては堅く Episcopacy に傾けり。此 party は最も早く倒れ、次で來りしは Political revolutionary party なり。此 party にありては帝王の神聖を し、政府も亦國會の意見の下に動作すべきを主張し、其主張の中には暗に sovereignity of people の思想を包含せり。而して此 party に最も關係密接なりしは Presbiterian なりとす。此 sect は政治上になさるゝ可かりし主張が、宗教界に行はれん事を主張せるものなるが故に意氣相通ぜしなり。第三に來りしものは Republican party なり。此 party は當時の諸制度一として悪ならざるものなしとなし、これをして根本的の改革をなさしむるに非ざれば到底其目的を達したりとなさゞるものなりき。而してこれと相伴へる宗教は宗教的 Republican にして、Christ の外には何者の power をも納受せざるものなり。これ等の parties は互に相起り相滅して其生存を爭ふ事十二年の後一六五三年に至りて、Republican party は遂に獨り殘りぬ（以下略す）。

午後 Mazzini の essays を讀む。得る所なし。直良氏來りて暫く雜談す。又『獨立評論』を讀む。ニイチエの思想と云へるもの略〻彼の哲學を論述して當れるに近きもの〻如し。余は若し許されなばこれによりてニイチエの評論を試み度く思ふなり。

夕食後、河野氏を榊病院に訪ひ、其隣室なる安田氏夫人（鈴木歌子氏の姉）より聖書の質疑を受く。余の足らざる知識と尠き信仰は、自らさへ滿足し得可からざる解釋をなし得るのみ。然れども余は熱心に忠實にあらざるを得ざりき。余は確かに彼女を動かし得たりと信ず。余は未知の一女子なるを以て其同情を輕むる能はず。主が余を用ゐてかくなさしめ給ひし事は、余が實に衷心よりの感謝なり。九時頃歸家。Milton を讀みたれども疲勞して能く意をとる能はず。近頃連日夜を更したれば今日は御許を乞うて早寢す。

三月四日。水曜日。朝雨なりしが午後より止み、夜に至りて又春雨蕭然。

朝 "History of Civilization" の "French Revolution" を讀む。半讀なれば、明日完讀の上にて梗概を記さん。午後、しま子を訪ひしに、病氣非常に快方に赴けり。今日は初めて「茶碗蒸し」を食する由なりき。それより郵船會社に到りて、木村の洋行の件に關し吉田立卓なる人と相談をなす。甘く行きさうもなし。然し彼に多少の便宜は必ず與ふる事を得べし。それより警醒社に到り、兄のオレンヂ侯傳の話をなす。店主或は受取りさうなり。彼こそは眞個の商人なり。余は彼の面を見る每に其面に正直と勤勉の色を認めざる事なし。余は彼の如き人を尊敬す。歸途山本に立寄りしに直光は非常に快方に向ひ他の二人（愛子及び直正）も惡しき方にはあらざりき。暫く直良氏と語り、多大の感謝を以て家に歸りぬ。

余此頃足殆ど門を出でず。今日久振りにて大に步行したれば非常に疲勞したり。されども心は非常に快し。蘆花の『黑潮』を見る。一瀉千里の勢を以て全篇を讀み終りぬ。國家を料理する大臣の書生の如き同一の事實の餘りに繰返されたる所々の章に、著しきたるみの見出さる〻など、小説としての缺點を云はゞ、甚だ多かるべきも、氏が時の濁流に慨し藩閥の專橫を憤り、高尚なる趣味の不足を歎じ心を盡して其胸懷披瀝したる跡に至りては誠に余の同情に値するものあり。彼は確かに明治歷史の半面を遺憾なく描きて、人をして長歎息あるを禁じ能はざらしむ。美を標準として其價値を疑ひ寫實の立場よ

りこれを攻撃し、片言隻句に不平を鳴す今の所謂批評家なるものは災なるかな。余は著者の壯健なる存在を切に祈らざる能はず。彼は又其家兄と爾後文壇の締交を解けり。可祝彼の決意。圓滑突梯は確かに今日の日本を救ふ所以に非ず。

今日は我が第二十五回の誕生日なり。軒には靜かに雨の音聞ゆるなり。余は椅子に兩臂と頭とを埋めて、眼に見るが如き過去と茫漠たる未來とを思ひ廻らしぬ。端なき幽想きびしくも我身を捕へ、涙は潸々として襟に滿つるなり。我が過去は自ら知るが如き平凡にて怠惰にて冷淡にて埋り、我が未來には一道の暗き洞穴ありて、人は皆その横に開かれたる平夷の明るき道を行くに我のみは唯獨り其洞穴に入るの運命なるを知りぬ。余は洞穴の彼方に必ず光あるべきを信ず。されどもそは我も人も共に見し所のものにあらず。余は唯余の小さき信によりて敢て茲に進み入らんとするなり。暗と冷とは彼處の特色なり。何故に余は此の如き嶮しき道を選ばんとするぞ。唯基督の熱き涙、余を感激せしめしによるのみ。是れ愚かなる事無益なる事にはあらざるか。何者か我を笑ふが如きを覺ゆるなり。彼處に到らん時我を産める父と母とは我が面を忘れ、我が弟と妹とは涙を分たず。愛する人凡て我れをあざけりて、彼の迷へるものを見よと云はん。我が力足らず我が糧盡きて、かの洞穴の中道にして永遠に倒るゝものは我が運命にあらざるか。それもよし、しかも我が淋しき足の運びを突き當れる冷嚴の面に止めて其處に人の子に涙を注ぐ事も能はずして冷かに眠り去らんとするにあらざるか。云ふ可からざる孤獨の思ひ大石ありて胸を壓する樣なり。幾度叱すれども我が涙は歔欷をさへ誘ひて止む時なし。嗚呼神よ、僕の不信と弱きとを憐れみ給へ。僕に唯信仰を與へ給へ。一人の人に仍らずとも主によりて笑まひ得る高き希望を與へ給へ。我が罪常に我を打ちて跌かしめ、我が誤り我を追ひて引き裂かんとす。我は倘十字架を右の肩に悲しき罪を左の肩に負へるなり。重さに堪へずして自ら斃れんとす。然り自ら倒れんとす。唯基督に仍る感謝余を率ゐて一日の上に一日を歩ましむ。我顧れば二十五年は唯一朝の夢の如し。唯我れ主によらん。今は主に依らでは何處にも依るべき所なし。我は已むを得ずして主に行かざるを得ざるなり。我れ逃れんとすれども主は我を抱き給ふなり。主よ願くは此僕をよきに導き給へ。僕の祈唯是れのみ。

のろはれし人の子や春に生れ來て花にふさはぬ涙持つ我れ

三月五日。木曜日。朝 "History of Civilization" の中 French Revolution を讀み終る。梗概を摘めば、

歐洲の文明を古代文明若しくは東方の文明と比較して著明なる點は前者が複雜にして變化多きにあり。然れども歐洲文明の中にありても英國と大陸とは亦多少の異同なきにあらず。英國は歐洲中にありても其文明複雜にして、同一文明の中にも常に種々なる制度と思想とを包含せる故、或る一個の勢力が他の總ての勢力を全然壓服して專制を擅にする事なく、勢力の競爭をなすの狀態なりしかば、思想の變遷も大陸より一歩を先んじ、歐洲に先んじて革命を見るに到りしなり。反之大陸にありては凡ての組織凡ての主義各英國に於けるものよりも一層完成せられ極點に達せざれば止まず。凡そ發達は皆大規模に行はるゝを常としたり。故に其變化も根本的にして英國よりも遲れたるなり。

されども general march に於ては大陸も英國の轍に出でしものゝみ。"though the differences are real, the resemblance is still greater" なりき。偖第十七第十八兩世紀に於ける歐洲史を繙く時、吾人は直ちに佛國が歐洲文明の魁をなして進歩したりしを疑ふ能はざるべし。勿論 pure and absolute monarchy は Charles V と Philip II の下に Spain に起り (Louis XIV の前) principle of free inquiry は、十八世紀に於て佛國に起りし以前、十七世紀に於て既に英國の稱道したる所なりき。されども "two principles or systems remained, in some sort, confined within the countries in which they sprang up." にしてこれを歐洲的となし歐洲に傳達せしものは佛國によるものと云はざる可からず。古來佛國は傳達的國民なり。然らば當時に於て佛國が歐洲に影響を及ぼしたるものは何なるかと思ふに勿論二つありき(原文拔萃略す)。

今吾人は其第一のもの即ち Louis VIV の Government より論ぜんに、其政府の出現せしは單に victories, festivals, master-pieces of genius, means にのみよりてなされたるものにあらず。又單に一個の野心家の野望の滿足のみによりて起されしものにあらずして、此中には矢張國民的自覺の存せしものなり(此次に歐洲に行はれし戰爭の種類三種ありし事を說けり是れ亦面白き提論なり)。(原文拔萃略す)

Louis XIV の戰爭の方法より、去りて其政略に來る時は直ちに又其戰爭の同一の方法に出でしものなる事を推知するに難

からざるなり(之れにも例證あり)。今眼を轉じて佛國内部の狀態を見る時は、彼が力を極めて經營せるものは中央政府の命令を地方に及ぼし、地方の報告を中府に致し、凡ての點に於て中央と地方と迅速に相通ずるを得せしめんとするにありき。而して此事は歐洲に於て甚だ不完全なる發達のみなしたるものなりしなり。而して彼は或程度迄は此點に於ても成功せり。

然らば如何にして此の如き大帝國が、一朝にして次世紀には滅亡の悲運に際會せざるを得ざりしや。そは政府と全く分離して社會が存在せしが故なり。

かくして pure monarchy は 1721 に於て monarch の死去と共に消失しぬ。吾人は之れより第二のもの即ち French society を少しく論ぜんとす。Louis XIV の死後佛國社會には富力、勢力、智力の顯著なる發達をなしたるにも拘らず、其政府は依然として舊態を維持せるに過ぎず。此の如きは第十七世紀末葉に於ける佛國の狀態なりき。而して revolution を起せし當時の重なる狀態を列擧せば、

The first…………is the almost entire disappearance of the government in the course of the 18th century, and the appearance of the human mind as a principal and almost sole actor.

A second characteristic,…………is the universality of the spirit of free inquiry.

This movement, morever, had one peculiarity, which perhaps can be met with at no other time in the history of the world, that of being purely speculative.

而して此時代の如く government of facts 及び external reality が thought の government と相背馳せし時代はあらざるなり。

"A fourth characteristic is of the human mind at this epoch, I mean its extreme boldness."

河野氏より手紙の代筆を賴み來りしかば十一時頃より榊病院に到る。其愛女等の養育に就て其親戚に書を致すなり。彼女は殆ど泣かざりき。しかも其眼中には涙にまさる悲哀の色の溢れて見ゆるを認めし時、余の心も亦かきむしらるゝ樣なりき。彼女は云ふ可からざる寂寥を感ずる由を云ひて一滴の涙を垂れぬ。余は永く居るに堪へざりき。昨日より沈み勝ちに物思は

るゝ我は急ぎ辭して家に歸りぬ。誠に誠に世の終近づけり。信仰によるべき時なるかな。

午後よりしま子を訪ひ彼女の爲に Christmas Carol を讀む。それより河野氏より依頼の手紙を書き室に歸りて Anticipation を讀む。今日は大に得たれども讀了の上記す。夜に至りて風出づ。落莫たる聲秋の如し。余は風を畏る。風の吹く夜は確かに神の怒の聲を聞ける如き心地するなり。

東方の涙源を思ひては唯苦しき歎息のみ脣に上る。嗚呼我如何にすべきぞや。彼の痛める胸何を以て拭ひ得べき。戀は全く二つに裂かれて、再び相會はざる可く相距りたる地上に置かれぬ。神も遂に之れを結び給はざるや。さらば是れ彼と彼女との永遠の運命か。彼より書を得ざる事多時。我片信を致さずして此事を云ふは寧ろ狂なり。然り我は今敢て彼の書を望むと云はじ(云はざるを得じ)。されども余は只彼の健康を知らん事を望む。主よ、願くば彼を守らしめ給へ。

壬生、小川氏が好本督氏に送るべき書を代書して我に示しぬ。彼の深き同情は滿紙を熱き涙を以て書けり。我は彼が偉大なる事をなせるを思ふ。

八日學習院に行はるべき輔仁會に演說をなすべく約しぬ。我は彼等の前に豫言者たらん。我忌憚なく彼等の缺點弱點を擧げ、阿諛に慣れたる彼等の耳に我が忠言の聲を滿てん。我何を云ふべきかを知らず。神知り給ふ。

物あり我が胸を捕へて去らず。眼は赤く血走り頰は上氣して熱し、時に瞑眩をさへ感ず。愚かなるものよ。汝の愁傷は風の如し。流れて何處に到るや、果ては唯木の葉の上に消え去るのみ。神そを呪ひ給ふべければなり。

窓前『用無遺稿』及び我が集めたる『金蘚集』を讀む。『用無』の中にては矢張「亂曲」「退墓のはしがき」めでたし。『金蘚』集の中に "Be still, be poor human heart" 及び Schiller が Robbers の Danube bank に於ける一齣を讀む。後者の想に至りては幾度讀むも飽かぬ人生最奥の苦悶の聲、讀みて思はず涙下らざる事なし。

三月六日。金曜日。半晴。寒し。風あり。朝、聖書を讀む。「爾等互に人の榮を受けて神の榮を受けざるものなるに、いかでよく信ずる事を得んや」なるヨハネ傳の句に到る。余は慄然として震ひぬ。汝健忘の徒よ、幾度此句を忘れんとするや。

大橋圖書館に到り明後日なすべき演說の材料を萃む。余は Athens に於ける高名の二人 Alcibiades 及び Plato を取りこれを二代表者となし、貴族靑年に針銑を加へんと思ひたれば、其傳記を詳知せんがためなりき。憐むべき圖書館は多く滿足を與ふべき書を藏せず。Plutarch's "Lives", "Treasury of Great men", "Paralled History of the History" and Biography (by Philip Alexander Prince, 1842) 其他二三の希臘史を繙きたるのみ。然し午後二時迄には充分の仕事なりき。それより調査し來りたるもの丶順序を正し、又英語の復習をして新渡戶氏に到り英語の事をなす。先生は四月下旬に大阪に行かる丶由。我が東行の同伴者は非常に都合よき便宜あるらし。

夜歸り來りて更に演說の組織を正し、壬生が云ふがま丶に彼の前にて少しく試みたり。彼云ふ。余は早口なりと。然り余の演說には余自らさへ呆れたり。されども生の熱心彼等に何物をか傳へ得ざらんや。我は神によりて人の前に恐れず。我が平生人の前に云はざりし鬱懷を、充分に漏し得ん事を祈る。主の余をして云はしめ給はん事を祈る。此夜十一時就寢。

三月七日。土曜日。空は霽れしと云ふにあらず。風は寒かりき。朝 encyclopedia を見んが爲めに壬生と共に山本に到る。二子の病は大に癒え、而して晝夜彼二兒の爲めに看護したる愛子は倒れぬ。熱はなけれど頭痛頻なりと云ふ。彼女は余の何時渡米するかを問ひて其眼には淚あふれぬ。嗚呼憐むべきものよ、愛すべきものよ、而して悲しむべきものよ。余は彼女を見る毎に心は銳き鎗もて刺さる丶如きを禁ずる能はず。而して余は尙蠢々として一片の書信をだに東飛せしめざるなり。自ら判じ難きは實に我が心の樣なり。余が心は渴くが如く彼に書を致さん事を望む。しかも我が手は遂に我が心の命に從はざるなり。全能の御手よ、小なる僕は實に何をなす可きかを知らず。唯我が盡す能はざる同情の祈りは我に殘されたる唯一の道のみ。凡てを御手に任し奉る。神よ、願くば我を憐み給へ。我を憐み給はずとも願くは彼等が伴らざる衷情を憐み給へ。我は此事を思ふ毎に誠に死を思ふなり。

encyclopedia には充分の材料なりき。よりて早く歸る。

歸家の後壬生馬と共に人生に就いて語る。彼は「生活せんがために生活するなり。人間の本來は生活するを厭ふと雖も、生

活せざる可からざるが故に生活するなり。而して其中卓越せりと稱せらるゝ人々は之によりよき生活を與へんとするなり。而して其次代の人は又次の人によりよき生活を與へんとするなり。彼等は各己れの生活を厭うて、而して人に生活を勸めんとす。無意義にあらずや。よし是等の生活には多少の意義を有し、漸次よりよき生活に移るとするも、世界の最後は、唯一の滅亡あるのみ。吾人が夜々流星が天の一角より瞬轉にして消え去るを見る如く他年一日何れかの星の子等は、地球なる星が閃然として暗中に消え去るを見るなるべし」と。彼の思想は今絶對的厭世の基礎の上に立てり。余は彼が此の如き思想を何處より得たるやを知らず。余はこれに反對せる議を取れり。曰く「地上の生活のみが人世の本義にあらず、こは人世に一部の意義を與ふるものなり。地球は滅すと云ふと雖もそは地球の實質が滅せしにはあらず。その如く人生の生活が地球の破壞と共に滅亡せらるべきものなりやは決して輕々に斷定し去る可からざる大疑問なり。果して人格卽靈魂が其後存在をなすや否やは、これ既に理論のよく說盡する所にあらずと雖も「我等は信仰によりて intuition によりて其存在を確認し得るなり。而して我は堅く其存在を確認せざる能はず。然らずんば一日も半時も此の今日の立場に立つ事能はざればなり」と。しかも是れ要するに何物にてもあらざるなり。余は壬生馬が信仰の生涯に達し來らん事を望み祈る。余はその何の故たるを知らず。又何の利益あるかを知らず。然れども彼が余と同一の信仰に立ちて同じく考ふるを得るに到らんにはいかによき事なるべきぞや。余の信仰若し神の前に嘉せらるべきものならば、余は理論によらずして彼を余等の主に來らしめ得べかりしものを。嗚呼我は自ら衷に悲む。我は只空しく爭はず。彼に聞きて我は祈らん事を欲するなり。

午後より Carlyle の "Critical Essays" 及び "Sartor Resartus" 並に John Foster's "Decision of Character" を讀む。衣服哲學は眞に彼の偉作なり。一句を拾ふも我が心絃は一種の震動を感ぜざるを得ざるなり。Decision of Character" は又失敗せり。此書は我に餘程緣遠き書なりと見ゆ。されども我は必ず何時か讀了して其中より得る處なくんばやまじ。

夜は島津邸に重野博士の講義を聞く、寢言の如し。歸宅の後演說の結論を作る。我が出師準備は略々整へり。夕食前一寸河野夫人を訪へり。彼女は我が容貌に以前より悲痛を包むの色ありとてこれを詰りぬ、余は神によると稱しながら遂に色を

他人に發見せられしを恥づ。我が心には實に彼女が云ふ如く疼痛ありて日夜我を捨てざるなり。しかも我は神に在るものは人の前に快活なるべしと心を決し closet の外にては涙あらじと誓へりき。而して遂に色の動くを看取せられぬ。汝の信は未だ汝を救ふに足らざるなり。愚なるもの ゝなす所常に此の如し。嗚呼、されども此棘を如何にす可き。人何者ぞ我が痛みを知らず。只神のみ知り給ふ。其棘を拔き得給ふは唯神のみ。主は罪の故に人の子を捨て給はじ。

三月八日。日曜日。半晴。朝讀經。約百記の末方を讀む。云ふ可からざる敬虔の思胸に充ちて思はず涙下る。九時頃より輔仁會の大會に連る。我は此安息日を彼等に說教する積りにて出掛けたり。我は十一時半より講壇に立ちぬ。先づ世界に於ける自由意志の思想が、澎湃として四方を壓し日本も早晩激烈なる其見舞を受けざる可からず。而して華族なる問題の如きは其思想の最もよき犧牲となるべきものなり。又所謂華族なるものは從來大名（若くは公卿）として應分の土地と人民とを領し、直接に人民と相關はるの位地にありしが、維新以後人民との直接關係は絕たれしが故に、華族が全然利己的の傾向を生ずるの患あり。故に今の華族靑年は是等に對して充分の立場を造らざる可からず。然らば如何なる立場に立つ可きやと云ふに二例の最も說明し易き例あり。一は Alcibiades にして一は Plato なりとて二人の略傳を述べて結論して曰く、

論者は此に二個の事實を演繹し來るを得べし。其一は卽ち Alcibiades は元來祖先の位地に重きを置き、これを利用して其上に事を爲さんとし、Plato は其祖先の位地を全然放擲して眞に自分の實力が造り出したる位地に立たんとせる事是なり。論者は諸子に望む、諸子は敢て其華族たる位地を放擲せよとは云はず、然れども華族たる位地を剝脫せらるゝ事ありとも尙人として立派に生存し得るの立場を有するを要す。華族たる位置は諸君が造り上げたる位地にあらずして諸君の祖先父祖が造り上げたる位地なり。諸君と何の關りあらんや。其二は Alcibiades は眞理の何物なるかを明白に了解しつゝ、しかもこれを實行する事をなさず、其尊かるべき生涯を全く利己の爲めに己れの野望のために消費せり。Plato は己れの眞理と認めたる處には何物をも犧牲となしてこれに從はんとせり。論者は諸君に望む、願くば眞理の奴隷となれ。眞理の到達を以て人生最後の目的とせよ。野望心の爲す所は何者ぞや。唯一抹の死灰のみ。"Plato is philosophy and philosophy Plato" と Emerson

をして云はしめしは、彼か絶對的眞理の前に從順なりしが故のみ。要之、學識才能は深からん事を欲せよ。理想と希望は高からん事を欲せよ。

聽衆は我に聞きぬ。彼等は靜肅なりき。神に謝す、我が此無に等しきが如きものを用ゐ給ひて、人の子の耳に眞理の一片を囁かしめ給ひし事を。彼等は確かに我に聞けり。我に雄辯の一分子だになく、我に盛容の半片だになく、我に深厚なる學識と才能となし。而して彼等の我に聞きしものは寧ろ奇蹟と云はざる可けんや。

午後義雄來りぬ。余は彼と暫く聞きて會場を出で、彼と共に植物園に到りぬ。園内に草を取れる老婆も園丁も我が舊知の人なり。我は云ふ可からざる懷かしき回想に打たれて茫然たる事暫しなりき。余は學習院に於ける教育に負ふ所なしと思へりき。しかも植物園の堤上に立ちて我等が嘗て蛙を漁りし古池に白髮漸く多き舊知の園丁が網を以て立てるを見し時、大なる感化を我此に得ぬと思はざる能はざりき。年少時は知らず年漸く長ぜし頃、我は惡友の間に交りて良友と遠ざかり、而して中頃其否を悟りしも良友等は既に我が友たるものなく、我は殆ど孤獨の境に置かれて、休憩の時など余は多く唯獨りにて植物園の裏にさまよひき。此時に我と相伴ひしは唯保男君ありしのみ。我は此友誼によりて今も彼を忘るゝ能はざるなり。嘗て學生の間に不都合ありて植物園の散歩を禁ぜられし時我は如何に不快の失望に鞭たれしぞ。我が沈想の侶をなしたる植物園よ、時は來りて過ぎ人の子汝の前にありし當時を夢と顧るべくなりき。嗚呼天外の一蜉蝣、汝も亦遂には我のありしを忘れ去らんとすらんよ。絶大なる世の潮の前に汝も我も等しく塵。

それより義雄を伴ひて河野夫人を榊病院に訪ひ、暫く遊びて家に歸る。我今日一の public duty を終りて心安んずると共に、非常の疲勞を發し、Carlyle の "Tale" を讀む中に睡魔の襲ふ所となり十時半就寢。

三月九日。晴天。朝、兄の書を得。彼の病は平癒せり。此春季休業には出京覺束なければ來仙せずやと云ひ來りぬ。余の心は動く。彼所に暖き胸あり。我が苦痛を神に次で察し得る同情あり。そは我には其ある所は神國に次げる樂園なり。我彼所に到らん事を欲す。我或は心を決して彼處に到るべし。

河野夫人我が眼の赤きを見る毎に、我が泣きしにあらざるやを氣遣ひ、我然らずと云へば醫師の診察を受けよとて聞かず。我は已むを得ず朝赤坂氷川町の保利なる醫學博士の許に到りて診察を乞ひぬ。結膜加答兒なれば讀書を差控ふ可しとなり。それより散髮して加藤榮氏（我が軍隊生活をなしつゝありし時分の下宿）を尋ねぬ。肋膜炎を病みたりし一人の娘は死者の如く、母はやれつて貧の色眉宇に動く。彼等は我が爲めに湯を沸かし茶を入れて供しぬ。これ彼等がなし得る最大のもの、widow's 12 lepta なり。余は感謝して茶の三椀を傾けぬ。かくて辭し歸りぬ。我は彼の家族に何事をかなさん事を希ふ。右の手の爲す事を左の手に知らしむる勿れ。

午後より Carlyle の "Tale" を讀む。Goethe の Märchen を譯せしものにして十六、十七世紀に於ける思潮の狀態を面白く小話となせるものなれども、意義の餘りに錯雜せるが爲めに充分の意を摑むに由なし。中絕して同氏の "Burns" 傳を繙く。又 "Cuore" の復習をなし、英夫、行郎と伴ひて新渡戸氏に到り、彼等は義雄さんと遊び、余は夫人に英語を敎へらる。河野家の事を語り二人大息するのみ。

夕食後余の胸中は、我が家人の處世の方法につき堪へ得られざる不平を感じぬ。此惡しき徴候を打ち消さんが爲めに、河野氏に至りて聖書の話をなして暫く浮世の事と遠ざかる。歸後我が憤心は悲愁となりぬ。何とはなき寂寥の念胸に沁みて火の如き淚睫に逼る。嗚呼愚者愚者愚者、人汝の心を知らずとて人一人だに汝の心を知らずとて汝如何なれば汝の心に寂寥を感ずるや。神汝を知り給へり、汝は祈の特權を有するにあらずや。祈りて勝ち得ざる事なし。

三月十日。火曜日。朝は風激しくしてしかも雨さへ時に加はりぬ。朝、家に在りて Carlyle の "Burns" 傳及び『獨立評論』の中、愛山氏の『古事記を讀む』を讀む。前者は我が嘗て見たるものなれども、之を再びせんとするものなり。

此朝我は大事をなしぬ。朝は雨靜かに軒に落ちて寂寥心に逼る。眼を病める我は多く書に親しむ能はずして眼を閉ぢて默ゝ默想に入りぬ。默想は我を導き行きて遠く東方の天に至らしめぬ。我去年より彼處に書を絕ちて彼より默ゝ痛切の言を寄するに一言の應ずるものなかりき。我は自ら其何の故なりしかを知らず。我が心は火の如く、我を攻めて書を裁せよと叫べど

も、我が手は頑然としてこれと相闘る事なきなり。我は彼を思ふ事益々深きに從つて彼より遠き事愈々遠きを思ひぬ。而して今日に至るまで荏苒遂に我が筆を嚙まざりき。しかも云ふ可からざる温き彼の友情と、彼の熱き悲痛と若き苦悶とを思ふ時、我は自ら我の冷淡にあきれんとするなり。靜坐して我が机に飾れる彼が出發時の寫眞を見れば、我は殆ど其前に面を被はんとす。我は堪ふ可からずなりぬ。我は遂に紙に向つて彼が爲めに筆とりぬ。其何を記しあるやは我自らさへも記憶せる所にあらず。見えざる手我を動かしてかくなさしめしなりき。しかも我其の最後の一句を記す。

「君よ、生の健にして尙病まざるは同情なき事野獸の如き生の性情のかくなさしめし所なりと知れ。」

とあり。嗚呼、我泣かざるにあらざりき。祈らざるにあらざりき。戰はざるにあらざりき。而して凡て此等の盡瘁も一片の笑顏をだに彼に與へ得ざるを思ふ時、我は是等を以て我が同情の足らざるに歸せん。然らずして、結果の此の如きに至る可き所以を見ざればなり。義人の祈に耳傾け給ふ神は我が祈を罪あるものと認め給ひしならん。我は病まん事を希ふ。我は死せん事を希ふ。死して永遠の火に燒かるゝは生きて心の責を受くるに勝れり。神よ、願くば僕を半ば殺し半ば生かし置き給ふ事勿れ。生くべき價値なしとなれば速かに殺し給へ。我が祈唯是れのみ。午後より愛子を訪ふ。彼女の頭痛は非常に輕快に赴けり。彼女と閑談するもの半日にして辭し來る。夜、讀書を廢し卒業論文の修正に從事す。十一時半就寢。

三月十一日。水曜日。半晴。朝、聖書を讀み、農場の圖を調製しつゝありし時、貸家を見に來りしものありしかば、余はこれを避けて醫師に到る。經過左程良好ならず。歸後、圖を成就す。午後しま子を訪ひて畫を見、それより室に歸りて端艇遊びの時の畫に着色す。一寸太田氏を訪ひそれより新渡戸氏に到り談宗敎の事に及ぶ。大に快。“The 20th Century New Testament” を借り來る。夜少しくそれを讀み又日記を書す。眼に藥をさす故多く讀書する能はず。無爲となり勝ちなり。夜食後、土肥來りて實にくだらなき話をなして歸る。國家の寄生蟲。十一時就寢。兄より Myer の Ancient History を返し來る。明日より再びこれに親しむことを得べきか。

三月十二日。木曜日。半晴。朝 20th Century New Testament の中 1st & 2nd Letters to the Thessalonians を讀む。Old text

に比較して用語新しきが故に耳に入り易く、讀み行く中にボーロは今活ける人にして我自身に此書を送れるにあらずやとの思をなさしむ。彼にある多少の缺點を除く時は（人なり。彼に缺點なからざらんや）彼に於て余は強き聲を聞くなり。然り彼は、仁者ならんより、義者ならんより、勇者なりき。彼の向上的獻身的勇氣は世の未だ嘗て見ざりし所なるべし。基督教には確かに彼なかる可からざるなり。

Shelley の "Cyclops" を讀む。これは Euripides の原著なれば希臘劇詩の一斑を窺はんとしたるなり。Euripides は希臘に於ける劇詩作者としては寧ろ後期の思想に屬する詩人にして、希臘人が Aeschylus の如き詩人の卓勵風發する如き鋭筆に飽きたる時、其の趣向に投ぜんとしたるものなれば、其思想の平凡卑近にして俗世的なるは怪しむに足らざるものなるべし。瞥見する所によれば一體の調子我が國の能と神樂とを混和せしが如き趣ありと思ふが如何にや。神話の一片を材料となして酒に祝福と呪咀とを置きたるもの余は多く滿足する能はざりき。

午後より又 Shelley を讀む。小品中には Tennyson の比にあらざる簡潔純情の想あり。痛切なる疑問、深甚なる煩悶の淺薄なる樂天詩に勝る事萬々。

"Weary wind, who wanderest
Like the world's rejected guest,
Has thou still some secret nest
On the tree or billow?"

(Wold's Wanderer)

の如き衷心より湧き出づる悲哀の琴線は又時に烈々として向上の音に響き、

"From billow and mountain and exaltation
The sunlight is darted through vapour and blast;

From spirit to spirit, from nation to nation,
From city to hamlet, thy dawning is cast,—
And tyrants and slaves are like shadows of night
In the van of the morning light."

の如き偉大の聲となる。

夜涙を憂へて何事もなさず机に向つてあてもなき瞑想に入りぬ。『北海の思出』の續稿をなさんとしたれど心乾きたればそれも能はず、遂に習字をなして床に入りぬ。

汝は近頃著しく平凡となれり。汝が涙を以て詩の中心に分入りし昔は再び汝に歸らざるか。平凡なる汝は死よりも劣れり。

三月十三日。金曜日。空は時に美しく晴れたれども雨は糠の如きが常に檐端に。朝は鶯の囀り聞こえぬ。梅の花今が盛り。我が室には母上より蕾なれども櫻の枝を賜ひぬ。机上には乙女椿の華やかなるが一輪匂へり。朝 The 20th Century New Testament の中 Romans を讀む。Myer's Ancient History を讀む。"Conquest of Italy," "War for the Mastery of Italian" とを讀めり。記憶すべき出來事もなし。唯此時代に内には patricians と plebeians との勢力の爭あり、外には Rome の權力擴張ありて互に相錯綜して歴史の布を織り成せるのみ。唯 451 B. C. より初めて "Law of 12 Tables" が制定せられ成文律の起りしは、有名なる羅馬法の起原として記憶すべきものなるべし。

十一時より『少年世界』に故高山氏の『我が好める人物』を讀む。惜しき人を亡くしたるかな。彼は確かに見識ある一人の義士なりしものを。彼が童蒙のためになせし小話の中にも奇警なる彼の歴史眼は見出し得らるゝなり。

午後 Carlyle の "Burns" 傳を讀む。Love と Indignation を論ずるあたり言々悉く火なり。幾度か感激嗟嘆の眼を閉ぢぬ。四時頃より新渡戸氏に到る。Miss Read 余の眼のために診察をなし呉れぬ。3rd vertebra とかが血管を壓し居るものゝ由にてマッサージをなし呉れぬ。彼女は眞に親切なる人なり。彼女は小兒の如き親切を有す。夕食の馳走になる。彼所の家族の

人皆我がために親切なる待遇をなし、我を遇するに其家族の一人たるを以てす。Mrs Nitobe は今日馬の虐待せらるゝを見たりとて涙を流して我に其狀を語りぬ。

家に歸りしは八時。雨痛く到りて衣皆濕る。非常の暖氣なり。Anticipation を讀む可く試みたれども失敗。腦疲れたれば和書を繙きて今夜は寢に就く事とせん。

三月十四日。土曜日。野の面の殊に慕はるゝ日。長閑さ云はん方なき春日和なり。彼方に野の花、鳥の囀き、人の子が心より謠ひ出づる歌あらんよ。朝 Carlyle を讀みたれども何となく人戀しうなりたれば愛子を訪はんとし、彼女に『用無遺稿』を齎さんとして貸しありし河野氏に到りしに、同書は信子氏持ち去れりとてなく、暫く同氏と語りて辭し歸りぬ。それより愛子を訪はんとせしが氣拔けして其氣になれず、家に籠りて Shelley を讀む。

午後二時より神田靑年會館に於て康有爲の令孃某氏の演說あるべき筈なりしかば行きて聽く。男女の支那留學生尠なからず。既にして令孃壇に登り英語を以て支那開發策を語り、支那の衰頽は決して其全部にあらずして、政治的機能の腐敗せるに起因せる由を說く。云ふ所元より奇とするに足らずと雖も、余は流竄の一少女が白眼倨傲の外國に來り其熱衷を披瀝するの心に察到して同情を呈せざる能はざりき。殊に最も我が心を刺戟せしは參聽の席にありし支那學生なり。彼等我が國に來り其不親切極まる敎育の法を受けて何の得る處あるべきぞ。余は彼等の面に ignorance の外を讀み得る能はざるなり。中には既に業に輕佻なる態度をなせる靑年をすら見るなり。余は政治家ならざるが故に彼國と何の關係なしと云はるべきものにあらず。彼國を如何すべきとは、日本人が考究せざる可からざる問題なり。余は今に至るまで茫漠たる考案を有せしに過ぎず。これ恥づべき事なり。余は彼等に對して確乎たる一定の眼識を具へざる可からず。

歸宅するや直ちに河野氏より借りたる『家庭の模範』なる書を持ちて山本を訪ふ。愛子も諸兒も皆臥床を廢して平生に復せり。余は此夜寢前の祈禱に當りて深き感謝を捧げざる可からざりき。五時半頃辭し歸る。夕食後島津邸の講話會に出席す。依例何も得る所なし。

此夜歸宅後父上と雜談す、その談片に曰く、

「大慈悲心と云へば人は疑ふ所なく是れ人間の履行すべき最大なる德義の如く解すれども、人間なる觀念より超越して思考すれば寧ろ矛盾の如き觀なきにあらず、草木も鳥獸も皆生存競爭により優者は其存在を保持し、弱者はその生存を停止し健全卓越强壯なるもの〻み殘るが如きに拘らず、人間社會のみは弱者の保護を以て强者の養成よりも必要なる事業となすは、抵抗すべからざる自然力の制裁を無視し畢竟人間進步の眞諦を談れるにあらざるやの觀を生ずる事なきにあらず云々」

宛然たるニイチエにあらずや。又曰く、

「人間のみならず心と云ふものほど不可思議なるものはあらず。心は如何にしても一種の先見力を有するもの〻如し。鳥獸等に其無意識的の發達殊に著しきを見る。暴風多き年、鳥の高きに巢はざるが如きは事實にして、農家はこれを信用して其耕作の手段を講ずるが如きは不思議にあらずや。生物中最高等の動物なる人類に此力の割合に少く見ゆるは實際少きにあらず。人間は其昔に於ては確かに鳥獸に優りて先見ありしものなるべけれども、次第に人力的抵抗力が自然力と拮抗し得るに從ひ先天的知覺によらざるも、其事實の起りしに際して相當に之を防衞し得るが故に漸次其先見力の衰退せしにあらざるか。凡人中に傑出せし人には此知覺殊に發達せざるが多し云々」是れ余が「偉人則豫言者論」と合するものなり。室に歸りてより一葉の『埋木』の一部を讀み居る時、兒玉來り一時半迄談る。彼が勤勉の生活及び直行の態度洵に今日珍とすべきものなり。

菫五首（愛子特に余が爲めに其庭の菫を靨はしき小鉢に移して我に與へぬ）

空に生れてやさしき何の科か得し面はゆげなる其こむらさき

香とも云はず色とも云はず見てあれば唯なつかしく涙ぐまる〻

人知らぬなげきに入りし魂ならで何に菫の香を語るべき

このなやみ苦しみなげきそは何ぞ菫咲く野に墓あらん我れ

罪負ふ子我れにやさしき神の御手エデンの榮を此花に賜ひし

三月十五日。 日曜日。今日は朝より雨のつれ〴〵と一日を降り暮しぬ。

朝 The 20th Century New Testament と和聖書路加傳とを讀む。路加の第十二章畏ろしき計り力ある句「我が友爾曹の身體を殺して後に何をもなし能はざる者を懼るゝ勿れ。」「先づ神の國を求めよ、さらば是等のものは汝等に加へらるべし。」

それより Carlyle の Sartor Resartus の中 "Romance" と "Sorrows of Teufeldruck" とを讀む。多く得る處なし。午後より我が心には云ふ可からざる寂寥を感じ座にあるに堪へずなりたれば、雨を冒して外出し、足は遂に嚢家中澤氏の家に到りぬ。されども彼は移りてあらず、已むなく再び雨の中をとぼ〳〵家に歸る。家に歸つてより一葉の『埋木』の全體と "Old Greek Stories" なる書とを讀む。『埋木』には尙ほ女史が鏤刻の痕あり。渾然として詩をなせるものは『たけくらべ』と『われから』なるか。"Greek Stories" は神話の梗概を記せるもの益する所甚だ多し。Prometheus など面白き詩題となり相なり。

夕食後兄、工藤（彼の父君は去る八日逝去せられしとの報ありしなり。余は彼の苦痛を察するに餘あり。人生必遇の最大悲事の一ならずや）及び吉川に手紙を書きて全く疲勞し終る。此頃余の頭腦は少しく變調となれり。直ちに疲勞するなり。十一時半就寢。壬生馬は暫く他に寄寓する事となり（彼の單純なる好奇心より）、今日夕食後家を出でぬ。

三月十六日。 月曜日。雨天。此日十番地の家には借人ありしが爲め我等は九番地の家に引越す事となる。殆ど午前中をこれに費せり。少しく殘れる時間を利用して Myer を讀む。今日の處は First Punic War なりし。即ち B. C. 264 より B. C. 241 に亙る大戰爭にして、羅馬がその光榮を世界の上に建て得るか然らざるかを決すべき大難關にてありしなり。即ち Rome は Carthage と共に地中海の海權を爭ひしなり。如何なる時に於ても地球の上に大勢力を有するに到りし國民は必ず海權の擴張をなしたるものゝ如し。古きは Phinicia, Athens, Carthage の如き皆是にして、新しきは Holland, England の如き其好例なり。而して其海權の爭奪の行はるゝ地域は時代により相異るなり。始めは地中海にして、彼等は彼處に於て先づ怒濤澎湃たる大洋に出づるの用意をなし、尋で印度洋に移り南洋に移り、大西洋に移り今は則ち太平洋の中支那沿岸の邊に移り、彼處に偉大なる勢力を扶植し得たるものは必ずや今後の實力を握るの鍵を得べきは火を睹るが如しと云ふ可し。野望沓心の

徒、眼を極東の一角に向はしむるも宜ならずや。海軍に於て力なしと雖も陸には精鋭の貔貅を蓄へ、其國土相接着して漫散ならず、兵士は皆自國のものにして同盟屬地皆同人種なるの利益ありしは羅馬なり。海權に於ては當時地中海の覇權を握りたりしは Carthage なりしと雖も、其屬地各所に散在して統一なり難く、兵士は多くは傭兵にて加之同盟屬地多く其人種を異にするの不利益ありしは Carthage 人なりき。

かくて二國は生死の苦闘を戰ひぬ。初めは羅馬その海軍力の微弱なるがため屢々 Carthage の苦しむる所となりしが、其邁往不休の人民は千辛の後艦隊を組織し Detillius の下に海軍に於てさへ勝利を博しぬ。かくて羅馬の威力は旭日の如く昂り、戰艦舳艫相銜んで亞弗利加に逼るに至りぬ。されども Carthage も亦容易に其鼎の輕重を問はるべきものにあらず。Hamilcar Barca の如きは其用兵の大才を以てして往々羅馬人に自國の安全を希ふまでの危害を與へぬ。されども Carthage は遂に一歩を讓らざる能はず。Sicily is'and より其干渉の手を引き $ 4,000,000 の償金を以てして平和漸く成りぬ。然れども此平和は假面なりき。二國は遂にその何れかゞ亡びざる可からざるなり。

午後 "Old Greek Stories" を讀み、又新渡戸夫人に示すべきために動物虐待防止會の規則を英譯す。此の如き單純のものすらこれを譯するに尠なからざる時間を要するとは、亦甚だ憐む可きにあらずや。四時より新渡戸氏に到る。家に歸りて grammer の syntex を見る。

札幌より端書來り、重田老婦人死去を報じ來る。又西村氏より書信あり、增田知二郎氏米國に死去し、英一君は其遺骸を齎して六月歸國の途に上るとの報に接す。重田老婦人は獨立教會の留守をなせる人なりと。彼女は獨立教會其者なりき。彼女が宏壯にもあらぬ其會堂を愛するの念は自然極るものにして恰も親が其子を愛するが如かりき。彼女は其頽齡の老軀を携へて一塵埃も其會堂を汚さしめざらんと勉めたり。彼女が此點に於ける熱心に於ては地球上の何者にも劣らざりき。劣らざらんと勉めたりき。彼女は眞に此點に於て世界の第一人なりき。此の如くして勇ましき戰は彼女の老軀の上に戰はれぬ。而して今は彼女靜かに眠りて復地の上には覺めざるなり。嗚呼幸福にして崇美なる彼女の生涯よ。思ふに彼女今主の御前にあ

りて其淡泊なる無邪なる愛心に富める直截の語を以て、地上の戰を語りつゝあらんよ。我は彼女の永眠に聊かの遺憾を見ず。我等は此上多く彼女を煩はさんより彼女の安く召されん事の如何によき事ならんと願ひたりしぞや。死なる問題も此高境に到つて極めて小なる問題たるなり。

しかも我は飜つて增田君の死去に思ひ及ぶ時云ふ可からざる苦痛の嚴しくも胸を抉るを感ぜずんばあらず。嗚呼我が友我が半身、彼は何ぞ薄倖なるの此の如きや。彼の眞率なる誠實なる熱情湧くが如き心が、一度失戀の悲境に陷りてより、彼の上には永久に歸らざるべき或者失せ去りぬ。而も彼は Job の如き忍耐を以て其品性の高潔を保持し、人の眼には冷靜秋日の如き態度を以て東方の異域にあり。彼は健闘の生涯を以て男子の生涯となし、其悲淚に鞭ち其歎息に笞ち嘗て怨恨の眦を擧げて彼の上天の高きを見ざりき。春來燕子花咲く頃、秋去煙斜なる時、彼が天地に俯仰し人生の眞意と世の實心とに想到して慘として垂れし淚はそも幾度なりけん。我が弱志はそを思ふにだに堪へざるなり。況んや彼は去春その契世の友の死に遇ひぬ。大學の一偉材空しく逝きて我が友の胸には寂寞たる荒野のみ殘りき。一愛の奪はるゝは百生の奪はるゝよりも悲し。一片の花一個の蟲の死にだにも云ふ可からざる痛惜の思を寄せし我が友は、彼の心と及び影とを失ひぬ。彼が靈は二分せられ三分せられて今地の上には彼に唯三が一の靈ありて殘れるのみ。彼が人なき所に沈想の胸を抱きし時彼が寧ろ死の安きを希ひ懷しくも黑裳の神に觸れんとせしを推する眞に難からず。而して天よ何等の無情ぞ、彼は彼に殘されたる唯一の慰藉者より一片の書信をだに得る能はざるに到りしなり。嗚呼慰藉者とはそは彼が誤り用ゐたる名なり。彼が彼を慰藉者と呼ぶ時、彼は幾度か彼を苦しめぬ。所謂慰藉者なるものは羊皮を被りたる豺狼なり。慰藉者は幾度か彼を花園の戶口に導き行きて未だ入らざる中に其戶を堅く閉し終るなり。而して彼の高情は尙慰藉者を疑ふ能はず、慰藉者に唯一語の詰責をすらなさゞるなり。我は彼の慰藉者を憎む。彼を最大の窮境に陷れたるものは慰藉者なればなり。我は慰藉者を呪ふ。世に最も甚しき僞善者ありとすれば彼なり。世に最も甚しき冷血動物ありとすれば彼なり。世に最も甚しき愚物ありとすれば彼なり。世に最も甚しき慘酷漢ありとすれば彼なり。世に最も甚しき無神論者ありとすれば彼なり。我は彼の病まんことを希ふ。病みて死せんこ

とを希ふ、死して地獄に行かんことを希ふ。彼とは誰ぞや……噫。

而して英一君は遂に其兄を失ひぬ。肉の兄を失ひぬ。死は如何に大なる疑問ぞや。死は如何に大なる疑問ぞや。我が唯祈り得る事は英一君が此人生最大の窮境に處して尙其高潔なる人生の眞意を忘れざらん事なり。我此を書しつゝありし時、彼女は電話もて我に、彼女が明後日を以て酒匂に行く可きを告げぬ。我が涙は喉に押し寄せて物言ふ能はざりき。

神よ、迷へるもの今此に暗に立てり。孤獨、鞭撻、悲憂、自憎、共に深く我を圍みて放たざらんとす。願くば彼の上に平安を賜へ、祈禱を賜へ、我が肉を鞭ち靈を生かし給へ。靈死して肉の生くるは、天と地とに於て最も價値なきものにも劣れり。我が力今は無なり、願くは神、彼の男らしき信仰と服從とを嘉し給へ。彼に永遠の生命を賜へ。願くば我の全體を殺し給ふとも、彼の一片を活かしめ給へ。アーメン。

此夜萬感胸にもつれて多く眠る事能はず。自ら我が愚の及び難きを泣きぬ。

三月十七日。火曜日。雨。春雨と云ふものなるべし。しかも春雨に似ぬ寒さなり。朝、約翰傳六章を見る。「わが天より降りしは己れの意の任を行はんがためにあらず。我を遣はしゝ者の意を行はんためなり。凡て父の我に賜ひし者をわれ一をも失はず。末日にこれを甦らすは即ち我を遣しゝ父の意なり」の語あり。玆に「凡て父の我に賜ひし者」なる者は凡ての者なり。義者と不義者とを問はず、仁者と罪人とを問はず、聖者と盜賊とを問はざるなり。四十五節に、「人皆(!)敎を神に受けん」と錄されたるを見て知る可し。我は神の聖愛の萬倫を超越せるを思ふ時、如何にしても此結論に達せざれば滿足する能はざるなり。我等が惡に對する戰鬪は希望なき戰鬪にあらず。我等は最終迄惡をして人類の或る一部分に王たらしめざるを得ざるが如き希望尠なきものにあらず。彼所に天國あり。惡の跡全く絕たれて神の光のみ滿ちたる天國あるべし。是れ我が骨がらみとなれる我が罪惡の未だ失望す可からざるを覺り得る力にして、我が此世に勇ましき戰鬪を續けしむる力なり。尙云ひ度きこと多けれども暫く默せん。それより『農政學』(高岡熊雄氏著)の『勞働者論』を讀む。Goltz 氏が農業勞働者を

分類したる事左の如し。

- 農業勞働者
  - 普通勞働者
    - 契約勞働者
    - 自由勞働者
      - 土地無し勞働者（農業界の貧民）
      - 土地持勞働者
  - 家丁

九時半新渡戸氏を訪ひ孝雄氏と共に南部家の不幸（老母水戸氏死去）の弔に行く。十二時歸宅。

午後より Myer を讀む。"Second Punic War" なりしかども讀了せざれば梗概は更に書く事とすべし。四時頃より愛子、しま子の寫眞を持ちて河野氏を訪ふ。信子氏ありき。我は彼處に到る毎に高き悲痛を味ふ事を得。高き悲痛は高き懽喜と共に我等神にあるものゝ命なり。勇ましき母は既に其生の甚だ長からざるを覺悟せしものゝ如し。彼女は徐ろに生前凡ての葛藤を整調せんとするものに似たり。其家を閉ぢ其兒を託し其爲さんとせし事業を發表するに忙しき如きは皆これが爲めなり。余は彼女の志を憐む。慧敏なる信子も既に其慈母の志を推せしが如し。一個深刻なる悲劇の行はれつゝあるを見ずや。我は彼女の品性に打たれざるを得ず。我は彼女の前には孩子の如し。彼女は今日小說よりも錯雜せる破鏡の人の境遇を語りぬ。

夕食後先づ昰等の日記を書しぬ。今正に十時なり。これより尙二時間の讀書をなし得べし。

"Shut down the marble door,
And leave me! Let me sleep;
But deep, deep,
Never to waken more!"

三月十八日、水曜日。昨日は空晴れたれども、風烈しく、今は風止みたれども雨しと〳〵として一日檐滴を絶たざりき。

昨日 Myer の "Second Punic War" を讀み終りぬ。Second Punic War は Hannibal の羅馬侵入なり。「羅馬に仇してこれを滅

さずんば自ら死せん」と其亡父に誓ひたる彼は、獅子の如き勇猛と鷹の如き信義とを以て、貪慾飽くなき羅馬に大打擊を加ふるべく、Apennius の嶮を超え鷲鳥の如く伊太利の草靑き肥野に舞ひ下りぬ。彼の向ふ所草木皆伏しぬ。潔きかな彼の行爲。彼がなしたる誓詞の前には彼は恰も奴隸の如かりき。生命も安逸も名譽も等しく祭壇の犧牲たりき。彼は傲慢なる無情なる羅馬の頭上に小氣味よき針鋩を與へぬ。嗚呼人生れて若し靈魂の救濟に從事する事能はずんば、宜しく降魔の劍によりて彼涙なき輩、弱者を苦むる輩、人情を解せざる輩に激しき打擊を加ふべきにあらずや。我は Hannibal の事業を見て殊に骨の動くを禁ずる能はず。Hannibal は實に男の中の男なり。其義兄 Hasdrubal の首級を見るや長太息して曰く "Carthage, I see thy fate" と。而して伊太利の南端に退きて此に獅子の如く陣すれば、此敗餘の兵にも一人のローマ人のよく近づかんとするものなし。しかも時利あらず Carthage 遂に和を請ふや、羅馬人が呈出したる要求は誠に次の如くなりき。

"Rome required her to give up all claims to Spain and the islands of Mediterranean; to surrender her war-elephants, and all her ships of war save ten galleys; to pay an indemnity of 5000 talents at once, and 20000 talents annually for 50 years, and not, under any circumstance, to make war upon an ally of Rome."

余は讀んで此に來り國家存在の必要を疑ふ。此の如き野望と貪慾と無情と冷淡と利己心とを憤らざる能はず。國家なるものは他人類に對して此の如き無道と殘虐とをなして獨り世の榮光に居るの權利あるものか。我は羅馬を厭ふ。彼は冷酷鐵の如き國民なり。若し彼等に稱揚す可き美德なるものありとせば、牛の如き忍耐と獅子の如き蠻勇と稍〻人らしき信義の念是のみ。我は希臘人として早く亡びんより、羅馬人となりて永く生くるの恥辱を思ふ。かくて Third Punic War は到りぬ。先是 Hannibal 其殘敗の國を助け渾身の勢力を傾倒して其囘復に勉め、Carthage の政府人民は次第に其體面を一新し來らんとするや、猜疑に滿てる羅馬の眼は之を見て直ちに Carthage に强請するに其職を解く可きを以てしぬ。而して輕薄なる Carthage は平然とし其恩人を估りぬ。Hannibal はその故國をさまよひ出で丶 Asia Minor に至り Antiochus に依りぬ。Antiochus は英主なり。彼を遇する事甚だ厚かりしが、羅馬は未だ Hannibal より其眼を放たず、Antiochus に告げて Hannibal を

致さしめんとす。Hannibal 遂に再び流竄の途に上り、遠く Bithynia の prince に憑りしに羅馬の手は尚ほ彼に及びぬ。世界の大も Hannibal を納るゝの處なし。嗚呼、亡國の遺臣の如く世に憐れむ可きものはあらず。彼は毒を仰げり。かくて其亡父への誓を果しぬ。世に立ちて嘗て人の面を懼れず我が義務の前には忠實なる事孝子の如かりしもの、涙ある勇氣、同情ある信義、人をして其烈々たる丈夫の氣に泣かしめし者は、遂に地の上より永遠に逝きぬ。嗚呼、丈夫は常に苦まざる可からず。男は遂に泣かざる可からず。Scipio Africanus が其忠實に事へたりし羅馬のために逐放せられ、其死するや自ら墓碑銘を書して曰く "Ungrateful country, thou shalt not possess even my ashes" と。羅馬此時より亡びぬ。Carthage は遂に羅馬の屈辱に堪ふる能はざりき。彼等は彼等の有せる凡てのものを犧牲となして武器を作り、頭腦の力を失ひたる狂人の如く荒れに荒れて、羅馬の軍に抗する事四年。700,000 人は 50,000 人に減じて B. C. 146 遂に Carthage 亡びぬ。斯の如くして悲慘を極めたる羅馬共和國の最後の一世紀の幕は開けぬ。

午後 "Old Greek Stories" を讀みつゝありしに、偶然石澤君の來訪に遇ひぬ。眞面目なる彼は昔に渝る事なき眞面目なり。余は彼によりて懷かしき札幌の多くを聞きぬ。又基督教に就き兄弟の愛もて互に相語りぬ。人は此高潔なる愉樂に近づき難し。夕食後又暫く相語りて彼は歸りぬ。余は彼を送りて永田町まで到りぬ。此夜風既に收りて星斗闌干、人遂に彼等の前に何者ぞや。

壬生馬來りぬ。下宿の都合は大によしと。彼の去りてより余には一種の寂寥到りぬ。

三月十九日。木曜日。今日は朝より雨なり。余は午前に於て Myer の "The Last Century of the Roman Republic" を讀みたり。多く重要の記載あれども、余は今多くを誌すの勇氣なし。書に就いて見るべし。

午後より余は雨を冒して西村氏を訪ひ亡き知二郎君の姉上に面會しぬ。余は泣かざらんと勉めたれども遂に負けて二人面を掩うて泣きぬ。知二郎君は布哇の事業に失敗し其回復策を講ぜんとして亞米利加に到り、刻苦辛酸の後前途の希望漸く湧き來りし時、不幸齒を病み入院して施術に從事せしが、黴菌これに入り英一兄の如きは殆ど晝夜を徹して看護せしも其甲斐

なく、二月十二日不歸の客となられしなりとぞ。愛情蜜の如き其姉上が心より絞る涙を以て、余を見る時英一を見るが如き心地すと云はれし時、余は遂に涙に溢れぬ。英一兄は其亡兄の事を詳記せる書後に書して、彼は今人生の諸種の悲哀の中にありて眞に己れの立場の何なるかを知りぬ。兄の死によりて己れの責任の益〻重きを感じぬ。我は敢て婦女子の涙をなさじとのそれなりきとぞ。好い哉彼の覺悟。余は兄が必ず此に出づべきを豫期したれども、しかもその試練の餘りに多きがために彼の健康を憂ふるの念は今も止み難し。談は屢〻過去の回想に去り、淋しき世の旅路の如何に涙に滿てるかを心深く思ひ知りぬ。彼女の家を辭して煢然として歸路を拾ふ時涙零ちて止め難し。

余は其途中河野氏を訪ひて信子氏に遇ひぬ。彼の家は今引越しに忙はしくして非常なる混雜をなしつゝありき。彼女に差配の事を語り家に歸りしは正に點燈の時。此夜、内村氏の『基督信徒の慰め』を讀む。余は又余が心の奧底に潜める罪惡の虜となりぬ。何等悲慘なる余が心靈の行路ぞ。余は基督の愛の限りなきを知るが故に、余の心は益〻暗黑の渦中に入るなり。余は基督の愛を知る。而して余は彼を愛せず。これ唯一の苦痛なり。幾度か祈りて己れの罪を悔い、而して幾度か再舊の罪に巢ふ。此罪惡に滿ちたる余を神は如何なれば世には留め置き給ふや。余の心の到底根柢より潔まり得ざるものなるが如し。若し自由の意志ありて余が其使用をなさゞる可からざるものありとすれば、余の弱さは其意志を神の御旨の如く用ふるの力を知らざるなり。力を知るとするもこれをよく用ふる能はざるなり。嗚呼余世に在りて何の益あらんや。しかも余の弱志と薄行とを如何上より相去るべき訣別を賜はざるや。余は余の弱志と薄行とが此に至らしめしをよく知る。神は何故に余に世を知らざるなり。力を知るとするもこれをよく用ふる能はざるなり。

せんや。人多く晏如として行く。余獨り春に殘さる。人は戯れの如くにその哲學と神學とを語る。余が垂死の心臟は哲學と神學とより何物を得んや。余何處まで我が愛と義とを廣むるも、神の義と愛とは余の義と愛とが想像し得ざる高き彼方にあり。蟻の心を以て天使の心を窺はんとするものよ。默せよ。默せよ。嗚呼、世は眞に涙の谷なり。此莊嚴限りなき地球の胸にありて、余の陰影の爲めに其一角を汚さんよりは、捨てられて踏まれて塵に歸らん事の如何に宜しかるべきぞ。余は余自身の苦痛を忍び得べしとするも、人の子を跌かす可き殘虐の苦痛を忍び得ざるなり。靈魂の不滅を說く人は祝福すべきかな。

しかも余に向つては今は靈魂の亡滅こそ望ましけれ。若し人塵より生れて塵に歸るものなりせば、余は直ちに銃を乗つて頸に擬するまでならんを。是れ實に平易なる事なり。世に此の如く平易にして單簡なる事なし。而して余は今靈魂の亡滅を疑ふ能はざる事によりて、永遠に苦痛の子として殘りぬ。神は余を何に用ゐ給はんとするや。余の手余を如何ともする事能はざる時、余は坐して神の余を如何に導き給ふかを見ん。主よ、僕の隱れたる祈を願くは聞き入れ給へ。僕は唯僕の衷心の祈の如くならん事を望む。

三月二十日。金曜日。朝よりの大雨一日を降り暮して夜は風をさへ催しぬ。今朝は新渡戸氏の一家族歌舞伎座に團十郎の伎を觀るべき日なり。余は此日約して孝雄君を伴ひて他に遊び、以て幼稚なる心に無用なる世故の悲慘悪逆等を印象せしめざらんとせり。しかも此日に到りて孝雄氏は之を諾せず泣いて伴はん事を希ふなり。而して演伎は『淸正』なりしが故に余も左程の事なかるべしとて、孝雄君はこれに到るに決し、余も亦伴はれたり。かくて此日一日は劇場の中に烟氣と臭氣と衣氣とに蒸されて頭痛を忍びぬ。加之余は近頃の悲痛堅く余を捕ふ。されども余は以前より一度團十郎と菊五郎との伎を觀ん事を希へりき。而して名人菊五郎は余のこれを觀ざる時既に先ちて逝き今は唯亘眼廣口の一老優を殘すのみ。余は多少の判斷力を有するに至りてより劇を觀しは今が始めてなり。團十郎の伎は實に群雀中の一鶴なり。彼のみ舞臺を濶歩せるが如し。余は彼に於て殆んど淸正彼自身を見んとせり。彼の深厚なる同情、精練なる技術及び高邁なる自尊は彼をしてよく淸正に適らしめぬ。余は愚かにもその伎を見て幾度か泣けり、彼の伎其の逼神の絶頂に達し來る時、一個の鐵石心を破り出でたる涙數痕を見ずんばあらず。余の頭腦は痛く疼痛を感じたる程感激せり。余は團十郎の伎の上に充分の尊敬を拂ふを躊躇する事能はず。唯余が此に最も疑問とするは劇が與ふる感興の脱逸の早きにあり。これ日本劇の不完全によるか抑も劇其物の性質然るか。若しくは余の眼感興を受くるの度淺きかは疑問なりと雖も、その感興の汪勃し來る時余の心は充分の感受あるなり。此を以て余は其原因を第一若しくは第二のものに歸せんとす。或は第一ならん、或は第二ならん。余は西劇を見ざるが故に其判斷に苦しむと雖も、兎に角日本劇を以てすれば其感興の去り易きは明白にして、これを余が歴史を讀みて受けたる感興に

比するに殆ど雲泥の差ありと云ふも過言にあらざるを見るなり。これ何によるぞ。前者に熟思の暇なく後者に熟思の暇ある其一なり。前者は喧騒の間に感受せられ後者は靜肅の机邊に感受せらる其二ならん。前者にはその假裝せる人物其者がよりよく認識せらるゝに反し、後者には書籍の裏面に著者の人物其物を認識し易からざる其三ならん。前者は感情の上に訴へ、後者は知識の上に訴ふる其四ならん。前者に不純の分子多く、後者に純粹の分子多き其五ならん。前者の事實の比較的零細なるに反し、後者の事實の比較的連絡を有せる其六ならん。此外尚多かるべしと雖も余は其最大原因を其五なるものにありとせんとす。變化極りなき無も單純不動の事實に如かず。これ眞面目なる心の容易に認識する所なる可し。

今や文學は詩と小說と漸く互に劇詩に近づき、劇に於て文學と音樂と繪畫とは握手せんとする傾向あるが如し。而も余は思ふ。これ一の傾向なるに相違なしと雖も、文學の獨立して存在す可きは亦疑ふ可からざる事實にあらざるか。而して文學の中如何なる形式を有するもの其立脚の堅固を致すべきか。余は思ふ、必ず純粹單一なる抒情詩なりと。嗚呼然り、何物をか捕へんとする人の心は幾度の彷徨をなしてしかも遂に己が心其物に歸り來るなり。Faust の劈頭彼が神學と法律書と哲學を究め盡したる後猶嘗て一閃の安心だも得ずとて、衷心より搾りし悲痛の聲を擧げし時は、彼が幾度の彷徨より再び己れが心に歸りしなりき。人、衷なる人を見んとする時彼は初めて人たるなり。而して此人を慰藉するものは何ぞや。人を眠らしむる高樓か、人を恥無からしむる錦食か人を饑なからしむる珍味か。然らず、然らず、唯人其物のみ。人の悶ゆる心に應じ得るものは、唯人の悟れる心のみ。劇詩或は人の慰藉たるを得べし。衷なる人の慰藉は、唯これを抒情詩に求めんのみ。余は抒情詩に衰運ありと思ふ能はず。我が衷の人の確かに余にかく告ぐるなり。『淸正』と『對面曾我』とを見たる後、余は孝雄君と歸途に就き、新渡戸氏に立ち寄り、二人にて夕食をなし、彼の就床時まで居りて家に歸る。歸後父上母上と共に暫く相談る。

三月二十一日。土曜日。晴天風あり。朝 Myer's Ancient History の中 Malius and Sulla, Pompey 等の事蹟を讀む。此邊羅馬の腐敗一日每に膏肓に入る有樣卒讀に堪へず。これ嘗て武勇にして信義に富みたりし優等人種の末なるかを怪ましむ。人

心先づ傲りて偸安生じ、詐謀生じ、權變生じ、令色生じ、野心生じ、猜忌生じ、殘忍生じ、無情生じ、羅馬は車を坂に放つが如く恐懼すべき腐敗の彼方に走りつゝあるなり、日本は恰も彼の轍に從ひつゝあり。

此日しま、母屋に移る。午後中田重勇來りて半日を無益に語り暮す。余は胸に包む可く餘りに辛き悲痛あり、彼と共に家を出で神田青年會館（途中壬生馬を訪うて誘ひしかども彼は試驗のために應ぜざりき）に到り英語演奏會を聞く。林貞子氏の獨吟、瞑目傾聽すればこれ人の世の聲にあらず。涙自ら流れて余が心は云ひ知らず向上の氣に滿ちぬ。余は潔められたり。かくて夜を獨り彼の事など默想しつゝ家に歸りぬ。

トルストイの『我が宗教』を購ひ來る。此日より壬生、端書もてしまに觀想を書き送る。詩の價値を論ぜしもの。玆には彼の持論の寧ろ平凡に表出されたり。西村氏より手紙あり。彼は昨日十時半新橋に着せし由なり。明日の午後は彼を訪れて余等の苦しき試練と祈禱とを語り合はん。

三月二十二日。日曜日。曇天。余は此聖日を全く英一兒の爲めに獻げんと決心せり。朝例に依りて聖書約翰傳を讀む。第十三章に「われ新しき誡を爾曹に與ふ。即ち爾曹相愛すべしとこれなり。我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし」と云へる句に來りて、余は余に凡ての力の與へられたるを覺えぬ。余の立たんとする立場は決して無益の立場にあらず。嘗て地上に現はれ出でし何人かよく基督のに等しき權威を以て「我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし」と云ひ得しものありや。余は多くの哲學者が深遠高邁なる理論を提供して人世に光明を投げんとしたるを謝す。又幾多の文學者が自然其者の如く歌ひ出でゝ、我等をして溫き自然の懷に歸らしめたるを謝す。多數の宗教家が處世の義務と覺悟とを教へ、世は到底戰ひの場所なるを知らしめたるを感謝す。しかも嘗て自ら愛の模範となり完全なる愛の如何なるものなるかを示し、一毫の躊躇もなく人類に向ひて我が爲したる愛は眞愛なり、絶對の愛なり、愛は我が愛より大なる事能はず、我が愛より小なる可からず、爾曹我が爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべしと云ひ得たるに至りては基督を除きてよくこれに堪へ得るもの何人ぞや。嗚呼神の愛は深いかな。余此立場を退きて何處に余が城を築く可きぞ。唯悲みに堪へざるは此絶對無限の愛を如何にして受け入れ

得べきやのそれなり。我は自ら己れを省る時唯此云ふ可からざる缺隙を余が胸の中に見るなり。主よ、願くは無よりも小なる僕をよきに導き給うて、彼が肉に就いて思はず、靈に就いて深く主の御跡に入り其處に愛の源泉を見出し得ん事を許し給へ。

それより英一兄に致すべき書を作りぬ。痛みと涙と交々胸を襲ひ幾度か筆を擱きて泫然たりき。祈りを與へて送りし此書、彼が涙に滿てる孤室の机上に飛ばん時、願くは何者かの慰藉を彼に致すを得んことを祈る。

トルストイの『我が宗教』を讀む。subst untive なり。熟讀大に得る所あらん。

午後一時河野氏に立寄り、それより西村氏を訪ふ。夫妻余を導かれて懇待を極め、西村氏は余に語るに知二郎氏が一生の歷史の概略を以てし且つその遺影を示しぬ。余の悲愁は再び新にせられたるを思ふ。語る所を聞けば、知二郎氏は英一兄と全く其性行を異にし、進取活動を以て事とし着々として其實行を擧げ、白面の一書生として布哇に航してより數年ならざるに企圖する所は凡てこれに着手し着々として成功の跡著しかりしが如し。然も事些か齟齬して遂に未だ全く其囘復を見ざる中道に斃れぬ。廣大なる企圖、大膽なる行動、獅子の如き猛進、而して泡沫の如き其死、誠に人生運命の正しき末に走りぬるなり。これを思ひ、彼を思うて中宵夢成り難き英一兄の衷情果して如何ならん。加之知二郎氏の失敗以來英一兄が學資の出途全く途絕えて、彼は未だ嘗て味ひし事なき物質的悲境にありしなりと云へり。年比月比而して日比彼の上に集まりし試練の如何に多かりしぞや。余は神が彼の堅固なる自覺心と信仰心とを認め給ひて、彼をして益々自ら鍛へしめんとせらるゝの意は、我明白に之を認めずんばあらず。余はこれに向つて感謝せざる可からず。而もこれ如何に困難なる感謝なるべきぞ。

家に歸れば壬生馬來り居れり（彼の友吉田と共に）沖來り巽田來る。余が愁眉は稍ゝ開けて二三の笑談を交へぬ。

三月二十三日。 月曜日。例へがたなき美はしの晴天なりき。云ふ可からざる香はしの春花の匂ひ何處ともなく來りて書窓の中に落つ。

朝 Myer's Ancient History を讀む。今日は Pompey 死し Caesar 死し Cassius, Brutus 死し Antony 死しぬ。野心家の出沒これ當時に於ける羅馬史の眞相か。余は足利時代の歷史と、一般此の如き時代に讀み到りて遂に何等の感興をも有し得ざる

なり。

午後より暫く『我が宗教』を讀み後河野氏を訪ふ。然れども來客多くして妨げられ、遂に去つて古本屋に『自然と人生』を買ひ、再び到りしかど、尙客の去りし模樣なかりしに遂に訪問を止めて新渡戶氏に到る。夜七時より神田靑年會館に於てチャーレス・カッパート・ホール氏の講演(基督敎的經驗によりて解釋せられたる基督敎的信仰)の第一回あり。丈高くして寧ろ粗野なる容貌を有する中年の人なれども、其講壇に立つや眞面目熱誠の樣恰も勇士の戰場に臨めるが如きを感ぜしむ。余は每夜彼に聞かんとの決心をなせり。今日の梗槪を下に記さん(略す)。

家に歸り着きしは十時頃なりけん。夜食を喫せざりしかば空腹忍び難し。パン半斤を購ひて途々これを食ふ。札幌にありしの時每夜キンツバを懷にして中央寺に通ひし事を思ひ出し獨り笑みしぬ。此夜、天墨の如し。

三月二十四日。火曜日。朝曇り夕刻より烈しき雨となり十一時過ぎには霙さへ降りしと云ふ。朝 Myer's Ancient History の中 12 tyrants 及び 5 good kings を讀む。玆に到りて歷史は變調不調和の極に奔れり。恰も道を失したる旅人が、夜の暗きに遇ひて益々周章狼狽し、荊棘と云はず叢藪と云はず盲蛇の如く狂進して光と活力とを求めんとあせる樣にも似たり。凡そ世に悲慘なるもの多きが中に、一個の國家其特有の勢力を失ひ天職を失ひ、偉大なる手の審判の中に頹然として泡沫の如く亡び去らんとする悲慘より更に甚だしきものなからん。而して偉大なりし國家羅馬の如きが、其死に瀕してなせる苦痛の聲は歷史を通じて今に其悲愴なる舞臺に最も似合しき音樂なり。

十一時頃直良氏來る。昨日酒匂より歸りしとなり。夕刻まで語りて歸る。得る所なし。

此日母上朝より非常に惡寒を感ぜらるとて就床せられしが、數日來婦人協會の事などにて一方ならず奔走せられし爲めにや疲勞一時に發したるなる可し。殆ど昏睡の狀態に陷られしが、午後より突然腹中に非常の疼痛を發せられ、夕刻に至りては益々甚だしく以前に犯され給ひし腹膜炎の徵候ありとの事に、余は驚愕と心痛とに閉ざされ、此夜は終宵全く寢ずして床邊に看護の手を盡しぬ。余は此日多く讀書する能はざりき。而も余は何者か多くの事をなしたるを感ず。余は僅に心よりの感謝

を爲し得たりき。余が心中に横りて常に離るゝ能はざりし苦痛の幾分は醫されたるを思ふ。余が母上は余の想像し能はざる多大の慈愛と教訓とを與へ給ひぬ。余は何を以てこれが恩に酬ゆべきかを知らず。忠孝を倫理として敎へんとする敎師は馬鹿者なるかな。これは人心が已むを得ずして爲す必至の行爲なり。余人に何者をか爲し得たるを感ずる時、歡喜は此時のみ余の衷心の情を滿足せしむるなり。主よ、願くは此道を辿らしめ給へ。

壬生馬、夕方より來りて一泊しぬ。

三月二十五日。水曜日。晴天。此日母上の御病氣は稍ゝ快方に向ひ給ひしが如かりき。朝、約翰傳を讀み「我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし」と云へる句を再び見出して約翰の崇高の着眼の今更なるに敬服しぬ。願くは此道を歩ましめ給へ。

朝、病床の傍にありて Tolstoy の『我が宗敎』を讀む。是れ實に驚くに堪へたる書なり。彼は「惡に敵する勿れ」てふ一語を以て motto となして根本より基督敎の搖動をなさんとするなり。余は屢ゝ彼の痛烈なる主張の魅する所たらんとす。全篇を見ざれば元より全豹を窺ふに足らずと雖も、余此書の中より余の宗敎的生命に一回轉を來すべき場合に立てりとの覺醒をなさん事を畏る。此時外國宣敎師は日本の上に大なる爭論者を見ん。余は此事を恐る。"Anticipation" を讀む。中等社會の變遷を描けるもの。夜に入りて母上の病又患し。余は唯其平癒の一時も早からん事を祈る。此一日も亦余には感謝多き一日なりき。

三月二十六日。木曜日。晴天なりしかども底冷(そこびえ)する日なりき。朝母上の疼痛又新たとなりぬ。直ちに常田氏に使を致さんとせしに、氏來りて例の睡眠藥を進めたりしかば、それより稍ゝ暫くにして沈靜に歸して眠られぬ。朝病床に侍しつゝ『我が宗敎』を讀む。益ゝ入りて益ゝ意の新たたるを覺ゆれど、卑怯なる余は彼の說の凡ての上に點頭する事能はず。而して凡ての上に點頭する事能はざれば彼の說は無に等しきものとなるなり。余は終りまで讀むべし。是れ實に眞面目に攻究すべき大問題なり。しかも玆に唯一つ最も我が衷心よりの承認を引きし一事あり。そは彼が敎理と實行の嚴格なる一致を主張せし事なり。是れ今の基督敎信者と稱するものゝ陷れる最大なる缺點なり。彼等は基督敎を以て一般の哲學と同じく、考ふるも

のとなし行ふものとなさゞるなり。彼等はよく論じよく說けども其行爲に至りては洵に學者とパリサイ人に勝る事なし。此の如くにして基督教は哲學よりも無益なるものとなるなり。汝の進める道亦此の如き事なきか。汝が衷心を離れざる云ひ表はし難き悲哀は汝の思考する所が實行する處と相離れたるの致す所ならざるか。汝思うて得ず。其距離は實に汝が悲哀の距離なり。汝これを忘るゝ事勿れ。汝の思想をして汝の實行に追ひ及ばしむること勿れ。されども汝の實行をして汝の思想を見失はしむる勿れ。汝の實行は汝の思想なしには盲目なり。汝の思想は汝の實行なしには無力なり。午後壬生馬來る。彼は常に優しき心を持てる若者なり。彼の親切は學び易からず。隆三、壬生馬に書を送りたりと、而して其中に彼が勉強せるにも拘らず此度の試驗も亦失敗に陷るなきかを配慮し、若し失敗せば再び東京には歸らじと云ひ來りし由。彼の弱志は實に憐む可き程なり。余は彼に書を致さん。彼を勵まさゞる可からず。しま子稍ゝ發熱して頭痛を催せりと。これ母上の病症を聞きてよりなりしとぞ。余は又彼女をもよきに處置せざる可からず。喜寛氏及び常田氏來りて立會診察をなす。母上の御病氣左程の事はなきが如し。直良氏來る。愛子明日酒匂より歸る可しとぞ。夜、病床に侍して一時半まで『我が宗教』及び『自然と人生』を讀む。此日午後より看護婦來る。

三月二十七日。金曜日。朝、母上の御病氣又惡し。然れども常田氏等の來れるにより之を抑制する事を得たり。母上は疲勞のために昏々たる眠に入り給ひぬ。余は床邊にありてその面を打ち守りぬ。老い給ひしかな。衰へ給ひしかな。眼のめぐり、口のほとり幾多の皺は、浮世と激戰の名殘を留めて、其一條一條に尊き意味の拾はるゝなり。日頃は愼み深くましますによりて少しも知らざりしが、今日見來れば鬢邊に五條六條の白髮を認めては、余は坐したる儘にホロ／＼と涙下るを禁じ能はざりき。人生何の意義ぞや。此夜母上大によし。直良氏、千代子、福子の諸氏來りて母上の床邊に謠など謠ふ。

此日幾日目なりけん、「英一兄の書を手にす。打ち見る儘に双手ワナ／＼と慄ふを禁ずる能はざりき。嗚呼余は遂に彼に先んぜられぬ。封を切る事の痛く躊躇せられて、而も其中を見度きの念は切に止まず。遂に斷じて封を切りぬ。而して泣きぬ。嗚呼余は兄の書を得ん事を望む。人は感謝の念を養はざる可からず。凡ての事感謝すべし。絕えず祈るべし。

三月二十八日。土曜日。實に美はしき快晴なりき。母上今曉充分の便通ありし爲にや今朝再び腹痛あり。されども暫くにして退き去り一日平安に暮し給ひぬ。しかも大に瘦せて、而して眉宇に一種悲壯の色を見る。增田君の事など語り出で給ふ。十一時頃木村君仙臺より出京。午後母上の御病氣非常に快方の樣なりしかば、木村君と伴ひて河野氏を病院に訪ひそれより新渡戸夫人を訪ふ。大島氏も歸朝せられたれば是非共に札幌にてありし蕎麥會をなすべしとて共に食ふ。大島氏は refined gentleman となられたり。而して彼は益〻其學者的態度を發揮せり。余は彼を尊敬せざる能はず。余は直ちに歸宅しぬ。

今夜不快の事あり。余と余の家風とは遂に一致する事能はず。余は頗るこれを悲む。

隆三に手紙を書く。物滿ちて溢れ難し。念々の起想余を痛ましむる事多し。されども余は神にありて悲哀の中に居るを感謝す。我如何に嘆きに入るも神と共にいまして我に云ふ可からざる甘き感謝あり。何者をも恐るゝ事かは。

三月二十九日。日曜日。朝より曇りぬ。朝、母上の御病氣宜しき方にあらず。木村君は朝堀井なる旅館に移りぬ。余の心は空しさに堪へず兄に書を致しぬ。余は兄の詩の如き書を得ん事を望む。朝羅馬書を讀む。「夫れ神は衆人を憐まんが爲めに咸これを不服の中に入れかこめり。あゝ神の智と識の富は如何に深い哉」(第十一章)。

一日膝下にありて看護に從事す。暇あれば Tolstoy の『我が宗教』を讀む。余は未だ結論に達せず。

此夜一時まで起きて看護す。愛子歸京。

三月三十日。月曜日。快晴。春日和煦として初夏の如し。此日は余木村君を郵船會社に案内すべき日なり。朝八時、彼の居を訪ふ(余は茲に母上の美德を書く事を榮譽とす。彼女は木村君の苦學に感じ彼に贈るに彼女の資金二十圓を以てせり。「但し十圓は直接には余に賜ひしなり。然しこれは寧ろ返却せんとす」彼女は木村君に對するに殆ど母の愛を以てするなり。)共に寓を出でて郵船會社に到りしに、吉田立卓氏未だあらず。仍て十時半頃再び到りしに長談する事能はざる事情にありければ、木村君は午後來る事とし、余は萬世橋より別れて家に歸る。非常な間違ひをなして「東京の田舍者」と笑はる。

家に歸りしに母上の御病氣は割合に快方なりき。午後上谷君來る。彼は中學の四年を卒業し、神戸なる高等商業學校の試

驗を受けんとして其途立ち寄りしなり。彼も思誠堂に居角力取りし一人なり。彼の頭腦は上方の長處を備ふ。冷淡にして熱心、執拗にして自利的なり。余は彼の世に成功す可きを疑ふ能はず。されども余は一層彼が人に成功せん事を望む。

高木氏來訪、母上の病氣の診斷をせらる。經行が充分に下らずして腹膜部に沈滯し遂に疼痛を起すに至れるものなりと云ふ。全快のためには長時日を費す可しと。

新渡戸夫人先日より殆んど毎日の如く母上の病氣を見舞はれしが、今日も亦來られて余に何か請求せんとするものはなきやとの事なりしかば、余は Miss Read の treatment の效なきやを問ひしに、大いに效あるべしとて次いで Miss Read 來られぬ。而して malted milk をさへ贈られぬ。余は夫人の衷心より余を愛せられ、余のために深切到らざるなきを思ひて感謝に堪へず。母上も父上も夫人等の深切には心より感心せられぬ。Christian の眞正の同情は凡ての人を動かすなり。余も亦彼女等に余の有する限りの仕事をなすべし。

此夜余は二時迄起きて床邊にありき。夜餘り遲きに明日は一番汽車にて出發すべき木村君の來訪なき故、十一時頃下宿に訪ひしも未だ歸らずとの事なりき。君の堅志は得易からず。

三月三十一日。火曜日。朝より蕭々たる雨冷かなり。朝六時頃木村君を下宿に訪ひて用事を果す。彼は數年間富士を見ざるべく東行せんがために神戸に向へり。彼は Stanford University に於て Dr. Gordan の evolution を聞かんと云へり。

朝狩太村農場の事に關し種々の事をなし、又會計の事によりて晝迄時間を費し睡眠足らざる事とて殆ど疲勞す。午後母上の床邊にありて水彩畫など描く。母上今日は大によし。殆ど疼痛を知り給はず。感謝すべきかな。兄より手紙を得たれども兄は未だ余の手紙を得ざる前のなりき。余は兄の余のを見たる後の手紙を待つ事切なり。英一兄は如何にあるや。午後に愛子來りぬ。彼女は天使の如し。其行く處に淸香を遣すなり。人生戰鬪のみ勇士の如く立てよ。山本岳父來らる。「約百紀」を讀む、余は今迄繙きたる文學にして未だ第三十八章の如く崇高深遠なる想を見たる事なし。是れ洵に殆ど人の聲にあらず。天の聲なり。讀み行く中に我の「小」を身に沁みて覺ゆるなり。實に我等は鷲の巣を岩の一角に置かしめたる其手をすら知

らざるなり。人世に立ちて事をなす、何の傲り、何の譽、何の力ぞ。是れ螻蟻が一塊の米粒を其穴に致せしに過ぎざるのみ。我等をして謙遜ならしめよ。汝の譽を全能の御手に歸せよ。辛酸の材を擔ふは易し。人生榮譽の荷を負ふの苦痛あらんや。百の思想遂に一の行爲に如かず。余頃來切にこれを思ふ。汝の涙を汗に代へよ。

此夜農場の事及び父上の書翰の代筆の爲めに十時に至る。これより床に就きて明日の曉、母上の床邊にあらん。

主よ、願くは凡てに勝りて汝の跡に從ふ事を得せしめ給へ。新渡戸夫人より手紙あり。母上の病を問はれたる外に Haverford College の Dr. Shapress の手紙を送り越された。書中には喜んで僕を同校卒業生として取扱ふと云ふ事、$ 300 にて1年を支へしむると云ふ事が書いてあつた。三月は暮れた。

まぼろし

とほきしほぢに　ふね　はてし　ひと
くがに　のぼりて　なほ　くるめきあり
えいがふの　かなたに　あれし　われ
ちの　むねによりて　まどひ　なからめやは
あけのほしの　あひうたふ　こゑ
いまは　きこえず
ゆふべのつきの　たちまふ　すがた
いまは　みえず
わがめ　わがみゝ　わがこゝろ
せちに　あこがるゝなり
そらの　あなた

はるののに　あたゝかき　かげらふ　の　ゆめ
あきのやまに　みにしむ　にしかぜ　の　さとし
ときがたきは　われを　つゝむ　こゝや
たゞ　なつかしさは　なみだを　よべど
いのり　ねがふは　よの　ゆふぐれ
えいがふの　かけはし　わたりつくし
おほいなる　みての　かげにたち
かなしき　なぞの　とかれなん　それ。

四月一日。水曜日。朝起きて見れば地と空とは一面の靄の爲めに朧となつて、凡ての上に柔き濕りが見える。云ふ可からざる快さであつた。靄が霽れるとうと〳〵とした春日和となつて少し暖か過ぎる位。梅は既に散つた。櫻の蕾は著しく大となつて梢には自ら紅の色が動くのである。朝は父上より御依賴の手紙及び吉川氏の手紙等の淨書と、金錢出入の計算をなすために殆ど全く午前を費し終つた。

母上の御病氣大分快方の樣である。午後から高木夫人、高橋夫人等が交〻見舞はれた爲めに僕は應接に時間を費し母上も疲勞せられた事と思ふ。四時頃から新渡戸夫人を訪うて親切を謝し、學校の事に就いて相談せんとしたが非常に疲勞して居られたから其儘失敬した。津田氏を訪うて徵兵の相談をした。此夜一時頃起きた。母上の御病氣は今日の談話の過ぎしためなるか、寧ろ惡い方で非常に腹痛を感ぜられた。中川、小原氏來る。少しく寢なければ頭が痛む、氣が沈む、汝は馬鹿なり。

四月二日。木曜日。晴天。朝、羅馬書を讀む。「汝曹互に愛を負ふの外總てのものを人に負ふ事勿れ」の語讀む毎に心に沁む。余等愛を負はざれば片時も此世にある事能はず。愛は實に魚の水、獸の空氣よりも緊要なるものなり。余等より朋友と骨肉との愛失はれ、而して乾坤を貫く不朽の愛失はれなば、余等何によりて生命の上に立ち得んや。余等は實に常に常に愛

の下には寸毫も權力なき奴隷なり。余等愛に負はざる可からず。唯其外の總ての事一も人に負ふ事勿れ。是れ余等が永遠に擔はざる可からざる苦痛なり。

　午前母上の床邊にあり看護の傍 Shakespeare の Julius Caesar を讀む。羅馬人氣質の美しさも醜くさも共に悉く描き盡されて遺憾なく、讀み行く中に身は何時か羅馬古都の人となる。著者の絶大なる客觀的同情は、凡ての人をして其儘に生かしむ。「怯者は彼の死せざる前に死するなり。勇士は死を再びする事なし」と云へる Caesar の句など殆んど彼自身の語と做すも不可なしと云ふべし。讀むに從つて殆ど著者の事業の人間以上のものありしにはあらざるかをさへ驚かるゝなり。

　母上の御病氣は昨夜の疼痛稍ゝ癒え、今日は昨日の催眠劑利き始めしにや殆ど半日を昏睡の如き眠りに入られぬ。而して寢言の如く云ひ給ふ所常に家政の上に關らざる事なし。

四月三日。金曜日。今日は神武天皇祭なり。空は朝稍ゝ晴れたれども午後より曇りて時には雨をさへ下しつ。此日母上の御病氣朝は大に快方に向はれたり。河野のゆき子さんを富士見小學校に入學せしむる事に關し、太田氏に到りて打合せをなし學校に到りしも、校長不在なりしかば其儘家に歸る。招魂社の邊櫻花漸く開き初めぬ。見上ぐれば萬蕾一樣の紅を潮して麗春の粹精將に來らんとするなり。されども春は厭な時なり。余は春を忌む。唯春にありて忘る可からざる程なつかしきものは菜の花と菫あるのみ。思ふに郊外の昨日今日彼の麗はしき黄瓣漸く辭し去りて、麥壠の波漸く高からんとすらん。彼の柔き黄の彩りの一々に地に委し去りて遂に黒土と相異る所なきに至るを思へ。

　彼處に悲めるもの、泣けるもの、悶ゆるもの、苦しむものあり。余は悉く彼等を知る。是れに思ひ到る時余が心は苦しき鞭に惱まざる能はざるなり。されど是れ余に與へられたる無上の恩賜なり。余に一人の同情を呈し得るものあるは余に一人の戀人あるなり。彼女の余を思ふと思はざるとは余の知る所にあらず。余は唯彼女にあこがるゝなり。而して余が心の中には云ふ可からざる涼しさを感ず。主に謝す。感謝す。余を苦しめ給へ。余は白日にありて默する梟たらんよりは、暗黑に投ぜられて靡美はしき繡目見たらん。人生主にありて感謝し能はざるものあらんや。余は余自らよく知るが如く人の中最も弱

し。余は嘗て人より「汝强し」と云はれたる事なし。神は余が弱きを選び給ひぬ。余は今余の波多き心の中心に一個動かす可からざる沈靜を感ず。悲哀來るも、憤怒來るも煩悶來るもそが心深く沈み行く時彼等は決して底知らぬ渾沌には到らざるなり。彼等は一の强固なる底岩に遇ふなり。而して見よ、此岩こそ主の据ゑ給へる所なれ。主は人間の力によりては得可からざる强き something を最も弱き心の中に播き給ひぬ。嗚呼余は屢々余が無爲を感じて洵に悲しむ。唯此一事を思ふ時勃然として余空しきものにあらずとの自覺は起り來るなり。余の持てる凡ては此自覺のみにて足れり。或人は馬をもて、又或る人は車をもて其傲りとせん。余は余が弱きに依りて傲らん。人皆我よりも强し。しかも余の如く愛し得るもの幾人ぞや。而して是れ唯主の惠み給ひし所、余若し福音を述ぶる能はずんば心病ましき哉。余の力は余がものにあらず。神の其榮光を顯さんが爲めに假に余に與へ給ひしものなればなり。

余思ふ所を書する能はず。唯神余の心を知り給ふ。祈禱を敎へ給へ。

午後より直良氏、愛子、上野公園の日本書會展覽會を見るとて行かれしかば余も到り見る。又愛子見ずとて博物館へも到れり。公園には櫻七分ほころびて人雜閙せり。余の心は寒く閉ぢぬ。見る可きものなし。

歸途、飯田町に富士見小學校長の家を訪ひたるも、又不在なりしかば其儘歸る。歸り來れば母上の腹痛再發せり。余は今日公園の散策を恥づ。余は未だかくすべきにあらざりき。

此夜一時に至るまで床邊にありて看護す。ウト／＼と眠り給ふ間には隆三、壬生などの夢見給ふ如し。此夜しと／＼と雨。

木村君より神戸より手紙。兄の手紙を得ず。如何なれば彼は余にそを致さゞるや。余は兄を待ち望む。而して余自身は英一兄に其後一片の信をだに送らざるなり。矛盾の極なるは余の性情なり。余は價値なきものなり。

父上老い給ひしかな、外忙と內憂との爲めに痛ましく氣落ち給へり。

四月四日。土曜日。近來になき快晴。空麗らかに晴れて夕暮の色など云ふ可からず。病室にありて、母上と共にそれを稱しつゝありし時、電燈ともりたるに母上は其を消せと仰せ給ひて、猶暫くは其變化極りなき空の色の不可思議を眺め入りぬ。

厭な暑さでもなし凛として引しまりたる快き日なりき。

今日は朝より來客多かりき。野村氏及び老母來らる。老母は暫時家に泊られて看護を手傳はるゝ事となる。行郎頻りに鎌倉に行かん事を乞ふ故、北郷資雄と共に行かしむる事とせり。余は嘗て此頃の如く弟妹に對して深き愛情を持ちたる事なし。午後一時半より太田氏に到りて後富士見學校に其校良を訪うて、ゆき子さんの事を託る。事成らず、殘念なりき。據なく番町學校の方を聞合せんとて到りしに、事務員既に歸り去りてあらず。幾重の不成功なりき。

家に歸りて Shakespeare の "Julius Caesar" を讀む。Brutus と Antony の演說、例によりて其當時の人の聲を聞くが如し。午後愛子來る。余は彼女の在る時何となく賴もしき心地となるなり、彼女は最もよく余に同情し得るものゝ一人なり。余の誤解が尙ほ多く起り來らんとき、余の refuge となり吳るゝものは必ず彼女ならん。

夜、野村老母、父上、壬生、しま及び余が夜食の食卓に鹿兒島より隆三の手紙屆き來る、展き見れば此度の學科試驗の彼の合格を報じ來れるなり。彼は余と同じく悲しき弱點を有するもの。若し此度失敗せば或は囘復し難き失望彼を襲ふ事なきやとは余の杞憂なりしが、今此信に接して一座眉を開きぬ。

夜、床側にありて母上に『家庭夜話』を讀み上げ、又獨りにて『聖書之硏究』を讀む。此夜母上の御病氣は大分よし。此儘にて續き給はゞ囘復も割合に速かならんと思ふなり。深切にも新渡戶夫人又見舞ひ給ひぬ。

四月五日。 日曜日。午前は昨日の如く膚寒き許り美しう晴れたれども、午後より曇りて夕方には雨となりぬ。母上の御病昨夜は實に近頃になき平穩なりき。安靜に寢ね給ひて朝に至りぬ。然れども今日は日頃附纏し給ひし氷袋の爲めに、多少腸部にカタルを起されて稍〻腹痛を感ぜられたるも左したる事はなかりき。寧ろ快方。

朝、少暇を偸み久し振りにて雅各書を讀む。ヒシヒシとして心に沁む語誠に多し。「なんぢ等道を行ふものとなるべし。徒らにこれを聞くのみにして自己を欺くものとなる勿れ」など鎗もて胸を刺さるゝ樣なり。余は弱きものなり。何時までか此の如き語に脅かされて悔恨を再三度せんとはすらん。

兄よりの書を得たり。余は彼の余に對する深き同情を謝す。しかも悲むべし、彼は余を慰め勵ます可き位置にあらず、彼の心中には余のものと等しき空虚あるが如し。余は彼の多感なる心情が木村を失ひ、余の彼に到る可き豫望より絶たれ、夜靜かなる時など如何に多くの悲涙にあるかを思うて云ふ可からざる悶えを感ず。余は彼に到り彼の手を握らん事を欲す。しかも凡ては許されず。只此の如き時我等を結合するものは互がなす衷心の祈あるのみ。

嗚呼東方の涙源！　午後健助氏、直良氏來る。しまは初めて山本を訪へり。

午後晝寢をなす。母上の御病氣よければ余の疲勞は來りしが如し。夜食を健助、直良兩氏及び父上と共にす。色々なる雜談出でゝ話興に入れり。健助氏は business man としてしかも精神上の修養をも失はず、よく中庸を得たる人と云ふ可し。蘇峰の感化多きに置かるものなるべし。此夜十二時迄起きて床邊に侍す。

四月六日。月曜日。日記を怠れる中に此日の出來事は煙の如く記憶より消え去りぬ。心に銘するものゝなかりし證據なり。唯此日の曇りて時に雨を降せし事と、朝河野のゆきさんを番町小學校に入學せしむる手續をなせし事と、母上の御病氣寧ろ快方なりし事とを記憶するのみ。

四月七日。火曜日。實に春神の齡今日を絶頂と思はるゝ迄凡ては長閑、華麗、平和の限りを盡しぬ。母上の御病氣大に快方なり。余は今日横濱にて木村に遇はんとしたるに、野村老人及び千代子さんも神奈川に行かるゝ所なりしかば、共に八時半の汽車に乘らんとして新橋に向ふ。外務省の前迄出でしに、今日は兩陛下の大阪に到り給ふべき行幸の日とて道路の兩側には諸隊整列し余等の車は其警護の間を行くが如し。歩兵第三聯隊の兵をも見たり。余が疎髯の中隊長、短軀巨眼の小隊長、質朴極まる荒山軍曹など依然として軍裝しつゝ彼所にありき。余は今寧ろ彼等を愛す。彼等は世の他の人種の僞善多きに似ざるなり。荒山軍曹の如きは佛樣なり。停車場に到れば顯紳高官踵を接し肩を摩したれば混雜の程一方ならず。我等布衣の平民共は人も無げに取扱はれて狐鼠々々として辛うじて車室の一席を贏ち得たり。されども沿道の春色は言語に絶しぬ。麥の靑さ、菜の黃さ、花の紅さ、水の滑かさ、風の軟かさ、汪然として心の中まで一種云ふ可からざる和平を感ず。

稅關の波止場に到りしに、多忙の光景は忽ち眼に逼り來りぬ、遇ふ人も遇ふ人も皆其面上に勞役の印あらざるものなし。而して海上には山の如き船舶横はりて煙を吐き氣を吹き、其側腹よりは貨物棧の如く出で且つ入る。小蒸汽船と端艇と和船とは縱横に其間を往復す。而して混亂せる種々の音響は恰も語をなさゞる苦悶の聲の如し。生活の程度緩漫なる麴町より來りし余は、埠頭に立ちて近頃遭遇せざりし奇異の感に打たれぬ。世潮の底流を見よ。そは至つて眞面目なり嚴肅なり。人は凡ての遊戲享樂の裏に己が生命をすら奪はんとする大敵と面を對せるなり。大敵を稱して「生活」と云ふ。除外例とも見るべき少數人を除く外は滔々として人皆其奴隷なり。彼と健闘して尙餘裕を有し得る人は祝福すべきかな。眞正の Christian は爾かくあらざる可からず。

信濃丸に木村と會し彼に新渡戶氏より託せられたる五十圓を贈り共に船を出でゝ山手の方を散步しながら語る。十時半彼と埠頭に別る。彼は今午後二時彼の鄕土より離れ去らんとするなり。彼は此度の事によりて毫も平常の意氣を動かしたる跡なし。余は彼の恒心に服す。天使の如き愛子は彼に贈るに例の妙藥を以てしぬ。余は到底彼女の如き普き同情を有する能はず。

歸途、東京貯蓄銀行に到りて新渡戶氏の貯金を引出し再び汽車に乘じて東京に歸る。時に一時半。直ちに新渡戶氏に到る。廣井、大島の兩氏あり。余は暫く語りて歸る。家には直良氏あり。自轉車の稽古を强ひられ熱心に一時間許り試みて乘る事丈け出來る樣になる。此夜十時頃まで病床に侍して就寢。夜は空曇りて雨さへ催しぬ。

四月八日。水曜日。曇天。風あり。「今生れし嬰兒の乳を慕ふ如く爾曹心を養ふ眞乳を慕ふべし。」(彼前、II、2)

午前一時より起きて三時迄病床にあり。母上割合によく靜眠せらる。午前直良氏來る。午後愛子、直正、直光、酒匂より歸り來れりとて伴ひ來る。彼等の亂暴は中々愉快なり。余は隨分疲勞せり。此頃は全く讀書を廢せり。朝夙起せし時『みだれ髮』を讀む。余は到底此思想中の人たる事能はず。然り余は多くの點に於て此思想家の如く放縱にして自我的なる事能はず。余は此思想の上に余の行爲を置く事能はず。彼女の云ふ所は余に取りては一面よりは異邦人の聲なり。しかも「感ずる」と云ふ方面よりする時は、余は彼女に於て少なからざる感興を受く。彼女の思想は余が專門的硏究の參考

書なり。余は彼女を以て余が經行の伴侶となす事能はず。しかも余が苦旅の途上時に彼女と相遇ふ時彼女の振冠りたる亂髮の中に云ふ可からざる淸純深奧の姿あるを認めて、玆に「新らしき者」を拾ひ得たるの感なくんばあらず。首を擧げて四方を見れば凡てのもの皆古し。此時に當りて「新らしき者」價何ぞ尊き。

夕方、渴地の龍子氏及び北鄕氏來らる。余は休養を要すと思ひたれば、今夜は九時半頃寢に就きぬ。

四月九日。木曜日。終日蕭々たる春雨。朝早く直良氏來訪、母上の爲めに空氣蒲團を購ひ來らる。又木製の丈夫なる寢臺をも齎らしぬ。此日は終日家にありて看護す。暇々に "Old Greek Stories" を讀む。兄より端書を得ぬ。彼は一言も申越さねども其寂寥の中に苦しめる意はよく看取し得らるゝなり。余は彼の多感を知りて彼が頃來の苦痛を推するに誠に悲しきものあり。彼は悲痛にも歡喜にも常に他人の踏み入らざる深奧の點にまで達して、其處に他人の窺ひ得ざる意義を窺はずんば休まざるなり。是れ畢竟彼に取りて大なる恩惠なりと雖も、其當時を以て見る時余は彼の苦悶の狀を推察するにだに、彼を憐れむの情に堪へざるなり。余は神の祝福が彼の如き忠僕の上に裕かにして彼の心身が益〻鍛へ上げられん事を祈りて止まざるなり。此夜明午前一時まで夜伽す。英夫、行郞鎌倉より歸り來る。

四月十日。金曜日。快晴。和煦の氣溶々として天と地とに滿つ。實に祝福されたる日なり。朝父上早く出勤の爲め種々其方の用をなしぬ。此度建築すべき西洋館の見積書の比較を命ぜらる。中山幸子氏來訪、態々酒匂より來られしなりとぞ。種種病氣に對する注意など云ひて歸らる。彼女も亦當世流行の變生的性質を有せる一人なり。余は彼女の如きに多くの信賴をなす事能はず。彼女の如きは事を爲すものにあらず。事を爲すを好むものなり。

高木氏來診。餘程快方の由なれども尙隨分長時日を經ざれば充分の恢復を見る能はじとなり。愛子來りぬ。彼女は春そのものよりも暖かなり　余今迄遇ひたる女性中最も彼女を愛す。彼女は嘗て人を惡める事なし。嘗て邪まに人を見たる事なし。彼女の前には惡人も罪人も凡て尊き靈魂を有する人と化して顯はるゝなり。彼女は他の世界に生るべかりし天使の、誤って此地球の上に生れ來りしものなり。而して其父より「幸福なる者」と呼ばるゝ彼女が、此地球の上に於ては最も不幸なる境

遇にあるものなるを思ふ時、余の理性は殆ど常を失はんとするなり。彼女何の妬を受けたれば獨り淋しく呪はれたるものとして殘らざる可からざるや。英一兄の書は尙余が掌裏にあり。余は彼女に彼の亡せにし兄の事を告ぐる勇氣を失ひぬ。余の胸中に蟠りて一刻も去らず、常に兩刃の劍の銳さもて余の心を刺すものは實に彼と彼女との悲むべき境遇なり。

愛子は中食を余等と共にしぬ。余は彼等に說くに Hannibal の悲慘なる末路と Carthage の殘虐を極めたる沒落を以てし、又羅馬人と希臘人との比較を語りぬ。三浦氏と西洋館見積書の比較調査をなし終れる頃喜寛氏來りしかばこれと應待し、それより久振りにて河野氏を訪ひぬ。彼女の病は大に怠れり。大島氏先づあり。歐米の警察制度の話などを聞く。又河野夫人より依賴せられたる文を渡す。信子氏其一人の友と共に來りぬ。余は彼女を見る每に、別れてより一種の悲哀を感ず。彼女の未來に祝福あれ。彼女の幼時よりの多くの辛酸が裕かに酬いられて彼女に聖慰の與へられん事は余の衷心よりの祈なり。

夜十時近くまで母上の床邊に侍す。今日は壬生馬の伽する日なればこれにて余は室を退きぬ。此日母上の寢臺を山本のものと代ふ。全力を盡して爲す人には如何なる卑業も偉大なる事業なり。要は愛を以てこれを爲すにあり。

四月十一日。土曜日。朝より夜に至るまで蕭々たる雨。病室に靜坐して耳を傾くるに誠に或者の聲我が耳に異界の聲を囁きつゝあるが如し。余は雨日を愛す、余は人の云ふ如く雨日に於て多く倦怠を感ずる事なし。此日母上の御病氣は、本病の方は漸々快方に向ひたれども氷囊を永く腹部に附纏し給ひしかば腸加答兒を起されたるものゝ如く間歇的に疼痛を感ぜらる。此朝兄に書を致す。紙に臨み何故か涙の汗の如くにじみ來るを覺ゆ。他日何の時か必ず地の上に余彼を失ふか、彼余を失ふの時來る可し。此時余等が受くるの苦痛は果して幾何なる可きぞや。余は寧ろ此苦痛に居らんよりは、神余の弱きを憐み給ひて余をして先づ此世より去らしめ給はん事を希ふなり。されども凡ては御心の儘なり。神若し余に生きて獨りにして旻然たれと仰せば余豈然かせざらんや。されども余の祈り願ふは此の如きにあらず。

午後病床にありて澤柳氏譯述の『讀書法』を讀む。平凡の記事に過ぎず。しかも余の此書によりて啓發せられたるは、讀書の方法によりて讀書の利益の多寡に大差を生ずべき事なり。余の從來なし來りし讀書法は所謂道樂讀なりしなり。卽ち感

情の興奮の爲めに讀みて知識の補育の爲めに讀まざりしなり。而して余は時間を惜むの餘、頭腦極めて不明瞭なる時も尙强ひて書に向ひぬ。此二者は余が讀書法の二大失敗なり。余の從來の讀書にして、少しく常套より脫逸せし觀ありしものは Bible, "Hero-Worship," "Sartor Resartus" 『農業本論』、Myer's "Ancient History," "Les Misérables," "Sorrows of Werther," 及び數篇の英詩位のものなり。余は單に通讀に過ぎずして腦底に今も忘れず記憶せらるゝものなし。恥づべからずや。

此夜十一時半迄床邊にあり。母上時々疼痛の爲めに覺醒あり。今夜夕食後食卓を圍んで、父上、壬生等と相語る。父上の談片。「西洋及び東洋の佛像等の彫刻に就ては大なる相違の點を見る事を得可し。前者は常に動き後者は常に靜かなり。佛像に於ても其靜止せる時は坐せるの像を刻み、活動せる時は僅かに立てる像を刻むのみ。しかも西洋にありては悉く足を擧げ腕を振うて活動しつゝあり　これ軈て西津對東洋の一般思想の概見を示して餘蘊なしと云ふ事を得べきか云々。」

四月十二日。日曜日。朝より烈しき風なり。今朝母上の御病氣、腸加答兒愈ゝ惡しき有樣なり。常田氏來りて「モヒ」の灌腸をなす事となる。此朝殆ど全く午前を費して吉川に出すべき返書を書く。

午後より『バシカートセップの日誌』を讀む。幾度讀むも彼女は實に驚異すべき人格なり。余は屢ゝ彼女の切なる要求に同情するを禁ずる能はず。余は彼女の如きを惡みしかも愛す。其故を知らずと雖も彼女は確かに余を引致するなり。

朝、健助氏、德丸氏來り午後よりは熹寬氏來る。來客に接して無益の談をなすは余には最も苦しき事なり。夜食後山本を訪ふ。直良氏風邪の氣味にて臥床しつゝあり。愛子今夜不思議の夢を見る。そは彼女眠れる房子を抱いて見つめつゝありし時、身は何時か其家を去り春風香しき芳草の間にあり。云ふ可からざる快感に包まれしが突如我に歸りては淚潸然として止む能はざりしとぞ。余は感嘆して彼女に云ひぬ、「御身の潔き心生きながらにして天國の光景を垣間見しなり」と。余は心底より眞面目に是れを云へるなり。羨む可きは彼女なり。讃むべきは彼女なり。尊む可きは彼女なり。彼女は曇りなき一個の璧か。此夜彼女 daisy を携へて室に入り來る。我はそを愛す。我は賑かなるものよりも淋しくして潔きものを愛すと云へり。彼女自身實に daisy の如し。余は彼女に故賤子女史の遺稿『わすれがたみ』を贈り、彼女は余に『日本國歌』、『敎育と常識』

其他數册の書を與へぬ。八時半彼所を辭す。月よし。女子學院の裏道の靜かなる邊を遠廻りして家に歸りぬ。余は看護の爲め此日頃全く夜出せし事なし。此夜櫻咲き匂ふほとり月に浴して近頃得ざりし氣に魅られぬ。此夜十二時迄床邊にありて就寢。野村氏老母來宅。新渡戸夫人親切にも訪問。此夜母上子宮より膿樣の排泄物あり卽ち子宮周圍炎の膿解せるものなり。此夜此の如き事ありし事二度。

四月十三日。月曜日。麗はしき晴天。此日母上又昨夜の如き排泄物ありて、腹の具合急に囘復せられ苦痛大に輕減せらる。高木氏來診せられ非常に安心せりと云はる。母上が病根はこれによりて絕たれつゝあるなり。一同愁眉を開きぬ。余は殊に深き感謝をなさゞる可からず。余は重き荷をおろすを許されしが如き思をなせり。愛は再び地に於いて相結ばれぬ。余は爾後再び嘗ての如き不孝の児たらじ。

朝久振りにて床邊に Myerの "Ancient History" を讀む。羅馬帝國の衰運洵に悲しむべし。Praetorian の亂逆なる行爲は國家の秩序を紊り、偶これを壓服するものあれば其人自身東洋古代の諸王に劣らざる狂暴の人なり。Commodus, Caralla の如き 30 tyrants の如く悉くこれなり。而して殊に記憶すべきは Diocletian（A. D. 284—305）の時代に於て、羅馬が其共和國の名を失ひて（實の旣に業に失はれたるは我等の見たる所なり）An unveiled and absolute monarchy となれる事これなり。又此時代に於て羅馬の統治權力が東西に分離せらるゝに到れる事これなり。要するに之れ日本歷史に於ける藤原氏季世の時代なり。彼は保元か平治の亂を見るの最後を眼前になしつゝあるなり。

午後愛子來る。又常田氏來る。夜食後壬生、行郞と共に散步し辨慶橋に於て壬生馬と別れ余は行郞と共に花の下を唱歌など唱ひつゝ散步しぬ。母上の御病氣夜に至るも續いてよし。此夜は枕を高うして眠る事を得可し。夜靜か。

四月十四日。火曜日。曇天。雨は降らざりき。此朝札幌なる遠友學校の生徒瀨川末より手紙を受く。彼女は今高等科三年にあり。彼女は嘗て余に價高き手紙を致せるものなり。余は今又此書を披見して云ふ可からざる偉大の慰藉を得たり。余は此に彼女の手紙の節々を轉載し置きて余が有し得る大なる倣りを記念せんとす。

「……先生より御別れしてよりなんとなく心細くてたまりません。毎夜先生の御身の上の事ばかり忘(案?)じて居ります。先生御歸りのじぶんに高等科の男子の方でなにか御別れの御語(話?)を致しておられたやうでございました。先生私は先生が御語(話?)を到してしまふじぶんに先生になにか私が云ふちもりでありますた。けれども先生が歸られたと聞て。ほんとうにざんねんだと思ひてますた。いまでも先生の目の前に見えてたまりません。先生に御別れしてより力が落ちますた。なにするにも先生の事ばつかり思ひ出しては。ひとり涙にむせびけり。學校の歸りにも先生今頃は。いつこにおはすらんと孝(考?)へても先生の事が頭からはなれません。毎夜ゆめをみて我(或?)時は先生の歸られし（歸る、歸る! 然り御身は余が札幌に行くを歸ると思ふか? 然り同情のある所は確かに故鄕なり。余は御身ある札幌を余が地上に於ける故鄕となして世の戰を終れる後は御身の云へる如く札幌の胸に歸り行かんよ）事をゆめに見ては。ほんとうにしてよろこんで居ります。(御身の余を慕ひ吳るゝ樣は情熱したる戀人の如し余も亦御身を愛するの情衷に燃ゆるが如し。)……先生そして姉さんと私とは晝は會社に行て働き又は。夜は夜學校にいて。勉强して居ります。先生そして善に進むと云ふ固い決心で家に居りても麥酒會社に行ても夜學校居る時も惡い事を云ふ人に耳を向けず唯一生懸命に正直に人に親切にして働き又學ぶこれがほんとうの艱難にうちかちこれがえらいとも人らしい人ともなるほんとうの道だと自分では思ふて居ります。又働き學ぶと云ふ事は神樣の御仕事だと思ふて居ります。そして正直とは其仕事をしとげる方法だとも思ふて居ります。先生どうぞ祈りて下さい（牧師よ、教師よ、哲學者よ、汝の口を噤めよ。余は此日にして初めて基督の聲を聞けるが如きを覺ゆ。誠に洵に我等生れ代りて孩兒の如くならずば天國に入る事能はじ。余は余の舌の動きたりしを恥づ）先生そして札幌は寒い所でございますから着物などボロでもなんでも着て身體は弱くとも心を強くしてやつて居ります。先生どうぞ祈りて下さい。私も先生御身を御大切になさる樣祈居ります……

　先生そして學校を歸つてからかいたのでございますからよほどおそくなつたのでございます（然り、御身は時を知る可き時計を有せざらん）もうランプに油がなくなつて。くらいランプのそばで。かいたものですから。なにをかいたか

さつぱりわかりません。いんぴつなどでかきまして誠にひちれいで御座います。

遠友學校生徒
高等科三年
瀬川末一

千百の虚言に滿ちたる頌德表を得んよりは余は此片信を得ん事を榮とせん。浮世慣れたる舌によりてなさるゝ幾多の說教を聞かんよりは余は此片信を讀まん事を榮とせん。余は余が友の中に此の如く高潔にして愛情細き友を得たるを感謝す。此空漠輕浮の世にありて眞に一個の心靈を得ん事は僅に見得る所なり。而して余はこれを得たり。余が衷なる人感謝に滿たざるを得んや。余はこの書をとり偉大なる說教としてこれをしま子をして讀ましめたり。

此日父上急に思ひ立たれて關西に旅行せらるゝ事となる。諸準備の爲めに一日を費す。此朝區役所に到り本年の演習召集猶豫願の許可を受く。五時家を出で父上を新橋停車場に送る。雜閙甚だし。父上六時の汽車を以て恙無く出發せられぬ。後、壬生馬、行郞、石黑氏と共に停車場二階にて夜食し共に散步して商榮館に到りて繪畫を見る。歸途一寸山本に立寄る。直良氏の風邪少しく宜しからず。歸後『美術講話』を讀みて就寢。

四月十五日。水曜日。曇天。朝より大風。一重櫻は此の風のために略散らされ終るならん。春やがて逝かんとす。夜前の楓葉漸く其の大さを廣げて緣若く柔かくなりぬ。害葉若葉の長閑けき時漸く來らん。人徒らに悲涙を垂る可きかは。されど日月踰越して人を待たざるなり。余怠惰の時を作る時胸に云ふ可からざる疼痛を感ず。神よ、この卑しき僕をして時を殺す事なからしめ給へ。朝食の机上に『文武會雜誌』あり。小文士の口の上のみより發したる詩文見るに堪へず。机下に抛てり。眞に半熟の文藝家は人類中の無用の長物なり。余が半生の一部も亦此愚昧なる行爲のために誤られぬ。心に感ぜずして筆を取るは虛の最も虛なるものなり。

午前 Myer's Ancient History を讀む。今日を以て羅馬政治史の全體を讀み終れり。亡國の歷史を讀むは一種の苦痛なり。

余は一種悲痛なる悲歎を聞くを感ず。"Greece was the mother of modern civilization; Rome was its missionary" とは Lenormant の二國を評せる所なり。希臘の滅亡は少壯の青年の卒倒して死せしが如し。羅馬の滅亡は頽廢の頑翁の中風症に罹りて死せるが如し。希臘は美しう起りて美しう死しぬ。羅馬は頑(かたくな)に起りて頑に死しぬ。希臘は徹頭徹尾希臘なり。羅馬は始終到底羅馬なり。午後、蠣崎知二郎、偶然北海道より來る。彼は青森に着すると共に熱病に罹りて仙臺の片田舍に一週間計り靜養して出で來れるなりとぞ。彼と大に宗教の事を語る。彼は石澤に比すれば liberal なる着眼點を有せり。しかも其行爲に於いて石澤或は彼の上にあらんとするは何ぞや。余は切に願ふ、余に凡てのもの丶附與せられざるもよし、唯若し動かす可からざる確信の附與せらる丶あらば！

夜、母上の爲めに書を讀みて聞かせまつる。余は堅く立つて動かざる確信を要す。汝は何故に徬徨徘徊するや、惱めるものよ。母上の御病氣益ゝよし。

四月十六日。木曜日。

"Behold, if God so loved us, we ought also to love one another. ...... There is no fear in love; but perfect love casteth out fear: because fear hath torment. He that feareth is not made perfect in love. We love him, because he first loved us."

I. John, IV.

蒸暑き事夏の如し。九時より雨となる。地震二回あり。不快なる日なりし。朝 Myer's Ancient History を讀む。今日の處は羅馬に於ける Literature なりき。羅馬は希臘の模倣に過ぎず。殊に文學に於いて其感あるが故に余は之を讀みて多くの感興を受くる事能はざりき。しかも余に取りて注意すべきは Catullus (was born 87 B. C.) が verse の beauty and sweetness を有して Roman Burns と稱せらる丶を知り、若し機會を得ばこれを讀まん事を望むなり。又 Virgil の Georgics は彼が husbandman と其 labor とを讚詠せしものにして是亦一讀の價値確かにあるべきものならんと信ず。他に余の現今の注意を引く可きものなし。模倣の命は短かし。眞に達せよ。眞を得よ。然らざれば汝は到底 life なき或者に過ぎざるべし。午後山

本を訪ふ。直良氏の病氣昨日は少しく惡しかりしが、今日は大に快方に向へりとぞ。三兒例によりて可憐。愛子例によりて淑靜。余は彼所の空氣に此大要素あるに驚く。

木蓮の花咲かんとするもの、絞り色の椿、八重にる山吹を與へられて歸る。途書肆にて若松賤子の『忘れがたみ』を購ひしま子に贈る。父上より雁信あり。無恙にして京都に着し給ひしとぞ。瀬川末子に返書を書く、快若くもなし。時間を空費する事多し。汝遂に地獄に行く可き靈か。

四月十七日。金曜日。朝より雨。午前は溫氣蒸すが如くなりしが午後より冷氣俄に加はりぬ。朝 John I の "There is a sin unto death" と云ふ所に讀み到りて interrogation mark を附しぬ。余に解釋せられず。殘れるは此問題なり。これを思ふ時余は云ふ可からざる迷惑を感ず。

My r's Ancient History の中 "Writers of the Early Latin Church," "Roman Law and Law Literature," "Social Life" を讀む。多く注意すべき事項を認めず。父上より御手紙來る。京都より奈良に到られ其處を經て大阪を見、神戸に向はれたる由なり。午後 "A Thousand and one Gems" を讀む、Wordsworth の諸篇味ふ可し。余は今迄幾度も彼の詩を讀みて(一字不明)しく感じたれども寧ろ彼の詩に對しては余は充分の感興を有する事能はざりき。しかも此雨靜かなる机上にあり氣を下し心を靜めて讀み下せば深奥なる一種の氣沁々として胸琴を振ふを覺えずんばあらず。思ふに彼の詩の余に感興少きは Tennyson が余に爾かくあるとは稍々趣を異にせり。Tennyson は余の今の境愚にありても略其思想の全豹を窺ひ得べし。しかも Wordsworth に到りては然らず。余は彼の思想と相距れる所あり。余は未だ彼の思想を了解する事を得るの位置に達し居らざるなり。余は他日必ずや彼の詩に尠なからざる感興を有し得るの時の來らん事を祈る。余は既に Tennyson を通過しぬ。Wordsworth に至りてはこれを前途に望みて、彼所より善き物を得ん事を祈るたり。『獨立評論』を讀む。蠣崎來りて、今夜彼が社會主義演說會に於てなすべき演說材料となるべき書を持ち來る。

母上に『忘れがたみ』を讀みてあぐ。夜、病床のほとりにて雜談す。今九時二十分前なり。これより再び Wordsworth を讀

みて就寢せんとす。然るに壬生馬來りしかば倫理及び哲學に關する談話をなして十時半に至る。それより詩集に眼を曝せしが睡魔に襲はれて失敗し、十一時遂に就寢す。

四月十八日。土曜日。膚冷かなる迄快く晴れたる好天氣なりき。余は此の如き日を好む。此日 Myer's Ancient History を讀み終る。

余が一月よりなせる纒りたる仕事とはこれ位のものなり。憐むべきにあらずや。唯余は一事を爲し得たるを感謝す。余若し多きをなす事を得ざれば一事を爲さん。一事をなす事を得ずんば一事をなす事を勉めん。天は余に有限の力を與へ給へり、縱令其力は微弱なりとするも、其力を用ゐざるに勝れり。感謝して余が生を勇ましくする事を得せしめよ。

朝、母上の寢臺腹部の邊下るとの事にて之を代ふ。新渡戸夫人に手紙を書く。午後より壬生馬と共に上野に到り美術院展覽會及び无聲會展覽會を見る。前者にありては橋本雅邦氏の『雷神』殊に眼を引き、後者にありては柏亭氏の精勵なる結果、百穗氏の奇警なる描寫、場中を壓せるが中に此會の重鎭たるべき素明氏の畫の痛く下りたるは彼が兵役にありしに由るか。兎に角久し振りにて繪畫を見得たり。歸途河野氏を訪ふ。今日は齒痛を感ぜられし由にて流石に困難なるらしく見受けられたり。夜食後少しく Table Tennis をなし、それより Goethe 傳を讀みて得る所甚だ多し。

四月十九日。日曜日。快晴。實に麗かなる安息日なりき。春逝かんとして落花滿地。椿の大なるよりこゞめ櫻の小なるに至るまで哀れ深し。嫩芽漸く大となりぬ。楓樹の如きは既に其嬰兒の手の如き葉を開きて淺き綠の色は空中に溶けて流れんとする計りなり。

余は馬太傳を讀み第一章に出でたる系圖の人物を知らんが爲めに舊約聖書創世記を讀む可く試みたれども、頻々として來る客の接待の爲めに讀む可き時間を奪ひ取られぬ。余の今日接したる人は高木の廣子氏、湯地氏、野村驤氏、吉田立卓氏、山添氏、及び愛子なり。少閑を得る毎にゲーテ傳を熟讀す。余は不羈なる彼の天才に驚く。彼は殆ど余等を凞肢せしめんとす。彼の可ならざる所なき ability 彼の熱火の如き情緒は殆んど倫を絕し、彼の前には世は唯彼の爲めに造られて、彼は其

試驗場長たるの感あり。苟も彼の思想が醱酵せられん爲めには幾多の人身御供は彼の祭壇に捧げられしなり。彼が懶怠を試みんとせし時には、彼の周圍は彼と共に懶怠を試みき。彼が戀愛を試みんとせし時には、彼の周圍は彼と共に、戀愛を試みき。若し少しく誇張を許さば、彼は彼の爲めの故に歷史の進步を止めたることすらありき。余は彼を以て偉大なりとなすに躊躇せざらん。しかも彼を以て崇嚴となさんには余之に意を同じうする事能はず。彼を崇拜せんが爲めには余には尙多くの躊躇ありて殘れり。偉大なるが故に崇拜すると云はゞ余は三角塔を崇拜するものとなるべし。余は三角塔を崇拜すべき所以を知らず。父上より電報あり、向田なる佐藤たに氏死去せりとて今日明日川內に留まらるべき趣きなり。兄より手紙を得たり。貪るものゝ飽くを知らざる如く書に誘ひ入られぬ。何等傷渥なる同情ぞ。余は彼あるが爲めに余を見棄てざるなり。彼の苦痛を思ふ時余は智あらん事を欲し、同情濃やかならん事を欲し、勇氣あらん事を欲し、强健ならん事を欲し、長壽せん事を欲す。主よ、願くば彼の上に厚き祈りをなす事を得せしめ給へ。夕方急に悲淚の襲ふ所となりて止め難し。夕食を廢して家を出で平河町の敎會に萩原なる人の說敎を聞く。余は地獄にまで失望したり。彼は殆ど全く心靈上の經驗を有せざるが如し。生命に等しき傳道の職にあるには似合ざる所なり。如何なれば彼は無謀にも此聖職にありて此の如く滿足するや。世には隨分厚顏鐵面の人もあるものなり。余は幾度か中途にして席を立つの無禮を忍び用ゐんとせり。夜九時二十分歸宅。これよりGoethe傳を讀まんと欲す。

四月二十日。月曜日。半晴。朝創生記を讀み、イサク、ヤコブの事蹟を讀む。Pastoral age の有樣描くが如し。此の如き傳說より基督敎的精神を發見せし事は餘程の難事なり。片言隻句を捕へて「是れ基督のかくなし給へるに叶はせんが爲めなり」等云へる固より爲し得べき業なる可しと雖も、全體の思想を統一して之れを觀る時は、當時に於ける神に對する觀念は、唯其唯一的なりしと絕對の威權を有したりし事に於て相似たりと雖も、極めて僻見なる、極めて畏怖すべき、極めて感情的なる、極めて怒り易き、極めて不公平なる神として顯るゝを見る。而してかゝる、人に屬し地に屬したる思想は基督敎の建設せられし後尙使徒等によりて繼承せられしものありしが如し。ユダヤ敎の眞髓を極めたる Paul が多少かゝる思想の拘縛す

る所となりしは怪しむに足らざるなり。而して漁人ヨハネには寧ろ此の如きユダヤの人民特有の思想の浸潤せざりしを見る。Paul は此に彼の弱點を有し John は此に彼の長處を有せり。

ゲーテ傳を讀み終る。午後より母上に芭蕉文集を讀みて上ぐ。彼は眞に通人なり。彼は確かに自然に對つて一個の徹眼を有せり。其「造化に歸れ」と叫びし一文の如きは彼の識見の非凡を顯はさずんはあらず。夕刻に及びて母上の熱 38.1 に上り腹痛をさへ催されしかば、余は大に驚きたりしかども、夜に至りては幸に鎮靜に赴き、やがて眠に入られしかば、十一時四十分就寢す。

四月二十一日。 火曜日。「沈思熟考より生ずる感情の外は賴む可らざる感情と知りて可ならん。」(求安錄)

今曉より雨となりぬ。終日蕭々として落花と共に下るなり。病者に侍して森閑たる院庭の嫩葉に對すれば、何とはなしに一種深奥のものあり來りて余の心に沁む。神よ、僕の罪深き心を許し給へ。余の今の境遇は余を誘ひて夢に入らしめ易し。現實の熱境に立ち矛を取りて血を見るの戰闘は今余が上にあらず。余の苦痛は凡て想像の迷宮の奥深くより來るなり。余は基督として受入る可き幾多の貧民を思はざるにあらず。しかも余は絶えて彼等と接せざるなり。余は手を取つて共に祈るべき友を思ふなり。しかも余は絶えて彼等と接せず。余は活社會の活事物に遇はず。余が凡ての反省と考慮とは共に内面的となり且つ想像的となりぬ。而して此の如き境遇は屢〻余を indifference の狀態に導くなり。今日の如きは實にそれなりき。此暮春、此細雨、此病者は余に一種深奥の something を供したれども、余の心情はこれを受け入るゝ可く餘りに平凡となり終りぬ。嗚呼憎む可き平凡。而して余は時々彼と握手せんとするなり。人生感激する所なからんよりは死せんに如かず。唯余の心の回顧のみは余を導きて僅かに平凡より逃れしむ。余の衷なる人は余の社會的境遇が如何にある時と雖も、常に克く余が考慮の對照たるを得るなり。余は益〻此衷なる人を究めざる可からず。彼は余が疑問の中心にして、思考の核子なり。余が客觀的思考より歸り來りて、主觀的思考に達する時は、余の周圍に蝟集したる凡ての懷疑は除去せられて、彼處には神と余とのみ兩極に立てり。客觀的には疑問とすべき罪惡も、主觀的には否む可からざる事實として余が心の中にあり。客觀的に

は到底受入る可からざる eternal damnation も、主觀的には確的なる審判として余の心を支配するなり。余は「我」を見て遂に否む事能はざるに到るなり。余は衷なる人と相面する時、期せずして神よと叫ばざる能はざるなり。今余に於ける大なる苦痛は、如何にして此主觀と客觀とを調和せんかにあり。余は余と形骸を同じくし靈魂を同じうする人類の一人をも eternal damnation の下にあらしめて、此永劫の時限と方處との中に再び相見ざる可く分たるゝを正當なりとなす能はず。しかも余が余自身を顧る時は、其處には確かに eternal damnation ありて、若し余永く自覺せる罪惡の中に住まば、其制裁を受くべき事を明白に自覺す。此相反するが如く見ゆる兩者の調和を如何にすべきや。これ余を脅かし來る最大最痛の疑問なり。若し余の客觀的立脚地を主觀的のものと一致せしめば、余は遂に「絕對なる希望」の立場に立つ事能はず。如何となれば世には永遠に暗黑の殘留すべければなり。余は神と暗黑との兩立を認識し得ざると共に、暗黑其者の存在を惡む。些も暗黑なき所と時とは、余等神にあるものゝ理想たらざる可からず。而して若し eternal damnation の存在を許すとせば、暗黑は何の時を以て宇宙の表面より削り去る事を得べきや。若し余が主觀的立脚地を客觀的のものと一致せしめば、余自身は全く木片の如き平凡者となるの外なし。世は平板となり、人は器械となり、余自身は無に歸せん。絕對的の懽喜を知らんが爲めには、絕對的の悲痛なくして已み得んや。右手なる林檎に對して左手には鞭なからんや。余若し余を反省する時 eternal damnation を信ぜざらんとせば、余が恃みに恃みたる自覺は空中に畫かれたる樓閣の如きのみ。余は此の如きを敢てする事能はず。余は如何に激しく余自身を責むるも尙足るを覺えし事なし。然れども之れを以て世を責むるは余の爲し得る所にあらず。そは神のみ爲し得給ふ所なればなり。罪惡に對する觀念も亦些かも eternal damnation のそれと異る事なし。唯余の苦痛に堪へざる迷宮の奧深く一點の火の如きものを認む。そは「犧牲獻身」なり。犧牲獻身のみが矛盾せる兩極を連結すべき倔強の鍵鑰たるを朧げに思ふなり。基督が苦心焦慮の後取られたる方針の唯大なる「犧牲獻身」なりしは、此消息に通ぜるものにあらずやとは余の心深く蟠かるゝ躄なり。

唯永遠の愛に居るものゝみが、永遠の刑罰にあるものを救ひ得べし。是れ見易きの理なり。救はれしものゝ淨潔なる血潮

のみが、救はれざるもの〻汚點を淨めて雪の如く白くなし得べし。而してこれ涙のみならず、汗のみならず、實に誠に血潮其物ならざる可からず。然らば即ち宇宙の活動は救はれしものと救はれざるものとの活動なり。救はれもせず、救はれざれもせざるものは此大活動の前に零なり。孰からず又冷かならざるものは基督に到る事能はざるなり。嗚呼神よ、爾は僕をその何れに選び給ひしぞや。大なる審判の座の前に立ちて、靈戰かずしてあり得べけんや。余の戰は此後幾年に亙る可きや。余は何の時全く神と共に歩む事を得べきや。邈として知るに由なしと雖も、神は各を最もよき道に導き給ふを信じ、余は余の正しと自覺したる旅路を取らん。神僕を許し給ふや。僕をして貧しきものに一杯の冷水を分つ事をなさしめ給ふや。嗚呼、現世と天國との間に横はれる大なる河、その深淺と廣狹とは測り知り難し。

信じて行ふもの唯克く救はれん。其他共に非なり。朝、父上より電報あり。今朝川内を出發せられたる由。又佐藤たに死去とは誤りにて其母なりしとなり。

朝、馬太傳の第三章を讀む。John Baptist の荒野の叫びなり。基督が評せられて人の子の中斯の如きもの未だ生れずとなし給ひし所のものなり。然り此の如きもの或は生れたらん。しかも彼の如く人の面を畏れずして天を畏れしものは未だ嘗て一人だに生れざりしなり。其間閑を得る毎に創世記を讀む。午前は母上に海上胤平と云へる人の明治の歌人と稱するもの十二家の諷詠を批評せる書を讀む。歌者も評者もよく揃ひし呑氣連なり。此の如き風潮は嘗て英國にあり、佛國にありしを思へ。世は同一事を繰返すなり。午後、逍遙氏の戯曲『菊と桐』を讀みてあぐ。菊の方は平凡他の奇なし。桐の方は多少苦心の作なるべし。未だ半だに讀まざれば其是非を定め難しと雖も、淀殿の性質などよく描かれあるが如し。

藏の書物をさぐり居る中『愛吟』と『求安錄』とを得たり。二書ともに余が心靈の行旅には忘る可からざる偉大の記念碑なり。殊に『求安錄』は繰り返し繰返して幾度か飜讀したりけん。余は編訂斷たれて赤靑の線に滿ちたる同書を、札幌を去る際恩地君に贈りたる以來、嘗て再び之れを繙きたる事なかりしなり。今日の快思ふべし。即ち閑毎に余の机に歸りてこれを讀む。內村氏は此書以後此の如く纒りたる思想を發表したる事なし。これ彼が基本的立脚點にして亦一般基督敎徒の再三

再四研究せざる可からざる思想なり。余は此書に於て人類の聯帶責任を學び又贖罪の教理を明白になす事を得たり。余は此書と此書の著者とに對し眞に深き感謝の祈なき事能はず。『學鐙』を讀む。高安月郊と云へる人の文學者の類別中々面白し。他日參考の料に其要領を拔萃し置く可し（略す）。

夕方高木氏來診。其時洗滌の際取扱荒かりし由にて、直ちに腦にひゞき急に腦貧血を起され、一時昏睡狀態に陷られて余は心配したりしが、幸にして暫時の後大に囘復に向はれ八時頃夕食を喫せられし後は熟睡に入られたれば、今日の日記は其床邊にて書きたるなり。雨は尙休まず。檐寛を傳ふ軒滴の聲點々滴々として夜の寂寞を深む。余は此の測知す可らざる宇宙の一角にあり。地球の胸によりて玆に日記を誌しつゝあるなり。此日誌と宇宙と何の與かりをか保てる。實に「解け難きは我等を包む聲や」。

四月二十二日。水曜日。雨は止みたれども風は終日烈しく吹きぬ。昨夜より今朝にかけて二度小ならざる地震あり。朝、馬太傳の中 Christ の temj tation を讀む。暇ある每に『求安錄』を繙く。實は Myer を讀了したれば “Anticipation” を讀まんとしたれども、かゝる書は余が今の境遇にふさはしからず。余は他の書を選びて之れを繙讀す可し。

終日常に床邊にあり。母上の御病氣益々快方なり。母上の爲めに逍遙氏の『菊と桐』を讀む。午後喜寛氏來る。彼は一個の專門家なり。而して他なし。夕食後河野氏を訪ふ。今日は彼女も病大によき方なりしかば、八時近くまでしんみりと語りぬ。彼女は實に不思議なる程卓越の見を有す。彼女男女の關係を謂つて曰く「余書を孝太に送りて云へり。汝已に丁年を過ぐ。女子、妻等に關する觀念の胸中に浮ぶは元より當然なり。されども願くは三十歲に至らん迄は妻を選ぶ事勿れ。三十歲に至りて、汝の爲すべき事業の確定せられしに到りて始めて之を選べ。是れに至るの間苟も處女をして汝の故に涙を流さしむる可からず。（「處女をして汝の爲めに涙を流さしむ可らず」是れ余の修裝的文字にあらざるなり。彼女はまことに此く云ひぬ。余は彼女が如何に苦痛多き涙を流したるかを推知するに難からず。而して、彼女の觀念の、單に學究的の道德說より來らざりしを見るべし。）又兒女に諭して曰く、「汝等汝等の品性に負き人格を無にして車夫馬丁と墻を踰えて相通ぜんも余如

何ともする事能はず。余は汝等を夫妻たらしむべし。唯再び余の面を見ん事を期する勿れ。必ず基督教徒と相婚せよ」と。是れ今の母の多く言ひ及ばざる所なり。

彼女を辭して鈴木信太郎氏を訪ふ。彼は明後日を以て支那に向はんとすればなり。松平恒雄氏亦あり。談は「おべつかの必要」、「現今外交界の狀況」等ありし。何故に人は plain words を語り得ざるや。何故に然り然り、否々と云ひ得ざるや。人生の不調和は此摸稜の上にある事睹るが如きにあらずや。

父上明朝九時半御歸京の電報あり。英一兄如何にあるや。彼の悲涙を思ふ。彼の苦痛を思ふ。彼の余を思へるを思ふ。嗚呼堪へ難きかな。

余は眞に心の中より余が家族の中何者か一人、余と共に祈を共にするものあらん事を願ふ。余は嘗て人の力の賴む可からざるを知れり。而して余も然り。然れども若し此の地の上にありて、一人の人の然かも骨肉の人の余と信仰を同うし祈を同うする事あらば、余の感謝は幾何なるべきぞ。主よ、僕の願の上に祝福を垂れさせ給へ。余自身に取りての唯一の祈禱は彼の事なり。若し彼の事にして受け入れられなば余は云ふ可からざる感謝に在らん。主の余を用ひ給ふに先だち必ず此一事を許し給はん事を祈る。余は汝の道に入りてより未だ嘗て肉體の傷けられたる事によりて心靈の敏活となりし經驗を有せず。余は此大なる經驗を有せん事を祈り願ふ。

四月二十三日。木曜日。晴天。此日は朝父上の歸京せらるべき日なれば新橋に到る。無恙に着京せられたり。午前彼是の事にて消す。午後より喜寛氏より借受けたる Shakespeare の "Midsummer Night's Dream" を讀む。未だ半にだに到らざれば其全豹を窺ひ難し。

午後星野勇三來る。彼も亦渡米の志ありて出京したるなれども充分の效を奏せずとて困却し居りたり。夕刻迄彼と語りしが、彼も亦社會の降服者となりしものゝ如し。何故に靑年はかく早く老ゆるや。夢みる可し。夢みる可し、余は尙余の春夢より覺めざるべし。新渡戸先生が嘗て「夢みよ」とてよく我等に說きし事は今尙耳底にあり。

鈴木田一三氏死去すとの飛報杉田一貫氏より來る。余は只驚愕の眼を見張るのみなりき。彼眞に眠れるか。清藩の一少年として字に巧みに性頗る温順なりしは彼なりき。竹馬の友一人を亡ひぬ。夜「求安録」を讀む。余は兄に手紙を致さゞる可からず。

四月二十四日。金曜日。快晴。朝案地家屋と農場との二件の事を處理す。夫れより "Midsummer Night's Dream" を讀む。奇構天外より落つるものと云ふ可きか。此 drama 彼が original なくして構案せしものなりと傳へらるゝ所なり。Hamlet も Othello も共に嘗てありし無趣味なる物語より轉化したるものにして、變鉛爲金の手腕なりしなり。獨り此 drama は此の如き求源なしとなり。尚讀了せず。余の此 drama を讀みし故は今明日外國語學校に催さる可き講演會に於て演ぜらるゝが故なり。

午後しま其他の御相手となりて cards をなす。幾年振りならん。四時頃より新渡戸氏を訪ふ。洋行の件等に關し妻君と相談する所あり。午後より野村才二氏來りて此夜は共に語る。余が日記かく机上に八重櫻とこごめ櫻とあり。是れ春の殿となるものなるべし。打ち見やるに何とはなき感慨を牽く。星野、看護婦家を去れり。

四月二十五日。土曜日。晴天。午後より稍〻曇る。

余は平凡の生涯を厭ふ。然かも余の生涯は昨日今日全く平凡の境に陷れり。而して憐む可き余はこれを制せんとする力源すら平凡化せられたり。感激なき生活。是れ如何に意味なきものぞ。木と石との如く生くる人は憐む可き哉。朝直良氏來る。壬生馬と共に上野博物館に古畫古銅の展覽會を見る。古銅の表に碧綠の銹花宛ら匂ふばかりなるものあり。恰も詩想裕かなる高雅の歌を論ずるが如し。畫に至りては探幽と光琳、其一其他の傑作を集めたり。探幽と光琳とは共に一派の鼻祖、其高邁自ら往くの氣概、刺として紙外に溢れ、畫面の後には稜々たる向上の頸骨を忍ばしむ。共に詩趣こぼるゝが如き中に、余は光琳の奔放自由なるを愛す。彼は classic なり。此は romantic なり。家に歸りて午後 Shakespeare を讀む。未だ讀了せざりしかども一篇の用意は知る事を得たり。此日の夜は外國語學校に講演會あるべき日なり。野村氏老母と共に高等商業學校に到る。父上、山本の二人既に來り居れり。彼等の skill には一驚を喫するの外なし。壬生馬も亦伊語の講演に Maria に扮したり。

四月二十六日。 日曜日。朝曇り午後雨（然かも小氣味よき）夜になりては風をさへ催しぬ。朝内村氏の「求安錄」を讀む。精讀するに隨つて彼の缺點は見出さる可しと雖も然かも不動の信念は人をして彼の胸を慕はしむべきなり。然かも平凡なる余は此に多くの所得なし。

足助君より手紙を得ぬ。彼は尙疑惑の中にあり。而して余は睡れる如く疑惑を思ふだにせず。恥づべきかな。朝信原氏來られ後平島周助、木藤友之助等の人々來る。共に中食す。後又直ちに藤居氏來る。

嗚呼平凡なる生活には日誌に記す可き事なし。愚者よ、神の前に何の首をか擡げんとはする。

四月二十七日。 月曜日。晴天。

"A good moral my lord; it is not enough to speak, but to speak true."

"…………Trust me, sweet,
Out of this silence yet I pick'd a welcome;
And in the modesty of fearful duty
I read as much as from the rattling tongue
Of saucy and audacious eloquence.
Love, therefore, and tongue-tied simplicity
In least speak most, to my capacity".

(Extracted from Shakespeare's "A Midsummer Night's Dream")

朝 "A Midsummer Night's Dream" を讀み終る。讀過の際感じ得たる一二句を上に記せり。此劇は沙翁の wit を表はすものにして、其眞面目なる觀念の表出せられたるよりは、驚異すべき奇警なる着意の著しく認めらるゝを特徵とす可し。彼の傑作にも苦心の作にもあらざるべけれども、輕妙なる筆致は亦他に得難き趣なきにあらず。又彼が sentimentalism を表出せ

りとも云ふべき "Measure for Measure" を讀まんとしたれども、そは遂に失敗に終れり。

晝少し前より愛子來り晝少し過ぐる頃までありき。余は愛子と相語らんがために何事をもなさず。今日は房子を抱きて彼女に菓子と茶とを與へ居たるに、自然より發露する彼女の行爲の中に堪ゆ可らざる天來の滑稽ありて余は思はず噴飯失笑輾轉してこれを止むる事能はざりき。彼女は驚異の眼を瞠りて余の狂態を怪しむもの丶如し。如何なれば嬰兒の面に此天來の驕樂あるや。彼女と相居る間余の傍には地球以外の他の世界ありて坐せるを眞面目に感得せざる能はず。Wordsworth の詩意の今更ながら新しく鮮しきを覺ゆ。

兄より手紙來る。Myer 及び Adams の註文なりしかば直ちに中西屋に問合せたれどもなしとの事なりき。書籍の不揃なる驚く可きのみ。

此夜六時新渡戸夫人神戸に向ひ出發との事なりしかば是れを新橋停車場に送る。久し振りにて時任靜一君に面會す。彼は依然たる入道なり。Miss Real は、風彩余と相似たり鹿兒島人は皆此の如きかと云ひつ丶笑ひ居れり。

夜 Bernet 及び "Common Sense of Education" なる書を好本督氏の譯されたるを讀み大體に通ず。平凡なる教育主義にあらずや。小兒を教育するに尙一層奔放の趣をなさしむる事能はざる可きか。余はルーソー氏に習はんとにはあらざれども、教育の第一義は其各個の人格を發揮するにありと思惟す。何人も各自の天職を有するが如く各自の特質即ち人格を有せり。而して自己の天職を探出し能はざる人士の、自己も社會も何の利益をだに受けざるが如く、自己の特質を發揮し得ざるものは又社會に於ける無用のものたるに終らざらんや。教育の大主眼は即ち此衷なる人をして外に現はしむるにあり。枉ぐ可からざるは人の本性なり。若し人の本性をだに發揮する事を許さば、彼は奴隷の境遇にありと雖も尙安じて此業を取る事を得るなり。眞正の自由とは個人性の發揮にあり。眞に自由を許容する人士は先づ他人の人格を尊敬せざる可からず。眞に自由を許容する國家は先づ國民の人格を發揮せざる可からず。自餘の凡ては枝葉なり。今日の所謂自由の意義なるもの何ぞ本末を轉倒せるの甚しきや。社會上の自由或は可ならん。政治上の自由更に可ならん。學術上の自由更に可ならん。宗教上の自

由更に可ならん。然かも教育上の自由最も可なるには若かざるなり。educatian とは Latin の Educatus より來れるものにして e とは out, duca とは lead なり。即ち個人的自覺なり。宗教的自覺も、社會的自覺も、政治的自覺も共に此基礎の上に立てられて始めて、意義あり統一あるものとならずんばあらず。如何なる便宜の存在の必要の爲めにも個人性を沒了するが如き不德ある可からず、是れ誠に自由の根柢を破壞するものなり。我等は個人的自由を破壞せんとするものとは極力相戰はざる可からず。而して日本の今日に於ける教育の如く個人性の無視蹂躙をなせる教育は未だ嘗てこれあらざる所なり。寄宿舍に於ける一室多人數の制度の如き明かに此傾向を表出して餘蘊なし。政府は長短殆ど相等しき一連の chopping machine を製造して、煙草を刻むが如くに社會百般の事業を處理せしめんとするなり。而して其活動力の愈〻沈滯するを見ては、尙今の學生の無氣力無節操を責めて止まざるなり。嗚呼當今の學生誠に責を引く可き所多し。然かも維新以來僅かに三四十年、明治初年の學生の爾く元氣ありて、今日の學生の頽然として相率ゐて無氣力なる所以の原因は將た那邊に潛めりとするぞ。呪ふべきは人の子を賊する村夫子輩なる哉。彼は國民を害ふのみならず人其者を害ふものなり。畏懼するに餘れる汝の汚瀆の罪を神の眼より逃れて何處の蔭にか隱れ場を得んとはするぞ。

四月二十八日。火曜日。晴れたれども寒し。兄より手紙ありて佐藤校長（此頃東京にある）を訪問すべき必要起りしかば、朝これを下二番町に訪ふ。何故に余は彼に余の親愛の情を拂ふ事能はざるや。彼は人にあらず。他人によりて人とせしめられつゝあるものなり。嗚呼されども此世何ぞ此の如き人多き。人なるが故に此世に働くにあらずして働かざる可からざるが故に人の如くするもの何ぞ世に多き。汝横目縱鼻の人と生る。汝唯人たらん事を願へよ、而して祈れよ。

家に歸りて余の舊稿を整理し且つ壬生馬の「夏藻錄」を讀む。明治三十二年彼が家人と共に仙臺松島の方に遊べるの記なり。行文多く平凡なれども時に閃光の如く彼の詩才の熟して現はるゝを見る。彼には量は少なれども純粹なる詩的天才あり。彼の文や詩には確かに新しき聲を聞き得るなり。余は彼が此長所を研礪して將來日本の機運を貫く可き藝術の潮流に會する一支流たらん事を望む。午後直良氏來り自轉車の稽古をなさずやとの事にて試む。僅かに乘り得べし。夜 "Quo Vadis" を

讀む。余は此書を手にせざりし事甚だ永かりき。在營の時少しく繙讀を試みしと雖も意の如くなる能はず。今これを手にして再び興趣の燃ゆるが如く念頭に逼るを覺えて十一時迄讀み續けぬ。是れ確かに稱するに堪へたる書なり。若し "Les Misérable" が一面の意味に於て聖書の註釋なれば、此書は亦一面の意味に於て聖書の辯護なり。Sienkiewicz は Hugo の如く論ぜずと雖も、說くに於ては甚だ詳なり。唯文章に於ては Hugo 遙かに高しと云はざる可らず。Sienkiewicz の文は最も近世的傾向を有し、これを日本の作者に比せば蘆花甚だ似たらずやと思はしむ。Tolstoy の文正に二人者の中間にあらんか。

四月二十九日。水曜日。朝來春雨蕭殺。寒氣强し。今年も又甚だ不順と云はざる可からず。余は此日大書して感謝せざる可からざる一事を有す。余が迷想の桎梏より逃れ出づべき端緖を得たる事なり。余の宗教に對する觀念は少しく以前より甚だ瞑想的となりぬ。多くの疑惑は余と宗教との間を冷かならしめたり。余はこれを思ふ時苦痛の念に堪へざりき。されども苦痛は遂に余の此傾向を回轉せしむる事能はず。余は永く冷かなる學者の如く哀れなる人を見き。余は自ら論じ、自ら辯じ、自ら疑ひ、自ら解き、宗教に對する余の知識は一段の統一を來せるが如きを覺えぬ。嗚呼然かも是れ何者ぞや。智慧の樹は今も樂園に生じて主よ、爾のものなり。未だ全く樂園に入り能はざるもの、智慧の果を貪り食はんとせし結果はアダムとイブとの夫れに等しかりき。かくて余は樂園を追はれて外の暗黑に投げられぬ。余の所謂外の暗黑とは「平凡の生活」なり。目的なき生活なり。感激なき生活なり。笑と淚とのあらざる生活なり。已れの爲めにもあらず又人の爲めにもあらざる生活なり。然り、祈禱なき生活なり。主よ、嘗て汝にありしものにして祈禱なき生活ほど苦しきものはなし。余は愈〻御手の蔭より離れぬ。されども爾は尙此放蕩なる末子を捨て給はざりしか。

今夜雨蕭々として世は將に沈默の中心にあり。余は "Quo Vadis" を讀みつゝ一時の鳴るを聞きぬ。今は寢ぬべき時なりと思ひて廊下に出でし時抗す可からざる力ありて余を藏の前に導きたれば余は其處の階の上に坐しぬ。首は自ら垂れて淚は云ひ知らざる悔恨と共に胸より流れ出でたり。正に大能の御手の余を捕へ給ひし時なりき。余は畏怖に震ひたれども、云ふ可からざる懷しさもて其手のなし給ふ儘に任せぬ。主余に祈禱するの力を給ひき。

感謝すとは人の餘りに云ひ慣れたる言葉なり。余は云ふべき所を知らず。願くば力を與へ給へ。僕をして再び祈禱より退く事なからしめ給へ。常に眼を覺し、主の來り訪ひ給ふ時直ちに應じて立つを得せしめ給へ。若し余此世に何事をもなす事能はざらば、我が友のために義人の祈禱をなす事を許し給へ。勇氣あらしめ給へ。常に主に就て思ひめぐらす事を得せしめ給へ。赤兒の如き信仰を授け給へ。

此の朝 G. H. Lewes の "The Story of Goethe's Life" と云へる書を讀む。是れは以前より藏したれども未だ讀むに及ばざりし書なり。所載の記事全く高木氏のギョテ傳と異る事なし。氏の書は殆んど此書より來れるなり。寧ろ氏は殆ど此書を譯せしなり。Goethe は憐むべき生涯を撰べり。彼の生涯の great life なりし事は否む可からざるも、彼自らが自白せる如く憐むべき生涯なりし事も亦否む可からざらん。彼の凡ての規模大なるが故に人は多く彼の不幸を知る能はず。然かも彼の生涯を其儘に小となし見よ。是れ余等が學ぶべくして、慕ふ可き生涯にあらず。

午後より "Quo Vadis" を讀む。三時頃より兄の爲めに神田に到りて Myer を求むれども得ず。已むを得ず其儘歸る。途中河野氏を綸病院に訪ひて語る。彼女は近來著しく其品性を高めぬ。余は彼女に於て强き慰藉と奬勵とを得たり。今夜余に來りし大なる歡喜は確かに彼女の余に投げし眼與りて力あり。余は彼女を尊敬せざるを得ず。夜十時迄母上の床邊に侍し、後室に歸りて "Quo Vadis" を云ふ可からざる興味もて讀みぬ。

四月三十日。 木曜日。『或處に佛法歸依の老爺あり。參寺の道すがら必ず魚屋の前を過りしが、漁人常に俎上に鰻を載せてこれを割きつゝあり。老爺憐憫の情に堪へず、高價を以て總ての鰻を購ひ寺畔の古池に齎し、橋上に立ちて曰く「わしや御前等を今のがすからもう再び漁師の手にかゝるなよ」と卽ち鰻を放ちて水に入らしむ。此の如くする事日々にして一度も缺けたる事なし、漁人ために勞せずして巨利を博す。一日沈思掌を搏ちて曰く「我、猶巨利を獲るの法あり」と。翌日老爺の來るを待ち己れの赤兒を俎上に置き正に庖丁を取つてこれに加ふるの狀をなす。老爺喫驚これに赴き、漁人が薄利の結果日日の糊口に窮して玆に出でたるを聞き、財囊を傾け盡して其赤兒を購ひ去りぬ。漁人目送して舌を出す事三寸、策正に成れ

りとなす。老爺毎日の如く古池橋上に到り赤兒を擁して、これに謂つて曰く「わしや御前を今のがすから再び兩親の手にかかるなよ」と。忽ち一揮すれば赤兒濁然として水中にあり』(今朝母上の爲し給へる小話)。

曇天時に雨。朝 Freeman の "General Sketch of European History" を讀み始む。今日讀みたる所には格別眼を留むべき卓說もなし。而して氏は歷史の意義を說明して

"By history in the highest sense we understand the history of those nations which have really influenced one another, so that their whole story, from the beginning to our own time, forms one tale, of which, if we wholly leave out any part, we cannot rightly understand what follows it."

と云ひ、而して此の如き資格を有するものは獨り Europe と其 colonies とのみなりと云へり。彼は Semitic race を僅かに Aryan と同格に置きしのみにして Turanian 人種の如きに至りては全くこれを度外視せり。是れ確かに彼が東洋的知識の缺乏をなせるものにあらずや。余は Turanian 人種の爾く才能ある人種ならざるを信ずと雖も、其是れあるが爲めに亞細亞を度外視するに至りては確かに史家の僻見なりと云はざる可からず。Platon を說くならば釋迦を說かざる可からず。Socratesを說くならば孔子を說かざる可からず。是れ決して東洋人的不公平の陷りたるものにあらざる事を余は信ずるなり。

母上の御病氣益〻快方なり。此頃は既に床上に起き直り給ふ事も自在となり給へり。上に記し置きたる童話は余の少年なりし時、常に余に語り給ひし所、今日偶然其話の繰返されしによりて此小話の記憶頭を衝いて來りしと共に、余が年少時の回想は宛ら幻の如く眼を過りぬ。

午後 "Quo Vadis" を讀みつゝありしに喜寛氏來り母上の處にて語る。時間は刻むが如く余の頭上を過ぎゆくなり。氏の歸りし後再び其書を讀む。余は幾度か書を閉ぢて美はしき白日の夢の跡深く分け入りて、人心美妙の琴線に觸るゝを禁じ能はざりき。

夜健助氏を訪うて會談九時過ぎに至る。氏は余の relatives 中最も余の意に同情し得る heart を有するが如し。然かも遂に

是れ路上の人なり。嗚呼、「我れ笛吹けども汝踊らず」余は余の道を獨り歩まざる可からず。否、されども神余と共にゐまさん。神の道を歩む如く見ゆるものは多し。然かも其内容を探れば、其根柢には皆「我」なるものありて潜めるなり。彼等の正義は彼等の爲めなり。彼等の善良なる行爲は彼等が最終の comfort のためなり。「若し我が兄弟我が骨肉のためならんには地獄に投げ入れらるゝも亦我が望なり」と云へる Paul の感激を余も得ん事を祈る。主よ、此弱きものを用ひ給へ。

歸來十一時半まで"Quo Vadis"を讀みて就寢す。

マグダレナのマリヤ

饗宴の道すがらなる列を離れキリスト立てるシモンの家の階を上らんとするを追ひて戀夫マリヤを牽き止むる圖に題す。

D. G. Rossetti

「なにごとぞ。さうびを
なが　ひんづら　より　すてゝ
なが　すべて　さうびなれ――
さうびの　はなわなれ　くちびるも　ほゝも
いな　こゝ　ならず
われらが　もとむるは　かしこ　うたげのむしろ
ひと　たがひに　くちづけして　ゐるをみずや
かしこに　ゆかなん
こひのひ　あえかに　ふたり　ゐよりて
よるのあまき　さゝやきに　かたぶかんを
いかなれば

一九〇三年

いとしきものよ
なほ　おろかしき　まぼろしに　あこがるゝや
いな　わが　くちづけぞ
ながきびすこのきざはし　より　かへれ」
「オヽ　そこはなて　はなちたまへ
みずや　こふるにひむこの　おもて　われをひくを
そのあしは　わがくちづけ　わがかみ　わがなみだを
けふぞもとむる――けふぞもとむるに
たれか　しるらん　けふしいなば
ゴルゴタの　をかのへ
ちにまみれたる　かれのひかがみ　いだくべき
われの　さだめ
いまぞ　かれ　われを
まつに
よぶに
いつくしむに
はなちゆかしめ　たまへな」

五月一日。金曜日。朝来雨風に和して到る。此の如き時人は屢〻眞正なる自己を確視す。確視する眼は必ず熱す。人何ぞ眼を外にして笑多きや。何ぞ眼を内にして涙多きや。

朝 Freeman の "General History" を讀む。多く得る處なかりしが中に、一つ羅馬が歐洲文明の中心となれりと云へるは、他の史家が希臘を以て夫れと信ぜるものあるに比して多少の差あり。是れやがて文明史家と政治史家との差異を示すものにあらずや。Freeman は決して單純なる政治史家とは稱すべからざらんも、然かも亦卓越なる文明史家と稱し得可からざるが如し。是れを形而下に見るに、政治法律軍隊治民の法等に於て Rome は確かに Greek に一贏する所あり。Greek の材能と天賦とを以てして邦土僅かにバルカン半島西部、亞細亞、亞弗利加北岸に過ぎる能はざりしは (Alexander 大王は寧ろ希臘本土の人として論ず可からず) 即ち彼等の政治的才能に疎なりしを示さずんばあらず。然かも是れ世界未曾有の政治的才能を有せし Rome に比してかく云ふのみ。Athens と Sparta が標榜せし政治的並に社會的組織は確かに後代の史家を驚倒するものあり。獨創的なるは希臘人の一特徴なりとすれば、政治史的才能に於て豈獨り此事なからんや。況んや羅馬の政治組織や、是れを希臘に學びし所甚だ多かりしに於てをや。

形而上の事に至りては羅馬は希臘に對しては殆んど發言の權を有せざるなり。其宗教は全く希臘によりて洗禮せられしもの、其藝術は全く希臘によりて按手せられしもの、希臘に於ける authority の許容なしには彼等の思想は想像の翼を驅る事能はざりしなり。然かも人或は云はん。然り、天賦に於ては Rome 容易に希臘の上にある事能はず、唯時勢は羅馬をして歐洲文明の中心たる僥倖を得せしめたり。政治的社會的方面に於て Rome は空前絶後の發達をなしたると共に、其末代に至りては歐洲文明の根柢を築き成したる基督教の侵入ありて、形而上にありても希臘が思ひ及ばざりし高潮に達したればなりと。是れ洵に一理ある語なり。眞に羅馬は僥倖の兒と云はざる可らず。希臘の哲學的知識を吸收したる羅馬人は、基督教の東漸に對して又之れを咀嚼し得たり。若し羅馬に希臘哲學の先入なかりしならば、基督教は羅馬に於て一層甚だしき墮落迷信に陷りしならん。要之羅馬と希臘とは之れを例へば希臘は植物又は動物の如し。その生ずるや自然、その生くるや自然、彼等の文化には殆ど一個の逆行だにあらず。恰も草木の陽光の下に育成するが如く發達したり。是れ實に希臘の美處なり。彼等は到底自然の兒にして、彼等はよく彼等自身にて全きものたり得たりき。羅馬に至りては一個の健啖なる巨人の如し。

彼は空手にして一日も生存する事能はず。彼は何物をか捕へて之れを食し、其强大なる消化力を以て之れを消化し、以て其血肉を養はざるなり。羅馬は彼自身にしては全く價値なし。然かも若し彼の身邊に一片の肉の投ぜらるゝあれば、彼は忽ちにして全世界を濶步し得るなり。

午後より第四月分の家計の決算をなし、半日を以て漸く完成す。夜“Quo Vadis”を讀む。二日許り以前より母上の腹部に置きたる氷囊を除去せしに、今日に至りて病狀又少しく宜しからず。腹滿ちて嘔氣をさへ催さる。

五月二日。土曜日。朝曇りたれども後霽れ風は强かりき。午前は Freeman の“General History”を讀む。左程注意すべき點なし。此日午後より島津公邸に於て園遊會あり。父上用事の爲め不參せらる可きに就き、余に行けとの事なりしかば之れに到れり。蘆花氏が燕尾服着初めの夫れにはあらざれども、フロックコートに山高帽子を被りたる樣は自ら之れを憫笑するの外なかりき。到れば朝野の貴顯紳士淑女の面々今日を晴れと着飾りて、胡蝶の如く躑躅の間を彷徨せり。されども余は遂に(祝福すべきかな)かゝる社會の除外者となりぬ。余は立ちて凝視し而して事の假相なるを見たり。余は十二分の不快を以て小弟行郞と共に歸宅しぬ。余は所謂脫俗してかゝる社會の上にも一種の興味を有し得る能はざるを悲しむ。

此夜母上の御病氣益〻不良。半夜を床邊にあらんとしたれども、半日の立ち盡したる疲勞發し來りて止め難し。逍遙氏等の「近松の硏究」を讀みながら遂に假睡せしに、壬生來りて頻りに余の眠らん事を勸めしかば謝して床に就きぬ。

「若輩は徒事に趨り老者は地に赴くを見るならん」是れ Fox の語なりとぞ。

五月三日。日曜日。實に實に美はしき安息日なりき。余は我が札幌を思ふ。而して彼處なる敎會の前途の上に云ふ可からざる親愛の情を寄せざる能はず。願くは彼處なる聖地、地の汚れを受けざれ。

母上の御病氣尙全く本の如くに復せざりしかば、午前の半日は其床邊にありぬ。龍岡榮吉氏來り貟にくだらなき話の爲めに無益なる時間を費せり。余は此の如き時間の空費を最大なる損失と思ふ。余の切願する所は、無益なる交際、義理附合をなさゞらん事なり。人間義理附合などするの必要なしと余は思ふなり。

午後神田一橋に社會教育講話會あり。海老名氏の「Lessingの社會教育」と云へる題目あり。之れを聞かんがために到りぬ。聽衆場に滿ち村井知至、杉山重義、松村介石等の講話あり（彼處に人格の人を動かすものなく深識の人を導くものなかりき）しも海老名氏は病氣のために遂に來り得ずとの事にて余は失望して歸れり。内村氏亦聽衆の中にありしが、その入れる時と出づる時と聽衆は皆袖を引き目を側立てゝ「彼人を見よ」と云ひき。彼が面上には愈ゝ深想の相を顯しぬ。

余も去りて榊病院に河野氏を訪ひぬ。恰も Miss Read, 孝夫、信子氏あり。三人の歸後余は夫人の爲めに手紙の代筆などし少しく語りたる後辭し歸りぬ。

神よ、余は此に筆にするだに戰きに堪へざる事あり。余は余の謬れるを知る。余は暫く信子氏と相遇はざりき。而して今日偶彼女と遇ひて、余の心の中には嘗て彼女に對して經驗せざりし恐しき、されども甘き感情滿ちぬ。彼女の一瞥一語は余の心を躍らしむ。余は彼女の面前にありて一種深奥なる悲哀を感ず。彼女の凡ては余に美しく見ゆ。余は今に至る迄彼女を愛しき。されども今日は單に彼女を愛すてふ夫れにては余の心は不滿を感ずるなり。さらば余は彼女を戀せるなるか。叱！神よ、日記は爾が余に與へ給へる懺悔錄なり。余は此紙に對して余の感情をいつはり記す事能はず。故に今余敢ていつはらずして此事を記しぬ。嗚呼、神如何なれば人の子を試み給ふや。如何なれば血熱し易き余を捕へ給ひて苦き杯を與へ給ひしや。如何なれば常に御前に跪き祈りし夫れを顧み給はざるや。嗚呼、如何なれば余は乙女を戀ふるの心を以て、神の水の如く流るゝ正義を戀する事能はざるや。余の祭壇には多くの捧物なせる中に最大の一なりしは余が laura を捧げたる夫れなりき。而して余は神の供物を再び余のものたらしめんとするなり。汚瀆の罪何を以てかそゝがれんや。ヒソプも亦能はざるなり。苦痛、苦痛、苦痛。神よ、願くは再び彼女と相遇ふを許し給はざれ。願くは余の心に彼女を忘れしめ給へ。彼女の心に余を忘れしめ給へ。彼女に祝福あれ。彼女によき夫あれ。彼女によき子女あれ。而して彼女の天使の如き純潔何時までも地の榮たれ光たれ。直かれ。優しかれ。美しかれ。神よ、余の弱きを支へ給へ。余をして汝の卑きながら忠實なる僕たらしめ給へ。若輩は徒事に趨るもの多し。願くは余を其道より引き戾し給へ。余は彼女を戀せず。彼女は依然として余の愛らしき

妹なり。愚者よ何の涙ぞ。

この夜增田兄の飛信來りぬ。披き見て驚倒、なす所を知らず。彼は余が彼に送りし手紙を見て、我が愛子の病まざるを知り、余に書を送りて彼女その戀を捨てたりと云ふなり。余は此の如き語を彼に許す能はず。彼が毎時の失望苦衷は彼をして此失言あらしめしならん、然かも余は此の如き語を彼より聞かんよりは、余の愛妹の死を見ん事の如何によかるべきぞ。寧ろ彼の手親ら余を殺さん事の如何によかる可きぞ。愛子若し彼女の戀を捨てなば世には戀なるものある事なし。一つだにある事なし。余の心には憤なき能はざるなり。

嗚呼、地上の人一人だに余が眞愛を知らず。何の與りか余にあらんや。余が壬生馬も亦。

此夜島津家に箕埜博士の講義あり。何の與りか余にあらんや。歸途天殘月と星とを織り出せり。暗夜に低首して彼れや是れや胸を抉りて且つ搾るが如き悶禁じ難し。

壬生馬亦庭前の石に踞して首を垂れてありき。

五月四日。月曜日。晴天なりしかども風あり。夕方よりは空曇りて雨をさへ催しぬ。夜の景色殊に靜か。春雨と云ふものなるべし。雨は奇しき力を有せるものなり。驚くに堪へたるものなり。雨なき國人の乾笑と僞涙に滿てるも亦宜ならずや。

朝高山氏の「世界文明史」を讀み、十時半より新渡戸氏に到り Miss Read 及び孝夫を伴ひて山本に到り五月人形と牡丹とを見せしむ。晝、氏の家に歸り晝食の馳走となる。而して畫端書集を見る。Mrs. Nitobe の集めしもの中には古羅馬の風景名畫多數あり。見るに隨つて古香身を襲ふが如し。余は彼處に遊ばん事を欲す。又 "Quo Vadis" の畫端書あり。名手と云ふにあらざれども余が朝夕親みたる書の挿畫とて中々に趣深し。

信子君に貸しありし「用無遺稿」返りて其家にありぬ。彼は再び余が胸に歸りぬ。信子君は此書を非常なる興味を以て讀めりと云へり。彼女は此書を其手に取りしなり。彼女の眼は幾度か其頁の上に注がれしなり。彼女の胸は此青年詩人の高潮に躍りしなり。嗚呼さなり。而して何事ぞや…………

午後家にありて"Quo Vadis"を讀みつゝありしも何とはなき悲想胸に漲りて書に對する事能はず。想ひては祈り祈りては想ひ、涙は屢ゝ余が侶伴たらんとするなり。余が憂鬱期は來れるが如し。而して此期に會して增田兄の事と信子君の事とあり。余は益ゝ悲哀の淵深く行かざる能はず。余は暫く東京を離れ自然の懷の中に入らん事を希ふ。余の切に願ふ所は仙臺の兄の胸に到らん事なり。次に願ふ所は高雄山の奧深く一夜を過さん事なり。されど余が今の境遇は此二者を許さず。余は東京の塵埃にうめきて草蟲と共に虛に向つて泣かんよ。

八木來りぬ。彼は去年六月より那須軍馬補充部の書記となりしとて洋服など着て來れり。彼の妻は余の乳母なり。余の乳母は不貞淫靡の女なり。余は云ふ可からざる屈辱を感ず。余は多年相遇はざりし後彼女を見て懷しさに堪へず。殆んど母に對する愛を以て彼女を愛しき。而して彼女は余が此切情に酬ゆるに不品行を以てせり。余は是れを聞きし時殆んど惡魔の如き呪を彼女に致さんとせり。彼女は憐れなる程正直にして小心なる其夫を捨て去れるなり。爾後余は彼女の消息を聞かず。彼女の夫も亦彼女について語る事を厭ふに似たり。彼は今八歲なる末女を養ひ那須の片田舍に淋しき生活（彼は之れを呑氣な生活と云ふなり）を送りつゝあり。彼の面には悲慘なる人生苦鬪史の一頁を讀み得るなり。

夜"Quo Vadis"を讀みて例の如き涌興に打たる。壬生馬來り彼が鹿野山に遊べる時、採りし月草の押花となれるを見出でゝ作りし一篇の文を示す。幽遠月草の如し。彼も亦迷と悶の子。彼は尙多くを云はんとして然かも云ふ能はざるなり。夜雨の聲嘈々として終宵耳に滿つ。一時就寢。

五月五日。火曜日。曇天。午前高山氏の「世界文明史」を讀む。世界人民を區別して二種となし自然民族、人文民族と云ふ。先づ自然民族の如何なるものなるかを說き、自然民族も人文民族も畢竟程度の相違にして絕對的差別あるに非ずとなし、自然民族を區別しては、熱帶の民族、極帶の民族及び遊牧の民族となし、前二者の中一は生活狀態の餘りに容易なるがため、一は其餘りに困難なるが爲め遂に人文民族たるの發達をなす事能はず。反之遊牧民族にありては自然の桎梏前二者の如く甚だしからざるを以て、よく之れに打ち克ちて人文民族の班に入り得るの probability ありとなせり。考案の法平凡他の奇な

しと雖も參考の資となるものなきにあらず。

又彼が爲せる宗教心發達の解明の如きは決して深厚なる學者的言論とは稱す可からず。

彼が支那文化の不振なる所以を單に其擬古的なるにありとせしは、壬生馬の評せるが如く餘りに單純なる觀察なり。支那をしてかくなさしめしものは其一望漠々として際涯を知らざる平野と之れを圍める連山と是れなり。彼等の文化は希臘等の夫れと異れり。彼は西面して唯重疊限りなき山嶽を見るのみ。而して東面しては日本朝鮮の如き後進國を見たるのみ。彼等の文化の阻礙進むなきも亦宜ならずや。

午後より病床に侍して母上の爲めに「枯川隨筆」と云ふ書を讀む。又自轉車の練習をなす。

父上明後日を以て園田、高木氏等を招きて小宴をなさるゝ筈なり。是れが爲めに又多忙なる可し。夜眞狩別の地圖幷に其略歷を記す。

五月六日。水曜日。快晴なりしかども餘りに暖氣なりき。寒暖計は七十三度に迄昇れり。朝 Freeman の “General Sketch” を讀む。Greece の general sketch にして他の奇なし。余は此の如き歷史の書方に於ては尙一層深き楔點を捕ふるの必要なきかを思ふなり。

午後病床の邊にありて「枯川隨筆」及び「英國士道物語」を讀む。又母上の寢臺を直す。河野氏を訪ふ。余の心は近頃甚だ淋しくなれり。唯彼女を訪へる時のみ余は母の懷に歸りしが如き思に堪へざるなり。彼女に余の悲痛をすら投げん事は余の爲すまじき事なり。夜亦母上の爲めに書を讀む。

五月七日。木曜日。主は今日も我等に麗しきよき日を賜ひぬ。打ち見やる何處も等しく若葉の讃美梢頭の一葉每に囁かれて、春は實に囁きの時なり。余は今は每日の天候をそが如何なる姿にありとも決して呪はじと心定めぬ。爾るが如く余は四季の何れの時をも感謝して迎へ感謝を以て送らん事を欲するなり。されども神若し許し給はゞ余は秋を擇ばんかな。

今は明日の客をして快を得しめんが爲めに、父上は汲々として盡力し給ひしかば余も凡てを抛ちて之れに與りぬ。されば

此一日は云ふべき事なし。かくて此一日永遠に地球の表面より消えぬ。其間時に病床に侍して「英國士道物語」を讀み、又高山氏の文明史を讀む。Aryan 文明の中印度文明を說きたる條を讀む。此には新事實も得たる事多し。印度の classic の中讀まんと思ふ書も多し。

夕方井上良三君より増田兄の手紙送り來る。余の胸は躍れり。劇愁は忽ち表に充ち滿ちて書を讀む事能はざるに至れり。余は未だ其書を繙かざるなり。運命の黒き裳余に臨めるにあらざるか。余は彼の書を瞥見する時、黒影蔽へるが如きを覺えて之れを讀むを敢てし能はざるなり。明朝夙起余は人なき所に悲しみにあるものゝ涙を味はん。余は死を畏れず。死して畏れざるものなき能はざらん事を畏る。嗚呼、よく余の如く煩悶を己れの胸にのみ祕めてほゝゑみしものあるか。人は余が苦痛を知らず。今假令之れを人に云ふも人は余と情を同じくする事能はず。是れ人の謬れるにあらず。余の自ら人の如くする事能はざるによるのみ。余謬りの道に迷ひ入らざりしか。萬事休するにはあらざるか。休みぬるか。然らざるか。怖るべき明日の日よ。汝は余に死を宣言せんとするか。生を宣言せんとするか。神よ、我が牧者よ！

五月八日。金曜日。朝曇天。午後晴れたれども夜に至りては雨嘈然として至りぬ。夙起して余は獨り淸水谷公園に到りぬ。彼所は余の記憶より取り去り難き一個記念すべき聖處なり。余の東京生活は僅かに彼處に到る事によりて淸めらるゝなり。加之余が愛する祖母の病にありし時は、余は必ず夙朝彼處に到りて、余獨り天地に入りしの思ひをなし、且つ祈り且つ想ひ且つ苦しみ且つ笑ひし所なり。余は殊に増田兄と屢ゝ玆に遊びぬ。余は彼と玆に快談し永き時を費したりし事幾度なりしぞ。而して今又玆に來りて彼の畏ろしき飛信を展べて其血涙を見んとするなり。昨は卽ち笑つて談ぜしもの、今日は卽ち泣きて默す。昨の是か今の非か。人生誠に知る可からざるもの多し。

余は山頂の一椅に坐し、展きて讀み讀みて且つ展きぬ。余の骨は眞に髓までも戰きぬ。滿紙唯呪詛全く光明なし。彼は終宵寐る事なく此呪の文を草し、力盡きて休まず涙盡きて休まず、血盡くるに至りて初めて休みぬ。而して曰く「是れ余が筆に親む最後のものたらん」と。

休みぬ。休みぬ。余の懼れつゝ期待せし所は夢にあらずして眞の眞たりき。彼は彼の戀失はれたるにあらずして破られたりと堅く信ずるなり。而して彼は尙我を友と呼ぶなり。何等の悲慘ぞ。而して屈辱ぞ！

嗚呼、余の兄の爲めに計りてなせし所のものは是れ却て兄を陷る可き陷穽なりしか。彼女の健康を維持したるものは余なり。あらず、彼女の漸次に衰退し行く健康を若干なりとも拒止せんとせしものは余なり。常に涙の中にありし彼女を若干なりとも笑ましめんとしたるものは余なり。而して余の爲したる所は誤解を彼に釀さしめぬ。彼は殆んど救治す可からざる暗黑の眞底を求めて走り入らんとす。

神よ、余の爲したりし事謬れりしか。神よ、爾は常に正しく步めるものゝ上に祝福を賜ふ。然らば余の步みし所のものは正しからざりしか。神よ、人の子の愚かなるを憐み給へ。

余は愚かなりき。而かも此事を正しからずと信じて敢てしたるにはあらざるなり。信仰も亦退けらる。蛇の如く慧からざりし人の子の窮境を見よ。

「我が神、我が神、何ぞ我を捨て給ふや」何ぞ我を捨て給ふや。我が愛するものを捨て給ふや。黃金の如き純なる愛は僞りの愛と謬られぬ。世の靈たる可かりし高潔の靈魂は暗然として余等と關りあらざる可く呪詛の國に去りぬ。而して余、余は尙何者かの友なりとよ。何等の悲慘ぞ。而して屈辱ぞ！

あゝ余は凡てを彼女に告ぐ可きか、而して彼女を悲しましめ、苦しましめ、病ましめ、而して死なしむ可きか。是れ余に取りて最も容易なる業なり。而して是れ或は天の御旨にあらざるなきやを思ふ。彼は此飛信を聞く事によりて彼の積疑を解かん。彼女は愛を全うして再び覺めざる可く永遠の樂土に去り而して彼は彼の樂園を囘復せん。死は生に勝たん。愛は酬いられん。而して後余は一人を死に渡したりし相當の報酬を受くれば卽ち亦甚だよからずや。亦甚だよからずや。爾かすべきか。是れ最後に殺されたる手段の如し。余は彼の再び鄕土の土を蹈まんまで彼女をして地上にあらしめんと欲しき。而して其處に美しき涙を見なん事は余が唯一の希望にして且つ祈禱なりき。凡ては蹂躪せられたるか。余は彼等が失はれた戀の上に美しき

塔を築くを見て、世にあるものゝ中最も美なるものを得んとしたりき。而して余一人の愚の爲めに戀は終に破れ去りしが如し。愚者よ、愚者よ、汝は永久に呪はる可きものなるかな。汝は到る所に呪はる可きものなるかな。されども思へば是れ最も容易なる事にして然かも彼と彼女とに親切なる事にあらず。余には彼の誤解を解く可き手段の全く殘されざるか。千里相距りて僅かに筆頭に意を通ぜし余等の相思の情の或は誤解に陷り易きは見易きの理なり。余は彼の歸朝を待ちて彼に委曲を告ぐる所あらんか。而して彼其誤解を解かばよし、解かざれば即ち如何。是れ二重の苦痛なり。二の希望の此時に至りて破るるを見んよりは寧ろ一の希望を今の時に破るの勝れるなきか。余は惑ふ。余は眞に如何にすべきかを惑ふ。此誤解を彼に來らしめたる根本は誰なるや。誰の當らざる可からざる所なるや。そは余なり。余自身なり。彼は屢ゝ余に書を飛ばしぬ。而して書を飛さん事を需めぬ。余は永く永く然り實に永く應ぜざりき。而して其間家安君は逝きぬ。彼女は片信をだに送らざりき。是れ彼が失望の淵に陷り誤解の暗に入りし所以なり。而して余は實に彼に誤解を來らしめたる第一人なり。余は一人の有爲なる青年を殺したるもの、心裂くるが如し。されども彼も亦余の心を恕するに或者を有せざるか。余は彼が之を有せん事を祈る。余は嘗て彼に望あれと云ひ送りぬ。余は凡てを舊の春に囘復せん事を誓ひぬ。而して見よ、凡ては舊の冬なり。春は來らず。余は何の事を以て彼に報じ得るや。余が時に彼に送る可き紙に對して筆秉りし時、彼の健康を問ひ余が健康を語り而して進んで更に何事をか書かんとして後進まざるに至り涙を飮みて、紙を破り潸然たりし事幾度なりしかを知るや。あゝ是れ愚人の行爲のみ。今にして思へば、又傍にして之れを見れば、零細の章なりとも余のものは是れを集めて彼に致すの勝れるを知らざるにあらず。而して何が故に然かせざりし。只恨む、人の恨只誠に此の如きものありしのみ。若し彼にして、余が彼に書を送るに反して送らざりし衷情の眞を知らば、彼は或は余の愚を憐れむ可きか。

若し主の御心ならば、彼が余に尙一片の信を與へん事を祈る。彼女を病ましめて死せしむるは易し。彼をして當面の誤解を解かしむるは易し。而かも是れ余の敢て選ぶ可き最良の道か。あゝ、余は知らず。

五月九日。土曜日。曇天。客のありし日。一日千四百分の空しく永遠に向つて飛び去りし日。余のなやみを隱して終日を

笑顏造りし日。僞善の日!

五月十日。日曜日。快晴。朝河野氏と牛込教會に福田丈二氏の說敎を聞く。無意義。午後彼女の運動の爲めに不忍池畔に到る。余は彼女が此に至る迄健康を回復せしを感謝す。

此夜瀨川末より手紙あり彼女の言亦肺肝を突く。

「…………うれしいやらかなしいやらうれしなみだが。でましたよ。あゝ先生は如何此の日の長いの。たゞかなしく。月日を送つては御出でですか先生には。さぞさぞさむしい事と日夜思ひ出して居ります。先生には御身を御大切になさる樣祈りて居ります。…………………先生には日夜私等の事を思ひ出さぬ事は御座いませんで。ひまが。けしてこひしいと思ひなさらないで被下さい。どうぞどうぞねがいます。…………(此間に彼女余の夢を見たりと心切に書きて)先生ほんとうに札幌に御かへりになりますか。先生私うれしくてたまりません。

先生私七八歲の頃より父母に病にかゝられ一二年病氣でねられ私二人は云ふに云はれぬ艱難致しました。我(或?)時はもらひに出た時も御座いますそして。やどる所もなくてほんとうにこまりました。先生そして私等は貧しき家に生れて。さいほうにも行かれずそれに母がさいほうできず、どうしたらばよかろうかと考へてないてばかり居りますけれども之れもやはり神樣が私しに被下さいましたたまものだと思ひ居ります。…………」

此淸高の民を有つ日本は祝福す可きかな。余は憐れむ可きかな。

書に親む可き力なく物思ふ可き氣さへ失せぬ。

早夜衾を被りて臥す。頭痛堪へ難し。今日又余は彼女に遇ひぬ。然り彼女と共に上野を歩みぬ。余は彼女に遇はざらん事を希ふ。余の頭は今克く其戰に堪へず。

五月十一日。月曜日。快晴、朝佐藤校長を訪ひ、又 Freeman を讀み、兄に致す可き書を書く。余は彼に余の懷ける總てを披瀝しぬ。余の思の神に隱れ能はざるが如く彼の前には隱し能はず。彼は余の愚を哂はん。然かも彼は又余の愚と共にあ

りて泣き得る唯一人なり。彼の懐は常に余に暖かなるべし。

午後河野氏に到り彼女の爲めに代筆をなす。四時より松平恒雄氏の送別會に列す。八時半頃獨り歸途につく。月霞みて打ち開きたる田の畦には蛙聲嘈々として耳に滿つ。所思油然面を掩ふて泣きぬ。

五月十二日。火曜日。十二時近く突然兄上京して來訪す。好來。驚喜。歡笑。慰藉は來りぬ。神は感謝すべきかな。夜亦彼と共に佐藤校長を訪ふ。如何にすべき。愚者よ。

五月十三日。水曜日。曇天。朝家にありて長く怠りし昨日迄の日記を認め、夫れより Freeman を讀まんと試みたれども、心の中には物滿ちて遂に成功する能はず。止むを得ず Rossetti にても繙かんものと、そを取り出して "Rose Mary" を讀む。而かも是れにも多くの興味を感ずる能はず。徒らに書には向へども心は全く他にありて、他の事を思ひめぐらすなり。

心病めるものには地上の何物も慰藉たらず。而して天上の總ては畏怖を齎らすなり。空を仰いで戰き地に俯して泣く。此の如きもの人の子の運命にあらずや。神よ。我が牧者よ、願くは芥子粒の如き信を賜へ。「人の子來らん時信を世に見んや」と云ひ給はざれ。世は尙信を得んとて悶えつゝあり。悶えつゝあり。

昨日兄に會ひたる時、兄は余を勵まして多々益々辨ぜよと云ひぬ。余は實に爾くなさん事を希ふ。されども執着深き我が心は遂に此の如くなること能はず。嗚呼余が心の中に愛なからましかば!

愛なるものあり我が心を攪亂して苦しましめ、悶えしめ、病ましめ、悲しましめ、而して殆んど死なしめんとす。而して余が心は遂に愛を放つ事能はず。却て堅くこれを抱く。基督敎の paradox は玆より始るなり。感謝す可き paradox よ。我が骨を燒かるゝとも基督の愛によりて余の愛よく離れじ。

"Look to yon pure heaven
Smiling beyond Thee:
Rest not content in thy

Darkness—a clod!"

午後余は淋しさに堪へずして榊病院に河野氏を訪ひぬ。此日彼女の病氣は寧ろ快方にあらざりしに拘らず、余は余の若さのあまり、長く彼女と涙もて相語りぬ。彼女の心も共に熱しぬ。彼女の堅信は余を戰かし余を勵ましむ。余には今彼女は余の必要物となれり。余は數日にして一日彼女を訪はざれば、余の心は空虛を感ずるに至りぬ。彼女の境遇は實に憐むべきものなり。余は如何にかして些かなりとも彼女を平安の中に居らしめん事を願ふ。夕方まで語りて家に歸る。

母上に「思出の記」を讀みてあぐ。夜"Quo Vadis"を讀む。

彼、彼女、此二人は余が心の隅より隅までを領し終りぬ。念々の思此に到りて余の胸は堅く閉さる。

彼如何にせる。彼如何になやめる。彼病みて今如何にかある。飛信尚往きて歸るに要する日一閱月。あゝ唯祈あるのみ。

主よ、祈の生涯をなさしめ給へ。

五月十四日。木曜日。晴天。余は此日大なる事を心に誓ひぬ。而してこれを破りぬ。増田兄に今日こそ手紙を書かんとしたりしなり。而して爾かせざりしなり。余は何物にか捕へられて増田兄に對して自由の行動をなし能はざるが如し。彼の瘦容、彼の寂寥、彼の悲涙、悉く見るが如く余が眼に浮ぶに獨り是れがために余の爲し得る凡てを爲す能はざるは何ぞや。余は遂に彼を殺す可き運命の下にあるか。彼は遂に余を死なしむべき運命の下にあるか。

神は我等の間を悲哀の緒もて結び付け給ひぬ。されども全く結び付けられざる夫れに比しては如何に宜きぞや。彼と余とは悲哀の福音を味ひ知りぬ。世の人の多くは戀を青春一時の痴夢の如く云ひなす間に、我等は其中に恒久の生命ありて幾度か散れども幾度か開きて停む事なき唯一の花なるを知りぬ。此覺悟の何ぞ尊き。

されども何故に余は彼を殺すの運命の下にあらざる可からざるか。唯余の弱行かくの如きに至らしめしか。主の御旨か。神の御手か。

午前は勉強して Freeman's "General Sketch of European History" を讀みぬ。此日は B. C. 503 Athens の沒落、Macedonia

の興起より希臘全土が羅馬の屬邦となりし間の大要を示し、余が Myer に得たる知識を補ひたるもの多し。

今日は亦羅馬史に讀み到れり。此中注意すべき一節は 55 page,

"There can be no doubt that Rome began as a border town of the Latins, on the march or frontier, both of the Etruscans beyond the Tiber, and of the Sabines in the mountains."

當時伊太利全土に散布せし市邑決して少數ならざりしなるべし。而して獨り Rome の覇を中原に稱せしものは、其市が當時强大なる勢力を有したる Etruscans と Sabines との間に介在し、多くの知識と經驗とを吸收して我が勢力を養哺せしと共に、常に外界の强大なる壓抑に對して其强固なる抵抗力を養はんとしたるによる。敵國外患 Rome を强ふしぬ。午後より愛子しまと共に九段に行きてしまの結婚に要する買物をなさんがために到る。彼女は確かに暗々裡に東方千里の人の消息を想像せるもの丶如く、而して其想像は的中せる所多きもの丶如く、其面には容易に看取し得る心痛の色を集めたり。余は寧ろ彼女に語らんと欲し幾度か口に出さんとして空しく默しぬ。嗚呼、余是れを彼女に語り得べけんや。石槌を秉つて美花の面に抛ち得んや。兄の此土を蹈まざらん前余をして病ましめよ。而して此世より永へに覺めざるべく眠らしめよ。

彼女は我等と夕食を共にしぬ。何日目なりけん。嗚呼此の慰藉も亦遂に空しき夢か。

此夜飯田、高原、足助、河野孝太諸氏に送るべき手紙を書く。夫れより上田敏氏の「文藝論集」を讀む。description としては亂雜なる書方、首尾を一貫して腦中に收め難し。

五月十五日。金曜日。朝は中々烈しき雨なりしが十時頃より霽れぬ。朝新橋停車場に到る。新渡戸先生の或は來着せらるる事もやと思へばなり。然れども來られざりき。家に歸りて「文藝論集」を讀む。午後兄來訪。少しく談りたる後共に家を出でて神田に到り一牛肉店に登りて食す。先日余が兄に致したる書を彼は得て繙きたりとて、余に其 love の所以を問ひぬ。余は恥かしさに堪へざりき。愚者よ、眞に汝は愚者なるかな。余はか丶る所にか丶る話をなすの勇氣を有せず匆々にして其家を出でぬ。彼の助言は眞に余を思ふの語なり。余は彼に盡きざる感謝を捧ぐ。

されども不幸にして彼と余とは今其見を異にせり。彼は深く余に同情を拂ひ吳れたれども、余の爲せし所には同情を拂はざりき。何故神にのみ余の涙を示さざりしか。神は余を憤り給ふ可きか。然れども尙可なり。

萬世橋に兄と別れ、心急に空しくなりて獨り駿河臺の寂しき道を辿る。暮春の夕は悲しきかな。花地に委して燕子來り草樹の淡綠漸く老いて暮雲に夏の面影あり。無名の祉に到り神田川を下瞰し、遂に得堪へずして祈る可き所も知らず跪きぬ。

主よ、牧者よ、赤兒の如く意を表はす事能はずして唯叫ぶ祈に耳傾け給へ。「聖靈云ひ難きの悲しみもて我が爲めに祈る」神は讃む可きかな。

歸路太田氏を訪ひて、彼の快濶の翁と雜談稍〻一時間半、九時頃家に歸る。「聖書之研究」を讀む。是れより「文藝論集」を讀まんと欲す。

戀の歌我等の口には適せず。

余はしまの心を思ふ。彼女は憐む可きかな。我が家の女子に對する敎育法は誤れり。女子に對する待遇は誤れり。彼女を一層向上の人たらしめんは余の切願なり。愛子は山本の家に新生命を加へぬ。壬生馬は我が家に新生命を加へたり。しまと余とは未だ何者をも加へず。心慚ぢざらんや。心悲しまざらんや。

五月十六日。土曜日。晴天。

五月十七日。日曜日。晴天なりしかども風ありて、黃塵高き事更に幾尺。

朝河野氏を訪ふ。海老名氏の說敎に伴ひ行かん事を約したればなり。然れども彼女は今日牛込の敎會に行く可き必要ありければ余は獨り本鄕敎會に到りぬ。今日の說敎は「新生命の發達」と云へるものなり。前回より續きたるものなれば其一半を聞きしに過ぎず。說に至りては他の奇はなけれども、一々經驗より出でたる聲は、確かに人心の琴線を振ふなり。彼の說は愈〻老成して、壯年の人の云ふ能はざる所を云ふ。彼は漸く尊敬せらる可き牧師の年齡に近づけり。されども余は竊かに彼に於て其老成の餘りに早からざるかを恐る。されども余は確かに大なる勇氣を與へられぬ。彼の元氣は人を振作す。

夫れより獨り上野に到り、太平洋畫會の繪畫を見る。吉田博氏の水彩畫獨り場内に異彩を放ち、他は皆其模倣に過ぎず。此にも余は力あるもの丶、隱約の中如何に大なる勢力を有するかを見ぬ。

夫れより彌生町に至り兄を訪うて懇談稍〻少時なりき。彼のよき母は依然としてよき母なり。憐む可きものに向つて常に涙を用意しつゝあるが如き彼女の眼は、余をして少なからざる尊敬を拂はしむ。暫くは又彼女と相遇はざらん。三時半彼と別れて砂塵の中を家に歸る。

此夜余は增田兄に致す可き書を認めぬ。嗚呼之れ余が書ける手書の中最も多くの苦痛を以てせるものなりき。今も記憶す、嘗て森本兄が其痛切なる懷疑の爲めになやまされ、向後の方向に關して深き惑の中にありし時、余をして是れに對する意見を陳べしめし事ありき。此時も余は殆んど堪ふ可からざる悲痛同情の思を以て徹宵筆を秉りしを記憶す。而して今增田兄に送るの書苦痛に於て之れに過ぎたり。此書の中には幾度か祈禱が與へられてあるなり。余は是れを以て如何なるものをも動かし能ふと信ず。若し兄の呪詛が昔の祝福に歸る事あらば、歸る事あらば感謝は如何に大なるべきぞ。神はこを我等に許し給ふ可きか。人寢ねてより筆を秉りて曉鷄を聞きぬ。

主よ、我が牧者よ、心饑ゑて君にあらざれば再び活くる事能はざる東方の友の上に、願くは光明を與へ給へ。彼を慰むるものは今は暗黑のみなれども、其慰めは彼を滅亡に導き行くなり。暗黑もて慰めんより、光明もて勵まさざる可からず。余は信仰を要す。

五月十八日。月曜日。半晴。しまの結婚の爲めに一日を費す。

五月十九日。火曜日。雨夜に至りて止む。日中は、しまの結婚の爲めに費す。其隙々に Mazzini の "Byron & Goethe" を讀む。中々愉快。Byron と Goethe とが當時の時代を代表せる二詩人となし、Byron は其初期を代表し、Goethe は其末期を代表せりと云へり。而して Byron は頽嵐に對して尙進まんとあせる鷲鳥の如く、Goethe は暫く過嵐を見守りたる後頸を翅窠の間に埋めて恬然として知らざるが如き鵠鳥の如し。Byron は總てのものを敵とし、過去と未來とを見ず、人を見ず、唯

己れを見たるのみ。彼には二人稱と三人稱とあらざりき。故に彼の人なるものは時として彼の詩人を蔽ふ。Goethe は餘りに總てのものに亙り、彼の前には總てのもの分解せられ解剖せらるれども、然かも毫も統一を見ず、組織を見ざるなり。彼は亂雜混亂を極めたる當時の時勢を其儘に顯出せしめぬ。然かも彼はそれ以上をなさゞるなり。彼は過去を述べて後を造らざりき。彼は全く己れを空しくして、外物をして己れを通過して紙上に躍らしめぬ。故に彼の詩人は時として彼の人を蔽ひしなりなど云へる所、對照の妙中々に面白し。まだ讀了せざれば全豹を知る事能はず。

夜父上、しまと余と、山本に招かれて馳走となる。

五月二十日。水曜日。此日夙起、しまの荷物を高木家に送附す可き用意をなす。幸にして雨降らず。

母上の御病氣は益〻よき方なれども、此頃は痛く諸々の變動に心動かされ給ふ如く、時に涙の眼に浮ぶを見る。然り、十九年間哺育一日も惰り給はざりし其子女の一人は、他人の家の者となるのである。僕は此點に於て親の心の何處まで行くものなるやを察する事すら出來ぬ。しまは隨分母上に心配をなさしめた一人である。彼女の今迄の行爲には僕は感服する所が甚だ尠い。然し、然るが故に僕は最も彼女に對して心を集める。彼女が眞に己れの位置を自覺し、敬虔の念を以て處世の道に志し、少くとも消極的にでも神の御前に愛まるべきものたらん事は僕の祈である。主よ、願くば彼女に御手を垂れさせ給へ。彼女をして主基督を孕ましめ給へ。

五月二十一日。木曜日。日中微雨。夜雨。此日はしまが結婚す可き日なり。余の心は何となき一種の悲哀を感ず。彼女は既に處女より妻となれるなり。女子に來れる驚く可き變化なり。余の最も恨とする所は、余が彼女に余の信仰の一部をだに傳ふる能はざりし事なり。神は余の懈怠を憤り給ふべし。余は彼女に對して今も亦傳道の綱を緩めず。唯余の方法は口の上にあらずして行に依らんとするなり。余は口にて傳道するの最も無益なるを知る。主よ、余の信仰と余の行爲とを尙一層高きに繫がせ給へ。

反之余は今朝近來名狀すべからざる聖快に滿されたり。感謝す、神よ。神は實に弱きもの丶足らざる祈りを退け給はざり

しかな。足助の手書今日屆きぬ。見れば彼の積日の苦痛は漸く柔げられ、神の恩寵漸く加はれるものゝ如し。彼は Tolstoy の「我が宗教」を讀み、人間の眞正なる生涯は、絶對なる服從を神になすにありとなせるに至り、深く心機に觸れたる或物を得て彼の生涯は殆んど新たにせられたる如く、强き向上の屈折をなしたりしなり。余は眞に嬉しかりき。余の小なる祈は酬いられたり。余は舞ふ可きか歌ふ可きかを知らず。余は今にして傳道の快を味ひ知りぬ。彼の靈魂が光明を認めしは寧ろ驚異すべき奇蹟と云はざる可からず。然り、是れ勿論余の力にあらず。榮光は咸神に歸すべきものなり。然れども神が余の如きものを倚用ゐ給ひて、彼に光明の道を辿らしめ給ひし事は、余に如何ばかりの感謝ぞや。此一事ありて此日は余に聖別せられたる一日なり。世に Christian ならざる何人かよく此聖快の宴に入り得んや。酬餘りありて慚愧に堪へざるは Christian の生活なる哉。

午前も午後もしまの爲めに費しぬ。午後二時頃速水氏の夫人（シヤトル領事として近々赴任する人の由）來りしまの髮を編む。三時頃園田氏夫人及び二令孃來られぬ。峰子氏は今日の maids の一人なり。粗く雪白の毛をもて織り成したる裝飾少き洋裝、心ばかり桃色なる胸の飾を施し、帽はつば廣く平かなるに白のリボンうづ高き迄に卷かれたり。彼女の面は天使の如し。自らの美を自ら知らざる如き其擧止は眞に人をして天上の人を思はしむ。三時半頃高木寛子及び瀬脇千代子氏來られぬ。裝は共に峰子氏と同じなり。加ふるに薔薇と忘れな草もて飾られたる花籠の三人の手に各持たれたる、余は生れてより未だ人の裝にてかばかり美しきを見たる事なし。しまも亦白に蜜柑の花を付けたる結婚服着て veil を頭より下げたる樣は美しき花嫁なりき。かくて四時十分前一同は食卓を圍みて、處女より妻とならんとする彼女のために離別の杯を擧げぬ。母上は人に助けられ其瘦軀を起して亦席に列せられぬ。嬉しとも悲しとも辨へ難き一種の情、針もてもみ入るが如く心を衝きぬ。寛子氏は堪へ得ずなりて涙を垂れぬ。（同情深き汝の心よ）余は快濶に立ちてしまに向ひ「しまちやん（かく呼ばんは今日限りなりと思ひぬ）御目出度う」と云へる積りなりしが聲は何時しか澁りぬ。かくて五臺の馬車は山本夫婦、野村、有島健介夫婦の諸人をも載せて遂に家を出でぬ。母上は玄關の片隅に小さく坐して孑然として我等の出づるを見送り給ひぬ。し

まは再び處女として我家を見ざる可く門を出でぬ。

かくて大神宮に於て結婚の式ありき。式は高木氏の主張によりて取り行はれたるものなり。爾來あり來りし日本的儀式に比すれば勝れる事萬々なりと云はざる可からず。而かも余の心は空しく空し。余は何故に彼女を基督に來らしめて、基督にある兄弟と相婚せしむるを得ざりしぞや。怠惰の罪と云はざる可けんや。かゝる中に雨降り出でぬ。人々は之れより華族會館に入り、此に晩餐の饗ありき。初めに園田氏來賓を代表して謝辭を述べ、高木氏と父上とは是れに應答しぬ。後高木氏立ちて此の如き結婚式を用ゐたる理由を述べ、園田氏は立ちて媒妁人の漸く世に重きを置かれざる時の來らん事を祈ると述べて、再び階上に移り各自の隠藝など出でき。

是れ亦生が嘗て見ざりし華奢の宴なりき。嗚呼、かくして婚せられたるもの〻未來は如何にぞや。余は豫言者の如く、余の家の近き將來に必ず大破綻あらん事を想像するに難からず。そは我が家の事、神の聖旨を退くる事誠に多々なればなり。余は寧ろ此の如きを祈る。かくて我が家の凡てが再び神の道に歸り、其隣に裕かに旅人に懇ならん事を願ふ。そはパンのみにて生きんよりは死ぬる方勝ればなり。かくて九時半頃解散、雨を犯して家に歸れば、寂々たる夜を母上のみ留守してあり給ひき。今日の彼れや是れや互に傳へ奉れば、感慨多く聞入り給ひき。我等は寢ねぬ。されども何とはなき憂思襲ひ來りて止め難かりき。

五月二十二日。金曜日。朝微雨。後霽る。此日喜寛氏の新婚旅行ある可きなり。余は先づ其家を訪ひ共に新橋に到り、彼と彼女とは彼等の父、弟妹、壬生、山本等に送られて、七時半の汽車に乘じて東京を去りぬ。家に歸れば英一兄の書机上にあり。胸を衝かれて封を開けば、是れ余の彼の家兄の死を弔ひしに答ふるものなりき。彼は余の書によりて慰められしもの〻如く、其病も亦癒ゆる事速かなりしが如し。多謝、彼の余に對する友情や。

嗚呼我地の上に於て貧しきものなりと思ひし。而して見よ、今は富めるものなり。此富に誇り得るもの地球の上幾何ぞや。余は幸福なるものなる哉。品識才操二つながら人後にあるに如何なれば彼は我に然かく信あるや。神は不公平に富を分配し給はざりき。我等をして友情ある淸貧に誇らしめよ。我等をして鄰を憐むの勞働を乗らしめよ。彼の惠まるべき靈の上に惠

あれ。彼の榮ある可き靈の上に榮あれ。

午後新渡戸氏を訪ふ。豫め氏の着京は余知りたれどもしまの事の爲めに多忙にして、よく之れを訪ふの機會なかりき。先生は例によりて例の如し。來客多くして遂に語るの機なし。余は妻君のために家の事に就きて通辯などなしぬ。

今日亦新渡戸氏宅に彼女に遇ひぬ。余の心は高潮寄せたる如くむらがり騒ぎぬ。云ふ可からざる歡喜心の底より湧き、彼女の面を打ちまもれば知らずして笑ひ頰に浮ぶ。彼女は痛く瘦せぬ。之れ何の爲めぞ。聞く所によれば過る日曜日には、彼女その母と牛込教會に至らんとして病院に至りしに、急に胸病む如くなりて外出せずに病室に籠りたりと。余彼女の此の如きを知り得ざらんや。此の如きを知りて彼女の深く裹める愛に酬いんとするの心燃えざらんや。余は彼女が永く余を熱愛せしを知る。余の彼女に對する愛は受動的のみ。可憐なる小さき彼女の心臓日々夜々何物によりて躍れるかを思へば、彼女の夜々の笑ひと涙と何者に向つて瀉がるゝかを思へば、余は眞に彼の唇に余の唇を燃さんと希ふ。

嗚呼、されども。嗚呼、されども。

余基督の寺人たるを忘れば、願くは余が右の手のたくみを忘れしめ給へ。

彼女には尙よき夫あるべし。余の如き愚者を要する事かは。余は人の夫たらんよりは、謹んで人の僕たらん。萬人の足下に跪きに其趾の砂を涙もて洗はん。世は乾きて同情の涙を要せり。此世は砂漠、人は其處にさすらひて尊き水盡きたる一團の隊商のみ。

我が愛するものよ、余が汝を顧みざるを許せ。余は汝よりも尙不幸のものを有す。余若し汝に謹んで余の祕密を守らば、汝は遂によき他人の妻たる可し。而して母たるべし。而して余に來らんよりは遙かに幸福なるべし。然り余は多く汝と相遇はざらん事を希ふ。されども常に汝と相遇はん事を希ふ。然り、此矛盾は調和す可らず。希くば汝の余を見得ざる所に、余のみ汝を見守りて死の胸に倚らなん。

淸きものよ、汚れざるものよ、心專らなるものよ、涙熱きものよ。汝の情の一向に瀉ぎ來る時、嗚呼余の如何なる部分か

よく之れに抗し得るぞ。惡を退くるの楯はあるべし。されども愛を防ぐの劍は何處ぞや。

主よ、誘ひより余を救ひ出し給へ。願くは何時までも試練を續け給はざれ。

愚者よ、嘗て戀をあざ笑ひて小人の行爲となしたりし其窩巣に入らんとするか。愚者よ、愚者よ、而して愚者よ。戀の歌余が唇に適せず。

五月二十四日。日曜日。晴天。朝新渡戸氏を訪ふ。孝夫さんの爲めに畫家畑仙齡氏を紹介したるなり。新渡戸夫人に "How shall we think of Christianity?" (The Levering Lectures before the Johns Hopkins University in 1899, by W. N. Clarke, D. D., Author of "An Outline of Christian Theology.") なる書を惠與せられたり。之れ夫人が去年讀みたる書物の中最も多くの趣味を感じたる書なりと云ふ。歸來午前を其繙讀に費す。未だ會心する所なし。

午後は病床に侍して「思出の記」を讀み、若しくは話などす。又一寸河野夫人を訪ふ。家の事情を語り適當なる保姆樣の人の周旋を賴む。彼所を出でて堀側を散歩す。淺綠夕暮の空色に彩られ、少年少女の戲れ遊べる樣畫の如し。紀尾井町の裏は松も草も共に麗しき所なり。嗚呼自然の門戸を叩かざる事幾旬ぞ。

此夜 Shakespeare の sonnet など讀む。中に友情の眞を味ぜしもの頗る我が意を得たり。余は是れを以て英一兄に送らんと欲す。

五月二十五日。月曜日。曇天。夜に入りて雨。朝家にありて Freeman's "General Sketch" を讀む。羅馬が其範圍の擴張を計る處を叙せるもの。要之余の眼には大切なる事にあらず。若し人生に寄與す可くんば、余は此の如きものを以て寄與せざらん事を願ふ。Marius と Sulla とに何の關りあらんや。午後新渡戸氏を訪ひ孝夫君を伴ひて畑氏に至る。歸來暫く新渡戸氏と語る。彼は此度は頻りに余を戒めらるゝなり。余は彼の余を愛するの如何ばかりなるかを知る。余はよく彼の望に副ひ得べきか。勉めざる可けんや。物の出來ざる御人好しは何時の世にも要なかるべし。新渡戸氏は頻りに薩州人の爲すに足らざる識あるを告げられぬ。是れ焉んぞ新しく說くを要するものならんや。薩州人程世に利己的なる、自我的なる、而して無趣

味なる輩なきなり。彼等は既に時勢の後尾に蹴落されつゝも、然かも舊來得たる所の勢力に固着せんとしつゝあるなり。眞に陋なりと謂ふ可し。眞に劣なりと謂ふ可し。

今日は頭髪を延ばせと忠告されぬ。余の無頓着も追々訂正せざる可からざるか。洋行前には仰せに從ふ可し。

此夜病床に侍して壬生馬等と閑談し、後日記に向ひて今（十二時十分迄）に至りぬ。寝に就かざる可からず。明日は何よき戰を戰はざる可からず。

余は永く永く日記を怠りぬ。余は自らよく其何の故たるかを知る。余の生活が無意義なる平凡に陷りたる結果のみ。安んじて平凡に居るものは災なる哉。余が日記を怠れる間に余の心を支配したりし一問題あり。是れ余が平凡なる生活の間に留め置く可き價値あるものなりと信ず。そは那珂博士の甥なる人、高等學校に學べるが今年十八歳、自ら哲學文學宗教の研究に熱中したるも人生の解釋に於て迷多く、遂に絶命の辭を華嚴の瀧の巖頭なる樹幹に書し、水に投じて死せる事是れなり。是れ深慮す可き大事件にあらずや。後に聞く所によれば彼の此に到れるは精神錯亂の結果なりと云へり。若し果して然りとせば彼に就て多く沈想するの必要を見ず。然かも彼が精神の錯亂を來すに到りし行程を思へ。而して全く精神の錯亂を來す事なくして死に就くもの世に尠なからざるを思へ。彼によりて聯關して提供せらるゝ問題は是れ深慮するに極めて價値あるものにあらずや。

余は二十九日の夜、一番町教會に植村氏の説教を聞きぬ。題は「何の生甲斐がある」と云へるなりき。而して彼は徐ろに厭世觀に對する持説を吐露し初めぬ。事は漸く彼の少年に及べり。余の心臟には急に一道の血ありて溯り入れるを覺えぬ。我が世界の大教師は嘗て一人の靈魂をも輕んじ給はざりき。彼は姦淫を犯せる一賤女子にさへ其無限の愛憐を瀉ぎ給ひぬ。彼の血を稟け骨を傳へたる可き植村氏が、眞面目なる聽衆の前に立ち、此眞面目なる大問題の解釋を試みんとするに當り、如何に眞面目なる同情を以て彼の憐む可き少年に加へ、惜愛の涙を此暗きに入りたる靈魂の上に瀉ぐかを見るを得可きかを

思ひては、余は教職の今更に偉偉なるものなる事を羨まずんばある能はざりき。

而して見よ、余の歡喜は失望にまで投げられたり。余の夢想の天上は實想の地下なりき。余は植村氏によりて世が嘗て有せざりし少年に對する同情の辭を聞かんと待ち設けたりき。而して氏は屛邊の冷笑を以て彼の少年の死を弔ひ終りぬ。曰く「彼は哲學書一卷の厭世家のみ」と。余の熱したる血は索然として冷え終りぬ。死生に對する尊敬なき批評、世に此の如く卑陋なる事なし。世に此の如く無情なる事なし。世に此の如く男らしからざるものなし。余は滿腔の不滿足を以て空しく歸途に就きぬ。爾後是れを思ふ事念々。

超えて三十一日（日曜日）壬生と直良氏と余との話題計らず此問題に及びて三人の言は熱したり。直良氏は曰く、「此事たる誠に同情に價ありと雖も、然かも是れがために世に惡影響を及ぼす事如何に多きを知らず。彼如何に哲學的疑問になやまさるゝ事ありとするも、彼の家庭の平和を破り、生存の義務ある人生を退け、自ら死を致すの失態ある可からず。凡そ人の自殺を計るに至れるは寧ろ醫學上の變化より原因するものにして自殺を企てし精神に異狀を呈せざるものなし。彼の如きは人生にありて何の貢獻をもなし能はざりしもの、犬死を敢てしたるものと云はざる可らず」と。壬生は曰く、「余は全く是れと反對なり。凡そ自殺に二種あり。其一は失敗に起因せる自殺なり。凡そ一事の爲さんとするものあり、而して事皆之れとたがふ。自ら生くるの價値を認めざるに至りて自殺するもの是れなり。他の自殺は即ち然らず。彼は地上の所謂成功と稱す可き凡てを有し、然かも尙彼の心は地上の生活に滿足する能はず。勝利者が一國を平定して滿足せざるが故に又師を起して他國に進むが如く、地上より他の境遇に投入せんとする自殺者なり。而して余は前者に於て人間中の最も陋劣なるものを見、後者に於て人間中の最も莊嚴なるものを見るなり。人は多く生死を喋々す。然かも實際死の淵に臨みて逡巡せざるもの克く幾人かある。死は人が口もて云ふが如く爾く容易なるものにあらざるなり。而して地上の成功決して尠少ならざる身を以て敢て死の裳に隱れんとす。此一事を以てしても第二種に屬する自殺者の卓越を認めざる能はざるなり。況んや其人人生の解釋に苦慮焦心し、生活の克く之れが解釋に資する能はざるを見るや、斷じて身を以て死地

を踏みて悔いざるに至りては何等高偉の行爲ぞや。恰も偉大なる冒險家が、世上の利福のために一身の生命を犧牲となし、死の影汎ねき蠻地に侵入して、其所志を貫かんとする高偉の行爲と毫も異る所なきなり。余は寧ろ彼の眞面目なるを認識し而して彼の自殺を正當と認むるものなり」と。

余も亦一個の Christian として余が衷心の意見を發表す可き機會を得たり。余の情は激迫し、余の語次は亂れて涙をさへ誘はんとせり。かくて三人は結論に達せずして相別れ、余は自ら自殺に關して確乎たる觀念を構成す可き立場に臨みぬ。自殺なる問題に對して余の沈想の動きたりしは勿論今に初まりし事にあらず。幼少にして學習院にありし時、倜儻にして物に拘らず豪侃儕輩を空ふせし四條の銃を秉りて自ら殺せし時より、余の心中には朧げに自殺なる意味深き問題の横るを覺えたるなり。生を厭うて自ら死す。何等深奧の沈想を齎らす現象ぞや。是れ鳥と獸とになき所なり。若し人間は笑ひ得る動物なりと云ふ定義を眞なりとせば、人間は自殺を敢てする事ある動物なりと云はんも亦過言にあらじ。人の中眞に笑ひ得るものは尠し。而して自殺を敢てするものは往々にして是れあるなり。悲慘なりと謂はざるべけんや。爾後憐むべき余の心は幾度か自殺なる問題に逢着して其解決に失敗しぬ。北村透谷の死が發表せられて、世を擧つて其是非に騷がしかりし時、余の同情は如何に此薄倖の詩人の爲めに動きたりしや。余は彼の自殺を可しとしたりき。

既にして余は北海道に遊びぬ。彼は余の思想を陶冶す可き一大熔爐にして、余は彼處に未だ嘗て經驗せざりし迷宮に彷ひぬ。見る所凡てのものには動かす可からざる interrogation mark ありて懸れるなり。人も木も草も天も地も共に余の眼には一個の symbol に過ぎざりき。人と木と草と天と地とは何物にてもあらず。余の饑ゆるが如く求めたるは、そが現はす所の眞意義のみ。宇宙に遍在する一定の意義あるか。然らばそは何物ぞや。宇宙には何の意義もなく萬づのもの雜然として羅列するか。然らば此生は何の用ぞ。嘗て西歐の一哲學者は謂ひき、

「余に理性と沒理性との二つあり。人生の解釋は此二つのもの丶上に殘さる。余唯卒然として見る、彼處に光明の如きものあり。其處に希望と滿足と光明と普遍と凡てのものあるが如し。余はその眞相を知らん事を欲しぬ。卽ち理性を以て之

れに臨めば、我が心意は理性が云ふが儘に滿足の點頭をなしたれども、かくて其果に到ればかの光明の如きもの遂に隱れて、そこには唯窅然たる暗黑のみ殘りき。卽ち沒理性を以て之れに臨めば彼の光明の如きもの愈〻その光輝を增し、耀焖燦然として余をして思はず驚敬の首を伏さしむ。而かも衷にありて余が理性は云ふ「尙足らず」と。嗚呼、是れを如何にす可き。嗚呼我が內心の分離を如何にすべき」と。

人生の恨事誠に此の如きものなからざらんや。

余嘗て一橋上に立ちし事ありき。時は暮秋、水稍〻涸れて銀よりも白し。旣にして一枯葉あり、丹の如く赤きが流れを浮沈して來り橋下を過ぎぬ。余は是れに眼を注ぎぬ。かくて暮秋の哀觀胸に沁むが如くなりき。かの枯葉は今橋の下流にあり。余は首を囘らして凝視しぬ。潺湲たる水はそを弄びつゝ漸く遠く行きぬ。余は凝視の眼を放つ能はざりき。枯葉は礫間に留まり浮萍と語り次第に我が視線より遠ざかりて、やがて一閃紅を我が眼に留めたる儘再び見る可からずなりぬ。再び見る可らずなりぬ。是れ平凡なる語にはあらざるなり。余が嘗て一度見たりし枯葉は永遠永劫再び我が眼を過らざるを思へ。人よ、猶且つ面を掩うて泣かざるを得るや。何等深奥の謎語ぞ。何等悲痛なる心の宮ぞ。余嘗て余が半身と共に西面せる窓に臨みて落暉を望みたる事ありき。北海の暮雲ほど崇高なる眺めはなかるべし。滿天燃え上りて、雲なき所は僅かに紫色を混じたる黃金の色をなし、雲湧ける所はあらゆる崇美の彩を混じて、煉りて宛ら凡ての高き金を天使が熱情の火もて燃せるが如し。首を俯して地を見れば薄暗四方を閉ぢぬ。彼は默々として雲のうつろひを凝視しつゝありしが、やがて余の手を取り涙に破れて云ひぬ。「見よ天國は彼處にあり。セルビムとケルビムと光の汀に戲れ遊べるを。而かも眼を返して我が立つ所を見れば、此地何ぞ寒きや」と。余も唯強く彼の毛を握り返せしのみ。

此頃より余には一の影の如きもの投げられき。そは地球の影なり。余が此地上に彷徨する間、此影は嘗て余の周圍を去らざるのみならず、曙光の時甚だ薄かりし影の、晝午に近くに隨つて漸く濃くなるが如く、年甫めて壯にして人生の第一疑問に指を染むるに到りし余の上に、愈〻濃くなり行くなり。余は今更に Wordsworth の名句を想起せざる能はず。

But trailing clouds of glory, do we come
  From God, who is our home:
Heaven lies about us in our infancy!
Shades of the prison-house begin to close
  Upon the growing boy;
But he beholds the light, and whence it flows,—
  He sees it in his joy.
The youth, who daily farther from the east
  Must travel, still is Nat re's priest,
  And by the vision splendid
  Is on his way attended;
At length the man perceives it die away,
And fade into the light of common day.

("Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood," V.)

余の衷なる人は痛く此影を厭ふ。然かも影は漸次其廣さと濃度とを増し來りて、余が衷なる人の光を被ひて、余をして暗黒の中に滿足せしめんとす。然り多くの人は暗黒の中にありて滿足せり。食する事を以て人生となせるものあり。逸樂を以て人生となせるものあり。沈想を以て人生となせるものあり。人生を思はざるを以て人生となせるものあり。戰を以て人生となせるものあり。呪詛を以て人生となせるものあり。然かも彼等に問ふに、何が故に爾かするを以て人生となすやを以てすれば、彼等は知らざるものゝ如く顧みて他を言ふなり。

抑も人生とは無意義なるか。Carlyle の云ふ如き一の死せる機關にして、無意識的に其口を閉ぢ且つ開く間に人は生れて而して死するに過ぎざるものなるか。抑も人生とは意義あるものなるか。然かも其意義や Carlyle の云ふが如く、暗黒の間に相混亂して當面の者の胸を捕へ、彼我を殺すか、我彼を斃すかと相拏鬪するにあるか。

哲學書一巻の厭世者と詈らば詈れ。然かも讀書萬巻世故七十年人事知らざる事なき老學者も、克く明瞭に人生の義を解する能はざるなり。此に至つて余は益々余の生の徒事なるを知りぬ。余の當時の思想は痛く戰きぬ。夜雲人知れず地の胸を壓する如く、懷疑の壓する所とならざりし人は幸なる哉。余が Byron と透谷遺稿とに親みしは此頃よりなりき。Byron の Manfred は殊に余と余の半身との耽讀措かざる所なりき。Faust も亦余が半身の座邊を離れざるものとなりぬ。

「我に道理を示せ。余の持する所が果して不可なりと云ふ道理を示せ。余が過去の日記には誠に美はしき限りを書しあり。されども今の余の境遇は此の如く懷疑に陷りて、昔の凡ては夢よりも頼み難し。古來文豪と云はれたる人々の所言も、余が過去の日記の如きものにあらざるか。否、余が過去の日記の如きものなりと云ひたる時、何者か然らずと云ひ得しぞ。神を知りたりと云ふ人の心が迷信なるか。余の云ふ所が眞理なるかを分つべき道理何處にありや……」

是れ余の半身が病床の苦痛の間にありて余に訴へし所なりき。

「されども顧みて己を見るに、嗚呼、是れ等の凡俗輩と相異れる所幾何ぞ。人類の價値が此の如きに終るものなりとせば、余は悲しまじ又怒らじ。されども基督も釋迦も人を見る事此の如くにはあらざりき。余が行かざる可からざる點は明昭々として彼所にあり。されども余が行く可き道は何れにありや。余は悶ゆる心を持して凡俗と終身相伍せざる可からざるか。否、彼等を一歩だに高尙となす事能はずして止む可きか……。

嗚呼慕しかりし死よ。汝は終に我が有となりぬ。我が生血にあらずんば兄は復活する能はず。觀來れば世上の人唯碌々として秋蒐の米を食ひ、醉生夢死して以て得たりとなす。嗚呼、世上若し死を觀破する機能人になかりせば人は至つて無能なるかな。……

死よ、我が汝の足下にひれふすは何の故なりと思ふぞ。我は唯汝によりて神を願ふが爲めのみ。……世上眞面目なる所は何處ぞ。我は失望せざる可からざるか。只死あり。哀れなる人よ、來つて死に面せよ。此に眞面目あり。噫、我豈望を世に失せんや。嗚呼、不幸なるものゝ前には汝も亦敵とならんとするか。天地は咸敵なり。騎馬輕裘の士女は塵芥よりも輕くつたなきものなり。學識深奥なりと云はるゝ博士碩學も唯一塊の土泥に過ぎず。天地は貴人に諂ふ惡魔にして、唯我と兄とのみ世に立つ。我が心悲み且つ痛む。泣かじとせし我が涙は雙頰を傳うて底ひ知らぬ歎息のみぞ我には伴ふ。

道行く人の顔を見ずや。唯現心もなく眼を張りてあはれ何をかせんとはすらん。遇ふ人も遇ふ人もかばかり心なきものとは思ひ設けざりき。……嗚呼觀來れば是れ果して何者ぞ。僞光僞景。世は自然と人爲とを問はず僞行なり。僞善なり。汝塵を取りて之れを地に立たしめよ。彼は人の如く笑ひて且つ泣かん。」

是れ余が當時の日記に記し置きたる妄想なりき。人は是れを見て余の餘りに不條理に、餘りに感情的なるを笑ふなる可し。然り是れ咸一笑にだも値せざるものゝみ。而かも當時に溯りて余が味ひたりし苦き杯を啣みたらんものは、少くとも余の此言に同情の一片を惜まざるなる可し。人の心驀直として死に面するや、其動機の如何に下卑にして其行爲の如何に無謀なりとするも、然かも其間に確かに人の肺肝を動かすものあるなり。

かくて憐む可き余の心は益〻暗きに就きぬ。余には光明なるもの全く投げられざりき。此當時余は用辨のため區役所に到り、其代筆店の店頭に坐して長時間を費さざる可らざる事ありき。余の思惟は磁針が常に北方を指すが如く嚴しくも嘗て經驗せざりし感慨の虜となりて、張目すれども物を辨ぜず茫然として唯街上の人の往來するを眺めたりき。今彼等は余と何の關りあらんや。偶然にして余の眼は端なくも行人の面上に注ぎぬ。而して見よ、彼の眉間には深き皺たゝまれ、眼は常に何者かに追はるゝ如く不安の狀をなし、口は半ば開きて力なく、我が行爲を已れ自ら疑ひつゝあるが如き擧動もて、余が前を過ぎ去りぬ。余は突然彼の面に何者の意味せらるゝかを見んとの心を起しぬ。卽ち猜疑多き余の眼を凡ての通行人に向はしめぬ。而して見ずや——悲慘の極ならずや——凡ての面上には唯單に複雜なる失望の色のみ見らるゝなり。

第五巻

一九〇三年（明治三十六年）〔承前〕

牝馬の歌

ひづめの　あがき　ちを　とゞろかし
いくさの　ちまたも　おぢ　おそれず
いなごの　ごとく　かぜを　とびて
あまかけりし　めうま　こを　うしなひぬ
けふ　のりて　なつのを　ゆくに
さみしげに　とほきを　みやる　まなこの　うるみ
なにの　おもひでか　あとふりむきて
いなゝく　こゑ　ながく　くもに　いる
なづみ　がちなるを　しひて　おへば
しばらく　はしりて　また　なづみぬ
とぼとぼと　あゆみ　おそく
あかね　きえて　よも　たゞあをき　ゆふぐれ
さと　なほ　をちなる　みづに　そうて

うなだれし　まゝに
はや　なかんとも　せず

まこくは

やまぢ　ゆくに　まこくは　さけり
みざりし　みとせを　そのまゝ
なつかしき　はな　つゆを　ふくむ
あゝ　いきよ　ひと　いきよ　ひと
ことしも　このはな　きよく　さくに

六月十六日。火曜日。雨は降らざりしかども雲絶えず空を被へり。余の北行は今日と決定せられぬ。父上は朝の食卓に、余が彼處に到りて土地の爲めに爲すべき凡ての措置を言ひ給ひき。室蘭支廳か狩太村の役人の間には、一種の不正が行はれつつあるが如し。余は十分の注意を以て、之れを視察し且つ之れを矯正せんとするなり。されども富を得んとするものは——要之凡ての口實理論を除き去る時は、農場經營の眞目的は當然富を得るにあり——憐れむ可きかな。彼は常に人に對して疑惑の眼を張らざる可からず。常に已れの爲めに思ひなやまざる可からず、常に貧しきものを使役せざる可からず。世に最も憐む可き職業ありとすれば政治家と實業家なる可し。

それより今夜出發の爲めの諸準備をなし、隨分多忙を極めたれども夕刻に及び凡て完成せり。かくて夕刻壬生馬に送られて上野停車場に到り、午後六時の汽車に搭じぬ。同乘者一人のみ。田園初夏の射翠到る處に車窓を擁し、長く長く自然の裡に入らざりし我は、日暮に至る迄車窓より首を囘らさゞりき。點燈の時溶々たる利根川の上流を渡る。山川共に暮れて晩靄遠く懸る。余は不圖去秋機動演習の時、薄暮その下流を渡りたりし當時を思ひ起しぬ。かくて今日の日暮れき。

余は車中にあり "How we shall think of Christianity" の中 "Christian Power" を讀み終らんと勉めたれども燈暗くして眼の疲勞する事甚だしかりしかば、寧ろ早寢するに如かじと思ひて横はりたれども、寒威と諸種の聯想と交々襲ひ來り容易に眠る事能はず。覺めてはまどろみ、まどろみては覺めて暫くして此長時間を明かしぬ。

六月十七日。水曜日。曉明四時二十八分汽車は仙臺停車場に着しぬ。余何の幸ぞ許されて再び同情温き人の懷に入る可くなりぬ。喜悦の思を車上に託して新阪に到れば、彼の夢は尙醒めず其門戶は閉ざされたり。所在喬樹の上憂々として杜鵑の聲を聞く。幽情止め難し。戶を敲けば兄余を迎へぬ。室に入りて多く語なく唯相歡笑するのみ。感謝して朝食を終へし後、彼は學校に出で行きぬ。余は机に向つて英一兄に致す可き書を書き初めたり。是れ布哇に送りて彼が彼處へ寄港せし時之れを讀ましめんが爲めなり。凡ては絕大なる聖旨の中にあり、我等塵に等しきもの丶思ひ計り得る所にあらずと雖も、我等の祈若し熱からば神は我等の心を憐れみ給ふ可きか。彼の上に失はれたる心歸り來れ。彼願くは此煉獄を美はしく勇ましく彼岸に達せよ。願くは余をして何時までも彼の中心の同情者たり得せしめよ。

兄暫くにして歸り來りぬ。即ち共に田邊氏に原先生夫人を訪ふ。其兒一藏君長じて肥えたり。羸弱永く我等の憂とせし其兒とは思はれざる許りなり。談話約一時間許りにして歸る。初夏の白日、庭前なる大枇杷樹を照らし何とはなき夏思胸を射る。鶯の聲尙不絕聞ゆ。余は再び英一兄に致す可き筆を續けぬ。午後兄の授業終りし後共に携へて師團より昭忠記念碑のある所に散策す。山路巨木多く雉子の聲さへ聞えぬ。歸路早川萬一君を訪ふ。彼は妻あり家ある一個の鄕紳士となりぬ。彼は此の如く活くるなるべし。

歸途煮て食ふ可く牛肉を求めて家に入りしに、原氏より鰻の蒲燒來り居れり。殘り少き飯を以て大牢の美味の如く食ふ。快言ふ可からず。此夜兄と藤村操氏の事を語る。兄も亦最も多くを彼に同情する一人なり。然り靈魂の苦しき經驗を有するものよく深厚の同情なきを得んや。

夜に至りて原氏夫人及び一藏君來る。閑談九時半に至る。夫れより愛子に送る可き日記を記す。涙屢〻睫に逼る。余は今

日甫めて彼女に英一兄が受けたる苦痛の凡てを語らんとするなり。余は彼女が此書を讀まん時、主の御助けの限りなからん事を祈る。然らざれば彼女は死せん。

寢ぬる前、久濶にして兄と共に所を一にして相祈りぬ。感謝す、主よ我等が父よ、君は實に塵の一片をも忘れ給はざるなり。

六月十八日。 木曜日。晴天。朝五時半起床。直ちに庭前の崖邊に到りて廣瀨川と靑葉山とを遠望す。清爽の氣身に沁みて快云ふ可からず。主は此の如き偉大なる comfort を徒らには造り給はず。此慰藉は果して誰の受け得可き所なるや。

朝食後兄は學校に出で行けり。余は内村氏の「日曜講演」を讀みて例ながら興味を感じぬ。されども其中には理論の極めて loose なるものあり。氏は到底純文學を論ぜんには餘りに使徒的なるものなる可し。然かも氏が Divine Comedia と Faust とを評し、前者は結論にまで達したれども後者は煉獄にして止めりと云へるが如きは、靈魂の經驗深きものにあらずんば云ふ能はざる所なりとす。

午後原氏の一藏さん來る。兄は再び學校に出でたれば余は彼と共に唯赤子の如く遊びぬ。兄の歸り來りて後一藏さんを伴ひ、原氏に到り後二人にて北山の方を散策す。談ずる所多く歷史に關してなりき。

夜食後 Schneder を訪はんが爲めに再び外出す。家に到れば彼は他の外國人等と會議をなしつゝありしかば、其儘にして靜肅なる街路を散歩す。此夜空美しく晴れぬ。仰ぎ見るに天路鏡の如く澄み、金星の影碧きに照りて實にや Venus の海より生れ出でたる樣の如し。家に歸りしは九時過ぎなりき。余は近來此の如く快心の散策を試みし事なし。家に歸り着きてより二人孤燈を挾んで、談我等の將來と我等が宗教に及びぬ。兄の堅信は依然として深く我が心の心を勵ますなり。我等の此世に生れしは實に徒事に非ず。我等が全心全軀を若し我が同胞我が骨肉の爲めに用ゐ盡すを得ば、感謝は如何に大なる可きぞ。我等の生涯は幸か不幸か此以外の事にては到底滿足す可からずなりぬ。願くは聖鞭我を追ひて直き道を歩ましめ給はん事を。

兄の有する書籍の中他日の用になる可きものを抜きて下に記し置く。（略す）

六月十九日。金曜日。晴天。朝兄は學院に出でたれば、余は亦靜閑に讀書に耽りぬ。此日讀みたりし書は Buckle's "History of Civilization of England" にして、其 1st volume には introduction を載せたるが、是れ最も英人ならざる讀者に價値あるものなり。歷史を treat するに單に社會科學の知識のみを以てせず、自然科學によりて treat せらる可き several factors が非常に夥多の關係を歷史に致す可きを說ける事甚だ詳細、是れを精讀すれば得る處確かに尠少ならざる可きなり。又 "Thousand and One Gems" を繙き Wordsworth の詩を讀みぬ。何等深奧の沈想ぞ。誦する儘に心の奧深く響ふ可からざる響ありて沈み行くを覺ゆるなり。

軈て兄歸り來りぬ。正午まで雜談し午後より共に携へて廣瀨川に到り水浴をなす。農學士も東北學院教授も此に到りて何者ぞとて二人思はず失笑しぬ。後入浴して歸る。庭前蜓端に接して三抱へして猶足らざる大楓樹あり。綠蔭を稍ゝ傾ける白日の中に落して淸味云ふ可からず。兄と玆に坐して談は人生の問題に及びぬ。彼も今は漸く其解釋を求むるに、純理に依らんとするに到りぬ。人間存在の長さ、宇宙の滅否、神の人的方面、基督の神性等は我等の相語りたる問題なりき。思ふに從つて益ゝ迷宮に入るは是等の問題なり。我等宇宙の前に一個の塵に等しきものなれども何の用か理性の眼を授けられぬ。是を以て凡ての者を見なんとするに、凡ての者は Veil もて蔽はるゝなり。聲は開く可からざる戶の彼方に響き、色は掲ぐ可からざる帳の彼方に動き、形は排す可からざる閾の彼方に立てり。在りと見えしものも理性を以て近づけば往々にして無きが如し。嗚呼、さらば此人心葛藤の因なる理性を殺了す可きか。智慧の果を味ひ知りしアダムの末裔は此の如き事能はざるなり。嗚呼信仰よ、而して理性よ、汝は何故に相反目するや、汝は何故に握手せざるや。我が衷なる戰は大なり。余再び嘗て多く味ひ知らざりし理性的懷疑の淵に陷らざる可からざるか。可し凡て可し。余は余が凡てを主の御手に委ぬ。放蕩なる末子を我が父は憐み給ふ事もやあらん。

暫時にして兄の友來りしかば、兄は家に歸りぬ。余尙樹下に殘りて尙志會が其雜誌に編入せる故高山樗牛子の遺文を讀み初めぬ。彼は實によく戰ひたりしものなりしかな。彼が中年までは、彼は單に才氣迸發せる一個感情强き、而して寧ろ批評

的なる一個の論客に過ぎざりき。而も彼の若き晩年、彼の肺患漸く重くして彼が單に功名好奇の念より眞面目なる自我に歸り來りし時に當りては、彼の痛切なる懷疑悉く肺肝より出でて、余等をして同情の念衷に熱するを禁じ能はざらしむ。如何なる處にも如何なる時にも、眞面目なる人は祝福す可きかな。實に其人は神の國を見るべければなり。余は殊に彼が此懷疑の中心に立ちて、克くその終焉まで戰鬪の生活を更へず、其勇ましき戰鬪の爲めには肉落ちて痛まず、骨細りて悲まず、肺破れて望を失はず、血を吐きて驚かず、向上の一念死も亦奪ふ可からざるものあるを多とせずんばあらず。男兒世にある宜しく克く此の如かるべし。死は易し、生は難し。終りまで生きて永久に生きて我等が探る可き道の如何なるものなるかを見ん。

此夜兄は其送別會に臨みぬ。余は依然として高山氏の「日蓮傳」を讀みて幾度か涙を零しぬ。兄の歸後談は悲しく戀愛の事に移りぬ。戀愛に對する觀念は、兄と余と大に其經行を異にせり。十一時半床に就きしが、余の心より僅かに壓へつゝある余の回想は、亂麻の如くむらがり立ちて余を攻めつ。余は弱きものなり。余は僅かの力を以て彼事を壓ふ。否、余の全力を用ゐれども彼事は余の力を煩はす事餘りに多し。種々なる湧感は余をして長く床中に輾轉せしめぬ。されども多謝す可きかな「死」の妹は余を見舞ひぬ。彼女は余を寂滅の地に誘ひ行きて、余を深くかき抱き余は枯木の如く水平に横はりて曉に至りぬ。

六月二十日。土曜日。朝は晴天なりしかども午後より曇れり。今日は兄一日閑暇なる可き日なり。朝より共に散策に出掛けんと約したれば彼の誘ふまゝに北山と云へる墓地のある處に到る。余は昨夜より何とはなき一種の寂寥に打たれ、若し茲に兄なからんには今日の如きは一日又憂悶の客たる可かりしも、兄のあるありて僅かに慰められつゝ漸く田園の風趣に近づきぬ。古刹の雨露風打幾十年若しくは幾百年ならんとするものあり。見るに閑古の香韻胸を刺す。此邊又瓦燒の家多し。竈に燃ゆる火色の赤く輝く飴を解きたるが如く、烈々として竈内に滿つるを見て、兄は「美はしきかな火の色、古代の民が拜火の宗教を起せるもの理なきにあらず」と云ひぬ。實に爾かなり。余は Schiller の鑄鐘賦を想起しぬ。かくて北山に到り其處に Faust 夫人の墓の憐れにも路人の爲めに荒されたるを見て、日本人の今更ながら禮を知らざるの甚しきに驚き且つ悲し

みぬ。實に人の墓に禮を失するとは是れ單に粗暴とのみ見て用捨す可き事に非ず。日本の民が宗敎的信念に乏しく、生者に對しては力足らざるが故に責めで、死者に對して無意義なる反抗を試みんとする卑劣心の潜めるを見ずんばあらず。

行く程にこゝらの墳墓共に小さくして美しからざるが多く、無緣となれるにや、倒れたるもの頽れたるもの至つて多く、夏草の漸く溢り多くなれるに悲慘なる contrast をなせる樣悲し。

歸路、一農家に野薔薇の色紅に燃ゆるが如きを買ひ、長谷倉氏の墓ある寺を通りて當時の囘想を語りつゝ、原氏に到り一藏さんを寫生して家に歸る。半日の遊凡て何ぞ淨きや。午後より原氏夫人來られしかば雜談に時を移し、夕刻より兄の家を辭す可き支度をなして家を出で、Schneder の家に到り（Schneder とは東北學院々長なり。兄の云ふ所によれば彼は温厚篤實の君子人にして彼に心服せざりし人なしと。兄の如きも甚だ同氏に傾到せり。彼は今日余を其晩餐に招けるなり）其晩餐に列しぬ。夫婦及び三娘ある其家庭は實に美しきものにして、然かも其の質素は殊に余の意を悅ばしむ。Schneder は余の爲めに多く米國の風俗を說く事精しく余をして得る處多からしめたり。八時半家を辭して停車場に向ひぬ。原氏夫人既にあり。かくて八時五十分の汽車に乘じて仙臺を去りぬ。懷かしき仙臺を去りぬ。旅人に懇ろなりし仙臺を去りぬ。夜は暗く窓外は風荒めり。冷氣膚を刺す許りなり。

六月二十一日。日曜日。一人の陸軍砲兵少佐と同乘して、今朝靑森に着きぬ。余は彼と語るを好まざりしかば、默しつゝありしが彼遂に余に語りぬ。談は一年志願兵の事に及べり。彼の是れに就て語る所は余を噴飯せしむ。彼は曰く「我等の一年志願兵を置くは、知識あり富貴なる階級を軍人となし以て軍人の威嚴を一般國民に擴むるにあり、以て軍人の品位を高むるにあり」と。而して彼の枕頭には妖妓の寫眞を其表紙となせる團々新聞ありて橫はれりき。かくて靑森に着せしは七時四十分頃なりき。

空は昨日の如くかき曇りて、風は少なからず荒れ居れり。汽船東海丸に乘ず。十一時出航す。船中往々嘔吐の聲を聞きたれども、余は幸に何の苦痛をも感ぜざりき。午後五時四十分函館に入りぬ。昔に變らず臥牛の山、巴形の水、北海の風光は

先づ余の眼を過りぬ。

余は一人の商人らしき人と同船しぬ。彼は世故慣れて周旋好きなる可き半老の人なり。他者と語らざる時は必ず鼻唄を誦ひつゝあり。彼は至つて親切らしけれども其人品は至つて低し。人生の一面には確かに此の如き人あり。夜十時函館を發しぬ。風は再び荒れ出でぬ。然も余は平然として熟眠に入り船の室蘭に着して汽笛を吹くに遇ひて始めて覺めぬ。

六月二十二日。月曜日。黎明五時、船室蘭に着しぬ。依つて船を下りて旅館丸一に入りぬ。本店に轉じて停車場の傍に移れり。彼の旅店は汽車によりて動かされたり。汽車の勢力は北海道に於て殊に著しとなす。朝食後直ちに長友室蘭支廳長を訪ひ、又支廳に到り農場の件に就て諮ふ所あり。而して防風林地は農場の市街地幷に鐵道敷地返附の代地として下附せらるる樣談判調へり。是れは然る可き事なり。

十一時某分の汽車にて室蘭を發しぬ。途々の風光余の衷心を牽くもの多し。幌別は嘗て瀧と共に宿したる時、彼も余も共に下痢して余等は虎病に罹りしにあらずやと疑ひし所なり。是れ滑稽の一面なり。嘗て兄と泊りたる時は、海岸悉く氷なる邊に寒飈に吹かれつゝさすらひて、夜半涙多かりし所なり。是れ悲哀の一面なり。登別は殊に忘れ難き處、彼處に費せし二週間は實に我等が爲めにはヨルダンの荒野なりき。湯宿の後方なる地獄池の山上に、余等が人跡絶えたる雪に跪きて祈りし禱は、當時日記に誌せし如く今も忘るゝ能はざる處なり。沼の端、江別、野幌等悉く我が記憶に新たならざるものなし。厚別より近く藻岩を望みし時は、余の涙は思はず降りぬ。余は自ら何が故なるかを知らず。否之れを知らざるに非ず、而も如何に是を形容すべき。嗚呼、余にして是れを殘りなく言ひ顯はすを得ば、余は安んじて文學者の生涯を送らん。

汽車を降りしに山崎の老母迎へ來り居れり。彼女は相變らず余を子の如く遇するなり。過る町々に見る者皆美しき夢を語るが如し。余の眼は送迎に堪へず。余の心は喜憂に堪へざりき。農學校舍は頽然として古びぬ。記せよ、彼處には嘗て有島武郎なる愚者遊びき。思誠堂の跡は南教授住まはれたれば甚だ美しくせられぬ。記せよ、彼處には嘗て有島武郎なる痴者住まへりき。彼は果して何になる可きや。塵埃も亦用ゐる處ある今の世に、彼のみは殆んど何の用をもなす能はざるもの〻如し。

山崎氏に着して夕食の膳に、余が嘗て用ゐたりし茶碗と箸とありき。此夜夢なし。

六月二十三日。 火曜日。朝佐藤校長を訪ひ、後、原敎授を訪ひ宮部敎授を訪ひぬ。後、原敎授と共に農園に新築校舍を見る。誠に田舍臭き建築なり。多少の修正を以て尙品位あるものとなし得可かりしものを。Elm の亭々として空高く聳えたる樣は、何時に變らぬ美しさなり。されども此校舍は遂に舊の札幌農學校たる能はざらん。余は思ふ、學校の事業は個人事業なり。如何に其總ての機關は諸種の元素より成立されたりとするも、其 nucleus たるものは個人ならざる可からず。余の敎育主義はかくなり。即ち余自身の力によりて集めたる金を以て、余自身の學力と品性とを以て余自身の學校を造り、余の死する時には——若し余自身の如き後嗣者なしとせば——之を解散すべきのみ。是れを余が實力以下のものに讓る可からず。又實力以上のものに讓る可からず。

原敎授と別れたる後、偕樂園を經て髙杉氏の家を訪ひ、後獨立敎會に到れり。末光績彼處にあるを以てなり。彼の唇は戰き眼は涙を含み、余に對して語を成す能はざりき。余も亦情屢〻逼りぬ。嗚呼、札幌は尙此の如きものを有す。札幌は余に最も美しくなつかしき所なり。余の札幌に來りし目的三あり。一は末光、一は足助、一は瀨川。余其一に於て大なる滿足を感じぬ。彼と共に宮川氏を訪ひたれども氏あらざりしかば共に大島氏を訪ふ。氏あり。談暫くにして足助を訪ひしにあらず。依つて雨と風とを犯して豐平河畔に散策を試み、なつかしき河畔を步みつゝ末光と親しく相語り、競馬場に出で郵便局にて彼と別れ、山田のお婆さんを訪うて、彼女の亡子の爲めに泣き、農學校の河野を訪ひしもあらず。夫れより原氏に到り晩食の招きに遇うて夜九時頃迄語る。農學校に對する慷慨談此一個の學者の唇よりさへ漏れぬ。

いまはしき事も多く聞きぬ。恩地及河野の件是れなり。壬生馬よりの書屆き居りぬ。彼は增田兄が余に與へたる書を見て大に憤慨する處あり、增田兄に兄を責むる書を送り、而して愛子には增田兄よりの書を示して彼女の決心を促さんとせるなりき。彼の熱情と愛意と彼をして此の如きに到らしめしは固より當然なる可しと雖も、而も余は彼の性急の却つて事を誤らん事を慮り、直ちに彼に送るに電報を以てし其擧を止めたり。

札幌の第一日は終りぬ。余は明朝より山本農場に赴かんとす。此夜も亦蕭々たる雨なり。

六月二十四日。水曜日。曇天、風あり。朝七時某分の汽車に乘じて札幌を發し小樽に到り、それより馬車を傭うて小澤驛に向ふ。馬車は余特別に借りしものなれば、輕くして其動搖甚だしく頭痛を催さん許りなり。北海道鐵道會社の工事漸く工を竣らんとして、鐵道の通じつゝあるを見る。行く道の無趣味なるは此地の特色なれども、蘭島を經て余市に入らんとする隧道の附近に小なる流れあり。「ハマナシ」の花紅う咲き匂へる間に稚蘆の緑淺きが幽かに風に囁きつゝある樣、總ての配置缺點なく調ひて可憐さ云ふ可からず。『我は海にそゝぐいさゝ川に沿うて生ふる蘆、潮風に搖られて幽かに立つる囁きは人の耳に入り難からんも、かたへに咲ける「ハマナシ」の紅なる花は聞きぬ』との意を以て小詩を編まば Wordsworth 振りの美はしきを得るなる可しと思ひぬ。されども成らず。

例の稻穗峠に來る。嘗て瀧と茲を越えたる時、

　涼しさはかしまだちする驛路のあさげの煙吹く宵嵐

と口吟みたる處は、今日は日暮れんとして越ゆるなり。御者鞭を按じつゝ悠然として松前追分を歌ふ。馬蹄漸くゆるく頽嵐身を襲ふ。何とはなき快心の思盡し難し。小澤驛に達せしは五時半なり。直ちに馬を傭ひ急行して倶知安に向ふ。旅店三浦屋に着せしは正に八時、山隈林廊蒼然として暗き頃なりき。稻穗峠を超ゆる時、車の動搖せざるが故に "Sorrows of Werther" を繙きて、Letter XCI "Songs of Ossian" の處を讀む。是れ實に此書の壓卷なり。猛烈なる相憐の情と高嚴なる道義の念とが、大火と大水との如く戰ひ爭ふ有樣は、眞に心靈の大觀なり。此の如く悲愴を極めたる活劇は、余未だ他に是れを見たる事なし。"This is the last time, Werther! You shall never see me again!" と云ひて私室に走り入りし Charlotte の美しさ、けだかさ、犯しがたさ神の如きに尙消し得ざりし Werther の情熱こそありがたけれ。狂へる如く其戶にすがり寄りて "Charlotte, Charlotte, one word more, only a last farwell!" と云ひしかども、女神の扉は戰きに閉ぢて一言をだに口にする能はざりし悲絕慘絕の樣は、小人の心をして熱して燃ゆるの苦痛に堪へざらしむ。余は此書の主張する思想を退けざる可からず。

されども若し此に一の事實ありて、而も其跡此書の如くなりしならんには、余は其人を詛ふ可きか、嘉す可きかを知らざるなり。余は到底今の宗教家に納れらる可き基督の弟子にはあらず。

六月二十五日。木曜日。余は此日夙起して宿を出で、以て農場に向はんと思ひつゝありしが、朝四時起き出づるに窓外風雨の聲耳に滿つ。止むを得ず晴間を待たざる可らず。此間、家及び山崎氏に致す可き書を作る。七時半に至り雨稍ゝ晴れたれば、意を決して馬を傭うて發す。驛遞の主人なりと云ふ赤毛布の外衣を纏ひ鬚髯胸を被へる老翁余を送れり。余の乘れるは仔馬を從へたる牝馬なりしが、仔馬途中にて來らずなりしかば牝馬の悲みは例へんに物なく、時に立ち止りて雲を見込みつゝ嘶く様憐れなり。嗚呼、人とは如何に無情の動物ぞ。我は强ひて彼女を追うて走らしめぬ。されども少焉にして彼女は再びその歩を緩むるなり。余は遂に絕えずなりて彼女の欲するが儘に委せぬ。されば農場に着せしは十一時過ぐる頃なりき。牝馬の歌は彼女を歌へるなり。(第三五八頁參照)

吉川一家は痛く驚きて余をもてなしぬ。されども余は老吉川と其妻とを好む事能はず。彼等は formal にして dry なり。彼等は眞に維新以前の虛禮の弊所を有せるものなり。余は最も此の如き阿諛者を厭ふ。

午後より雨を犯して銀之丞と共に、小作者並に開墾地を巡視す。小作者とは實に憐れむ可き階級なり。彼等は服從の外の何者をも知らず。余は彼等の丁寧に余に禮するを見て殆んど逃げんとするに至りぬ。同じく是れ人、而して一は彼の如く一は此の如くなる所以は何ぞや。是れ人類最終の理想ならんや。余等と彼等と相共に住む可く世は造られたり。相隔りて住む可きにはあらざるなり。戶數二十四戶なる可し。彼等の多くは勉强なる結果を示しつゝあり。

四圍の地と水と共に美なり。余はかゝる美はしき地が余の思ふ所の如く使用し得るを思ひては、心中に微笑を感ぜざる能はずと雖も、是れが爲めに多くの時間と多くの金と少なからざる苦慮をなさん事は、最も悲しむ可き事なりと思ふなり。余は余の energy が尙他の或る者に用ゐらる可く造られたるを信ぜざる能はず。巡回より歸りしは正に四時半なりしならん。

夜食後は銀之丞と農場の地圖に就きて今日見聞の事實を確かむ。後、銀之丞の父來り平凡なる事柄を阿諛まじりに語る。

余は最も此の如くして時間の空しく費され終るを厭ふ此の如き利益なき事の爲に就寢十一時に至りぬ。戶外には尙風荒めり。

六月二十六日。金曜日。空曇りて時に雨。朝食を終るや銀之丞氏の案內こて村戶長役場に到り、戶長に面會し種々此地方の事情を確めぬ。彼は最も正直にして仁惠ありげなる人なり。彼に隱匿の事ありとは思はれず。次に尋常小學校を見たり。當今生徒約七八十人ありと云ふ。村夫子先生余を其室に引きて種々談る所ありき。Goldsmith の村夫子は此の如きものにてはなかりしにや。

後市街地を出でて公共用地に到り、普く鐵道の通ぜる區域幷に三角形地及び我が農場の返還す可き貸附地等をも巡視して曾我農場に到れり。尻別川の上流に後方羊蹄なる山聳え立てる樣中々に美はしき眺望なり。蜓上の事務所に暫く休息し、中食の馳走となり其農場內を巡視し、二時過ぐる頃家に歸れり。それより鐵道用地等の件に關して相談する所あり。夜は又彼の老爺來りて柄になき事を云ひて人を困憊せしむ。

六月二十七日。土曜日。曇天、風。此日午前を費して返地後の農場設計をなし殆んど正午に至りぬ。午後農場中の小作者集り來る。彼等を寫眞後、送られて歸途に就く。途上の風光固より多く云ふ可きものなくて、倶知安に着し、馬を代へて五時過ぐる頃小澤驛に着し一泊す。

六月二十八日。日曜日。夙起裝を修め、五時驛を發し馬を傭うて山道を停車場に向ふ。稻穗峠を越ゆる比、雲時に破れて旭光棧道を射、野生のライラックなるべし、白き房の如き花の露を含める樣、可憐云ふ可からず。手の達する者至る毎にこれを摘めばやがて一握には餘る許りとなりぬ。此邊に多くこくはの花未だ蕾なるを見たり。「まこくは」の歌はこれによりて作りしなり(第一一八頁參照)。山道驛に着きしは八時なりき。而も余が荷物は來らず。汽車の將に出でんとする時、一人の小者これを負ひて馳せ來りぬ。五體汗に塗れて其急奔せる樣著し。されども荷物なる鞄は全くこはされてありき。驛々には好奇の乘客中々に多くして、小樽に着せし時は喧々囂々の聲耳に滿ちぬ。午前十時二十分の汽車にて小樽を發し、札幌に着し直ちに山崎氏に到りて中食を喫し、直ちに獨立教會の花のあつまりに到る(彼のライラックを持ちて)。余が嘗て敎へし少女等

も大きくなりてあり。余は實に何とも云ひ得ぬ一種のなつかしさに堪へざりき。余は彼女等に何物をも與へ得ざりき。是れ彼女等によき事なり。彼女等は既に神より凡てを受けたり。地球と地球に住めるものとは年々彼女より種々なるものを奪ひ去るなり。

それより大島氏を訪ひて河野君の事に就きて相談す。氏の云ふ所は亦學究の巢窩に陷りたり。宮部先生も亦爾かなり。余は靑年の敎育に於て此の如く倫理的束縛をなすの必要を見ざるなり。余の望む處は學生をして自由なる行動をなさしむるにあり。余は二氏が河野君に就いて懸念せる程爾かく多くの懸念をなさずと雖も、君の幼稚なる心が全く是れがために奪はれて遂に彈力性なきものに陷らん事を危む。

夕食後、原氏に恩地君を訪ふ。彼は病を得て錢函に療養しつゝありしなり。余は君に遇はんとして寄宿舍を訪ひたれどもあらざりき。彼は此一年間容易ならざる風聞を立てられたるものなり、彼はある一女學生と相關れりとされたるものなり。余の知れる友の多くは皆此の如き風說の末に走りぬ。余は深くこれを恥づ。余は余自身此の如き境遇にあるが如く感ず。神よ、願くは爾の御顏を隱し給ふ事勿れ。願くは余の恥を明るき處にひき出し給ふ事勿れ。余の足らざる信仰遂に彼等を誤らしめしか。さらば願くは僕の罪を鞭ちて彼等の誤を許し給へ。

此夜恩地君と共に夜の說敎に列す。東京に於て聽く能はざる嚴肅のもの、余は屢々涙を以て傾聽せり。札幌は實に眞理の搖籃なり。人若し神の攝理を空しくせずんば世を救ふもの玆より出でん。

六月三十日。火曜日。曇天。此朝余は逢阪君と散步す可き約をなせり。そは君が心靈上に於て一種の苦痛を感ずるが爲めに、到底獨立敎會に出席する事能はざるが故に、之を退會せんとすと云ふにあり。是れ余が嘗て經たる經驗なれば、余は大に君に同情し、出來得べくんば君に幾分の同情を分ち得ん事を望みしなり。札幌病院より森氏の前を經、靑年寄宿舍の方に迂回し、博物場に入りて君と相語りぬ。君は云ふ、現下の我は敎會の存在を認めず。加之、心靈の經驗未だ充分ならざる我が、徒らに敎會の末事の如きに關與して遂に驢馬に等しき無能者たらん事を悲しむ。是れ斷じて神の我等靑年に求め給ふ所ならじ。故に我は敎會を退きて自ら尙一層の修養をなさんとすと云ふにあり。是れ實に君が今日の立場にして如何ともすべから

ず。余は君に余の爲し得る限りを勸めたり。されども君は頑として余の云ふ所に服せざるなり。余は君の再び活動の地に歸らん事を祈る。かくて余は君と別れ、北辰病院に三好君を訪へり。

彼は肺炎に罹り病院の生活をなす事既に四十日に垂んとすと云ふ。痩せたり。彼も思誠堂に遊びたりし一人なり。彼は仙臺に到りて邪路に落ち中途にして救はれ、札幌に來りて眞面目なる生活に歸るや、病は續々として起り來り彼は屢〻失望の淵に臨みたりしが如し。彼は東京に歸りて後、美術學校に入らんとすと云ふ。或は寧ろ可ならんか。

札幌に來遊する青年幾干ぞ、而も其の多くは或は病に罹りて跌き、或は素行によりて倒れ、克く戰を續けて彼岸の標より眼を放たざるものは尠し。余は屢〻學者の新知識を失ひて無能となりしを、此上なき憐む可き境遇なりと思ひたりしが、青年の其行路を失ひしより甚だしく憐れむ可きものなきは、今日初めて心深く味ひ知りぬ。余の命若し神の許し給ふ所とならば、願くは青年に助力を與ふる事を以て余が一生の業とせん。祈りて行はれざる事なかるべし。塵も亦よく動き得るなり。

午後よりは嘗て余が札幌にありし時、なしつゝありし土曜會の集合をなさんとするなり。一時半より集り來るもの六人、河内完治、末光績、足助素一、逢阪信吾、工藤光雄、竹田茂是れなり。これ皆將來最も多く希望ある青年なり。彼等は爾後“Sartor Resartus”の研究をなしつゝありしと云ふ。余は今日語るに約翰傳第八章なる姦婬にて捕へられし婦人の事を以てし要之基督教の根本的思想は Love にあり、人は多く Love を說けば道德は柔に偏して又爲すなきものたる可しと云へどもそは眞に愛の眞諦に達せざるものゝ云ふ所のみ。基督が爲し給ひし生涯の一片を取りて考ふるに、若し愛を除かば殘る所何物ぞや。殘る所は零なり。愛に勵まされずして起りし凡ての力は、重力に反對して起されし力の如く、再び舊の位置に立ち歸さるゝを以て最後となさる可きのみ。人を鞭つ力、人を責むる力、悉く愛より出でて效果甫めて見る可きのみと云ふが如き意味もて語りぬ。後、河内、工藤、逢阪君等より交々所感を述べられたり。余は彼等の眞面目なる精進を感謝す、主は札幌の上に美しき種子を播き給へり。余は玆より大なるものゝ出でん事を祈る。

後雜談に移りて夕刻に及び共に打連れて夜學校に到りぬ。余が札幌に來りて見んとしたりし三者あり。一は末光、一は足

として舊の儘なる夜學校なり。余の心は眞に衷より躍りぬ。玆には眞面目なる勉學の行はるゝ所なり。所謂上流社會の人は助及び一は瀨川なり。今夜は余、瀨川に遇ひ得可きなり。余の心中には云ふ可からざる歡喜滿ち充ちぬ。到れば彼所は依然多く云ふ「人には否定し得可らざる自然の階級あり。貧者は到底貧者として勞働者は到底勞働者として其生を終ふ可きのみ。愁ひにこれに注ぐに知識を以てするは、徒らに彼等の苦痛を增加せしむるに過ぎず。頭を以て働く階級あり。手と足とを以て働く階級あり。換言すれば、上流と下流との階級あり。以て甫めて社會を組成することを得可し。無差別の境界は云ふ可くして而も實行し得可き所にあらずと」。焉んぞ然らんや。焉んぞ然らんや。嘗て教育の必要を說かれず、嘗て學術の趣味に接せず、而も赤兒の乳を慕ふ如く此學校に集り來る貧兒あるは何ぞや。嗚呼、我が天父何ぞ人を爾かく價値なきものとして造らんや。學ばんとするものをして學ばしめよ。共に手を取る事は、然り我等同胞同じき立場にありて、共に手を取る事は如何によきぞ。

蓬髮垢面の生徒我が周圍に蝟集し來れるに遇ひて、余は彼等に語るに實力に依賴す可き事と眞理を重んずべき事とを以てせり。彼等は余に聽けり。余の訥辯は初めより終りまで非常なる輕みを以て語られたり。余は云ふ可からざる滿足を覺えたり。

未だ演說せざりし前余はふと瀨川の姿を認めたれば、其名によりて彼女を呼びぬ。彼女は余を見るや凡ての物を捨て走りて余に來り、余の手を堅く握りて淚を飮みぬ。余も辛じて彼女の余に送れる書の、甚だ余の感謝す可きものなりしを告げたるのみ。嗚呼何の光榮ぞ、余此の如き人を友として有し得る事。彼女は殆ど余を熱愛せり。演說の後彼女を別室に引き、彼女に問ふに向後の希望を以てせり。彼女は淚に咽びて何事をも云ひ得ず、しかも其間よく決心を以て僅かに漏せし一言は、赤十字社看護婦たらんとするそれなりき。余は彼女の父之を許す可きや、彼女の健康よくこれに堪ふ可きや等を聞き、余これに對して出來得る限りの盡力をなさん事を約しぬ。嗚呼されども微力なる余には如何にして彼女の目的を達せしむ可きかを知らず。余の祈、彼女の熱心かはる事なくんば、神は彼女をよきに導き給ふなる可し。余は彼女の成功せん事を祈る。

余は與へたるよりは甚だ多くを與へられて彼處を辭しぬ。夜暗く雨繁し。歸り着きて彼やこれや余の心は限りなき默想の

爲めに戰かざるを得ざりき。

實にや余力弱し。此世にありて若し主の爲めに一事の爲す事あるを得ば、余の感謝は幾干なる可きぞ。

七月一日。 水曜日。朝稍ゝ晴れたれども後曇る。朝、原教授を訪れ共に博物場に到り、同氏の研究室に新たに來りし器械等を見る。氏の學術の爲めに熱心なるは實に驚く可し。氏も眞面目なる疑問の人。疑問の人は尊敬せざる可からず。

山田のお婆さんを訪ひて別を告げ、後道廳に到り土地の件に就き談判す。後農園に到り鈴木武良氏に會ひて直良氏より問はれたる事件の問合をなす。午後家より送金ありし爲め北海銀行に到りしに、姓名の間違の爲めに遂に金を取る事能はず。三時家に歸れば河野君來る。彼は停學を命ぜられたり。余は多く彼に就いて書く事をせじ。後、山田ひな氏來る。

午後五時より宮部教授の晩餐に招かる。會するもの大島教授及び高杉氏是れなり。八時迄語る。氏は實に good man なり。されども彼は凡ての人の弱點に同情し得る程の襟懷を有せず。余は是を以て教育者としての氏の唯一の缺點なりと思惟す。他に於て間然す可き處なし。凡ての人に同情し得る heart を有せん事は如何に困難なる事なる可きぞ。而も神の前に同じ靈魂を與へられたる我等は、如何なる場合にありても他人を呪ふべき理由を有せざるなり。

八時より class meeting に列して十時に至る。彼等は舊の如き彼等なり。唯滿二ヶ年の經驗と年齡とを加はりし事あるのみ。後寄宿舍に逢阪君を訪ひたれども寢ねてあらざりき。余は今夜、彼と共に後庭に出でて共に祈らんと望みしなり。余の力彼を導くに由なき時、唯心よりの祈のみ或は聞かるゝ事もやあらんと思ひたればなり。

明日は再び長く相見ざるべく此地を去らざる可からず。余の心の奧底にはもみ消し能はざる苦痛を感ず。主よ、此の美はしき地、聖き地の上に祝福を賜へ。此地を守りて永遠に新たなる命の中に生き永らへしめ給へ。小さき心御旨を推測す可き由もなけれども、靜かに思ふ時主は確かに此地より或者を出さんとし給ふ如く見ゆるなり。主よ願くば玆より人と國とを救ふものを出し給へ。嗚呼余が靈魂の生れたる處、余は此地の祝福を祈らざる能はず。余は亦余の愛する教會の上に祝福の裕かならん事を祈る。余の心に同情をなし呉るゝ友等の上に、祝福の裕かならん事を祈らざる能はず。主よ、赤子の云ひ盡し能

はざる所に耳を傾け給へ。アーメン。

七月二日。曇天。余は日記を錄し誤れり。余の夜學校に到りしは先月二十九日の夜なり。

余は今朝八時五十分の汽車を以て札幌を去るなり。數年の間は再び此地を相見ざる可し。山崎を辭する時余は老母の歎きを見るに堪へざりき、余は再び彼女を見る事を得可きか。彼女と余とは此時を以て測知す可からざる永遠の距離に相去らんとするにはあらざるか。何を以て此深甚なる謎語を得解く可きや。

共に東下せしもの河内完治及び末光績なり。余は車窓によりて藻岩山の遠ざかり行くを眺めつゝ熱き涙を零しぬ。彼處は實に嘉き處なり。

室蘭に着せしは三時半頃なりしならん。余は直ちに支廳に到り支廳長に會はんとせしが、恰も出張中なりしかば其儘にして逆旅に夕食す。此夜十一時船は發す可きなり。夕方より甚しき雨となりぬ。夜晴きに乘合馬車にて宿を出で、揺られつゝ艀船休憩所に到る。船燈の暗く懸れるとストーブの周圍に寒げに集りたる人々の姿こそ忘れ難けれ。此寒きに夏服着て老いたる巡査は正客なるべし。官吏と見ゆる若き夫妻の、妻は兒を負ひ、夫は傘と毛布と小さき包とを提げたる。痛く老いたると見ゆる女の、大なる荷物を坐せる身の兩側に置きて、逃がすまじとしかと手を懸けたるか其の眼の中々に鋭き。書生の三人寒げに相倚りて低唱詩を吟ずる樣の悲愴なる。切符賣下所に船員の服と帽子とを被りたる老漢の、大なる煙管を口にして、雨聲を聽き入る如くして、火影に眼を据ゑたる。余等も亦一幅畫中の人たる可しと思へば、そゞろに人生の活畫を見るの心地なり。やがて船に乘りぬ。荷物と同じく船の胴より投げ入れらるゝ如くして、例の蠶棚に三人の身を横へぬ。河内と末光とは余に談話せよと云ふ。何を語る可きやと云へば“Sorrows of Werther”なりと云ふ。好しとて余は語り出でね。語り進みて余の眼は屢ゝ涙に濕へり。純潔なる彼等の心は逸早く同情に動きて鼻をすゝりぬ。船は一聲の汽笛を殘して濛々たる雨の中を動き出しぬ。余の物語りは長かりき。漸く終りを告げて「面白かりし」と聽者の歎息を漏せるを聞きしは、内浦灣の半途ばかりをスクルーの軋りつゝありし時なる可し。

ヴヰナス

みどりごの　ねむりに　にたる　うみのうへ
みなわと　ともに　うまれにし
あでなる　すがたは　むかしがたり
よは　とこしへに　すゑ　にごりて
ゑまひの　おもわを　そらの　ほしに
うかがひて　なく　かなしき　さだめ

まなつの　ひかり　あせて
ゆふやみ　そらを　みづと　すます
ふりさけ　みれば　あまのはらの　をち
たゆたひ　いづる　ほしの　ひかりよ
こひねがはくは　ばんみんを　さしまねき
ひとしく　まなこを　あげしめばや

あかるきと　やみとの　さかひに　たち
いそしみと　いこひの　たうげに　をり

一九〇三年

くしき　しばしを　つかさどらす
つかれはてし　このみ　すなに　なげ
つれづれと　みいるれば　なつかしさよ
さすらひより　かへりて　かたくなのこ
なきつゝ　はゝの　むねに　よる　おもひ
ひとのよに　なみだの　あざわらはるゝとき
つきにだに　ひそむ　よわき　こらよ

こよ　ヴヰナスの　あはき　ひかり
せばめる　まゆね　ひらくべし

うたがふ　まじきぞ　この　ひかり
よし　あはくとも　かすかなりとも
此よに　のこりて　ちりを　てらす
このひかり　きえんまで
われらの　かひなに　あせを　みてよ
われらの　こゝろに　ちしほ　みてよ
われらの　まなこに　なみだ　みてよ
ひとのこの　ちかひ　地に　就らでやは

七月三日。此朝早く船は函館に入りぬ。されども、雨の降りしきる樣は衰へたりとも見えざるなり。世に最も傳奇的趣味に富めるは、船の港に入りて、船客の上降の時より甚しきはなからん。殊に下等船客に於いて爾かなり。我は何處の誰、何を商賣となすもの、閑暇あり給はゞ訪ひ來り給へなど云ふも慌だしげに、手は荷物を引きしむるに忙はしき傍には、若くして運拙かりしと見ゆる女、嬰兒を背負ひて氣拔したる如く、眼をボーイ等の甲斐々々しく荷物調べる方に向けたる儘、有耶無耶の思出でに沈みたる樣なる。手拭にて向鉢卷したる老母の、赤毛布かきのけつ起き上りて、覺束なげに船の港に入りしやを隣の若人に聞きたる。一夜爛醉して松前追分など面白く謠ひて、船中に起る驕樂を獨り己等に集めたる漁夫の、鉢卷したる儘、肌脫ぎたる儘、酒壜を握りたる儘、煙管をつまみたる儘、狼藉して船の着くをも知らず熟醉に入りたる。涙を誘ふべきたづきするなるべしと見ゆる若き女の、白粉處々剝げ落ちて髮亂れたるが大なる帶ぎごちなげに横はりて面背ら眼見張りたる。書き出でなば數限りなき面白さと哀れさの限りを盡せり。船の錨を下すと共に彼等は吐き出さるゝ如く艀船に乘り移り去り、やがて又、新たなる歷史を此船に開く可き幾多の新分子は、轉び込むが如く入り來るなり。此光景も亦一場の面白さなり。

朝十時、船函館を出でぬ。雨頻りなれば甲板に出でゝ遠ざかり行く蝦夷一帶の島影を望まん由もなく、色々なる事共思ひ屈して朝と晝との食をもしたゝめず。夕方靑森灣頭に入る。艀船の中より再び雨となりぬ。

此夜七時某分の汽車に乘る。涼威甚し。三人毛布をかつぎつゝ達磨の如くになりて寢ぬ。燈は暗し。思ふ所は多し。

七月四日。曇天。朝五時某分、仙臺停車場に入る。兄は余等を迎ふ可く來り居れり。車上朝の快さ云ふ可からず。彼の家に入るに處々黃鸝の歌を聞く。

朝食後余は河内、末光を導きて仙臺見物をなしぬ。先づ師團より櫻岡の公園に到り、やがて廣瀨河畔に出で、三人石を敷きて暫く小兒の如く相戲れたる後、河を横切り向山なる伊達正宗の廟に到り、廟後の山に古刹の壞れて古りたるあたり、人無く樹大なる所に横臥して歌など謠ひつゝありし間に、三人とも眠りに入りぬ。やがて末光先づ覺め驚きて山を下り、晝近き

に家に歸り兄と四人樂しき中食をなす。午後四人にて廣瀨川の上流に到り、種々なる事共語る。

夕方より兄と余とは、田邊知事の晩餐に招かれたれば、是れに到る。日本風の平凡なる家庭なれども、田邊知事は何處までも昔風の武士なり。快活なる老人なり。原夫人はよき人なり。兄は後に此の如き人惡事を思ひ得るやと云ひぬ。眞に然り。

夜八時彼處を辭して家に歸り、四人再び卓を圍んで余等の前途を語る。兄の云ふ所は復た昔の兄の如くならず。河內と末光とには稍〻異邦の語なりき。されども今の世に一歩の改善を與へんとするものは此の如き意見を懷かざる能はざる可し。余は淚を以て兄の云ふ所に同情せんとす。されども余果して兄の云ふ所の如く步む可きかは余には未だ大なる疑問として殘れり。余は尙余の狹き狹き道を捨つる能はず。神よ、余等によき道を敎へ給へ。余等の道は何處に赴く可きものなるや。余等の同情は余等の同胞の如何なる部分に最も多くを注ぐ可きなるや。余等は未來に高き夢を持つとも、現在に實行の汗を垂れざる可からず。如何なる道を行く可きぞ。此に到りて余は余の生涯の餘りに單調なりしを悲しむ。神は余に如何に思ふ可きやを敎へ給へり。されども如何に行ふ可きかに至りては、未だ敎叱を殘し置き給へるが如し。主は尙余をよきに導き給ふなる可し。主の笞、主の鞭共に余の衷なる人を慰む。外なる人如何に苦痛に入るも、衷なる人の破顏を見んは如何によき事なる可きぞ。主よ、無に等しき此卑僕を導き給へ。

此夜十時某分の汽車にて仙臺を發す。原氏夫人は余を送らんが爲めにわざ〳〵停車場迄來りてありき。汽車の發する時、彼女に別離して哀情動きぬ。彼女と余とは數年の間再び相見る可からざる運命の下に置かれたり。

七月五日。日曜日。半晴。朝、九時某分、上野停車場に着しぬ。家に歸りしに皆健在。母上も大に快方に向はれてありき。感謝せざらんや。されども東京は余に好ましからざる所なり。余は東京に住める人の心靈的に益〻衰弱するを至當の事なりと思ふ。彼等は恰も病菌の培養所の中に閉居せしめられたる試驗用飼畜の如し。Tolstoy の語を藉りて云へば、彼等は實に此世に事ふるものゝ中殉敎の苦痛を忍びつゝあるものなり。余は彼等を悲しむ。余は彼等にも余の有する何物をか頒たん事を望む。

七月七日、火曜日。此朝榊病院より電話ありて來れとの事なりしかば、余は夙朝河野夫人を病室に訪へり。余は彼女に何を語る可きかを知らざりき。彼女の涙は屢ゝ眼に溢り來り、其隻句一言皆其兒を思ふの熱情に燃えざる事なし。彼女は今日余に彼女の兒の學費に關して悲しき事を語りぬ。余は敢て破顔を造りて略ゝ彼女の兒の行動を語りぬ。余の胸此の如き苦痛を感じたる事は少し。余は彼女に於て Augustine の母を思ひ起しぬ。彼女の愛に滿ちたる祈聞かれざる事あらんや。余はこれを信ず。されども重ね〴〵彼女に來る試煉も餘りに多きかな。彼女の忍耐に比すれば余のそれの如きは實に微々たるのみ。時に胸を揆ちて己れの逃る可からざる運命に涙を垂るゝものよ。何の痴愚ぞ、而して何の不信ぞ。

七月十四日。火曜日。朝は雨なりしかども晝よりはやみぬ。暑し。

七日より此日に至る迄の日記は何が故に記されざりしや。そは平凡なる無意味なる生活が行はれたればなり。余は此間殆んど農場の事の爲めに惱殺せられぬ。余は殆んど嘔吐を以てこれに對す。而も余は忍んでこれをなすなり。自ら己れの愚を哂はざるを得んや。加之余は此間殆ど一書の讀むあるなきなり。生くるもの食を絶して饑餓を覺えざらんや。余には實に無くてならぬもの永く缺けたり。余は殆んど旬日に亙る日子を失ひぬ。余はこれを悲しむ。此夕新渡戸氏邸に於いて晩餐を供せらる可き日なりしかば、兒と共に五時頃よりこれに到れり。氏は余等を引きて快活に語れり。其談片の中に面白き逸話あり。氏曰く、

「余の Baltimore の Johns Hopkins University にありし頃、友を訪はんとして或る下宿屋に到りしに、恰も不在にて余は主婦の勸むる儘に暫く應接室に友の歸るを待てり。余と主婦とは相對して坐し、主婦の膝には四五歳と見ゆる可憐なる女兒倚れり。余と主婦との相語る間に、女兒は時々余を見たる眼を主婦に移して、何事をか私語くなり。主婦は頻りに之を止めんとするもゝ如し。此の如くする事再三再四なり。余の小兒を酷愛する癖は遂に堪へ難き度に到りぬ。余は彼女に問ふに余に何事をか語らんとするかを以てしぬ。彼女は喜ばしげに然りと答へぬ。かくて曰く、『妾日曜學校にて card を與へられたる中に、印度に住める或る黒兒の其母痛く病みて死ぬ計りなるを看護し、周到至らざる所なきを記せるを讀みて

より妾は彼の黒兒を憐れなりと思ひて朝と夕と必ず彼の爲めに祈りたりき。君の容貌を見るに或は印度より來り給ひしにはあらざるか。若し然りとせば妾君に問はん、彼の黒兒は今如何にあるや、彼の憐む可き母の病は怠る所ありしか』と。余は之を聞きて涙を垂れんとせり。余の心は云ふ可からざる淨感を覺えぬ。爾後余は其家の前を通る毎に、此家必ず天使の居るなる可しとの想に騙られて脫帽せざる事なかりき。彼女名を Luisa と呼びぬ。爾後杳として彼女と相關る所なかりしが、一昨年亞米利加を廻りて Baltimore に到りし時、余の手には女子よりの手紙投げられぬ。訝かしみつゝ封を開けば是れ Luisa の母よりのものなり。余の此に來れるを聞知し必ず相見ん事を欲するが故に、一寸閑を以て來り訪へと云ふなりき。余は即夜雨降りて更けたるを冒して、今は稍ゝ郊外に移り住みつゝある Luisa の家を訪ひぬ。擧家の狂喜知る可きのみ。余は頻りに Luisa を求めたれども不得。暫くして戶背 "Here is Luisa" と聲高く呼びつゝ入り來れるものあり。熟視すれば是れ洵に往年僅かに單語を操りし Luisa 其人にして、今は窈窕たる十九歲の美少女となりぬ。余は彼女を燈近く近かしめて其顏を打ち守りつゝ、痛く失望せりと云ふに、彼女は訝る如く其何故なるを問ひぬ。余は答へたり、『さなり御身は餘りに多くの年齡を加へぬ。余は今御身を抱く事能はず。御身の頰をつまむ事能はず。御身を昔の如く愛する事能はざるなり。嗚呼御身は餘りに多くの年齡を加へぬ』と。されども彼女は今も昔の如く美しき資性を改めずとぞ。彼女は今小學校の語學の敎師をなしつゝあり。」

其外彼れや是れや面白く美しき話を聞きぬ。兄と四谷停車場に別れ、余は家に、兄は赤坂なる肉の兄を訪ふ可く別れぬ。

七月十五日。 水曜日。此日は新渡戶氏一家を招くが爲めに、朝來奔走をなして暮に至りぬ。夕刻より一家來る。色々なる事して一夜を割合に樂しく過しぬ。此日新渡戶氏より兒玉男內務大臣たるに付き、その祕書官たらずやとの勸告あり。斷然謝絕す。

七月十九日。 日曜日。十五日より今日に至る間も殆んど土地の事の爲めに浪費せられぬ。余は誠に此事あるを悲しむ。余は何故に此貴重なる時間を人間の福祉の爲めに捧ぐる事能はざるや。一個の人富みて、裕かになりて、而して死して……是

れ何ぞや。

朝九時兄と市ヶ谷停車場に會し、共に內村先生を訪ひぬ。先生は靜岡に傳道に到りて在らず。彼の家族と弟子とは嚴肅なる感話會をなしつゝありき。されども余は彼等の話に充たざるものあるを見出しぬ。余は彼等に告ぐるに北海道に於いて聞きたる勤勉なる農夫と情厚き少女との事を以てせり。余は自ら余の餘りに出過ぎたる處置なる事を思はざるに非ず。されども余は或者の力余を强ひてかく云はしめを感ず。基督教信徒ならざる農夫と少女との行動は、實に我等に力ある鞭撻なり。嗚呼余焉んぞ福音を恥とせんや。唯福音に恥とせられん事を悲む。主よ、爾の途は嶮しくして遠し。力弱きものを導き給へ。余は無よりも憐れむ可きものなれども旣に御光を見たり。今は退く可からず、進ましめ給へ。

暫く內村夫人と語りたる後、彼所を辭しぬ。午後新渡戶氏の "Intercourse of U. S. A. and Japan" を讀む。是れ氏が二十五歲の時起草せしものなりとぞ。余の力をこれに比すれば唯々慚愧に堪へざるなり。

夕食後直良氏來り、父上等と維新以來暗殺に遇ひ、又は遇はんとせし人の事を語る。秀香蘭の如く胸に入る。

蟲の聲漸く冴えぬ。秋來ると云はんは未しなる可し。されども蟲の聲漸く冴えぬ。天晴れて星斗闌干。

七月二十日。火曜日。午前の間は時々曇りて雨をさへ催したれども、午後晩くより忘れし如く晴れ上りて、暑氣中々に烈しかりき。

朝家に在りて "Inte cours of U. S. A. and Japan" を讀む。Preface なれば充分此書の價値を判ずる事能はざれども、其文章の自由自在は眞に美しさの餘りなり。是れ氏が二十五歲のものなりとや。余は幾度か疑はざるを得ず。不遇余の如きものも亦酷だ尠きかな。午後工藤に到りて寫眞を寫しぬ。是れ恐くは余が至肝至腕の服を着て撮影する最後のものならんか。此服裝は余には最も樂しきものなりき。これを着て横行するに天下眞に懼る可きものなきを覺えぬ。祝す可きかな此衣。此衣遂に脫せざる可からざるか。それより兄を訪ふ。暫く懇談して晚食の馳走に與り、共に上野に到りて繪畫展覽會を見る。一も見る可きものなし。只上野の翠色は暫く田園にあらざりし余等をして、云ふ可からざる慰藉を感ぜしむ。不忍池の蓮の香

など心に沁む計りなり。馬車にて小川町に到り本屋のひやかしをなす。英和字彙、和英字彙、及び年表を買ふ。今日壬生馬鎌倉に行き、夜に至りて英夫、鎌倉より歸り來りぬ。

此夜河野孝太君を太田邸に訪ふ。彼の改心は尙余に疑はしき所あり。彼は眞に憐れむ可き弱點を有せり。そは彼の character の weak なる事なり。彼の失敗の凡ては、殆んど此弱點より胚胎せられたるものなり。余も亦大に此弱點を有す。故に余は彼の墮落の經路に同情せざる能はず。されども彼の道は痛く謬れり。今にして彼が道を直くせずんば彼は逃るゝ所あらざる可し。

夜に至りて冷味又々加はりぬ。行郞の湯地氏にて得來れる「すゞむし」美しき音に鳴くなり。秋意動くに近しと云ふ可きか。

七月二十二日。木曜日。曇天夕に至りて雨となりぬ。此頃余の讀める所は雅歌書なり。是れ永く聖書の中より除かれたる書なりとぞ。しかも其言々の鋭き事兩刄の劍の如く、讀む者をして思はず手に汗を握らしむ。余は此書を讀む每に恥面に滿つ。嗚呼然り「信仰若し行を兼ねざれば死ぬるなり」。

朝新渡戸氏の "Intercourse of U. S. A. and Japan" を讀む。今日は愈ゝ Perry が日本に來るに至りし事歷を記せる所に到りぬ。興味饒かなる所多し。其中他日の參考となり又記載の美はしきものを下に(拔萃略す)。

晝食後休息の時を利して蘆花子の『トルストイ傳』を讀む。今は彼の傳も早余には多くの興味を與へずなりぬ。余は彼の信仰と行爲との或點以上に同情を寄する事能はず。

六時七分、市ヶ谷發の汽車にて兄と共に內村氏を訪ふ。車に入りし時より雨降り出しぬ。角筈の隱棲に到り坂を昇らんとせる時、微吟しつゝ庭にある氏を見たり。氏は快く我等を其室に引き其胸を披きて、慈母の其子を敎へる如く我等を敎へぬ。談稍ゝ一時間半に亙りぬ。其中余の最も深き注意を惹きたりし一二を拾はゞ、

兄の Resurrection の意義不明なるを問ふや、曰く「是れを解釋する前に第一に考ふ可き事は、基督敎の我等に要求する第一の claim なり。そは我等の罪なる觀念に鑿入する事なり。是れ實に基督敎の根本思想にして、我等が我等の罪の拔き難き

を知ると共に、我等の罪許されたりとの自覺を得るに到る迄は、他の凡ての事は解釋せられ得可きにあらず。Resurrection の如きも若し果して上の問題を隈なく解釋し得たらんには、容易に解く事を得可きものなり。基督教は理論にあらず、fact なり。Meditation にあらず、vision なり。而も是れ夢の如き vision にあらず。基礎固き vision なり。」

余の Tolstoy の基督教を問へるに對して曰く「Tolstoy の宗教は Carlyle のそれ、Emerson のそれと同一にして、基督教は natural man は誰にても其 effort を以て得らる可きものとなすなり。即ち Unitarian と同一の口吻なり。されども我は爾か信ぜず。我等自身の力は無なり。我等只基督を信じ彼より受くるものあるによりて初めて人たり得可きのみ。Tolstoy の宗教は Tolstoy の容貌が極めてよく示す如く、人を責むるは勿論常に常に己れを責む。而も我が信ずる所は異れり。我は我の至つて無力なるを感ずると共に、又人の有し得ざる大なる力を有する事を信じ、且つ我が同胞に對し己れと同一の弱點を有するの故を以て、無限の同情を捧げ得るなり。

「Resurrection の解釋に勝りて困難なる基督教の問題は贖罪の教理なり。Resurrection は肉體の事なれども、Forgiveness of Sin とは靈魂の事なり。我等人の罪を負ふとも、其人の罪は永久に消ゆる事なし。而も基督我等の罪を負へば我等の罪は即ち淨めらる。是れ殆んど解釋以外なり。されども是れ否定す可からざる事實なり。何者も此大事實を動かす事能はず。」

「基督教には foundation となる可き一二の大切なる事實あり。此事實絲の如く相連絡して聖書中の事實を包めるなり。我等は此絲を求めざる可からず。而して得ざる可からず。其他皆否なり。」

「我時に云ふ可からざる寂寥の感に堪へざる事あり。我若し Carlyle の如き道を歩みつゝありしならば、我は遂に其寂寥の思に堪へざりしならん。しかも Paul の如き道を歩むが故に、我には寂寥に伴ふに大なる慰藉あり。我是れによりて嘗て失望せざるなり。君等米國に到らば眞に人生根本第一の問題に着眼せよ。其他は咸從つて解けん。我等が哲學と科學とを研究するは、哲學と科學とが到底人心最奥の要求を充すものにあらざることを知り且つ證せんが爲めなり。科學は laboriously に宗教の single fact を確めんとして進みつゝあり。」

其他氏の語る處切々として我等の肺肝を突くものありき。余は氏の持說に對しては、遺憾ながら贊成の意を表する能はざるものなれども、氏に接する時には是等の疑問は何れにか影を潛めて、唯傾聽の餘を知らざらしむ。余此の大なる靈魂を尊敬す。彼の上に祝福の益〻裕かならん事は余が衷心よりの願なり。

歸途云ふ可からざる樣々の感慨多し。雨の中を獨りとぼ〳〵と頭より濡れて家に歸りぬ。家に着けば大厦は巍然として聳えつゝあり。嗚呼是れ遂に何者ぞ。嗚呼余に尙 St. Francis の勇氣と確信となし。主よ、願くは此不順の子を鞭ち給へ。今宵母上の余に痛くやさしきを見ぬ。余の感謝は淚とならざるを得ず。英一兄の歸時近づきぬ。余は何の顏色を以て憐む可き彼を迎ふ可きか。

七月二十三日。金曜日。「兄弟よ、善行を行ひて倦む事勿れ」（帖撒羅尼迦後書第三章十三節）。〔"Intercourse of U. S. A. and Japan" の拔萃あり略す〕

以上は朝讀みたる『日米交通史』より拔萃せしものなり。午後休息の時間に『思出の記』を讀む。彼の筆は確かに活きてあり。彼の氣の活きつゝあるを示すものなる可し。彼の書には特別に卓越せる處なきも、宛ら草木の自ら地に影をなす如く極めて自然に極めて自在に描出せられたる點、他の諸作に比して一頭地を拔けりと云ふ可し。是れ實に明治年間書生の心理史なり。彼は Tolstoy の如く、其著作に於て夢を語らざらんと勉むるものゝ如くなれども、著者の詩人的方面は影の如く脫逸して、濫りに詩人を以て任ずるものゝ遙か上に位するは多とす可からずや。自然に對する研究の緻密なるなど殊に尊きを覺えずんばあらず。

休息後再び『日米交通史』を讀みて夕方に至る。夜『憶雪錄』の續稿を成して、十二時半に至る。余の性懶怠にして未だよく全文を成せる文章を作りし事罕なり。是れ余の痛く恥づる所。此夜筆執りて主人公の境遇に同情の念禁ずる能はず。是れ全く余の虛構より出づるものなれども、余は眞に余の隣に此の如き人あるを覺えざる能はず。彼の如き人はなきか。彼の如き人はあらざるか。而して世は克く之れが爲めに泣きしか。あらず、あらず。言はざる勇士伐られたる如く倒る。而して千人

萬人平然として自己の福祉を急ぎて、其死骸を乘越えつゝあるなり。

七月二十四日。金曜日。朝より曇りて夕には雨となりぬ。夜靜かに食堂に坐りて母上としめやかに語るに、行郎が殘し置きたる松蟲の夜の涼しさにや聲細りて雨に鳴く寂しさよ。秋の門漸く近づきぬ。機杼の歌、金風の聲勇ましくし、而も悲しき光景は見るが如く余の眼を過る。好來秋。余又再び汝の懷に抱かれて思ふ儘に余の密かなる涙と親しまん。

何處行き何處さまよふ我が身ぞも小雨つれ〴〵物思はるゝ
抱くべき人もありなば我が涙つめたきものか問ひて見ましを
夏に似しさかりの命おごりあへで胸うつまゝに泣く人もなし
いかなればひたすら秋はしたはるゝ男の子二十五さてよわいかな

朝、東京府廳に旅行劵の下附を受けに行き、後横濱銀行支店及び紙店榛原にて紙類を購ひ家に歸る。榛原にて余に紙を賣りたる少年あり。打見るに何處とて眼に附く所はなけれどもいぢらしきまで可愛かりき。彼の運命は彼を將ゐて暫く彼處に蟄伏せしむ。而も余は彼が池中のものにあらざるを思ふ。

午後阪本俊健氏を訪ふ。筆子さん大きくなり居れり。雨を冒して白鳥先生留守宅を訪ふ。若くして美しく且つよき細君は親しく余を迎へて暫く過去の夢を語りぬ。彼女は其當時に變る事なく純然たる處女なり。彼女と先生と先生の母君が、余の爲めに爲し給ひし厚遇を思ふ時、余はしみ〴〵と師恩の渥かなるを感ぜずんばあらず。祝福願くは彼等の上に裕かなれ。夫れより西村氏を訪ひぬ。彼は今回宮崎縣參事官を拜命し任地に赴かんとするなり。色々の事共語りぬ。余は屢〻泣かんとせり。彼の妻は tenderness の代表者とも云ふべきものにして、彼女の云ふ所は余の腸を剔るなり。

嗚呼英一兄の事遂に一種の悲愁に終り去らんとするか。人生の悲慘事之れに過ぎたるはあらんや。余の彼に對する同情足らざるが故のみ。余は彼事を思ひめぐらす時、眞に死の如何に寧きものなるかを思はずんばあらず。

頃來余の感情復激し來りぬ。苦しき幾日かを過さざる可らず。人は凡て余の衷心を知らず。是れよき事なり。

七月二十六日。日曜日。晴天、夕方より雨。朝家にありて父上の爲めに作圖をなし、九時半頃より太田氏に孝太君を誘ひて、海老名氏の教會に到る。平凡なる説教なりし。而も孝太君には何物をか與へしならん。午後愛子を訪ねて彼の事共語る。余は彼女の決心の漸く固きを見る。而も余は敢て如何なる決心なるかを問ふ大膽をなさゞるなり。されども此事局は遂に一定の結論に達せざる可からず、達せしめざる可からず。思ふに壬生馬の云へる如く其道二あり。一は即ち斷じて彼女彼家を去らん事なり。一は即ち彼女が凡てのものを犧牲となして彼家に留まらん事なり。其何れがよき道なるかは、余の鈍れる心遂に判斷に苦むなり。運命の人の命を窮迫する正に此の如きに到るか。余の見る所を以てすれば是れ余の生涯に與へられたる特別の天啓なり。其神よりなると惡魔よりなるとを問はざるなり。惡魔も亦余等が師なり。

それより新渡戸氏を訪ふ。兄既にあり。別に注意す可き事なし。彼處にて夕食の馳走となり、共に帝國教育會に到る。蓋し氏の演説あるが故なり。到れる時靑柳有美氏將に演説しつゝありき。奇警を發して奇言を吐く。蓄音器を聞くが如し。

新渡戸氏の演説は「ゲーテとカーライル」と云ふなりき。氏の狡獪手段は其の演説の大部分をカーライル論もて蔽ひ盡しぬ。されどもそは興味尠きものにはあらざりき。嘗て内村氏カーライルを論ずるの序に曰く「札幌に於て初めてカーライルに手を染めたるは新渡戸なりき。而も余は今に於て最もカーライルの實行者となれり。後の雁が先になりしとは眞に是れを云ふ可きか」と。是れ理言なり。されども新渡戸氏の如きはカーライルの實行者たり得可き人にあらず。カーライルと新渡戸氏とは其天分に於て異邦人なり。されども新渡戸氏が Carlyle より學び得たる三大教訓は、確かに Carlyle が教訓せんとせしものなり。三大教訓とは何ぞや、曰く manliness、曰く faithfulness、曰く love 之れなり。是れ眞に Carlyle がその生涯を通じて宣傳せし所にして、其 manliness は "Everlasting No" の末段に於て窺ふ事を得可く、其 faithfulness は "Hero Worship" の各所に窺ふ事を得可く、其 love は "Everlasting Yea" を燦然として飾りたる nucleus なり。新渡戸氏は "Sartor Resartus" を反讀する事殆んど十八度に達し、齡既に四十を過ぎて猶且之れを捨つる事能はずと云へり。是れ誠に忠實なる人の言なる可し。苟も一個の哲人其生涯の血と涙と汗とを搾出して創り得たる思想を見るに、輕率の行爲を以てして可なる可けんや。

七月二十八日。火曜日。快晴。此日西村保吉氏宮崎縣參事官として赴任す可き日なり。此日余も亦鎌倉に島田三郎氏を訪はんとするの心組みあり。仍て朝七時停車場に到る。彼の家族旣にあり。三兒欣々として余の周圍に集り來り、余に約するに文通を以てせり。何故に小兒はかく可憐なるものなる可きぞ。彼の細君は余と別るゝ時泣きぬ。余も亦泣かんとせり。心弱きものなる哉。

余が持てる荷は夏衣一着、食物若干、聖書、"Sorrows of Werther," 及び sketch book 之れなり。固より余が單に一日を彼處に過さんと思ひたればなり。七時四十分の汽車に乘る。四條と同車せり（觀想錄は初めて四條なる名を書せしならん、されども是れ二條の改名したるなり、名は變れり、されども人は舊の如し）二三の新聞を讀みしのみにて、讀書もなく雜談に時を移して鎌倉に着き、車を傭うて家に入り直ちに再び島田三郎氏を訪へり。余は初めて彼に遇ふなり。彼は極めて禮儀厚き人なり。余の每日新聞の海外通信者たらんとする望みを直ちに承引し呉れたり。

壬生馬と行郎とありて、隆三は今日は片瀨に到りき。午後暫く語りたる後、余は河野の令孃等の材木座に來りつゝあるを訪ひぬ。姉妹三人及び他の緣者一人と下女とを加へ、五人の樂しげなる生活なり。嗚呼、彼の不幸の兒幼くして流離同棲せざるもの、そも幾年なりけん。而も今後彼等一堂に會し睦みを新たにす。之れを見るもの誰か喜ばざらんや。余も自ら愁眉の開くを覺えて暫く相語りぬ。津田仙氏の孫女あり、畫に志あり。畫の事など語る。女子には何か藝術の嗜みあらせ度きものなり。

夕方家に歸る。夜食後獨り濱に出づ。月照りて金星の影殊に美し。余は獨り流材に踞して瞑想に入りぬ。悲哀を含める（ならん、如何となれば自ら淚の流れ出れば）樂しさに遇ひ、恰も天父の胸に倚れるが如く覺えて、幼兒よりもをさなげなる祈禱を捧げぬ。

嗚呼此地は遂に忘れ難き所となりぬ。余が生涯の幾部分は、確かに此地に於て用ゐられたり。凡ての感情を排除する時は余は此地を愛す。別莊の多くは人の造りたるものなり。天の造りたるものにあらず。天の造りたる鎌倉は、余の生涯に一印

象を殘すものとなりてより、そは實に余が片影の如くなりぬ。人は遂に人のみを戀せざるなり。

愛子の壬生馬に送れる手紙を見ぬ。余は面を掩うて泣けり。英一君も愛子も共に同じき事を云ふ。然し是れ兩つながら涙の深淵より湧き來れるもの。肉と靈との激しき衝突爭鬪より來れるもの。而して人生誠に已むを得ざる運命のほだしより來れるもの。之れを讀みて笑ひ得んや。

されども今日海に浴してより、余は痛く快活となりぬ。余はかくばかり海の效能を認め得たる事なし。余の眉は今日より開けたり。多く笑ひたり。余が沈鬱の時來れりと杞憂せしことは、稍〻今日の事ありてより慰められたるが如し。或は沈鬱期を此の如くして過す事を得んか。然らば是れ多謝なり。

七月二十九日。水曜日。快晴。朝 "Sorrows of Werther" を讀みつゝありしに、河野氏の令孃來る。今日鎌倉の案內をせんと約し置きたればなり。即ち暑を冒して大佛に到り、長谷寺の觀音に詣で、權五郎神社を通りて極樂寺に着せし時は晝近かりき。寺僧に案內せられて其寶物を見る。國寶となれるもの尠なからざれども、さして注意を惹くものなし。本尊の如來尊は釋迦在世の時造られしものにして、支那朝鮮を經て玆に傳へられしと云ふもの、veil を通して見る事なれば、委しく其鑿痕を探り難けれども、僅かに見ゆる手の形など美しさの極みなり。釋迦の時に造られしにはあらざる可し。されども是れ確かに名作なる可し。此寺は良觀和尙の開基にして、良觀和尙は傑僧日蓮と對峙して其敎義を爭ひしものなり。當時の佛敎の流風に沈溺して日蓮の卓識を看破する事能はざりしはさる事ながら、療病院を起し、藥湯堂を建て、寺內に集る癩病者常に千五百人を下らざりしと云ふに見れば、彼にも非凡なる一隻眼はありしを知る可し。

後寺緣に倚りて行厨を喫するに甘味大牢の如し。彼女等は余に強ふるに敎話を以てしぬ。されども余は是れを固辭せる時、愛子君は余に問ふにペテロ書の「柔和恬靜」の字義を以てせり。余は喜んで彼女に答へぬ。余は今に至る迄多く彼女を相識らざりき。而も此兩三日彼女と接する所によれば、彼女は確かに其姉に過ぎたる品性を備ふるが如し。恬靜なる一少女なり。かくて寺を出でて七里ヶ濱に到りぬ。日天に冲して影は正に我が身の中に逃れ入る暑さを犯せり。されども盛夏の暑さは快

きかな。木葉、草葉、赤土のいきれゆら〳〵として眠もくらむ許りなる熱烈の渇仰、切々の悶え、人の世には見る可からざる壯觀なり。濱に出でし時一人の壯漢あり。衣を脫して水に入り、獨り波を分けて進み行く事數丁、波間僅かに其影を望み得可し。見る者をして痛快を感ぜしむ。

かくて步を轉じて家に歸りしは、二時に近き頃なりしなる可し。吉田彌千、壬生馬の處に遊びに來りてありき。共に海に入る。彼は長谷の方を見物に到り、余は家に歸りて再び "Sorrows of Werther" と親しむ。

夜に至りて空依然として晴れたり。我等机を圍みて語る。風水の如し。余は何事を語りしかを知らず。美備堪へ難くて眠りに入りぬ。

七月三十日。木曜日。快晴半點の雲なし。萬象燦爛として燃ゆる許りなり。朝壬生馬と共に海に入る。吉田は一時某分の汽車を以て壬生馬と共に三崎に去れり。余は彼等を送りて八幡宮より停車場に到る。歸後直ちに隆三、行郎と共に材木座に到り海に入る。河野の信子さん行子さん來る。歸時非常に疲勞す。此間余は云ふ可からざる同情と感激とを以て "Sorrows of Werther" を讀む。

夜食後砂山に登る。暮雲集りて怪魔の如し。此夜、雨、雷、而して風。蒸熱堪へ難し。思ふ所亦多くして寢ぬるに由なく十二時に至る。

七月三十一日。金曜日。夜來の雨今朝に至りて止む。天氣再び淸朗。謝す可きかな。朝熱心に例の書を讀みて幾度か淚下る。午後隆、行と共に海に入る。夕食後河野の姉妹三人來る。余は彼女等の爲めに鎌倉の歷史を語りて八時に至る。彼女等の歸りを送りて材木座の入口に到る。道暗くして星降るが如し。余は彼女等の爲めに離別の讚美歌を低唱す。愛子面を被ひて泣けり。

獨り莊に歸る。余の心は急に空しくなりぬ。

七月逝きぬ。

誠に人は死して生くるものなり。生きて死するものにあらず。

八月一日。土曜日。雲稍〻むらがりぬ。夙起例の如く海岸を散歩す。朝食後今日も例の如く行郎と源太とに學課を授け、後椅子によりて "Sorrows of Werther" を讀む。弟等は凡て海水浴に到りたれば、森閑として四圍太古の如し。讀み行きて漸く末節に近づきぬ。何等の悲想ぞ、何等の痛恨ぞ。余の手巾は幾度か涙に霑ひぬ。嗚呼是れ實に聖書の次位にある可き「悲哀の書」なり。物あり心の底をきびしく壓する如く、我が衷なる人痛み戰き、卷を蔽ひて長息するもの屢次。余此書を讀み返す事既に七八度に達せしなるべし。而も此度の如く心深く沁みし時はあらず。嗚呼、Werther, Werther 汝は遂に假相の人にあらず。余は汝の熱意に吸はる。汝は誤謬に滿てり。されども汝の誤謬は聖なる所より來れり。蒼空に雲湧くにあらずや。青海に波起るにあらずや。此雲を泥と混じ此波を煙と混ぜんは悲しからずや。人の心を見よ。心の奧殿を見よ。人世の價値は如何に轉倒す可きぞ。人妻を戀ひ、自ら殺すを敢てせし Werther 彼果して永久に罪せらる可きものなるや。汝の心を檢せよ。而して尙安きもの先づ第一の石を彼に投げよ。可憐此世、此塵世遂に此罪多き Werther に石を投じ得るものなし。誇れWerther、人は遂に汝の罪を罪する事能はず。神のみ是れを爲し得給ふ。而して汝が神に捧げたる熱き祈は、

"Omnipotent Father! whom I know not, thou who was wont to cheer my gloomy soul, why hast thou forsaken me? Can a Call back thy wanderer, speak comfort to my heart, my soul thirsts after thee, and cannot brook thy silence! Can a father be enraged with his son who suddenly enters his presence, hangs on his neck, and cries "Forgive me, dear father, for having shortened my journey, and returned before the appointed time! The world I found everywhere the same: labour, trouble, pleasure, reward, all were indifferent to me; in thy presence only can be happiness, and thy presence I seek, be the consequence what it may."

と云へるそれなりき。足れり。汝は神に受納せられぬ。余は決して汝の道を恥とせじ。

午後共に海に到る。波高くして之れに乘ずべし。板子を腹にして波浪を分くるの快何者か比す可き。「天人論」を讀む。彼

は此世の科學の研め得る範圍を極めたるなり。即ち物質不滅の理（即ち質量有限の理）の上に其論據を築けり。然らば此宇宙なるものは如何にして存在するかを問へば、彼は何の答ふる所なく、之れ人智の企及し得る處にあらず、宇宙の不可識なる所以は即ち宇宙を知る所以なりと。然らば彼の所謂大自觀なるものも、要するに理性の或る一部の滿足のみ。人の理性は此の如きに滿足する程少なるものにあらず。余は彼の結論に滿足する事能はず。少くとも彼の理論によりて、我が信仰なるものは白熱する事能はず。

夕食後隆三と行郎は長谷の方に到り、余と源太とは伴ひて材木座より湯島に遊びぬ。源太は彼の出來得る限りの話をなせり。抱腹するもの多し。余も全く小兒の如くなりて湯島の巖頭に到りぬ。其處に二基の石塔ありき。彼は之を指して嘗て此に溺死者ありし時之を立てたるなりと云へり。余は巖端に到り戯れに振り返りて余も亦身を投ず可きかを以て問へり。彼眼を見張りて曰く、斷じて不可なりと。嗚呼小兒も亦死の畏る可きを畏るゝなり。

歸時所思多くして涙屢ゞ親しまる。滑川畔に濱撫子の三四枝を折り閻魔橋に出でんとせし時、何處かの處女立ちてありしが余が異常なる容貌を驚ける如く凝視せり。余は恥ぢて面をそらしぬ。尙闘はざる可からず。余等の世路に何ぞ血痕多きや。

此夜家の者共を集め鎌倉に關する歷史談をなす。九時半就寢。空曇りて Venus の影も月影も見えず。寂しき夜なりし。

八月二日。日曜日。朝來蕭々たる雨。海濱の逍遙も叶はず、已むを得ず家にありて聖書を讀み、朝食後行郎の學科を見、又 "Sorrows of Werther" を讀む。英夫來る。晝迄に凡てを讀み盡す。痛哀骨に徹す。此朝初めて百舌鳥の啼くを聞く、此聲余に親しみあるものなり。初秋の聲なり。

午後の雨止みしを機とし、源太と共に海濱を散歩して稻村ヶ崎に到る。彼處に百合花の兩三枝咲けり。源太懸崖を上りて余の爲めに之れを取らんと云ふ。されども余は固辭しぬ。源太砂に物書けり。余も亦彼に倣ひて

砂にかく文字やはかなき人の世のうつゝとしもなき夢やはかなき

"Ah me! 'twere better far for me to quit the world at once."

是れ基督信徒と稱するものゝ聲なり。をかしからずや。さなり、余は世の基督教信者と云はるゝの資格なきものなり。余は竊かに基督或は余を憐れみ給ふ事もやあらんと祈るのみ。

此日一小兒船を海に漕ぎ出でて、誤り落ちて溺れたり。濱一帶は肅然としてをのゝきに滿ちぬ。余等も海に入りて家に歸る。壬生馬三崎より歸り來れり。此夕暮雨休みたれば砂山に到りて Werther を繰返しつゝありしに、可愛き少女三人車夫に伴はれて砂山に來り遊びぬ。奧田義人氏の愛兒なりとぞ。其愉快らしさは見るに美しきなり。夕食後英夫片瀨に歸る。

余は河野氏を訪ひ彼等の爲めに祈禱に就て語れり。余は兩三年再び彼女等と相見じと思へば、余の熱心は高まりて涙に破れて祈りぬ。聽者亦痛く感激せり。傘を傾けて感慨に滿ちつゝ家に歸る。

歸家後壬生馬と共に「天人論」を論じ十時に至る。夜に入るに從つて雨漸く滋し。

八月三日。月曜日。今日歸京す可く心定めぬ。樂しき一週間なりし。空は晴れみ曇りみ。朝 "Sorrows of Werther" の中 No. 15 の書翰は、英文のものにはその大半を除きあれば、original に就て讀む可く試みぬ。憐れむ可き知識よ、余の獨逸語は驚かるゝ迄退歩して、此文章と意味を判然とわかち得ぬに至りぬ。之を壬生馬に問ひ試むるに彼も亦余の以上なる事能はず。霞を隔てゝ故郷を見る如き憾に堪へず。されども其大體は是れを推讀する事を得たり。彼の懷疑は此文章に於て殊に深きに至れるものゝ如し。彼は愈〻自殺なる問題に對して眞面目なる考慮を費やすに至りぬ。彼の厭世觀は坂に輪を放ちしが如く、時を經るに從つて愈〻其速度を早め行くなり。嗚呼悲む可き靈魂、憐む可き靈魂。神之に永遠の刑罰を與へ給ふや。何者かよく思考する事を得るや。若し彼主の御名より呪はれたるものとする人あらば、そは世に最も無慈悲なる無情なる人なる可し。彼は宜しく彼自ら主の御名の前に呪はれざるの用意す可きにあらずや。

午後より海に到る。今日の波甚だよし。壬生馬と只二人にて充分の快を取る。歸り來りてより先日作る可かりし長詩を試む。未だ三行ならざるに余が出發の時來りぬ。即ち結束して出づ。壬生、隆三及び源太送り來りぬ。行郎は風邪なりしかば家に止まれり。午後四時四十五分の汽車に乘りぬ。〔Letters LIII "Sorrows of Werther" よりの拔萃あれど略す〕

家に着きしは七時少し前なりき。母上のみ在したり。歡呼して余を迎へ給ひぬ。感謝して夕食の饌に對し、鎌倉の事などつぎ／＼に聞え奉りぬ。病は大におこたらせ給へり。父上は九時頃歸り來り給ひぬ。病み給ひし眼の稍ゝ癒え給ひしが如し。暑さ驚く可し。空氣の濁れるも直ちに感取し得可し。彼處なる淸風と白砂とを思ふ。

八月四日。火曜日。日中は稍ゝ雲ありたれども、夕に近づくに從つて漸く晴れ、夜に入りて滿天海の如く冴えて何日の月ならん光淸きが中空に懸りぬ。余が留守の間に來り居りし手紙は、兄、津田梅子等よりなりし。兄は來る五六日の頃歸京す可しとぞ。朝は家にありて "The Intercourse between U. S. A. and Japan" を讀む。今日の處は米國の我に與へたる影響を論じたるものにして實に愉快なりし。其中金言と思ふ可き名句は、〔拔萃あれど略す〕

午後よりも亦新渡戸氏の書を讀み續けぬ。北鄕資雄氏來り鎌倉に行くと云ふ。余は之れに託して、河野愛子君に送る可き「聖書之硏究」と壬生馬に送る可き「艸いきれ」とを託す。是を以て幾分なりとも彼を慰め得ん事を思ひたればなり。夕方に至り讀書にうみたれば、庭に下りて水まきをなす。余は鎌倉に到りてより余の野蠻性大に囘復せられたるを覺えぬ。幾個かの肉刺（まめ）を掌に造りぬ。平次郎來り夕食を共にす。夕食後彼尙稍ゝ暫く談りてありしかば余も亦之れに交る。此夜疲勞したれば九時半頃早寢す。

八月二十日。晴天。蒸すが如く燒くが如く烈しかりし暑さも早去りがてになりぬ。昨夜驟雨雷鳴地を被ひて到りしより、冷氣急に催して單衣の膚ざはり冷かになりぬ。寂しく悲しく深く尊き秋來りぬ。余は再び此氣と相抱かん。

永く日記を怠りぬ。此怠りしは余が平凡となれりし結果より來れるにあらず——通常の例に反して——余の感慨餘りに多くして事玆に到れりしなり。

今日は余、朝より浮世の人の例に倣ひて暇乞に歩きぬ。先づ到りしは安藤則命氏なり。余は嘗て壬生馬に、余の知れる人の中自然の儘なる發育をなせるもの二人あり、一人は安藤氏にして一人は龍岡氏なりと云へり。眞に然り。余は彼の病床に近づきぬ。肥えたる老偉丈夫は病獅の如く横はれり。余は彼に余が旬日の中に米國に遊ぶ可きを告げたるに、彼は幾度か余

の此擧を發したる上余が留學の年限を問ふ事再三、「三年三年」と幾度か其唇頭と指頭とに繰返せり。余は思はず首を垂れぬ。今は暇を乞ひて出づ可き時なり。余が離別の語をなせし時、氏の小兒の如く肥えたる大なる掌は馳するが如く其面を被ひ、彼は殆んど小兒の如く歔欷流涕して余が離別を悲しまれぬ。余の涙は嚙みしむれども眸邊に漲り來り、余は縛せられたる如く座を立ち得ざるに至れり。嗚呼平凡無爲余の如きもの、人に忘れられ世に忘れられ、余の生と死とは塵の上下と共に無意義に看過せらるゝ時、余の一渡米を悲み送る事氏の如き人もありしか。余は殆んど走り寄りて其病軀を抱き、而して余の熱涙もて彼の胸に加へんと希ふ迄に情逼りぬ。彼家を辭する時余は車上に涙尙止めあへずして思へり。世に余を思ふ事此の如き人あり。余は彼の志に酬いんが爲めには益〻余の志を貫徹す可し。嗚呼四面の楚歌罵詈此一人の知遇に對して何の比ぞや。人余を知り余の爲めに泣く。余不肖と雖も此涕を流すを空しくせしめざるの意氣なからんや。余は今日にして云ふ可からざる尊き教訓を得たりき。

去りて末弘、柏田、園田、湯地等を歷訪して暇乞しぬ。されども凡ては余と何の關りもある事なし。午後より書物の整理などをなし夕刻自轉車にて阪本氏を訪ひて暇乞ひぬ。雨に降られて歸る。夜、德大寺則麿氏來る。彼は級友としては親しき一人なりき。藝術に對するかすかなる趣味彼を導きて尙よき道を辿らしむ。

夜雨の降りみ降らずみ風冷かにして水の如し。天地死して吟蟲の聲も聞えず。

八月二十五日。 火曜日。余が東京にある可き而して日本にある可き最後の日なり。余が母國に對する觀念は、頃來少なからざる變化を受けたるを感ず。余は母の膝近くありて母の愛なるものを知らざりし小兒の如く、此莊嚴なる國土に住みて此國土を愛するの念甚だ薄かりき。余は正直に云へば、余は愛國の意義をすら知らざりき。例へば愛國者の傳を讀みて流したる涙は、彼が國を愛する事戀人を愛するが如くなりしによるにあらずして、唯彼が凡ての困難に遭遇してよく戰ひよく堪へたる苦衷を推量して流したるものなりしなり。余は今に至る迄日本人民の一人一人に同情の愛あらん事を勉め且つ祈りたりき。而も日本の國民に對しては嘗て余の祈りに加へたるものありし事なし。而も今故國の地を去らんとするに當り、余の心中に

は奇異なる一種の新しき思想入り來りぬ。二十一日余は外遊の準備をなす可く兄と共に横濱に到りき。汽車の窓より見るに、大森川崎の邊水田遠く林樾隴畝と連る邊り、農人若干短褐を纏うて耕耘に從事せるを見て心より思ひぬ。此自然は美しきかな。かゝる美しき自然を果して海外に再び見る事を得可きや。例へば自然の齡尙幼くして若々しき麗質と活氣凡ての上に溢る許りなり。海の外或は山の高きものあらん。而も我が山の美しきに如くものあるか。河の廣きものあらん。而も我が河の麗しきに如くものあるか。而して其間に耕耘に從事しつゝある農人は、殆んど自然が自然と相融和する如く融和して、殆んど放つ可からざる contact をなせり。而して亡國とは此民を引裂いて此國土と何の關りもあらざらしむるなり。是れ涙あるものゝよく堪へ得る所なるか。余は今日にして此國土あるが故に此民を、此民あるが故に此國土を愛するの情、衷に湧くを覺えざる能はざりき。余は此國土に行はれつゝある政治と產業と宗敎と敎育とを恥とせん。而も此國土に住む可き民は、今の漁人と農家とにして足りて餘りありと思ふ。余の日本を去る可き時は來りぬ。深厚なる攝理は、此信仰薄く實行足らず主の前に無に等しき余をすら導きて玆に到らしめぬ。余は唯々感謝の外を知らず。願くは此感謝を代へて感激となし、此余が持てる凡てを捧げ主の道を直くせんが爲めに、希くは此短くして長き一生を用ゐしめ給はん事を。

母上は朝來甚だ寂しげに見え給ひき。時々眼に涙漏る如く見えき。余は昨夜愛子と別れの物語りしぬ。彼女の眼にも涙滿ちき。余は暫くの間まのあたり彼女を慰藉する事能はざる可し。天佑願くは彼女の上に裕かにして、彼女が總ての苦痛に打ち克ち願くは美しき生涯をなさしめ給はん事を。

壬生馬と其友吉田とは先だちて横濱に到り、余のために荷物を伊豫丸に致し、又正金銀行にて貨幣を交換する可く家を出でぬ。彼は余に藤村の若菜集と一葉舟とを送れり。余は彼を痛く啓發したる此兩著を輕んぜじ。余は午前十時を以て家を辭しぬ。母上は玄關にて遂に涙に破れ給へり。余は此故國を去るに臨み一滴の涙をだに垂れざりき。是れ自ら怪む迄に不思議なり。恐らくは余の心の中に潜める ambition (如何なる ambition なるかは余自らさへ是れを知らず。唯海外に出で彼處にて何者をか得ずんば止まじと云ふ ambition のみ)余をしてかくなさしめしものなるか。余は寧ろ平常に勝る快活の態度を以て敎

文館に到り新渡戸氏の依頼を果し、隆、英のために聖書を、行郎の爲に童話を購ひ新橋停車場に向ひぬ。常田醫師及有馬君既にあり。既にして種々樣々なる人來りぬ。

余の乘りし汽車は十一時三十分發のものにして、同行者は余が家及び親類の誰彼、箕田、園田、吉田、鈴木、原田、池田、齋藤等なりき。父上は停車場まで送り來り給へり。余は父上と相別るゝ時其白髮を見て、胸逼るを禁ずる能はざりき。神凡てをよきに護り給ふ可し。御心ならば再會許さる可し。

横濱停車場に着せし時野村才二氏余を迎へ、停車場樓上にてシャンパン酒の別離をなせり（未だ外國の風にも當らざる前に）。それより余は直ちに埠頭に到り伊豫丸の cabin No. 1 に入りぬ。豬股と云へる新潟日々新聞の主筆ありて余と同室なりき。午後二時と云ふに船は出でぬ。余は兄と相幷びて甲板に坐し見送りの人々に笑顏もて別離を告げぬ。愛子と壬生馬とは余の最も別れ難く思ふ所なり。如何となれば彼等は余の烈しき同情の中にあればなり。

思ひ出づるは嘗て此に森を送りし時なり。而して信子君を送りし時なり。彼の尙眼に見るが如くある一事實は宛ら砂上の樓閣の如く見る見る中に散りくだけて、今は空しく回想の悲涙のみを殘せり。世路の痛慘悼ましからずや。

既にして船搖ぎ出でぬ。ハンケチ傘帽子等の叢、薄の風に驚けるが如く渦しぬ。余は此間に尙笑みて立てり。波止場を出でて暫く檢疫の事あり。須臾にして船は眞の速力に復して東京灣を走り出でぬ。波止場の人忽ち塵の如く小となり遂に一抹の靑螺となりぬ。

此船には柏井園君及牧師光小太郎、及び市村某氏あり。又久滿君及其妻君あり。賑か過ぎる位なり。支那の勞働者約五十人許り香港より來れるが乘り居れり。悠然として甲板上を我が物顏に振舞ひ歩みつゝあり。

夕方に至り漁火所在に點ぜられ、暮色蒼然たる頃まで甲板にありて各自ら思ふ所あるものゝ如し。此夜疲勞甚し（甲板に長く立ちたればし）。室に入りて忽ち寢に就きぬ。此日指を傷く。

八月二十六日。水曜日。半晴。日出の光景得て例ふ可からず。雲の滃集して地平線を被へる絶間より日光射るが如く直射

し來り、海面を變じて燦爛の金屑となす。余は此航海の間をヨハネ傳の研究に用ゐんとす。幸にして多くの牧師あり、知識を求むるに於て便宜ある可し。朝事務長の室に到りて語る。又海豚の沖合を奔馳して我が船と相競爭するを見る。午後三等の Party と共にかるた、及び投票と云ふ遊戲を行ひて夕刻に至る。未だ船に慣れずして讀書などはなす暇なしとは我等の口實とせる所なりき。投票の中面白きものを左に（余に對する）〔略す、書簡集二二頁にあり〕

夕食後甲板上に於て本邦人と支那人との綱引あり。急に戰へば日本人必ず勝ち、漸く激しきに入れば日本人必ず敗る。自ら勝負の算定まれり。馬鈴薯の澱粉の一粒は自然に馬鈴薯の形をなすが如く、國民的資質の全斑は一個人の些事にまで現はるゝなり。彼等は日本人より少なからざる侮蔑を受けつゝ、冷然として唯笑へるのみ。

此夜冷氣大に加はる。兄來る。大に語りて九時半頃彼の歸り去りし後、猪股君と余とは亦宗教、文學、社會主義に就て語り十一時に至りて就寢せり。猪股君は simple なる好人物にして讀書も亦廣きが如し。

八月二十七日、木曜日。半晴、風あり。朝夙起して日出を見、聖書を讀み、鈴木の送れる "Tom Brown's School Days" を讀む。又日記を記して午に至る。午後より下の party 來り又投票をなす。今日のは理想の人物なり。余のは――岩谷松平、平井權八、内村鑑三、天一、新渡戸稻造、イサクの子ヤコブ、ゴールドスミス――にして平井權八當選せり。其他には猪股の島田三郎、森本の竹越與三郎、久滿の高山彥九郎、市村のシネーダー夫人、光の海老名彈正、柏井の中江篤介等なり。今日支那人と筆談せり其拔萃は、〔略す、書簡集二二頁に出づ〕

夕食後海漸く荒れ黑雲四天を壓し、弦月の影吐呑せられて愴慘の思をなす。兄と甲板上を散步しつゝ英語もて種々の事を語る。室に歸りて "Tom Brown's School Days" を讀み十一時就寢す。

八月二十八日。金曜日。曇天風（東北風）烈しく時々雨をさへ下せり。船の動搖中々に強し。余は不幸にして朝來船暈を感じ殆んど終日を床中に費せり。

起床後直ちに上甲板に到る。白沫多く飛びて荒海の姿雄壯の致を極む。海の色と姿との變化は雲のそれにも勝る眺めなり。

曉雲の紅に染められ萬波血を吐くが如き、旭光の黄に動きて千濤金を走らする、若しくは晴れたる午日の下に於ける深藍の色、曇りたる暮色に彩られたる濃緑の色など、一口には得も云はれぬ色彩の變化は、遂に如何なる詩人も捕ふる事能はず、如何なる畫工も描き得可からざる可し。況んや之れに加ふるに其時々の波の形あり。其の面白さは實に雲の夫れにもたぐへつ可し。自然の其裝を弄して人に逼る事何ぞ此の如く多端なるや。嗚呼、千古の偉聖幾人か出でて歌ひ盡したりと見ゆる自然の中に尙無窮なる祕密ありてひそみ、徐々に人の心をして神祕の帳に近づかしむ。Carlyle が宇宙を稱して神の symbol と云ひしも理りならずや。今日よりヨハネ傳の第一章を讀む。"Sorrows of Werther" 若しくは "Tom Brown's School Days" を讀まんと試みたれども眼眩甚しくして讀む可からず。卽ち壬生馬が送れる藤村の一葉舟を讀む。『松島だより』と云ふに『萩の花さきこぼれて秋の色を示すが中にも』云々と云へるに來り、故國の秋景眼に見るが如く浮び來りて思はず涙を零しぬ。麗はしきかな萩の一枝。此花全く日本の秋を代表せり。

朝、晝、晩の食事をなさず而も元氣は他人に勝れり。午後よりは眠り夜は下の部屋に遊べり。

八月二十九日。土曜日。曇天なりしかど時には秋の日華やかにさして、波濤に明暗の紋を畫き、時には小雨瀟々として晩夏の北海を懷ひ起さしめ、夕刻に至りては天の一方に虹美はしくかゝりて忽ち消え、月の弦なるが薄くほの香ひて雲に隱れぬ。

朝甲板に出でて例の如く波濤の狀を見る。信天翁十數羽其細長き羽翼を振ひつゝ船後に從ひ來る。船に緣りて遺利を求めんとするなり。此廣漠際涯なき海洋の中心に生れ、上を見れば空、下を見れば水、自由に天地を飛翔して顧眄する所なし。悲しくして强き生涯をなせるは彼等なり。怒濤空を搏つ暴風の夜、彼等の夢は何處に結ばるゝぞ。生きて枕する所なかりし彼は、彼等にも亦よき枕を與へ給ふなる可し。我等に感激感謝の涙あらしめよ。願くは悲涙と呪の涙とあらしむるなかれ。今日はヨハネ傳第二章を讀めり。

朝猪股君と共に久滿君を訪ふ。彼は昨日より風邪になやみて臥床しつゝありき。彼の許嫁亦船暈に苦めり。朝「若菜集」を讀む。此書藤村の著作の中最も勝れたるが如し。柏井君も亦爾か云へり。彼は他の二牧師に勝りて文學にも亦趣なからざ

る感興を有せり。是よき事なり。

午後久滿君來訪、猪股君と共に文學を論ず。猪股君は頻りに文學亡國論を説き、久滿君は健全なる文學の必要を説き、余は烈しき不健全文學の勃興を主張せり。又猪股君は感情撲滅、意志養成の急を説き、久滿君は感情の culture を説き、余は感情の激發を説けり。世界の各部分は其各天職を有せり。其天職を發揮せる國民（國民と云はずんば民衆と云ふ可し）は幸なるかな。然るに世には其民衆の天分の基礎を考ふる事なく、單に現世界の最强民族の特色に瞑眩し、是を以て世界の凡てを教へんと企圖するものあり。謬れるの甚しきにあらずや。日本が古來他國文明を輸入し其國歩を造りしは固より之を咎む可きにあらずと雖も、此國民に調和す可からざる思想を把來し、强ひて之を嚥下せしめんとしたる結果、如何に此國民は其進歩を遲滯し而し　其岐路に迷儃したりとするぞ。其最大なるものは儒教的道德なり。彼は日本の表面を整頓せり、而もその裏面を荒野の如くにして殘しぬ。此國民の思想は由來儒教的思想と兩立す可からざる兩極に立てり。此國民が此思想に教へられて表面的僞善的の性格を發達せしめしは、識者を待たずして之れを知る事を得可きのみ。佛教に至りては稍〻此國民の心靈的要求に適せり。されども是れ其反動的要求に適せるものゝみ。情を滅して意志の貫通を得んとしたるは是れ彼等が據つて以て其短處を補はんと欲したればなり。佛教は決して日本人を教へたる積極的思想にはあらず。例へば健康なるも痩せたる人の肥えん事を願ひしが如し。彼は痩せたりとも健康なれば足れり。而も人とは如何に我儘なる動物ぞや。肥ゆれば則ち痩せん事を思ひ、痩すれば則ち肥えん事を思ひ、病めば則ち健ならん事を思ひ、健なれば則ち病まん事をすら思ふ。佛教思想は此人間の我儘至極なる性質に適應したるものゝみ。故に所謂日本化されたりと稱する佛教は、（例へば淨土眞宗、日蓮宗の如き）割合に多數の信者を日本全土に有するに係らず、古來彼等に如何なる思想上の大提唱を與へたるかは、實に疑問とす可きものあり。是れ是等宗派の祖が調和す可からざる二思想を結合して、一の系統を形造らんとせしが故なり。神道に至りては是れ日本固有の道德教なるが故に、前二者に比しては深く人心の根柢と相融和するものあるが如し。人は此の教に大哲理なく大信仰なく、統一なく組織なきが故に、現今何等の勢力をも此社會になす能はざるに見て、未だ論ぜずして、此思潮の取るに

足らざるを云ふと雖も、而も此道德教の教ふるところは確かに日本民族の特長を、少くとも其一端を遺憾なく彰顯せり。清淨、廉直、俠任、武勇、多涙、樂天、是等は確かに日本民族が根本的に有する特質なり。神道は未來過去に對する觀念甚だ薄弱なりと云ふ。而も全く是れなきにあらず。唯其の發達の極めて不完全なるのみ。凡そ神道とは其の發達極めて不完全なる思想なり。單に過去未來に對する觀念のみならんや。是を以て日本民族は現世主義なりと云ふは誤れるの甚しきものと云はざる可からず。彼等固より印度人、希伯來人の如き崇嚴なる未來觀念を有せざりき。而も彼等の他界に對する觀念は確かに希臘のそれ以上なりしなり。遮莫神道は遂に我が現今の日本の思想を支配す可き實力を有せず。是れ一の神話として我が歷史の初頁を飾る可し。而も是を以て現在に行はんとするは、萎花を集めて枝頭に粘する愚爲のみ。國民は明瞭なる良心を以て既に業に此感化を無みせり。

余は便宜上日本民族を何れにか感化したる三大思潮を上の如く排列したりと雖も、其感化の順序は全く反對せり。神道先づ起りて一時國民の思想を兎も角も統一し、尋で佛教來りて其反動的感化力を振ひ、次に儒教入りて國民的思潮を淺薄となし終りぬ。古事記、萬葉集は第一者の思想を代表し、山家集、芭蕉の俳句は第二者の思想を代表し、馬琴の輩は第三者の思想を代表せり。是を抽象的に云ひて結論の曖昧を思ふ人は、宜しく上に擧げたる文學に就て熟考す可し。第三者に失望して第二者を取り、第二者に慊らずして第一者を擇ぶは吾人の期せずして爲す所のものにあらずや。而も此第一者と雖も、漸く複雜に變形し來れる思想を表顯するに於て餘師なきものとは云ふ可からず。此に於てか顧みて源氏物語と近松とに來れ。吾人は殆んど吾人の胸臆を披瀝せられたるの感なきを得んや。余は敢て此二者が日本民族の眞正なる特性を歌ひ盡せりとは云はず。然れども少くとも此二者は附屬的に日本民族に與へられたる諸種の思想を排除し、稍々赤裸々に其長處と弱點とを歌へるに庶幾しと云はざる可からず。

即ち日本民族の特性とは何ぞや。彼女は英國民族の如く常識に富める漸進的のものにあらず。獨逸民族の如く堅固なる追究心あるものにあらず。露西亞民族の如く野性に溢れたる實行力多きものにあらず。亞米利加民族の如く現世に執着して建

設に巧みなるものにもあらず。佛蘭西民族の如く飛躍的の思想と行動とを有して懐疑的のものにもあらず。古伯來民族の如く熱意敢然として一事に集注するものにもあらず。若し强ひて例を他民族に求めんか、亞剌比亞人の武と俠とに兼ぬるに希臘人の樂天思想を以てし、之れに配するに伊太利人の熱情と多涙とを以てするものか。日本民族最大の特徴は感情の鋭き發作なり。之れを惡導すれば則ち放逸、之れを善誘すれば則ち感激。余は是を以て基督の尊き教訓は、必ず我が民族には未曾有の天啓なりと思ふ。如何となれば基督教は感激の宗教なればなり。

然るに今の基督教の教師なるものは、此最大の楔點を捕ふるを敢てせず、濫りに在來の倫理說に準據し基督教の特色が我が民族の良心を最もよく覺醒し得可きを忘れて、頻りに枯淡の說をなす亦誤らずや。今の時は宜しく大膽なる可き時なり。思想の混亂を思想の確定の前に恐れて、何物の思想かよく確定せらる可きぞ。今の教育家は國民を萎縮せしむる最大の毒素なり。今の宗教家は國民を小成に安んぜしむる最大の障碍なり。基督教の建設せられんためには、基督其者すら破壞せられずんば止まざりき。凡そ大なる思想の勃興して國民思想を統一せしめんためには、他の凡ての思想と形式とは悉く覆されて其土臺石とならざる可からず。之をしも忍ぶ能はざる國民を稱して世界に天分を盡す能はざりし國民即ち亡國の民とは云ふなり。人形骸に活きて思惟なきものは萬人是を卑しむ。國形式に保ちて思想の定まれる所なきものも萬人見て以て敢て怪まず。寧ろ怪しむ可からずや。

余焉んぞ國家を以て個人と同じき有機體となす一說に雷同するものならんや。さはれ一事の拒む能はざるものあり。食して糞するをのみ事とする人は、生きて既に死せる人なり。租稅を徵して之れを消費するをのみ事とする國家は、存在して既に滅亡せる國家なり。

夕食後下の人々來る。譯もなき遊びをなして抱腹絕倒す。此夜始めて余が家の夢を結べり。愚者度し難きかな。此日鯨を見る。又伊太利人と語る。彼は漂浪の人、年既に耳順なる可し。白髯胸に垂れたる樣似たればとて、我等は彼を Tolstoy と呼ぶ。伊語、獨語、西語、佛語、及び僅少なる英語を操り喋々として何事をか語る。世のごろつきと云ふ可きか。

八月三十日。日曜日。空かき曇れり。朝寒の漸く息氣の白きを見んとす。朝柏井君より君が譯したるニコルの基督傳を借り來りて熱讀す。ニコルは平凡なり。久滿君其許嫁鈴木せい孃を伴ひて來訪す。余は余の咄辯の出來得る丈けを用ゐて此佳客を遇せんとしたれども失敗なりき。彼女を慰め能はざりしなる可し。

午後 service meeting を余の室に行ふ。柏井君小話せり。余は罪人なり。彼等の間に介し余は眞に慚愧の至りに堪へず。神は余に信仰を與へ給ふ可きや。余の此の價値なき生涯が宜しきに導かれ得可きや。恩惠に滿ち給へる主よ、願くは此罪に沈淪せる憐む可きものを顧み給うて手痛き咎を加へ給へ。

午後より三等客の間に運動會あり。夜に入りては演藝會あり。藝人中々多し。波再び高し。されども余は此前の如く醉はず。

八月三十一日。月曜日。朝より霧四方を罩めて數間の彼方は白茫々たり。北海道に於ける船旅の如し。明後日はアリューシャン島を望み得可しとぞ。余は海の生涯を面白く思ふ。船尾に立ちて船の越し方を望むに眞に水天一涯、渺茫として極まる所を知らず。萬重の波重り狂ひて信天翁の一羽二羽さびしげに飛翔せるものあるのみ。若し男子眞に心中不平の事あらば宜しく一艘の汽船に乘じ、舷を叩いて太洋に出づ可し。かくて冬はヒリッピン、南亞米利加の鳥美しく草木花果蔚然たる邊に到り、夏は去つてベーリング、スカンヂナビヤ等岩秀で山雪を戴き人尠く熊多き邊に纜を結び、俠敢義に脆き健兒と可憐情熱き佳人とを滿載し、國を其船の中に限りて大歡を極めなば、則ち不平の事稍〻解かるゝに庶幾からんか。徒らに不平骯髒牢濊の薪を取って燃すが如き呪言を吐きて、轂中に切齒するものは憐れむ可きかな。Byron や快男兒なりき。

朝船室に籠りてニコルの基督傳を讀みつゝありしに、柏井君來りて誘ひ出せしかば、甲板に到りて shovel board とか云ふ遊戲を試む。藤岡と云へる青年あり。彼は久滿君と共に米國に到るものなり。眉目清秀一目にして神經質の人なるを知る。久滿君の云ふ所によれば性陰鬱にして沈想に親み易きが故に、家人之を憂ひて彼をして實地的の學業をなさしめんとするなりと。余は彼を見て胸中同情動かざる能はざりき。嗚呼彼も亦人生の苦杯を嘗むるの齡に達しつゝあるなり。此苦杯未だ全く余を去らざるが故に、余は殊に彼の此の如きを憐れむ。余は此航海の間彼の爲めに彼を慰藉するを忘れざる可し。余は今

日彼を其船室より拉し來りて此遊戲に與らしめぬ。

午後下に到りて暫く遊戲し、歸り來りて基督傳を讀み、基督の教訓と云へる章に於て、基督が教訓の模範として一は井戸のほとりにありしサマリヤの女、一は基督に來りし富める靑年を見て大に感じぬ。是れ實によき對照なり。余は尙此熟考す可き問題の上に實行の餘地饒かなりと思ふ。

暫く假眠す。久滿君來りて夕食迄語る。西川かめ君の惡しき噂を聞く。女の假面の驚く可きものなる事を益々實にす。又Jordan の話を聞く。彼は米飯黨の旗頭なるが如し。何にせよ偉大なる人物は地球が有し得る至寶なり。夕刻に至りて雨到り風到り波漸く烈し。夕食後兄、藤岡君と甲板上を散歩し歸り來りて今此日記に向へるなり。是れより又何事をかなさゞる可からず。

九月一日。火曜日。曇天寒冷例によりて烈し。此邊の氣候常に此の如しとぞ。然らば則ち周年多く日光を見ず月色を知らず、暗澹たる密雲と濃霧と細雨と飛霰との中にあるなり。若し此の如き土地に住める人ありとせば、其人の單調となり陰鬱となるは自然の結果ならずや。

此朝勉强してニコル博士の基督傳を讀み終れり。余は此著に對して觀想を記す可き位置に立てり。されども余は此著に於て多く云ふ可きものある事なし。如何となれば、此著の記事の大體は、余の喜んで承認せんとする所にして、余が衷心に隱れて余を苦むる題目は、此著に於て說明せられざるが故なり。余は此著を平凡なりと云ひき。されども余は此著の中に一の貶斥をなす可きものあるを見ず。故に余は敢て之を以て健全なりと云ふに躊躇せず。而も余は此著に於て、滿足なる響を引出し得しかと問はるれば、余の良知は明かに否と答へざるを得ず。余の罪に關する疑惑は今余を責むる最大の笞なり。余は云ふ可からざる誘惑者の掌裡にあり。常識に訴へ來る惡魔の誘惑は激甚を極むと雖も、そは一時的ならざるを得ず。罪の渦中にさまよへる余を以てしても或は之れを防ぎ得ざるにあらず。されども知識によりて來る誘惑は如何に恐る可きかな。彼は智慧の根柢に襲ひ入らんとするなり。嗚呼、余の爲めに此迷宮より余を救ひ出さんものは誰ぞや。攝理の手余をよきに誘

ひ給ふ可きや。余はかくあらんことを願ふ。然り余は眞にかくあらん事を祈る。主の廣き胸迷へる羊を捨て給はざれ。

出發の時、愛子の余に送りし書を繙きぬ。彼女の云ふ所誠に可なり。彼女は女たる本性と本能とを忘れず。彼女の志は憐む可きかな。人世にありて此悲涙を味はしめ給ひし神は讃美す可きかな。余は此書を以て彼に示さん。余は是れを以て確かに彼を喜ばしめ得可し。然り彼は泣きて而して喜ばん。而して此事件に關する凡ての事情の落着をなすべき時、余が祈には如何に多くの感謝加へらる可きぞ。

午後暫く"Tom Brown's School Days"を讀み、後甲板に出でて遊戯をなす。夜下室に到り遊戯す。此頃の余は宛ら小兒の如し。

九月一日。火曜日。曇天なりしかども雲は稍ゝ薄れたり。今日多分東經百八十度を通過したるなるべし。されば九月一日は二重に造られたるなり。

朝來頭腦と胃との具合宜しからず。全く讀書を廢し朝より下の室に來る（此日ヨハネ書を讀み「爾等人の榮を受けて神より出づる榮を受けざるに、いかでよく信ずる事を得んや」と云へる章に讀み到りて思はず竦然たりき。是れ本年の元旦に聖書が余に敎へし大敎訓なり。嗚呼、汝尙此章を見て爾かく竦然たるや。不遜の愚性も亦甚しい哉）最初今日一日を増し加へたる理由を研究し、柏井君の說最も當を得て簡約せられたるを見る。他の人々の頭腦は凡て粗雜なり。後談は基督敎理の事に移りて、初めは復活の問題論ぜられたり。復活は肉體の形式を取りたりと云ふ事實の、信仰の基礎を造るに必要なりしか否かと云ふ事是れなり。今の信仰の立場より云へば此問題は其何れにありても余には關りなし。次に余は一問題を提供せり。是れ余が今日心中最も苦痛とする所のものなり。余是を以て心靈の經驗裕かなる可き是等牧師等の間に、適當なる解釋を與へられんかとの幽かなる望を抱きたればなり。余の苦痛は是なり。罪人は何故に罪を犯すや。罪を犯すとは、犯せるものゝ罪か。然らずして他に之れを犯さしむるの力あるにあらざるか。換言すれば人には free will なるものもありと云ふ。而して free will を分解すれば神意に從順なる力と、之れに逆行する力との二つに分たるべし。罪を犯すとは所謂第二の力が第一の

力を壓するなり。苟も第一の力第二の力より勝りて誰か好んで罪を犯すものあらんや。不幸にして第二の力第一のそれに勝るが故に、罪人なるものは寧ろ勢罪を犯すに至るにあらずや。是を以て彼を罪人となし、彼を憫み彼を呪ひ彼を擬するに永遠の地獄に逆落しすべきものとなすの理由何れにあるや。是れ罪なるものを客觀的に見たる時の謂なり。是れを主觀的に見る時は然らず。少くとも余自身は罪を犯したる時、嚴しくも罪を犯せりとの conviction を生ず。これ云ふ可からざる苦痛なり。此全然相逆行せる二個の大事實を如何にして調和す可きや（是れ余が觀想錄第四卷に詳記せる所なり）是れ余の上に被ひ來れる第一最大の苦痛なり。余は此解釋が如何になさるゝかを聞かんとせり。されども余の心の心を喜ばしむ可き答は何處の隈よりも起り來らざりき。余は失望して涙に破れんとせり。余の小さき心靈の經驗すら人は解き得ざるなり。余がかゝる事を此に提出せしは誤謬なりしか。余は默す可かりしか。玉は包まれざる可からず。瓦礫は出でざる可からず。余は急に話頭を轉じて、内村氏、新渡戸氏の人物談に移り、兄と余とは凡ての反對に對して出來得る丈け辯護せり。

午後兄と甲板の上にて英語の會話をなし、又 "Tom Brown" を讀む。今日も夕暮の色淋しう暮れぬ。夜下の室にて見習に來りつゝある商船學校生徒の經驗談を聞く。今十時半なる可し。四方寢靜まりて船の軋る音のみ聞ゆ。

九月四日。金曜日。曇天時には雨をさへ下したれども夜に至りて雲破れ月出でぬ。甲板に呼ぶ人あるに出でゝ見れば、嫦娥正に水を離るゝ二竿。光既に薄寒く雲間に懸れり。それよりも遙か低く左の方に Venus 唯一個凝然として輝けり。云ひ樣なき莊嚴の溫沁々として身に逼るを覺ゆ。余は二日より三日に至る迄の日記を怠りぬ。遺憾に堪へざれども是非もなし。されども覺え居る所を記せば、二日より氣候急に溫暖となりぬ。雲霧も漸く薄れ勝ちとなりて、風のなぎたる暇に日の照り出でし時は、重ねたる單衣一枚を脱する迄に至りぬ。余は此日より "History of U. S. A." を讀み出したり。こは余が渡米前必ず一讀す可く豫定したる所なりしなり。而して果さゞる事此の如し。恥ぢざるべけんや。兄より "Thousand and One Gems" を借り來りて Byron を讀む。航海の間に讀まんには是れに越したる書なし。"Childe Harold" の故國に別るゝの歌何ぞ悲しき。

For pleasures past I do not grieve,
Nor perils gathering near;
My greatest grief is that I leave
Nothing that claims a tear.

"Song of Corsairs" に至りては是れ眞に雄大の極致を極めたる悲歌、中宵劍を取て舞はしむるの概あり。地上の桎梏若し我に烈しからば、我は實に一葉の破舟を海に浮べんとするの想に堪へざらしむ。"The Ocean" の如きは實に海の悲壯を云ひ盡して餘蘊なし。三日も稍々二日と同じき生活を繰返したるに過ぎず。此日海の畫三枚を作る。一枚は稍々余を滿足せしめたり。曉天の圖なり。Swell とてうねりの大なるが來る。遠く連れる長丘の横ざまに船をかすめ來るが如し。海洋の感殊に切なり。

朝勉強して "History of U. S. A." を讀む。午後は 1st class passengers と共にクリッケットをなす。此夜下の party の處に到り、色々話の末二宮孃の渡米の目的其他家の事情を聞く。彼女の思ふ所行はんとする所甚だ健氣なり。彼女は七八年米國にありし後歸り來りて父の學校を助けんとするなりとぞ。余は一種の感慨に打たれて直ちに甲板に出で poop-deck に到れり。月は既に中天叢雲の間にあり。夜色今凡てを蔽ひぬ。室に歸れば兄來り共に散歩せんと云ふ。仍て再び poop-deck に出でゝ甲板上を歩みながら、我等が心靈の經驗を語る。近來得ざりし眞面目の想胸に滿ち、我等が經來りし旅程の攝理に滿ちたるものなりしを回想し、此小なる者等も痛く勇氣附けられしを覺えぬ。實に我此茫漠たる未來を見れば、何事として一も我等の實有として有す可きものなく、幔深く垂れたる神壇に對へる心地して、綾目もなき惑ひに心亂るれども、過去を顧れば實に凡ては祝福なりしかな。嗚呼、此祝福を受けたる身徒らに食して死す可けんや。主我等をよきに導き給ふなるべし。願くは我等我等の有し得る very best を盡し得ん事を祈らん。我等何を爲す可きやを知らず。されども何をかせしめられたり。久し振りにて兄と共に祈りぬ。二人の共に祈る處には主何時も在せり。主は小さく弱き影をも開き給へり。寢に就きてより過去

の感慨胸を圍みて眠り成り難く永く床中に輾轉せり。

九月五日。土曜日。曇り勝ちなりし空の、夜に至りては益々甚だしくて樂みに待ちし月も見る事能はざりき。朝 "History of U. S. A." を讀みぬ。家郷に出す可き端書を書く。此日初めて信天翁の外に遙かに小なる海鳥ありて飛べるを見る。或者は燕の一種なりと云ひ或者は野性の鴨なりとも云ふ。何れか眞なるやを知る可からず。されども陸地の漸く近づけるを見る可し。我等は再び汚穢なる空氣の中に入らざる可からざるなり。午後 1st class passengers の中日本人四人卽ち中谷(醸造家)、大西(時事新報記者)、中川(古谷商會橫濱支店支配人)、某(三井物產會社員)の四人來る。余は之れを避けんとして甲板に到り、長時間を經て歸り來りしかども依然として彼等のあるに、已むを得ず立ち交りて雜談す。甚だくだらなし。人をして彼等の生活は何の慰藉を得るやを思はしむ。

夜事務長三等船客の爲めに幻燈をなす。暫く見て室に歸り日記を記す。九時頃 poop-deck に登りしに藤岡君あり共に語る。彼は夜安眠する事能はずと云ふ。思ふ所あるにあらずやと問ひしかども答へざりき。余は彼に宗教問題に付て問ふ所あらんとせしが暫く見合せたり。後再び兄と共に fore-castle の方に散步す。空全く閉ぢたれども雨は止みぬ。濕りたる deck の上を暗の間に英語の會話をなしつゝ散步す。二人亦昨日の如く祈りをなして寢に就きしは十一時過ぎてなりき。床中に藤村の「哀詞」を見る。壬生馬の宗教に對する論據是れより出でたるもの多きが如し。されども今日余は此文の中に美辭もて蔽はれたる多くの弱點を見たり。

九月六日。日曜日。聖安息日は船に乘じてより再び來りぬ。午前は雲大に破れて秋の日華やかにさし入りて、甲板の上は小春日和(最早 Indian spring と云ふ可きか)のいと長閑なりき。朝よりヨハネ傳第九章を讀む。又下の室に到り各人の愛讀の書を聞く。左の如し、〔略す〕

朝一羽の鷹來り遂に水夫の捕ふる所となる。午後 Burns を讀み "To the Mountain Daisy" 及び "Prayer of Farmer" を誦して淚を零せり。狹しと罵らば罵れ。自然と人とに對する tender なる深き愛は眞に人をして泣かしむるに値せり。

今日は又柏井君と美術、宗教に就て語れり。彼の聖書上の知識は余に少なからざる利益を與へたり。余は默示錄を深く研究し度しとの念を起せり。午後二時より service meeting を中等室食堂に開けり。市村君司會し柏井君はカナの婚筵に就て、光君は詩篇の中のモーゼの祈りと時間の貴重に就て語りたり。それより poop-deck に到り茶菓を喫しつゝ無邪氣なる笑談をなす。此夕の空の如く美しき空は嘗て見ざる所なり。空は晴れたれども雲のたゝずまひはよき程なりき。日の漸く西天に沈まんとする時一團の叢雲ありて落日の光を被ひぬ。被はれたる落日は益ゝ其光を增し、雲陣を排斥して餘光中空に四射し、雲は淡くして輝きたる黄金色のさゝべりを周圍に繞らして、燦然として實に神の御座にもふさはしかる可き榮光を示しぬ。かくて日の落つる事刻一刻なるに從ひ、黄金にかゞやきし空の色漸く赤色を帶び藍色を帶び、世に偉大なりし大丈夫の靜かに死の手に導かるゝ悲壯の光景を想起し、Schiller が盜賊篇のダニューブ河畔の一齣宛ら見る樣に胸を衝き來りぬ。將又讃美歌にある友を弔ふ詞

はるかにさしくる　夕日のかげに
世を去りし友の　おもかげ殘る

と云へるをも聯想しぬ。

夕食後 fore-castle に到る。滿月正に水平に近き雲を排して出でたり。螢火に似て尙 pure なる光こぼれて海に落ち寶玉にありげなる彩波翩々として輕く跳る。顧みて西天を望めば頹日既に水平の下に沒し、半天赫然として紅を漲らし莊嚴跌宕の極を盡す。而して夜と晝とを境し、勞働と安息とを隔つる中天は、觸れば融けなんとする淡綠靑の色彩に澄み互り、千態萬狀に染めなされたる雲の色一秒に一瞬に云ふ可からざる色彩の變化をなす。余は靜かなる心もて之れを見るに堪へず。心臟の鼓動は急に昂進し氣息激しくなりて、何とは知らぬ煩悶の情切に胸を襲ひ一時は實に如何にすべきかを知らざりき。嗚呼此大光景を以て我が壬生馬に示し得たらんには！

此夜下の室にて談話をなし、事は歷史より宗教に移りて十一時に至る。此日余の情は屢ゝ激昂して辯論時に冷理を失はん

とする迄に至りぬ。今夜も兄と共にうれしき祈を捧ぐる事を得たり。

九月七日。月曜日。晴天。朝、日没の景と夕雲の景との二を作り、前者を約束したれば市村氏に呈せり。此朝既に米山を見ぬ。雲煙渺茫の間僅かに黝靑の連線を見る。嗚呼之れ余が夢みたりし米國の山か。而も之れ北米合衆國のそれにはあらで Canada 領のそれなるなり。鯨二匹の小魚を追ひ來れるを見、鳩の船近く來りて幾囘か船の周圍を飛翔せるを見る。

今日は心何となく定まらで常に甲板の上にのみありて、或は陸の漸く近きを眺め、或は水夫等の忙はしげに甲板上に勞働するを觀たり。船尾には日章旗掲げられぬ。船客も今日は皆甲板の上にあり。支那人の多くは今日上陸す可し。悉く其頭を剃りぬ。

午後陸漸く近し。山は中々に高きなり。而して全山悉く密林もて蔽はれ、海岸の僅かなる岩石の外には殆んど全く餘地なき迄なる樣驚く可し。樹は亞米利加松と稱するもの甚だ多し。始めは人家など見ゆ可くもあらぬ迄の不踏の地なりしが、船の漸く進むに從ひ燈臺の見えたるを始めとして、處々に心細げなる cottage の眺めらるゝに至りぬ。五時稍ゝ過ぐる頃檢疫場のある處に投錨す（此處の光景は實に美はしき極なり。形他には見る可からざらんと迄思はるゝ美はしき巖の上は芝生にして、處々に蔚然として綠樹茂り、赤く塗りたる木造の家屋の彼處此處に立てる樣云ひ樣なし）。若き醫師一人の水夫を從へ、石油發動機の小なる boat にて來り檢査す。支那人と三等船客とは fore-castle に二列に整列し、眼と腋下と陰部とを檢査せられたり。之れに要したる時間稍ゝ二時間半なり。Intermediate の客は人員を見たるのみ。かくて月美しう出でたる時此を發し約四十分にしてヴィクトリヤ港に着しぬ。此間我等は最後の小なる meeting を開けり。

ヴィクトリヤ港に着きし時は夜既に暗くなりて、長く突き出でたる棧橋に速力を緩めたる船は來れり。余は此日此時始めて身の他鄉にあるを覺えぬ。橋上にあるもの、支那人と日本人と多く、洋人も亦尠なからざりき。棧橋に沿うて架せられたる倉庫あり "Cars to City, in 7 minutes, fare 5 cents" と書かれたるを見る。船より橋の架せらるゝと共に、忽ち稅關吏及び移民官來り後續々として洋人入り來りぬ。されども日本人と支那人とは一も入り來る事能はざるなり。余は棧橋に立てる日

本人を見たり。失望！　彼等の容貌の何ぞ輕薄、劣惡にして而も卑陋なる。彼等の中に紳士らしき體面を保てるものは一人だになし。嗚呼余は此に紳士を見んとは希はざるべし。之れ過分なり。而も余は此に顏に正直と勤勉との相を宿したる日本の勞働者を見ん事を希へりしなり。而して是は今夜全く基礎まで打ち壞されぬ。余は上陸してヴィクトリヤ市を見ん事を希ひたれども、時既に十時を過ぎたれば止む。

九月八日。火曜日。晴天。此日我等は始めて合衆國の土を踏む可きなり。船は朝四時を以て出發せしなる可し。余が起き出でたる時は既に陸を左にしつゝ穩かなる靜波を過ぎつゝありき。午前八時頃 Port Townsend に入り、此に醫師來りて inspection をなす。此町も亦美しき町なり。海鷗の長閑なる樣など面白き事樣々なり。家の赤く塗られたるものなど、自然の樣と甚だよく配合せられたり。〔Port Townsend の寫生畫あり、略す〕

十時少し過ぎる頃船はシヤトル港内に入れり。Victoria の前にて傭ひし水先案内凡て船をやるなり。打見たる姿の偉大なる人にして、白髭鼻下に房々としてビスマークの如く、人をして信頼の念を起さしむ。彼は此間の一航海を預る事によりて 2000 弗を得ると云ふ。Seattle は今人口十七萬と稱す。數年の進步實に著しきものあり。日本人も時期によりて多寡あれども大抵二千四五百人を上下するものゝ如し。移民官及び稅關吏、醫師來りて船客を檢査す。移民官の問へる處は、名、職業、行先、持金、同伴者等なり。檢疫は多く眼を檢するなり。余は多く賴まれたる silk 類を有せしかば稅を取られたり。其額 y 14. 90 に付 $ 4. 75 なり。

余は午後三時頃船を辭し、加藤氏（工學士にて Boston に到らんとする人）等と electric car を取りて市に到り Jackson Hotel に投ず。日本人の營める所なり。此夜西洋食并に日本食を食す。好奇心種々止み難し。余の宿せし Jackson Hotel は Jackson Street にあり。此町は本市の中にても劣等なる所にして東京にて云へば、馬喰町とも云ふ可き部に屬するなる可し。

九月九日。水曜日。半晴。昨日三等の party も皆上陸す可き筈なりしに、檢査の甚だ嚴重なりしが爲め遂に上陸する事能はず。僅かに市村君と雀部君のみ投宿し、光及び柏井君は一寸歸り來りて再び歸船す。今日加藤君と共に市中に出でんとせ

し時久滿君其他上陸して hotel を尋ぬる爲めに來るに遇へり。異郷にありて既知の人に遇ふは面白き心地するものなり。朝家にありて本國に送る可き手紙を書く。

此夜 Washington Street の「ちとせ」と云ふ日本の料理屋に於て最後の晩食を共にせり。川上淸君も亦加はる。彼は今日の午後兄と余とを親切に導きて、或は鐵道會社に到り、或は銀行に到る事を得せしめたり。此夜兄、加藤も他の人々と共に、我等が投宿せし町の傍なる遊び所に到る。驚く可きもの多し。Den of shame とは之を云ふか。此夜雨。

九月十日。木曜日。朝食を Washington St. にてなしたる後銀行に到り、金 $ 261.19 を受取り、湯に入りて日本以來の垢を流し、家に歸れば既に十二時なり。途中にて購ひ來りしパンと果物とにて食事す。午後家にありて荷物の支度をなし、夫れより河上君來りて我等を率ゐて Washington University の道を示したれども余は家に歸りて荷造りする必要ありたれば其儘にして家に歸る。余の室の前の暗き室を借り居る一人の婦人あり。夕刻に至れば裝を凝らしてかの Den of shame の方に出で行き、夜十一時過ぎざれば歸り來らず。余の初めて到りし時一人の老婆、彼女の室より生れし計りと見ゆる嬰兒を携へ出でしを見たりしが、其後彼所には嬰兒の泣き聲をだに聞かざるなり。余は出入毎に一種の憐憫の情をもつてにあらずして此室を顧る事能はざりき。此邊は紳士淑女の足踏み入れぬ所なりと云ふも、著しく實に多くの罪惡にて滿ちたる樣は物慣れぬ余が眼にも著しかりき。半數の人が高價なる生活をなさんと欲せば半數の人は憐む可き恥多き生活をなさゞる可からず。浮世の深底何ぞ爾かく悲慘なるや。余等の爲す可き事業は廣く深く殘されたり。余の信仰足らず。是れ凡てのなやみの nucleus なり。此夜十二時頃就寢。

九月十一日。金曜日。朝六時光君に起されて出發の支度をなす。此日我等は東行の爲め Great Northern Railway を取る可きなり。七時宿を辭し昨日調へし大なる lunch basket と、少なからざる荷物とを兩脇に抱へつゝ、途中にて朝食を終り停車場に到り八時半の列車に乘る。同乘者我等の外に二少女を從へたる夫人、退職軍人なる老夫婦(南北戰爭に出でたる事ある)、business man の夫婦、其他三四人あり。Sleeping-car なり、北上して Everett を越えてより東行して Cascade 山に入る。秋

は萬林の一葉一葉に入りて黄紅の彩燃ゆるが如く、稀に散在する丸木小屋より出づる輕煙靑く樹梢を染めて、深山の趣玆に盡きたり。樹は Alaska pine 多し。既に Cascade 山の東面に到れば地狀忽ちに變化し、瘦岩瘠土段をなし階をなして列り、其間を Columbia 河流るゝなり。余をして Hoffmann の書きし Jordan 河の景を思ひ起さしむ。Quincy あたりに來りし頃、日は暮れんとして汽車止りぬ。前面の bridge 燒けたれば之れを越す事能はざるなり。仍て微雨の間を橋の彼方なる汽車に乘り換ゆ。困難甚だし。彼方の汽車に着せし時は日既に蒼然として暮れぬ。夜早く barth を造りて寢ぬ。

九月十二日。土曜日。既に起き出でたる時は、身 Rocky Mount の麓にありき。此山も東面せる方は肥沃にして樹木多し。景色の雄大絶佳なるは比するに物なし。實に我等實狀を觀ざれば此雄大莊嚴を想像する事能はず。

　昨日より乘り來りし二人の少女可憐の極なり。よく我等に親しく色々の話などす。一人は八歲一人は四歲、Havre に行くなりと云ひしが途中にて降りぬ。其時余は我が記帳に彼女の姓名番地を記さしめぬ。然り彼女は實に可憐なるものにてありき。〔少女のスケッチあり、略す〕

　Summit に停車したれば、余等は皆汽車より下りて彼所にて雪投げせり。此前より雪はハラ〳〵と降り來りつゝありしなり。Summit を超ゆれば一帶の景色再び荒凉となりて漸く廣漠たる平野に入りぬ。此夜八時半就寢。

九月十三日。日曜日。起き出で見れば滿目皚々たる白雪眼も醒むる許りなりき。余等が汽車は今 Avoca 邊を通過しつゝあり。凡て際涯を見ざる許りの荒野なり。Devil's Lake あたりに到りて雪漸くなし。此邊皆牧牛牧馬を事とし、見渡す限りの pasture なり。追々汽車中の外人と親しみて色々親切なる話など聞く。空は常に曇りたり。

九月十四日。月曜日。朝六時目覺むれば身は既に St. Paul Station にあり。七時頃汽車を出づ（汽車は既に午前三時頃此地に着したるなれども余等のために待ち居たるなり）

　汽車を出でて停車場の待合室に到る。美麗なり。余と同車せし一人の紳士親切にも余等を導きて休憩所、洗面所及び辨當を喫す可き所をすら敎へて停車場の前に相別れぬ。かくて兄と余とは直ちに茶店に入りて朝食を喫し停車場に歸り來る。此

所は入口稍々Seattle に劣れりと稱するものなれども、其繁華の度は全く甚しき差異をなせり。是れ Seattle の開港場にして、此地の單に平原の一都市に過ぎざるに依るなる可し。

朝八時十分の汽車に乘る。混雜甚し。余等辛じて列車に投ずる事を得たり。構内は煤煙もて黑まり其不快云ふ可からず。列車の出づる頃雨降り出せり。此邊より一帶の風物大に改まりて豐饒の有樣を呈し來り、one acre の價 $ 50 に至ると云ふ。年老いて土地賣買の事に從事する人と席を列ねて色々の事共語る。試みに彼に與ふるに日本の錢を以てせしに、彼喜ぶ事甚しく頻りに日本の御世辭を振蒔くなり。凡て此邊の人間は極劣等にして而も醜惡の容貌を有するもの多し。余等森に電信を致さんが爲めに頻りに彼れ是れと奔走して漸く之を發する事を得たり。英國々教の牧師入り來り、余等を捕へて恰も親友の如く取扱ひ、僅少の時間に種々なる便宜を與へ欣然として去りぬ。

Smoking room にて晝食を喰ふ。他の乘客は此の如き事をなすものなし。Smoking room には殊に容貌醜惡なるもの多く、其一瞥は人を戰慄せしむ。汽車中の事不快なる事多し。乘客一般の品位痛く下劣なるは、余等が觀察眼にも明かにして、余等の如き田舍者を以てすら相當の威嚴を保ちて坐するの已むなきに至るなり。Oelwein に着せしは午後二時五分前なりき。

總じて Great Northern Railway の人々は最も質朴を極め、其言語動作凡て自然に出でて人を喜ばしむるもの多かりしが、Chicago Great Western Rail Line に至りては實に亂雜を極む。若し此地方の住民が合衆國全體の大部分を占むるものなりとすれば、余は最も米國なる國を厭ふ。其野性は實に日本のそれに勝れり。唯外面に働ける皮相的の politeness を有せるのみ。

此夜汽車は六時頃 Chicago に着す可き筈なりしが、痛く遲れて十一時頃に至りぬ。兄と余とは躍れる心を以て train を出でんとせしに、端なくも森の我等を迎へに來れるに會して爲したる時の握手！ 我等は直ちに彼に伴はれて街車に乘じ、他の五人は一の大なる hotel に到り、兄と余とは彼の周旋もて彼の滯在しつゝある Dr. Backley 氏の家に入る事を得たり。家に入りしは稍々十二時半に近かりしならんか。それより歡談百出多く止まる所を知らず。寢に就きしは、二時半頃なりしなる可し。

余等は此日より二十日まで此市に滯在せり。森君は兄弟も及ばざる親情を以て、己れの事務を廢して余等の爲めに種々なる便宜を與へ呉れぬ。余は長く長く日記を怠りたれば今、日を追うて余等が見聞せる所を記さんには餘りに煩雜なるべし。

忘れ難きは到着の翌日三人三階の我等が室に相語りしそれなりき。憐れむ可き森の心中には、一日も半晌も取り去り難き大なる苦痛ありて潜めるなり。余は彼の此苦痛を察するに餘りあり。兄は戀愛なるものを疑ふ所の一人なり。されども余は頻りに兄にして此事あるを怪しまざる能はず。此點に於ては兄と余とは殘念ながら常に其立場を異にせり。兄と余とは交る交る信子君に就きて見聞したる所、並に余等の彼女に就きてかくと信じたる事を語りぬ。彼の胸の騷ぎ波打ちて涙睫に逼らんとせしは、余これを見逃がす事能はざりき。余も幾度か涙に破れんとせり。森は曰く「余今に及びて尙彼女を娶らんとは云はず。されども初めて彼女と約する時、余はよく彼女の性質素行の如何なるものなるかを知り、彼女が世上に種々なる風評を傳へらるゝとも決してこれを以て煩ひとなす事なく永く相信ず可きを以てせり。而して此度の事、事甚大にして既に疑惑を挾む可き餘地なきが如きも、未だ動かす可らざる證左を得たりと云ふにあらず。輕々しく人と世との評する所を信じて妄動せんは余の極めて堪へる能はざる所なりしなり。然れども余は他の方面より、余の此事あるが爲めに老年の兩親を苦しましめ朋友に苦慮を增さしむるを思へば、自己一身の事の爲めに他者を損ふの苦痛をなすに堪へず。遂に彼女に送　に絶交の書を以てせり。されども余の素願は、固より彼女の內部に潜める才能を認め、願くは其外部の附着物を除かんとするにありしが故に、自今と雖も若し嘗て余の行爲にして彼女をいさゝかなりとも苦しましめしものありとせば、余は甘んじて是れを除去するに勉めざる可からず」と。是れ實に美しき覺悟なり。余は彼が何處までも彼の面目を失ふ事なく、其戀を終始せんとするを見て今更に云ふ可からざる感慨に入らんとするなり。嗚呼彼女も亦人の子なり。願くは森の祈る所行ふ所彼女の堅き頑なる皮殼を破りて中心に入り、彼女が聖愛によりて救はるゝの時來らん事を見るは如何によき事なる可きぞ。余は主の攝理願くは彼と彼女との上に裕かにして、嫉みによりて破られし凡てが愛によりて酬はれん事を望むや切なり。それより談は進みて信仰の事に移りぬ。嗚呼奈何す可き。余は依然として三人の中信仰の嬰兒なり。余は又余の苦がき經驗を語り

出でぬ。彼等は是を實に容易に解釋しぬ。而して余は遂に是に滿足する事能はざるなり。凡てのもの進むに余獨り退く。凡てのもの既に神の懷に入れるに、余獨り尙 outer darkness にあり。嗚呼此孤獨の感を如何せんや。唯信仰。唯信仰。信ぜしめられたる信仰。忘るゝ事能はざる信仰。此の如き信仰の余が行爲の基礎を造る可き時は果して何時なる可きぞや。余の眞の信仰と思ひて堅く賴みたりしもの、須臾にして一片の感情に過ぎざりし事あり。一片の反抗心よりなりし事あり。單に不思議なる vanity なりし事あり。空中に畫きし樓閣なりし事あり。猿の如く所謂他人の眞似をなしたるに過ぎざりし事あり。凡ては且つ美しくして且つ空しきなり。凡ては且つ輝きて且つ暗きに入るなり。寧ろ此の如き一時の快心を得て再び暗黑の他界に向はんよりは、始めより暗黑界に住みて光明の他界を見ざらん事を祈る可かりしならずや。口に信仰を云ふや易し。而も心の中より、心の深く響く眞底より我信ずと云ひ得んは何日なる可きぞ。奇怪なるは余が心狀なり。余は余が主なる基督が、余等の爲めに余等の犯せる罪の爲めに十字架にさへ就き給ひしを知り、信じて云ひ盡し能はざる感謝を覺えるものなり。此事實は餘りに顯著なり。トーマスに過ぎたる苛察の余と雖も斷乎として拒む事能はず。余は是あるを思ふ時に、心は確かに波立つ如く震ひ動くなり。されども此大事實も今の余には常住の信仰を與へず。余は恰も道を失へる盲者の如く再び舊の發足點に歸り來たらんがため、唯藻掻き藻掻くのみ。「汝の行爲學者とパリサイ人より勝れずば」と云はれし霹雷の如く余が耳に響き來る時余は何を以て、余は信仰篤し、余は基督信者なりと云ひ得可きや。されども余は感謝す。余は余の懷疑を神の存否、基督の聖否等に挿まざるなり。余は實に惡鬼の爲せし如く是を信じて戰くなり。余の煩悶は他にあり。余凡てを知り凡てを信じ得るの立場に立ち、而して尙基督信者の當然入り得可き信仰と實行とに進達し能はざる是なり。神は尙余の不順を憐み給ふ可きや。七度を七十七倍する寬容はありとも、余の不順を憐れむの寬容は殘され得るや。善惡邪正を辨へ得ざる禽獸は幸なるかな。智慧の實は甘からず。嚙みて核に至るに從ひ苦味を增して遂に毒に至らんとす。願くは我を牢より救ひ出し給へ。凡ての悶思凡ての苦慮を大なる御手に託して、常住の笑みもて御顏を拜する事を得るの時來らしめ給へ。此小軀は全く我が同胞の爲めに捧げたりてふ思を益ゝ嚴肅ならしめ給ひ、凡ての時凡ての處になす所の行爲、思ふ所の思想、

唯々此一點に會する事を得せしめ給へ。主の笞主の鞭我れを慰む。唯々願ふらくは御顔を此所より遠ざけ給はざれ。

余は始より米國の文明の最高なる發展の方面を見んと希ひたりき。Chicago 市は人口二百五十萬に近づかんとする大市街にして、而も其發達は僅々四五十年の事に係るが故に、恰も正に大人期に入らんとする强健なる青年の如く、其活力は四邊に磅礴して大善事大惡事共に此市内に行はるゝものあるが如し。余は生來未だかゝる energy の發展を見たる事なし。余は新渡戸先生に書を致して、シカゴ市を若し擬人する事を得ば星亨と稱す可きかと申し送りぬ。此市は實に一種の monster なり。此大市街に於て余の見たるものは Chicago University, Library, Art Gallery, Mansfeld's Department Store, Union Stock Yard, Jackson Park, Washington Park, Theatre 等なり。Chicago University は殆んど一富豪の建築せる所、其規模の大多く比類を見ず。研究の態度も最も自由且つ新式なるを以て名あるものなり。是は多く語るの必要なかるべし。Library も壯大なるものなり。四壁モザイクの美麗なる裝飾もて裝はる。眼も眩する許りなり。書籍も相應に多きが如し。試に新渡戸氏の "The Intercourse of U. S. A. & Japan" を採りたるに直ちに出で來れり。Art Gallery は是れ余が日本に在る時より渴望したりしもの。此國に遊びて若し古名畫の潤色あざやかなるものを見る事を得ば、そは假令摸寫なりとも如何に快かる可きぞと思ひたり。此日は兄と共に一人にて到れり。初めに彫刻物の陳列場あり。等大の名作の摸作多くミロのヴィナス、ラオコーン其他數知れぬ希臘羅馬名匠の作、並に溯りて Persia, Assyria, Babylonia, Egypt のに至る迄備はれりと云ふ可し。殊に白大理石に刻まれたる裸體の女神像の如きは精細の美玆に極まれるを覺えて渇仰の念に堪へざらしむ。繪畫の部に至りても面白きもの多けれども、こは寧ろ失望なりき。但し古畫の摸寫の中には忘れられぬ印象を與ふるもの尠なからざるなり。固より是等の畫は一畫を細見せんに猶裕かに一日を費すに足るものなるを、僅かに一刻に足らざる時を以てせんとする事なれば、眼に留り難かりし細微の個所甚だ多かりしと雖も、ラファエル、ミレー、ヴァンダイク、ルーソー、ミレー(ジョン)等、始めて彼等が用ゐる色彩の如何なるものなるかを知りたり。近作のものに至りては悉く舊派に屬する摸寫的のもの多く、眞個に自己の活動せるものは甚だ稀に認め得る處なりき。中に "Truth" と題する一畫、色彩の絢爛布置の結構人物の expression に

至る迄非常なる成功と稱す可きものを見たり。此一晝のみ、今眼に止まれるは。Mansfield Department Store は其規模の大なるに驚く可し。一戸の中に傭ひ居る番頭小僧の數七千五百人に達すと云ふを以て推す事を得可し。これに次いで云ふ可きは Theatre なるべし。最初に見たりしは Tolstoy の "Resurrection" を Welsch と云ふ女優 star となりて演ぜしものなり。余は嘗て "Resurrection" を讀みたる事ありしが故に、森に乞うて此劇を見んとしたりしなり。感情の表現巧を極むるものあり。Nechljudow が憐れむ可き少女を牢獄に訪ひ、徐ろに舊時を語りて彼女の痲痺したる記憶を呼び起し、遂に己れの罪を彼女に謝して彼女に結婚を申込むや、初め全く indifference にありし彼女漸く本我に歸り來りて、云ひ様なき shock を心に感ずると共に、彼女を墮落の第一歩に導きたりし Nechljudow の眼前にあるを內覺し、瞋恚俄然として全身に發し來りし様など身も震ふ許りなり。次で彼女は昔の純潔なりし生涯を想起し、今の窮境の餘りに烈しき變り方に、云ひ様なき悲哀の思を胸に浮べ來りて遂には堪へ得ず面を掩ひて大泣せんとせしが、不圖己れの決して再び昔の純潔に返る能はざる運命に心附き、萬滴の涙も奈何ともなす可き様なきを悟るや、眼に溢れんとせし涙は忽ち退きて滿面畏る可き冷笑に變じ、乾笑に變じ、泣くとも叫ぶとも判じ能はざる一種の笑聲を漏し來る所何等の愴慘、一日人をして心を痛ましむ。而も軈て Nechljudow の心事明瞭に彼女の心に映じ來りて、其高情芳志を身に沁むる如く感ずるや、一種云ふ可からざる純潔の哀感胸を衝いて起り來り、今は立ちも得せず坐りも得せず身を悶えて、ふと傍に飾れる十字架に眼を注ぎ何事をか思ひ起したるが如く思ひ起さゞるが如く、暫く見入りてありしが忽ち夢幻の境より現實の世に歸り、Nechljudow の眞情を如何なる方法もて受け入るべきか、此身は既に汚れて彼の伴侶たり得可くもあらず、さりとて彼の愛は今我を慰め勵ます唯一の綱となりしをあへなく切り捨つるにも忍びざる慘憺たる苦慮に入り、指頭自ら戰き震ひて噪狂周章爲す所を知らざる様など洵に眞に入れり。既にして此に同じく女囚にして純潔なる事 angel の如く、囚人に同情濃かなる一人出で來り、彼女を己れの胸に抱きて其悲痛の所以を聞き、己れの苦しかりし經驗を語り互に相慰め相抱き、暗澹たる牢獄の中に此二人友情の温さに泣きて握手して相倚りたる儘、嘗て歌ひし小唄を低唱しつゝ美しき感情の高潮に達して、有耶無耶の鄕に入る所にて幕となれるなり。是實に此劇の最高なる

個所なる可し。余は幾度か pathetic tear に破れざる能はざりき。其次の夜に見たりしものは musical comedy と云ふものゝ由にて、country girl と云ふが外題なりき。こは主に舞踏と音樂と歌聲とを見聞せしむるを目的とするものゝ由なれども、余は何の感興をも引かず、寧ろ厭惡の念を牽きたり。歌の聲美しからざるにあらねどもそは美術と云はんよりは技術と云ふに近しと思ふ。天啓もなく情熱もなく唯々口頭二寸の技のみ。又次の夜は Auditorium にて Sausa's Band を聞けり。此 Band は今米國にては大評判なるものにして、Band として世界一と稱せらるゝものゝ由なり。Band に與かる人數凡て五十人、半老の Sausa 氏出でて指揮す。悲しきかな樂を聞くの耳を有せざる余は、他人が聞き得たる半分も四半分をも味ふ事能はざりしなり。而も今も忘れ難きは Sausa 氏自作の "Pole Star", "Under the Light of Southern Cross", "Venus and Mars" 是なりき。就中身に沁みて覺ゆるは第二者なり。沈鬱莊嚴なる東洋の樂器を多く混へて、靜かに低音を呼び起し漸く聲の大となるに從ひ寂寞莊嚴の意更に加はりて、身は恰も夜長く閉したる南洋に、半宵舷によりて渺茫たる海と空とを望むの想あらしめ、風死して天籟地籟共にやみたれども時に波頭の船首にくだくるが更に悲愴なる時、濃藍の色深く澄み渡りたる空のあなた銀河横ざまに流れたるほとり、正しく南方の碧落高く十字を描きてきらめける星影を、嘈々たる低音樂の中に triangle の聲をすまして鳴り出さしめし時は、身は一個何等かの罪を犯せる囚旅となり南方の孤島に向ふ道すがら、半歳の夜を取り守りて此南半球の尊嚴と希望とを集めし星の光をまざ〳〵と仰ぎ見たる心地して、思はずも涙の睫に逼り來るを禁ずる能はざりき。是れに比すれば日本の音樂は如何に憐れなるものぞ。其所に個性なく、熱情なく希望なく、信念なし。而して此の如く高尚なる音樂を樂しむの耳を有する國民も亦祝福す可きかな。

何等の漫筆ぞ、余は興の動くが儘に濫りに此の如き事を書きぬ。こは日記に載す可き事にはあらざる可し。余等が出發の前日に見たりしものは、有名なる Union Stock Yard なり。周圍二里に達せる此大區域は凡て屠殺場なり。一日に殺す牛の數二千、豚の數二萬とか聞きぬ。余は今思ひ出すも厭なり。屠豚は幸にして見ざりしが屠牛は不幸にしてこれを見たり（羊は其死に當りて柔順なるが餘りに殘酷なればとてこれを見物するを禁じありとぞ。所謂屠所の羊の幾千頭とも知らず群をな

せるは是を見たり）長さ三十間幅十五間は確かにある可き大建築は即ち屠牛場なり。死を前に控へたる牛の驚きまどひて聲も得立てず、其眼には實に云ふ可からざる悲痛の expression を示して悶ゆるを、順次に撲殺する傍より頸を刺して血を搾り頭を切り放ち、體を半截し五臟を出し皮を剝ぎ、熱湯にて洗へば一頭の生きつゝありし牛は、僅々數十分の間に一塊の肉と變じて冷藏庫に運ばるゝなり。玆一場の光景は恰も地獄なり。戸を排すれば既に何とも云ふ可からざる生血の惡臭ありて鼻を襲ふ。加ふるに滿目の流血火の如く、其間にありて大刀を振りつゝ働ける人々は頭より靴の先に至る迄血みどろなり。職業もあらんに如何なれば此の如きを擇ぶかと思ふなり。嘗て此處の勞働者の中己れの妻を殺したるものあり。其始末にや困じ果てけん、殘る憤怨の尙やる瀨やなかりけん、其妻の肉を牛の肉に加へて sausage を造りたりとぞ。實に彼等はかくなり得可き十分の probability を有せり。Tolstoy が菜食主義を主張するは尤もなりと云ふ可し。此夜は三人共肉を食ふ事出來ざるに至り支那料理に到りて辛く誤魔化したり。

かくて九月十九日の朝一時四十分の汽車を以てシカゴ市を發しぬ。樂しかりし一週日は過ぎ去りて森は再び孤獨に殘され、兄と余とは再び孤獨となる可き道を急ぎぬ。此日天氣晴朗四圍の風光中々によし。此夜汽車中に眠る。不幸にして余等は喫煙車に入りたれば、此に來るものは皆素性甚だ宜しからぬものにて、加ふるに煙草を喫し酒を飲み、かるたを弄ぶ等亂暴狼藉甚だしく、余は實に十二分の不快を買へり。加之夜稍ゝ寒かりしと出入の人多かりしとにて一夜殆ど寢ぬる事能はざりき。

九月二十日。 日曜日。兄は三時頃遂に Baltimore に下車せり。Mr. Stick の父上は兄を迎ふる可く停車場にありき。兄と彼とは荷物を持ちたる儘停車場を出で行くなり。余は彼等と離別の握手せんとしたりしかども、そは許されざりき。余は落膽して汽車に入れり。かくて余は遂に孤獨なる東洋の旅人となりぬ。かくてより寂寥一身に集まりしが如く覺え、一人胡坐して時に窓外を眺めたり。風光は全く我が眼には新しきなり。さはれ Baltimore のしばらく前より景色は殊に麗はしくなりぬ。東方には時に大西洋（大西洋、大西洋、余は克く此海を望み得たり。神は塵埃に等しき此罪の子をかく迄遠く導き給ひぬ。如何なればぞや。余徒らに死し得んや）の波光を窓外に望み、John Brown's Monument に當時の光景を思ひやり、Washington

停車場に到りては Congress Hall, Washington Monument を遠望して、胸には歴史の閃影電光の如く躍り、新しき亞米利加の舊き部分を最もなつかしと見たりき。

New York の South Ferry に着せしは九時半に近かりしならん。餘りに遲ければ增田ありやと心に打ち案じつゝ列事を出づれば、遙かに人々の待てる中に一人丈低き人あり。余の胸中は一杯になりて何故とは知らず足さへためらふなり。されども懷しさは我が凡ての部分を占領しぬ。余は只混亂したる心もて彼に近づきつゝ其手を握りぬ。兩者語なし。嗚呼神よ謝す、我等は悲しきものなり。

　東君亦余を迎へてあり。共に電車に乘じ彼等が下宿せる家に着せしは十一時頃なりしならん。英一兄と寢臺を共にして寢ぬ。余は前日來の疲勞にて體は綿の如きを覺ゆれども、眼は冴えて眠る事能はず。語る可き事多く泣く可き事多く、さりとて是を語り出でんは辛し、如何にせんと胸のみ迷ひながら談は彼に移り是に移り、涙も流し笑も漏らし、共に眠りに入りたりしは、曉明既に催したる四時半頃にやありけん。

九月二十一日。快晴。此日朝九時頃漸く起床し更衣して、英一兄と二人にて家を出で Central Park に到る。こは其字が示す如く市の中央にあるものにして其廣大なる事驚く可し。而して割合に多く自然の風致を殘したれば殊に幽靜なり。道漸く細く林中に入り、行くに從ひ遊客稀となりぬ。是嘗て彼が唯一人滿腔の憂思煩慮を抱きつゝ、これを頒つ可き友もなくて淋しくさまよひし處にあらざらんや。彼の多恨の涙眼かの石に向ひけん、此の木をや眺めけんと思へば、余は髣髴として彼を描き出す事を得るなり。彼は余を導きて小池の畔に到りぬ。樹下の露臺に坐して相默して暫くは語なかりき。

　二年とは永き月日にあらず。されども我等が二年には他人の一生にも或はあり能はざる可き多數の事變を包みぬ。余は肝を擣るの思を以て彼が故國を去りし以後の故國を語りぬ。余が彼の飛信を得たりし時の驚駭（嗚呼余は回想しても新たなるが如く魂の驚くを覺ゆ）より、我等が苦心の困難、家安君の死に至り、遂に彼が頃來に於て余に致せる書の誤解ならん事を辯解したり。彼は死せるが如く默して聞きぬ。而して後彼は彼の遭遇せるところを語り出でぬ。故國を去らんとする時に起

りし已むを得ざる事變、渡米後の苦心、家安君の死、實兄の死、發病と其間に起りし彼女に對する痛切なる懷疑、是等は彼の平常に似合はず滴々たる熱涙と共に語り出でられぬ。「昨年の一月には家安君逝きぬ。今年の一月には家兄逝きぬ。來年の一月には果して誰を失はんとかすらん。余は生きて何者かを失はんよりは寧ろ自ら失はれん事のいかによかる可きぞ」是彼が肺肝より搾り出したる辭なりき。嗚呼、余は知らず、余は知らず。余は何を以て彼に語り何を以て彼を慰め、何を以て彼を勵ます可きかを知らざるなり。彼は今全く彼の ambition を捨てぬ。彼は其半生の精進を凡て無に葬り、自ら世を退き合衆國の南方に退きて一窮農たらんとするなり。神聖なる祭壇に燃されたる火の、空しく消えて一抹の死灰を殘せる如き彼の心事慘ましからずや。凡ては余の罪なり。余の少情は余を驅りてかくの如き結果に到らしめぬ。余は出來得る丈けを彼より奪ひぬ。今は何を以て彼に與へ得んや。嘗て水の如く濕潤に滿ちて玲瓏たりし彼は、急轉して火の如く呪詛に滿ちて煩悶する彼となりぬ。而して今は水も濕ほす能はず火も燒く能はざる indifference の中心に坐して、悲哀と歡喜とを見る事路傍の石の如からんとするなり。彼の語る所は餘りに悲しく余の心に響きぬ。彼は誰をも責めず、己れをも責めず。若し責むるの必要あらば彼の天を責めんとする色さへ見ゆるなり。是彼の傍に坐せる余に取りては何等の痛恨ぞ、然れども神は謝す可きかな、彼が此の如き痛切なる懷疑の中に唯一つ毀たで殘し置きたるものは彼が余に對する友情なり。彼は同情を知らざる事野獸の如き彼の友を憤らざりき。彼の完膚なからんとする迄に傷けられし愛は、其痛みを包む可く其顧み甲斐なかりし友を呼びぬ。彼は其唯一人なる友の手を握り得ん事を以て、此廣漠たる世路に殘されたる唯一の慰藉となすなり。余は是を思ふ毎に殆ど腸の九廻するを覺えざる能はざるなり。宜し、宜し、凡ては如何にともあれ、余は忍びて無恥の人となる可し。余は余の全力もて再び彼を慰藉し鼓舞する事を努めなん。余の彼に對する同情が足らずして、再び彼をして又もや失望の上に失望を來さしむる事あらんを畏るゝの時にはあらず。余は今に至る迄に痛くも彼を傷けぬ。されども神は余の此行爲も彼を苦しめんが爲めになしたりしにあらざる事は知り給ふ可し。余が衷心は愛したる如く彼を戀したりしなり。

夫れより共に Art Gallery を見、市に出でて夜食し、家に歸りぬ。嘗てシカゴにて面會したりし鹽屋君亦來りて此家に泊

れり。此夜余の室を見舞ひたれば共に色々の話などす。此夜も亦枕を擁して二人悲しき夜を更しぬ。

九月二十二日。晴天。此日朝英一兄の友來り書近く迄互に語りたる後、其友と共に家を出で何とやら云ふ公園なる動物園を見舞ひぬ。彼は此に來りて猛獸を見る事を樂しむとぞ。實に檻にせられたる猛獸の姿を見るは一種の面白さなり。砂漠の王、森林の王、草野の王など相下らざる尊威を持して傲然として其殘生を生くる姿は云ふ可からざる一種の感想を引くなり。夕暮近き頃三人小艇を僦うて湖上に浮びぬ。所謂才子佳人參々伍々小櫓を操りて喃々たる柔語此あたりに多き所なる可し。余等が艇獨り異れり。黃顏黑髮の小人三個美しく暮れ行く秋暮の色を惜みて水を溯る事約半晌、兩岸の楓葉稀〻黃となりて碧巖聳ゆる所に草亦漸く凋むを見る。人の造りし都市の中にもかゝる秋は讀まるゝなり。

家に歸りしは夜七時頃にや。我は此處にも亦甚だ多忙なり。此夜は英一兄余を Manhattan 座に伴はんとするなり。Mrs. Fiske と云ふ人 "Mary Magdalene" を演じつゝあり。八時の開幕なれば此頃を期して到りぬ。名にし負ふ演事、聖經の事に係るなれば其嚴肅は固よりなれども、Mrs. Fiske と云ふ婦人は普通の女優とは選を異にし、技倆の拔群に加ふるに藝術其者に尊愛深き由なれば、舞臺は自ら引きしまりぬ。同婦人の Mary Magdalene もさる事ながら、最も深く感興を引きたりしはイスカリオテのユダなり。二人ながら聖書に於ては例を見ざる二大性格なり。此劇に於てはユダがマリヤを戀慕し其戀の成らざりし深刻なる失望に加へ、基督の爲す所己れの理想となせし所と何の關りもあらざりしを見、將又己れが戀の敵なりし一羅馬人が其戀に成功してユダに加ふるに激烈なる罵詈を加ふるに至りて、ユダの心は大に動き非常なる煩悶苦痛に陷り、遂に基督を賣るに至りしまでの經路は誠に畏ろしき許りなりき。余は嘗て伊豫丸の船中に三人の牧師とユダを論じて議大に合はざりし事ありしが、今此の劇を見て余は余の所論の誤れるや否やに拘らず益〻其根柢を堅ふせらるゝを覺ゆるなり。若し此に劇作者ありて基督とユダとの性格を畫きしとせよ、而してこれを場に登さんとせよ。余等は必ずやユダに同情の一片を寄せざる能はざる可し。(基督に對する無限の痛惜は勿論の事なり)而して基督が益〻よく描かれユダが愈〻よく描かるゝに從ひ、此の度は益〻加はる可し。尙云ひ度きことあれども今は默す可し。此夜も亦。(以下原文缺)

九月二十三日。水曜日。晴天。朝は家にあり。午後より英一兄と共に New Jersey の Sea Bright に田島君を訪ふ。South Ferry より船に乗りて、港口に有名なる自由の女神が燈明を揭げつゝある燈臺を望み、約一時間にして彼岸に達しぬ。それより汽車を取れば十數分にして Sea Bright に到る可し。短軀黃顏の人は玆にも一人ありて余等を待てり。余等は彼が傭はれ居る一富豪の家に入り、其廐の二階なる彼の室に入りぬ。彼は例によりて快活に彼の過去の二年を說きぬ。かくて其家を出でて後庭の林檎樹下に到り葡萄を食ひながら色々の事語る。彼は此校を終らば將にエデンボロー大學に遊ばんとするの計畫あり。夕暮彼と別れて再び New York に歸る。歸途例の船に上りて四方を見る。滿天紅を潮して水も亦紅く、遙かに打ち見やれば New York の市宛ら巨人の岸に倒れて一日の勞苦を慰めつゝあるが如し。

家に歸り着けば飛信あり、Mr. Elkinton 氏より來る。學校昨日始れり、直ちに來れとなり。此夜は我等が玆に有し得る最後の夜なる可し。然り最もよき時を我等に惠み給へり。余は如何なる運命の下に置かれたるにや、日本にありし時は兄は遠く仙臺にありて多く會する事能はず。他には友として眞に語る可きものとては獨りもなく、寂しくも孤獨の生活を續けたりき。此土に來りてより森に會し增田に會し田島に會す。人生の事も亦計り難きかな。然して思へば是等の友の中、人生の苦味を嘗めざるもの果して幾人ぞ。而して其痛み最も甚だしきを英一兄となす。森これに次ぎ、兄これに次ぎ、田島最も康く、余は凡々たり。知らず。この凡々の生涯が何等かの變化をなさん時、余は如何なる面を以て神の御顏を拜し得可きぞ。

九月二十四日。木曜日。晴天。此日は記憶せらる可き日の一なるか。彼は日本に歸るの期近づきぬ。余は米國に留まること兩三年なる可し。停車場にて輕き朝食を喫し十時某分の汽車に乘る。英一兄等は汽車迄入り來る事能はざるが故に切符を改むる所にて別れぬ。是より一年の間は余は孤獨なる日本人として米國の土に住む可し。

三時半頃 Philadelphia の Broad Street Station に着しぬ。Mr. Elkinton 氏あり、余を携へて Department Store に導き行き玆に Miss Luppincott に遇ひ、彼女余の爲めに服其他の物品を購ひ吳れたり。それより四時某分の汽車に乘り Haverford を指して行きぬ。Haverford に到れば學生三人余を停車場に迎へ居たりき。余は直ちに彼等の眞率なるを認めぬ。閑雅なる住

家疎らに建ち、道を挾みて楓樹の植ゑられたる邊を過りて稍〻四丁にて校門に達す可し。門を入れば見渡す限り芝地美しく、樫や楓や栁や形よきが彼處此處に生ひ繁りたる間に、石造の寄宿舍見らる可し。是れ Barclay Hall なり。三學生は余をその二階なる一室に導きぬ。十二疊許りなる可き西向きの室なり。立派なるものなれど furniture とては何物もなし。鏡臺二つ化粧臺寢臺是なり。

再び三人に導かれて食堂に到り夕食をしたゝめぬ。それより書記の室に到りて名簿に我が名を記入し、校長 Sharpless に面會しぬ。齡六十なる可しと見らるゝ老偉丈夫なり。頭の半部は白髮に被はれ面は童顏にして血氣若く、眼は小なれども其かゞやきは鋭し。其眞一文字なる口には智慧と決斷著しく讀まれ、鼻は尋常にして多くの expression なし。彼は親切に余を引見し、夜陰をも厭はず余を伴うて Dr. Harry を訪ひぬ。氏は余の室の向側に其室を有し經濟と歴史とを受持てるなり。彼は Johns Hopkins University の卒業生にして未だ壯年なり。彼は向後余の thesis に對して種々なる suggestion を與へ吳るる人なる可し。かくて余は此に History of England, Medieval History, Economics (Labor Problem) 及び German を取る事とせり。一週の時間は約十時間なり。

我が殆ど一ケ月に亙りし大旅行は玆に終りを告げぬ。余は可なり疲勞せるが故に此夜は直ちに寢に就きぬ。何の夢もなし。

此後の余は通常の書生が爲す如く每日敎場に出席して勉強するを以て專務となしぬ。又格別大事件はなし。

主の恩惠は常に余の上に永久なりき。

〔以下は米國ペンシルバニヤ州ハーバーフォード校に於いて〕

少　女

母の膝に夜の祈する子のまみよ淸し美しひそむなとこそ

頭なでて胸にいだきて頰すりて若き兎を夢に泣かすな

さはれ一日人を泣くべき其胸よ人を泣くべきほのほの胸よ
乳房だきてあやしき夢にまどふべき神よさだめを子にもたびしや
のろはしき人の此世よ血をもして小さき我が子に戀を教へて

十月八日。木曜日。大暴風雨。英一兒は其歸途を以て余を此閑村に訪ふべくなりぬ。余は宛ら禽獸に滿ちたりし樂園にイブの誕生を見んとするアダムの如し。悲哀の子はふさはしき時を以て來りぬ。一昨日來秋天雲もて被はれ、西風烈しく襲ひかゝりて眞に篠を束ねたる如き雨は晝夜を捨てざるなり。されども余の心は歡喜に滿ちぬ。いそ〳〵として停車場に到り僅かに殘りし金を以て切符を購ひ Philadelphia 停車場に到りぬ。汽車の出入烈しかれども彼らしき影も見えず。余は烈しき失望を覺えて尙且彼の來らん事を待ちぬ。後ろより余の手を捉ふるものあり。此異鄕の外に彼ならで何人ぞや。汽車は二個の歡喜其者を乘せて Haverford に急ぎぬ。頽嵐は荒れに荒れて尙止む可くもなし。

余の室は初めて日本の客を容れぬ。余は爾かはあれども今日は非常なる戰を戰はざる可からず。余一昨日兄に書を致して彼に書を送らん事を乞ひぬ。そは余一人の力を以てしては到底勝つ事能はざるを覺えたればなり。余の今日の戰は英一兒を起して再び彼が始めに選びし道を歩ましめんとするにあり。余は彼の如き力あるもの、信念あるもの、主義あるものを空しく邊土に朽ちしむるに堪へざるなり。是れ余が彼の成功を祈るが故にあらずして正義の成功を祈るが故なり。彼はよく彼と人情とに忠實なりき。世は未だ彼の如き眞面目なる忠實を見ざりき。已れに忠實なるものゝみより人に忠實なり得可し。余は彼に要求するに是れを以てせんとせしなり。余の信仰は薄弱なれども未だ嘗て神を忘れず、彼を起して神前の犧羊たらしめんは、余が神と彼とになし得る最大の事業ならずや。余の無恥の人となる可き時は來れり。余は余自ら殆んど致死の傷を負はしめたる一人を捕へ、汝自ら汝の傷を醫して再び健康なる人たれと云はんとするなり。

此夜十時半頃二人とも床に入りぬ。狹ければ相抱くが如くせざれば落つるなり。余は遂に發奮して余の所志を述べぬ。彼は大なる尊敬を余の言ふ所に拂ひ吳れぬ。余は余の才能を許り余の信仰を許り余の經歷を許るの時、余の誠になすなきものな

ることを思ひ、全く失望の淵に沈む事幾度かなれども、主の恩惠尙此の如きものにも裕かなるを思へば、此感激は余をして此世に活きざるを得ざらしむる其實驗を語り、彼も亦彼の悲哀を主に委ねて彼の復活をなさん事を涙もて說きぬ。彼は余の云ふ所を了解し殆んど泣かんとして「如何にせばよきか余は眞に知らず」と云ひて長大息しぬ。是れ彼が最極の煩悶の聲なりき。余は尙多くを彼に說く事能はず。

十月九日。金曜日。暴風暴雨。例の如く起き出でて二人は朝食をしたゝめぬ。それより世界は凡て二人のものなりき。我等は吹き荒ぶ嵐の中に歌の如く詩の如き對話を續けぬ。玆には破壞すべからざる美しき調和ありき。されども凡ては再び破れざる可からざるなり。晝食の後二人の心中にも嵐は起りぬ。二人共默し勝ちに寢臺の上に橫はりたる儘感慨に滿ちき。窓外には雨聲嘈々として衣に徹せんかとも思はるゝ許りなり。

かくて余が昨日彼を迎ふる可くいそ〳〵として乘りたりし汽車は無情にも來りて彼を乘せ去りぬ。泣かん事も得せで余は首を垂れたる儘、往還全く絕え果てし孤村の田舍道を辿りぬ。嵐は宛ら衣を裂かん許りに襲ひ來るなり。校門の處に來り余は初めて面を擧げぬ。四面模糊として怒雨の中に煙り、世は急に狹くなりしが如し。「余は何が故に生きて此の如き所に住ふなるぞ」とは此時余の心の奧底を衝きたる疑問なりき。

彼は去りぬ、余は殘りぬ。余は殘りぬ、彼は去りぬ。

向後彼は如何なる道を辿る可きか。余は如何なる道を辿る可きか。兎まれ此日は忘る可からざる可く我等二人に殘りぬ。

十月二十七日。火曜日。Haverford の秋も遂に暮れぬ。今朝敎場より見れば窓外飛雪あり。冬來れるなり。

余が居る窓は西に向へり。さなり、我が母國のある方に向へり。頃來の夕陽は實に飽かぬ眺めなりき。每夕窓に倚りて其色を望むに、刻々秒々にして變り行く雲の形光の綾、見る眼もまばゆき許りなり。秋の夕は實に悲哀美の極致なり。見るに悲しけれども眺め入る中に身は涙の中に溶ける樣になりて唯何とはなき美感しみ〴〵と心を衝き來るなり。余に若し姉あらば其姉美しき姉にして失戀の重傷に胸を貫かれ、而も默して其烈しき運命の笞にある姉なりとせば、此人の胸に倚りて彼女の

優しくも悲しき眼の色を窺ひたらん時の心とや云ふ可き。痛みを持てる人の心には、秋ほど優しき同情もてるもの復世にあ
る可しや。彼女は自然の寵兒なるに、自ら其寵の深きを退け來りて人の運命の烈しさを泣く。實に彼女は余が終生の戀の女
神なる可し。秋は美しきかな。秋は潔きかな。秋は賞むべきかな。おゝ秋は戀しきかな。

余が窓の前に大なる maple tree あり。余が此校に來れる頃は、萬梢綠葉を着けて枝たわゝに垂れ下り、女神其手を擴げて人の子を祝福する如くなりしが、今は其葉悉く黃落し枝と梢とは矗として天を指し、宛ら年老いし豫言者の手を空に擧げ涙にあふれて祈りつゝあるが如し。余は不圖かく思ひてより毎日此樹を見る每に、今は漸く怪しき迄に彼の樹の普通の樹ならざる如くなりぬ。彼の樹は少くとも余には有機體以上のものなり。いつぞやの夕暮なりき。學僕來りて彼の樹下に其落葉を燒きぬ。蒼然たる四近の色の中に火の色殊に赤く、煙の色殊に靑く暮靄となりて斜に橫はり、地を掠めて消えも行かざる靜けさ。暮秋の哀感心に逼る事晩鐘の響の水に落つる樣なりき。余は、嗚呼秋今葬らるゝなりと思ひぬ。

此頃の秋景色に最もふさはしき對照をなせしは一人の老爺なり。彼の姿は瘦せて破帽眼深かに被り、草色の汚れたる外套を麗かなる日にも雨の日にも着たり。顏は無髯の皺殊に深きに意志の弱きと素朴なるとが讀まるゝなり。兩手を體より離して――其の着たる外套の相擦れて損はれん事を恐るゝが如く――步む每に勿體らしく少し打振る樣は日々いさゝかも變る事なし。此老爺が持てる馬車と其馬こそ、かくまで彼に似合はしきはなしと思はるゝにて其大凡は推せらる可し。彼は日每に小使の用をなす可く校庭に來るものなるが、玄關の暫く前にて馬車を留め置き、己れ獨り玄關の所に來り、徐顧みていかめしく其の瘦せたる馬に "Come on, come on!" と命令するなり。馬は迷惑相にそろ〳〵と馬車を引きて爺の下に來るなり。彼は宛ら橫著なる我が子を見守る眼もて此瘦馬の步みに注ぐなり。こは每朝一日も變る事なし。老爺は是を以て彼が最大の事業となせるものゝ如し。余は是を見る每に面白き人心かなと思はざる事なし。何と結論す可きかは知らず。されども面白きは人心ならずや。唯面白きは人心ならずや。何が故に每日かゝる事をかゝる老の身に勉めの如くなすやと問はんは餘りに心なき業なる可し。余は唯何とはなき詩興を胸に浮べて彼の老爺と瘦馬とを眺めざる事なし。此老爺も亦シーザーと共に此世

にありて厳めしき一分子を形作るものなり。今日雪降りぬ。秋は逝かんとするなる可し。今年の秋は余にはかゝる秋なりき。

　愛子が別れに臨みて自ら縫ひて贈りくれし衣を着るとて申送る。

あたゝかき衣よ心よさはれ秋秋の夜寒よさもあらばあれ

一九〇四年（明治三十七年）

二月八日。

Too slow for those who wait—
Too swift for those who fear—
Too long for those who grieve—
Too short for those who joy,
But for those who love
Time is eternity.　　H. Van Dyke.

二月十日。晴天。此朝高平公使に書を發し、余が身軍籍にある旨を通知す。二十四時間内に露艦十一艘を或は沈没せしめ、或は沈黙せしめ、或は廢艦たらしめたりとの報ありぬ。露兵二千船舶輸送中日本軍艦の爲めに捕獲せらるとの報知あり。靜かに余等が身の上にかゝれる日露の關係を思ひめぐらせば誠に涙に價するもの多し。就中殊に余をして惆悵の念に堪へざらしむるものは老トルストイが上なり。

世に心安きは主義を有せざる人々なり。地變幾度起るとも彼には何の痛痒をも齎さゞるなり。彼は即ち大勢の聲に雷同し、

百人手をもたぐれば直ちに手を擡げ、千人足を擧ぐれば直ちに足を擧げ、而して晏如として衆と共に笑ひ且つ悲めば足れり。

余獨り窓邊に座を占め、暮色の校庭を包み去るを凝視しながら、瞑想は飛越して彼の白雪皚々たる露西亞の荒原にあり。雪と寒氣とに閉ざされたる一國の孤村に、彼の髯白き頽齡の人は今も生き且つ思ひつゝあるなり。然り思ひつゝあるなり。粗惡なる農服を纏ひ、爐火赤き机邊に坐し、彼が眉間に疊まれたる彼の深想を記念する其皺は、昨日今日如何に深められつゝあらんよ。黑雲に包まれたる暗夜に見ゆる唯一點の星の如く、形容し難き渾沌の中に一道の天光を投げ與へし事茲に幾十年。帝笏と戰うては、我が筆屈げられんよりは死するに若かずと云ひ、教權と鬪うては、基督の名を恥かしむる唯一の外道と罵り、筆を折れよ劍を捨てよ而して犂と鍬とに歸れよと叫んで、自ら其劍と筆とを捨てゝ貴族の血めぐれる其長軀を驅つて、荒寥たる北露の麥隴に屹立し、頭に古今を收めて手に塗泥の農具を握りし其人。今や苦痛多かりし勇戰を終へて、其身を彼が畏れ且つ愛したるものゝ膝に託せんとする前、其父其母其同胞其朋友の等しく劍を秉つて立つを見たり。

神よ彼の頽齡の余等が師を憐み給へ。

三月十三日。 此朝増田君の夢を見る。

三月二十九日。 増田兄より書を領す。彼が日本に着して後の第一信なり。余は卽夜彼に返書しぬ。彼は果して世の縲紲の下につながれぬ。彼は其兩親の爲めに彼の凡てを犧牲となせり。彼は甘じて其意氣と自由を賣れり。人生の悲痛茲に至りて極まる。さはれ是れ對岸の火事にはあらずして、やがて余の上にも來る可き殷鑑にあらざらんや。如何にして此大渦流を超越す可きや。如何にせば老いたるものゝ眼に涙あらして、而も堅く立ちて動かざる事を得るや。强力の窮迫萬千相聚りて到り、我が骨を粉にし我が肉を糞となすも余に男子の意氣あり。余は恐れざる事を得可し。彼等何するものぞ。肉を傷け得て靈に手をだに觸れ得ざる彼等何するものぞ。さはれ髮白きものゝ脆き涙は何をもて禦ぎ得んや。兄よ、余は凡ての靈を以て兄の逆境に同情す。神は常に我等を憐み給ふ。人の子の勉めて且つ勉めたる後力足らざらばそを見捨て置き給ふ可けんや。主よ見給へ、彼處に戰ひて重傷負ひたるもの倒れんとし、惡鬼の笞侚之れに臨む。彼を見捨て給ふ事なかれ。彼は主の愛兒

ならずや。主は御面を彼より退け給ふ事なかる可し。萬軍のヱホバは愛なり、義なり、いやさきなり、いやはてなり、今なり。余如何なるなやみの時にも其名を稱へまつらん。余をして感謝の祈をなさしめ給へ。其名の爲めに唇に歌を置き給へ。手に琴を置き給へ。さらば余謡ひ且つ奏でなん。シヤロンの野薔薇よ、其色を被ひ其香を包む事勿れ。人の子の迷ひ行く荒野にはシヤロンの野薔薇の他に花はなし。花一つだにある事なし。シヤロンの野薔薇の香と色とを人の子の眼よりかくすものは禍なるかな。其人は禍なるかな。三度禍なるかな。主よ、強きものは荒く、弱きものは倒る。如何なれば主はそを許し給ふや。主よ、醜きものは笑ひ、美しきものは泣く。如何なれば主はそを矯め給はざるや。主よ、頑なるものは殘り、微きものは逝く。如何なれば主はかくあらしめ給ふや。主よ我が眼を開き給へ。耳を開き給へ。主に向ひて責め問ふ事なからん爲めに、眼を開き耳を開き給へ。さらば余主を讃めたゝへん。ヱホバの御名を讃めたゝへん。ヱホバの御名は永久に讃めたたへらる可ければなり。

第六巻

一九〇四年（明治三十七年）（承前）

七月十九日。火曜日。晴。余が此夏爲す可き勞働は此日を以て決せられぬ。Avondale に貪りし三週間の樂しかりし日の明日（嗚呼彼處は樂しき處なりし。されども一の悲み殘されぬ。余が酷愛せし彼女は既に少女にあらずなりぬ。時とは如何に不可思議なる力なるよ。彼は天使の如き單純なる小兒を化して地の暗影深き人たらしむ。神知りませり、余は幾度か彼女の上を泣きぬ。さはれこは人の避く可からざる運命なり。彼女は依然として余を酷愛せり。されども悲しきかな余の頑なる心は彼女の少女たりし時の回想のみを以て彼女の上に熱き愛情を傾け得るのみ）余は酷暑と黄塵を犯して費府の街を馳せ回りつゝ働く可き好適の場所を尋ねぬ。されども余が心を動かすべき何物をも見出す能はざりき。市にある事稍ゝ一週間の後、一夜 Wing 氏を訪ひて此事を謀る。彼は心より好意ある人なり。余の爲めに懇切なる紹介狀を Friend's Asylum for the Insane, Frankford, Pa. に作り呉れぬ。此 Asylum は嘗て去冬兄と共にありし地なり。十六日余は彼處に到りて Dr. Chase（主醫）を見んとせり。Dr. Lundum 代りて余を見て曰く、「君を此に納る可し、月に給する所十八弗、食と室とは此外に與へられん」と。余は然諾しぬ。而して一滴の涙流れぬ。余は其涙の何なるかを知らず。

十六、十七日を論文の淨書に費して之れを Haverford College に齎らし、此日（十九日）朝余は色々なる臆想に滿されつゝ Asylum の石疊を入りぬ。時は盛夏なり。滿地凡て鮮綠。千樹凡て蔚鬱。余は門を入らんとして附屬の隴畝に働ける馬のいたく喘ぎ、農夫の佇立して矮小黑髮なる異人を凝視しつゝ其額の汗を拭ふを見ぬ。

余は助醫によりて第二 ward の監督者 Mr. Carlyle に紹介せられぬ。彼は余を導きて建築物の西方なる芝生に到り、余が

向來共に住む可き attendants と患者とを紹介しぬ。attendants の中に Mr. Roberts あり。其肥大の體軀と滿面の凋笑とを以て余を迎へ共に奇遇を語り合ひぬ。

何が故に余は此の如き所に來れる？ 余自らさへ其深き意義を知らず。人をして好奇の心餘りあるものなりと云はしめよ。されども余自らは疑ふ事能はず。神は余を玆に導き給へり。此頑なる僕を鞭ち給はんが爲めに、將此無智なる僕を教へ給はんが爲めに、將又此意志弱き僕を鍛ひ給はんが爲めに。

麗はしきは此地の自然なり。取り出でゝ云ふ可き自然の大なる默示あるにはあらねども、疊の如き芝生の遠くを限りて楡や楓や樫や松やの綠葉重り合ふ如く茂りたるに、夏の日烈しく照りて云ひ知れぬ大威力、天と地とを壓す。小さき木鼠と小兎とは人を恐れずして時に我等を驚かし來るなり。

十二時我等は患者と共に ward に歸りぬ。ロバートは余を導きて食堂に入れり。上衣を脫して皿や、knife や forks を按排し患者を待たんが爲めなり。余には絕えて新しき仕事なり。十二時半患者は鈴に導かれて來る。余は食卓の一端を占めぬ。余の好奇心は患者の動作に注がれぬ。

余の左側に來れるは頑丈なる丈高き老人なり。余は直ちにトルストイに似たりと思ひぬ。彼は椅子に着くや直ちに物凄き一種の乾笑を漏しつ。自ら甚だ高く標置せる樣は容易に看取し得らる可し。余の右側に來れるは、其丈け余よりも低き痩せたる人なり。髮も鬚も共に濃くて、眼と脣とは意志の極めて薄弱なるを示せり。兢々として椅子に就き窈むが如く前面の老爺を瞥見し、軈て fork と knife とを取りて肉を切り始めぬ。細かにく刻みて恭しく其一片一片を口に運び入るゝ樣は、宛ら尊き珠玉を數ふる人の如し。時に眉を集めて沈想するかと思へば形を正して何事をかつぶやくなり。

食事終りてより余は其殘肴を始末しつ。一時半再び患者と共に芝生に出でたり。途に突然一の cottage より少女走せ來りて何事をかロバートに語りぬ。余の眼は直ちに彼女の面となよやかなる身とに注がれぬ。美しき乙女なり。齡十五なる可し。余の心は躍りぬ。かくて余は自ら余の粗忽なる心を悲しみぬ。悲しみたれども甲斐なし。美しきものは美しきなり。是れを

美しからずとなすは僞善者なり。白く塗りたる墓なり。

ロバート余に "Tower of London" なる書を貸し與へたり。余は彼の意に反して多く讀まざりき。讀む如くして心はいつか逶迤たる默想の迷路に馳せ入るなり。何故に余の心かくまでに弱き。人生の冷かなる行旅に厭きて屢〻未知なる墓の彼方を思ふ。トルストイ其友に送るの書に書して云へらく、「人は未來の如何なる處なるかを知らざるこそよけれ。若し未來の暗澹として何のよきものもなき處なるを知らば、彼は此世に勞役するの愚を思うて其生を墮落の底に沈めん。若し未來の享樂淨土なるを知らば直ちに今世の生を去つて未來の生の安きに移らん」と。何等の nonsense ぞ。斯翁時に宗教の桎梏に縛せられて、痴呆猶語らざる此語をなす。あゝ未來よ。墓の彼方よ。其處に死影の累々たるものあるか。生命の横溢するものあるか。余はそれを知らん事を欲す。前者ならんか。後者ならんか。共に余はこれを祝す。塵神の前に何を云ひ得んや。

夕食の後再び患者と芝生に出づ。月ほのかに出でゝ空美しう晴れぬ。此夜小さき entertainment 楓の下に開かれぬ。若き婦人の明日茲を去ると云ふが主人となれるなり。草にて葺きたる小なる bower の中に坐し、衆これを queen と呼ぶ。凡ての事嘔吐三杯。余は愈〻社會の皮相に飽きぬ。深く築かしめよ。堅く建てしめよ。其傍に默して椅子に倚れる患者を見て、何れか人生の眞相なるやと問はまく思ひぬ。Mr. Hall に遇ふ（昨冬此處に來りし時余等を導きて懇切に示されし人。Mr. Elkinton の親戚にして此院の管理者なり）。余が心を躍らしめたる彼の少女は此人の愛孃なりき。余の心は再び戰かされぬ。

夜十時迄饗宴の跡を片付け、十一時室に歸りて床に入る。

七月二十日。水曜日。曇。余の起居は昨日のそれと異る事なし。等しき時に起き等しき時に出で、等しき時に歸り等しき時に寢ぬるなり。唯此日の夕暮一の記憶す可き事起りぬ。余は Moore と云へる一患者を入浴せしめたり（彼は余の右側に坐して食事する小心なる人なり）。余はかくの如き事を事々しく書く程に幼稚なる世故のものなり。余は彼を浴槽に導き其痩せたる體軀を見て先づ同情動き、母の其兒に對する心を以て丁寧親切に彼を洗ひぬ。我が主なる神なる基督は、名もなき漁夫や稅吏やの足を洗ひ給へり。狂癲の人を以て感覺なきものなりと云ふ事なかれ。爾後彼の親しみ易からざる性癖も余には

最も親しみ易きものとなりぬ。余は此院に入りてより先づ彼の心を得たり。

　嗚呼主よ感謝す、爾は弱きものにも尙同情を與へ補助を與へ得可き、より弱きものを殘し給へる事を。人世とは暖き所なるや、冷き所なるや。そは容易に解き難き問題なる可し。余は之れに斷案を加へんとはせじ。されども余の怯懦なる心の奥底には小さき私語ありて謂ふ「人世とは暖きよりも冷き所なり。冷きよりも酷き所なり。酷さ酷き所なり。酷き所なり」と。而して余の全心は明晰に然りと答ふ。さらば余は絕望す可きや。而して余の全心は明晰に否と答ふ。寧ろ矛盾に庶幾からずや。

　されども我が主の据ゑ給ひし paradox は玆にあり。世若し酷からば余は之れを暖む可きにあらずや。世は絕望の谷なり。されども一の希望殘れり。そは「我れ愛し得」てふ事是れなり。余は余の全心を以て愛し得る限りを愛せん。余は同情を他に求めてこれを失ひき。同情を他に與へてこれを收む可きにあらずや。弱きもの殘されたり。余よりも尙弱きもの殘されたり。此世はかくて寂しからず。此世はかくて冷かならず。世が余に冷かならんとすればする程、余は世を暖き所となさん。冷と熱と、呪と愛と、嫉みと親みと、爭鬪と平和と。世をして惡魔と共に彼方に立たしめよ。余は神と共に此方に立たん。世をして神と共に彼方に立たしめよ。余は惡魔と共に此方に立たん。

　余は愛し得ん事を祈る。かくて余は世界の何者よりも小ならず。余の小さき信仰は屢ゝ戰く。されども神余が耳に此一大事を囁き給ふや余の全身は血脈を破らん許りの焰に滿つ。

　此夕、末光より書を領す。短信の中にも籠る彼が余に與ふる懇切の情は余をして無限の慰藉を感ぜしむ。友少き人は祝福す可きかな。余は祝福さる可きものなるかな。

　瀨川する女の書信も亦其中にあり。彼女も亦彼女の眞情を語る可き齢は過ぎたれども、尙其深切なる情、勤勉なる性は余の心を動かす。神よ、願くは余が友の上に永久の祝福を與へ給はん事を。

　余に携へられて玆にある書四。英譯聖書、和譯聖書、Cary 譯のダンテ地獄篇並に煉獄篇、及びヘーゲルの歷史哲學是れなり。聖書とダンテは常に余の懷にあり。閑を得る毎に取り出して之を讀む。余は聖書の中ヨハネ傳を規則正しく讀み居れ

り。ダンテは地獄篇を繰返しつゝあれども、悲しいかな余の些やかなる知識は此大聖の旨を暁り易からざらしむ。

七月二十一日。木曜日。雨。空かき曇りて cold wave 此地を襲ひぬ。此朝、家信を領す。壬生よりの書は常に余が心に強き impression を與ふ。彼は余に彼が志を決して藤島氏の門下に入りし顛末を書き送りぬ。余はこれを讀みて宛ら一處女の歸嫁せるが如きを覺えざる能はざりき。激烈を極むる境遇の變化に淋しき感慨と、湧くが如き希望とは彼の全心を揺り動かしたるなる可し。嗚呼行け、藝術の女神の膝に。汝は確に天才を賦與せられぬ。汝の優しく激しき心を捧げて、血をもて汝のカンバスを濕せ。彼は亦峰さんの病みて鎌倉海濱院にあるを報じ越しぬ。或は變症して腹膜炎たらんとすと云ふ。余は己が愛人の病みしを聞きしが如く覺えて、此日幾度か止め難き悲想に陷りぬ。憐む可きは彼が少年に得たる苦しき幸なり。彼が書末に書したる一篇の詩、彼が渝る事なき熱き情を寫して涙滂沱たらしむ。

昨夜一人の患者窓より脱して行方知れずなりぬ。二人の attendants は全日を探索に費したれども無益に歸り來りぬ。脱走せる患者は富裕の人なり。酒に沈湎して遂に痴呆となりしなりとぞ。insanity の酒に原因せるもの甚だ多し。

第一 ward に一患者あり。非常なる日本贔屓の人なり。余のこゝを通過する毎に片手に新紙を携へて立ちつゝ余に親切なる應答をなす。attendants の中には心なきもの多し。其患者を取り扱ふ樣、時に余をして怒を抑へ難からしむ。彼等は此院を呼びて bog-house と云ふ。彼等も余と同じき給料と生活をなすものなり。靑年有爲の身を以て此の如き閑散なる仕事を擇び、閑暇を利用して何事をかなさんとの念慮もたく、單に寢食の爲めに此院にあるもの多きに見て、其の如何なる種類の人人なるかを知るに足る可し。彼等の余を呼ぶにジャップを以てし、嘲弄の語を弄し、其相互に語る所卑下にして聞くに堪へざるものあり。而して患者の中未だ嘗て余を目して輕侮の色をなしたるものなし。余は心より基督の "If you were blind, ye should have no sin: but now ye say, We see; therefore your sin remaineth" と云ひ給ひし語を味ひ知りぬ。

七月二十二日。金曜日。雨。朝兄の書を領す。美しき英文もて彼が經驗を委しく報じ越したるのみか、爲替二十弗を送り與れぬ。彼は實に偉大なる或者を有せり。彼は自ら歩む人なり。彼の苦がき杯を味ひ得る力は強し。余は彼の事業の成功せ

ん事を祈る。余は併せて彼の健康が終り迄堅く保たれん事を祈る。此外に此日は變りたる出來事なし。

七月二十四日。日曜日。雨。此日、夜は午前九時より午後一時迄の休暇を得ぬ。これ一週間に一度得る所のものなり。余は余の私室に歸り入浴して後家信を認めぬ。

嗚呼、今日は Fanny の誕生日なり。彼の閑村に如何に豊かなる歡笑ある可きぞ。彼女は今年十四なる可し。さらば汝は美しき夢と暇を乞ふ可き齢となれるなり。あはれ飲め、悲しき杯の數多くを飲め。人は悲みの世に活くるなり。さらば悲みのあらん限りを味ふこそよからずや。爾はあれ、かの優しき心を拉して、余が見つる世界の中に投入れんは！　余が彼女の家に宿せる一日、彼女は己れの作りし小さき花園に咲き誇りたる薔薇の中最も香よく最も美しき一輪を切りて、これを其父に贈る可く携へ來りぬ。座に一女客あり、何心なく父より其花を取りてこれを己が胸に挿めり。これを見たる彼女の眼は輝きぬ。彼女は日頃の柔和と謙遜とに似ず殆ど怒りの眼をもて其貴女を凝視しつ。貴女とは一語を交へず、食卓を共にせず、父に乞ひ母に乞ひ其姉に强請して、遂に其花を貴女より奪ひ、再びこれを父の手に委ねしまでは、恨み多き眼に涙を湛へて絶えて他事に其心を傾けざりき。余此日彼女を見て Whittier か Wordsworth の小詩を讀むが如く覺えぬ。かゝる心はやがて冷かとなるなり。少くとも其赤裸々たる美しさを蔽ふに汚き虚飾の衣を以てするなり。人は何故に裸なるを得ざるや。Carlyle の疑ひ宜なるかな。

午後より聖書と Dante とを讀む。つれ〴〵と雨降り暮したれば、心鎮まりて讀み得たる一句一句の深く〳〵其底に沈み行くを覺えぬ。Ward を逃れ出でたる患者は昨日紐育に於て探偵の爲めに捕へられたり。

日曜の夜は八時半に暇を得るなり。ロバーツ余を將て院の後庭に到る。雨後の月さやかに露葉を照して滿目の光景初秋の如し。行き行きて激性女患者のある建物に到る。其一人二人枯れ果てんとする聲を絞りて、痛く罵る聲は夜陰を破る。美しき庭に百合の花の香咽ぶばかりなるを指して、ロバーツ云ふ「汝は終生此所に此香をかぎし記憶を忘れざる可し」と。余心よりうなづきぬ。

尚進みて暗き森陰に入る。湿りたる香り人を壓す。看護人看護婦の相携きてこゝらさまよふもの多し。余が眼にはうたてき限りに覺えられぬ。

七月二十五日。月曜日。雨。此日朝夙く起きて ward に到りて働く。余が仕事は大方定められぬ。表側なる二室の掃除と食堂の全般となり。此日 Dr. Lundum より Johns Hopkins Univ. の教授なる Barkley 博士の "Mental Disease" と云ふ書を借る。精神病の一般の知識を得んが爲めなり。余は猶一患者を注意し出しぬ。ミユラーと云へる人なり。余がトルストイに似たりと云へりし人の左側に坐して食す。丈高く稍〻瘦せて面赤く眼鋭く血性にして誠實なる質なる事直ちに看取せらる可し。彼は overwork の爲め其健康を誤ちたるなり。彼は他の患者の如く無爲に日々を過すことを厭ひ、食堂の始末を助け庭園の除草をなし以て愉快となす。自ら云ふ「勞働は余が快樂なり」と。しかも悲む可し。彼の心は敢て常に自殺を謀らんとするなり。高きに攀づれば身を投じ、鐵路を過れば身を横たへんとす。彼は自らこれを病とす。しかも止め難きなりとぞ。余は彼の誠實なる面を見守るを快となす。誠實を表顯せる面は美を表顯せる面と共に美なり。

兄より二通の書を領す。彼は永く余より書を得ざるを怪しみ來れり。余の彼所此所に移り變りたる生活は彼に答ふる事を得せしめざりき。余は彼に一言なりとも慰藉の言葉を送り度く思ふ。されども事志とたがふ。已みたん。此夜獨り雨を冒して後庭を散歩す。路暗くして身孤なり。云ひ知らぬ淋しさを感ぜざるにあらず。されどもかゝる時にこそ基督の御胸の温かさ祈りとなるまでに心には沁むれ。

七月二十六日。火曜日。曇。此處に到りてより日は今日一週を過しぬ。午後一時より夜一時迄の休暇を得たれば費府に出づ。Mr. Wing に金を返し、Mrs. Pusey に鍵を返し、兄に電報を發せんためなり。郵便局に到りて談判したれども金は受取る事能はず。是れを Mr. Wing に返濟する事能はざるは無上の遺憾なり。時間餘りありたれば Free Library に到り Rosetti の詩集と Tolstoy の "Teaching of Christianity" と云へる書を讀む。Rosetti の "Blessed Damosel" は讀む毎に心に沁むを覺ゆ。余は昨日 ward にて古き Scribner 誌を繙き Rosetti の亡せし頃、其の親しき友によりて記されたる回想錄あるを見出

でゝこれを讀みぬ。彼の面目髣髴として窺ふを得可し。其中に記して曰く「Rosetti は其經驗に於て其年齢に於て P. R. B. の建設者たらんにはふさはしからざりき。されども彼は凡てに越えて骨頭を有せりき。是れ彼が事實に於いて否む可からざるラファエル前派の頭領たりし所以なり。彼は虚僞と明晰を缺ける想像とを惡めり。彼は花一片を描くにも、一道の光線を描くにも、其花の肖像（portrait）其光線の肖像を作るの意氣を以てこれに臨めり。是れやゝもすれば此派の作をして生硬を來さしめ、優美を缺かしむる所以なり。しかも是れ彼が缺點にして長所なり。彼は此屈ぐ可からざる忠實眞率の意志と感情とを以て其畫と其詩とに施せり。かくて――若し彼自身大なる潮流を作る能はざりしならば――彼の畫と彼の詩とは世紀の詩と畫とをして、大なる屈折をなさしめ、新に生る可き藝術の源頭となれり」と。言ひ得たりと云ふ可し。

歸路汽車の中に Colier's Weekly を讀み、Tolstoy が其熱烈の筆を揮うて、己が國民と、戰を良しとする人々とを攻擊せる文を見る。豫言者の老いて益々盛なる意氣稱すべきかな。院に歸り着きしは四時頃なりしなる可し。獨り Dante の "Purgatory" を携へ後庭の露臺に坐りてこれを讀む。薄明りに余が室に歸らんとして美しき人に遇ふ。

室に歸り入浴して後 Dante を讀む。九時半、ロバーツと共に、後庭を散步す。彼曰く「ミュラー氏こそ憐れむ可きなれ。彼は遠からず自殺す可し。彼は此院にある事既に半年なれども癒えざるのみか漸く重り行くが如し。彼自らも云ふ、余は狂者となるを感ずと」と。余も亦狂者とならんとするを感ぜし事あり。今も時々余に狂者たるの或者ありと感ずる事あり。余も亦ミュラー氏の悲しき運命を憐れむ。

Crowell 氏及び Arthur より手紙來る。ファニーの誕生日は一月の二十五日なりとぞ。Crowell 氏は厚く余の勞働に同情し何時にても彼の家庭は余の來るを待つと云ひ越しぬ。彼は優しき心を有てる人なり。

七月二十七日。 水曜日。晴。朝空心地よく晴れぬ。快く仕事に從事す。此日は兄此院に來りて余を見得可し（午前十時認む）。

午後は余足なえたる特別の患者を車に乘らしめて lawn に出づ。美しき人に遇ふ。彼女の名は Edith と云へるなるを余は聞き誤りて Lily なりと思へり。余は彼女を Lily と呼ぶ可し。彼女は余を見る毎に其美しき微笑を傾けて優しき挨拶をな

す。此院にありて彼女に會ふは、荒野を旅する人のさゝやかに囁く小川に遇ひし心地す。異郷人に一杯の水を與ふる人は祝福さる可きかな。神、彼女の笑まひをよしとし給はん。其笑まひをいよ〳〵美しくし給はん。

凡そ二時頃兄余を訪ひ來る。余許されて彼に會ふ。樹蔭の露臺に坐して語る事約一時間。かゝる處にかゝる人に遇はんは、實に思ひ設けざる祝福なるかな。語れる事は共に寧ろ苦しき事なり。彼の精勤は驚く可し。彼は稍ゝ一閲月にして殆ど三百弗に近き收入を得たりとぞ。彼は其一生を lecturer として送らんかと思案しつゝあり。そは難き事なるべし。少なくとも永遠に築かん爲めにはふさはしからざる業なる可し。彼は余に裕かに金を返し呉れ盡きざる名殘を惜みつゝ別れぬ。余は彼の後姿を見守りて哀情動きぬ。嗚呼彼も亦此世に悶え戰ふの人。

かくて再び彼の特別なる患者の傍にありて夕暮まで彼を看護す。此間 Dante の "Purgatory" を讀む。余が "Purgatory" を讀むは今日を以て始めとす。余は地獄篇を三度復讀したれども、取り分けて興味を感ずるは寧ろ "Purgatory" なり。未だ三章を讀みしに過ぎざれば觀想を記さんは早計なれども、空氣清くして暖かに、身は宛ら深き沮洳を逃れ出でゝ草青き乾土を踏むが如し。余は心籠めて尚多くを味ふ可し。

夜九時ロバーツと共に散策す。今夜は滿月なる可し。一點の雲もなく霽れ渡りし空に、涼しき光は凝りて水とならんかと思はるゝ計りなり。獨りにて物思ひ度き夜なれども詮なし。今夜余は彼と共に患者を扱ふの法に就きて語りぬ。寧ろ論じぬ。余は彼の行爲に滿足する事能はず。彼は寧ろ小兒に近き心を有せるなるべし。患者の行爲を憤りて屢ゝこれに復讐に似たる擧をなす。彼に見る厭はしき Americanism を余は厭ふ。小なる權利と義務とを爭ひて――しかも患者と共に――何の用ぞ。余は彼が牧師たらんとする企圖を危む――彼が今有せる如き性癖を脫するにあらざれば――。

七月二十八日。木曜日。朝晴、夜驟雨。朝例の如く芝生に出づ。此朝日記を書きたる後心を籠めて "Purgatory" を讀む。"Purgatory" には Dante が獨得の metophor 多し。奇警適切殆んど眞情と眞景を見るが如からしむ。地獄篇にて有名なる檣折れたる帆の風を含みたるまゝに音なく倒るゝ樣を、Virgil に叱咤せられたる一亡者の倒るゝ狀に擬したる、又は乾きあへ

ぬ薪の一端は燃えながら他端より生汁を漏して沸々として聲をなす樣を、木に化せられたる魂の歎息語に擬へたるなど、凄鼻を極めてしかも眞に逼る比喩なれども、"Purgatory" のそれは又一層の婉曲を加へて比喩自ら亦一味の情趣あり。Dante の心に激烈なる憎惡の念あると共に深切なる憬美の心ありしを見る可し。

午後よりは脚なえたる他の患者を車に乘らしめて芝生に出づ。Mc. Lere 誌に Burnett の "In the Closed Room" と云へる小説あり。挿畫の美しきまゝに片端讀みたるに面白くて全篇（勿論第一編なれども）を讀みぬ。著者はかの有名なる "Little Lord Fauntleroy" の著者なり。十ばかりなる少女を（優しき心を有し想像力と神經强き）主人公となして稍ゝ神祕的なる一小話なり。後編を見ざれば如何とも評する能はず。されどもかゝる題は余――若し余にしてかゝるものに筆執る可き天才あらば――の選ばんとするものなり。余は尙夢の中にある少女を題として神の如き一篇を作り度く思ふ。今に至る迄余が生の苦痛に滿つる時、そを癒せしは何者よりも少女なりければなり。

今夜ロバーツは暇を得て市に出でたり。余は今夜こそ獨り擅まに後庭を散策して心を慰む可しと思ひ樂しみつゝありしに夕食の後大雨降り出でぬ。快き大雨なり。余は雷雨を好めり。窓に倚りて飽く事なく眺め入りぬ。此地の驟雨は實に心地よし。隈なく晴れたりと思ひし空の忽ち墨の如くかき曇りて、瓦をも貫かん計りの雨降るなり。殊に雷電最も爽快なり。雨後の清風は云はずもがな。雨は降りに降りて十時半に至りしなる可し。疲れしまゝに何時しか雷雨の中に眠りて。

七月二十九日。金曜日。晴。やがて目醒めし頃は夜ほの〴〵と明け渡りし夏の空に涼冷身をひきしむる快さなりき。

今日一日を空美しう晴れ盡しぬ。朝例の如く芝生に出でゝ靜かに讀書に耽る。されども種々なる感想胸に徂徠して屢ゝ讀書を妨げらる。今日は Lily の許に稍ゝ年幼き一人の少女遊びに來りてありぬ。余は稍ゝ安んぜり。余が ward にあるノリスと云へる一人、常に彼女に近づきつゝあり。彼は大酒の結果狂癡となりしものなり。余が ward にありて最も余を厭ひ、余の最も近づき難しとするものは彼なり。年三十一二なる可し。日常の應接に巧なるは市井の少年と異る事なく所謂社交を好む。余は彼が Lily に近づく毎に殆ど堪へ得ざる苦痛を感ず。宛ら櫻の若樹に毛蟲の集りしが如し。今日は Lily 其友の

あるによりて其毒手より遠ざかりぬ。余は稍〻安んぜり。

此日聖書のコリント後書の第六章を讀む(同書英文略す)。足れり、足れり。何等の慰藉ぞ、何等の奬勵ぞ。余は他に何者をも要せず。余の道は誤らず。余は忍ぶべし。凡ての困難に打ち勝ちて之れを忍ぶ可し。"Jack" と呼びつけにせられ、すさまじき罵りの聲に逐はるゝとも、余は毛を剪らるゝ小羊の如くならん。基督は國賊と罵られ神を汚すものとのゝしられ給ひて尙彼等の爲めに祈るを忘れ給はざりき。余も亦數には足らねども其模倣者たらん。救は遠きが如くにして近きにあり。いでや余救を得んが爲めに何を爲す可きや。忍びて且つ愛せよ。

午後よりは足なえたる患者を車に乘らしめて芝生に出づ。其兄なる人來りて彼を見、歸り去りてより暫時にして人彼に誰の來りしやを問へば、彼は既に之を知らず。余は思はず涙を含みぬ。

Dante は余に稍〻荷の勝ちたる讀物なり。明瞭に解し得ざる所多くして不快を極む。

Barkley の "Mental Diseases" を讀む。專門に亙る所は殆んど全く了解し難きも、一般患者の現象を說明せる所興味深し。此夜九時より暇を得て獨り校庭を散步す。空澄みて月も昇りぬ。森蔭の濕りたる香を嗅ぎつゝ行き行きて一亭の椅子によりて祈る。余は此頃かくばかり熱き祈を捧げ得たる事なし。神よ願くは許し給へ。爾の僕の中最も卑しき余は、余の亙る日稍〻穩かなれば爾より面を背けて、あらぬ方に走り去らんとす。されども今は此僕の弱き信にも、嵐の時に逃れ入る可き隱れ家は爾の外にあらずなりぬ。余は爾によりて凡てのものを失ひぬ。されども爾を得ぬ。神よ、爾の御身を余より放ち給はざれ。

罪かあらぬか余は知らず。されども余の心中に一日の間孕まれたる願を今夜果しぬ。露と月の光との中咲き香へる——ロバート・ツがその香を世にある限り忘れざる可しと余に云へる——百合の花を摘みて余はひそやかに Lily が家の階に到りぬ。何とも云ひ知らぬ悲想交〻胸に逼りて堪へ難かりしが、花を其階の上に投ぐるや余の唇には堪へ難き歡笑浮びて彼女のやさし

き微笑に余は酬い得たりと思ひて室に歸りぬ。嗚呼さりとは餘りに小兒に似たる余が心よ。明朝彼女はハンモックに倚らんとして必ず始めに彼の階を踏む可し。而して其處に――若し朝露の惠深からば――猶しぼまずしてある三輪の眞白き花の處も擇ばず散れるを見る可し。かくてこれを見て何と思ふらん。余が投げたるなりとは彼女は如何にしても思ひ寄らざる可し。彼女が如何にして此處に此花あるかに首を傾けんかも最も疑はし。かくても余が心は衷心より滿足を感ずるなり。

七月三十日。土曜日。晴。雲なきにあらざりしも一日は美しく過ぎぬ。月は昨夜より缺け始めぬ。今宵は彼女の面影を見ん事昨夜よりも遲かる可し。

今朝 ward の大掃除をなす爲めに芝生に出づるは稍〻遲れたれば、午前は日記の爲めに凡ての時間を費し終りぬ。此朝 Mr. Wing より手紙を領す。余の手紙を見たる事、余の事に當る覺悟の意に適したる事など同情深く書かれたる後、書して曰く、

“It is very interesting to see the sensible way in which you apply yourself to your work, and make noble and honorable whatever you set your hand to. Do you know that verse of our George Herbert ?

“A servant with this clause
Makes drudgery divine;
Who sweeps a room as for Thy laws,
Makes that and th' action fine.”

詩の意味は余些か明瞭を缺けども、何事なりとも其のたづさはる事業を高尚にし尊威を與ふることは余が意を得たり。我等は事業の奴隷にあらず。我等の品性によりて我等の取る事業を高尚となす可きのみ。此院に於ける看護人の事業の如きは其最大なるものなり。心なきものをして當らしめば、世に之よりも下賤なる業はなからん。心あるものをして當らしめば、世に之よりも尊威ある業はなかる可し。余は彼の訓戒を服膺す可し。余は此業を神聖となさん爲めに滿身の力を盡す可し。余は余が ward の attendants の中何者よりも最も多く働けりと思ふ。余は余の能ふ忍耐を以て事に從事しつゝあり。さればり

ードと云へる人の如きは、殆んど余を愚者の如く遇して、凡ての餘業を悉く余の肩上に投ぐるなり。余は一言の逆ふ事なく宛ら奴隷の如く彼の云ふが儘に從ひつゝあれば、ロバーツは余に屢ゝ忠言して、彼等は實に心なきものなれば堅く權利を固守するにあらざれば、底止する所なく汝の權利を犯さんと云へり。されど余は思ふ所ありとて彼の忠言に從はず。余は余の力の堪へ得ざる點にまで働かんと希ふ。

午後、足なえたる患者を將て芝生に出づ。"Purgatory" と聖書とを讀む。此日十三日分の給料七弗五十仙を渡さる。其時の思此に書かずもがな。

夜獨り散歩す。白き百合の花一輪を再び彼の美しき人の夏眞晝に眠る木下蔭に。

七月三十一日。日曜日。晴。安息日は再び來りぬ。人らしき心は稀なる此院も、今日は何となく靜かにしてテニスする人もなし。患者の或者は思ひ〳〵の教會に說教聽かんとて出で行くなり。余は此朝九時より一時までの休み（今日は余午後休を得可き筈なりしもリードは唯都合ありとて擅まに余の休の時を變へたり）を得たれば、ロバーツ幷にコーンストックと云へる患者と共に Frankford なる Episcopal Church に到る。最も暑き日にて滿身汗となりぬ。說教はさしたる事なし。矢張り室に一殘りて獨り讀書する方利益なりきと思ひぬ。コーンストックと云へば、丈け余よりも低き六十三歲なる老人なり。前週豐かなる眼、小さき面は灰髮と灰髯とにて溫相を加へたり。余等 ward を出でゝ芝生に到る時、彼は常に獨り煢然として一枚を携へつゝ群を離れて人あらぬ方に到るなり。彼は決して騷擾せず。唯彼に病とするは彼の尋常ならざる吝嗇なり。彼の穿てる靴は七年間用ゐ慣れたるものなりとぞ。彼は電車に乘る事をすら費えなりと思ふなり。

午食の時リードとロバーツとの間に、余の時間を變じたる事に付きて言論起る。爾後リードの良心は刺戟せられぬ。彼は時に余に甘言を塗るなり。余は變らざる態度を以て彼に對す。

夜八時半、房を辭して後庭に到る。余が祈り慣れたる一亭に到れば一對の密會者あるに遇ひぬ。不快の念に滿たされて尙遠く獨り森の中を步む。宛ら魍魎の窟に入りしが如し。"Undine" など讀みたりしを思ひ起さるゝなり。又彼の百合を彼の

處に——。

八月一日。 月曜日。曇後雨。此日兄と大藤君とより手紙を受く。此院にありては人の便りこそ樂み待たるれ。兄の事業は愈ゝ進行しつゝあり。大藤君の病は漸く癒ゆる方に向へりとぞ。何よりも感謝す可し。此頃は食堂に來る老女、夏休暇を得たりとて來らずなりしかば、余等の仕事は一際多くなりぬ。實に心苦しきは余の仕事を非難さるゝ事なり。余の仕事は遲しと云はるゝ每に余は心より涙を含む。これ實に恥づ可き事なり。縱令經驗は少しとするも、同じき給料を得て人後に立たんは心苦し。唯聊か自ら慰むるは余が絕えて怠惰者と云はれざる事なり。余は働けばなり。余は余の全力を以て働けばなり。

此日は一日雨降り暮したれば患者は多く外出せず。寧ろ氣色惡しき日なりき。さればにや Moore 氏の如きは神經痛く變調を來し、傍目にも憐れに思はるゝ儚なき言葉と手振りとをなす。余は彼を憐れむの念に堪へず。

此夜患者と共に階下の meeting room に到る。此に男女の患者相集りてさゝやかなる社交的の快樂をなすなり。余が房の患者は每夜此に到るを常とすれども、余は讀書の時間を割かるゝと此國の婦人に接する厭はしさに及ぶ丈けは他の attendants を促がして余は赴かざるなり。されども今宵は余これに赴く可く已むなくせられぬ。

余が房の患者三人、女患者一人、而して余に戰慄を齎らして Lily も來りぬ。不快極る事のみ多き中にも、Lily がかゝる中に立ち交りて共に叫び共に笑ふを見て、余の心の中には一種の輕侮と悲哀と來りぬ。理想を夢みて現實に求めんとする愚かなる者よ。美しと見つる者に近づけば汚れあり。淸しと思へるものに觸るれば塵集れり。期待の失はるゝに勝りて悲しき悲歎ありや。余は今に至る迄此院を光ある處と思ひぬ。そは彼女ありたればなり。彼女は天使の如きものなりと思ひたればなり。而して見よ、今は余の心眼に黑き幕落ちぬ。余は谷底に追ひ落されたるか如き心地して彼所を去りぬ。

此夜月無く星暗し。雨後の露繁き草原を分けて今宵も獨り彼の森蔭に分け入りぬ。夜暗く心暗く、思へば人の世は汚れの末遠く走りぬるかな。余は玆に再び Lily が上を思ひ回らしぬ。かくて余の心は變じぬ。余が彼女を憎みしは余の過ちなりき。惡む可きは此の世、此の愚かなる世よ。彼女をして此の如き處に至らしむる人の心、彼女を拉して地の人たらしむる人の心、

悪む可くんばそを悪む可きなり。可憐なる彼女に何の罪あらんや。さなり、余は尙御身を愛す可し。御身によりて失はれたる寶を求め出でなん。希くは彼女をかゝる社會より遠ざからしむる道もがな。此夜も百合をと思ひたれども、ひがめる余が心はこれを拒みぬ。今宵は彼女に花を送らじ。

此夜最も暑し。床の中に寢苦しく輾轉せるもの幾度。

八月二日。火曜日。朝雨、午後四時頃より晴る。雲低く重く垂れて暗き事日蝕したる朝の如し。食堂の卓を調へんにも燈をかゝぐる樣なり。此地にては此頃は寧ろ乾き勝ちなる時と云ふに、毎日夜にあらざれば晝、晝にあらざれば夜、雨を見ざる事なし。宛ら故里の梅雨の頃の如し。此日も雷鳴と降雨と交〻到りてかの地に特有なる驟雨の如きに似ず、つれ〴〵と降り暮すに頭壓へらるゝ心地なり。

朝打ち連れて pool に到る。日記を記したる後靜かに聖書を讀む。ヨハネ書の中基督が弟子に對して爲されたる最後の敎訓身に沁むを覺ゆ。こは實にヨハネ書の特色なり。

余が Dante を讀むに至りてより最も深く印象せられたる思想は彼の昂々たる高き自任なり。彼は强き情の人、已む時なき自責の人なりしかど、一面屆ぐ可からざる彼が高き自任は、彼の詩をして高崇を極めしむ。彼は自らを古聖七人の中に列して端然として恥づる所なし。彼が地獄に於ける處々に、亡靈の卑しむ可き罪を呪へる語々は深刻を極む。其 pride は欽む可きかな。神に從ふものにして此 Pride あらずんば、其人は未だしと云はざる可からず。「我れは神の獨り子なり」と云へりし人の子の無上絕對なる自尊は及び難き際なる可しとするも、「勇者は獨りある時に最も强し」と云へる Tell がほこり、「我れは上行菩薩なり」と叫びし日蓮がほこり、轉じては「我れ幸運の兒と生れて世の歡樂味はざるは無かりき。しかも我が生の長かりしを顧望すれば、眞に樂しと云ふべかりし日僅に二週日の短きに過ぎず」と云へりしゲーテが恨み、臨死の床に輾轉煩悶して罪許さる可きや否やを疑ひしクロンウエルが歎き無くんば、其人は災なるかな。「人によるにあらず神によりて擇ばれし使徒」と云ひし昂然たる自信なき人は、憐れむ可きかな。神は涙に滿てる眼もてる人に、何物も屆ぐ可からざる頸骨

强ひて心を勵まして業に從事し又讀書す。此朝は古き"Out-Look"に『シェンキウキッチを訪ふ』と云へる一文あるを讀みて涙をさへ零しぬ。彼は彼の傑作を書くにふさはしき人格なるが如し。若くして轗軻不遇萬難を排して健闘し、漸く彼の天才は江湖の認むる所となり、今はポーランドが唯一の寶と云はれ「彼の生きん限りポーランドは亡びず」とさへ稱へらる。而して彼は謙遜抑己の人、社交に聊かの趣味をも持たず、少數の友人と其愛兒とを以て、無上の滿足となせりと。彼の妻は早く逝けり。一人の愛孃十五許りなるが彼のこよなき友なりとよ。彼女は Lily の如きなる可し。

晝食の後再び芝生に出づ。されども余の心は亂れ亂れて何せん勇氣もなし。徒らに床上に倚りて悶え苦しむのみ。自らを愚かなりと罵れど詮方なし。

夜ロバーツと共に散歩す。Lily は何處に行きしと彼に聞かまほしけれども恥かしくて遂に已みぬ。彼女は何處に行きしなるらん。此夜寢ぬる能はず。樣々なる事思ふ。

家より寫眞送り來る。父上は愈〻肥え給ひぬ。母上は愈〻痩せ給ひぬ。弟等の愛す可きよ。壬生の面は益〻美しくなりぬ。隆三のは意志の弱きを示す憐れさよ。英夫のはよき顏ばせなり。行郎はなほ可愛ゆき小兒なり。

八月五日。金曜日。曇。此朝例の如く患者と共に芝生に出づ。そぼ〲と雨降り居たれば Pool に行きて讀書しつゝありしに、Lily が家に余には親しき口笛聞こえて軈て Lily 出で來りぬ。自轉車に乘りて何處にか行かんとてなり。余は思はず立ち上りつ。人なきを幸に床上を飛び廻りて、小兒の母を見出でたる如くに喜びぬ。力は歸れり。余は生れ變りし如く快活となりぬ。神よ余は謝す、爾は如何なる所にも如何なる時にも、此罪深き僕に云ひ盡す能はざる慰藉を賜ふ。希くは此小弱の身、主の御旨を解し得んが爲めに、凡てを捧げて小羊の如くなり得ん事を。

兄より繪葉書來る。Newark, N.Y. の State Custodial Asylum を見たりとて其畫ある紙面に左の結語を加へたり。

「最劣等の女子數百名と交りて、今日經驗を得たる生の中心深き人生感を以て滿され居れり。彼を不幸と呼ばんか、幸と呼ばんか。神の前に人生の價値……………」

實に爾かなり。此尊威ある人生を神に受けて克くこれに堪へ得るの力を有しつゝ、しかも頽然として墮落の底深く降り去らんよりは、寧ろ狂氣となり癡愚となりて此世の廢棄物と呼ばれん方勝れり。

此日 Dante が "Purgatory" の Canto XVI と XVII とを讀む。明瞭に理解する事を得ば最も趣味ある所なる可けれども、余の不學はこれ解する能はず。遺憾これに過ぎず。此處には彼が freedom of will と love for nature and for soul とに對する意見を窺ひ得可きなり。驚かるゝは彼の如何なる意見も、必ず中世歐史の最も健全なる强烈なる進歩せる思想を代表せる事なり。實に彼は中世の幕を閉づるにふさはしき手なりき。而して近世の舞臺を調ふ可き力ある頭なりき。

午後再び芝生に出づ。Scribner 誌の七月號に、麥の收穫中なる田家の樣を述べたる一文あり。Avondale の事など思ひ出して讀む。興味少し。余は一層興味多き description をなし得可しと思ふ。暇を得ば試む可し。ファニーの薔薇、母東の死、4th of July の夜、櫻桃狩り、など記しなば詩味豐かなる可し。

恥づ可きかな、夜は患者の出でし後 "Mental Diseases" を讀む可かりしに、何事もなく新聞雜誌などに目移りして貴重なる時を失ひ去りぬ。新紙と云へば我が國民の struggle は愈ゝ加はれり。彼等は旅順近く押し寄せぬ。一軍は奉天にクロパトキンを逐ひ去らしめんとず。彼等が一日に用ふる軍費五十萬弗なりとは喫驚す可きにあらずや。彼等は二日の戰を節して偉大なる一個の大學を建造し得可し。此度の戰の必要なるや否やは余知らず。されども戰は不必要なり。

夜ロバーツと共に散歩せんとして Lily に遇ふ。余は戰けり、天使の前に罪多き子のひれ伏せる如く。

此夜 Lily を夢む。ネルソンの夜晩く室に歸りて戸をきしらせしに夢破れたり。ロバーツと彼女と突然余が眠れる床の傍に立てりと夢む。彼女は雪白の衣を着けて頭に眞紅なるリボンを結べりき。

八月六日。土曜日。晴。美しき土曜日なりき。患者も相共に慶してよき土曜日なりと云ふ。涼しく晴れし空の、空氣清く人をして心より爽適の泉湧き出づるを覺えしむ。此朝大掃除をなす。力を盡してこれを爲し感謝を感ず。

稍ゝ晩く芝生に出づ。例の如く Dante を讀む。此頃は Lily 芝生に出でずなりぬ。彼女は余等が憩ふ芝生のあなた、涼し

げなる木蔭にハンモックを垂れて書を讀むを常としぬ。余は時に彼女を竊み見るをこよなき慰めとせり。されども今は彼女の影屢ゝ余を過らず。余は物足らぬ心地す。

今朝も心籠めて Dante を讀む。Hugh Capet の懺悔讀むも憐れなり。午後も亦芝生に。

此夜獨り後園を散步す。神余に祈の心を賜へり。心を空しくして祈る。神敎へたまはく「爾は尙土塊もて造れる人の中に恒久の或者を求め出でんとす。汚れなき白玉を求め出でんとす。そは無益なり。無き所に望を懸けて其の無かりしを悲まんよりは我れに來れ。我れは汝の凡てなり。汝の止む時なききびしき愛慕の念に酬い得んものは、我れのみなればなり」と。

八月七日。日曜日。晴。物ありて嚴しく余を捕ふ。弱しとは知り乍らうなだれし首をいやが上に垂れて芝生に到る。手には "The Life of William Penn" (by M. L. Weems. 1822) を携へたり。

今朝は Danteを讀まず、Penn の傳を讀む。此書は Orthodox Quaker が物したるなる可し。Penn を傳したりと云はんよりは、Penn の假面を被りて己れの思想を披瀝したるものゝ如し。されば處々倦厭を覺えしむるもの、興味を殺滅せしむるもののなきにあらざるも、彼の著者の面目一種の興味なきにあらず。此書は稍ゝ余等が著したる Livingstone 傳に似たり。余は元來此の如き叙述の法を好まず。されば余が Livingstone には心滿たざるもの甚だ多し。他日充分の訂正をなし得るの日來らん事を希ふ。

午後より夕食までの休みを得たり。館を出でんとして、美しき人と其父母とに遇ふ。余が彼女を通じて借らんと乞ひし George Herbert の書無しと云はる。獨り木蔭の露臺に坐して靜かに Penn の傳を讀み、果ては潸然として淚留め難し。逃ぐるが如く後園の樹林に入りて心を靜む。如何なれば余の心かくまで動き易きものとなりけん。稍ゝ心の鎭りしを待ちて森を出でんとせしに Mr. and Mrs. Hall の余を尋ねあぐめるに遇へり。彼の詩を見出でたりとて余を尋ね居たりしなり。彼等は親切なる人々なり。感謝して其書を受け樹蔭に到りて耽讀す。其詩の全體はかくなり。

The Elixer

Teach me my God and King,
    In all things thee to see,
And what I do in anything,
    To do it as for thee.

Not rudely, as a beast,
    To runne into an action;
But still to make thee prepossest,
    And give it his perfection.

A man that looks on glasse,
    On it may stay his eye;
Or, if he pleaseth, though it passe,
    And then the heaven espie.

All may of thee partake:
    Nothing can be so mean,
Which with his tincture (for thy sake)
    Will not grow bright and clean.

一九〇四年

A servant with this clause
　Makes drudgery divine:
Who sweeps a room, as for thy laws,
　Makes that and th' action fine.

This is the famous stone
　That turneth all to gold;
For that which God doth touch and own
　Cannot for lesse be told.

— George Herbert —

其他 Mrs. Hall が他の詩をも讀めと云ひしに心づき、指折入れられたる個所を開き見るに Tennyson が "Locksley Hall" なりき。心ありての業か、なくての業か、二度繰返し讀みて胸裂くるが如かりき。

夕暮、彼の書を返して館に歸る。此夜讃歌會ありて臨む。業を終へて後獨り又後園を散歩す。心空しくして祈る事能はず。涙もなく笑ひもなく百合も手折らず。彼の人をも思ひ出でずして室に歸る。さゝやく聲あり、曰く「世より眼を退け去れ」と。此聲昨日今日强く余を動かす。

八月八日。月曜日。曇。冷寒。朝はさしたる事なし。患者と共に芝生に出で、余は日記を記し終へたる後 Dante を讀む。午後より休暇を得たり（今日もリードと云へる人は余を遇する事再び酷なりき。されども余は彼の云ふが儘に從へり）。余は Mr. Wing に遇はんが爲めに費府に出で數個の買物をなし、夕暮頃同氏の家に到る。氏は未だ會社より歸り來らざりしか

ば、其書齋に入りて机上の書物など亂棄して讀む中に、Griffis の "Vox（?）Christus" と云へる書あり。日本に於ける基督教の有様を概述せるものゝ如し。片端を窺ひたるに過ぎざれば何とも云ひ難けれど必ず興味多き書なる可し。軈て氏來りぬ。例にも勝りて余を懽待し、余が此院に於ける日々など心籠めて尋ねらる。余も亦余が閉ぢ易き心を凡て打開きて彼に語りぬ。思はず不平も歎語も出でたれども亦多くの感謝をも彼に語り得ぬ。夜食の馳走となり尚暫く親しく語り彼家を辭す。氏は明後日を以て暫く南方に赴くと云へり。

此夜涼冷秋の如し。汽車の中に風に吹かれながら種々の事など思ふ。市街は何故かく余に厭はしき所なるらん。半日彼所にありて余の頭腦は激しき疼痛を感ず。此夜早く床に入る。

此日 Mr. Crowell より手紙を受く。余が金を送れるに對し、之れを受くるの理由なしとてそを返し來る。其語剴切、余再びこれを返す事能はず。彼家は余が一生の間忘れ難き所となりぬ。

八月九日。火曜日。晴。冷寒。秋信の第一か今朝患者と共に ward を出づれば胡桃の葉三五頻りに散る。所謂肅殺の氣自ら人を襲ふを覺ゆ。

朝 Arthur 及びカロラインより手紙を受く。余を慰藉するもの甚だ多し。殊にカロラインの書は可憐にして余をして思はず微笑を發せしむ。Arthur は余に告げて、余の業若し堪ふるに難からば直ちに我が家に來れ、我が家は凡ての歡迎を以て汝の來るのを待つと云ひ越しぬ。好意感謝するに堪へたり。されどゝ余は九月の十五日迄は如何なる事ありとも茲に留まる可し。Mr. Wing 余を茲に紹介せり。余は茲を去らじ。

朝、芝生にありて Dante 及び聖書を讀む。午後よりも亦同じ事を繰返したれども今日は何故か心滿たず。

夜、ロバーツと共に散歩す。一亭に到りて語る。彼は年二十八なりと云へども其思想は實に小兒の如し。人の痛みに同情し得る人にあらず。コホロギの聲漸く四圍の景にふさはしくなりぬ。嗚呼此秋は苦しき秋なる可し。

八月十日。水曜日。曇。朝、例の如く患者と共に芝生に出づ。"Purgatory" 漸く結尾に近づきぬ。Peatrice との邂逅も遠き

にあらずなりぬ。余は新しき精神を以て此美しき cants を讀まんが爲めに此朝は讀書を止めたり。

「修養は靜かなる處に、品性はかまびすしき處に於いて完うせらる」と云ひし詩人の語は剴切なるかな。余の品性は今鍛錬せられ陶冶せらるゝに適はしき位置に立てり。かくまでに平凡なる人情と道德とさへ實行せられざらんとは思ひ懸けざりき。學者と論者とは餘りに深く道德を論じ倫理を講ぜり。「夢みる人」（Hugo 夢みる人と考ふる人とを區別して曰く、前者は目的なくして思考する人なり。後者には目的ありと）には興味無きにあらじ。されども「考ふる人」「働く人」には何の益ぞ。鍬を取る時人よりより多くかゞみ、神を稱ふる時人よりより多く仰ぐものは祝福さる可きかな。余は此の如きを勉めばや。鳴る鐘、響く鐃鈸、世に之に勝りて厭ふ可きものある事なし。

ストラスダレッサーと云へる患者あり。ペンキ塗業にて金滿家なるが歳六十八歳なりと云へり。頑丈なる老爺にて灰色の鬚髯肥えたる面を被ふ。此人も吝嗇なる一人にして、余が彼の室を掃除する毎に彼は幾度となく其前を猜疑の眼もて往來するを常とするなり。余は時々患者ながら彼の擧動に對して自尊を害はるゝを覺えざる能はざりしが、此朝彼は滿面の笑を以て余に來り曰く "You are the good little boy in this ward" と。余は心より滿足を感じぬ。彼等は漸く余の如何なる種類のものなるかを理解し始めぬ。余は余の總ての好意を以て彼等の爲めに働く可し。午後も芝生に出づ。時々雨降り且氣鬱して頭甚だ重し。此夕暮日本よりの書信を得。隆三、山本及び河野信子よりなりき。信子の書信委細に彼女と其母の近狀を報じ來る。忘るゝとにはあらざるも事に紛れて思ひ出でざりし彼女の囘想滃然として頭を襲ひ、過ぎし月日に起りし事繰返し思ふ。或時はほと／＼彼女を戀はんとまでせし事ありき。されども彼女も亦余が愛する妹のみ。實に余は彼女を愛せざる能はず。彼女は苦しみの中に育てられて幾多の缺點なきにあらず。されどもそは愈ゝ余の愛心を激しからしむるのみ。神よ、彼女を祝福し給へ。此夜大雷大雨爽快を極む。床に入りてよりも屢ゝ堪へ得ずなりて床より起き出で、窓に倚りて其莊嚴の樣を見守りつる事幾度かなりき。

八月十一日。木曜日。曇。暑さ激しくして頭は宛ら大なる手もて壓せらるゝ樣なり。朝芝生に出でゝ "Purgatory" を讀

む。今日は結尾に來れり。余は彼が如何なる態度もて Beatrice に遇ふかを樂しみつゝ讀みぬ。何等の莊嚴ぞ。實に彼は愛の極致を描くにかなへる大なる心を持てり。彼の筆によりて彼女は實に天使となり了んぬ。花の雲、珠の霞打ち棚引ける所に、此世には見る可からざる雪白の衣着たる天使に導かれて、河のほとりを辿るあたりの美しさ、夢の如し。Goethe が "Faust" の Margarete、Shakespeare が "Hamlet" の Ophelia、何れも無邪氣可憐思はず人をして同情の涙に咽ばしむれども、其無邪氣と可憐とに加へて近づきがたき神氣莊嚴を加へたる Dante が Beatrice こそ珍らかなれ。恐らくは是れ人の頭が産み出でたる最初のものにして、恐らくは最後のものにあらざらんや。Dante 再び生るゝにあらざれば Beatrice 再び生れず。尊いかな、同情の奥殿に達して其處に不滅の活火を探り得るの人。

夜獨り散歩す。此夜も神余に祈る事を敎へ給ひぬ。空晴れて星斗砂の如く、打ち仰げば七星の鎖大なる御手に引かれて空のもなか、あの光を見よ、自ら鋼鐵の如き鋭さを加へて秋神其手を太西に置き、南風を收めて之を西にめぐらしむるなるを知る。

メイランドと云ふ厭ふ可き女患者再び院に歸り來りぬ。余は又 Lily が彼女に近づかん事を恐る。現に今夕彼女は彼女と共にありき。憎む可し人の子を賊ふ子。

八月十二日。金曜日。晴。夜痛く冷かにして朝空美しう晴れぬ。吹き來る風に稍ゝ乾きがてなる樹葉の相觸るゝ聲漸く高し。秋來りぬと思ふの念、胸を刺すが如し。

Dante を讀み終りたれば、此日より Hegel の "Philosophy of History" を讀み始む。Introduction の所むづかしけれども趣味は津々たり。

齒と痔とを病む。夕刻に至りて愈ゝ惡し。此日 Lily の姿見えず。一日病みたる人の如くなりぬ。笑ふ可きかな余が小情。余は幾度か彼女の余等が境闉の人にあらざるを思ひ、或時は彼女を卑しむ事さへありながら、彼女此地にあらざれば我が心は悲しみと悶えとに病む。

八月十三日。土曜日。曇。此日齒痛愈ゝ甚だし。何せん勇氣もなし。殆んど終日全く無爲にして暮しぬ。Lily が姿は今日も見えず。

夜半雷鳴急雨枕をそばたてゝ聞き入るもの久しかりき。兄より手紙を受く。心なき米國人に欺かれて 300 miles 以上の旅を無益になしたりと報じ越しぬ。

八月十四日。日曜日。晴。くだ／＼しけれども秋は來りぬと書かざるを得ず。朝、食卓を調へんとして食堂に入れば、水の如き朝風靜かに室を籠めて、得も云はれぬ心地よさ身に沁む。兄に書して活動の時去りて熟考の時來りぬと云ひ送りぬ。

朝患者と共に例の如く芝生に出づ。Emer on の “Representative Men” を携へ出でて “Montaigne, a Skeptic” を讀む。彼の廣汎なる同情は偉とす可し。彼は凡ての人に祝福す可き特徴あるを徹視するの眼を有せり。余は “Montaigne” を讀まざれば其の如何なる思想なるかを窺ふに難けれども、Emerson の云ふ所を以て信ず可しとせば、彼は余の心をも得たる偉人なり。彼は地に住める人を拉して天使たらしめんとする空想家を疎んじ、reason を(信ずべき解すべき)蔑視して夢生する怠惰者を疎んじ、天上を歩まず地下に入らず、着々として堅固なる一歩一歩を、此地球の表面に印せんと企てたるなり。彼は天使の如く笑まず、悪鬼の如く嘲笑はず、人の如く喜びて且つ泣けるなり。此の如き生涯は尊ぶ可き生涯にあらずや。又 “Goethe, a Writer” を讀む。こも亦其觀察彼が一種の隻眼あるを知るに足る可し。これを Carlyle の “Hero.Worship” と比較するは最も興味あり。彼は冷靜なり、哲學的なり、他觀的なり、辯護的なり。此は激烈なり、詩人的なり、自觀的なり、煽動的なり。彼の眼は物の表裏を見、此の眼は一面を徹視す。彼の觀察は彼の智を通して來り、此の觀察は彼の情を通して來る。余は多く Emerson を讀まざれども、彼の中に大なる興味を有し得る能はす。彼の style は Carlyle のそれと共に一種の癖あり(其癖は兩者全く異れども)。彼はわざとらしき格言的の短句を聯ねて一文をなす。稍ゝ Bacon のそれに似てしかも其天分劣れり。彼は Carlyle と共に模範的文章家にはあらざる可し。

午後も亦 Emerson を讀む。又 Dr. Scott と共に（醫師にして精動の結果遂に精神に異常を來せし人）散歩をなす。されば

多く讀む事も書く事もせず。彼は常に何事かを常に思ひ屈して時々無意識に「立ち去れ」と叫ぶなり。彼は余の看護するを痛く喜べるもの丶如くなれども余にとりては話柄を見出すに苦しまざるを得ず。

夜は休を得たり。室に歸りて入浴し暫く讀書す。Havard Univ. の獨逸語の教授なる某氏が、Goethe の百五十年を記念して "Out-Look" に掲げたる小品最も興味あり。彼は Goethe が精神的作物として "Faust" を第一に掲げ、是に次ぎて "Wilhelm Meister" を擧げ、これに次ぎて "Affinity" を擧げたり。而して其結論とする所に曰く、Goethe は實に近代思想の權化なり。彼は近代の思想が到達し得可き最極の點にまで達せり。彼は彼の individuality を其極點に發達せしめ、其極 self-sacrifice の堂奥に入れり。彼は肉より靈に到り、卑より高く昇り、疑惑より確信に達せり。彼には凡てのもの自治の器たらざるはなかりき。彼にとりては、罪すらも彼が教導者なりき(論者は literally にかく云へり。されども是れ必然の事のみ。一層適切に云へば、人に取りては罪のみが教導者ならずや)。基督教の教ふる所は、自己を聖化して、天國を來らすにあり。Goethe の教ふる所は自己を聖化して自己の中に天國を見出すにありと。多少の觀察なからずとせず。

八月十五日。月曜日。晴。患者と共に野外に出づ。Clark と云へる患者近來頓に陰鬱となり最も痛心す可きものあり。遠く人を離れて屢々其影を失はんとす。余は彼を看視せんが爲めに庭の他端に到れり。余は略々彼がかくなりし原因を知る。彼は余と共に Lily を miss せるなり。余は彼を憐れむ。そは余、余自身を憐れめばなり。

嗚呼、彼女何處に到りしや。其兩親も彼女と共に見えず。山隈か、水廓か。彼女の心は外に余を忘れ去りしなる可し。彼女は一個可憐なる小兒なればなり。余は彼女を忘る丶能はず。余は罪深くして拔き難き、一個卑しむ可き人なればなり。唯激しく働く瞬間のみ余は彼女の記憶より逃る。好來! 勞働よ。

汝は余が苦痛よりの refuge なり。働け、働け。顳顬より血潮滲み出でん迄働け。何を恐る丶や、何を悲しむや。凡てのもの汝より取り去らる丶とも、汝は悲しむの理由あらず。汝は無にして此世に來りたればなり。働け、働け。不平を云ふ事なく働け。愛を受けんとする事なかれ。此世淋しからは愛を與へよ。消極の尖端に立つものは危きかな。一歩を誤れば其處

に地獄あればなり。

午後より休暇を得、室に歸りて木村君に手紙を書く。思はず長くなる。信子にも亦半ば書きぬ。夜入浴して早く床に入る。

八月十六日。火曜日。曇。朝はクラーク氏の看視をなし、午後及び夕刻はスコット氏と共に庭に出づ。余の同情は遂に彼を動かし得たり。彼は涙を以て余に語るに彼の苦痛を以てせり。曰く「余には今一個の思想徂徠して拔き難し。余は余の心に反して神に對し汚濁の思を懷く。かくの如きものは救はれざる可し」と。彼に此の如き思想を與へしものは何者ぞや。血を有せざる基督教神學者なり。彼は科學者が試驗物を treat する如くに、罪を treat す。而して曰く「罪を犯す事一度なるものは救はれざる可し」と。嗚呼災なるかな汝。汝は萬人を拉して guillotive に到らしめたるダントン、マラーの殘酷に七倍せる殘酷を犯して、しかも平然として笑へるものなり。

此夜スコット氏の pack bath をなす。なし終るや彼は余に祈らん事を乞ふ。余は堪へえずなりて涙もて祈りぬ。

八月十七日。水曜日。晴。朝患者と共に例の如く芝生に出づ。クラーク氏を看守せんが爲めに彼方の森に到りたれば、多く心を籠めて讀書する事能はず。僅かに Hegel を少しく窺ひたると、Burns Library の書目の中より購入したしと思ふ書に符號附したるに過ぎず。

午後はスコット氏の看護をなす。夕刻精神上の問題を論ず。彼は其心の中に種々なる葛藤を有す。されどもそは一の連絡を有せず。されば一問題解釋せらるれば、解釋せられたる他問題は再び解釋す可き問題となりて、彼の心に歸り來るなり。彼はかくなりし原因を今夕明らさまに余に告げぬ。曰く「余に一人の弟あり、南方に農場を有し道程遠きが故に、互に相思ひながら遇はざる事既に二十三年に及びぬ。又此間彼は親切にも余が窮乏を救はんが爲めに金を送り越せし事あり。然るに約三ヶ月前彼の一友余に書を致して、彼の事業失敗し、彼は困難と戰ひつゝありと報じ來りぬ。余は此時適富の處置を彼の爲めになすべかりしなり。されども彼自身の書には左程までに事逼れる樣子は報ぜられざりしが故に、余は其儘に打捨て置きぬ。而して一日突然彼が自殺の悲報に接せし時の余が驚駭と苦痛とを察し給へ。かくて後、神余を罰し給へるならん、

余は余に來る患者に、極めて安全なる藥劑を調するにも、極めて平易なる手術を施すにも、一方ならぬ恐怖を覺ゆるに至りぬ。一日余は妻の留むるをも聞き入らずして教會に到りぬ。而して其歸途余が心中に何人にも言明し難き恐る可き思想來りぬ。余は此思想より脱逸する事能はず、自殺の念――余が弟の爲したる如き――は常に常に余の頭を犯し來るなり。余は是れを如何にすべきや」と。余は奇異なる沈默を以て謹み聞きぬ。夜も亦彼と共に庭に出づ。月漸く弦ならんとす。不可思議なる人生の迷路を解するの如何に難きかを益々思ふ。人生とは實に解き難くむすぼれたる色様々なる糸の如し。赤き糸を正しく引出さんとすれば、靑き糸は益々亂る。靑きを思へば赤きが亂る。心短き人の解かんよりも斷たんとするは宜ならずや。冷かに思ふ哲學者も、熱して觀ずる文學者も此大なる亂を解き得んにはふさはしき人々にあらず――さればとて他の人々は猶ふさはしからず――さらばぞよ、人は唯思ふが儘に深く迷執に固着するこそ面白からずや。悲しむ人には悲しみの中に世界あり。喜ぶ人には喜びの中に世界あり。各個は各個の世界を有す。各己は其王なり、其主權なり。如何なる武器もそを犯し得可きにあらず。余等各己をして各己の領土に忠實ならしめよ。人生を力たらしめ光たらしむる所以唯是れのみ。

彼女は未だ歸り來らず。余は忍耐を以て二週間彼女の歸り來るを待つ可し。かくても彼女歸り來らざりせば、之を如何にすべきぞ。余は信ず二週日の後には彼女歸り來る可し――此所の職員の夏季休暇は多く二週日なれば――かくて再び彼女の微笑を見なんは!

夜は曇りぬ。獨り森の彼方を散歩す。久しく顧みざりし百合を手折りて、美しき人の其名彫りたるぶなの古木の根に。

八月十八日。木曜日。晴。此日は一般の患者に附添ひて芝生に出づ。此日井上善吉と云ふ人より書を領す。良三君の兄にして西村といふ人に伴ひ聖ルイス博覽會に來れるなりと云へり。英一君よりの紹介狀を同封し來る。余が嘗て見慣れたる彼の手跡に一瞥を與へし時、余の心は狂へる潮の如くなりて思はず叫ばんとしぬ。嗚呼、彼に聞かざる事半年の餘、彼が爾後の肉體は變化少きものなるべけれど、彼の靈は如何に激しき變化來りけん。思へば彼も彼の眞正の事業より眼を退け去りたるもの、人生の悲慘これに過ぐるものあらんや。余の心は渝る事なく彼の熱き友誼を思ふ。彼は價値なき事余の如きもの

に、他の何人にも投げざりし信頼を與へて、余が爲めに日夜祈りたりぬ。余が彼より書を受けざるは、余に譬へがたき苦痛なり。而して余は嘗て此苦痛もて此國にありし彼を惱ましたりき。余は彼を恨む事能はず。されども彼が余に書を送り得ん事は、余が衷心の願なり。余は得堪へず。數日の中に彼に認む可し。

午後又患者と共に芝生に出づ。古き "Book Lover's Magazine" を持ち出して、其中に掲げられたる Sudermann の "New Year Eve's Confession" と Dr. Hancock が書きたる彼の諸作の批評を讀む。前者は彼が些かなる一小品に過ぎざれども、名工の一鑿も亦生きたる火に輝くを覺ゆ。余嘗て柳村が譯したるロッチ（或はバルザックなりしか）の『爐火』と云へる一篇を讀みしが、結構稍〻等しくして其精神は全然異れり。Sudermann には尊嚴犯すべからざる男性的の强健なる道念（彼はこれを意志と呼ばんとするなる可し）ありて動けり。而して彼はそを書き現はさんに最もふさはしき筆を有す。Dr. Hancock の批評取り分けて奇警なる所はなけれども、Sudermann が大體の思想を知り得んには面白き article なり。

此夕、夜會の卓にキッカムと云へる一人の看護人、衆人の前にて余に警告がましき言を與へ、ロバーツの適切なる注意を鋭き口調もて退けたり。余の忍耐は遂に破れたり。夕食後余は彼を離れたる處に導き行きて詰責せり。主よ、余が小情を憐れみ給へ。彼等は餘りに無智なるものなり。されども異鄕にありて孤獨にして尙此上に人を愛せんは堪へ得ざる苦痛なり。

此夜ロバーツと共に散步す。

第七巻

一九〇四年（明治三十七年）（承前）

Friend's Asylum for the Insane, Frankford, Pennsylvania, U. S. A.

八月二十九日。月曜日。晴。余の日記は紙なき爲めに途絶えぬ。書かま欲しかりし事最も多かりしかど詮なし。vision は囘らす可からず。如何なる事を思ひしかは朧ろに心の中に刻まるれども、何なりしかは消え果てたり。余が日記記さゞりし間、神の余に告げ給ひし囁きの中に、

「古諺に云ふ『爾人をあざむき得可し。されども爾自身をあざむく可からず』と。されどもそは誤れり、爾自身をだにあざむき得ず、如何にして人をあざむく事を得んや。」

と敎へ給ひしは、余が思ひ設けざりし大なる御聲なりき。實に世は愚かなり。人は迷へり。彼等は嘗て此一大事に思ひ到らざるなり。而して彼等は擅に虚僞を人の前に弄し互に相あざむき得たりとなす。此實有の世に何の虚僞ありてか潜む事を得んや。此不朽の人に何の幻影ありてかはかくるゝ事を得んや。我は天を頂き地を蹈めり。かくて何處に、何處の隅に虚僞の介在を信じ得可き。懼るゝ事勿れ汝羊の如きものと鳩の如きもの。汝は世の道に長けず、人の情に通ぜず。汝は所謂世を嚙み分けて滓のみを舌に剩せる通客にあらず。さらば人は多く汝をあざむかんと競ふなる可し。さらば彼等をして競ふが儘に、彼等の爲さんと欲する所をなさしめよ。彼等は無を種蒔きて無を刈り取るものなり。彼等は汝に無を加ふべし。されば彼女の汝に求め得べきものは唯無のみ。彼等は汝をあざむきて汝の進路を妨げ得たりとなす可し。汝より財寶を奪ひ得たりとなす可し。汝の懽心を買ひ得たりとなす可し。而して彼等の勞働は唯一の無によつて酬いらる可きのみ。神かく余に敎へ

給ふ。

此朝患者と共に芝生に出でゝ J. Elkinton 氏より送られたる "Journal of George Fox" を讀む。余は嘗て日本にありし時、其譯文を讀みたる事ありしが多く感興を惹かざりき。然るに其原書を讀むに至りては、宛ら全然異れる書を讀むに等しかりき。畫家が同じ色料（とは云はず同じ木炭）を用ゐてさへ、其人々の特有なる tone を生ずるは普通の事なり。同じ文字を用ゐても、著者の面影は自ら其中に爭はれざる可く印せらるゝは寧ろ恐ろしき許りならずや。Fox の筆は Bunyan のそれに似て、一層文學的潤飾を缺き、一層豫言者的口氣を加へたり。彼の文字は一々活力を以て動き Emerson が Montaigne の文を評せる語ならねども、試みにこれを切れば生血の淋漓たるを見んとす。彼が幼少にして既に純潔と敬虔の何者なるかを解し、商家に傭はれては "Verily" の語彼の套用となり、人は「Fox 若し一度 verily なる語を用ゐば、安んじて彼に任して可なり」と云はしむるに至り、十九歳にして神の御聲愈ゝ彼の衷心に逼るや、彼は彼の見たる世界の虛僞と僞善とに滿ちたるに、絕望にまで達せんとする煩悶を感じ、遂に意を決して豫言者の生涯に入るまでの辛酸、同情に堪へたり。幾度か卷を掩ひ、髣髴として疑惑の谷間に苦悶せし彼が面目を想像し、同情と感謝とに滿たされしぞや。されども余は云はん、彼は彼にして余は彼たり得ず。彼は自己の罪惡に關しては極めて容易なる解說を得たればなり。彼の日記を見るに、一度だに彼は彼の罪に就て苦痛を感ぜし事なし。彼は一個宗教家的天才なり。彼は尊く惠まれし人なり。尊く惠まるゝ人にあらず、余は彼に到らんよりは St. Augustine に到らん。余は幼くして純潔と敬虔とを感得せし如き經驗なきのみならず、幼くして余は色慾を知り、盜む事をし、虛言を吐き、姑息に住み、陰言を避けざりき。余が幼くして得たりし是等の慣習は、今に至るも全く去らず。何故に余の苦心はかくまでに無益なるぞと、自らを憐れむの外なき事あり。かゝる余は Fox に同情の人たり能はざるは其所なり。余は彼の途を步むにふさはず。神は步む可く他の道を與へ給ひぬ。余は其道を辿る可し。

午後より休暇を得たれば費府に出でゝ買物す。汽車の中にて不圖思ひつきしは、Memorial Hall に近着の名畫を見なんと思ふの念なりき。景色美しきスクルキル河左岸の廣道を獨步して Hall に到る。文藝復興期前後の古名畫と、近代畫家の傑

作とを併せて其數五十點ばかり齎されたり。Mullirio が諸作、Van Dyck が "Christ in Tomb" など身を震はす計りの感興を惹かしむ。余は初めて彼が眞面目の傑作を見たり。肉の色の美しさ、光線の自然さ、實に今の所謂 Impressionism などの企て及ぶ可き所にあらず。余は嘗て天才の如何なるものなるかを思ひ且つ讀みたり。今日にして初めて天才の如何なるものなるかを見たり。Arch Street にて不圖顏知れる汚き乞食に遇ひぬ。遇ひし瞬間に余の記憶は直ちに彼の何人なるかを知れり。余が Christmas の休暇を利用して費府に滯在し、Mercantile Library に通ひつゝ讀書せる時、常に彼所にて遇へる一人の男ありき。髯むさく生やして衣は皺多きを着たり。余は讀書を妨げられん事を懼れて、彼の何事をか語らんとするにも拘はらず勉めてこれを避けたりしが、其處に通ふ可き最後の日、彼は遂に余を捕へぬ。力なき濁りたる聲に抑揚なく種々なる事語りぬ。「我も亦君の如く college にて學べる一人なりしかども中途にして校を去りぬ。爾後諸所に放浪して今日に至れり。余の親戚に carpet 製造業をなせるものあり。君若し意あらば余は君を伴うて其工場を縱覽せしむ可し。其 system を研究して之を君の國に入るれば、君は college 敎育を受くるに勝りて利益を日本に與ふるのみならず、併せて君が利益の大なる可し」と。余は彼が意志薄弱にして常に其業を變ずるが故にかく零落の末に走らんとするものなるを察してかく答へたり。「好意は深謝する所なれども余は國を辭する時一定の目的もて來れり。余の目的とする所或は誤謬たり得可し。されどもそを變じて飄々として他に向ふの誤謬には若かざるなり」と。かくて黃昏時の町は人の往復に忙しき頃、彼は余を見返り勝ちに、余は彼を見返り勝ちに相別れぬ。余は明日より此圖書館には來らざる可し。されば彼とは是が永久の別れなる可しと思ひ設けしなりき。

而して見よ、余は再び彼に遇へるなり。世の轉變の何ぞ爾かく量り難き。僅かに八ヶ月にして彼は殆んど別人の如き容貌となりぬ。其力なき眼は愈〻鈍りて梅雨時の空の如く、口は半ば開かれて唇は厚みを加へぬ。蹣跚として足元も定かならぬ歩みに、永く勞働を厭ひし手は宛ら棒の如く其兩側に垂れ下れり。彼は其後酒に親しめるが如し。余の眼は彼を見分けたれども彼の眼は既に余を忘れ果てたり。余は三度振り返り見て觀念の眼を閉ぢたり。畏懼す可き實有の世よ。彼はかくの如く

して彼の道の末遠く走り去るなる可し。彼の地に踏みつくる歩みは愈〻定かならねど、肉の眼に見えぬ彼の歩みは宛ら迅風の如く疾く鋭くして、遂に大なる顚倒に至るまで休む時なく時限と方處とを橫切り去るなる可し。畏懼す可き實有の世よ。

此夜英一、壬生の兩名に宛てたる書を認む、半ばだに成らずして就寢す。

八月三十日。火曜日。晴。朝患者と共に芝生に出でゝ George Fox の傳を讀む。スコット氏の病愈〻重し。彼は既に人の慰籍を享受し得ずなりぬ。戰き慄へて宛ら地獄にある一靈魂を此地上に伴ひ出したるが如し。嗚呼余が信仰足らず熱心足らず彼をしてかくの如からしめしか。主よ、同情足らざる僕の小弱を憐れみ給へ。夜々彼と共に祈る時、余の眼は眞に悲しき懺悔の淚に濕ふ。御心ならば願くは彼に爾の生命を與へ給はん事を。

此日宮部先生、隆三、大藤の諸氏より手紙を得。宮部先生 Harvard Univ の二教授に向つて懇切なる紹介狀を吳れ給ひぬ。

午後はスコット氏の特別看護をなす。されば讀書の時を得ざりき。Lily を思ふ情は今も聊かも減ずる事なし。されども同時に余は彼女を厭ふ。余は何故なるかを知らず。ファニーの思出では余に生命を與ふ。彼女を思ひ出づる每に沁むが如き優しく美しき輕き悲みを心の最も淸き處に感ず。彼女は實に余を不純より遠からしむる天使なり。

此夜獨り森の中を散步す。神如何に祈る可きかを敎へ給ひぬ。

八月三十一日。水曜日。晴。午前は患者と共に芝生に出で Hegel の "Philosophy of History" を讀む。彼は國家を以て人類の理想卽ち Geist を實行す可き最も適當の機關となし、一個人の思想感情は或程度まで其犧牲となる可きものなりと主張す。最も普通且つ穩當の議論にして、氏のはそを組織的に合理的に說けるものなり。されども玆に一の問題あり。若し人類の中に社會なるものゝ組織せらるゝありて、全然國家なるもの寧ろ政府なるものなかりしと想像して人類の進化如何になる可きかと豫察せば、如何に是れ Utopia にも勝りて面白き問題にあらざるか。これを論理上より論ずれば、國家は最適當なる人類理想發展の保護者なるが如し。しかも實際に於て古より國家の人道を窮迫せし事幾千ぞ。商鞅、法を作りて法に死せるが如く、人類は其協同によりて利益の發展をなさんが爲めに國家を作り、而して却て國家の爲めに其自由なる行動は牽制せ

られぬ。人間思想、或程度までは國家の必要或は否む可からざらん。しかも或程度以上に至りても、即ち人類の生存する限り國家は其存在を續け得可きや否やは、頗る討究を要す可き問題ならずや。第二十一世紀の問題は恐らくは國家を如何に改造す可きやにあらずして、××××××××可きやなる可し。個人より家族に入り、家族より首長制度に移り、首長制度より專制制度に移り、專制制度より君主立權制度に移り、君主立權制度より平民立權制度に移り、平民立權制度より何に移る可きや興味多き問題にあらずや。

午後よりは看護の足らざるが爲め、余は凡ての注意を患者に向けたるが故に、全く讀書する事能はず、忙はしく業務に從事しぬ。

余は明日午前一時より夜の明くる迄夜直をなす可く定まりしかば夜早く寢ぬるを許されたり。祈らんとして館を出づれば、彼のなつかしき人に遇ふ。無邪氣なる彼女は例の如く優しき笑を傾けて同情ある greeting を余に與へぬ。うれしきは彼女の天につける心なり。東洋の一流客、身と心とに何の美もなく名と富と兩つながらなき余に、尊き笑まひを惜し氣なく惠むは他の人のなし得る所ならんや。人の名刻まれたる樹下に到り涙にあふれて感謝の祈をさゝげぬ。

× × × ×

うらぶれし常夏姫の秋姿花は赤きが尙ふさはしき

鳴村雨東に書を送るとて

初夏と眞夏の愛子受け給へ秋のみなしご秋文まゐる

りんごやがて赤らみぬべしとばかりにこゝなる秋をうらなひ給へ

× × × ×

なつかしき秋の空かな瑠璃紺の眞澄みに澄みて白雲もなき

慕ひつるを秋神つれな身をそむけふと消えぬるがいやに戀しき

患者の室を掃除せる時其隅に死蛾を見出でて

夏の日には忘られ果てしわがさだめせめてほのほのあつきに燒けね

述　懷

いやちこの戀にもにへは燒かざりしわが驕樂に神耻ぢしめぬ

九月二日。金曜日。雨。濛々として秋雨天を籠めたり。頭は宛ら重きものに壓せらるゝが如し。患者と共に庭に出でたるも余は痔の再發を恐れて露臺に坐せざりしかば、讀書する事能はず。庭の彼處此處を散歩しつゝ物思ふ。三日程前より沈鬱期は至りぬ。人の罪も余が罪も心の奥を痛くせめて悲愁になやむ。余は今心ゆく計り泣かんと希ふ。九月十五日來らば余は此處を去りて直ちに Avondale に到る可し。其處の一夜人なき麥隴の彼方に到り、神の御胸によりて泣きに泣かば余が二ヶ月の此所の辛苦は拭ふが如く酬はる可し。其時を待つ喜は織女の七夕の夜を待つ喜びの如し。

此夜九時彼女と其父とを見る。狂せる如くなりて廣庭を馳せ急ぎて人なき所に到りぬ。人なき所の淋しさは、人ある所の淋しさに勝れり。

九月三日。土曜日、曇。兄と母上とより手紙を、Miss Lippincott より家よりの爲替三百弗を送り來れり。兄が書は痛く余を慰む。實に彼が云ふ如し。余等の生涯は戰ならざる可からず。神の僕には懶惰は忘られざる可からず。窮迫は彼等の冠なり。悲愁は彼等の胸あてなり。敬虔は彼等の劍なり。同情は彼等の長槍なり。我に偸安の時ある時、我か信仰は萎む。神にあるの苦痛は我等のみ味ひ得る偉大なる特權なり。Luther が「我怒れる時信仰は最も強し」と云へるは實に理なり。人は常に憤らざる可からず。發憤なき生涯、そは無に活くる事なり。神よ感謝す、爾は Everlasting No より此僕を誘ひ出して Everlasting Yea の關門に導き給へり。消極の立場を捨てゝ、積極の立場に立たしめ給へり。余は嘗て强しと云はれし事あらざりき。而して我も亦爾が信じぬ。さなり我は今も弱し。されども神余と共にあり給ふ時、余は弱からず。余は何者よりも弱か

らず。神の大なる力は余の心の中に漲り湧く。神よ感謝す、願くは此弱き器に強き酒を盛りて、重荷負へる人の上に甘き酔を與へ給へ。

母上の御筆、心深く味ひ讀みぬ。父上の老い給ひしを記し給ふを見ても母上の愈ゝ老い給ひしが著し。思ふに倚門日夜其不肖の子が歸國の時を待ち給ふ可きよ。而して此子に期待し給ふ所は何なる可きぞ。父上も母上も共に余を温厚小心父祖の業を墨守して敢て渝らざらんを期するものなりと思ひ給へり。家名を興し社會の上位置を占めん事は、老い給ひし人の共に余に望み給ふ所なる可し。而して余これに聊かの念慮なし。神を知りてより余は生れ代りぬ。十八、十九の頃なる武郎は何處に其姿をかくし去りけん。自らさへ怪しみに堪へず。いでや不幸の子、不忠の臣と呼ばるゝとも、余は敢て懼れざる事を勉めん。余が爲す可き事業は總てを犠牲となさしむ。余が衷に燃ゆる炎は、凡てを燬き盡す火なり。其火は畏る可き火なり。余は願はざるに起さるゝなり。余は望まざるになさせらるゝなり。嗚呼余に他を望む人よ。余若し汝の意に負かば余を許せ、余は既に許嫁せられたる處女、貞操は余が唯一の務めなり。余は秋波を如何に美しくともよそ人に送る事能はず。余が人はねたむ人なり。

例の如く患者に附添ひて庭に出づ。George Fox の自傳を讀む。彼の思想は到底余が衷心の同情を惹かねども、彼の人格は驚く可きかな。彼の自任は如何に高きかな。彼は宛ら鏘々として鳴りやまぬ鋼鐵の古鈴の如し。之を鞭つ事愈ゝ甚だしければ其鳴愈ゝ高くして愈ゝ強し。神にあるの人、正に當に此の如くならざる可からず。此齷齪適く所を知らざる人世に處して恐怖を知らざる人は尊む可きかな。男は男の如くならざる可からず。

此夜二宮てい子に手紙を書き、十時就寢。Lily は其學校の始まれるによりて費府に去りしが如し。神は余を彼女に遇はしめ給ひぬ。而して今は永久に遇はざる可く別れしめ給ひぬ。彼女の運命の此後如何に導かるゝを思ふにも、余の胸は怪しう戰くを覺ゆるなり。强き心と優しき情持ちて生れたる人よ。余は彼女に多く接し得可き機會を持ちながら殆んど數言の外は彼女と語らざりき。いとしければいよ〳〵そを言ひ出づるに鈍る余が臆病なる舌よ——嗚呼彼女は余に優しかりき。天女の

如き笑まひの greeting は今余を捨て去りぬ——秋風漸く院庭に深からんとして余が夜毎に摘みし白百合も花尠ならなりぬ。さらばよ秋。余は此境遇にあるべかりしなり。Lily 暫時だに余と共にありしは、望外の余が幸なり。彼女の去れるは余の常に歸れるなり。さなり、誠にさなり。秋、秋、秋。余は御身の愛子なり、冷かなる胸よ余を懷け。余が頭はあまりに熱ければ、氷の如き汝が胸こそ余が頬を冷やすにはふさひたれ（Thomas William Parsons's "On a Bust of Dante" 略す）。

九月四日。日曜日。晴。實に美はしき安息日なりき。患者と共に出でゝ庭にあるに西風萬里を吹きて、心亦萬里に行くの概あり。

朝 George Fox の傳を讀み、彼が Oliver Cromwell に遇ふの一節に到りて、余も思はず氣昂り二度三度快哉を呼ばざる能はざりき。Cromwell の率直も Fox の前には（此書の註釋者は Fox の性を云ひ顯はすに sun clear なる語を以てせり。余は此 expression を好む）一個豹變を事とする政略家なり。Fox の大膽も Cromwell の前には一個經驗少き宗教狂なり。Fox の自記によれば彼は懼るゝ所なく Cromwell に說くに神意を奉戴す可きを以てし、Cromwell は "That is true," と云ふ答辭を繰返して感嘆斜ならざりし趣を記せり。さればとて Cromwell は此位の事に今更感服する人にはあらざる可し。Fox の若き大膽は Cromwell を常人と見たりしのみなりしかども、其中には必ず一種の敬畏なき能はざりしなる可し。Cromwell の老いたる器度は、Foxde を異才として仰ぎしかども、其中には必ず一種の輕意なき能はざりしなる可し。眞面目にしてしかも矛盾ある一名畫を見るの心地あり（此觀察は余の常に違へり。ボルテールかスヰフト余の心に魅入りしなる可し）。

此夜 Mr. Hall より "Fire-side Encyclopedia of Poetry" を借り來りて讀む。"On a Bust of Dante" はそれより寫せしものなり。

九月六日。火曜日、晴。秋愈ゝ深うなりぬ。朝などシヤツ一枚となりて働かんとするにほと〳〵寒慄を覺ゆる計りとなりぬ。食堂の隅にこほろぎ啼けり。

此日此院に可憐なる一小兒二人の婦人に伴　れて來　ぬ。ward に歸らんとしてそを見たりし一人の老いたる患者、他の

老いたる一人に向ひて云へらく “I have caught a glance of the outside world!” と。余は其後ろにありて思はず黯然として眼を閉ぢぬ。

此朝快活なる聲と共に Lily 其家より出で來りぬ。相遇はざりし事幾日ぞ。亂潮胸に狂へるを覺えて余は覺えず聲を放たんとしぬ (From “Maidenhood” by H. W. Longfellow)略す)。

されども今は余 自らを冷かならしめんとす。余は心の中に囁きて曰ふ “I myself must mix with action, lest I wither by despair.” 然り、働くの外なし。汝の涙を汗に代へよ。

此日午後より休暇を得たり。余は大井君が來遊せんことを慮り、室に歸りて暫く休憩したる後院庭に出でしに、彼と原君との來るに遇ひぬ。彼等を案内して庭内を見せ後芝生に坐して語る。夕刻三人共に汽車にて費府に出で彼等の下宿に到りて憩ふ。余は或は彼等と同情の人たり得じ。彼等の condition に應ずる事は余には不可能なるべし。原君は現世に生きつゝあり。大井君は論議に生きつゝあり。されば余とは其住む所を異にせり。

九月七日。水曜日。晴。さして變れる事もなし。遼東の戰は我が軍の勝利りなりぬ。露は奉天府に向つて退却を續けつゝあり。

此日兄より日本の或新聞に飜譯せられて現はれたる Tolstoy の日露戰爭觀を送り來る。彼の好意を謝しつゝ椅子によりつつ熱讀して、今更に深き impression に打たれぬ。余は眞に基督教信者として單純明白なる立場に立ちつゝありや。余、世の神學と功利主義とに迷はされつゝあらざるや。常に凡てに勝りて神意を奉ぜん事を勉めつゝありや。余は Tolstoy の文を讀む毎に、眞理此中にありと思はざる事なし。而して自らはこれに從つて是が實行者たる事能はず。Reason を發してこれを實行に附する能はざる苦痛は甚だしきかな。

此日大井、Arthur 及び三好の諸氏より手紙を受く。三好はマニラの人となりしとぞ。何の業を彼所に得たりしか。

九月八日。木曜日。晴。此數日美しき秋の天氣打續きぬ。晴れたる秋の日ばかり心ゆくものはあらじ。藤村が紀行の一節に

秋をめでゝ、春のあわたゞしきには似ず靜かに澄みて心すが〳〵しと樣に記せるは、余が心を得たり。一年が間に經來りぬる事や思ひやを靜かに回想して、微笑まんにも泣かんにもふさひたるは秋なり。物の亂れたるが整へらる可き時なり。細事をなすを厭ふ少女だに夜長の靜かなる頃を針箱に亂れたる糸ほどき分けんとの心萠す可し。余も亦寂寥の中に立ちて心を觀ずれば、萬縷の想一道直々たる道となりて、美醜明らさまなる宛ら明鏡の前に立つが如し。秋の淋しさは是あるが故なり。

此日も患者と共に庭に出づ。Fox の自傳を讀む。又兄及び大井君に手紙を書く。

午後も亦芝生に出づ。此頃眠り足らざるが故か睡氣催して多く讀書する事能はず。恥づ可きかな不適の子。

夜 "Mental Diseases" を讀む。

此夕 Lily 余にうれしき笑を與へぬ。彼女の笑ひは余の涙を誘ふ。されども彼女は厭はしき所あり。余は彼女が今にして女の vanity より救はれん事を祈る。夜散歩す。夢多し。

九月十一日。日曜日、晴。此日朝 off を得たり。先日 Mr. Hall の所に語りし時、彼は今日余を Frankford Meeting-house に伴ふ可しと約したり。余此約束を大なる約束の如く覺えて早起しぬ。九時半頃其家に到りて呼鈴を引くに、輕く柔き靴音聞えて雪白を裝ひたる Lily 余を迎へぬ。夢の鄕に入りぬる心地となりて客間に彼女と無邪氣なる事共語る。馬車には余彼女と相並べり。肩の相摩するに怪しき戰きを知る。Goethe が Werther の一節を思ひ出でて——。Meeting には一人の祈るもの語るものなかりき。されども余にはそは最も力ある集りなりし。余は約一時間枯禪の人の如く默して俯首しぬ。主は余に力を賜ひぬ。余の心は確かに力を感ぜり。余の爲しつゝある所はよしとの conviction を得たり。余は力を得たり。然り、余は活きつゝある人の如く活く可し。主の力をして余の凡てを支配せしむ可し。嗚呼余知る、余が余自身に賴みし時は凡て失敗なりしを。さらば何故に、何故に神の人たらざりしや。神の人とは神と人とに事ふる人を云ふにあらず。神に事ふる人なり。

Meeting-house にて Brinton の親戚なる人に遇ふ。可憐なる少女を連れたり。余に中食を共にせん事をすゝめたれども、そ

を辭しぬ。二三の紳士貴女余に來りて溫き greeting を與へ吳るゝに遇ひぬ。異鄕の人に向ひて一杯の冷水を惠む人は讃む可きかな。余は心の奧底に多大の慰藉を得ぬ。

午後より患者と共に芝生に出づ。Fox の自傳の中より强き語を得たり。彼が friends に宛てたる書翰の一節なり。

"Be patterns, be examples in all countries, places, islands, nations, wherever you come, that your life and conduct may preach among all sorts of people and to them."

此夜讀書せずして早寢す。

九月十二日。月曜日。晴、夜に入りて雨。朝例の如く患者と共に芝生に出づ。Fox の傳を讀む。感ずる所多し。壬生馬より端書來る。隆三及び他の一人と共に富士に登りしとぞ。彼の詩囊は重きを加へしなる可し。

此夜九時 Mr. Elkinton が Hall 氏方に來るとの報知を得て、九時より彼所に到れり。彼は Mrs. Nitobe の書、內村氏の新渡戶夫人に送れる書など持ち來りて我等に讀み聞かせたり。故國の事情思ひやられて暗涙屢〻胸に逼る。新渡戶夫人の云ふ所は、普通の忠實なる基督敎信徒の云ふ所なれども、最早余には强く響かず。Elkinton 氏の云ふところも余の既に知れるところなり。嗚呼而して余は尙余の明かに知れるところを實行する能はず。是れ余が棘なり、痛みなり。余は基督信徒と呼ばるゝにふさはしからず。これを如何にすべきや。此夜十一時、諸氏と別れて、獨り余が房に歸れば、御手痛く余を打ち給ひて、余は眠る能はずなりぬ。幾度か起き上りて祈りたれども、平安は歸らず。窓外に雨降りたり。涙と祈とにて半夜を明かす。

余が重荷は大なり。基督それを分ち給ふにあらざれば、余は其重きに死せん。主よ、心弱きものに祈りを敎へ給へ。

"Woe is me, for I am undone!"—Isaiah.

九月十三日。火曜日。曇、雨。Frank と云へるは Roberts に次ぎて此院の attendant となれるものなり。彼の年は二十二なりと云ふ。神經質らしき瘦せたる靑年にして俳優たらん事は其唯一の希望なりと云へり。彼は二週間程前に來りぬ。彼の

秋をめでゝ、春のあわたゞしきには似ず靜かに澄みて心すが〳〵しと樣に記せるは、余が心を得たり。一年が間に經來りぬる事や思ひやを靜かに回想して、微笑まんにも泣かんにもふさひたるは秋なり。物の亂れたるが整へらる可き時なり。細事をなすを厭ふ少女だに夜長の靜かなる頃を針箱に亂れたる糸ほどき分けんとの心萌す可し。余も亦寂寥の中に立ちて心を觀ずれば、萬縷の想一道直々たる道となりて、美醜明らさまなる宛ら明鏡の前に立つが如し。秋の淋しさは是あるが故なり。

此日も患者と共に庭に出づ。Fox の自傳を讀む。又兄及び大井君に手紙を書く。

午後も亦芝生に出づ。此頃眠り足らざるが故か睡氣催して多く讀書する事能はず。恥づ可きかな不適の子。

夜 "Mental Diseases" を讀む。

此夕 Lily 余にうれしき笑を與へぬ。彼女の笑ひは余の涙を誘ふ。されども彼女は厭はしき所あり。余は彼女が今にして女の vanity より救はれん事を祈る。夜散歩す。夢多し。

九月十一日。 日曜日、晴。此日朝 off を得たり。先日 Mr. Hall の所に語りし時、彼は今日余を Frankford Meeting-house に伴ふ可しと約したり。余此約束を大なる約束の如く覺えて早起しぬ。九時半頃其家に到りて呼鈴を引くに、輕く柔き靴音聞えて雪白を裝ひたる Lily 余を迎へぬ。夢の鄕に入りぬる心地となりて客間に彼女と無邪氣なる事共語る。馬車には余彼女と相並べり。肩の相摩するに怪しき戰きを知る。Goethe が Werther の一節を思ひ出でて——。Meeting には一人の祈るもの語るものなかりき。されども余にはそは最も力ある集りなりし。余は約一時間枯禪の人の如く默して俯首しぬ。主は余に力を賜ひぬ。余の心は確かに力を感ぜり。余の爲しつゝある所はよしとの conviction を得たり。余は力を得たり。然り、余は活きつゝある人の如く活く可し。主の力をして余の凡てを支配せしむ可し。嗚呼余知る、余が余自身に賴みし時は凡て失敗なりしを。さらば何故に、何故に神の人たらざりしや。神の人とは神と人とに事ふる人を云ふにあらず。神に事ふる人なり。

Meeting-house にて Brinton の親戚たる人に遇ふ。可憐なる少女を連れたり。余に中食を共にせん事をすゝめたれども、そ

を辭しぬ。二三の紳士貴女余に來りて温き greeting を與へ呉るゝに遇ひぬ。異郷の人に向ひて一杯の冷水を惠む人は讃む可きかな。余は心の奥底に多大の慰藉を得ぬ。

午後より患者と共に芝生に出づ。Fox の自傳の中より强き語を得たり。彼が friends に宛てたる書翰の一節なり。

"Be patterns, be examples in all countries, places, islands, nations, wherever you come, that your life and conduct may preach among all sorts of people and to them."

此夜讀書せずして早寢す。

九月十二日。月曜日。晴、夜に入りて雨。朝例の如く患者と共に芝生に出づ。Fox の傳を讀む。感ずる所多し。壬生馬より端書來る。隆三及び他の一人と共に富士に登りしとぞ。彼の詩嚢は重きを加へしなる可し。

此夜九時 Mr. Elkinton が Hall 氏方に來るとの報知を得て、九時より彼所に到れり。彼は Mrs. Nitobe の書、内村氏の新渡戸夫人に送れる書など持ち來りて我等に讀み聞かせたり。故國の事情思ひやられて暗涙屢ゝ胸に溢る。新渡戸夫人の云ふ所は、普通の忠實なる基督教信徒の云ふ所なれども、最早余には强く響かず。Elkinton 氏の云ふところも余の既に知れるところなり。嗚呼而して余は尙余の明かに知れるところを實行する能はず。是れ余が棘なり、痛みなり。余は基督信徒と呼ばるゝにふさはしからず。これを如何にすべきや。此夜十一時、諸氏と別れて、獨り余が房に歸れば、御手痛く余を打ち給ひて、余は眠る能はずなりぬ。幾度か起き上りて祈りたれども、平安は歸らず。窓外に雨降りたり。淚と祈とにて半夜を明かす。

余が重荷は大なり。基督それを分ち給ふにあらざれば、余は其重きに死せん。主よ、心弱きものに祈りを敎へ給へ。

"Woe is me, for I am undone!"—Isaiah.

九月十三日。火曜日。曇、雨。Frank と云へるは Roberts に次ぎて此院の attendant となれるものなり。彼の年は二十二なりと云ふ。神經質らしき瘦せたる靑年にして俳優たらん事は其唯一の希望なりと云へり。彼は二週間程前に來りぬ。彼の

無邪氣にして勤勉なるは余の同情を惹きぬ。余は能ふ限り彼に便宜を與へたれば、彼も亦余に最も親しかりき。彼の父は彼の二歳　時病歿し、彼の母は病床に、彼の姉は精神病院にあり。彼は憐む可き境遇にあるなり。而して其母は彼を此處に來らしむる事を欲せず。彼も亦此處の仕事に堪へ得ざるを思ひ、今朝突然此院を去りぬ。玆を去らんとも暇あらば手紙を賜へなど懇ろに余に乞ひて彼は出で行きぬ。余は何となう彼の前途を危ぶむを禁ずる事能はざりき。

　余は彼に代りて今夜より night duty をなす事となりしかば、晝食の後は室に歸る。眠りを取りて今の中に安息せざる可からずと思へば思ふ程眠り難くして徒らに邪念のみ心に浮ぶ。余の心は自ら量り難き迄に物狂ほしく矛盾に滿ちたり。さなり余の心は矛盾に滿ちたり。時には餘りの甚しさに呆然として噴笑するを禁ずる能はざる事あり。

　夕餉の後は雨となりぬ。暫く散歩して夜直の椅子に就く。去る日 Mr. Hall を訪へる時、氏は余に貸すに "Memoirs of the Life and Gospel Labors of Stephen Grellet" Philadelphia (Friend's Book-store, 304 Arch St.,) てふ書を以てしぬ。余は尙讀む可き他の書を有したりしかば、其儘にして今日まで讀まざりしが、今夜孤燈の下靜かなる夜を籠めて熟讀し、余は殆んど余自身の心靈的告白を讀むの思に堪へざりき。余が此數日の間筆に云はしめんとして云はしめ能はざりし思想を、彼は最も明白に余に示せり。其二三を摘記せんか(略す)。

　是等は凡て余の心深く味へる所なり。余は數日前來の余の日記にかく記し得たらん事を希へりしなり。余は惡をなさん事を懼れたりき。しかも此苦痛は今の余が善をなさゞらん事を懼るゝの苦痛よりは痛く輕し。余の心は此事あるが爲めに悲む。善を爲すは余の好む所、而して平安の來るべき唯一の道なるを余は明かに知る。而して余はそを行はず。余、余が心を以て矛盾に滿ちたりと云へるは宜ならずや。されども唯一事、神は余に唯一事を授け給ひぬ。そは如何なる事ありとも絕望せざらんとの信仰是れなり。さなり、永遠を信ぜしめられたるものには、絕望は忘らる可きなり。絕望は盡滅を意味す。永遠は實在を意味す。實在の前には盡滅は全く無意義なり。此畏懼す可き永遠の前に余百度絕望するとも、そは全く無益なり。そは百度絕望てふもの〻否定をなすに過ぎざればなり。

されば余は凡ての障碍と凡ての困難と凡ての試練とに堪へざる可からず。好し、余は永遠の表に立てり、余は永遠に築かん事を試む可し。來れ蹉跌、來れ毒杯、余は今は小にして弱く、脆くして暗けれども、永遠は余が導者余が鞭撻なり。風に逐はれて起る大濤小波、一粒の石塊を思ふが儘に弄び得可し。しかも風止まば波は無からん。風止むとも其處に一粒の石塊は殘れり。

九月十四日。水曜日。雨。蕭々たる雨に夜は白みぬ。night man が爲し終る可き朝の仕事をなし終へて室に歸る。痛く疲れたり。床に入れば同じく眠る事能はず。樣々の事を思ふ。此院を去らんも數日の間に迫りぬを思へば怪しき物狂ほしさを覺ゆ。

午後より雨の中を散步す。

夜、思はざるに Arthur 院に訪ひ來る（雨を冒して）。手を秉りて歡極まる。彼は實に美しき心持てる若者なり。余を再び其家庭に伴はんが爲めに來れりと云ふ。これ余が望みし所なり。余は彼を伴はん事を乞へり。彼は今宵余に告ぐるに、彼の長姉は約十年前狂氣となり遂に自殺して死せるものなる事を云へり。余は初めてこれを知れり。而も余は敢て驚かざりき。彼の家庭にはかくの如き感情の空氣滿てり。余が彼處を愛するはこれが故なり。强き感情は彼家を支配する勢なり。

夜九時より例の如く夜直の椅子に就く。兄に書を書く。此夜約二時異常なる暴風襲ひ來りぬ。激雷怒雨旋飆天と地とを撼かす。快哉の思禁ずる能はず。

九月十五日。木曜日。快晴。曉の至ると共に雨漸く止みて、朝の空にちぎれたる雲吹き殘されたる風のさすらへるものから嵐やみし秋の日の快さ涙誘ふ迄に身と心とに逼る。獨り庭の彼方此方飽く事なくさまよひたり。雨に洗はれたる砂の、白く一帶の布敷きたる如く地の凹みに積まれたる。枯れたる將た萎みたる枝や木の葉の算を亂して院庭に落ちたるが冷かなる軟風に輕く乾きたる聲を爲せる。風すさみし方に靡ける草の根に、寂寞の限りを盡して靜かに蟲の聲する。森に入れば急霰の如く凝霜の散る。花園に出づれば Lily の爲めに夜每に摘みし百合の痛ましくも重なり倒れたる、いづれか秋の哀れなら

ざる。あはれ余が茲を去る可き時は目前に逼りぬ。憤ろしき事、謝す可き事、悲しき事、嬉しき事の澤なりしは此院なりしかな。余が日毎に到りし芝生の彼方なる小さき森に分け入りて、ブナの老木に T. A. '04 Japan と我が名を彫りつけぬ。をかしきは人の心なり。凡ては逝きて留る事なき此世に生を得ながら、何物か記憶を其所に殘さんと計るなり。余が名を彫りし古木はやがて其地畑となされんが爲めに切り倒さる可し。若しくは一夜の風雨に脆く碎く可し。若しくは雷火瞬轉の間にそを割り裂きぬ可し。余よくこれを知る。而して尙余が名を其處に彫らんとするを禁ずる能はざるなり。奈翁の爲せる所、シーザーの爲せる所、唯斯くの如きのみ。彼等は野心の爲めに動かされて萬人の骨を碎けりと人は云ふ、而も其所謂野心なるものは何ぞや。野心なるものゝ下底に潛めるものは何ぞや。不朽の追慕なり。永遠の告白なり。彼等も亦憐む可きにあらずや。彼等の持てる所のものは我等の持てる所のものなり。彼等の熱求せし所のものは、我等の熱求する所のものなり。彼等も亦憐む可きにあらずや。

朝余が荷を片附けて此處を去る可き用意をなす。午後は Mr. Hall より借り來りし Grellet の傳を急讀す。夕食の後は獨り余が行き慣れて涙と親しみし彼の森蔭に分け入りぬ。蔭に入れば夜毎に茲になされたる限りなき感慨の一つ〳〵に活きて余を襲ふ計り重き想の先づ余が胸を深く閉ぢぬ。例の summer house に登りし頃は日既に沒して月白う稍高き東の空にありき。神は直ちに祈を教へ給ひぬ。余は神に感謝す。余は勝利者の祈をなし得たり。余は今宵余を永く苦しめたる凡ての上に熱き祝福を祈り得たり。嗚呼、十字架につけられ給ひし主よ、爾の力は如何に大なるかな。爾は兄弟を呪ふに慣れたる人の子の唇にも仇を祝す可き歌を嘖き得給ふなり。

夜七時半 Mr. Hall を訪ふ。今日迄に彼の家族が余に與へし大なる慰藉を謝せんとてなり。他にある可かりし Mr. Hall も Lily も余を見んが爲めに歸り來りぬ。九時少し前迄種々の事を語る。余は彼等の深情に酬いん爲めに Dante の "Divine Comedy" を送りぬ。別るゝ時は互に溫き笑を以て。されども余は自ら冷し果てたる心をもて。「事終れり」と十字架につけられたる余が情は叫びて眼を閉ぢぬ。此夜例の如く夜直す。

九月十六日。金曜日。快晴。理想的とも云はまほしき秋の日なりき。朝八時十九分、此院の誰や彼やに暇乞ひして院を出づ。ふりかへり見れば一樹一草の上にも盡きせぬ回想あり。

費府に著すれば Arthur ありて余を迎へ、共に City Hall に登臨し、又 natural science の Museum を見て二時五十分の汽車に乘り Avondale に到る。停車場には Jim, Fanny と Baby と余等を迎へつゝありき。余の心はファニーのそれと相合しぬ。彼女はかはゆし。彼女の恨多き眼に見入らるれば、天使の前に立ちし心地して余の罪深き眼は自ら恥ぢに垂るゝなり。Jim と Baby とは馬車にて去り、殘れる三人は歩みぬ。兄と妹とは親しく物語りて余に先んじ、余は獨り彼等に續きぬ。始めて此處に來りし時は親しく彼女の手を取りて心置きなく面白き事語り合ひしが、今は彼女年長けてそを恥づ可くなりぬ。彼女は人の前にては余に口を開かんとだにせず。余の言ひ出づる言葉は最も單一なる返事にて切斷せらるゝなり。余は此の如きに遇ふ毎に人は如何なれば老いざる可からざるやを恨む。

家に着けば凡て涙(女子は)もて余を迎へ吳れぬ。余が refuge よ。なつかしき所よ。

此夜牧場の彼方に到り獨り草の上に坐して、兼ねて期したる如く思ふ儘に泣きぬ。手巾の濡れて絞る計りとなりし時、心はやゝすが〳〵しきを覺えつ。エホバを讚美して家に歸りぬ。此夜の眠りは宛ら天國のそれの如かりき。

九月十七日。土曜日。晴。裏の庭には林檎、花の如く實りぬ。今日ファニーは朝より乘馬して多く家にあらず。余の心は空しかりき。晝の頃人なき所に、彼女と余と唯二人(彼女はたくましき白馬の上より余はらちによりつゝ)相面しぬ。彼女は其恨多き眼に沁み入る如く余を眺めぬ。余も亦然かしぬ。二人の眼には自ら涙溢れ言ひ合せたる如くに首を垂れぬ。我等ならで何人か此悲みの深さを味ひ得んや。嗚呼、彼女は余を知る。余は彼女を知る。此一瞬の思忘る可けんや。永遠は此瞬間に縮められたり。

彼方此方獨り見歩くに、變遷少き此邊僻の農家にも自然の變じ行くが如き徐々たる變化(寧ろ進歩)は見られ得可し。入口にはさゝやかなる門たてられぬ。敷石は pavement となりぬ。余は此小さき sign of prosperity を心よりの微笑もて祝ひ喜ば

さる能はざりき。

九月十八日。日曜日。晴。實に美はしき安息日なりき。朝は Arthur と大工小屋にて種々なる事語る。午後は獨り林檎園の中に分け入りて、黄ばみがてなる草を敷きて默考に耽る事凡そ二時間。靜かなる秋の日を靜かに物思ふはこよなくふさはしきものなり。

余は思ふ、世に Fanny の如く天眞の子を見ず。基督が神を愛し給ひし熱心は、彼女が其父を愛するの熱心に、見らる可し。彼女の人の愛に答ふる其情は火の如く熱く針の如く鋭し。余彼女を愛したれば彼女も亦余を愛しぬ。二人相向へば涙は自ら二人の眼に浮びて我等の心は一となる。彼女と余とは不可思議なる緣の絲に結ばれたる魂なる可し。彼女の何處にも美はしと指して云はん所はなし。余は此の如き面と姿とを何處の陋巷にも求め出づるを得可し。されども彼女の全身は、余にとりては唯一の charm なり。彼女の足音だに余を戰かしむ、彼女も人の子なれば幾多の缺點に滿てるなる可し。されども余にとりては彼女は純潔其者なり。彼女の前に立つは天使の前に立つなり。彼女は米人が金を知れるが如く金を知らず、虛辭を知れるが如く虛辭を知らず。天才の如き直覺と嬰兒の如き單純とを有す。

嗚呼、さはれ時は凡てを埋め盡す可し。彼女が稍長けて其足一度此自然の搖籃を出でん時、夢は vanity と交換せらる可し。さはれ、これ抗する可からざる人の子の運命なり。世よ、汝の力を盡して彼女を弄せよ。さはれ天國は彼女を拒まざる可し。彼女は美しく造られたれば、美くしく受け入れらる可し。余は墓の彼方を思ふ。余は其處に彼女を抱き接吻し心の限りを打ち明けなん。余は人の前にかくなすこと能はず。されども神の前にかくなす事を得。神は余等二人の心を憐み給ふ可し。二人の相愛するは神の御業の美しきを讚ふるの歌なればなり。

"And that in heaven thou hopest again to share
In sight of her, and with thine arms to fold:
Hope then; nor of this comfort quit thy hold." —Guido Cavalcanti—

誠に愛を理解す可く此世は餘りに汚穢の末遠く走り去りたり。余等の愛は口を噤まざる可からず。愛の語る可き時は遙かなる未來なり。今の時は呪ひ、叫び、虛僞、詈り、肉慾の愛吼ゆるの時なり。余等を彼等の飽くなき顎に渡すべけんや。深く包み固く藏め胸の最も奧まりたる所に此尊き珠をかき抱き、余は默して世と戰ふの人とならばや。愛の嫉みなく相酬はる可き世界を造る一助とならんが爲めに余は默して世と戰ふの人とならばや。主よ、力を與へ給へ。

此夜此閑居の靜寂を破りて五人ばかりの男女の客訪れ來りぬ。彼等は皆打開きたる心の人々にて、語るに肩の凝るを覺えざりき。此家の主人主婦音樂を奏づ。Fanny 晩遲くまで起きてありき。今宵こそ彼女を見る可き最後と思ふに、余は彼女の面を仰ぐに堪へず (The Last Rose of Summer. 略す)。

九月十九日。月曜日。晴。涼冷水の如し。今日は余が此家を去る可き日。朝學校に出で行きし Fanny を送り Baby を送る。

十時半此家を去る。 Arthur は余の旅嚢に數個の梨を投じぬ。主父例の如く余が爲めに馬車を停車場に驅る。數分の間になつかしき凡ては余の眼より消えぬ。さらばよ、余が隱れ家、余が愛の汚れなく眠る處。

汽車は余を費府に運び去りぬ。余は其後の平凡なる生活を此日記に書くの勇氣なし。唯黃塵萬丈の中暇乞ひや買物や要なき事に時を消したりとばかりにて足らん。

費府に來りて大學の寄宿舍に舜三君に遇ふ。又 Doré の illustrate せし Dante の "Purgatory and Paradise" を買ふ。此二事稍記す可し。

Avondale にありし間、牧場に下りて小川の畫を描く。費府に歸りてより其裏に書すらく、

「明治三十七年九月十六日フランクフォルド精神病院を辭するの日再びアボンデールなる田園の人となる。これ余が彼處を訪るゝ最後なる可し。十七日 Margalet 及び其友と牧場を横切り此小川に到り、晴れて暖かなる秋の靜けさを畫く。余の心の中に沁々と "I was a stranger ; and ye took me in." と云へる聖句の一を思ひ浮べたる日なり。人の心の溫かさは總ての溫かさの冠なり。衾のあたゝかきを望まんものは富に往け。歡呼のあたゝかきを望まんものは名に往け。驕樂のあ

たゝかきを望まんものは王の宮に往け。余は人の心の溫かさを望む。されば余は竊やかに余の貧しく弱き心に往かなん。嗚呼言ふ『心の貧しきものは幸なり』と。余豈悔いんや、余豈呟やくべけんや。余は弱し。されども世の何物よりも弱からざるなり。」

九月二十六日。月曜日、晴。此夜七時五十五分 Broad St. Station 發の列車に乘じて費府を辭しぬ。

昨夜此地の日本人數人相會して離別す。大藤君亦在り。彼の健康は尙甚だ痛心す可きものなるが如し。色黑く肥えたれども、聲は枯れて元氣も常の如くにはあらず、痛ましきは若くして不治の病に罹れる人の上なり。夜晩くまで唯平凡なる事語り合ひて余の心は餓ゑぬ。愚なるかな余、余は何故に一層自己に忠實なる能はざるや。屢〻自己を枉げて却つて他の品性をも害はんとす。今朝余は昨夜の余を思ひ回らして悲しくなりぬ。何故に余は人に事へんとするや。凡そ此世に活きて愚の極をなしつゝある人は、人に事へつゝある人なり。

大井、原の兩君余を停車場に送り呉れぬ。余は費府に何等の記念をも留めざりき。最も早く忘れらる可き所は費府なり。戰爭の事など思へば寢臺車取らん事も覺えずして普通車に乘る。凡て異邦の人の同乘せる樣面白し。日本人なる余の外に綏服着けたる支那人あり。色黑き黑人あり。伊太利人あり。猶太人あり。余は最も面白しと思ひぬ。稍十時半ならんと思ひし頃一人の若き白人の處女入り來りて余の席に列べる一席を占めたり。略帽の徽章とカバンに挿みたる校旗によりて、其 college girl なる事を知る可し。若き女の身にして唯獨りかくの如き異鄕人のみの間に眠るを敢てするを思ひて、そを憐れみぬ。

十一時半頃汽車は汽船に搭載せられて Hudson River の彼岸に渡る。列車を出でて船舷に立ちて回顧す。月は正に中天にあり。秋風水を吹き金氣水の如し。稍霞みて朧ろなる河の兩岸には紐育萬街の燈火猶煌々として滿天の星宿と相映發す。彼の名だゝる Brooklyn Bridge を過ぐる頃思ひぬ、「偉大なる人爲の跡も無窮なる天造の績も、今は共に夜の裳の下にあり。夜。夜とは如何に思ひ窮め難きものなるよ。星の相謠ふ聲聞ゆと云へるも今の時なり。肉慾の惡鬼罪の床に相抱きつゝあるも今

の時なり。晝には天の靈と地の肉と上下相近づきて相亂れ相混ず可し。夜には天の靈遠く天に上り、地の肉低く地に下り、其差億萬里、天は永遠の平安に眠り、地は瞬轉の惡慾に覺む。夜にして天を仰ぐものは祝福さる可きかな」と。

夜ほの〲と白み初むる頃、我等の列車は Rhode Island を横切りて Connecticutt の丘陵多き若き林の間を過ぎつゝありき。うと〱と夢多き眠より醒めて窓外を望めば、月依稀として稍低く西の天にあり。東の窓には既に日見ゆるなる可し。余が窓より眺めらるゝ空は、透藍、黄を湛へて春淺き草野の雨に見るが如き柔き軟かき綠となり、片々鱗の如き白雲は濁りなき薄き桃色染めて、半天被衣着たる如き朧ろの光に榮えたり。地には日の目猶裕かならねば、薄暗萬象を籠めて物の影は藍色勝ちたる紫なり。過ぎ行く林の若き梢、厚き下草、七分は秋と接吻しぬ。宛ら戀の甘き酒に醉へるが如く、雄々しき神の美しき姿見るだに恥らへる如く、梢より始めて妙なる紅葉の色得も云ひ難し。殊に美はしきは樺の若木なり。白幹纖梢なよやかなる事處女の如き木振りなるが、心臟の形せる細かき葉の一つ〱に異なる紅さしたる、將た黄を染めたるに露と光との裝ひして秋の腕に笑みつゝ居倚りたる。余は秋を好みて、紅葉の頃には親しめる此所彼所の差なく年頃さまよひたれども、簾前（北海道）のそれを除きては未だ此の如き美しさを見ざりき。此の如き秋色にはぐゝまれしは新島先生なりしかなど思ふ。此朝見つる此色此姿、余は恐らくは終生忘るゝ事能はざる可し。

花の色の移らふに比して、悲しみたる少女の美しさの移らふ短かさにも增して短きは、自然の美しき瞬轉なり。自然美の極とは容易に見るを許されざる王の宮なり。人は多く思ふ、「自然は眼を放つ何處にも展べられたり、自然を見んとする時眼を開けば則ち見るを得べし。五十星霜長しとは云ふ可からねども自然を見盡さんにはなほりて尙餘りあり」と。されども自然はつゝましき人慣れぬ深窓の少女なり。彼女の被は深く、彼女の胸はかき合はされたり。たやすく語らず、たやすく笑まず、屢々見る人の眼に背きて首垂れ勝ちに後姿のみを示すなり。彼女が其帶を解き裳を放ち赤裸々にして面に天使の笑みを湛ふるが如きは、誠に罕に見る所なり。自然を戀する事深き人には此の如き瞬時に遇へるの喜び如何ばかりぞや。しかも此の如き歡びは洵に瞬時なり。

余が今朝見たりし自然の姿は、殆んど余が衷なる人をして戦き畏れしむる計り美しかりしが、つれ〲と見る間もあらず西北に濁れる雲起り、間然す可からざる調和は先づ破れて、自然は平凡なる自然に歸り去りぬ。然り平凡なる自然も世の凡ての物よりは美しかり。されども自然が——笑まへるなるか將た泣けるなるか——色と形と聲とに於て破る可からざる調和に入りし瞬間は、美を過ぎて崇、崇を過ぎて神、余は天國其物を眼前にせるを思はずんばあらず。かゝる瞬間に遇ふ事多き人よ、余は汝を嫉む。汝は神の寵兒なり。

曉方、昨夜買ひ置きし "Evening Bulletin" をひらき讀み一欄に來りて忽ち眼に留まりしは "Physician hanged himself" と云へる題目なり。はと思ふ暇もなく忽ち余に視られしは Dr. J. B. Scott, Friend's Asylum 等の文字なり。全文下の如し。

"Dr. J. B. Scott, fortyeight years old, of Gettysburg, committed suicide, by hanging himself with a handkerchief in the Friend's Asylum, at Frankford.

He was received at the institution about six weeks ago, to be treated for melancholia.

During the absence of his nurse he ended his life," etc. etc.

余は思はず隣座の女學生を驚かす迄の大聲を發しぬ。彼は遂に縊れたるなり。

余が彼の院を去らんとする時なりき。彼は堅く余の手を握り涙に滿てる聲もて余に謂つて曰く、

「御身は實に我に優しかりき。御身の余を慰藉せんとして盡力せるは、我よくこれを知る。而して余の克く此慰藉に酬いて余の煩悶を龢へす能はざるは、余の力の及ぶ所にあらざればなり。神既に業に余を永遠の刑罰に命じ給ひぬ。如何なる力も亦よく余を再び昔の余たらしむる能はず。一度基督信徒となりしものに、罪を犯すに增して世に恐る可きものある事なし。余は御身の基督信徒なるを知るが故に特に云ふ。忘れても罪を犯すなかれ。人には親切なれ。人に教ふる機會あらば互に相愛す可きを教へよ。余が離別に臨み御身に遺すの語唯これのみ。」

と黯然として其室に入り去りぬ。

主よ、爾は知りませり、余は如何に彼の今一度囘復せん事を祈りしかを。如何に彼に忠實ならん事を勉めたりしかを。而して主よ、爾は彼を此世より奪ひ去り給ひぬ。彼の爲めには此上なき幸福なりき。余が爲めには……余が爲めにも亦。

彼は余に偉大なる敎訓を遺しぬ。而して彼の死は彼の敎訓を益〻偉大ならしめぬ。

余は此一大事件を忘れじ。余はこを重ねて思ひめぐらす可し。嗚呼余が毎日毎夜眞心をもていたはりし一人は去りぬ。何を以て彼を弔ふ可きや。彼の遺族は如何なる悲痛の淵に陷れるや。彼が猶世にありし時に、全身戰きつゝ、急に椅子より立ち上り、

"Oh, my children, how could I leave them without bread! Poor little ones and their mother! Oh, dreadful, oh horrible! God forsakes me; I cannot make them happy any more. No hope at all. To think this, Takeo, is the eternal punishment."

と叫びしは余が耳慣れて聞ける所なり。余は多く此事を書き續くるの勇氣なし。

ボストン府に着せるは稍〻七時過なりしなる可し。直ちに Summer St. なる西浦一と云へる大井君の友を訪ふ。

九月二十七日。火曜日。晴。かくて此にて Cambridge に到る可き道筋を聞きたゞし、Park より car にて Cambridge に到り、Ware Hall なる八木君を訪ふ。彼は慶應義塾の卒業生なりと云ふ。怜悧らしき顏美しき青年なり。此夜より 12 Kirkland Place なる Miss Palmer 方に下宿する事となる。此には Bonbright, Buyers, Hilles あり。

Cambridge は氣に入りたり。何處とて取り分けてうれしき處はなけれども、一帶の atmosphere 何となく人に學問を勸むる樣なり。校舍は年ふりて規模小なり。芝生に楡(にれ)の黃葉せるが美しき限りなり。余が居る宿の四邊も亦紅葉、落葉の錦を布けるが如し。袋道なれば人の往來甚だ稀に、電車のいまはしき音も聞えず。夜は隣室にきしる時計の音手に取る樣に聞ゆ可し。室は玄關の左なる parlor なり。廣くして先づ淸潔なれども光の入る事尠く、壁に懸けたる如何はしき畫の數々うるさし。一つ "Mater Dororosa" の美しき銅板のみは、買ひ求め度き程のものなり。

九月二十八日。水曜日。晴。朝 Dr. Andrew を訪ひたれども遇ふ能はず。町にて買物などし、贊府の知れる人々の所に手紙を書く。午後宮部先生の紹介し呉れられし Dr. Goodale を訪ふ。幸に家にありて余を引見し給ひぬ。年老いたれども童顔なる白髮白髯の人、懇ろに余を其客間に通じて暫く快話せらる。打見たる所容貌、體格、話振り、さては人に接する態度まで宮部先生を其儘なり。情誼厚き師弟はかくも互に相似るものか。余は不圖宮部先生の事何かとなく思ひ起して歸路涙を浮べぬ。先生は實によき師なり。彼の人の札幌にあるは札幌に力のある事なり。

家に歸ればトランク着しつゝあり。其取り片附け方に日は暮れぬ。

九月二十九日。木曜日。晴。今日より學課は開始せらる可きなり。朝事務所に到りて入學の手續をなす。余の取る可き課目は下の如し。

The Expansion of Europe since 1815 : by Ass. Prof. Coolidge.

The Fine Arts of the Middle Ages and Renaissance : by Prof. C. H. Moore.

Problems of Labor : by Prof. Ripley.

History of Religion in Outline : by Prof. G. F. Moore.

何れも面白かる可しと思ふなり。

此夜同じく宮部先生の紹介を受けたる Farlow 先生を其家に訪ふ。立派なる構へなり。先生は岩見重吉の如き人なり。

Labor Problem 午後にあり。參考書を與へらる。

九月三十日。金曜日。曇。此日美術史と宗教史とあり。余は異常に興味を以てそを聞きぬ。余は到底此傾向の人なり、嗚呼、余にして若し一途に此方向を求めて走りたらんには、余は確かに頭に於ても人には讓らざりしものを。余が愚は與へられたる天職を探り誤りぬ。

十月八日。金曜日。快晴。余は再び日記を書き怠りぬ。されども余は此間に怠惰ならざりき。多くの知識は小時間に余の

腦裏に刻み込まれぬ。

朝の寒さが快く一日の晴る可きを示して夜は明けぬ。床には余の外に星野勇三あり。彼は昨日 Amahrst より來り遊べるなり。

朝美術史あり。後圖書館に到り "Cut Look" を見る。Kennan と云へる人の日本に對する觀察を讀む。彼は奇警なる觀察者なり。彼の着眼は屢〻讀者の意表に出づ。彼が向後日本に對してなす研究は興味少なからぬものなる可し。

午後星野はボストン府に出づ。余は宗教史の講義を聞く。支那の宗教と云へる topic の中に孔子の教を擧げたり。卓說はなし。それより Cambridge Library に到り此間持ち歸りたる鉛筆を返す。此 library にて此間 "Folk's Lore" の九月號なる Gorky の小品を見出しぬ。讀みて強く打たれたり。余はそを譯し試みん事を思ふ。

此夜九時より History Club にて Prof. Lamprecht of Leipzig. の講演ある可きなれば、余はそれに出席す可し。今八時三十五分なり。黑き服を着、上等の靴を穿ち、獨逸語の演說が解ると云ふ樣な顏して行く所なり。

十月十六日。日曜日。快晴。年漸く暮れんとすと、時の短きを惜みし朱文公が歎きにはあらず。されども此錦繡の秋、旬日を剩さずして霜雰降る天地に入ると思へば、やる方なき哀別の情を心には覺ゆれ。

今朝藤岡君余を訪れぬ。二人の心直ちに動きて、此美しき小春日和に Emerson の故地を探らんと決したり。

秋に入りてより黃葉の黃なるに對して煉瓦の色特に赤なる Law School の角より電車を取る。自然に醉はんとてか、教會に列せんとてか、車は人の山を築きたり。車の外にも衣香傘影共に華やかなるを載せたる自動車、輕車の類、轍を靡して落葉の中を走る。

街樹の梢漸く疎らとなりて骨を碧空に挿し、滑かなる道には黃なる樺の落葉堆き迄に積りたり。色紅きショール肩に卷きたる老女の髮白きが、手籠かき抱きてとぼ〳〵と紫の影黃の光の間を行くあり。華かなる色のリボン、花、羽等を幅廣き帽子になよ〳〵と裝ひて短き scarf の裳輕く、十二三なる少女の手をつなぎて、歩み牝鹿よりも輕きがあり。黑に裝ひし背長

き老紳士の、手を後ろに緩やかなる歩みの氣高く眺めらるゝがあり。大學生の緋なる校帽阿彌陀に被りて戞々たる靴音高く歩み行くがあり。

家の漸く疎らになれる頃窓より窺へば、道より延びて林に入れる野の花の際立ちて緑に映えたるが先づ眼を喜ばしめ、かくて車は見る／＼秋の寵深き疎林黃原の間に入りぬ。

Lexington と云へるは聞きしにまさる小さき小市なり。三叉せる道にさしはさまれて茲も落葉深き小さき芝生の一端に、獨立の戰に始めて人の血を流さしめたる Capt. John Parker の銅像立てり、此地の彼方此方より集め積みたりと傳ふる自然石の礎の下に、年若き男二人安坐して帽子阿彌陀に煙草くゆらし居たり。Longfellow が其詩 "Paul Revere's Ride" に歌へる如く、1757 年、茲に米國獨立の第一聲、けたゝましき蹄鐵の響に擧げられたるなりき。此時七十餘人の壯丁が其尊き血を流したる跡は、漸く忘られぬ可く年往きぬ。平和は彼等の骨に華さきたり。若き男女の打連れて睦ましげに嘗て阿修羅の荒れしが如かりけん街を行く。教會に詣づるなる可し。

草苅られたる牧場には牛羊日の光を浴びて靜かに立てり。取りめぐらしたる柵には、腰掛けて、腕を寄せて數人の勞働者相語れり。こちたき色に塗り立てたる逆旅の看板にも、雜貨賣る小店の玻璃窓にも、裕かなる晝の光輝き渡れり。樹の下蔭には小兒の頰の如き林檎堆く積まれたり。Cider 釀さるゝなる可し。鐘響きぬ。鷄啼きぬ。かくて電車は稻妻の如く此小さき平和の村を閃き過ぎぬ。

鐵道は愈ゝ人なき方に走れり。道の相分るゝ所不圖窓を見れば、小さき札立てられたり。書して曰く "To Concord" と。登り降りする乘客に眸は凝らさゞりしが、今に至りて車內を見回らせば、車を代へしかと思ふばかり異れる人乘れるを見出でぬ。余が前には三人の婦人あり。こは初めより余と同乘せるものにて、互に此地の案內記繰り擴ぐるに遊觀の客たるを知る可し。余が左の方には老いたる人坐せり。鍔廣き帽子の灰色なるを目深に被りて雙手は黑く光りたる杖の上に重ねられたり。皺多き衣にも靴にも此のあたりに住む農人なるが明らさまなり。隣には若き婦人あり、頰赤くして肉豐かに十指は最も

太し。眼は羊のそれの如く柔和と空虚とを示せり。黒の上衣、鮮綠の裳、色の配合のこちたきにも其人やがて樵夫の妻たるべしと思ひぬ。最も眼を惹きたるは、余が左斜なる後ろに坐せる人なり。誠の齢は尙四十ばかりなるべけれども白髮斑々たれば老いて見ゆ可し。すら〳〵と瘦せて丈高き樣は人をして蟷螂を思ひ起さしむ。鷲の嘴の如き形せる鼻の下には薄く長き脣堅く結ばれ、髭なくして鬚のみ下脣の直下より生ひ下れり。鋭けれど鈍りて力なき眼、折々あたりを見廻して、何とはなき驕慢の態度に腕組みたり。其子に資産を讓り今は讀書に日を消して、家にありては冷酷なる後見者、家を出でゝは敬して遠ざけらるゝ博學家の一人ならずや。余は Concord の今に此の如き人ありて住めるを怪しまず。余が後ろには二人の老いたる農婦あり。黒に裝ひて黒の小さき帽子戴き、一人は林檎入れし籠、一人は雪白の衣着せたる少女を膝に据ゑたる樣、宛ら黒天鵞絨(びろうど)の上にルビーとダイヤモンドとを置きたる如し。

　Sleepy Hollow Cemetry の入口にて彼の三人の婦人は下りぬ。Irving の "Sketch Book" 記憶に上りて、故人に遇ふの心地に微笑面に上る。程もなく車は再び落葉の村に入りぬ。Concord は玆なりと云ふ。

　車の停れる處に廣場あり。余が來りし道、Concord Junction に連れる道、Emerson が住家に通ずる道の三叉せる所なり。煉瓦に疊まれし鋪道は古忍ばしく踏み耗らされて、米國にもかゝる處はありしか。家並大方三階なるは稀なるに、痛く低きも交りたれば、宛ら老いし人の歯なみの如し。主街の一端に立ちて彼方を見やるに、家の赤き靑き、看板の四角なる、圓らなる、參差として相交れるが、やがては秋の盃に醉ひ飽きたる街樹の黄と紅とに混じ去るなり。

　車にありし事稍一時半なりしかば日は午に近づきぬ。輕き晝食せんものと邊りを求めたれども、店は皆閉ざされたり。詮方なくて其儘に、哲人が住めりし家を訪はんと歩を其方に向けぬ。右に白く聳えたる Unitarian Church あり。尙東南に進む事數町、道の三叉せる所一簇の疎林あり、亭々として常磐の色空に流るゝ松數株、枝瘦せて葉の色黄なる雜木に交りて立てり。樹下に長方形にして何の見榮もなき些かなる木造の家見ゆ可し。白く塗られたり。通りかゝりし老女に尋ぬれば、これぞ Emerson が生き、思ひ、そして眠りし所なりと答ふ。

彼が家は今も孤立して立てり。數頃の庭、繽紛として散る落葉の錦敷きて、人の訪るゝも稀なるらし。低く圍まれたる柵の外は打開きたる隴畝なり。隴畝の彼方灌木の竝び茂れるほとりに、小さき Mill brook は流るゝなる可し。尙遠く眼を放てば、空と野と相抱きて接吻せるあたり、木立高く低く連りて赤く靑く彩られたる農家の參差として見ゆるが、四圍の色調と痛くふさひたり。Walden と云へる一路の其方に通ずるを馬車の行くならん、から〳〵と乾きたる音の長閑に寂寥を破り來る（玆にエマスンの家のスケッチ畫あり略す）。

余等は案内を乞ひて彼が殘したる書齋なりとも見るの榮を得んと靜かに戶に立てりしが、心なき下婢の一言に內には得入らざりき。玆には哲人の女ありて住めり。今は彼を此家に偲ぶ可からず。さなり、彼の墓邊こそ余等が追懷を新たにするにはよけれと踵を囘らしぬ。

かくて再び舊の路を拾ひて Sleepy Hollow Cemetry に到りぬ。岡丘のなだらかなるに所定めず過去の人眠れり。

第八巻

一九〇五年（明治三十八年）

一月一日。日曜日。晴。今朝一時半までかゝりて兄に送る可き書を認む。戰爭に關してなり。余が非國家的思想は愈々根柢を堅くし來れるが如し。それより寢に就きたれば起き出でしは八時なりき。

いと暖かに空はうら〳〵と晴れぬ。食堂よりの歸るさ多く木鼠に遇ふ。朝、家信を認め、田島君より送り來りし『聖書之研究』を讀む。先生の熱誠には敬服の外なし。小山內と云ふ人の譯せる「詩人としての保羅」一讀す可し。

午後例の如く金子君來る。其の齎せし『平民新聞』を見るに、日本政府が社會主義者を窮迫するの狀甚だし。人をして益々無責任不公平なる政府の危險を感ぜしむ。

四時より Mr. Greene 方に日本人一同招かれて行く。三つばかりの男の兒あり。可憐の極。

夜金子君と共にボストンなる社會主義者の集會に到る。廣額張口の大漢「酒賣業」に對して一場の講話をなす。云ふ所一一實驗の辭、余は同情と興味とを以て聞けり。實に種々雜多なる人集まれり。余は彼等の面貌を熟視して快に堪へざりき。彼等の或者は小兒の如き純潔の相を備へたり。而して同時に余をして痛切の思をなさしめしは、幾多の明確なる criminal type を彼等の中に見出でたる事なり。家に歸りしは十一時なる可し。少しく Moley の Emerson 評論を讀みて就寢す。

一月二日。月曜日。雨。（以下二・三日英文、編者譯）悒鬱。暖かき、不愉快なる日なり。田島君より『聖書之研究』また

送り來り、通讀す。行郎に送る繪葉書を購ふ爲め街に行く。ついで圖書館に行き、『マリア・スチュアート』の概要を知る可く、シラーの著作を借出す。明午後及び夜、シラー記念祝賀祭催され、戲曲上演、並びに講演及び『グロック』の獨唱行はるゝ筈なればなり。

午後シラーを讀みて暮す。四時より藤岡君を見舞ひて病院に到る。彼は風邪に冒されしなり。されどさほど重からず。病院を出づれば既に夕闇。雨尙止まず。溶け行く雪の釀し出す乳の如き靄、街を蔽ひ、樹木を蔽ひ、家々を蔽ひて、電燈の朧なる光のほか、蔽はれざるものとてはなかりき。公園を橫切るとき、不圖周圍の景に、我は我が怠惰なりし日に耽讀したりし、探偵小說の數節をば思ひ浮かべぬ。回想の微笑は我が唇に現はれぬ。されどそは又過ぎし日を思ふ苦がき悔恨の念とは變りたり。過ぎし日は過ぎし日なり。あゝ。

二宮孃より葉書あり。彼女は哀れなる處女。彼女心動かさるゝところあればなり。

夜、『マリア・スチュアート』を讀了。我はシラーの劇作家たる才能をば疑ふ。『盜賊』は熱情の焰に燃ゆ、されど劇的構圖なし。『オルレアンの少女』は或る技巧的成功はあれど、餘りにも統一を缺く。『マリア・スチュアート』の初め二幕は馬鹿々々しく、まさに彼は歷史を講じつゝあるなり。この部分を演ずる俳優にして、誰か觀客の間に、――否自分自身にすら、欠伸を强ひざるものあり得ようぞ。第三幕は見事。第四幕は何たる貧弱なる筋よ。第五幕は實に嚴肅、而して人の心を動かすこと大なり。されど多くの劇作家は、縱令、シラーほど强く人に迫る力なしと雖も、稀に見る効果をもてこの幕をば書き得たりしならん。講義は明日より始まる筈。少くもこゝ暫くエマーソンの研究は中止せざるべからず。

ポート・アーサーは遂に屈從せり。平和よ、平和よ。慈悲深き女神の微笑をたれ給へ。汝の王國を齎し給へ。

一月三日。火曜日。雪。天候寒冷を加へ、午後烈しき吹雪來る。

朝出校の後、シラーの『グロック』を讀みて興味深きを覺えたり。藝術家としての彼の長所短所は、實にこの敍事詩のうちに明白なり。午後金子君來り、共にシラー記念祝賀祭に出席すべくフォギー博物館に到る。講演者三名。フランク、ミュン

ステルベルグその二人なりき。午後八時よりシラーの作品の上演あり。『グロック』の歌，"Das verschleirte Bild zu Sais", "Die Kraniche des Ibykus" 及び『マリア・スチュアート』の第三幕の演出及び獨唱なり。批評の限りにあらず。

シラー。——嚴格なる道義とプラトニックな熱情との結合。彼の脚は固く地上に立ち彼の瞳はたゞひたむきに天をば凝視す。彼は人間的なるミルトン、燃ゆるアウレリュース。——彼シラーはまさに今より百年前、二度と目覺めぬ眠りに落ちしなり。偉大なる靈魂よ。疑ひと信仰とに道を失ひし、哀れなる、この迷ひし羊の尊敬の心を受け入れ給へ。汝は我が思慕の的なりき、又思慕の的ならん。汝の生涯は男らしさの卓越せる典型、汝の作品はそが反映なり。人或は汝の中に純藝術的業績を、廣き人生觀を、或はまた完全なる客觀的態度を否定するを得ん。されど、然るにせよ、然らざるにせよ、尙そは彼の尊嚴を測るに於て何の違ひをか與へんや。汝は他の領域に生くるなり。すべてに勝りて、汝は一個の人間なり。純なる、氣取らぬ、勇敢なる、而してこの上なく柔和なる人なり。誰かこれ等の德性をば、汝より引き去り得ん。これ等の德性はげに汝のものなり。如何なるものといへ、これにまさりて氣高きものはあらじ。然り、汝は氣高し。例へばいつはり多きこの世の波の喧噪の中に、深く根を下し、直立せる一つの孤獨なる磐の如く。

一月四日。水曜日。雪。朝はエ氏傳を僅かに讀みしと學校に出でし外は何事もなさざりき。午後 Butler の "The Meaning of Education" を讀む。中々に面白き觀察あり。Mr. Elkinton より手紙來りて余が氏に送りたる手紙を President Roosvelt に送りたるに、氏は大に興味を以て讀みたりと返事されたる由申し來る。余は直接に President に書かん事を思ふ。氏は其妹を見る可く日本に到る可しとなり。

夜 Brooklyn に Mr. Perry を訪ふ。新渡戸氏夫妻の友人なり。よき人々なり。余はよき人々には少しく飽きたり。此夜の寒かりし事よ。

一月五日。木曜日。快晴。寒冷。朝エ氏傳を讀みつゝありしに、金子氏來る。余の爲めに口を見出し吳れたるなり。晝食を共にして色々なる事を語る。彼の去りし後書を讀まんと試みたれども、例の憂情止め難くして眼のみ書に向ひぬ。神は顯

はざるに余を起さんとし給ふや。

此夜家より『太陽』送り來る。新渡戸氏の文あり。余は是れを讀みて涙をおとせり。札幌にありし彼の面影は余の眼には漸く薄らぎ行くを覺ゆ。余は尙彼の principle を疑ふ事をせじ。そは一人の信じたるものを失ふは、余に取りては無上の苦痛なればなり。されども余の胸は靜かなること能はず。寒氣を冒して外出し何處ともなくさまよひ歩きぬ。人は遂に其窮極に於て孤立せざる可からず。神のみに己が心を打明く可き時は來らざる可からず。されども世の多くの人は、是れをなすの信念と勇氣となし。余も亦今は弱き其一人なり。恥ぢざる可けんや。家に歸れば金子氏あり。今夜 Mr. Peabody と云へる余の主人を訪ひて余を紹介せんとなり。

一月六日。金曜日。大雪。朝 121 Oxford Street に Mr. Peabody を訪ふ。Lawyer なりと云ふ。其處に行きて働くことに定めたり。朝と夜と cook をなす事によりて室と食料とを獲る事を得可し。

壬生馬より『七人』と云へる小山内氏其他七人にて發行したる文學雜誌の第一號を送り來る。よく『文學界』の後嗣たるや否やは疑ふ可しと雖も、一種鬱勃たる活氣は之れを窺ふに難からず。壬生馬のなる可し、表紙裏の design 大に氣に入りたり。彼の進境をトするに足る。

夜 Japan Club あり、出席す。當大學露語の敎授 Leo Viene 日露兩國比較論をなす。平凡にして partial なれども幾多の拒む可からざる眞理あり。

一月七日。土曜日。雨。溫暖。昨夜より急に溫暖となり、一夜の大雨積雪を解いて道路は宛ら河流の如し。朝、敎室に出でたる外、心を籠めて Emerson の神學校卒業生への address と "Nature" とを讀む。二つながら彼が壯年の講演にかゝる事とて活氣ありて面白し。

午後は『平民新聞』及び Elkinton 氏の送り越せし "Life of John Woolman" など讀む。又は Peabody の處に荷物を持ち行く。土曜日より日曜日にかけて泊り掛けに來る其二少女を見る。余は彼等を愛し彼等は余に親しめり。

夜 Elkinton 及び Arthur に手紙を書く。前者には長きものを書きたれば他に何事をもなさず。

兄より手紙來る。彼が肉との戰爭を思へば、余は實に同情の涙に咽ぶ。彼の云ふ所よし。紳大なる約束を彼の上に與へ給ふ。

Motherhood

To her, no music is half so sweet
As the music she heard that hour,
When Hope fulfilment found at last
In life's one perfect flower.
I know it is so, for I saw her face,
And the joy that lighted her eye,
As the young mother bent her head to hear
Her new born baby's cry.

(Boston Transcript)

一月八日、日曜日。晴。朝、家にありて Bible 及び Emerson の "Nature" を讀み又田島君に手紙を書く。午後一時より Peabody 氏の中食に招かれたれば之れに到る。其二少女 Mary と Helen 共にあり。彼女によりて察するに、彼の家庭は決して暖氣あるものにはあらざる可し。されども小兒は小兒なり。余は直ちに彼等とよき友達となりぬ。二時半迄茲にて語り、辭して家に歸る。

暫く家にあり。福北君と共にある Mr. Asoo 氏の近日此地を出立せらるゝに付き暇乞ひぬ。金子君亦在り。君と共に彼家を辭し支那料理に到りて夜食し、後 Tremont Temple に説教を聞く。得る所なし。

Boston にて Engels の "Utopian to Socialism" 及び Karl Kautsky の "The Socialist Republic" を買ふ。歸家後前者を讀

む。Socialism の內的發展を叙して精細なり。

此夜心中に徂徠せる彼の激烈なる觀念嚴しく心を捕へ容易に眠りに就く事能はず。余は頃日此一念の來る事銳きが爲めに讀書を妨げらるゝ事多し。「汝愛を說くはよし、義を語るはよし、されども如何にして愛行はれ、義汎き事水の地の面を蔽ふが如き事を得可しとするや。先づ根本的に基督敎と矛盾せる國家を除去せよ。全地球の住民をして一體たらしめよ。汝は現時の講壇に於て小なる愛を敎ふる事を得可し。然かも如何にして基督の愛を敎へ得るや。愛國心と博愛心とを一致せしめんとするものは、水と油とを一致せしめんとするものなり。汝、汝の傳說を蟬蛻せよ」と。此聲は實に畏る可き聲なり。眞理の證印をもて來ればなり。

一月九日。月曜日。晴。朝は出校し Emerson を讀みたる外多くなしたる事なし。午後、金子君來る。Pie を持ち來りて是れが此家に會合する最終なりなどと云ひて、種々の事語る。彼は例の如く基督敎に對して痛く攻擊を加へたり。余は默して罵らるゝが儘なりき。罵らるゝとも、罵る可からざるは余等の力ある所以なり。余は余の信ずる所を明白に云ふの外を知らず。若しそを罵るものあらば彼等の罵詈に任せしめよ。

此夜 Emerson の "Nature" を讀みつゝありしに、不圖 Browning を讀み度くなり "Cry of Children" を重誦して、其插畫が試み度くなり二枚を作る。最初のものは稍〻成功と云ふ可し。

一月十日。火曜日。晴。今日朝の課業を終へたる後、愈〻 Peabody 氏を訪ふ事となる。荷物の少しばかりを取り纏めて、其處に到れば下婢一人あり。彼女は匆々に其室の始末をなして出で去りぬ。余は全く孤獨に殘されたり。先づ何をすべきかと各室を周到に見步き、偖て己が室に入りぬ。一間四方計りなる北向きの室なり。小さき寢臺は片隅に、二つの小さき椅子處定めず据ゑられたり。洗面臺の外には机もなし。余は茲に來る可き五ヶ月の消光をなさんとす。神總てを祝福し給ふ可し。願くは一奴僕としてもよき一奴僕たらしめ給へ。余が從來の生活に比すれば痛く劣りて見ゆる此室も、街路に夜を明かす憐む可き同胞、戰の野に眠る不幸の子等に比すれば金殿と云はんも啻ならず。余は安逸の生活を送る可き欲望より絕たれたる

身なり。神は余が物質的欲望に割禮を加へ給へり。さらば聖なる割禮よ。退け、同胞の汗によりて成れる富に安住して他を知らざる悪魔！

田島君よりの手紙を此家にて受け取る。

一月十一日。水曜日。晴。寒氣稍〻つのる。出校す。金子君より端書を得。Huxley の "Evolution and Ethics" を讀む。夕食後 Peabody 氏と社會主義並に Carlyle 等に就て語る。夜家より送り來れる『七人』を讀む。此雜誌の運命は知られたり。此雜誌の記者は確かに自ら其目的を知らず。

一月十二日。木曜日。雨。朝食事が少し遲くなり大急ぎにて出校す。午後は Peabody 氏が或る集會にてなしたるてふ社會主義攻擊演說の草稿を讀む。駁論を試む可し。入浴す。

四時頃 Peabody 氏素性の知れぬ女性を携へて歸り來る。彼女は一泊せり。口に道德の美と哲學の奧とを說く彼、余に來りて媚言を呈したる後、今夜若し來訪者あらば不在なりと斷りて吳れ給へと言ひて去りぬ。余は呆然として云ふ所を知らず。二少女を擁してボストンに住める彼の妻は果して之れを知れるや、知らずや。されども是れ余には最も面白き心靈の經驗なり。余は冷し果てたる心を以て彼を watch す可し。若し彼が道德的罪人の許す可からざるものならば、余はそを彼の妻に告げやる可し。

嗚呼、Fanny を思ふ。汝天使よ。純潔の化身よ。來りて余が汚濁の中に圍まれたる靈を擁護せよ。おゝ汝の畏れなき面ばせ。

夜 Butler の "The Meaning of Education" を讀み終る。通讀にて見れば格別大した論文ではなし。中に Prof. Tyndall の Presidental address delivered before British Association for the Advancement of Science Belfast, 1874 よりの拔萃あり。科學的成功が往々にして科學的實驗より來らず、一種の直覺に基く事多きを說き得て痛快。

一月十三日。金曜日。晴。寒冷、再び眞の冬らしき冬となりぬ。學校に出づる道に每朝可憐なる九、十、十一、十二ほど

の少女、少年の群をなして學校に通ふに遇ふ。是れ余にとりては大なる慰藉なり。

學校より歸りて直ちに室内の掃除にかゝる。例の牛歩的なれば案外時を費して且つ疲れたり。中食せるは一時半。暫くして金子君來り語る。今日は余少しく君の油を搾りたり。君 "Appeal to Reason" に出されたる彼の article 及び『平民新聞』とを齎す。『平民新聞』に幸德秋水氏が其師兆民居士の三週忌に際し、法廷よりの歸るさ、感じたる所を記したる小品、眞情の流露溢るゝ計りなり。彼の誠實は甚だ欽す可きものあり。

Peabody 氏遲く歸る。夕食後九時頃まで社會問題及び宗教に就て語る。彼 Whitman より所々面白き節を抄讀す。余は默して聞きぬ。余は彼を味ふ可し。彼は余が長く長く遙かに望みつゝありし一のオアシスなり。

今朝讀みし聖書は羅馬書の七、八、九章、骨に沁みたり。

喋々として何の饒舌ぞ。默して學べよ。學びて蓄へよ。蓄へて與へよ。與へて惜む事勿れ。憚る事なかれ。畏るゝ事勿れ。誇る事なかれ。汝の智慧を信仰にまで鍛へ上げよ。汝の道理に火を點ぜよ。犧羊を持てども祭壇に薪を燃やさざるものは禍なるかな。

他を罵詈するは彼自身を罵詈するなり。他をあざむくは彼自身をあざむくなり。他を苦しむるは彼自身を苦しむるなり。人は宛ら鸚鵡石の前に立てる旅人の如し。彼立ちて大聲に愚と罵れば彼に返り來る反響は一のみ。曰く「愚」。人は何者にも敵する事能はず。人は人の前にすら奴隷なり。只惡魔にありて彼は最もふさはしき敵を見出だし、之れと健闘する事によりて彼は世の何者よりも强し。

一月十四日。土曜日。晴。寒冷、急湍を渡る人は一度踏みたる水を踏む再びなる事能はず。

朝、舊の家に到りて家鄕よりの書信を得たり。中には母上よりと壬生馬よりとの二通あり。Proff Coolidge は來らず。Divinity Library に到りて新着の六合雜誌を讀む。注意す可きもの一もなし。

家に歸りて手紙を讀む。母上は、父上の多忙に働きつゝあり給ふ事、戰場にある我が友等の事、母上の軍人遺族の爲めに

心を痛めつゝあり給ふ事、余が永く書を呈せざりしに心を悩まし給ふ事など情深く認め給へり。壬生馬のにも、父上の多忙にゐます事、彼が精進の告白、隆三の身の上、河野象子氏の事、増田英一君の事など、細々と例の趣多く記されたり。河野氏は鎌倉に、痛く衰へて、涼やかなりし眼はうるみを持ち、黒き縁の眼鏡のみ目立ちて見ゆとなり。英一兄はリャウマチスを病む事四十日、亂髪痩顔半死の人の如しとなり。嗚呼、余何が故に獨り然かく頑健なる。冷かにも酷きは運命の手や。願はしきは平和二人の上にあらん事なり。世に尊敬せらる可き一女子の生涯の如何に悲痛の事實に満ちたるよ。人の上に笏を振ふ可かりし一男子の生涯の、如何に骯髒の事實に満ちたるよ。而して余は彼等の友なり。彼等の友なり、然り彼等の友なるを忘る可けんや。

雜巾の洗濯をなし、馬鈴薯の皮を剝きなどして朝は過ぎぬ。十二時半頃 Peabody 氏 Mary 及び Helen と共に歸り來れり。余は彼女等とよき友となりぬ。中食後彼等は Peabody 氏と共に氷辷りに到り、余は殘りてシェーフェルの社會主義眞髓など讀む。夜は又彼女等と遊ぶ。彼女等二人は此淋しき家の中に暖かなる空氣を齎すなり。彼等の去りし後は此所再び淋しき所とならん。

彼等を見るにつけて思ひ起すは Fanny なり。余は未だ彼女の如く余に大なる impression を與へたる少女を知らず。彼女の純潔なる恨多き眼は、余が一片の回想の下に髣髴として現はれ來るなり。是れを戀とも云ひ得可きにや。されども余は戀は嫉むものなりと聞けり。余は Fanny に於て一の嫉妬を覺えず。彼女が愛せられん事は余が喜びなり。彼女が愛せん事は余が望みなり。若し彼女にして余を忘るゝ事なく一片の同情を余に與ふれば余は他に何の欲する所もなし。戀と云ひ得可くんば最も不思議なる戀なる可し。

一月十九日。木曜日。晴。温暖。朝、出校し、歸後舜三君及び Transcript よりの手紙を見る。Transcript は地圖反譯の報酬として ＄5.00 を送り來れり。兄に返事を書く。三度非戰論をなせり。余は如何にしても主戰論の理由を見出だすに苦しむ。人の本能は此の如き蠻行を肯定せんには餘りに改善せられたり。

午後家にありて、舊家より送り來りし荷物の取り片附けをなし、又内村氏の "Diary of a Convert" を讀む。

Patten の "Development of the English Thought" を讀む。此書は興味多き書なり。稍〻 hasty なれども條理は一通り通じてあり。Economical Utopian, philosophical Utopian などの解明一理あり。

夜再び Patten を讀む。

嗚呼、唯匆忙として日々を消すが爲めに、夜の天を仰がざる事茲に幾月。余は平凡となれるかな。毎夜の如くそは仰がざれば淋しさを感ぜし余の昔は何處に行きたる。夜の空、深甚なる謎語は其中に含まれたり。

二月。 124 Oxford St., Cambridge, Mass.

余は此日頃痛く怠るの習慣に陷れり。第一學期試驗中に、必ず Emerson の傳を終らんと心組みつゝありしは虚となりぬ、余は彼に就ては單に Cary の Emerson 傳を讀みしのみ。讀書とては僅かに Armstrong の "Transition Fra of Thought" と Cary の "Rossittis" と Balzac の作品數種と其他數種の書あるのみ。筆にせしものとては Madam Bresicofsky 傳にして、之れを『平民新聞』に送れるあるのみ。余は是れを恥づ。兄の書を得る毎に兄の精勵を思ひて慚愧に堪へざるなり。余は一層神と自己とに忠實なるものたらざる可からず。

されども試練の絶えず來るは此世なり。山崎の老婦人は十二月の末を以て永眠せしとぞ(信子より報じ來る)。余は此報を得たる時、心の髓にまで打擊を被れり。彼女は余を愛したりき。彼女は己れの愛兒に對するの愛心を以て余を愛したりき。明治三十六年の夏北海道に旅せし時、彼女と別れしは彼女と永久に別る可き別れなりしとは、誰か豫知し得たりしぞ。平和なる靈魂よ。眠れ、眠れ。(以下及び二十五日英文、編者譯) 眠れ、眠れ、平和なる靈魂よ。何處にてか、又いづれにせよ、再び彼女に遇はん日を、かくて我等が過ぎし日の思ひ出を語り合ひ、永遠の現在に生くる日を、我は望みたりしなり。慕しき靈魂よ、汝は心の奧より我をば愛せしものゝ一人なりし。されば汝は我が計り得ぬ尊き寶なり。愛することゝ愛せらるゝこと、こは宇宙の凡ての中の凡てなり。

我が共に惱むものを愛すべく努力せん。されど世の常の輕薄なる愛によりてにはあらず、我等が救ひ主の罪を贖ふ愛を通してなり。

更に信子の手紙よ。彼女は我に對する愛慕の情を自覺しつゝあり。我は知る、彼女の我を愛するを、されど彼女その眞の境遇をば悟らずして愛するを。彼女はかくもあどけなく純なり。されど今彼女の瞳は開かれたり。彼女は己れが求むるところを知る。頼りなき悲しき情は彼女の手紙にいと明らかに見ゆ。我はこれを如何に爲すべきか、愚か者よ。殘されたる道は一つ、そはこの事につき汝の口を閉づる事なり。汝の口を閉ぢよ。平和を保て。かくて事なく靜かに去らしめよ。然らずば、汝は麗しく優しき靈魂に苦しみ惱みをば與ふべし。エノック・アーデンを憶へ。男らしくあれ、忍耐せよ。

更に森本兄の手紙。我等戰爭と平和の問題に關しては、決して互に一致するに到らざる如く見ゆ。我、平和につき考ふれば考ふるほど、我が信念は愈ゝこゝにぞ傾く。若し平和にして劒と火藥とに依りて達せらるゝを得ば、やがて麗しく新しき建築は、燃えし船室の灰の中より起ち上り得べし。こは屢ゝなされしところ。げに多くの建築は大火の後にぞ建てられたり。若し然らば、我等新しき大なる建築を得べく家を燒くべきか。否、然らず、我等ネロにあらざる限り。何故なるか、我等はその結果の如何を問はず、正しきことを爲すべきものなればなり。

古き家を燒く結果は、或は善ならん、(或は惡なるやも知れず)、されど人の爲す家を燒くなる業は、つゆ許さる可きものに非ざればなり。

我等はその結果のために事を爲すべきにあらず、事それ自身の故にこそ爲すべきなり。若しそが善ならば、その結果の如何なるものにせよ、我等はそを爲さん。若し善ならずば、固き決心をもてそを爲すまじ。この點に於て、我等基督教徒は功利主義者と遠く距るなり。誰かかく爲さゞるものあらば、彼をば功利主義者となさん、基督教徒とはなさず。

二月二十五日。土曜日。晴。(英文、編者譯)『他を奴隷とするもの、彼は自由たり得ず。正しきを責むるもの、彼自ら責めらるべし。』

「意志が恐怖を無視する時、心情が頭腦を褒むる時、義務が運命に挑戰を挑む時、名分が死との妥協を侮蔑する時、これ英雄的行爲なり。」

「原理なき愛國心、そは生れながらの偏見、土地に對する動物的愛着心なり。」

"War" (By Sam Walter Foss, librarian of Summerville.) 略す。

六月十二日。 Boston を去つて Greenland, N. H. なる E. S. Daniel なる人の下働きとならんが爲めに、阿部三四君と共に汽車に投ず。車中の駄吟

物思ふ人の想をつれ／＼と畫にしても見る春の雨かな

春雨に歌乞ひまつる京極や樂地つゞきに連翹の散る

雨じや雨じや鬚の自休が澁り傘

小雄鹿も笛により來ぬ時雨かな

Jean François Millet—Peasand and Painter (Scribner's Magazine, 1880—81) 略す。

Greenland に働きつゝありし頃、勞働者の Poland より來れるものあり。每夕 violin をかきならす。

唯靑う夏野は暮れて　　さや／＼と夕風鳴る

水の如き月の出潮を　　西露の人樂に遊ぶ

老けし絃に覺束なの聲色や　　さは云へどしらべを問へば

はる／＼と遠くも來ぬる　　故鄕の里の音と云ふ

汝こそは「年」の行縢を　　一度は眞先かけて

西を指す鞭の聲高く
百合もにじり人も盡しつ
から〱と世を笑はせて
賴むは腕醉ふは酒
我の前に人は埃(あくた)
取れ〱〱〱にじれ〱と

嗚呼國は人を弱めて
父の汗麥となりし野末
友が涙の村雨
振り捨てゝ來しか

胸打ちて泣かんには
今は唯木彫に似たる
祈りもなく呪もなき
かいさぐる絃もあやしく
心には忘れ果てにし

行く道をさへぎるあらば
鞍輪なるされし髑髏(かうべ)に
法もなし規もあらず
淨土あらば取れ黃泉あらば打て
今の前に來世は塵
汗馬を驅りし匈奴が末裔(すゑ)か

政事は心の鎖
母の笑花と咲く澤邊
姊がくちづけの夕露
汝が心！

あまりて深き世々の憂愁(うれひ)
汝が面の笑とはなりしよ
身一つを木蔭に投げて
かなづるは指に殘りて
故鄕の里の聲と云ふ。

Christianity is really a salt of earth, essence of tear, companion of sweat, and friend of blood.

I hear a wolf says to parrot "Hypocrite is only another name of yours."

What is book? If the words in it read you before you read them, this is book,

Poet is a most unproduct person in his age, while the poem, only product of his, is the sound commonsense of coming century.

Tear of despaired love, when it dried unseen, will be a dew of flower, which falls at the dawn of day and youth of night. We and nature are not so much separated,

Falling leaf and eternity.

Our fire is not the fire, kindled by hermit by rubbing two dry sticks together in a desert cave and kept by himself, but the fire produced from the warmth of grasping hands of friends, gushing tear of penitents, throbbing heart of lovers, burning sweat of labor, and undefiled bosom of mother.

Christ is God because he belives so; conviction with the seal of determined conscience is august truth, whether may or may not be true before the truth, but to man.

Man can not resist anything, even his fellowman who is but a slave so weak, except when he finds a deserved enemy in evil and becomes the strongest among the nature by defying it.

Time will come, when the stars of American flag return to heaven, sun of Japan's drops its lustre, lion of England's returns to the desert, eagles of Germany's flies to the azure, and in its place stands one which the work "humanity" written clearly.

If one advocate abolish slave, abolish dogma; if one wish to cease war, cease nation. Most harmful thing is always lukewarmness.

I am love, disguised with thousand and one marks, encircled by bashfulness, fears, chastity, and secrecy, guarded by tradition, prejudice,………… He who takes the form for love stambles; he who takes the care of love for love falls; he who takes tradition for love fails; he who takes love for love conquers.

One laughs, another weeps, but never there is any who laughs exclusively or weeps exclusively. This is the unmistakable sign of human progress.

Do not try to understand Life and Death. Live Life, you can die; die Death, you can live.

Since I compromise with mine self, with whom or with what could I?

It is said, strong loves tender and make a human being complete. Quite otherwise. Complete human being is born, and man and woman separate it.

Unless he is thrilled by the call of child of "Pa" and "Ma," he is unable to destruct.

The striking significance of a great man is his power of foresight. One uses it for one's self, another for other. The former is Napoleon, the latter Christ.

Genius grows, character makes.

One never hear an acorn growing. is astounded when an oak falls.

If there are hell and heaven in the future life, the place where Christian goes is the former. The heaven is for those who do neither evil nor good.

聽蟲

相呼喚喚不相休　催起閑人聽結愁

一九〇五年

月到軒窓夜如水　　満庭風露近中秋

Autumn

In the deadly hush of autumnal night,
Songs of cricket from grass withering,
One's sleepless soul with sore grief weight,
When this ends, then that following.

Night spreads her wings of melancholy lead,
—On which is stamped a silvery orb—,
Over the dews and winds in silence dead.
Leafless fall! Thou wilt all absorb.

一九〇六年（明治三十九年）

一月元旦　晴。Washington, D. C. 年は替りぬ。終日家にありて此家(Mr. Boteler)の小兒と遊び暮す。内田澄さんに手紙を書く。筆初めなり。

此夜兄と宗教談をなす。Bible の authenticity を缺ける事など。憂鬱期來りぬ。夜眠る事能はず。

Hauptmann の "Sunken Bell" を讀みつゝあり。

一月二日。晴。朝 Sandwitch 半分と林檎とを食ひて圖書館に到り Brandes の Ibsen の critical study を讀む。時間を間違ひて一時（二時の筈）Mr. Noyes の office に到る。佐野常世の傳を譯しつゝある間に、涙零ちて止め難し。已むを得ず早く切り上げて歸る。

夜圖書館にて Brandes の Ibsen 評論を讀み終る。Ibsen を論じて最も肯綮を得たるは此書なる可し。

八時半歸宅。入浴。新聞と Lippincott より送り來れる "Friends" を讀む。其他雜事。露國の騷動稍ゝ靜まれり。

一月三日。水曜日。雨。朝圖書館に到りて Ibsen の肖像及び其生地の寫眞を描寫す。餘は館內の觀覽に費す。此圖書館は世界の圖書館中第五位にあり（其書籍數に於て）と雖も、value に至りては甚だ劣等のものなりとぞ。午後は例の如く Noyes に到る。夜は圖書館に到る勇氣なく「合棒」の稿を脫す。

壬生馬より便あり。愉快に讀む。

一月四日。木曜日。晴。風。朝、兄と共に圖書館に到るに、Capital を隔てゝ Washington monument の尖塔雲の間に宛ら mirage の如し。讀みたるは Turgenev の Stories と "Fathers and Children" なり。前者に彼の思想を見る可く、後者に彼の學識と描寫とを窺ふ可し。午後は Noyes. 夜は圖書館にて再び Turgenev を讀む。興味津然。彼は此著に於て初めて Nihilist なる字を create せるなり。彼が描寫の方法は固より古人の跡を追へるなれども、作の人物に對する同情は偉大なりと云ふ可し。彼の人物は不健全にあらず。彼の人物には確かに生命あり。

家に歸りてより nuts 林檎など喰ふ。手紙の借りが澤山あり。嬉しき事にはあらず。

憂鬱期は過ぎたり。長からざりしを謝す。

一月五日。金曜日。晴。壬生馬に手紙を書く。朝は圖書館にて Turgenev. 午後は Noyes. 夜は圖書館に行かずに家に歸る。Robert と遊べる時 Christ Ascension の繪畫を示したるに、彼問うて曰く "Was he buried after his death?" "Yes." "And then went to heaven!" "They say so." "That's funny!" 兄と二人にて笑ふ。But that struck us.

一月六日、土曜日。晴天なれど恐ろしく風あり。朝は圖書館にて Turgenev. 午後は Noyes. 夜も Turgenev. 早く自分の人格を確定したきものなり。

一月七日。日曜日。快晴。朝、兄と聖書を讀む。Ibsen の "Brand" 5th act を讀む。

午後は Robert 來りて遊び、夕刻は兄の slides の調製を手傳ふ。夜は活動寫眞を見に行く。嘗て見たるものなれば途中にて歸る。

手紙を諸方に澤山書く。Lippincott, Wing, Crowell 親子等。

一月八日。月曜日。曇。夜に入りて寒し。朝、圖書館にて Tugenev の "Fathers and Children" を讀み終る。强き impression を受けたり。Gorky の "Tales" 着す。午後は Mr. Noyes. 夜は兄の lecture を聞く可く Foundry Church に到る。大成功。

Lee の友二人 George と Frank と云へるが聽きに來る。歸時電車を共にす。Frank と云へるは殊に生き生きとしたる小兒なり。

一月九日。火曜日。晴天なれど寒さ甚し。朝、圖書館にて Brandes の "Main Currents in 19th Century Literature" と "Shakespeare" 論とを讀み始む。午後は Noyes. 夕刻再び圖書館に到る。夜歸り來れば此家の小兒と George and Frank あり。宗敎の事など問ふ。

一月十日。水曜日。晴天なれど寒し。朝は Library にて Brandes の "Shakespeare" を讀む。面白し。午後は Noyes. 晝は日本料理屋に到る。會す可からざる人に會せり。夜、圖書館にて Brandes を見る。

Pa. Avenue の 6th street の角に Franklin の銅像立てり。臺石の一方には "printer" と刻まれたり。余が Noyes より歸る時に、常に一群の新聞賣子其下に集りて色々なる事せるを見る。よき畫題なりと思はぬ事なし。

此夜農學校佐藤氏より手紙來り、兄か余の中一人彼所に入用なりと言ひ來る。

一月十一日。木曜日。晴天なれど寒し。朝、圖書館にて Brandes を讀む。午後は Noyes. 夜は例の如く圖書館にて殆んど Brandes を讀み終る Clement の "Christianity in the modern Japan" を讀む。大したものにあらず。

夜歸り來りて佐藤氏に返事を書く。Decline す。

余の頭腦も心臟も半ば腐敗せり。恐らくは世に出でたりとて何の役にも立たざる可し。Christianity の樂天なる生活觀は既に余を此地につなぐに足らず。悠〻喰うて生きる丈けの人間と相場がきまれば短銃の一發あるのみ。

一月二十六日。金曜日。曇天にて寒し。先全週は兄の用達し旁〻 New York 市にありて過ごせり。大なる都市の喘ぎ苦しむ樣は、人の心をして穩かならざらしむ。されども彼處に大なる渴仰あり、熱慕あり、聞け彼の大なる叫喚。憐む可き人の子の多くは唯耳を塞ぎて田園神聖主義を云々するに過ぎず。されども世には都會てふもの存せり。人彼處に住めり。彼處に父母あり。彼處に子あり。彼處に若き男あり。彼處に若き女あり。彼處に大なる資本主あり。彼處に多くの勞働者あり。Humanity の彼處にあるは田園と異る事なきなり。都會は大なる神の熔爐なり。金と鋸屑はまがふ方なく彼處にて吹き分けらるゝなり。

Jerry Macauley Mission なるもの Brooklyn Bridge の直下にあり。一夜田島君と其處に到る、我は大なる impression を被れり。

金子君、其妻（元の Miss Conger）と共に一の apartment room を借りて住めり。一夜彼處を訪ひて閑談二三時。余は余の豫想に違ひて彼女を好みたり。

以上は New York 市の觀想。

昨日兄再び lecture-tour に上る。

今朝 Congress Library に到りて Hugh Black の "Culture and Restraint" を讀む。主意は面白けれども何故に同一事を爾かく繁雜に繰返さざる可からざるにや。Restraint は Christianity の creation なり。Culture は Hellenism の creation なり。矛

盾なるが如くにして矛盾にあらず。如何となれば culture は selfishness の意にあらず。Restraint は selflessness の意にあらざればなり。これ丈けの事なり。午後は Noyes. 夜再び Library に到りて Coleridge の Shakespeare 論を讀む。未了。歸來、新聞及び "Out Look" を讀む。手紙を書かざる可からず。Robert の病氣は稍〻よしとなり。我は彼を愛す。

February, 1906. In Washington, D. C.

二月八日。木曜日。曇、夕に至り雪。

午前は全く兄の用事の爲めに費し終る。午後は Department of Print にて働く。夜 Library に到りて Dostoievsky の "Crime and Punishment" を讀む。深刻骨に徹す。されども之れを literature と云はんには未だしかるべし。彼は大なる心理學者なり。されども彼には artist に必要なる balance なきが如し。若しありとするも、彼はそを總て彼の心理的觀察の爲めに犧牲となし終れるが如し。一種不快なる unstability は美觀を求むる人の心をして穩かならざらしむ。若し Dante の如き人ありて此材料を手にせば卽ち詩を成す可し。

日記書かざりし中に讀みたる書は、Beecher の selection, Abbot の "People and Literature of Ancient Hebrew," Turgenev の "Mumu" 及び "Dairy of Superflous Man," Gorky の小話等なりしなる可し。Turgenev は artificial なれども面白き所あり。

二三日前、愛子より書あり。余は眞に泣けり。

嗚呼、總ての prejudice の爲めに人格の總てを沒却せんとする日本の現社會は呪はる可きかな。

夜食せんとて Backingham の所に到り、雪降れる由云ひたるに彼は微笑みながら "Everything Lord sends us is good, I like snow. Lord sends snow" と云へるが妙にこたへて、"Yes, Lord sends evil" とやつたり。馬鹿な事を言ひて老人をいぢめたりと後には非常に後悔せり。

我は我が立つ處を知らず。嘗て巖の如しと思へる其礎の、容易に壞れ去る事如何に砂上の家の如きよ。我は我自身の深き經驗を要す。讀書と默思とは又確實なる經驗なりと云ふ事勿れ。或る人は之れを以て足れりとせん。されども我は、少くと

も今の我は、最早これを以て満足する事能はず。我は我が血をもてあがなはれたる罪のゆるしを求む。
暗にある反逆の人を憐れめよ、我が神よ。

Good Bye

by F. Paolo Tosti.

Falling leaf, and fading tree,
Lines of white in a sullen sea,
Shadows rising on you and me,
The swallows are making them ready to fly,
Wheeling out on a windy sky—
Good-bye, summer!
Good-bye, good-bye!
Good-bye, summer!
Good-bye, good-bye!

Hush, a voice from the far away,
Listen and learn, it seems to say,
All the to-morrows shall be as to-day,
All the to-morrows shall be as to-day,

一九〇六年

The cord is frayed, the cruse is dry,
The link must break, and the lamp must die,
  Good-bye, to Hope!
  Good-bye, good-bye!
  Good-bye, to Hope!
  Good-bye, good-bye!

What are we waiting for?
Oh! my heart.
Kiss me straight on the brows,
And part, Again, again!
My heart, my heart,
What are we waiting for, you and I?
A pleading look, and stifled cry.
  Good-bye, for-ever!
  Good-bye, for-ever!
  Good-bye, for-ever,
  Good bye!

四月十八日。（以下四・一八。五・二三。七・一日英文、編者譯）生命とは何ぞ。我そを知らず。汝何故に生くるや、我またそを知らず。更に汝何故に死せざるか。知らず、我「死」をすら知らざれば。

我は生命も死をも知らず。されど我は知る。たゞ一つを。――そは我愛すべしの一事なり。我生命を呪ひ、死をば愛慕する時、尙何ものか我が心の中に止まり、我が意志にさからひて、この生命をば續けしむるものあり。そは暖かみ、そは濕ひをもてり、又抗し得ぬ力をもてり。これ我を捕ふるなり。我、我が運命に望を失ひし時、棄てられし子の叫び、このものより聞ゆるなり。我、孤獨に悒鬱となる時、こは戀人と別れし賴りなき處女の涙をば示す。我、我が無能を嘆く時、こは勉學の機を全く有せざる貧しき靑年の一臂をば我に與ふるなり。我誤解の中に立てるを感ずる時、こは我に敎ふるなり、他を誤解せざるべく注意せよと。我が行動我が行爲の野心に燃ゆる時、こは我が耳は囁く、愚者の如く靜かなれ、かくて學び續けよと。我利己に走る時、こは雷の如くも「犧牲」と叫ぶなり。

嗚呼、我はそのものを知る。そは「愛」なり。そは我が創りしものに非ず。否、我を創りしものこそ「愛」なり。又「死」すら「愛」の前には力なし。我、屢〻「死」をば思ふなり、されど「愛」は我を止む。嗚呼、我は汝に反抗して既に久し、されど遂に勝たず。されば我、我が身をば汝に委ねん。殘忍なる「愛」よ。汝の好むものあらば、何ものにても我より奪へ。名譽か、よし。富か、よし。人生の慰安か、よし。同情か、よし。靑年の喜びか、よし。おゝ、何ものにても、何ものにても奪ひ去れ。我は誇る、されど汝の前には力なきなり、汝主よ、汝王よ、汝暴君よ。

我等が生命は犧牲とすべく運命められしや。すべての持物をば捧ぐべきか。我が誇りはこれを疑ふ。されど我はこのすべてを捧げつゝあり。おゝ、この矛盾せる調和よ。

愛よ。汝は我を眠らしめず、我を瘦せ衰へしむ。また汝は我を內氣ならしめ、我を愚かならしむ。されど汝は、また汝のみが我をば生かしむるなり。

然り、我は「愛」に生き、「愛」に死なん。我ほかに術を知らず。そは我「愛」の王權の下になる奴隷に過ぎざればなり。

殘酷なる暴王よ。

五月二十三日。(415 Forth street, N. W., Washington, D. C.) 今日新聞にてイプセンの死を知りぬ。これは、この鬪士がこの世界に與へし最後の打擊なり。若し彼の死に、この世界驚き戰かざれば、死の床にある彼、この世界の死せるに驚き戰く可し。イブセンは隣人を愛しぬ。故に彼は隣人を憎みぬ。彼は物にひるまぬ、簡潔なる恐れを知らぬ判斷をもて、世の人々をば目覺めしめんとはせり。彼は世の人々の目前に、現代の赤裸々なる姿を暴露せり。されど彼の正直なる訴へも、所謂健全なる自覺ある民衆によりて、哀れにも特に野卑なるまた病的なるものとして斥けられぬ。醜女はその鏡をば打ち壞ちて、己が眉目麗はしきを信ぜんとはするなり。

げに國家の本質を洞察し、「國家は亡びざる可からず」と宣言せしはイブセンなり。民衆の中に臆病と暝濛とを見、數少き開拓者のために斷乎として戰ひしは彼なり。惡魔の如く傳統を憎み、徹底せざる理解をば決して許さゞりしは彼なり。獨創的ならざるよりも寧ろ死を好みしは彼なり。社會的反抗を唱道せるは彼なり。氣高き行爲、眞實の淚を尊びしは彼なり。黎明の光は先づ彼の額を照らし、黃昏の影は永へに彼の凝視より退く。

彼は偏狹粗野にして非社交的なり。又變人とすら言はれ得べし。――されど誰か缺點、短所を全くもたざるものあらんや。――何人と雖も、これを否定し得ず。然からば、人の功績を測るに、我等何をもつて爲すべきか。その缺點をもつてか、將その德をもつてか。

彼の死によりて一つの空しき方處生じたり。彼去りしところ、悲しき空處あり。これを閉ざすに足る、偉大なるまた深きもの一人としてあらず。現代の氣高き基督(人の罪を負ふもの)逝きしなり。神は殘る牧者を淨め給ふべし。かくて彼を尊敬する我等、例へ僅かなりと雖も、彼をば心に止どめなん。

遠く、老いし大陸の北隅、今日一人の偉丈夫呼吸絕えしなり、この世にとりてまた何たる損失ぞや。彼は死せり、彼と共に、嘗つて恐れを知らざりしもの、また死せるなり。

七月一日。(Chevy chase, Md.) 實に麗はしき黎明。眩しき夏の爽快の氣と生氣とは、森本兄と我が心のほか、何處にも滿ち溢れたり。

我等默々として汽車に投じ、駈けりて Pa. 停車場に到る。時は來りぬ、我等手を握り合ひて別れぬ。彼西部に向ひ、我は Chevy chase に止まる。我等、少くも一二年は相見ざるべし。彼を失ひて、我心痛む。

年經るにつれ、彼と我との道、愈ゝ相離れ去り行かん。外的現象と理論的意見に關する限り我等相通ずる何物をも有せざること、こは實に明白なり。されど我等が基礎的理想――眞理の前に心低く、また眞心をもて我等が同胞に仕ふること、――これぞ、我等が友情を結ぶ不滅の連鎖とはなるなれ。おゝ、我が兄弟よ、我等男らしく眞直に立たなん。かくてこの世の僞り多き外見をば嘲笑せん。

彼は、我が久しく陷りし懶惰と狂氣より我を救ひ上げたり。彼は我が爲めに常に開かれたる溫かき心情をもてり。されば我、深き感謝のほか何物をも感ぜざるなり。

父なる神よ。彼を護り給へ。彼に力と信念とを與へ給へ。汝の智慧と恩惠とを垂れ、彼をして汝が道の爲めの强き戰士たらしめ給へ。

さらば、兄弟よ。

—第九卷了—

昭和四年十二月十五日印刷
昭和四年十二月廿五日發行

非賣品



監輯者　有島生馬
　　　　里見弴
發行者　佐藤義亮
印刷所　富士印刷株式會社
製本所　共同印刷製本部

發行所　東京市牛込區矢來町
（振替東京七九七七〇）
新潮社
電話牛込・八〇六番・八〇八番
八〇五番・八〇七番・八〇九番

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03049 7226